

ビルド廻戦

EGO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

多くの人の未来を奪った。

多くの人の夢を奪った。

多くの人の笑顔を奪った。

多くの人の命を奪った。

そんな俺でも、誰かのヒーローになれるのか？

呪術廻戦と仮面ライダービルドのクロスオーバー作品になります。

呪術廻戦の世界観に合わせ、ビルドの設定を一部改変していますので、ご了承ください。

目次

百鬼夜行 —ベストマッチな奴ら—

1. 1

2. 16

3. 31

4. 49

5. 66

6. 83

7. 102

8. 118

9. 134

1. 0. 150

1. 1. 166

1. 2. 183

1. 3. 206

1. 4. 219

1. 5. 238

貴丈の受難 —ブラザーが見ている—

1. 272

2. 287

3. 302

4. 316

5. 337

6. 354

3.	2.	1.	最恐最悪呪いの王	1.	1.	9.	8.	7.
			―特級術師、始めました―					
470	461	446		427	413	400	384	370

百鬼夜行 ―ベストマッチな奴ら―

1.

誰かの悲鳴。誰かの怒号。誰かの断末摩。

建物の焼ける臭い。鉄が焼ける臭い。生物が焼ける臭い。

地面に倒れる彼の五感に叩きつけられるのは、日常生活ではまず聞くことのない、人の命が、誰かの平穏が終わる合図。

――皆、は……？

意識が混濁したまま、激痛に悲鳴をあげる身体に鞭を打ち、額から溢れる血をそのままに身体を起こす。

垂れてきた血で視界の右半分を真っ赤に染めながら、肺が焼けそうな熱気の中、必死に呼吸を繰り返す。

地面についた手の骨が軋み、鈍い痛みにも苦悶の声を漏れた。

反射的にそちらに目を向ければ、五指が曲がってはいけない方向に曲がり、何本か骨が飛び出している自分の手が視界に入り、喉の奥から細かい悲鳴が漏れた。

本当に自分の手なのかと確かめるように指を曲げようとしてみれば、形容しがたい激痛が腕から全身に広がり、認めたくはない現実を文字通り刻み込んでくる。

ふう……！ふう……！と無意識に呼吸に力が入り、熱を孕んだ空気が入り込み、酸素の代わりに焼けるような痛みが肺を満たす。

たまらずにむせれば血の混ざった痰が吐き出され、地面に落ちたそれからは禍々しい色合いをした煙が立ち上る。

「っ！」

同時に彼は目を見開いた。

その煙に見覚えがあったからだ。

平穏が突然終わりを告げた時、この地獄が始まった時に、辺り一面を埋め尽くした黒い煙だ。

それが今、自分が吐き出したものから湧き出している。

「違う……。俺じゃ、俺じゃない……」

瞬間。脳裏によぎった予感を否定するように首を振った。

いや、それはもはや予感ではなく、確信だった。

曖昧だった意識がはつきりし、同時に何があったのかを鮮明に思い出させる。

妹の誕生日だからと、久しぶりに実家とも言える施設に帰って来た。

血の繋がりはなくとも、確かな絆で繋がっていた兄弟、姉妹、そして両親との再会に彼は喜び、弟や妹たちのノリも合わさって、いっぴなくはしゃいでいた。

それでも誕生日会は滞りなく進み、いよいよプレゼント交換となった時に、それは起こってしまった。

彼の影が膨れ上がり、黒い煙が施設とその周辺へとばら撒かれたのだ。

それを自覚した直後、横合いから岩のような拳が放たれた。

反射的に動いた片手で受け止め——きれずに、そのまま手の骨を砕かれながら吹き飛ばされ、施設の壁をぶち抜き、裏庭に転がされて気を失った。

「……俺の……せい……じゃねえか……」

その全てを思い出した彼は、涙を流しながらその場に項垂れた。

ここで忘れたままであれば、まだ逃げ道もあっただろう。

ここで忘れたままであれば、まだ立ち上がることもできただろう。

ここで忘れたままであれば、生きる気力を取り戻すこともできただろう。

だが彼は思い出してしまった。

自分がこの地獄を産み出した犯人であることを。

家族を化け物へと変えてしまった罪の重さを。

「ああ……。ああ……っ！あああ、あああああ、あ、あ、あ!!」
自分に向けるしかない怒りを、憎悪をぶつけるように、血を吐きながら叫んだ。

涙で視界が歪み、地面に落ちた涙からは、黒い煙が噴き出す。

この煙が、夢を語り合った兄弟たちを怪物にした。

この煙はどこから出てきた？

「俺だ……」

この煙が、未来に想いを馳せていた姉妹たちを異形に変えた。

誰が？

「俺だ」

自分を救ってくれた両親は、化け物になった。

「俺のせいだ！ わかってるよ、そんなこと！」

頭の中に響く声に怒号を返す。

頭を掻きむしり、ぶちぶちと髪が切れる音が鼓膜を揺らし、毛が抜ける鋭い痛みが彼の意識をより鮮明にしていく。

「俺が、皆を……っ！」

その場から動くことも出来ずに踞り、啜り泣きながら、彼は掠れた声を漏らす。

額が割れることをいとわずに頭を地面に叩きつけ、何度も、何度も繰り返す。

慟哭の声と頭が地面に叩きつけられる乾いた音が辺りに響き、彼に渦巻く負の感情を表すように、影からは黒い煙が溢れだし、地面を這うように広がっていく。

煙に吞まれた建物の残骸が歪に歪み、既に怪物となっていた人々は、それから逃れるようにその場から離れていき、四方八方でも散っていく。

黒い煙は辛うじて変異を免れ、けれど変異した彼らに殺された誰かの遺体さえも怪物へと変えてしまう。

怪物へと変わった彼は糸で吊られる人形のように立ち上がり、ゾンビのように身体を不規則に揺らしながら歩き始めた。

ふらふらと覚束ない足取りで街へと向かうが、何体かは一人で踞り、泣き叫ぶ彼の存在に気付き、街に向いていた足を彼へと向けた。

ぎざぎざ、と砂を踏みしめる音が、少しずつ近づいてくる。

それでも彼は動かない。

迫り来る死の気配を前に腰が抜け、逃げように逃げられない。

いいや、違う。今の彼にとって、自分の死などどうでもよかったの

だ。

この苦しみから楽になるのなら、この罪が赦されるのなら、いつそ彼らに殺された方がいい。

自分勝手な考えだということはわかっている。そんな事で本当に赦されるかもわからない。

——他に、どうしろってんだ……。

今の彼にまともな思考をする力は残っていないかった。

家族を殺した。

彼らの未来を奪った。

彼らの笑顔を消し去った。

それら全ての罪を一身に背負いながら、これから生きていくなど、今の彼には——もうすぐ高校一年になるばかりの、いまだ大人になったとは言えない青年には、あまりにも酷な話だ。

地面に額を押し付けたまま、壊れたように笑い始めた彼に、唸り声と共に足音が近づいてくる。

ざ……。

足元を覆う黒い煙を気にも止めず、怪物たちは歩み続ける。

人だったものとは思えない、地の底から響くような低い唸り声を発しながら、逃げない獲物を目指し、さらに一步。

ぱき……。

誰かの骨か、あるいは木材か、何かを踏み砕く乾いた音が、建物が燃える音の中でも嫌に響く。

唸り声が獲物を前にした歓喜の雄叫びへと変わり、その声の近さから、怪物との距離はあと五歩もないだろう。

万が一飛びかかってくれば、距離関係なくそれだけでしまいだ。

彼らの息遣いが聞こえ、興奮しているのかその呼吸がどんとどんと乱れていく。

死を間近にして冷静になり始めた彼の脳内では、せめて自分を殺す相手くらい見ておくかと諦観にも似た思いがぼつと湧き出た。

鉛のように重たかった身体が不思議と軽く、踞っていた身体を転がし、空を見上げる。

あれだけ青かった空は、いまやその面影もない曇り空。

日の光を僅かも通さない分厚い雲に覆われ、このままいけば雨も降り始めるだろう。

そうなれば火事も収まり、少しは落ち着くこともできるだろうか。

あと煤まみれのこの身体も、多少は綺麗になるだろう。

「……どうせ死ぬのに、なに考えてんだよ、俺は」

「君に死なれたら困るんだよね」

誰に言うわけでもない独り言に反応があつた事に彼は驚き、ぎよつと目を見開いた。

全く聞き覚えのない、どこか気の抜けたような声の主を探そうと首を巡らそうとするが、それよりも早くその声の主が彼の視界に現れる。

日本人とは思えない白い髪に、両目を白い包帯で覆っている、見るからに怪しい男。

今まで会ってきた誰よりも高身長に見えるのは、寝転んで見上げているからではなく、男が人一倍大きいからか。

男の登場に倒れている彼を狙っていた怪物たちは足を止め、ガチガチと歯を鳴らしたり、地団駄を踏んだりと、思い思いの方法で威嚇している。

やれやれと言わんばかりに肩を竦めた男は、倒れる青年と怪物たちの間に立ちはだかった。

同時に怪物たちは吠えながらその男へと飛びかかり、顎門あぎとで噛み千切らんとするもの、豪腕でもって砕かんとするもの、鎌状の腕で切り裂かんとするもの。

それら全てが、相手が人間であれば容易く致命傷を与えられるものだ。

また自分のせいで誰かが死ぬ。

その危機感と罪悪感からか、青年の口が意識する間もなく動く。

「危な——」

「大丈夫」

けれど、その声は誰でもない男の声により遮られた。

え……と声を漏らす青年を他所に、男はさも当然のように言う。

「僕、最強だから」

そしてその言葉を体現するように、男に飛びかかった怪物たちが見えない何かに圧縮されたように潰れ、あるいは見えない何かに殴られたように吹き飛び、肉片となりながら四散していく。

ね？と笑いながら振り向いてきた男を見つめ返しながら、青年は数度瞬きすると、ようやく状況を——最も何が起きたのかはわからないが——飲み込んで僅かに安堵の息を漏らす。

今さら自分の命が惜しくなったわけではないのだが、目の前の男が無事なのはとりあえず喜ぶべきことだろう。

「さて、話を戻すだけだよ」

そんな青年の心中を知ってか知らずか、男は青年のすぐ脇でしゃがみこむと、無警戒にとんとんと煙の発生源である影を指で叩いた。

男の指に叩かれた影には波紋が広がり、水面のように揺れている。

「これ、止めてくんない？止めてくんないと、僕の仲間が近づけないんだよね」

「止め……る……？仲間……？」

「わかんないか。そうだよね。……ちよつとごめんよ」

男はそう言うと、血塗れの青年の額を指で叩いた。

ペチンとデコピンでもしたような音がしたかと思えば、青年は意識を手放し、眠るようにつくりと目を閉じた。

すやすやと穏やかな寝息をたてているあたり、本当に眠りに落ちたのだろう。

彼の影から噴き出していた煙が止まり、風にのって消えていく。

同時に空の一点が黒く染まり、それが半球状に広がり、周辺一帯を囲いこんだ。

「さて」

それを見届けた男は立ち上がり、辺りを見渡す。

ここを中心とした半径三百メートル。煙が届いたその範囲内で無事だった人間は、果たしてどれだけいるのか。

いや、それも大事ではあるのだが——。

「何体、祓う——いや、殺せるかな」

こちらに近づいてくる気配と、ここから遠ざかっていく気配がそれぞれ複数。

つまり、向かってくる好戦的な奴と、逃げる臆病——あるいは慎重な奴とで別けられる。

向かってくる奴らは問答無用で祓うとして、問題は逃げた側。

男の仲間——と言うよりは同業者——により辺りは封鎖され、逃げてみると言わんばかりの態勢だから、無策で突っ込んでいるわけではあるまい。

何か包囲を突破する策があるのか、あるいは単純に馬鹿だからか。

——どちらにせよ、こっちに来ていんだよね……。

男は溜め息を吐きながら、包帯で隠された双眸で迫る来る異形を睨みつけた。

「それで結構祓ったんだけど、結局逃げちゃったんだよね」

「……」

「おかげであれから忙しくて。会いに来るのも遅くなっちゃった」

「……」

「……聞いている?」

あれからどれくらい経ったのか、青年には知るよしもない。

目の前で「ねえ、ねえ」と子供のように身体を揺らしている男に、額を小突かれてからの記憶がないからだ。

と言うよりも、ようやく目を覚ましたばかりだというのに、いきなり名も知らない男にさも友人のように声をかけられる義理はない。

命の恩人ではあるが、元より捨てた命を拾ったところで何になる。

青年はとりあえず目の前の男を捨て置いて、自分の状況に目を向けた。

椅子に座らされ、両手は後ろ手で縛られている。

しかもご丁寧にも椅子の前足に縛り付けられ、文字どおり微動だ

にできない。

部屋は周囲を囲む壁を埋め尽くすように何かの文様が描かれた札が貼られ、天井からも同じような文様が描かれた札がぶら下がっている。

こういったものに関心を示す、多感な時期は一応は過ぎたと思うのだが……。

「あ、やっぱり気になる?」

僅かに好奇心をくすぐられた事が顔に出ていたのか、男は笑いながら聞いてくるが、とりあえず無視。

手の拘束を解こうと暴れてみるが、やはりと言うべきかびくともしない。

はあ……と深々と溜め息を吐いた青年は、仕方がないと言わんばかりの様子で男に視線を戻した。

「無視なんて酷いな〜」と愚痴りながら椅子の背凭れに寄りかかって天井を仰いでいた男は、青年からの視線を感じたからか、口許に笑みを浮かべながら青年に目を向けた。

もつとも目元を覆う包帯のせいでよくわからないのだが、見えてはいるのだろう。

「お、ようやく聞いてくれる感じ?」

「とりあえずは……」

男の問いかけに青年が応じると、彼は「そっか」と頷きぽんと手を叩いた。

「それじゃ早速。君は死刑になった」

男が朝の天気を教えるように告げた言葉を、青年は「そうか」の一言で、まるで他人事のように受け入れた。

元より自分の命に価値を見出だせなくなっていた所だ。誰かの都合とはいえ、殺してくれるのならありがたい。

訳もわからない状況とはいえ、自分が原因で家族は死んだのだ。皆は天国に行ったとしても、自分はきつと地獄に落ちる。

死んで赦されるのなら、安いものだろう。

「それで、執行人はあんた?」

「いいや、違う。むしろ弁護士つてところ」

「……控訴も上告もするつもりはねえよ」

「君にその気はなくとも、僕にはあるんだよね」

青年のちよつとした皮肉に、男は大真面目ですと言わんばかりの声音で返し、淡々と告げた。

「君がいた施設にいた人物と、その近隣住民を含めた行方不明者が、確認できただけでも六十名。原因は、暴走した君の術式によるものでは決まり」

「術式……？」

「あの気持ち悪い煙のこと。とりあえず、後で説明してあげるから」

青年が発した疑問を切り捨て、男は椅子に体重を預け、後ろ足だけで立たせた状態で前後に揺れながら、言葉を続けた。

「対応に当たった呪術士同業者にも、少なくともない被害が出ちゃってね。上の連中が君を危険に思うのは当然っちゃ当然」

「……また俺のせいで、誰かが」

「はい、そこ。いちいち思い詰めない。今のところは死者も出てないから、安心してね」

「安心なんてできるかよ。ただですら……」

「家族を、近所の人たちを化け物に変えてしまったのに。って、言いたいでしょ？」

男の先回りした言葉に、青年は力なくこくりと頷く。

男は問題は「そこなんだよね」と言うのと、青年の影を指差した。「長い歴史において、初めて確認された呪術。これを何も調べずに葬るのはやだし、君を殺して呪術が暴走するなんてことになれば、それこそ大惨事だ。殺すわけにもいかないし、放置するわけにはいかない。何よりも——」

ずいっと身体を前に出し、包帯に隠された双眸を青年に向ける。

男がどんな瞳をしているのか、何を考えているのか、青年にとつては知るよしもないが、今の言葉からわかることがひとつだけあった。

「俺を死なせたくない、とか……？」

「その通り。若者から青春を奪う権利は誰にもないからね。どんな問

題を抱えていようと」

ぴつと人差し指を立てながら告げられた言葉に、青年は訳がわからないというように眉を寄せた。

「その青春を奪いまくった元凶に、よくそんな事言えんな」

「うん。何回でも言うよ」

男は睨み付けてくる青年の、どろりと濁った暗い瞳を包帯越しにじつと見つめ返しながら、再び告げた。

「上には君の死刑を一旦保留にして、しばらく僕に預けるように言っている。大丈夫、力の使い方は僕が手取り足取り教えてあげるから」
「今さら使えたところで、何になんだよ」

男の言葉に、青年はぼそりと呟いた。

もちろん聞こえていた男が何かを言おうとすると、それを制する形で青年が叫ぶ。

「俺には何もない！大好きだった家族を、母さんも、父さんも、全部全部俺がぶっ壊したんだぞ!?それなのに、今さら俺に何をしろってんだ！」

「あいつらの夢も全部知ってる！それを応援もしてた！それを全部奪った俺に、何をさせたいんだよ！」

「——誰かの夢を守ってもらいたい」

涙を流し、目を真っ赤に充血させながら叫んだ声に、男はいつそ冷たく思えるほどの声音で返した。

「は？」と呆れたような声を漏らす青年の反応を見ながら、男は足を組んだ。

「自分を赦せない気持ちはわかるよ。守ると誓った人を守れなかった辛さも、わかる。けどね、君の力があれば助けられる命もあるんだ」
「……」

男がどこか懐かしむような声音で、けれど真っ直ぐに見つめながら放った言葉。

青年はそれから逃れるように俯いた。

もういない、自分が怪物にってしまった父や兄が、落ち込んだ自分に発破をかけに来た時を思い出してしまう。

そんな温もりが、男の言葉には込められている。

だがそれは、今の青年にとっては強烈なまでの嫌悪感を抱くものだ。

自らが奪ったものを、赤の他人から渡されるなど、気持ちが悪い。

「……一人に、してくれ」

青年は目の前の男にそう告げた。

胸の中を渦巻く吐き気を催す嫌悪感は、彼の言葉に救いを求めてしまったからか、あるいはあの日の光景が目には焼き付いているからか。

「頼む」と消え入りそうな声で呟いた言葉に男は「わかった」と頷き、立ち上がった。

今の青年に何を言ったところで響くことはない判断したのだろう。

「また来るからね」

男はそう言い残して部屋を去ろうとするが、その前にと青年の方に振り向いた。

笑みを貼り付けていた表情を真剣なものに変え、一言だけ告げる。

「過去の自分が許せないのなら、変わるしかないよ。よくも悪くも、人間は変わる生き物だからね」

「……」

「それに、君が死んだら誰がああの施設の子達の事を思い出すの？一応調べたけど、君が長男なんですよ？」

「……っ」

それら言葉に僅かに肩を揺らして反応を示した青年を他所に、男は「それじゃ」と手をヒラヒラと振りながら部屋から消えた。

何の比喩でもなく、壁に手を触れたかと思えば、最初からいなかったかのように姿を消したのだ。

男がいた場所を見つめながら、青年は溜め息を吐いた。

生きる意味もなく、死んでいなくてもただ生きているだけ。

なんともふわふわとした状態に置かれた彼は、考える事を止めるようにゆっくりと目を閉じた。

聞いたこともない声に、青年は目を開けた。

前後左右どころではなく、上も下も黒一色で塗り潰された空間に響くのは、重い打撃音。

弾かれるようにそちらに目を向ければ、そこにいたのは二つの人影。

いや、二足歩行という点では確かに人型ではあるが、その輪郭はどこよりも人間ではない。

一体は全身に針を生やした、さながら針鼠のような異形の怪物。

相對するは、右目、左腕、右足が赤、左目、右腕、左足が青の、黒一色の空間では変に目立つ色合いをした怪物。

二色の怪物は針鼠の怪物を殴り飛ばすと、ベルトのバックル部分に取り付けられた箱に手を伸ばした。

その右側に取り付けられたレバーに手をかけ、怪物が立ち上がるのも構わずにレバーを回す。

そしてベルトから音声 flowed かと思うと、二色の戦士が左足で地面を踏みしめてその場から跳躍。

さながら物語で語られる兎のように天高く跳んだ怪物は、器用に空中で体勢を整えると、向かってきた針鼠の怪物に対して跳び蹴りを放つ。

その蹴りは針鼠の怪物の顔面を捉え、勢いのままに蹴り飛ばす。

吹き飛ばされた針鼠の怪物は地面を転がり、そして立ち上がることなく爆散。

爆発を背景に着地した二色の怪物はゆっくりと顔を巡らせ、戦闘を見ていた青年へと目を向けた。

正面から見れば赤い左目は兎の横顔、右目はデフォルメした戦車のような形をしている。

それぞれ兎の耳、戦車の砲身がアンテナのようになっているが、果たして意味はあるのだろうか。

そんな下らないのを考えていると、二色の怪物は青年に向けてゆつくりと歩き出し、ベルトのバックルに納まっていた赤と青の小さなボトルを取り外した。

それを青年に放ると同時に怪物は消え、その場にはどうにかそれをキャッチした青年だけが残される。

「……夢……にしたって……変だよな……」

夢だとしても訳がわからない内容に首を傾げた青年は、赤のボトルをつまみあげ、軽く振る。

中に何か入っているのか、振る度にシヤカシヤカと音をたて、癖になる楽しさがある。……かもしれない。

「現実逃避にもほどがあるだろ……」

悪夢を見ると覚悟していたのだが、見た夢はこんな下らない、と言うよりは訳もわからないもの。

強烈なまでの現実逃避だと思っても、仕方があるまい。

はあと溜め息を吐いた彼はボトルを振るのを止め、どうせ夢なのだからと開き直り、中身不明のボトルの蓋を捻った。

瞬間、ボトルから赤い光が溢れ出し、黒一色だった空間を赤く染め上げた。

家族に抱き締められたような心地よさが全身を包み、乾いた心が僅かに潤っていく。

同時に視界が霞んでいき、立っていられずにそのまま倒れこむ。

『お兄ちゃん！お兄ちゃんはすごいんだから、皆を助けるヒーローになつて！』

消え行く意識の中、いつかに妹や弟たちとした約束が頭に響く。

——お前を殺した俺でも、父さんや母さんを殺した俺でも……。

数日後、同所。

相変わらず謎の札に四方を囲まれ、椅子に縛り付けられている青年だが、その表情には僅かな生気が戻っていた。

どろりと濁っていた瞳に微かだが光が戻り、顔色もいい。

「さて、覚悟は決まったみたいだね」

そんな彼の表情を観察した男の問いかけに、青年はこくりと頷き、そして問いかけた。

「俺でも、誰かを守れるんだよな……?」

「うん」

青年の真剣な表情に当てられてか、男は普段のおどけた様子を見せず、凜とした雰囲気を持ちながら応じる。

「誰かの役にたてるんだよな?」

「勿論」

「ヒーローってやつに、なれるのか?」

そして最後に投げ掛けた、どこか子供っぽい問いかけ。

それでも男は馬鹿にした様子を見せず、むしろ嬉しそうに口角をつり上げて満面の笑みを浮かべた。

「それは君次第だよ。それで、どうする?ここから出る?」

男から放たれた最終確認。

ここで否を突きつければ、青年はその望み通りに殺されることができらるだろう。

だが青年は「ああ」と肯定の言葉を放ち、男に告げた。

「俺は死ねない。あいつらを殺した責任から、逃げるわけにはいかなくなった」

「そっか。そうと決まれば行こうか」

男は嬉しそうに笑いながら言う、青年の縄を解こうと彼に近づき、手早くそれらを外していく。

「そーいえばさ」と縄を解きながら青年に声をかけ、わざとらしく耳元に顔を寄せて、「自己紹介がまだだったね」と無駄に格好をつけた声で告げた。

耳に吐息がかかるくすぐったさと、相手が相手故に沸き起こった気色の悪さに顔を真っ青にしながら身震いした彼を他所に、男はさっさと縄を解いてしまう。

「それじゃあ、改めまして」

そして青年の前に戻ってきた男は、自分の身体を見せびらかすよう

に両腕を広げると、右手を差し出した。

「僕は五条悟。これから君の先生になるから、よろしくね」

きりゆうあつひろ

「桐生貴丈。これから世話になる」

青年——桐生貴丈は、謎の男——五条悟の手を握り返し、固い握手を交わした。

ひどく今さらに思える自己紹介を終えると、五条悟は可笑しそうに笑いだし、桐生貴丈に言う。

「今さらだけど、無愛想だよね」

「ほっとけ」

突然デイスるような事を言われた彼は、半ば反射的に乱暴な言葉を返し、五条悟の手を離れた。

「いいだろ、別に」と肩を組んでくる五条悟を鬱陶しく思いながら、桐生貴丈は溜め息を吐く。

今までの会話でわかってはいたのだが、信用しようと思っていた男が、どこか残念だと言うのはやはり……。

「最悪だ……」

今後口癖になるであろう言葉が、彼の口から漏れたのだった。

2.

呪霊。

怒りや憎しみ、後悔、恥辱など、人から溢れた負の感情が降り積もり、形を持つほどになったもの。

姿形、その他の特徴は千差万別で、四級、三級、二級、一級、特級と、その強さによりクラス分けをされている。

特に一級以上となると、術式と呼ばれる特殊な技を使い始め、危険度が段違いに高くなる。

呪力。

相手を呪う力そのもの。負の感情がエネルギー源だと言われている。

人が呪霊を見るためには呪力が必要不可欠な力。

体内を巡るこれ进行操作することで身体能力、時には武器の強度を底上げし、低級の呪霊と対峙することもできる。

呪術師。

毒をもって毒を制するという言葉があるように、呪いをもって呪いを祓う人間のこと。

術式の有無はともかくとして、呪霊と同様、四級、三級、二級、一級、特級とクラス分けがあるものの、特級まで登り詰められた者は極僅か。

多くの呪術士を抱える現代日本でも、特級は三人しかいないと言えばその敷居の高さが伝わるだろう。

言ってしまうえば別次元。人間離れた呪術士の中でも、化け物クラスの強さが求められる。

生得術式。省略して術式とも言われている。

呪術士、あるいは一級以上の呪霊が使う特異な技。

体内に溜まった呪力を消費し、現実離れた現象を起こす。

人間が術式を持つかは、生得の名の通り産まれた瞬間に決まる——術式の有無がわかるのは、ある程度育ってからだそうだ。

呪術界において『才能が八割』と言われているのは何の比喻でもな

く、これを持つかどうかで呪術士としてのスタートラインが大きく異なる。

「そして君は後者になるね。もって生まれたって自覚はなかっただろうけど、現に君の術式は暴走して、あの惨状を生み出したわけだし」東京とは思えない森の中を進みながら、それこそ授業を行う教師のようにそう告げたのは、両目を包帯で隠した男。

現代日本に実在する呪術士。決して多くはない彼らの中でも、最高峰の——と言うよりも、自他共に認める最強の呪術士。

三人いる特級呪術士の一人にして、今は桐生貴丈の身元引き受け人——五条悟。

両目を包帯で覆っているにも関わらず、階段や木の根っこに躓かないのは、その術式なるものの賜物か。

そしていつものふざけた調子はどこにやったのか、真剣な声音でそう告げている様は、一応は教師という自覚があるからか。

少しは尊敬できそうだと内心で彼の評価をあげたのだが、それは次の瞬間には否定された。

「ま、僕には無害でただのうざい煙幕だったけどね」

今までの真面目な面持ちはどこにやったのか、にやりと得意気に笑いながら告げられた言葉に、貴丈は深々と溜め息を吐き、ぽりぽりと額を搔いた。

地面に打ち付けまくったせいなのか、割りと大きめの傷跡が残ってしまったそこを、ふとした拍子に搔いてしまうのは彼の新しい癖のようなもの。

「傷開いちやうよく」と気の抜けた声で言ってくる五条に、貴丈はハツとした様子で手を止め、ゆっくりと手を下ろした。

一応血が出ていないかと指先を確認し、出ていなければその手で乱暴に髪を搔き、傷跡を隠す様に前髪を垂らす。

「それじゃ話の続きをしよう。君は今から『東京都立呪術高等専門学校』に入学してもらう。そこで呪術の扱い方、呪いの祓い方を学ぶんだ」

しゅび！と人差し指をたてて告げた五条は、荷物片手に隣を歩く貴

丈に目を向けた。

緊張している様子もなく、逆に落ち着いているようにさえ見えるが、実際は感情というものが欠如しているからだ。

家族を異形へと変えてしまったストレスが、家族を死に追いやったストレスが、本来の彼を磨り潰してしまったのだろう。

負の感情というのは呪術を扱う上で大切なものではあるが、それが原因で潰れてしまっただけは元も子もない。

ふうと小さく鼻を鳴らした五条は、そんな彼を弄るようにツンツンと頬をつついた。

「そんな仏頂面だと同級生に嫌われるよ？今年は三人もいるんだから、ほら笑顔笑顔」

前に回り込み、両手でぐいと口角を持ち上げながら言うが、貴丈は心底鬱陶しそうに五条の手を払った。

無愛想を越えて無関心と言うべきか、やはりと言うべきか彼が作ってしまった壁というのは分厚く高い。

やれやれと肩を竦めた五条は後ろ歩きで階段を上がりながら、貴丈に告げる。

「まあ、その前に学長との面談があるんだけどね。そこで上手くやらないと、入学も出来ないから頑張って」

「……面談があんのか？」

「うん。あれ、言っただけだったっけ？」

おかしいなとわざとらしく首を傾げ、文字通り楽しそうに笑うその様は、悪戯を成功させた子供のよう。

額に薄く青筋を浮かべた貴丈の手は、無意識の内にその苛つきをぶつけるように再び額を掻き始めた。

だがすぐに「はい、ストップ」と五条にその手を掴まれる。

「本当、傷開いちゃうよ？僕は色々できるけど、誰かを治したりはできないからね」

「傷を治す技もあるのか？」

その言葉に、貴丈は今日一番の食い付きを見せた。

「あるよ」と頷いた五条は、けれど彼を突き放すように言う。

「でも、君の家族を元には戻せなかった。倒したらそのまま消えちゃうし、どうにか捕まえて治療してみても効果なしだ」

「……」

その言葉に貴丈は露骨に落ち込んだように俯き、溜め息を漏らす。傷を癒す術があるのなら、異形へと転じた家族を元に戻すことも出来るのではと思った途端にこれだ。

変に希望を与えず、現実を突きつけるという意味では大変ありがたいし、なら倒すしかないと割りきる助けにもなる。

「さて、到着だ」

そして五条が足を止め、そう告げると共に、貴丈は顔をあげた。

僅かに目を見開いて驚きを露にしているのは、その光景に気圧されたからか。

寺院のようにも見える建物がいくつも並び、清掃が行き届いているのか石畳も綺麗なもの。

「……」

「ふふ。驚いた？ここが君が通う学校だよ。まあ、そう見えないだろうけど」

彼の反応に可笑しそうに笑った五条は、「こっちだ」と彼を先導して門を潜った。

その後ろに続いて門を潜り、同時に見えない何かを通りすぎたような感覚に襲われ、反射的に振り向く。

「ああ、そうだ。境界があるから、変な感じするだろうけど気にしないでね」

「そう言うのは早く言え」

じとつと五条を睨むが、当の彼は気にした素振りを見せず、「あはは」と笑いながらさっさと歩き始めてしまう。

「っ……っ……」

途端に湧き出た怒りの感情と、それに合わせて影から煙が溢れ始めるが、すぐに頭を振ると深呼吸をして平静を取り戻す。

こんな下らないことで呪術が暴走などしてみろ、今度こそ五条に二十七歳児殺される。

別に今さら死にたくないとは言わないが、やることを見つけたのだから死ぬわけにはいかない。

死にたいと思いつながら、死ぬわけにはいかないと進まなければいけない。

そんな歪な覚悟が、今の彼を突き動かしていた。

夜蛾正道。

ここ、東京都立呪術高等専門学校の学長を勤める人物であり、五条悟の学生時代には彼と、彼の所属する学年の担任をしていた人物でもある。

五条悟という特大の問題児を抱えながら、きつちり教職を勤めたという意味で周りからも一目を置かれているが、彼がそんな人物であると初見で気付ける人物は稀だろう。

刈上げ頭でアゴヒゲを蓄え、サングラスを掛けた強面の男が、ひどく苛立った様子で、何とも可愛らしい一頭身の熊のようなぬいぐるみを縫っているのだから。

「遅いぞ、七分遅刻だ」

そしてぬいぐるみに目を落としながら呟いた言葉に、五条は「七分くらいいいでしょ」と返し、山となっているぬいぐるみへと目を向けた。

「どーせ、早く来て人形作ってんでしょ？」

肩を竦め、一応の敬意が込められた言葉に、夜蛾は溜め息を吐いた。説教するまでではないほんの僅かな、それこそ数分だけ遅刻してくる癖。

何度言っても直す気もない教え子だが、遅れてくる度に指摘するのは夜蛾くらいのものだろう。

多くの者が「五条だから」と諦めているにも関わらず。

「それで、そつちが」

だからと言って長々と問答するつもりはないのか、彼の興味は既に

次に移っていた。

五条悟の隣にいる、黒髪の青年。

身長は170前後。スポーツをしていたのかそれなりに筋肉質な身体。顔立ちも整っている。

パツと見た印象では、運動系の部活に所属している男子学生と言ったところだが、彼の瞳を覗いても同じ事を言える者はいまい。

どろりと濁り、生気が乏しいとまで言える黒い瞳。

ほんの僅かな光が灯ってはいるが、それこそ死人のようだと言われなくても仕方があるまい。

ある意味で壊れていると言ってもいいが、その壊れていることが呪術士にとつては何よりも重要だ。

人の死を間近に感じながら己を律し、常に精神を万全の状態を保たなければ、呪いに殺される。

そういった意味では、貴丈は勝手に第一関門を越えているとも言えた。

「桐生貴丈。……です」

「っ?!ちよつと貴丈、敬語使えたの!」

ぺこりと頭を下げて名を名乗った直後、隣で驚いた様子を見せた五条が彼に噛みついた。

ここまで彼は五条に対してはため口で、その徹底ぶりから敬語を知らないのではと疑い始めていたほど。

ここに来て放たれた突然の敬語に、なんで、なんでと聞いてくる五条は、文字通り好奇心旺盛の子供のよう。

貴丈は溜め息を吐きながら額を掻き、五条に告げた。

「あんたと話していると、弟と話してる気分になる」

「それって、君と同年?」

「三つか、五つ下」

五条の恐る恐る確かめるような問いかけに、貴丈は無慈悲なまでに淡々とした声音で告げた。

高校一年になる貴丈が現在十五歳だから、彼の言う弟と言うのは十歳から十二歳。つまり小学生だ。

「……そっか」とどこか残念がるような、けれど芝居めいたわざとらしい動作で肩を落とした五条を他所に、夜蛾が咳払いをした。

弛緩していた空気に緊張の色が戻り、貴丈の意識は夜蛾へと向かう。

「それで貴丈。お前は何しに来た」

同時に相手を威圧する迫力と共に、その問いかけが投げられた。

何をしに来た、と言われて真っ先に思い浮かぶのは「呪術を学びに来た」だが、この学校に来た時点でそんなわかりきったことを、今さら聞いているわけではあるまい。

おそらくその先。呪術を学び、何をするかを聞きたいのだろう。

ほんの僅かな、それこそ瞬き一つの間もなくその思慮を終えた貴丈は、決まりきった答えを夜蛾に返した。

「……罪を償うため」

「なぜだ」

「あいつらを怪物にしたのが、俺だからです」

「奴らの討伐なら横の悟含め、ベテランの呪術士に任せられた方がいいだろう。お前が命を懸ける意味は——」

「ある」

夜蛾の言葉を遮る形で、貴丈の口が動いた。

どろりと濁った瞳に、微かな光を灯しながら夜蛾を見つめ、律儀に待ってくれている彼に言う。

言い繕う必要はない。自分が為すべきことと、為すべき理由を口にするだけだ。

「あいつらが事情を知らない誰かに殺されたら、呪霊とかいう奴らと同じように、誰からも悼まれず、嫌悪されたまま逝くことになる」

「何も悪いことをしていないのに、ただ俺とただけなのに、そんな死に方がそんなのじゃ、あんまりだろ」

切なげに、今にも泣き出しそうな声音でそう告げた彼はゆっくりと右手を顔の前に挙げ、握り締める。

無意識の内に呪力が込められたそこには煙が渦を巻き、その奥からは力強くも儂げな赤い光が漏れている。

「まだそれは教えてないんだけどなく」と楽しそうに笑う五条を他所に、夜蛾は続きを促すように沈黙を貫いた。

そして、貴丈は告げる。

「だから、俺が皆を祓^祓う。あいつらに人殺しをさせたくたいし、助けられないのなら、早く楽にしてやりたい。その責任を誰かに放り投げて、あとは任せたでふんぞり返りたくもない」

「もう手遅れだって自覚はある。けど、死ぬ時にこれ以上後悔したくない」

もちろん、途中で見かけた呪霊も殺^殺すと念のため付け加え、夜蛾を見つめた。

真つ直ぐと見つめてくるその瞳を見つめ返せば、彼の覚悟の強さを嫌でも叩きつけられる。

隣でくつくつと鈴を転がしたように笑っている五条は、「今回は出番なしかな」と夜蛾の背後に並ぶ人形へと目を向けた。

本来であれば、入学希望者の本音を聞き出すために夜蛾と問答しながら、彼の操る人形と戦うはめになるのだが。

はあと溜め息を吐いた夜蛾は、貴丈にさらに問う。

「それでその償いが終わったら、お前は どうする」

「死刑を受け入れてきつさと死ぬ」

その問いに貴丈は間髪入れずに即答するが、「つて、訳にもいかないか」と俯きながら軽く額を搔いた。

そして言いたいことを言っ て落ち着いたのか、僅かに穏やかになった声音で言う。

「でも、わかんないってのが本音なんです。あいつらを殺しきる前に死ぬかもしれないし、そもそも償いが終わるかもわかんないですから」

判決的には死刑ですしと自分の罪の重さを再認識しながら、それでも夜蛾が求めているであろう、前向きなことを口にした。

「だから、その時が来たら考えてみます。今は目の前のことを考えるので精一杯なんで」

そうした胸の内を言い切った貴丈は額の汗を拭い、「次はなんです

？」と次の質問を待ち受ける構えだ。

命を懸けて果たしたい目的も、その動機も、一応は答えられた。

これで駄目なら、最悪独学でやりくりしなければならなくなる。

緊張に強張る彼とは対称的に、引き締まった表情を緩め、微かな笑みを浮かべた夜蛾は、「いいだろう」と呟いて彼に告げた。

「最後の質問の答えは、その時が来たら再び聞く。それまでに考えておけ」

「はい」

夜蛾の言葉に貴丈が今さら緊張した様子で頷くと、夜蛾は彼の隣で待ちぼうけをしている五条へと目を向けた。

「寮の案内と、警備セキユリテイの説明をしてやれ」

「はいっと。念のため聞きますけど、彼は——」

「合格だ」

五条が言った通り念のため確認すると、夜蛾は言わせるなどと言わんばかりに鋭く切り返した。

五条の横では貴丈が強張った表情をそのままに安堵の息を吐き、ピンと伸びていた背筋が僅かに丸くなる。

五条がバンとその背中を叩き、「それじゃあ、行こうか」とさっさと歩き出し、部屋を出ていってしまふ。

軽く一礼してから五条の後を追おうと歩き出した貴丈の背中に、夜蛾が声をかけた。

「貴丈」

「はい」

返事をしながら振り向いた彼に、夜蛾は念を押すように告げた。

「これから悟はお前の担任になる。敬語くらい使ってやれ」

「……善処します」

「そこは『はい！』って言って欲しくないな」

ひよこりと扉の影から顔を出した五条がそう言うが、「善処、します……」と貴丈の返事は変わらない。

仕方ないと溜め息を吐いた五条は「とりあえず行くよ」と再び扉の向こうに消えていき、貴丈は慌ててその背中を追いかけた。

そのまま五条に連れられ学内を徘徊すること数分。

明らかに遠回りや寄り道——途中で食堂や体育館、倉庫などに寄ったが、大した説明はなしだ——をし、ようやくたどり着いたのは寮の一室。

「ここが君の部屋ね。好きに使っていいから」

あるのはベッドと勉強机がある程度で、ここから生徒が好き勝手に弄れるように最低限の物しか置かれていないのだろう。

「二三年は出払ってるから、挨拶はまた今度ね」

五条の説明を他所に貴丈はきよるきよると部屋を見渡し、窓を開けて外の景色——視界一杯に広がる森——を眺め、最後に荷物をベッドの上に放る。

ようやく気が休まると安心していいのか、新たな家とも言えるこの場所にたどり着けたと、気を抜いているのか。

「それにしても、罪を償うね。てつきり『ヒーローになるためだ!』って言うのかと思っただけ」

しゅび!と音をたて、右手を斜め上に、左手を腰に置いてポーズを取りながらの言葉に、貴丈は荷ほどきをしながら「確かにそうだが」と前ふりをしてから告げた。

「それは妹との約束……ですから。戦う動機ってよりは、俺が生きる意味って感じだから……です」

二人しかいないのに、律儀にも夜蛾の言葉に従おうとしているあたり、生徒になる自覚ができたのか。

その生徒が、文字通り家族殺しを行おうとしていなければ、五条も両手を挙げて喜ぶのだろうか。

「別に僕とか、先輩たちに任せてここにいてもいいんだよ?」

「嫌です。てか、今さら前言撤回なんかするわけないでしょ」

「それはそうだろうけどさ、君に殺れる?姿は変わっても、家族でしょ?」

五条が壁に寄りかかり、腕を組みながら問うと、貴丈はベッドに荷

ほどぎしたものをぶちまけていた手を止めた。

そして「殺りますよ」と淡々とした声音で返し、五条へと目を向けた。

濁った瞳には鬼気迫るほどの覚悟の色が灯り、錯覚だろうが赤く光って見えるほど。

「他の誰かに殺されるくらいなら、俺が殺す方があいつらも成仏しやすうと思えますし」

「まあ、この件への対処を君にさせるのが死刑先延ばしの条件なんだけどね」

そして大真面目に言い切った直後に、五条が随分と今さらなことを宣い、にやりと笑った。

「その為に君には頑張つて欲しいんだよね。せつかく助けたんだから、死んでほしくないし」

「……だから、そう言うのは、もっと早く……」

「まず入学しなきゃ話にならないでしょ？ 話す順番は考えてるよ」

何とも適当な担任の言葉に項垂れる貴丈を見つめながら、五条は相変わらぬ笑顔を浮かべながら彼に告げた。

「それじゃ、明日呼びに来るからそれまでは待機。制服はあとで持つてくるから」

「制服。まあ、学校だからそりやあるよな」

「はいそこ、敬語なくなってるよ」

気を付けるよーに！と言ひ残し、五条は部屋を出ていった。

一人残された貴丈は開きぱなしの扉を閉めると、そのまま荷物の整理を始めた。

もつとも持つてきた荷物はほんの僅かだ。そもそもお洒落だとか、インテリアなんかとは無縁だったし、あつたとしても術式の暴走に巻き込まれてほとんどが燃えてしまった。あるのは適当に見繕った寝間着や、かろうじて残っていた家族の集合写真程度。

その写真を愛おしそうに撫でた彼は、それを写真立てに入れ、机に置いた。

あとは寝間着類をクローゼットに押し込み、簡単に部屋を掃除。そして一時間もしない内にやることをなくした貴丈は、溜め息混じりにベッドに横になった。

そのまま目を閉じ、深呼吸を繰り返す内に彼は意識を手放し、眠りに落ちた。

上も下も黒一色の空間。

そこではまた赤と青の二色の怪物と、ライオンのような異形と戦っていた。

怪物を蹴り、殴り、投げ飛ばし、様々な体術を織り混ぜて追い詰めていくが、異形には効いていないのか、すぐさま立ち上がり怪物へと襲いかかる。

パワーでは押し負け、スピードも劣り、異形の攻撃に一方的に傷つけられていく。

だが二色の怪物は倒れない。ふらつく足を懸命に踏ん張り、気合いのみで立っているかのよう。

そしてトドメを刺さんと異形が動いた瞬間、二色の怪物の手元に武器が現れた。

剣かとも思ったが違う。言ってしまうえば持ち手のついたドリルのような、異形の武器。

二色の怪物はベルトについていた赤いボトルを取り外し、武器に押し込むと同時にトリガーを引いた。

『!!』

そして言葉としては聞き取れない、不可思議な機械音が鳴り響き、赤いエネルギーがドリルを包む。

同時にライオン型の異形が飛びかかった瞬間、二色の怪物がドリルを振り抜き、赤いエネルギー刃でもって異形を叩き斬った。

胴を一閃された異形は臓物をぶちまけながら地面を転がり、最後には爆発四散。

二色の怪物は前と同じようにこちらに目を向けるが、今度は何もせ

ずにただ見てくるのみ。

手を伸ばしてみるが届くわけもなく、二色の怪物は背を向けてどこかに行ってしまう。

「おい、待て……！」

反射的にそれを追いかけてようと一歩踏み出した瞬間、ぐちゃりと湿り気のある何かを踏んだ音が耳に届いた。

ゆっくりと足元に目を向ければ、そこにあつたのは誰かの骸。

「……っ！」

思わずその場を飛び退き、その拍子に腰が抜けて無様に倒れた。

瞬間、生暖かい液体が身体を包み、強烈な鉄の臭いが肺を満たす。慌てて身体を起こすが、同時に辺りに広がる光景に目を剥いた。

身体をバラバラにされた家族の遺体。

身体を両断された家族の遺体。

そして原型を留めたまま、憎悪の表情でこちらを睨んでくる家族たちの姿。

それらと目があつた瞬間貴丈は呼吸が出来なくなり、肩は上下すれども酸素が入ってこない。

けたけたと壊れた人形のように頭を揺らしながら笑う声に混ざり、お前のせいだ、お前のせいだとこちらを責め立てる無邪気な子供の声が辺りから木霊する。

耳を塞いでも頭の中に直接響いてくるその声は防ぐことができず、叫び声をあげようにも声がでない。

ひゅうひゅうと細く息が抜けていく音だけが喉から漏れだし、肝心の吸うことができない。

呼吸ができず、苦しきままに再び倒れ、血の海に沈んでいく彼を、家族の骸たちが冷たく見下ろしてくる。

その中に蛇を形取った両目をした赤い異形が混ざっていたことに、彼は気付くことはなかった。

「貴丈？ 貴丈！ 大丈夫か!？」

「っ!？」

そして夢の中でも死にかけた貴丈は、五条の声によつて叩き起こされた。

弾かれるように上体が跳ねあがり、覗き込んでいた五条とぶつかりそうになるが、その寸前で五条が身を引いたことで頭突きは空振りに終わる。

だが、貴丈にとつてそんなことはどうでもよかった。

覚えてはいるが、酷い夢を見た。

その気持ちの悪い感覚が胸に突っかかり、呼吸が乱れて落ち着かない。

「退屈で寝るのはわかるけど、^{うな}魘されまくってたよ、大丈夫?」

制服が入っているのであろう紙袋を小脇に挟んだ五条の問いかけに、「わかんねえ」と返しながら汗を拭い、どつと溜め息を吐いた。

汗で貼り付くシャツの感触が気持ち悪いが、この男の前で脱ぐわけにもいかないのとおりあえず我慢。

「最悪な夢を見たんだと、思う……」

そして顔色も悪いまま囁くような声で言うと、五条が顎に手をやって何やら考え込んでいる様子。

「まあ、ここ何日かは酷い目にあつたのは確かだしね。どうする、入学伸ばす?」

五条が一応は気を回してそう問うが、貴丈は首を横に振り、紙袋を受け取ろうと手を出した。

「大丈夫。てか、じつとしてたら駄目なタイプだと思う」

「わかつた。けど、無理は禁物。やばいと思つたらすぐに言うこと」

五条の気遣いに「了解」と返した貴丈は、いい加減紙袋を渡して欲しいのかさらに手を伸ばす。

だが五条はポケットに手をいれると、ハンカチを取り出した。

「とりあえず汗拭いた方がいいよ。何なら拭いてあげ——」

そして良からぬことを言う前にそれをぶんどった貴丈は、それで顔を拭いた。

瞬間に、後悔した。

どうにも顔が粉っぽい。弟たちのいたずらで、小麦粉を顔面にぶちまけられた時と似た感じがするとか。

貴丈がちらりと五条に目を向けると、彼は笑いを堪えるようにプルプルと身震いしながら、そつと手鏡を差し出した。

そこに映るのは白粉を顔面に塗りたくった貴丈の顔で、大量の汗も相まってそれは酷いことになっている。

「寝れないならテレビとDVDでも持ってきてあげようか？まあ、つままないB級とかマイナーな映画ばかりだけど」

「さつさと帰れ……っ！」

貴丈は手にした白粉つきハンカチを五条に放り、それは確かに彼の顔を捉えたが、不思議なことに彼の顔は白くならず、むしろ不敵な笑みを向けられる始末。

「それじゃ、あとで持ってくるね！」

五条はそう言うど颯爽と部屋を飛び出していき、部屋をは痛いほどの静寂が包み込む。

はあと深々と溜め息を吐いた貴丈は、クローゼットに突っ込んだ箸のタオルを引っ張りだし、改めて顔を拭い始める。

とりあえず眠れるかは別として、明日から学校となれば休む他ないのだ。

顔を拭い終え、鏡で細かくそれを確認した貴丈は、二度寝するかと再びベッドに寝転ぶが、その直後にどんと扉がノックされる。

『貴丈、約束通り持ってきたよー！』

呪術士最強は、案外暇なのだろうか。

貴丈は深々と溜め息を吐き、いつまでもノックしてくる五条の根気と、周りの部屋への騒音問題への気遣いとで板挟みになり、結局扉を開けることになった。

余談だが、この日だけで無駄に映画に詳しくなったのは、彼のみが知ることだ。

3.

「早速だけど、転入生を紹介しやすー！」

「……………」

呪術高専、一年用の教室。

朝のHRとも言える時間に発せられ五条の声に、反応を返す者はいなかった。

別に生徒がいらないわけではない。現に教卓を挟んだ向こうには四つの机が並び、既に三つは埋まっているのだ。

その中の一つに腰を掛ける、このクラスにおける紅一点である禪院真希は、机に頬杖をつきながら溜め息を吐いた。

今は五月。転入というか、単純に面倒があつて入学が遅れたと言うわけではないのだろうかと推察し、とりあえずシカトこいてやると目を伏せるほど。

それよりも、その転入生に関しては噂の一つもないというのが不気味だ。

仕事上様々な情報が飛び交う呪術高専において、なんの前触れもなく生徒が入ってくるなど稀中の稀。

そういう意味では興味もないではないが……。

「はい、皆ーテンション上げてー！」

沈黙に耐えかねてか、あるいは廊下にいるその転入生に気を遣ってかは知らないが、五条は改めて一年たちに言うが、やはり反応はなし。「皆恥ずかしがっちゃって、仕方ないな」と的はずれなことを言う五条は、パンと手を叩いて教室の扉へと目を向けた。

「入っといでー!!」

扉の向こうで待っているであろう誰かに向けて、五条は入ってくるように指示を出した。

一年三人も一応顔を見ておくかと扉に目を向けると、がらがらと音をたてて扉が開く。

そこから入ってきたのは、呪術高専の黒い制服に身を包んだ、黒髪黒目の青年だった。

額を隠すように前髪を垂らし、暗そうな雰囲気醸し出してはいるが、その步調やピンと伸びた背筋からはどこかやる気のようなものを感じさせる。

だが、それよりも三人が気にしたのは彼の目の下に残った隈だ。メイクでもしてきたのかと聞きたくなるほどに、くつきりと残された黒い隈。

眠たげに瞼が垂れているが、意識ははっきりしているようであり、と教卓の前で足を止めた。

そして一年三人を一瞥した彼は、とある一人の存在に気付いて僅かに目を剥くが、すぐに気を取り直して姿勢を正す。

「桐生貴丈。よろしく」

そして名を名乗り、たった一言だけ挨拶をしてぺこりと頭を下げた。

一年たちは反応しないが、五条はぱちぱちと拍手をしている。

「とある事情でこんな変な時期での入学になっちゃったけど、仲良くしてあげてね」

「……小学校の教師みたいなこと言うんだ……ですね」

五条がある程度の事情を濁して紹介した瞬間に貴丈が放ったカウンターに、彼は気にした素振りもなく一年三人へと目を向けた。

「そつちの三人は反抗期真っ盛りだから、僕から簡単に説明しちゃうね」

五条はそう言って三人の方を手で示すが、貴丈はまた別のことを考えていた。

五条は反抗期と言ったが、彼は割りと適当で、大人の癖して子供のようなところがある。

そんな人に師事しながら過ごす三人にとって、彼こそがストレス源ではないのだろうか。

じとつと相手を責める視線を五条に向けるが、既に三人の方に振り向いた彼は気付かない。

「それじゃ、向かって右から。このクラスの紅一点にして、呪霊を祓える特殊な道具——呪具の使い手の禪院真希！」

彼が示したのは、暗い緑髪をポニーテールに纏めた女性。

身長は貴丈と同じか少し低い程度で、眼鏡をかけてはいるがその瞳から知的な印象は受けない。

何と言おうべきか、だて眼鏡とは違い、仕方なく掛けていると言った雰囲気を感じられる。

当の真希は無言を貫くが、五条の紹介は次へと移った。

彼が示したのは三人の中でも一番小柄な、白髪の青年。

制服の襟を伸ばしているのか、ネックウオーマー的なものを着けているのか、口元を隠している。

「呪言士の狗卷棘くんです！語彙がおにぎりの具しかないから、頑張ってるね」

紹介された狗卷は軽く右手を挙げて、本当におにぎりの具である「こんぶ」とだけ言って手を下ろした。

「……こんぶ……」

一応、初めて声をかけてくれた一年ということでもうにかコミュニケーションを取ろうとはするが、まずこんぶの意味がわからないのでそれもできない。

「こんぶ……こんぶ……う？」と首を捻って考え込む貴丈を他所に、紹介は最後の一人——正確には一匹へと移った。

五条が手で示した先にいたのは、白と黒の毛皮と覆われた獣。

それが日本に來たり、子供が産まれたりしようものなら、連日ワイドショーで取り上げられるような、よほど時世に疎くない限り知っているであろう動物。

そう。それなまさに、

「パンダだよ」

動物園の人気者、パンダそのものであった。

一応は熊であるから、その身体能力は人間の比ではないのは承知しているが、まさかそのパンダと同級生になるとは思わなんだ。

「パンダだ、よろしく」

「喋っ……!?!」

そして、パンダが喋れば誰だって驚くというもの。

貴丈は溜まっていた眠気が綺麗さっぱり消え失せる衝撃に意識が
冴え渡り、説明を求めて五条に目を向けるが、

「紹介はこんなもんかな」

「え……」

彼は貴丈の視線をあえて無視し、無慈悲に紹介を終了させた。

さっさと授業を始めたいのか、あるいは面倒臭がったのか、それは
定かではないが、それを思慮するよりも早く貴丈の口が動く。

「パンダは、その、最初から、パンダなのか……？」

恐る恐る、さながらそうとわかっていて地雷源を進むように、貴丈
はパンダに問うた。

パンダは「どういう意味だ？」と首を傾げるが、とりあえず「俺は
最初からパンダだが」と返答だけはしてやる。

「そうか」と安堵したように息を吐いた貴丈の反応を、一年三人は不思議
そうに見つめ、五条へと目を向けた。

訳ありだとは言っていたが、その訳が気になるのは仕方がないこと
だ。

これから背中を預けるとなれば、尚更に。

三人の視線を受けた五条は「そうだね」と僅かに考える素振りをす
ると、貴丈に「言っちゃってもいい？」と確認。

断る理由もない貴丈はこくりと頷くと、五条は彼の肩に手を置い
た。

「それじゃ許可ももらったし、説明しちゃうか。ちよつと面倒くさい
けど」

どこから説明しようかなくと、もったいぶる五条の様子に、真希が
「早く言え」と急かし、狗巻が「しゃけ」と肯定を意味する具材を口に
した。

「単刀直入に言つて、彼の術式は謎が多い。今わかっているのは人を
呪霊に変えてしまうことくらい。現に被害者も大勢出てる」

「は………？」

「……………」

「マジか」

彼の言葉に真希、狗巻、パンダは単純に驚いたり、どこか気を遣うように目を細めたりと、それぞれ反応を示すが、否定的なことを口にはしない。

呪術が暴走、あるいは意図せず呪術を使ってしまい、他人に迷惑をかけるなど、吐いて捨てるほど聞く話だ。

そして彼の術式は、その中でもかなり特異な部類に入るものなのは間違いない。

呪霊を祓う力の筈の呪術が、逆に呪霊を生み出す要因になりえるなど、滅多なことでは聞かない。

「その呪術のコントロールを覚えて、被害者の搜索。そしてもしもの場合は排除するのが、貴丈がここに来た理由って感じ。改めて、仲良くしてあげてね」

五条は何てことのないような調子でそう言うと、「それじゃ授業を始めます！」と四人に告げて黒板へと向かった。

三人は揃って貴丈に目を向けると、彼は「よろしく」と改めて頭を下げた。

流石に無視は憚られた三人は「よろしく明太子」とそれぞれ返し、とりあえず座席につく。

貴丈が余っている席に腰を降ろすと、タイミングを見計らっていた五条は、黒板にチョークを走らせた。

その日の午後。

貴丈は東京某所にある廃工場にいた。

午前は座学の時間ではあったが、午後は何でも呪術実習なるものだったらしく、言われるがままに駆り出されたわけだが。

形式上は監督官ということになる五条が辺りを見渡し、後ろで車から降りた真希と貴丈へと目を向けた。

「さてと。貴丈は初めての実戦になるわけだし、真希のフォローをすれば大丈夫だから」

「なんで私が……。こう言うのはパンダの方がいいだろうが」

「それを来てから言う辺り、素直じゃないよね」

にやにやと楽しそうに笑う五条の言葉に、真希は堪らず舌打ちを漏らすと、隣で工場を見上げている貴丈へと目を向けた。

「なんか出そうだなとか思ってるだろ」

「そういう場所に呪霊が出るってのは聞いた」

「呪霊が出るから噂が立つんじゃないかって、噂が立つから呪霊が湧くんだけだね」

貴丈の言葉に五条が付け加え、午前中にも教えたことを改めて復唱した。

呪霊とは人から溢れた負の感情が形となり、人に害するもの。

詰まる所、心霊スポットと呼ばれる場所に呪霊がいるのではなく、心霊スポットと呼ばれるから呪霊が現れると言った方が正しい。

五条がそう言うって腕を組むと、「さて、仕事の話だ」とここに来た理由についての話を始めた。

「最近、肝試しに入った人たちが相次いで行方不明になっているらしくてね。まあ、呪霊の仕業だよねってことで、仕事が回ってきたって感じ」

「……突撃して、全滅させて、終わりか?」

「ま、簡単に言えばそうだね」

貴丈の問いかけに五条が頷くと、貴丈は「どうやって」と重ねて問うた。

呪術なるものを扱える記憶はないし、そもそも喧嘩はしたことはあれど命のやり取りはこれが初めてだ。

呪術を使おうとして再び暴走など、洒落にならない。

貴丈はぐつと拳を握りながら、五条に問う。

「呪霊って、殴り倒せるもんなのか?」

「無理だよ。呪いは呪いじゃなきゃ祓えないって、午前中に教えたばっかりなんだけど?」

「……?記憶にないんだが」

困惑した気味に首を傾げる貴丈は、どうにか午前中のことを思い出そうと頭を捻った。

三人への自己紹介を済ませ、授業を受けたのは覚えているが、途中からの記憶が随分と曖昧だ。

ふっと意識が途切れ、気づけば時計の長針が半周していたというのは確かだが……。

うんうんと唸る彼を横目に、真希は車の後部座席から引つ張り出した袋から、禍々しい紋様の布で刃を隠された薙刀のような物を取り出した。

紹介の時に言っていた呪具なるものが、あれなのだろう。その辺りの記憶はある。

「呪いが込められた武器だと思えばいいよ。あれで殴ったり、斬ったりすれば呪霊を祓える」

「俺にはそういうのいないのか」

手ぶらでここにいる自分が場違いに思えて仕方がない貴丈はそう問うが、五条は顎に手をやってしばし考えると、真希に目を向けた。

「他に何かなかったっけ？」

「予備か？あー、これしかねえが」

薙刀を車に立て掛け、袋に手を突っ込んだ彼女は、小太刀を取り出した。

鞘に何やら紋様が刻まれており、おそらく呪具なのだろうと素人目でもわかる。

「貴丈に使わせてあげて」

「……断ったら？」

「万が一が起きた時、貴丈はろくに抵抗できずに呪霊に殺られる」

「死にたくねえな」

五条の脅しに貴丈が乗っかると、真希は苛立ちのままに頭を掻き、小太刀を差し出した。

「折るなよ。折ったら弁償だ。ついでに腕も折る」

「ちなみに、値段は」

「一軒家」

「……」

たかが小太刀とたかを括っていた貴丈は、突きつけられたおおよそ

の値段に言葉を失った。

こんな一振りの小太刀に、一生に一度するかしないかの買い物ほどの値段がするとは。

貴丈は額に脂汗を垂らしながら、片手で持っていた小太刀を両手でしっかりと握り直した。

「今のうちに慣れておきなよ」と笑う五条は、そつと二人の背を押した。

「呪いを祓い、生存者がいれば救出。死んでいて、かつ見つけられれば遺体か遺品を回収。お願いね」

押されるがまま二人が廃工場の敷地に入ると、五条は手で印を組んだ。

『闇より出でて闇より黒く。その穢れを禊ぎ祓え』

そして何かを詠唱すると、空の一点に黒い染みが出現し、それがじわじわと広がっていく。

真昼なのに夜のように辺りが暗くなり、

見覚えはあるが、何かはわからないそれを見ていた貴丈に、五条が言う。

「帳とばりって言うんだけど、簡単に言えば結界だね。中の状況を見えなくさせて、ついでに呪霊を煽って出てきてもらう為のもの」

「あの時も、張っていたように思うんだが」

「一部の呪霊は力任せに破ってくるよ。あの時は補助監督官がやったんだけど、まあ僕の帳を破れるやつなんてそういないから」

そうこう言っている内に帳はドーム状に広がり、廃工場を包み込むと広がり続ける。

五条はその場から退いて廃工場の敷地から出た。

「それじゃ、頑張りたまえ、若者たちよ！」

しゅび！と勢いよく敬礼をした彼が、降りきった帳の向こうに消えていくのを見届けた貴丈は、溜め息混じりに真希へと目を向けた。

「さっさと殺るぞ。どうせ雑魚だろうからな」

そう言つて真希が目を向けた先。

そこには廃工場の影から這い出てきた、複数体の異形の姿があつ

た。

痩せ細り、骨と皮しかなくなった、犬のような何か。

ぐるぐると喉を鳴らし、牙を剥いた口からは涎が垂れている。

だが、何かを警戒しているのか頻りに辺りを見渡しており、怯えるように震えている個体さえもいる。

「犬の、呪霊。いや、犬型の呪霊……か？」

見ればわかる情報を口にしながら小太刀を構えた貴丈を他所に、真希は薙刀の刃を覆う布を剥がし、刃を剥き出しにした。

かといって薙刀を構えるわけではなく、自然体のまま歩き出す。

「貴丈、覚えとけ。呪霊ってのはな」

ガチガチと牙を打ち付け、血走った瞳で目配せした呪霊たちは、自棄を起こしたように吼えながら一斉に真希へと襲いかかった。

「弱い奴ほど、よく群れる」

そう告げながら薙刀を真一文字に一閃。

一斉にかかった呪霊たちは、三日月状に残る銀の残光に切り伏せられ、醜く濁った血飛沫が辺りを汚す。

「ま、人間もそれは同じだよな」

頬についた返り血をそのままに振り向いた彼女に、貴丈はその場で立ち尽くして「お、おう」と声を漏らした。

——もう、あいつ一人でいいんじゃないやねえか……？

この場にいる自分の存在意義に、疑問を持ってしまうのは仕方がないことだ。

そこからは真希の独壇場——というわけではなく、むしろあれからというものの、呪霊と遭遇する事さえもなかった。

一応小さく、人を傷つける程の力を持たない呪霊——ようとう蠅頭と呼ばれるものはいれど、目的の呪霊とおぼしきものがない。

「だーどこにいったー」

そしてついに痺れを切らした真希が吠えた。

それに怯えた蠅頭たちが蜘蛛の子を散らすように逃げていき、ぽつ

んと真希と貴丈の二人が残される。

「呪霊を怯えさせるのか。凄いな、禪院」

貴丈はグツとサムズアップして見せるが、その言葉に真希は舌打ちを漏らした。

そのまま貴丈に目を合わせることなく、ずかずかと奥へと歩き始め、貴丈は遅れまいと慌てて後ろに続く。

「悪い、怒らせたか？」

僅かに足音が大きくなり、歩調も荒っぽくなった真希にそう問うと、彼女は不意に足を止めた。

それに合わせて貴丈は足を止め、「禪院？」と彼女に声をかける。

「苗字で呼ぶな」

そして振り向き様にただそう告げると、再び歩き出す。

無言で彼女の背を見つめた貴丈は「わかった」と頷きながら、視界の端を動いた蠅頭に目を向け、小太刀で一閃。

断末魔をあげることも許されず、ぼろぼろと形を崩していき、血痕を残して消えてしまう。

無事に祓えたことへの安堵か、あるいは切れ味に関してか、彼は感嘆の息を吐いた。

小太刀の具合を見るように素振りしてすばやく納刀すると、ちらりと真希の方へと目を向ける。

何してんだと言いたげに睨んでくる彼女に、貴丈は誤魔化すように目を背けた。

「何事も、試運転ってやつは大事だろ？」

「……さっさと行くぞ」

そして苦し紛れに放った言葉を真希は興味なさげに吐き捨て、彼女の背後にある錆びた扉を示した。

調べねばならない工場は何棟かあり、今は一つ目の建物内だ。

ここから更に歩き回ることを考えれば、足を止める時間も惜しい。

「了解」と頷いた貴丈は小走りに真希へと近付き、彼女の進行方向を塞いでいた錆びた扉へと手をかけた。

それは、まさに岩であった。

硬質な鉱石を思わせる青い装甲に包まれた上半身は、天井から溢れる月明かりに照らされて怪しい輝きを放ち、人のそれとは違う色の返り血に染まった拳が鈍く光る。

『オオ……』

それが拳を振るえば、ぐちゃぐちゃと湿った音を工場内に響き、その度に足元に転がる呪霊の残骸が、ビクビクと痙攣を繰り返す。

『オオ……』

岩のような拳を呪霊の残骸へと叩きつけ、衝撃が蜘蛛の巣状の亀裂を辺りに刻むほど。

屈強な上半身を支える下半身は、人間のそれのように細いものの、確かにその体軀を支え、亀裂の広がる床をしつかりと踏み締める。

『オオ……』

再び拳を振り上げ、振り下ろす。

一際強く身体を跳ねさせた呪霊は塵となって消えていくが、岩のようや異形が大きく息を吸うような動作をすると、その塵を体内に取り込んでいく。

そしてそれを全て飲み込んだ瞬間、異形は恍惚の呻き声をあげ、身体を支配する全能感に任せて拳を振るった。

盛大な破砕音と共に工場内に放棄された資材が容易く吹き飛び、壁や天井に突き刺さる。

『オオオ……ッ!!』

数分前の自分よりも、格段に強くなっている。

それを自覚した異形は吼え、岩のような拳で自分の胸を叩いた。

もちろんその程度で傷つくことはなく、力任せに太鼓を叩いたような轟音が工場内に響く。

『ウウッ……?』

凄まじい全能感、多幸福感に包まれていた異形は、不意に動きを止めた。

耳を澄ますように黙りこんだ異形の耳には、重々しく扉を開けるような音が微かに聞こえる。

その後には微かな足音が聞こえ、何かがここに来ているのは明確。

『オオオオオオオッ!!』

新たな獲物の接近を察知した異形は再び吼え、工場の壁に向けて走り出した。

加速の勢いのままに壁をぶち破り、最短距離で獲物を目指す。

さらなる快感のため、さらなる強さのため。

彼は、突き進む。

パンパンと手を叩き、掌に貼り付いた錆を払った貴丈は小太刀を抜いて次の棟へと踏み込んだ。

後ろに続く真希は辺りを見渡し、再びの舌打ち。

「ここにも何にもいねえ」

「……外のあれが本命だったってオチは？」

「ありえねえだろ」

貴丈が一応の気遣いとして告げた言葉に、真希はきっぱりとそう言いきった。

「だよな」と肩を落とした貴丈は辺りを見渡し、そして不意に聞こえた轟音に耳を澄ませた。

あまり聞き馴染みのない、それこそアクション映画でしか聞かないような破碎音が段々と大きくなっている。

「……？」

もちろん真希もそれに気付いたようで、薙刀を構えて警戒を強め、音の発生源がいると思われる壁へと目を向けた。

音の大きさから、壁の向こうに何かいると判断したのだろう。現にその判断は合っている。

少なくとも、この時点では。

何かが突撃してくると読んでの構えだが、突然その音が消えたことを合図に「あ？」と間の抜けた声を漏らす。

小太刀を構えていた貴丈も、耳が痛くなるほどの音が止まったとなれば首を傾げるのも仕方がない。

だがそれと同時に、突然の頭痛が彼を襲った。

絶え間なく針で刺されるような痛み^{しか}に表情を顰め、空いている手で額を押さえる。

その直後、彼の視界に本来のそれとは違うものが映った。

気のせいだと思うにはあまりにも鮮明で、現実だと思うにはあまりにも突拍子のない、幻覚。

それは今自分たちがいる工場を見下ろす、何とも不思議な光景だった。

視界は段々と工場へと迫り、この勢いで行けば間違いなく天井を貫いてくることだろう。

あの日折られた腕の痛みがぶり返し、それを合図に視界が本来の自分の物へと変わった瞬間、彼は動いた。

幻覚に対する疑問が確信に変わり、それに対処せねばと、考えるよりも早く反射的に身体が動いたのだ。

「っ！」

前に立っていた真希の腰に腕を回し、彼女を抱えたまま全力をもつてその場から飛び退いた。

彼の突然の行動に「おい!？」と怒鳴った瞬間、凄まじい音をたてて工場の天井が突き破り、隕石のように何かが二人のいた場所に激突した。

「ッ!？」

ぎよつと目を見開く真希を他所に、どうにか着地した貴丈は彼女を降ろすと、油断なく小太刀を構えた。

舞い上がった砂塵や埃で見えないが、その奥を動く何かの影が見え隠れしている。

「お前、なんでわかった」

立ち上がり、薙刀を構えながら投げられた問いかけに、貴丈は「わかんねえ」と即答。

「ただ、何となく」と付け加えるが、真希は目を細めるだけで納得した

様子は見せない。

落ちてきた何かが、途中から壁抜きではなく上からの奇襲を狙ったということだろうが、なぜ貴丈は気付けたのか。

疑問は尽きないが「ありがとうよ」と言う辺り、感謝はしているのだろう。

貴丈は「おう」と応じると、じつと砂塵の向こうを睨みつけた。

そして、ついに動く。

『オオオオオオオッ!!!』

落下してきた何かが吼えると、その音に押される形で砂塵が吹き飛び、その姿を二人に見せつけた。

岩のような青い装甲に覆われた上半身。

大人の身体ほど有りそうな両腕もまた同色の装甲に覆われ、拳には呪霊のものと思しき血液がこびりついている。

「……あれだな」

真希がついに獲物を見つけた興奮からか獰猛な笑みを浮かべる中、貴丈は相手の拳を見つめながら、小さく目を見開いた。

全身の姿に見覚えはないが、少なくともあの拳には見覚えがある。あの日自分を殴り飛ばした拳が、まさにあれなのだ。

自分の隣で食事に手を出していたのは、位置の都合上二人しかいないが、拳が飛んできたのは右から。

つまり自分の右隣にいた弟が、あれなのだろう。

「貴丈……?」

そうして刹那的な時間で相手を把握した貴丈に、真希が声をかけた。

構えたまま身動き一つせず、じつと相手の拳を見つめているのだから、気にするのは当然のこと。

その声にびくつと肩を揺らした貴丈は、彼女の方に振り向きながら目を細めた。

「あいつだ」

「あ?」

「あれは、俺の——」

そこまで言いかけた直後、異形が吼えながら二人に向かって突撃を開始した。

話どころではないと切り替えた二人は、貴丈は左、真希は右へとそれぞれ飛び退き、二人がいた場所を異形が通りすぎていく。

直後、二人は無防備に晒された背中に刃を突き立てんとするが、

『ウウッ！』

異形は反転と同時に唸り声をあげながら裏拳を放つ。

前に出ようとしていた二人は即座にその動作を中斷。一步踏み込んだ先に、岩のような拳が振り抜かれ、拳圧により生じた風が二人の髪を揺らす。

だが、拳を振り抜いた異形はその重さに振り回されているのか、『オオ……』と声を漏らしながら体勢を崩し、その場で地団駄を踏んだ。

その隙をみすみす逃がす訳もなく、真希は薙刀の突きを放つが、異形は両足を踏ん張って強引に体勢を整え、乱暴に拳を振るう。

ガキン！と甲高い金属音が工場内に響き渡り、火花が暗がりを照らして隠れていた蠅頭の姿を照らし出すが、貴丈も真希もそれに気を向ける余裕はない。

薙刀を跳ね上げられた真希は舌打ちを漏らし、数歩分後ろに下がりを、薙刀をぐるりと一回転。

ちらりと刃を一瞥し、欠けや歪みがないことを確認。

『オオ……ッ』

異形も異形で真希を脅威と判断したのか、じつと彼女を睨みつけた。

どこが目なのかはわからない真希は、とりあえずそれらしい窪みを睨み返した。

だが、相手は彼女一人ではない。

「オラッ!!」

異形の注意が彼女に向いた瞬間、貴丈はその背中に刃を突き立てんと小太刀を振るうが、

『ウッ！』

異形は低く唸りながら地面を踏みつけ、その勢いで跳躍。

彼がいた場所を銀光が駆け抜け、振り抜いた貴丈はその勢いのままに体勢を崩すが、勢いを利用して素早く地面を転がり、真希の隣へ。同時に異形が地面へと降り立つと、ゴリラがドラミングするように両腕で胸を叩く。

「で、あれがお前がやつちまった結果か」

そして真希が途切れていた会話を切り出すと、貴丈は苦虫を噛み潰した表情でこくりと頷く。

今回に限って言えば誰なのかも把握できているが、それは言う必要はないと出掛けた言葉を飲み込む。

「呪うなよ」

これからお前の家族を殺すという宣言。

真希が淡々とした声音でそう言うと、貴丈は「わかってる」と返し、異形を睨んだ。

「呪われる理由はあるけども、呪う理由はない」

彼はそう言うと言いつつ制服についた埃を払い、小太刀を握り直した。

異形は二人を睨みつけると再び吼え、先程の再現のように突撃。

距離も大して変わらない。二人の距離も大差ない。本当の意味での再現。

二人もならばと先程のように回避しようとするが、それと同時に目を剥いた。

『オオオオオオオオオツ!!!』

先程とは、段違いに速いのだ。

回避する暇もなく開いていた間合いが瞬時に縮まり、なす術もなく吹き飛ばされるに見えた二人は、

「なるー!」

「~~~~っ!」

真希は薙刀を巧みに動かして異形を受け流し、貴丈は盾代わりに小太刀を自分と異形の隙間に差し込み、ダメージを軽減。

真希は罅の入った長柄を睨みながら、貴丈は全身の骨が軋む感覚に襲われながら、回避できなかった分詰まることになった間合いを生かすべく、行動を起こす。

二人は同時に得物を振り上げ、無防備な異形の背中に突き立てた。直後響いたのは異形の悲鳴——ではなく、硬質な何かがぶつかり合うような金属音だった。

「こいつ……っ！」

「硬えー！」

二人はそれぞれ悪態をつき、その場から退かんとするが、今回は異形の方が速い。

彼は振り向くことなく両拳を振り上げ、力任せに地面に打ち付けた。

直後、地震でも起きたかのような揺れと衝撃が二人を襲った。

地面に足をついて動く都合上、その地面を揺らされてはどうにもなるまい。

真希は咄嗟に薙刀を杖代わりに身体を支えるが、貴丈は堪らずに片膝をつく。

揺れは収まっておらず、体勢を整えるのにおよそ数秒。

そしてその数秒を逃がすほど、異形の理性も蒸発していない。

——最大の脅威は女の方。男の方はどうとでもなる。

故に冷静に、慎重に、おそらく最初で最後の際を晒した真希に対して拳を振るった。

空気が唸る音をたてながら、容易く金属さえも砕く拳が眼前に迫る。

真希はどうにも薙刀で受け止めんとするが、呪具であるのはあくまで刃のみで、長柄はただの木材にすぎない。

その程度で呪霊の攻撃を防げれば、誰も苦戦はしないだろう。

柄を砕かれれば振るいにくくなるが、それでも戦闘する分にはどうにでもなる。

この一撃を耐えられれば、という話だが。

「真希!!」

だがその思慮を吹き飛ばすように、貴丈の声が彼女の耳に届いた。

片膝をついた為か、あるいは単に根性を見せたのか、一瞬早く体勢を整えた貴丈が、彼女の盾にならんと割り込んだのだ。

直後振り抜かれた拳が貴丈の胸を捉え、肉を潰す鈍い音と共に、彼の身体を吹き飛ばした。

その勢いのままに廃資材に突っ込んだ貴丈は、ごぼりと血を吐きながらそのまま意識を手放した。

「貴丈!？」

真希は彼の名を呼ぶが反応はなく、代わりにあるのは異形が振り下ろした次なる拳。

彼女はその場を転がってそれを避けると、放たれた拳が地面を叩き、再びの地震を発生させる。

「チツ」と舌打ちを漏らした彼女は大袈裟に距離を取り、薙刀を構えた。

ちらりと廃資材に突っ込み、気絶している貴丈に目を向ける。

目の前の相手を仕留め、帳の外にいる五条と合流すれば、彼は助けられるだろう。

だが、どう言い繕ったとしても、彼に助けられた事実は変わらない。

「恥だな」

とりあえず後悔も反省も後にして、目の前の呪霊をどうにかせねばならない。

相手が元人間であろうと、知ったことではないのだ。

——呪術師として、呪霊を祓う。

呪術師としてここにいる以上、それは変わらないのだから。

上も下も真っ暗な空間。

寝る度に放り込まれるその空間に、血塗れの貴丈はいた。無様に地面に転がってはいるが呼吸はしている。

だが、骨が折れている筈なのに痛みを感じない。

——これ、死ぬかもな……。

痛みを感じるのが生きている証拠だと言うのなら、痛みも何も感じない今の自分は、果たして生きていると言えるのだろうか。

捨てた命を惜しむ理由もないが、今死ぬわけにはいかない。

ここで死ねば、弟が罪を犯すことになる。

ここで死ねば、真希に彼を殺す罪を背負わせてしまう。

ここで死ねば、家族を救^{殺す}うことも出来なくなってしまう。

——それは駄目だ。

死ぬのは皆を見送ってから、一人孤独に逝くと決めている。

自分が犯した罪を、彼らが犯した罪を、その全てを背負ってから、死ぬと決めているのだ。

だがそうと決めていても、迫り来る死の気配から逃れる術はなく、段々と寒くなっていく。

傷を癒す呪術もあるらしいが、生憎とそんなものが出来たら苦労はしていない。

——どうにか、しねえと……。

ここでじつとしていてもどうにもならず、かと言ってどうにかできる術もない。

夢の中とはいえ焦る彼は何かないかと首を巡らせるが、いつも通り何も無い。

時々見せられる異形同士の戦いも今はなく、本当に暗闇の中にぽつんと一人でいるだけだ。

こうしている間にも真希が戦っているのだから、一刻も早く戻らねばならない。

戻ったところで何ができると言われればそうだが、何もせず見ている

るだけなのはもうやめだと決めたのだ。

かと言って、これからどうするという話に戻ってしまうのだが……。

死ぬまでの数分か、数秒か、なにか出来るとしても一つか二つ。

そもそも夢から醒めなければどうにもならず、どうやって目を覚ますという話にもなってしまう。

——詰んでねえか、これ……。

目が覚めた途端に死ぬとか、目が覚める前に死ぬとか、現状行き着くのは『死』という最悪の結果のみ。

それは嫌だなと思っても、回避する方法もない。

「最……悪だ……」

貴丈は悪態混じりに空を——もつとも真つ暗なのだが——を見上げ、血塗れの手を伸ばす。

手を取ってくれる相手はおらず、掴めるものもなく、何の意味もない、体力を無駄にするだけの行為。

意識が消えていくのと同時に伸ばしていた手から段々と力が抜け、ゆっくりと手が降ろされていく中で、不意に伸びてきた手が彼の腕を掴んだ。

「……っ」

霞む視界。消えかける意識の中で、彼が捉えたのは一人の少女。

黒い髪に赤いリボンを巻いた、どこかの中学校の制服を着た少女。

その少女に見覚えるのある貴丈は、涙を流しながら気力を振り絞り、少女の頬を撫でた。

にこりと微笑んだ少女は彼の手を両手で包み込むと、貴丈に告げた。

「頑張つて、お兄ちゃん」

少女は、貴丈の妹はそう言って死にかけの兄を励ますと、彼の胸に手を当てた。

仄かに温かく、優しげな赤い光が彼の胸から放たれ、そこから赤い兔が飛び出す。

それは少女の足にすり寄ると、二人の周りをぴよんぴよんと跳ね回

り始めた。

ぴよんと一際高く跳んだ兎が少女の肩に乗ると、少女はその兎を撫でてやりながら貴丈に告げた。

「使い方は、知ってるでしょ？」

「……え」

だが、彼女から告げられた言葉に貴丈は間の抜けた声を漏らした。使い方をこれから学ぼうとしているのに、知ってるでしょ？と言われても困ると言うもの。

パチパチと瞬きを繰り返し、困惑気味に首を傾げるが、少女はにこりと笑うばかり。

そのままの笑顔で貴丈の額に手を置くと、すっと目を細めた。

「知ってる筈だよ。だって——」

『これから、教えてやるんだからな』

そして告げられたのは、少女のものとは違う声。

ぎよつと目を見開いた貴丈は、声の主へと目を向けた。

『やれやれ』と肩を竦めるのは、目が蛇を思わせる形をした異形の存在。

両肩には金色に輝く星座の早見盤のようなものがあるが、僅かに欠けているように見えるのは気のせいではあるまい。

腰に巻かれたベルトのバックルには、赤と青の異形がつけていたものどよく似た——けれどだいぶ豪華になって見える箱が取り付けられている。

その登場に少女は不満そうにむつとするが、異形は『落ち着けよ』と少女と、その肩に乗っている赤い兎を撫で、貴丈へと目を向けた。

『お互い、こいつに死なれたら困るだろ？』

「それは確かに」

『それに、外のあいつを野放しにしておくわけにもいかない』

「それもそうだ」

『で、あの武器を振り回すだけの呪術師じゃあ、勝てない』

「それはどうだろう？」

何とも手慣れた様子でやり取りを繰り返す二人は、揃って貴丈に目

を向けた。

話についていけず、困惑の表情で今にも死にそうになっている彼に、異形は溜め息混じりに告げた。

『助けてやる』

「寂しいけど、しばらくお別れだね」

「ちよつと……待って……っ。何が、どうなって……」

勝手に話を進める二人に貴丈は抗議するが、異形がそれを手で制した。

『余計な詮索はなしだ。お前には強くなつてもらわないと困る』

異形はそう言うのと彼の頭を鷲掴み、ベルトに取り付けられたレバーに手をかける。

『お前に力をやる。使い方も教えてやる。その代わり、ここでの出来事を忘れる。いいな?』

「あいつを……真希を、助けられる……のか?」

そのまま頭を潰されてもおかしくない状況でも、貴丈が問うたのは誰かのこと。

異形は可笑しそうにくつくつと笑うと、『お前次第だ』と曖昧に返すが、少女は「大丈夫だよ」と微笑み、赤い兎を撫でた。

同時に赤い兎は光輝くとベルトのバックルに吸い込まれていき、小さな赤いボトルへと姿を変える。

「頼む」

二人の返答を聞き、それを見届けた貴丈は、迷う素振りもなくその提案に応じた。

『あいよ』と返した異形がレバーを回し始めると、どこか聞き覚えのあるオーケストラが流れ始める。

同時に赤いボトルから溢れた力が異形を通して貴丈へと送られ、彼の身体を赤い光が覆っていく。

その音を聞きながら、少女はぎゅつと貴丈の手を握る。

仄かに感じる彼女の温もりと、全身を巡っていく力と、頭に刻まれていく情報を感じながら、自分を落ち着かせるように深呼吸を一度。

『チャオ』

「ぼーぼー」

二人からそれぞれ贈られた別れの言葉を合図に、貴丈の意識は暗闇へと落ちていった。

真希と、青い装甲に覆われた異形。

貴丈の戦闘不能から睨みあいが続けていた両者は、天井の一部が落ちたことを合図にぶつかり合った。

「オラッ！」

『オオオ……ッ!』

気合い一閃と共に放たれた薙刀の一撃を片腕で受け止め、もう片方の腕をフルスイング。

ぶおんと空気が唸る音と共に迫る拳を紙一重で避けた真希は、薙刀の石突きで異形の顎と思われる場所を殴打。

ゴッ!と鈍い音が工場内に響くが、やはりと言うべきか決め手にはならず、異形は怯んだ様子を見せずに拳を振るった。

舌打ち混じりにその場を飛び退いた真希は、どっと出た疲労を吐き出すように深々と息を吐き、薙刀を構え直す。

一撃でも当たれば死ぬという、嫌でも叩きつけられる事実と、早く倒さねば貴丈が死ぬという事実。

その二つが二重苦となり、彼女の精神を磨り減らしているのだ。とはいえ、真希もこれが初めての戦いではない。こういった状況には慣れている。

慣れているのだが、相手が元人間だという認識が、どこか彼女の身体に重くのし掛かっているのだ。

ふーっと深く息を吐いた彼女はずれた眼鏡の位置を直し、細めた瞳で異形を睨む。

『オオオオオ!!』

吼えた異形は再び突撃せんと姿勢を低くするが、身体の向きがどこか可笑しい。

真希の方を向いておらず、貴丈が埋もれた廃資材の方へと身体を向

けている。

「あの野郎……っ！」

そして異形の意図を察した真希は、額に青筋を浮かばせながら駆け出した。

あの異形は挑発しているのだ。この突撃を止めてみると。止められなければ、あの男は死ぬぞと。

ざっ！と音を立てて地面と靴底を擦らせながら、真希が

異形と貴丈の間に割り込み、防御姿勢を取ると同時に異形は吼えた。

力を溜める闘牛のように地面を蹴りながら、巨体と脚力に物を言わせてその場から飛び出す。

爆音にも似た音を響かせ、十数メートルは離れていた間合いが瞬時に零に。

『オオッ！』

突撃の勢いのままに真希を轢き殺そうとした瞬間、

『《レディー・ゴー！ボルテック・ブレイク!!》』

赤い斬撃が、その巨体を吹き飛ばした。

装甲を砕く轟音と共に、異形は訳もわからないまま地面を転がり、装甲が干渉してうまく立ち上がれないのか、じたばたともがき始める。

真希は「は……？」と間の抜けた声を漏らし、自分の前で何かを振り抜いた体勢を取っている貴丈に目を向けた。

「ギリギリセーフって感じだな」

そうして振り向き様に呟かれた言葉にハツとした真希は、「お前、大丈夫なのか……」とどこか気の抜けた声音で問うた。

「よくわかんねえけど、この通り」

貴丈はぼりぼりと頭を掻きながらそう返すと、右手に握られたドリルのような形をした剣を肩に担いだ。

知らない筈なのに、名前も、使い方もわかる、奇妙な感覚。

額を掻きながら唸った彼は「まあ、なんだ」と、ようやく立ち上がった異形へと意識を向けた。

先の一撃で装甲の一部が剥がれ、中身というべき肉の塊が顔を出している。

だが戦意は衰えていないようで、『オオオオオ！』と吼えて両腕で自分の胸を叩いた。

対する貴丈はドリル型の武器——ドリルクラツシャーを構え、持ち手の溝から小さな赤いボトルを取り出した。

デフォルメした兎のような紋様が刻まれたそれを小刻みに振りながら、真希に「後は任せろ」と告げて身構える。

言われた彼女は「ふざけんな」と悪態混じりに余裕の笑みを浮かべ、僅かに刃こぼれしている薙刀を構えた。

「一発入れないと、気がすまねえ」

「なら、行くぞー！」

彼女の言葉に意気揚々に返した彼は、振っていたボトルの蓋を開ける。

『《ラビット！》』

どこからか聞こえる、と言うよりも頭の中に直接響く陽気な声が、貴丈と真希、異形に届き、貴丈を除いた二人は何事だと身構えた。

その直後、貴丈の姿が消えた。

『っ!?!』

驚いたのか、異形がピクリと身体を揺らした瞬間、赤い風が彼の脇をすり抜けていった。

「オラッー！」

赤い残像を残して異形の背後に回った貴丈が、ドリルクラツシャーを振りかぶって思い切り叩きつける。

ギャン！と甲高い金属音が鳴り響き、火花と共に濁った血液が散る。

『ウー！』

重く、身体の芯まで響く一撃に唸った異形は、背後の貴丈に向けて乱暴に裏拳を放つが、

「おっと」

彼は気の抜けた声と共に、赤い残像を残して後ろに下がった。

彼が握る『ラビットフルボトル』がもたらす恩恵は、速度の強化。彼は残像のみを残して異形の周りを駆け回り、すれ違い様にドリルクラッシュャーで堅牢な装甲を叩き割っていく。

「ハッ！セイ！ヤッ！」

上段からの振り下ろし。

横風ぎの一閃。

締め突き。

流れるような動作で放たれたそれを避ける術はなく、異形はその巨軀を、細腕一本の力で宙に吹き飛ばされた。

「真希！」

「わかってんよー！」

ごろごろと地面を転がった異形が立ち上がった瞬間、前線に躍り出た真希が、好戦的な笑みと共に薙刀を一閃。

半月を形取る銀光が煌めき、砕かれた装甲の間に滑り込む。

火花は散らず、金属音もなく、あるのは肉を裂く鈍い音と、舞い散る血の濁った色。

『オオオオオ!?!』

途端に感じた熱と、僅かに遅れて訪れた鋭い痛みにより異形は悲鳴をあげ、殴り返さんと真希に拳を振るうが、再びの赤い風が二人の間を駆け抜けた。

振るおうとした拳が視認不可の速度で弾かれ、片膝を着くほどに体勢を崩す。

「おらよっ！」

その隙に更なる一閃が異形の肉を裂き、瞬く間に放たれた連撃が装甲の下に肉体に次々と傷を刻んでいく。

『オオッ!』

だが、異形もやられるばかりではない。

彼は片腕一本で地面を殴り付け、小規模な地震を再び発生させる。

舌打ち混じりに混じりに攻撃を中断し、両足を踏ん張った真希はちらりと貴丈へと目を向けた。

直後、異形と真希の間を駆け抜けた貴丈が彼女を抱えてその場を離

れると、異形の拳が振り下ろされた。

地面に蜘蛛の糸状の罅を入れるが、先程までのような迫力はなく、肩を揺らして苦しそうに呼吸しているようにも見える。

全身から血を流し、立ち上がる気力もなくなり始めているのに立ち上がり、貴丈と真希を潰さんと突き進む。

「……」

足を引き摺り、全身から血を噴き出しながら近づいてくる姿は、例え異形となっても痛々しい。

その姿にすつと目を細めた貴丈は、真希を下ろしながら彼女に告げる。

「あとは俺がやる」

その静かで、有無を言わせない迫力にたじろぎながらも、真希は「はっ！」と鼻を鳴らした。

「俺がやるじゃねえよ。仕留め損なったら、私がやるだけだ」

「……そう、だな」

彼女の言葉に、貴丈はどこか自嘲するような声音で返すと、ラビツトフルボトルを自分の影へと落とした。

影とボトルが触れそうになった瞬間、影から噴き出した煙がボトルを包み込んだ。

それが晴れると、そこには最初から何もなかったかのようにもなく、あるのはすぐに霧散する煙の残滓のみ。

「へえ」と興味深そうにそれを見下ろしていた真希が、影から視線を外して貴丈に目を向けると、ゆっくりと目を見開いた。

握られた彼の拳から、煙と共に白い光が漏れているのだ。

その光は段々と強まっていき、それが最高潮に達した瞬間、貴丈はぐつと拳を握る力を強めた。

直後白い光が溢れ出し、開いた彼の掌の上に何かが創られていく。

『《ハリネズミ！》』

そして先程のように陽気な声が頭の中に響くと同時に光が止み、彼の掌には小さなボトルが乗っていた。

形は先のラビツトフルボトルと違いはないが、赤かったあれとは対

照的に白く、刻まれた紋様も音声通りに針鼠を模しているようで、微妙に形が違う。

『オオオオオオオオオオオッ!!』

異形も危険を察知してか、最後の力を振り絞って咆哮をあげると、貴丈は生成した『ハリネズミフルボトル』の蓋を開けると、ドリルクラツシャーのソケットにセット。

『ハリネズミ!』

再びの音声がドリルクラツシャーから発せられ、白いエネルギーがドリル状の刃を包み込む。

エネルギーが最大まで高まるとドリルクラツシャーを両手で握り直し、駆け出す。

ラビットフルボトルをしまった以上、先程のようなスピードを出すことは出来ないが、弱りきった異形を仕留めるには十分。

「うおおおおおおお!」

『オオオオオオオオオオオ!!』

二人の雄叫びが木霊し、貴丈はドリルクラツシャーを、異形は拳を振りかぶった。

激突する瞬間、先に動いたのは異形の方だった。

異形は巨大な拳分の間合いを生かすべく、振りかぶった拳を全力をもって打ち出したのだ。

先程よりもだいぶ遅くなった貴丈を捉えるには問題なく、彼の身体を四散させるには十分な威力を秘めているのだろう。

だが、それも当たらなければ何の意味をなさない。

貴丈は眼前に迫る拳を紙一重で避け、ドリルクラツシャーを異形の腹部へと叩きつける。

ギャン!と鈍い異音が鳴り響き、異形の口からは『ヴウ……』と低い呻き声が漏れた。

「ごめんな」

貴丈はそっと目を伏せながら、異形にだけ聞こえるようにそう呟く。

自分のことを慕い、妹たちの手本となるべく、不器用ながらに頑

張っていた彼を、今から殺すのだ。

覚悟を決め、脳裏に過る弟の顔を振りきりながら、ドリルクラツシャーの持ち手に取り付けられたトリガーを引き、刃に蓄積されたエネルギーを解放。

『レディー・ゴー！ボルテック・ブレイク!!』

貴丈の表情とは対照的に、嫌にノリのいい音声が鳴り響いた。

直後、ドリル状の刃から大量の針が飛び出し、異形の全身を貫く。

真っ白な刃が血で濁った色に染まり、装甲さえも貫いた針が工場天井、床、壁さえも貫いていく。

『ヴー……』

ビクン！と身体を跳ねさせた異形は途端に力を失い、振り抜いた拳がだらりと垂れ下がる。

『兄……貴……』

ぼそりと呟かれた言葉に、貴丈はハツとして顔をあげ、目を見開いた。

異形となり、理性の欠片も感じなかったのに、殺す寸前になって話しかけてくるなど、誰が思うだろうか。

『はな……れ……ろ……っ』

異形はかろうじて動いた片手で貴丈の胸を叩いた。

見た目の割に凄まじい衝撃に怯み、後ろに数歩下がった瞬間、異形が爆散した。

地面を抉るほどの威力のそれは、禍々しいほどにどす黒い煙をばら蒔き、辺り一面を黒く染めあげる。

真希は危険を察知して離れようするが、その全てが彼女にたどり着く前に貴丈の影へと吸い込まれていき、すぐに廃工場の光景へと戻った。

煙と共に四散した血を全身に浴びた貴丈は、ぼんやりと爆散した異形がいた場所を見つめていた。

「……」

だが、今の彼にその不快感を感じる余裕はない。

返り血の生温かさも、肌に貼り付く滑り気も、どうでもいいのだ。

手に力が入らずにドリルクラツシャーを取りこぼし、カランと乾いた音が静かになった工場内に響く。

脱力するままに両膝をつき、歯茎から血が滲むほどに歯を食い縛る。

達成感はない。あるのは強烈な虚脱感と罪悪感、自己嫌悪。

化け物のままなら良かったなどと思うのは、ただの免罪符に他ならない。

——俺は、人殺し以外の何者でもない。

死ぬ間際になれば、人としての感情を取り戻せるのだろうか。

いいや、きつと取り戻したのだ。

そして、最後の力を振り絞って救ってくれた。

最後の爆発に巻き込まれていれば、こうして無事であるわけがない。

「…………ごめん。ごめんな…………」

目に涙を溜め、声を震わせながら、踞るように地面に額をつけた。

自分を助ける理由はない筈なのに。

自分を殺す理由の方が多し筈なのに。

それでも救ってくれた彼に言うのは、謝罪の言葉ではないだろう。

「ありがとう」

たった一言、彼に感謝を述べ、顔をあげる。

その表情は晴れやかとは言えず、目元を真っ赤に腫らしてはいるが、決して後ろ向きではない。

空元気だとしても、前を向こうとしているのだ。

落としたドリルクラツシャーを拾い上げ、それを杖代わりにして立ち上がる。

「大丈夫か」

そんな彼の背中に問うたのは真希だ。

薙刀を肩に担ぎながら近寄った彼女は、彼が頷いた事を確認すると、その後頭部を石突きで叩き、「ん」と声を出しながら片手を差し出す。

「…………えーと？」

いきなりの鈍痛に後頭部を擦りながら振り向いた彼は、彼女の行動の意味がわからずに首を傾げた。

彼の反応に額に青筋を浮かべた彼女は、「返せ」と告げながら更に手を前に出した。

そこでようやく意味を理解した貴丈は気まずそうに目を逸らし、ぴゅうぴゅうと下手くそな口笛を吹く。

「おい」

流石にふざけすぎたのか、真希は今にも斬りかからんばかりの迫力を込めて彼の肩を掴む。

そのまま少しずつ力を込めていき、骨が軋む嫌な音が身体から漏れ始めた。

「わかった！わかったから、一回離してくれ！」

いだだだだ！とわざとらしく痛がる彼の反応に真希は溜め息を吐き、言われた通りに手を離す。

その直後、貴丈は恐る恐るドリルクラツシャーを差し出し、それを彼女に渡した。

「……ふざけてんのか？」

差し出されるがまま、とりあえずそれを受け止った真希は一周回って冷静になったのか、落ち着いていた声音で問うた。

問われた彼は「それが、小太刀なんだ」と言いづらいそうに告げて、顔を背ける。

「は？」と不満そうに声を漏らした真希は彼の胸ぐらを掴むと、無表情のままに「説明しろ」と一言。

「俺だつてよくわかってねえんだ。なんか、気付いたら小太刀がこれになつてて……」

「なら、さっさと返せ」

「これが戻せるなら、さっきのあいつも人間に戻してる」
「……」

彼の俯きながら呟かれた言葉に、真希は言い返せずに眉を寄せた。

それを言われては反論できないと、どこか批難するような視線を彼へと向け、そしてついには諦めたのか、深々と溜め息を吐いた。

「わかった。お前には貸しがあるからな」

そして助けられたことを話題に出し、「これでチャラだ」と告げてドリルクラツシャーを差し出した。

「お前にやる。大事に使えよ」

「……いおう」

貴丈は彼女の言葉に一瞬驚いたような素振りそぶを見せるが、すぐに頷いてドリルクラツシャーを受け取った。

とりあえず差しっぱなしになっていたハリネズミフルボトルを引き抜き、ドリルクラツシャーと一緒に影に落として煙に飲み込ませる。

「……便利だな」

その姿を真希はどこか恨めしそうに言うのと、薙刀へと目を向けた。別に重いわけではないのだが、いちいち持ち歩くのが面倒ではある。

今使っているのはこれだけだが、これから増えていくとなると尚更だ。

彼に持たせて、適宜取り出してもらおうと言うのは楽ではあるが、それは彼と四六時中一緒にいるということだ。

それは彼の目的の邪魔をすることにもなるだろうし、何よりも、

——こいつも変えられたら困るよな。

彼女の心配はむしろそれであった。

小太刀をあんな訳のわからない物に変えたのだから、薙刀も他の物に変えられる可能性もある。

今度鉛筆か何かで試すかと今後の指針を決めて、踵を返した。

まだ残党もいるかもしれないからそれを見回らなければならぬが、先の異形の強さや、外にいた呪霊の様子からして、きつとあれが好き勝手に暴れていたのだろう。

大半は喰われたか、住処を変えたかして、ここで何かが起こるといふことはあるまい。

「面倒くせえけど、あがる前に一周していくか」

だが、万が一というのものもある。

確認を怠ってまた呪霊騒ぎが起きたとなれば、目覚めが悪くなる。真希はさつきと済ませようと歩き出すが、「ごぼ……っ」と何かを吐き出す音と、べちやりと湿った音が聞こえた。

弾かれるようにそちらに目を向ければ、そこには目や鼻から血を噴き出し、口からも血を吐いた貴丈の姿があった。

「あ……れ……？」

貴丈自身も予期せぬ事態だったのか、彼は自分の血で真っ赤に染まった手を見下ろすと、そのまま崩れ落ちた。

べちやりと音を立てて自分の吐いた血に被さるように倒れ、身体がピクピクと痙攣し始める。

「貴丈?! おい、どうしたー!」

真希は慌てて彼に駆け寄り、自分の身体を汚れることもいとわずに彼を担ぎ上げた。

呪術師として鍛えているとはいえ、女子高生が男子高生を持ち上げる姿は、端から見れば滑稽にさえ見える。

それは一重に彼女の特異な体質によるものだが、貴丈がそれを知るよしもない。

ぐったりとしたまま、かろうじて意識を保っている貴丈は「ま……き……?」と彼女を呼ぶが、当の彼女からは「喋んな!」と黙らされる。

彼女が駆け出し、廃工場を飛び出さん扉を蹴り破ると同時に、貴丈は意識を混濁させていく。

「おいーおい……!」と、間近から聞こえる筈の彼女の声も、随分と遠くから聞こえるような錯覚を覚えながら、彼はそのまま目を閉じた。

黒く塗りつぶされた空間。

貴丈の心のどこかにあるその場所に、少女と異形の姿があった。

二人は背中を会わせる形で座ってはいるが、少女は見るからに不機嫌そうだ。

「それじゃ、説明してもらおうかな」

『何をだ?』

そして告げられた言葉に、異形はわざとらしく肩を竦めてはぐらかす。

「お兄ちゃんが死んじやったら、そっちも困るんじやなかったの?」

『俺は壊すのは得意だが、治すのは下手でね。まあ、死にはしないだろうさ』

「……」

そして真面目半分、誤魔化し半分で告げた言葉に、少女はじと目になりながら異形を睨んだ。

『おいおい、そこは信じてくれよ』

異形は『お互いの利害は一致しているだろう?』と改めて少女に告げた。

『お前は兄を死なせたくない。俺はあいつに強くなってもらいたい。強くなれば死なないし、死なない限り強くなる』

異形はくつくつと喉の奥を揺らして楽しそうに笑うと、「むゝ」と不満そうに唇を尖らせる少女に目を向けた。

『ま、ボトルの精製法も教えてやったんだ。後は、力を取り戻すだけだな』

「その前に、死なないことを祈った方がよくない?」

『そこは、^{最強様}五条悟のご友人を信じるとしようぜ。俺たちじや、何もできん』

「それもそうだね」

はあと溜め息を吐いた少女は立ち上がり、闇の中に溶けるように消えていく。

無言でその背を見送った異形は、やれやれと言わんばかりに首を振った。

——あのガキ、何者だ……?」

本来なら、ここで一人貴丈の成長を眺めている筈が、気付けば彼女が入り込んできた。

彼女も呪術に関する才能があったのか、あるいは彼女の術式によるものか、それはわからないが……。

『まあ、精々利用させてもらおうとしよう』

フフと不気味に笑う異形は、自分の側に転がるベルトを叩いた。彼が身に付けている物に酷似しているが、黒を基調としているためかどこか地味な印象を受ける。

『まずはこいつを創る所から、だな。今のレベルじゃ、どうやっても無理だが……』

手っ取り早く強くなる方法はただ一つ。

実戦を繰り返して、修羅場を潜り抜け、自分の殻を破り続けること。呪術師となれば実戦には事欠かず、訓練と称して現代最強の名を欲しいままにしているらしい、五条悟との戦いもあるだろう。

『ここから全て見させてもらうぞ、最強様』

異形は嘲笑うような声でそう呟き、ごろりと大の字に寝そべった。

しばらく退屈ではあるが、これからの事を思えば我慢はできるし、何ならこの退屈がスパイスとなって、より刺激的な体験となる可能性もある。

『——早く強くなれ、桐生貴丈』

異形は嗤う。

未来は誰のものではないが、来る未来はほぼ決まっている。

今はただその日を待つばかりだ——。

「……知ってる天井だ」

目を覚ました貴丈は、ぼんやりと自室の天井を見つめながらそんな事を呟いた。

被せられた毛布を退かして起き上がり、腕や足、服の下にも巻かれた包帯を見つめて目を細める。

異形となった弟を倒し、撤収しようとしたところで倒れたのは覚えていない。

その後、恥ずかしながら真希に担がれた所も曖昧ではあるが覚えてはいるが、果たしてそのから何があったのか。

見た限り治療を受けて、部屋まで運ばれたというのは確かなようだが。

「今度は何日寝てたんだ……？」

ポリポリと額を掻きながら呟いた彼は、枕元に置かれたリモコンを手に取り、五条が持ってきたきり自分の所有物となっているテレビの電源を入れた。

何かしら情報がないかとチャンネルを変えていき、いくつか変えた頃、

『——月——日。お昼のニュースです』

タイミングよく流れ始めたニュース番組で止め、怪訝そうに眉を寄せる。

今しがた言われた日付は、自分が任務に出てから三日も経っていることになっているのだから当然だ。

休日なのが幸いではあるが、三日も寝込んでいたのは事実。

「最悪だ……」と呟いた貴丈は再びベッドに寝転び、流れるニュースを流し聞く。

やれ俳優が結婚しただの、逆に不倫しただの、今の政治はどうだの、昨日起きた事件の進展だの、普段であれば多少は耳を傾けるものも、今の彼にとつては縁遠い。

呪術を知り、呪霊という存在を知り、実際に命懸けで戦ったからな

のか、そちら側の情報が至極どうでもよく思えてしまう。

前なら多少は同情したり、愚痴を吐いたりしたかもしれないが、最近はその精神的に余裕はなく、今は肉体的にも余裕はない。

「……」

ポケットと天井の染みを数えながら二ユースを聞き流し、深々と溜め息を吐く。

目を覚ましたことを五条辺りに連絡すべきなのだろうがと思いつつ、それをする気力もない。

目を閉じ、ゆっくりと深呼吸をしながら考えるのは、やはり先日^{殺した}祓った弟のこと。

——あれで一人目。まだ一人目だ。

五条の話では、あの日に何人かは^{殺した}祓ったという話だが、それでもまだ数多くいる筈だ。

あと何人かまでかは知らないが、確実に一歩目は踏み出した。

——なら、あとは歩き続けるだけだよな。

一歩目を踏み出せたのなら、それを繰り返せば前には進むのだ。行き着く先が地獄だとしても、この歩みを止めるわけにはいかない。

武器も手に入れた、力の使い方も少しだが理解した。あとは上手く使いこなさなければ……。

「……寝てる場合じゃねえな」

そうと決まればと身体を起こした彼はベッドから降り、素足のまま床を踏みしめる。

欠伸を噛み殺しながら身体を伸ばし、パキパキと音をたてて背骨が伸びる感覚が心地よい。

「っし。あとは」

彼はそのまま固まった筋肉を解すように軽くストレッチを始め、「あゝ」や「うゝ」と低い呻き声が口から漏れる。

僅かな痛みを伴ったそれは、まだ眠気が残る頭に対しての気付けには丁度よい。

それも一通り終わるとパン！と鋭い音をたてて頬を叩き、その場に

しやがみこむ。

影に手を触れればそこから煙が溢れだし、その煙の中に手を突っ込んだ。

本来なら床に触れる筈の腕は、肘の辺りまで煙の中に入り込み、指先が何かに触れる。

それを掴んで引つ張り出せば、出てきたのはデフォルメされた兎を模した紋様が刻まれた小さなボトル。

先の戦闘でもお世話になったラビットフルボトルを振りながら、机に置かれた制服に目を向ける。

丁寧に畳まれたそれは、修繕ものなのか、新調されたものなのか、どちらなのかはわからないが、どちらにせよないよりはましだと言うものの。

手早くその袖に手を通し、靴を履く。

数度爪先で床を叩いて具合を確かめると、付けっぱなしになっていたテレビを消そうとリモコンを手に取り、さっさと電源を切る。

それと同時にラビットフルボトルを振る手を止め、蓋を開けた。

『《ラビット!》』

耳ではなく、頭の中に直接響く陽気な音声。

ボトルから溢れた赤い光が貴丈の身体を包み込み、途端に身体が軽くなる。

その場で軽く数度跳び、頭が天井に当たるほどの高さまで跳べたことを確認すればすぐに着地。

術式——と呼んでいいかはわからないが——の具合もいいことを確認すれば、すぐに蓋を閉めて能力上昇を解除。

とりあえず、五条かその他の先生の挨拶でもとドアノブに手をかけた瞬間、ひとりでにノブが回り、勢いよく扉が開いた。

ノブを掴んでいたことが災いして身体を前に引つ張られた貴丈は「うお!」と声を漏らす。

普段なら踏ん張ることも出来ただろうが、三日ほど寝込んでいた身体には少々辛いようで、反射的に出掛けた右足も床に引つ掛かる。

ぎよつと目を見開いた彼はそのまま身体を傾け、衝撃に備えて身体

を強張らせるが、ぼふんと何か柔らかい物に顔を埋める結果となった。

「……？」

全体重を掛けてぶつかつたと言っても良かったが、その何かは一切ぶれずに受け止めた辺り、さながら壁のようではある。

だがこの柔らかさは何だと眉を寄せた貴丈は、ゆつくりと顔をあげた。

そして、目を見開いたまま顔を青くした。

「……」

無言で見下ろしてくる、さながら養豚場の豚を見るような冷たい視線。

いつもと違い眼鏡をかけていないが、その分直に感じる視線の鋭さは相当なもの。

見下ろされる位置からして、顔を埋めた柔らかなものはどうやら彼女の胸だったらしい。

休日だからか制服ではなく私服姿なのだが、それはどうでもいいだろう。

固まる彼を他所に、見舞いでもと彼の部屋を訪れた真希は、自分の胸に顔を埋めて真っ青になっている彼の表情をじっと睨みながら、ゆつくりと拳を振り上げる。

そして、貴丈は変えようのない事実を理解した。

——俺、死んだ。

「あの、ごめ——」

直後彼の謝罪の言葉を掻き消す凄まじい快音が、呪術高专男子寮に響き渡った。

「で、申し開きはあるか」

どかりと彼のベッドに腰を下ろした真希は、床に正座している貴丈を睨みながらそう問いかけた。

頭に大きなたん瘤を作った彼は言い訳をするつもりもないのか、

「ナニモナイデス」と片言で言うと、怒られた子供のように項垂れる。確かに自分が悪い。悪いのだが、病み上がりというか、仮にも重症だった自分に、思いつきり拳骨をかましてくるとはいかがなものか。「——とか、思ってたそうだな」

「つ?!いや、全く、全然?」

何ともなしに思ったことを読まれた貴丈はぎよつと目を見開き、狼狽しながらもどうにか誤魔化そうとするが、彼女には無意味だ。

さながら犯人を追い詰める検察官のような、むしろ状況からして勝ちを確信しているからか、余計にたちの悪い視線を彼に向ける。

が、どんどんと萎縮していく彼の姿に、流石にやりすぎと思ったのか、真希は「まあいい」と告げて「足崩せ」と指示。

「本当、申し訳ない」と改めて彼女に謝罪した彼は痺れる足をゆっくりと崩し、そのまま床の上にあぐらをかいた。

そして訪れるのは、痛いほどの静寂だ。

片や見舞いに来たのに胸にダイブされた被害者。

片や同級生の、しかも女性の胸にダイブした加害者。

流れる空気が険悪になるのは、当然のことだ。

何か話題はと思考をフル回転させた貴丈は、じつと彼女の顔を見つめ、「そう言えば」と前置きしてから彼女に問うた。

「今さらだが、眼鏡はどうしたんだ?」

「あ?ああ、あれか」

彼の問いを受けた真希は、ないとわかっていながら眼鏡の位置を直すように鼻を撫でると、「今は必要ねえからな」と肩を竦めた。

だが、その一言は貴丈に更なる疑問を植え付ける。

初対面の時も思ったことだが、あの眼鏡はなんなのか。

呪術師として先輩であり、呪霊とのインファイトを繰り広げる真希が、明らかに邪魔になるものを身につける理由がわからない。

「前から気になってたんだが」

そして幸いにも今は二人きりだ。

授業がある日だと聞くタイミングも限られているらしく、答えたくないと言われても自分と彼女の空気が多少悪くなるだけ。

変なところで思い切りがいい貴丈は、「あの眼鏡、なんなんだ？」と
単刀直入に問いかけた。

その問いに真希は何かを思慮するように僅かに目を背け、深々と溜
め息を吐いた。

「言いたくないなら、別に無理に聞かねえけど」

そして貴丈が一応の気遣いとしてそう言うが、真希は「いや」と返
して心底面倒臭そうに説明を始める。

「ウチ——禪院家は、御三家ごさんけって呼ばれるエリート呪術師の家系なん
だよ」

「ご、御三家……っ？」

だがその鼻を折る形で貴丈が挙手し、恐る恐ると言った様子で彼女
に問うた。

呪術業界に首を突っ込んで一週間足らず。

彼らにとっての常識も、彼にとっては未知の言語を聞かされている
よう。

「そこからか」とじと目で彼を睨んだ真希は再び溜め息を吐き、
「しゃーねーな」と悪態混じりに言う。

「禪院。加茂かも。五条。この三つだ。この業界でその名字の奴がいた
ら、まあ気を付けろ」

難癖付けられても面倒くせーからなと言う辺り、彼女自身何があつ
たのか、それとも何かあるのか、それは定かではない。

だが実際問題、長い歴史を持つその御三家の価値観というものは酷
く歪だ。

御三家に産まれたからには、呪術師となるのが当たり前。

術式を持たなければ、例え当主の子息であろうと侮蔑の対象とさ
れ、術式を持っていれば愛人の子供であろうと優遇される。

長きに渡る伝統や血筋を重んじるばかりで、人として失ってはなら
ないものを無くした、人以前に呪術師であることを重要視する一族た
ち。

関わらぬが吉ではあるが、それなりに狭い呪術師の界限において、
膨大な人脈と権力を誇る彼らとは、接触しないほうが難しい。

それが御三家なのだが、物事には必ず例外というものがある。

「五条。……ってことは、先生って意外といい身分なのか？」

「悟のことか？あいつ、五条家の当主だぞ」

「……」

その例外について貴丈が疑問を呟くと、真希が平然とした口調で答えた。

彼女が五条を呼び捨てにした事は気になるが、お互いに件の御三家出身という都合上、生徒と教師の関係になる以前から顔見知りだった可能性もある。

あるいは、単純に相手を呼び捨てするのが真希の癖なのか。

そんな思考を頭の片隅で終えた貴丈は、あの自由人である五条が、御三家の一つの出身にしてその当主であるという事実にゆっくりと眉を寄せ、天井を仰いだ。

どこか同情するような、知りたくはなかったことを知ったかのような、少なくともよい表情ではあるまい。

「言いたいことはわかる」と真希が言うと、貴丈は「五条家の人たち、大丈夫なのか？」と本音を漏らした。

あの自由という言葉を体現する男が当主など、自分が五条家の人間なら胃に穴が開く。間違いない。

貴丈は無言で五条家の人たちの冥福を祈りながら、「真希は禪院家出身なんだよな？」と話を本題へと戻した。

「ああ。それで貴丈、呪術師に必要な最低限の素質って分かるか」

「……呪術師になって一週間の男がわかると思うか？」

彼女の問いに貴丈は心底真面目な面持ちで問い返すと、彼女は「まあ、そうだよな」と目を細めた。

もつと言えば三日も寝ていた為、体感的には呪術師になって一週間も経っていないのだが、それを気にする二人ではない。

『呪いが見えること』だ。一般人でも死に際とかなら見えるらしいが、私はあの眼鏡がねえと呪いが見えねえ」

「呪いが見えること……。言われてみればそうだな」

彼女の言葉に五条なるほどと頷く貴丈は、見える自分はまだ幸運な

のかと思うが、この状況に至る経緯を思い出して決して幸運ではないと判断する。

「で、お前に貸したあれを含めて、私の呪具は呪力が込められているもんだ。だから、呪術だの術式だのは聞くな」

「わかった」

「まあ、おかげで家出られたけどな！飯は不味いし、部屋は狭えし、知らねえオツサンがうろついてっし、あと知っててもムカつく連中ばかりだったし、もう最悪だったわ！」

そして鬱憤が溜まりに溜まっていたのか、様々な愚痴が彼女の口から飛び出した。

狼狽えながらも「お、おう……」と応じた貴丈は、けれど疑問は尽きずに更に口が動く。

「なら、その禪院家とか、御三家に関わらないで生きることも出来たんじゃないやねえのか？」

貴丈の疑問はまさにそれだった。

眼鏡なしでは呪霊が見えず、呪具がなければ祓うことも出来ないハンは、呪術師にとっては致命的。

そんなものを背負いながら、文字通り命懸けの戦いに身を投じるなど、言い方が悪いが正気の沙汰ではあるまい。

まあ呪術師にまともな感性をした人間が何人いるかという話にもなるが、それはそれ、これはこれだ。

彼の言葉に真希は不敵に笑いながら、自信たっぷりな声音で告げる。

「確かにそうかもしれないけど、私は性格悪いかんな。一級術師になって出戻りや、家の連中に吠え面かかせられんたる」

そこまで言い切った彼女は一本指を立て、本当の目的を口にした。

「——それで、内側から禪院家ぶっ壊してやる」

その笑顔と、ある意味彼女の夢とも言えるそれは、今の貴丈にとっては眩しいものだ。

夢もなく、あるのは地獄への片道切符。

「……すごいな、お前は」

そしてこぼれた言葉は、隠す気もない本心からだ。

未来はあれど限られていて、その道は家族の血によつて彩られる自分とは違う。

困難は多いだろうが、確かな何かを残せる未来。

真希は「んだよ」と彼の言葉に気味悪がるが、彼がほんの僅かに笑みを浮かべていることに気付き、目を瞬かせた。

驚いたり、悲しんだりしている彼は見たが、こうして笑っている姿を見るのは初めてだ。

もつともまだ二日ほどしか顔を合わせていないが。

「俺もお前みたいなのに、真つ直ぐ生きられりや良かったのに……」

「私みたいにな……？」

「ああ。強くて、真つ直ぐで、自分の決めたことを貫き通せる奴に、なれりやよかった」

「……っ」

彼の言葉に真希は何か思うことがあったのか、言葉を詰まらせた。禪院家は御三家の中でも、異常なほどに術式へと拘りが強い。

——禪院家に非ずんば呪術師に非ず 呪術師に非ずんば人に非ず。

そんな言葉がいつからか語られ、今でも遵守されていると言え、それを痛感させられるだろう。

そんな禪院家で、呪いが見えず、術式も持たない女兒が産まれたとなれば、侮蔑の度合いも段違いであっただろう。

失敗の手本として後ろ指を指されていたとしても、何ら不思議ではない。

だからと言うわけではないが、面と向かって「すごい」だの「お前みたいになりたい」などと言われるのは慣れていない。

その照れを隠すように僅かに顔を顔を背けるが、すぐにいつも通りの表情と声音を取り戻して告げた。

「なれりやよかったじゃねえだろ。今からでもやれ」

「今からでもって言ってもな」と困り顔を浮かべる貴丈に、真希は「簡単だろ」と返してベッドから降り、床であぐらをかく彼に視線を合わせる。

「変わればいいんだよ。歯あ食い縛って、舐めんなって唾吐いて、大っ嫌いな自分から、変わればいい」

「……」

彼女の言葉は、いつかに五条に言われたものと重なる。

ただあの時と違い、妙に響いてくるのは心境の変化のせいか、あるいは単に友人からの言葉だからか。

「そうだな」と肩を竦めた貴丈は、ふと五条の言葉も思い出し、「なら」と呟いて彼女に告げた。

「お前の夢に協力させてくれ。俺に夢はない。けどな、誰かの夢を守ることはできる」

「……なんで、お前に、助けられなきゃいけないんだ。一人でやるから意味があんだろうが馬鹿」

「誰が馬鹿だ……っ！」

格好つけたかった訳ではないが、どうにか絞り出した言葉をバツサリ切られた貴丈は、溢れた怒気を抑えながら言い返す。

「ここにお前と私以外誰がなんだよ」

対する真希は彼を煽るように笑いながらそう問うと、がたりと部屋の扉が揺れた。

「ん……？」と声を合わせてそちらに視線を向けた二人が見たのは、僅かに開いた扉の隙間からこちらを覗いてくる二対の瞳。

ガラス球のような黒い瞳と、澄んだ紫色をした瞳。

扉向こうの二人は何やら楽しそうにニヤニヤと笑っていたようだが、真希と貴丈に気付かれたとわかるや「やべ、逃げるぞ!」、「しやけ!」と話してその場から立ち去ろうとした。

その直後に真希は動いた。

なぜ動いたのか、またあいつらかといつものように笑い飛ばさなかったのか、その理由は彼女自身も知る由もない。

だが今の彼女はとりあえずさっきの笑い顔がムカついたからと理由を後付けし、手加減するつもりはないらしい。

扉を豪快に蹴り抜き、逃げようとしていた一人を扉ごと蹴り飛ばす。

「ふお!？」

蹴られた勢いそのまま宙を舞ったパンダは天井、床の順に叩きつけられてダウン。

逃げ遅れた狗巻は、誤解だと言わんばかりに「おかか! おかか!」と身ぶり手振りを交えて真希を説得しようとするが、

「ふん!」

「——っ!？」

それを無視する形で、拳骨が振り下ろされた。

「それで、どういう状況?」

任務から戻り、昏睡状態だった教え子の様子を見に来た五条は、眼前に広がる光景に困惑の表情を浮かべていた。

頭が凹み、床に這いつくばっているパンダ。

頭に大きなたん瘤をつくり、今にも泣き出しそうになっている狗巻。

不機嫌オーラ全開の真希。

そしていつの間にもやら目を覚まし、真希に伸されたであろう二人のために、氷やら何やらを準備している貴丈。

「見りゃわかんだろ」

訳もわからずに求めた説明は、真希の手でばっさり切り捨てられた。

「え〜」と不満げに声を漏らして肩を竦めた五条は貴丈に目を向け、

「それで、大丈夫?」と問いかけた。

「問題ないです」と返した彼は狗巻の頭に氷を詰めた袋を置き、「俺は、ですけど」と付け加えた。

「それは何よりだけど、何があつたの?」

そして改めて投げ掛けた問いかけには、床に伏しているパンダが答える。

「桐生の部屋からすごい音がしたんで見に来たら、部屋にいた真希に蹴り飛ばされた」

「しゃけ」

「まあ、言葉にするとそうなるよな」

「それだと私が悪者じゃねえか!」

パンダ、狗巻、貴丈、真希の順で発せられた言葉に、五条は「仲がよさそうだなにより」と返して空いている貴丈用の勉強椅子に腰かけた。

「貴丈はあとで硝子にお礼言っておきなよ?無理やり叩き起こして治療させたんだから」

「硝子……うって、誰だ」

貴丈はしれつと真希の隣に腰を下ろしながら問うと、彼女はその位置取りに対しては何も言わずに彼に説明した。

「家入硝子。悟の同期で、反転術式が使える術師」

「反転術式は、あの怪我を治せるってやつだよな?」

「その通り。エクセレントそれは覚えてたか」

彼女の言葉に、さながら教えを乞う生徒のように返した貴丈の姿に、五条はサムズアップしながら笑みを浮かべた。

「それと真希から聞いたけど、貴丈も術式を使ったんだって?どんな感じのやつ?」

「よくわかんないです」

五条からの問いかけに貴丈は首を傾げ、手元に煙を産み出してラビットフルボトルを出現させた。

初見のパンダは「お」と声を漏らし、狗巻も「めんたいこ」と興味深そうにそれを見る。

「これを振って蓋を開けると、速く動けます」

「それだけ?」

「……あと、真希の呪具を一本変なものに変えました」

ちらちらと真希の様子を見ながら呟いた彼は、自分の影から発生させた煙に手を突っ込み、ドリルクラッシャーを引っ張り出す。

「……確かに、変だね」

真希が渡した小太刀が、明らかに刃渡りから全長に至る全てが変わった、ドリル状の何かに変わるなど思うまい。

込められた呪力は格段に上がっているため、呪具としての等級も一つか二つ上がっているようにさえ見える。

だが言葉で説明され、こうして現物を見せられても、納得できる者は少ない筈だ。

「ふうん」と顎に手をやり、楽しそうに微笑む五条は「もう一つあるでしょ」と更に催促。

「……少し離れてもらっても？」

それに合点がいった貴丈がそう言うと、伸びていたパンダもゴロゴロと床を転がりながら部屋の端まで行くと、他三人もそちらに寄った。

それを確認した貴丈は深呼吸すると、祈るように両手を胸の前で組み、目を閉じて意識を集中。

全身を巡る呪力を両手に包まれた空間に集め、脳裏に過る曖昧な影を、明確な形として形作っていく。

組んだ両手の隙間から煙がこぼれ、その中から茶色の光が溢れ出す。

「おお」と声を漏らす五条を無視し、両手を力強く握りこんだ瞬間、強烈な光が五人の視界を塗り潰す。

『ゴリラ！』

そして頭の中に直接響く音声が発せられると同時に光が止むと、貴丈の手には茶色のフルボトルが握られていた。

デフォルメされたゴリラの紋様が刻まれたそれは、先の音声通りに『ゴリラフルボトル』だ。

ホツと息を吐く貴丈を見つめながら、五条は「なるほど」と呟いて彼のフルボトルに目を向けた。

「構築術式。でもそれじゃ武器の方が説明つかない。物質の構築と、再構築？そんな術式、聞いたことないな」

「先生？五条先生？」

「二つの術式を持っている？それとも一つ大きな術式の中に、その二つが内包されている？うーん、どうなんだろう」

「先生？センサー！」

「ん？ああ、ごめんごめん。貴丈の術式について考えてた」

ぼそぼそと独り言を続けていた五条の肩を揺すって意識を戻した貴丈は、「それで、どうです？」と改めて問うた。

「うん、そうだね。まず言えるのは、君ができることは大きく分けて二つあること。構築術式は知らないよね？」

「専門用語を出さないでください」

五条の言葉に貴丈は肩を落とし、パンダに「知ってるか？」と問いかけた。

「なんで俺？」と返すパンダだが、これも先達の特権かとどこか先輩風を吹かせながら言う。

「まあ、簡単に言えば呪力を使って物を創る術式だ。創ったものは、術式を解いても消えないってのが特徴つちや特徴だが、その分呪力消費が馬鹿にならないってのは聞いたことがある」

「さっすがパンダ。その通りだよ」

パンダの説明に空中で花丸を描いた五条は、貴丈に向けて「それが一つ目だね」と告げて更に説明を続行。

「もう一つは再構築術式とでも呼ぼうか、無機物、有機物問わず、物をまた別の物への作り替える術式かな。そして、変えた物は戻せない」

これに呪力を込めてみると貴丈に鉛筆を渡し、言われるがままに呪力を込めていくと、ただの鉛筆が異様に伸び、ネジ曲がり、さながら孫の手のような形状へと変化した。

これ幸いと背中を掻き始める貴丈に、五条は「戻してごらん」と言うが、彼は困り顔で孫の手を見つめ、数度瞬き。

込めた呪力を他に移す、あるいは自分に戻すというのは、果たしてどうやるのだろうか。

「えっと……う？」

首を傾げる貴丈に五条は「だよね」と返して孫の手を受け取った。

呪力により、無理やり形を変えられたものがそのまま安定し、さながら最初から呪力を込められた孫の手——つまり呪具であったかのよう。

貴丈の手を離れても壊れる様子も、他の何かに変わる様子も、元に

戻る様子もない。

一から作り替えるというよりは、その設計図に至る部分から書き換えたような変化の仕方。

「この武器もしかり、君の被害者たち——上のおじいちゃんたちから『変異型呪霊』って呼ばれ始めた人たちも、この術式のせいかな」

こんな術式は長い歴史の中には存在せず、所持者が居たとすればもつと話題になる筈だ。

——やりようによっては、呪具を簡単に量産できるってことでしょ。

上の連中が欲しがりそうだと胸中で溜め息を吐いた五条は、孫の手で背中を掻きながら、『変異型呪霊』という単語で酷く不機嫌そうになった貴丈に目を向けた。

家族だった人たちを、いよいよをもって呪霊扱いされるというのは、覚悟してはいたのだろくがやはり来るものがあるのだろう。

だが五条は気遣うことなく、むしろ話題をすり替えるように彼に告げた。

「その応用で怪我を治したりもできるかもだけど、結局倒れちゃったら意味ないよね」

そして一度は倒れた彼が立ち上がった理由を推察し、はははと苦笑。

覚えのある貴丈は「そつすね」と気のない返事をし、それに助けられた真希は居心地悪そうに目を背ける。

「そのちっちゃいボトルみたいなの、もつと創れたりする？今の限界を知って意味で、やってもらいたいんだけど」

五条が出した指示に貴丈は「……やってみます」と頷くと、ゴリラフルボトルを煙に呑み込ませると再び集中。

「おい、あんまり無理すんなよ」

「しゅけ」

「さつきも言ったが、構築術式ってのは馬鹿みたいに呪力を食うからな？」

真希、狗巻、パンダがそれぞれ心配の声をあげるが、貴丈は「大丈夫

夫」と返して更に意識を研ぎ澄ませた。

それから数時間。外も暗くなってくる時間帯。

地獄のノンストップポトル生成を行った貴丈は、

「疲れたし、眠いし、寝るし……」

完全グロッキーな状態で、ベッドに寝転がっていた。

「大丈夫か？」

「めんたいこ？」

「毛布かけとくぞ」

真希と狗巻は純粹に心配し、パンダが気を使って毛布を被せる。

寝るしと言ったものの、まだ四人が部屋にいるため眠るつもりはなのか、薄く開いた瞳がじつと五条を睨んでいた。

「なんやかんやで二十本。うーん、大量だね」

机にずらりと並べられたフルポトル群を見下ろし、同時に気付く。

——彼が祓つた一体を加えれば、僕らがあの日以降に祓つた被害者の数と一致する。

貴丈が変異させた被害者たち——変異型呪霊と、フルポトルの数が一致。

呪力量による限界や、一日で創れる分の上限という可能性もあるが、この一致が偶然とは思えない。

倒した分だけ、この呪力の塊とも言える物は増えていくと考えるのが適切だろう。

「これからが楽しみだね」

五条が抑えきれない好奇心に笑みを浮かべ、貴丈に目を向けると、

「……起こしたら、刻む」

強烈な殺意を向けられた。

眠気と戦っているのか血走った瞳がこちらを睨み、背後では影が揺らめいて煙が漏れている。

ポンと手を叩いた五条は「それじゃ、撤収！」と貴丈を除いた一年三人に向けて言うと、三人はそれぞれ返事をしてそそくさと退室。

去り際に「ちやんと寝ろよ」とか、「お疲れさん」とか、「たかな」など、様々な言葉が投げ掛けられる。

最後に残った五条は「また明日ね」と告げて退室。

「……」

ギリギリ保っていた意識で返した貴丈はどうか手を振って彼らを見送ると、そのままベッドに身体を沈めて眠りに落ちた。

夢も見ないほどに熟睡できたのは、彼にとっては幸運であっただろう。

男子たちと別れ、一人呪術高専女子寮の自室に戻ってきた真希は、扉に寄りかかりながら溜め息を吐いた。

「なに認められた気になってんだよ、私は……っ！」

思い起こされるのは貴丈の言葉だ。

呪術も知らなかった男に認められて何になる。

自分が見返したいのは禪院家であり、貴丈にどうこう言われたところで何にもならない。

ならないの、だが……。

「……」

胸の中を渦巻く、もやもやとした何か。

その正体を知らない真希は「ああ、くそ！」と声をあげて乱暴に頭を搔くと、頭を冷やそうと着替えをふん掴み、寮の大浴場を目指して部屋を飛び出す。

——とりあえず、貴丈あいつはもう一発ぶん殴る。

貴丈からすれば迷惑極まりないことを、真希は心に誓うのだった。

貴丈が目覚め、二十本のフルボトルを生成した翌日。

呪術高専の校庭。

普段なら生徒らが模擬戦に多用するその場所も、午前中の、朝一番となれば人も少ない。

朝露が辺りを包み、僅かな肌寒さも感じるそこには、既に二つの人影があつた。

一人は自然体のままに立つ五条。もう一人はドリルクラッシュヤーを構えた貴丈だ。

渡り廊下から校庭に続く石造りの階段には、二人を見守るようにパ ندا、狗巻、真希の三人がたむろしており、やいやいと野次が飛んて来る。

「さて朝一で悪いんだけど、キミの能力を確かめたくてね」

「問題ないです。むしろ俺も試しておきたいですから」

それらを聞き流した五条の謝罪混じりの言葉に、貴丈は一応の気遣いとしてそう返し、冗談半分にそう告げた。

「ならよかった」と笑った五条は、じつとドリルクラッシュヤーを見つめながら言う。

「それに昨日の小っこいのを填めて使うんでしょ？僕が相手をしてあげるから、色々試してみな」

コキコキと首を鳴らし、軽く伸びをしながら告げた言葉に、貴丈は「おす」と返して手元に煙を発生させる。

とりあえず生成した順にゴリラフルボトルを取り出した彼は、ふとした疑問を五条にぶつける。

「……あの、当てていいんですか？」

彼の心配は言葉の通りだ。

ドリルクラッシュヤーはその形状の都合上、峰打ちなんて生半可なことはできず、ボトルをセットしての使用となれば、相手が格上であろうと粉微塵にできる。

事実ハリネズミフルボトルを使用した結果、あの防御とパワー特化

と思われる変異型呪霊は内側から滅多刺しになったのだから、彼の心配は当然のことだ。

だが五条は首を傾げ、「なに言ってるの?」と心底不思議そうな声音で貴丈に問うた。

「いや、当たれば死にますよ?」

「うん。だから、なに言ってるの?」

「……当たらなければどうってことはないってことですか?」

「いや、半分はそうだけど、そういう意味じゃないんだけど」

「……?」

全くと言っているいいほどに二人の会話は噛み合わず、最終的にはお互いに首を傾げる始末。

「えっと……?」と声を漏らす貴丈を見つめながら、五条はハツとして彼に問うた。

「キミに僕の術式の説明ってした?」

「いや、全く」

その問いに貴丈が間髪入れずに返すと、五条は「そっか」と一人納得しながらうんうんと頷き始める。

「ちよつとこつちおいで」

「……?うす」

五条の指示に疑問符混じりに応じた貴丈は彼に駆け寄ると、五条は不意に手を前に出した。

「触ってみて」

「……これになんの意味が?」

「いいから。言葉でするよりもこの方が早い」

五条の行動の意味が何一つとして理解できない貴丈が問うが、五条はそんな彼を急かすように手招き。

訳もわからないまま五条の手に触れようと手を伸ばした貴丈は、次の瞬間に目を見開いた。

二人の手が触れそうになった直前に、見えない何かによって遮られたからだ。

引く分は問題ないが、押してみてもびくともせず、さながら見えな

い壁があるかのよう。

「え……」と声を漏らす貴丈に、五条はその反応を待ってたと言わんばかりに楽しそうに笑いながら言う。

「僕の術式は『無下限呪術』って言うんだ。今の状況を簡単に言うと、見えないだけで僕とキミの間には無限がある」

「……？触ってる感じはあるんですけど」

「まあ、そっちは触ってるつもりでも、僕には届いてないって思えばいいよ。呪術初心者の貴丈には、見えないバリアがあるって思えば簡単」

「それなら、何となく……？」

「僕の呪術は、どこにでもある無限を現実を持ってきてるってだけなんだけど、まあ詳しい話はおいおいと。今はキミの方がメインなんだし」

朝一番で回りきっていない貴丈の脳は、五条の言葉を全ては把握しかねていた。

五条の術式は見えない無限を具現化させる。

無限である以上近づくことはできず、無論触れることもできない。

その無限が見えない分、いつ無限があり、いつ無限がないのか判別もできず、攻めようにも攻められない。

もつと言えば、攻めたところで無限を張られるだろうから意味もない。

まあ、詰まる所。

「理不尽じゃね？」

「そう言う人もいるよね」

貴丈がぼろりと漏らした本音に、五条は肩を竦めてくつくつとおかしそうに笑う。

術式を知らなければまず対処はできず、知ったところで対処法がわからなければ意味もない。

「ま、そう言うわけだから思いっきりぶつかっていいよ。貴丈の術式なら、もしかしたら破れるかもしれないし」

「破り方とかあるんすか？」

「あるけど、それもまた今度。結構難しいからね」

はい、離れてと言われた貴丈は手を下ろし、後ろ歩きで元の位置に戻る。

攻撃が当たらない術式。今の説明ではそれだけだが、おそらく攻撃にも応用が利くのだろう。

威力も射程もわからないその攻撃を、今はしてくれないことを祈るばかりだが、目の前の男ならやりかねない。

「あ、ごめくん」とか言いながら、こちらを吹き飛ばす幻覚を見た貴丈は頭を振ってそれを追い出すと、改めてドリルクラッシュヤーを構えた。

「さて、いつでも、どこからでも、何でもいいよ」

そして相対する最強は彼を迎え入れるように両腕を広げると、不敵な笑みを浮かべる。

貴丈は手元に煙を発生させて茶色のフルボトルを取り出すと、それを数度振って蓋を開けた。

『《ゴリラ！》』

二人の頭に響く陽気な声。

その言葉の通りに取り出されたのはゴリラフルボトルだ。

それをドリルクラッシュヤーのソケットにセットすれば、再び『《ゴリラ！》』と陽気な音声が二人の頭に響き、ドリル状の刃にボトルから溢れだした茶色のエネルギーが集まっていく。

肌を感じる呪力の高まりと、それを暴発させることなく刃に纏わせる貴丈の技量に、五条は「いいね」と声を漏らした。

「いきますー！」

貴丈は宣言と共にドリルクラッシュヤーのトリガーを引き、刃に溜めたエネルギーを解放。

『《レディー・ゴー！ボルテック・ブレイク！》』

ドリルクラッシュヤーから陽気で、けれど威勢のいい声が鳴り響き、それを合図に貴丈が走り出す。

五条は「ドンとこーい」と無防備に突っ立っているわけだが、先の説明通りならこの一撃も当たりはしない。

故に貴丈の脳内から、手加減と容赦の二つが抜け落ち、瞳にも殺意が宿る。

割りとは本気の殺意を感じた五条が「あれ」と呟いたのも束の間、貴丈はドリルクラツシャーを大上段に構え、

「オオオラアアアアアアッ!!」

雄叫びと共に振り下ろした。

刃に纏っていた茶色のエネルギーが巨大な拳を形作り、五条の脳天に向かって振り下ろされる。

「へえ、すごいね」

それを見上げた五条はじつとそれを見つめて観察した直後、巨大な拳が彼に叩きつけられた。

爆弾が目の前で爆発したような凄まじい轟音と衝撃が校庭を駆け抜け、それなりに距離のある校舎の窓が、ガタガタと音をたてて揺れるほど。

遠くにいた一年三人もそれぞれ感嘆にも似た声を漏らしながら、舞上がった砂塵を鬱陶しそうに眉を寄せる。

砂塵に包まれた貴丈は、自分で生み出した衝撃に目眩を覚えながら、小さく舌打ちを漏らす。

「聞こえてるよ」と目の前から間の抜けた声が聞こえ、パチン!と指を鳴らす音と共にどこからか吹いた風で砂塵が晴れていく。

「うん。ぼくじゃなきゃ、死んでるね」

そして姿を現した五条は、頭に当たる寸前で止まったドリルクラツシャーと拳型のエネルギー体を見上げた。

彼が足をつけていた地面には蜘蛛の巣状の罅が入り、彼がいなければ挟れてクレーターになっていたことだろう。

「威力は十分。あとは当てるだけ」

そして目の前で睨んでくる貴丈に助言すると、彼は素早くその場から飛び退いてドリルクラツシャーのソケットからゴリラフルボトルを引き抜く。

それを煙に飲み込ませ、代わりに取り出したのは黄土色のフルボトル。

刻まれた紋様は一本角の昆虫。

数度それを振り、蓋を開けて響く音声は『《カブトムシ！》』。

カブトムシフルボトルをドリルクラツシャーにセットすれば、黄土色のエネルギーが刃を包む。

フーツと深く息を吐いた貴丈はそれに合わせて腰を落とし、地面と水平になるようにドリルクラツシャーを構える。

見るからに刺突技のようだが、五条は真正面から受け止める姿勢を崩さない。

エネルギーが限界まで高まり、バチバチとスパークし始めると、貴丈はトリガーを引いた。

『《レディー・ゴー！ボルテック・ブレイク！》』

先程と同じ音声ドリルクラツシャーから発せられ、それを合図に真っ直ぐに突き出す。

放たれた黄土色のエネルギーはカブトムシの角のように先端が湾曲し、数本に枝分かれしている。

「左右に避けようとすれば、逆に当たるって感じかな」

迫るそれを冷静に分析した五条は相変わらず避ける素振りを見せず、彼を貫かんとしたエネルギー体はやはりと言うべきか彼に当たる直前に受け止められた。

「はっ！」

貴丈はそれが何だと言わんばかりに、ドリルクラツシャーを真横に振り抜いた。

その動きに合わせてエネルギー刃は横薙ぎに振り抜かれ、棒立ちの五条に襲いかかるが、やはり当たる寸前で受け止められる。

「どちらかと言えば間合いの延長。うん、なるほど」

うんうんと頷きながら呟いた五条は「はい、次！」と貴丈を急かした。

まるで新しい玩具を前にはしやぐ子供のようだが、貴丈はそれを気にする素振りはない。

頭の中に浮かぶ選択肢を全て検討しながら、ふと脳裏に過ったドリルクラツシャーの使い方を試そうと手を動かす。

カブトムシフルボトルをソケットから抜くと、何の躊躇いもなくドリルクラッシュャーの刃を握った。

そのまま力任せに柄から刃を取り外した貴丈は、切っ先の方から柄へと差し込む。

「……なにそれ」

端から見ればラツパのようにも見える不格好さだが、嫌な予感が五条の脳裏を過る。

確かに遠目からラツパなのだが、見方によっては銃とも言えるだろう。

そして、彼の予想はまさにその通りであった。

ドリルクラッシュャーは刃を取り外し、向きを変えて取り付けることで銃としても扱えるのだ。

彼の悪寒を他所に貴丈は次のフルボトルを取り出し、数度振ってから蓋を開ける。

『《ガトリング!》』

鋼を思わせる鈍い輝きを放つそれは、音声通りにガトリングフルボトル。

今まで扱ってきた、ラビット、ハリネズミ、ゴリラ、カブトムシとは違う無機物であり、もつと言えば兵器の名を冠するフルボトル。

「急に殺意高いねえ!」

その音声が聞こえていた五条はそうツツコミを入れるが、貴丈は軽く肩を竦めるのみ。

ガンモードへと切り替えたドリルクラッシュャーにガトリングフルボトルをセットすれば、銃口に鋼色の輝きが集まっていく。

「ちゃんと防いでくださいよ!」

流星に心配になった貴丈が声を張り上げると、五条は「お任せあれ!」とお茶らけた声音で返す。

それと同時にトリガーを引けば、

『《レディー・ゴー!ボルテック・ブレイク!》』

いつもの音声と共に、銃口から数多のエネルギー弾が吐き出され、雨あられのように五条へと殺到した。

「ほい」

だが、それも五条には届かない。

当たる間際で無限に阻まれたエネルギー弾は、次々と放たれる後続のエネルギー弾と当たって相殺。小爆発を繰り返す。

ドドドドドドドドドド！と小さな爆発が連続で起こる奇妙な音を聞きながら、貴丈は真紅のフルボトルを取り出す。

片手でトリガーを引きながら、もう片方の手でフルボトルを振り、蓋を開ける。

『《消防車！》』

そして頭に響くのは突然の働く車。

僅かにこけかける貴丈だが、構わずにガトリングフルボトルをドリルクラッシュャーから取り外し、代わりに消防車フルボトルをセット。

『《レディー・ゴー！ボルテック・ブレイク！》』

まさに大盤振る舞い。

四つ目のフルボトルを使用した、四つ目の大技。

ガトリングフルボトルの斉射が終わると共に、舞い上がった砂塵を吹き飛ばした五条が、次に備えて身構えた瞬間。

彼の視界を、大量の水が覆い隠した。

「ちよ!?」と声を漏らした五条だが、突然の放水に驚いたのは何も彼だけではない。

「うお!?」と驚愕の声を漏らした貴丈は両足を踏ん張るが、その反動は凄まじい。

消防車の細いホースですら、放つておけば暴れ馬の如く荒ぶるものを、それ以上の量と勢いをもって水が出ているのだ。

危険と判断した貴丈がトリガーから指を離そうとするが、それよりも早く反動に負けた。

正確には放射した水でぬかるんだ砂に足を取られ、「ヤベ……」と声を漏らしながらスツ転んだのだが、どちらにせよ結果は変わらない。

荒ぶったドリルクラッシュャーは明々後日の方向に放水を開始することになり、

「あ……う？」

「高菜？」

「お……う。」

不幸にも、銃口の先には一年三人がたむろしている石階段。

巻き込まれないようにと十分に離れていたからか、割と気を抜いていた三人は碌に避けることもできず、貴丈の呪力が生み出した水を全身で浴びることになった。

転んだと同時にトリガーから指を離してはいたが、すぐに放水が止まるわけでもないことがこの事態を招いたのだろう。

顔を真っ青にした貴丈を他所に、無下限呪術で放水を防ぎきった五条は爆笑し始め、朝っぱらからずぶ濡れになった三人はおもむろに立ち上がると、

「歯あ食い縛れ！」

「しやけ……！」

「加減はするから、逃げるなよ！」

まさに激怒状態だった。

額に青筋を浮かべた真希はバキバキと指をならし、狗巻はグツと拳を握り、パンダは一応の容赦はしてくれそうだが味方ではない。

プルプルと震える貴丈だが、どうやっても言い繕えない状況に溜め息を吐く。

「最悪だ……」

その言葉の直後、鈍い打撃音が校庭に響き渡った。

「確かに俺が悪いけど、五条先生も見えてないで庇ってくれてもいいじゃねえか」

同級生三人の手でぼこぼこにされた貴丈は所々に痣が出来た身体に鞭を打ち、呪術高専に設置された自動販売機の前に来ていた。

ボコボコにただけでは飽きたらず、今度は使えばしりとして駆り出されたのである。ついでに五条からも注文された。勿論全て貴丈の自腹で。

たかが飲み物一つとはいえ、生徒に奢らせる教師というのはいかなものか。

——まあ、貯金はあるにはあるけど……。

現在は呪術高専の生徒ではあるが、業界での扱いとしては生徒兼呪術師らしく、こなした任務に応じて給料——と言うよりは報酬か——が支払われる。

前回の変異型呪霊や、あの場にいた呪霊らの脅威度から算出された報酬は、高校一年が一日で稼ぐ金額ではないことは確か。

物欲もなく、何なら節制を好む貴丈からすれば、ある分には困らないが、ありすぎても困るのだ。

使わなければ一方的に貯まるばかりで、かといってこの先使う予定もない。

こういったところで少しずつ落とさなければ、死刑が執行された後、顔も知らない呪術界上層部に持っていかれてしまう。

別に悪いことではないのだろうが、五条が腐りきっていると断言した連中に渡すのも癪だ。

死ぬまでに使いきるつもりなら、多少散財してもいいのだろうか。タイミングがあれば家具でも見て行こうか。

適当に良さげな物を買う分には誰も怒るまい。

「それにしてもメロンソーダって、子供かよ」

メモ書きに書かれた注文を確認した貴丈は、五条が無駄に達筆に書かれたメロンソーダの文字を見つめ、溜め息を吐いた。

案外甘党なのだろうかと担任の好みを推理しながら、財布から百円玉を取り出し、それを自動販売機に入れようとすると、

「君が桐生くんかな？」

不意に背中から投げられた言葉に、「ん……」と声を漏らしながら振り向いた。

そこにいたのは高身長で金髪の女性。ライダースーツに身を包んではいるものの、何と言うべきか主張が激しい体つきをしている。

具体的に言う胸と尻の辺り。金髪なのも相まって、日本人には見えない。

かつての彼なら赤面して顔を背けるような状況でも、今の彼にとっては大したことはない。

これが大人になったと言えるのか、壊れたと言うべきなのは、貴丈には測りかねないが、質問に返す程度のこととはできる。

「そうですけど、あなたは……？」

「うん、その前に一つ聞きたいことがあるんだけど」

「……うまあ、どうぞ」

金髪の女性は名乗ることなく何かを聞こうとし、話が進みそうになると判断した貴丈はそれを承諾。

それによつしやと言わんばかりに頷いた女性は、ウインクしながら貴丈に問うた。

「どんな女が好みかな？」

「……は？」

「だから、異性の好みだよ。言いたくない？それとも男の方が好き？」
突然の質問に理解が追い付かない貴丈を無視し、金髪の女性は畳み掛けてくる。

その表情には何がなんでも聞き出そうとする凄みがあるし、たった一人の状況で、見ず知らずの相手に性癖暴露など、何の罰ゲームだろうか。

よりにもよって高身長で尻も大きめという、割りと自分の好みにドストライクなのが余計に腹が立つ。

「……まず、名乗っていただきたいのですが」

貴丈がそう言うてどうにか抵抗を始めると、金髪の女性も流石に諦めたのか、深々と溜め息を吐いた。

「彼みたいな事を言うね」とどこか懐かしむように言った彼女の脳裏に過るのは、同じ問いに同じように返してきた生徒の姿が掠める。

「特級呪術師。九十九由基つくもゆきって言えば、わかるかな？」

そして得意気に笑いながら告げられた言葉に、貴丈はこてんと首を傾げた。

九十九由基。九十九由基と彼女の名前が頭の中を駆け巡り、聞いたことのある名前かを探っていくのだが、全く聞き覚えのない名前なの

だ。

僅かに間を開けて「いえ、全く」と返せば、九十九は見るからに落ち込み、「そっか……」と声音まで弱々しくなる。

特級呪術師。日本に三人しかいないという、最強格の呪術師なのだろうが、その名前までは把握していない。

どうせ五条以外に会うこともないと高を括った結果なのだが、まさかこうして会うことになるとは。

——まあ、五条先生か夜蛾学長に用があるんだろ。

一介の生徒に他ならない貴丈はそう決めつけて、「先生なら校庭ですよ」と言うのだが、今度は九十九が首を傾げた。

「いや、用があるのは君なんだけど」

「……？特級呪術師が、俺に何のようですよ？」

今日一日で何度浮かべたかもわからない疑問符だが、貴丈にとって毎日未知の出来事ばかり。

だが、この未知を未知だと認めることが何よりも大事だと、母からは何度も言われた。

長男だからと強がらず、わからない時はわからないと言っても、辛い時は助けを呼んでもいいと、弟たちからの下らない質問に、馬鹿正直に悩んでいた自分に言ってくれた言葉だ。

そんな思いの中投げ掛けた質問に九十九はじつと彼を見つめると、本題に入らんと口を開いた。

「私の目的を果たすためには、君は避けては通れないからね」

「別にあなたの邪魔をした記憶は——」

「まあまあ、話を最後まで聞きたまえ」

話の途中で割り込んだ貴丈を軽く受け流しつつ、「君、呪霊を払った経験は？」と問うた。

「……まだ、一度。いや、蠅頭を除けば一人だけです」

彼女の問いに貴丈がひどく悲しそうな声音で返すと、九十九は「それだ」と言っつてそつと彼の胸に手を触れた。

「私が目指しているのは呪霊を祓うんじやなくて、呪霊が生まれないようにすることなんだけど、君が例イレギュラー外すぎてね」

「まあ、五条先生からも似たようなことを言われましたよ。未知の術式だって」

貴丈は彼女の言葉に驚く様子もなく自嘲的に俯き、小さく肩を竦めた。

呪術師として呪霊を祓った経験がほぼないからか、九十九が言った言葉の重要性に気付いてないのだ。

九十九はその反応に興味深そうに笑いながら「その通りだよ」と彼の言葉を肯定。

「少し難しい話になると思うけど、呪術師から呪霊が生まれなくてのは知ってる？」

「呪術師歴、一週間なんです……」

「……ごめん。それは予想外だ」

九十九が神妙な面持ちで話し始めようとすると、貴丈が申し訳なきような声音で返すと、九十九は素直に謝罪。

「ん、困った」と頭を掻いた彼女はポンと手を叩くと、「ついて来て」と言いながら貴丈の手を掴んだ。

彼が何か言う前に歩き出せば、彼は黙って後ろを着いて行く。

ここで逃げてもいいのだろうか、彼女から自分の術式に関しての情報が聞き出せれば、家族を救う手立ても見つかるともかもしれない。

既に一人殺してしまっただが、一人でも多く救いたいのもまた事実。

だがそれを探している間に、家族が誰かの命を奪うことも見逃したくはない。

——ままならねえな……。

現実と理想がひしめき合い、貴丈は深々と溜め息を吐いた。

呪術高専の談話室。

普段なら京都校の学長や、その他重役が訪ねてきた際に使うその部屋に、貴丈と九十九はいた。

見るからに高そうな机を挟んで、座るだけでわかる高いソファアームに腰を掛けた二人の間には、妙な沈黙が流れている。

正確にはソファアールがふかふかし過ぎて落ち着かない貴丈がもぞもぞと動いているため、それが止むのを待っていてくれるのだが。

「……話が始まらないからそろそろいいかい？」

「ど、どうぞ。お構い無く」

ついに我慢の限界と言わんばかりに告げられた言葉に貴丈が応じると、九十九は話し始めた。

「まず私の目的は呪霊が生まれられない世界を作りたいって話でしたでしょ」

「ついさつき言われましたから、覚えてますよ」

「その続きからだ。流石に呪霊が生まれる原因はわかるよね？」

「人が何かを恐れる感情。ある種の呪力が集まった結果……でしたっけ？」

「エクセレントその通り。すると、呪術が生まれられない世界の作り方は二つ」

「そう言って九十九は談話室に置かれた棚からコップを取り出すと、それを卓上に置いた。

「まず一つは全人類から呪力をなくすこと。昔はモデルケースもいて、それなりにいい線行っただけけどやっぱなしになった」

九十九はそう言うときコップの片方を倒し、コロコロと転がるそれを目で追った。

「モデルケース？」

「天与呪縛って知ってる？生まれながらに何かしらの縛りを設けられた代わりに、超人的な何かを持つことなんだけど」

「話だけは聞いた気が……。確か、真希がそれだった筈」

彼女の言葉に貴丈が言うと、九十九は「合ってるけど不正解」と中途半端な解答を口にした。

「彼女は呪術師だけど呪力が一般人並の代わりに、高い身体能力を持っているだけさ。私が欲しいのは、完璧に呪力を持たない人間だったんだけど、現状一人しかいないし、何ならそいつはもう亡くなってる」

おかげで計画がパーだよと残念そうに肩を竦めるが、すぐに表情を引き締めてもう一つのコップを指で叩いた。

「そして次のプランが、全人類が呪力をコントロール出来るようになる方法。実用の目処も立ってないけど、理論的には出来上がってる」
「……どうして呪力がコントロールできれば、呪霊が居なくなるんです?」

「どんどんと小難しい話へとなっていくが、どうにか食らいについている貴丈は再び問うた。

「だが九十九はとりあえず最後まで説明するつもりなのか、言葉を続ける。」

「一般人から漏れだした呪力は呪霊を生むけど、呪術師からは呪霊として生まれないんだよ。呪力が漏れださずに、そのまま体内を巡って術式を使う時に消費されるから」

「つまり全人類が呪術師になれば、呪霊は生まれない。——筈だったと」

「貴丈が意味深に「筈だった」と付け加えた言葉に、九十九は「そうなんだよ」と不満そうに唇を尖らせた。

「呪術師でありながら呪力を放出して、人を呪霊に変えた奴がいるって聞いて、急いで帰ってきたって感じ」

「協力したいのは山々ですけど、俺自身この術式がよくわかっていないんです……」

「貴丈が肩を竦めながらそう言うと、九十九は「わかっているとも」と頷き、頬杖をついた。

「まあ、タイミングがあれば調べさせてよ。何か掴めるかもしれないし」

「そして何故だか楽しそうに笑いながら告げられた言葉に、貴丈はまるで五条の相手をしている錯覚を覚えながらも小さく頷く。

「ただ、急いでください」
「……?…なにか予定でもあるの?」

「貴丈がぼそりと呟いた言葉に心底不思議そうに九十九が返すと、彼はまるで他人事のように言う。

「まあ、いつ死ぬかわかりませんからね……」

「おっと、それは聞き捨てならないな」

そして彼が告げた言葉に応じたのは、九十九ではない。聞くからに怒っているのがわかる声音のそれは、普段の飄々とした物とは程遠い。

びくりと肩を跳ねさせた貴丈を他所に、九十九は彼の背後に目を向けており、「やあ、久しぶり」と気さくに挨拶を国にした。

貴丈が錆びたロボットののようにギギギと音をたてて後ろを向けば、そこには不機嫌そうに腕を組んでいる五条の姿があった。

「どうも」と恐る恐る口にした貴丈だが、五条は包帯越しに見下ろしてくる。

目元が隠されている都合上、その姿は酷く不気味で、子供なら泣き出しそうなもの。

「……いつから、そこに？」

「ちようど今だよ。全然戻ってこないから、皆で探し回ったんだけど」五条はちらりと九十九に目を向け、「面倒な人に絡まれてたのね」と肩を竦める。

「誰が面倒な人だ」と九十九は反論するが、五条は気にした素振りを見せない。

彼は貴丈の肩に手を置くと、「で、僕の生徒に何のよう？」と彼女に問うた。

声音もいつも通りで、表情も笑ってはいるが、おそらく目は真剣そのものだろう。

教師として生徒を守らんとする意志が、今の彼からは滲み出ている。

その言葉に九十九は苦笑すると、「気になる子に声をかけちゃ駄目かい？」と貴丈を見つめた。

「私の目的としては、彼は避けては通れないからね。今のうちに挨拶しておくくらい、いいだろう？」

「挨拶だけなら、ね」

彼女の言葉に五条は信じていないだろう声音で返すと、貴丈に「変なこと言われてない？」と問うた。

問われた貴丈は「性癖暴露を強要されました」と包み隠さずに言う

と、九十九は溜め息を吐いた。

「私からすれば大事なことなんだよ?」

「はいはい。海外ばっか行つて、給料を止められた人の事なんて放つ
といて授業だよ、授業」

九十九の言葉を無視する形で五条が手を叩くと、貴丈は「了解」と
返して立ち上がる。

そのまま五条に連れられて談話室を後にしようとする時、「ああ、一
ついいかい」と貴丈を呼び止めた。

「君の好みタイプを——」

「失礼します」

そしてまた問われた質問を無視して今度こそ退室しようとするが、
その背中に再び声がかけられた。

「ごめん、ごめん。次は真面目な話」

「……なんですか?」

その三十分足らずでどんどん下がっていく九十九の評価だが、それ
は彼女を無視する理由にはならない。

貴丈が振り向くことはないが律儀に足を止めると、九十九は彼に告
げた。

「気休めにでもなる趣味でも見つけたらどうだい。気を張り続けてい
ると、ふとした拍子に切れてしまうよ」

「……善処します」

彼は一言でそう返すと、さっさと部屋を後にして後ろ手で扉を閉め
た。

「あく。どうしてこう、教えてくれないのかな」

一人残された九十九は結局彼の好みタイプがわからず、ほとほと困り果て
たように溜め息を吐く。

「……連絡先の交換もしてないじゃん」

そして、これなら先においても最も大事なものを忘れたことに気づ
き、「あゝ」とだらしない声を漏らしながら背もたれに身体を預け
た。

長い廊下を歩きながら、五条と貴丈の会話は続いていた。

「全く、無視して戻ってきて良かったんだよ?」

「それは、そうかもしれないけど」

五条の言葉に貴丈はそう返すと、僅かに考える素振りをしてから言葉が続ける。

「俺の術式に関して、何か知っていればなと……」

「虎穴に入ればってやつ?もう、僕に一言相談して欲しかったな」

「なんか、すみません」

何だかんだで心配をかけてしまった貴丈が素直に謝罪すると、五条は笑いながら「それは僕にだけ言う言葉じゃないでしょ」と言っ窓の外を指差した。

つられてそちらに目を向ければ、いつまで待たせんだと言わんばかりにこちらを睨む真希と、飲み物を待つてそわそわしている狗巻。最後に「こつちこつち」と言わんばかりに手を振ってくるパンダの姿がある。

「皆のこと待たせちゃったんだから、その謝罪もしないとね」

「……また拳骨されんのか」

見るからに不機嫌な真希の姿に冷や汗を流す貴丈に、五条は「かもね」とあいかわらず楽しそうに笑う。

「最悪だ……」

貴丈はそう呟くと肩を落とし、まず注文の飲み物を買わねばと自動販売機に向けて走り出す。

その背を見送り、窓の外で彼を追いかけて走り出した一年三人の姿を見送った五条は、「青春だね」と呑気に呟く。

「遅えんだよ……どこまで買いに行つてやがった!?!」

「とか言ってるが、一番心配してたのは真希だよな」

「しゃけ」

「そうなのか?」

「んなわけあるか!」

廊下の向こうで楽しそうに喋る四人の声が、五条のご機嫌を良くし

ていくのだった。

のんびり歩いて四人に合流した五条は、「ほら、授業やるよ」と自動販売機の前でわちゃわちゃしている四人に告げた。

「しゃけ」

「お、もうそんな時間か」

「わかってんよ」

狗巻、パンダ、真希がそれぞれ返し、同時に貴丈が買った飲み物を受けとると、一気にそれらを呷っていく。

「……トイレ行きたくなくても知らねえぞ」

一人水を買った貴丈はそう言うが、三人は構うことなく一気飲み。

狗巻、パンダがそのまま空き缶をゴミ箱に捨てるが、真希はパン！と音をたてて缶を潰してからゴミ箱に投げ捨てた。

「……」

聞いてはいたし、何なら殴られたこともあるが、こうして見せつけられると真希の膂力というのは凄まじい。

「あれ、貴丈。僕のは？」

そう言いながらひよつこりと視界に映り込んできた五条は、相変わらず貴丈に奢らせるつもりらしい。

貴丈は溜め息を吐くと、とりあえず殴ってもいいのではと思いつながら、迷惑料代わりのメロンソーダを五条に渡したのだった。

呪術高専、男子寮。

貴丈に割り当てられた部屋には、その住人である貴丈の姿があった。

台所でポットやカップとにらめっこをしている彼の表情は、いつになく真剣なもの。

時には作業手順を画面に映すスマホ、時にはポットやカップを覗み、むうと小さく唸る。

九十九と出会ってから早くも一週間。

あれから彼女からの連絡もなく、いつも通りに授業と、真希やパンダ、狗巻らとの共同任務とをこなしていく日々が続いたのだが、

『気休めにでもなる趣味でも見つけたらどうだい。気を張り続けていると、ふとした拍子に切れてしまうよ』

彼女に告げられた言葉が頭を離れず、思いきって始めたのが今こうしている作業。

こうか、こつちかと手探りで、慎重に作業を進めていた彼は、途中からええいままよと勢いに任せて行程を先に進め始めた。

円錐形のカップ——ドリッパーに、これまた円錐形の紙を嵌め込み、それを丸みを帯びた水瓶のようなもの——サーバーの上に乗せる。

あとは円錐形のカップに買ってきたコーヒー粉を適量入れ、あとは温めておいたお湯を注いでいくわけだが、ここにもやり方があるようだ。

少量を注いでコーヒー粉を蒸らしてから、本命である二度目、三度目続けて注ぎ、ポツポツと垂れていくコーヒーを見つめる。

「……こんなもんでいいのっ？」

あとはタイミングを見てお湯を注いでいくだけなのだが、初めての彼にとつてはこれが正解なのかもよく分からない。

泡の残り方や時間が大事らしいのだが、何かが物足りない気がしてならない。

サーバー少しずつ溜まっていくコーヒーをじっと見つめた貴丈は、ふとその足りない何かに気付いて「なるほど」と声を漏らす。

そう、黒さが足りない。見る限り綺麗な茶色で、香りもまた格別なのだが、コーヒーと言うからにはもつと黒くなければなるまい。

ならばと次にすべきことを考えた彼は、失敗したとしても初めて淹れたのだしと、試しに飲んでみるかとドリッパーを取り外した。

そのままお湯を注いで温めておいたカップに、お湯を捨ててからコーヒーを注ぐ。

茶色く輝いているように見えるそれに顔を近づけ、思い切り鼻で呼吸をすれば、香ばしい匂いが肺を満たす。

思わず頬を緩めた彼はいざ飲んでみるかとカップを持ち上げるが、かといってそのまま一気に飲みする勇気はないのか、ちびりと舐めるように一口。

「苦っ……」

初めて飲んだコーヒーは、思わず眉を寄せて舌を出すほどに苦かった。

まだまだ未熟と思いながら、今後の成長の為の戒めとして、ミルクや砂糖をいっただけのものを何も加えることなくさらに一口飲んだ彼は、ホッと一息。

確かに苦く、少々飲みにくい味でもあるが、何故か癖になる。

父がよく言っていた大人の味というのが、これのことなのだろうか。

貴丈はふと父の淹れたコーヒーはお店に出せると楽しそうに言っていた母の顔を思い出し、その目を懐かしむように目を細める。

自分が奪ってしまった家族の笑顔を、忘れたことは決してない。

僅かに目尻が熱くなり、呼吸も乱れ始めるが、それを誤魔化すようにコーヒーを一気に呷った。

目に滲んだ涙はきつとこの苦さのせいだと、自分に言い聞かせた。

それを飲みきった彼が「だく」と気の抜けた声を漏らし、ぐりぐりと目を擦って涙を拭くと、ペチペチと頬を叩いて気持ちを切り替える。

口元に右手を持っていきながら「しゃ！」と声を出して気合いを入れた彼は、更なる高みを目指して二杯目のコーヒーを入れようとお湯を準備を始めた。

水が煮たち、ヤカンの口から煙が漏れ始めると、コンコンと扉が叩かれた。

ヤカンに火をかけながら「空いてるぞ」と返せば、「入るぞ」と気の抜けた声と共に真希が、その後ろに続いて狗巻とパンダと入ってくる。

その三人は何やら見慣れない物を前に四苦八苦している貴丈の姿を見つめ、一様に首を傾げた。

「……なにしてんだ？」

代表して質問した真希に、貴丈は「趣味探しの真つ最中だ」と返す。

そして何を思つてか「飲むか？」と三人に問いかけた。

顔を見合わせた三人は怪訝そうな表情を浮かべるが、どこか自信に満ちた貴丈の表情に負けてか、同時に頷く。

「よし、任せろ」

「大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫だ。コーヒーはそもそも苦い」

彼の一言に流石に不安になったのか、真希が恐る恐ると言つた様子で問いかけると、貴丈は開き直つたようにそう告げた。

「棘、ミルクとか用意してくんね？」

「しゃけ」

流石にヤバイと判断したパンダが狗巻にそう言うと、彼はサムズアップと共に部屋の冷蔵庫や棚を漁り始める。

部屋主の許可もなくそれをするのはどうかと思うが、肝心の貴丈がそれを一切気にしていないのなら何も言うまい。

ふんふんと鼻歌混じりにコーヒーを淹れていた彼は、不意に三人の方に振り向き「何か用があつて来たのか？」と彼らが部屋を訪ねてきた理由を問うた。

その間もドリッパーやサーバーを一切見ずに作業を進めるのは、見ている三人からすれば恐怖でしかない。

「ちゃんと見ながらやれ」

真希が悩ましそうに額に手をやりながら言えば、貴丈は「それもそうだな」と返して視線と意識を手元に戻す。

「それはそれとして、何か用があったんじゃないのか？」

先の反省を生かして作業しながら問うた彼に、パンダは「別に理由なくともいいだろ」と笑いながら返した。

友人と会うのに深い理由が必要なのかは、パンダである彼にはいまいちよくわからない。

その一言に一瞬手を止めた貴丈は「確かに」と返し、ふとした疑問をパンダにぶつけた。

「……汚れないか？」

パンダはこうして言葉のやり取りができる通り、普通のパンダではない。

パンダはそもそもとして、呪骸と呼ばれる呪力で動く人形だ。

その研究の第一人者である夜蛾学長が、偶然生み出したという感情を持った呪骸。

本来必要な術師からの呪力の装填も必要なく、文字通り術師が死んでも動いてしまう不思議な人形。

それがパンダなのだが、流石に汚れてしまえば洗うほかない。

彼が風呂に入ったたり、シャワーに入ったという話を聞かないから、もしかしたら夜蛾学長が素材を用意しているのかもしれない。

そう言った気遣いによるものなのだが、パンダは気にした風もなく「気にするな」と返す。

「だが、コーヒーの染みは落ちにくいぞ？」

そしてまるで洗濯物の心配をするように問えば、パンダはぐつと腕に力瘤を作りながらニツと得意げに笑った。

「何かあっても、まさみちがどうにかしてくれる」

「人頼りなのに、なんでどや顔なんだよ」

「しゃけしゃけ」

そしてようやくお茶請け代わりのお菓子を持ってきた狗巻が貴丈の言葉に同意を示した。

横の真希は貴丈の手元を覗きこみ、案外手慣れた手つきに僅かに安堵。

だが趣味探しと言っておきながら、なぜ読書などの簡単なものではなく、明らかに面倒なコーヒー淹れにたどり着いたのか。

そんな疑問が浮かんだものの、割りと楽しそうな雰囲気醸し出す彼の背中に向けて、その気分を崩すような事を言うほど馬鹿ではない。

「よし、できた」

そして貴丈の背を見つめていると、不意に彼がそう言ってカップにコーヒーを注ぎ始めた。

そして勢いよくこちらに振り向いた彼と真希は目があり、「どうかしたのか」と首を傾げる。

「……何でもねえ。それよりも、早く寄越せ」

ほらほらと急かすように手招きした彼女に「おう」と返した貴丈は、人数分のカップを机に並べた。

それを除きこんだ三人は思わず顔をしかめる。

確かに出されたのはコーヒーだ。だが、コーヒーと言うにはあまりにも黒すぎるように思える。

「……泥水じゃねえよな？」

「俺がそんなせこいことするわけねえだろ」

そう言っただけで同じく用意した自分の分を呷る。

無言のままカップを置いた彼は、三人に向けて「飲まねえのか？」と催促。

感想を聞きたいのか、単純に友人らとコーヒーと飲んで楽しいのか、いつもは濁っている瞳が僅かに輝いて見える。

「……」

彼の表情に当てられた三人は断るに断れず、意を決したのか一息でコーヒーを呷った。

ごくぐりと喉を鳴らして飲み込んだ三人は、呷った姿勢のまま動きを止める。

「……どうだ？」

「くっそ苦え……」

だん！とカップを机に叩きつけるように置いた真希はコーヒーの味をそう吐き捨て、うへと声を出しながら表情を歪める。

そして残る二人に意見を求めて、パンダと狗巻に目を向けるが、どうにも様子がおかしい。

「……どうした？」

貴丈が首を傾げ、カップを呷った姿勢で固まっている狗巻の肩を揺ると、そのままパタリと床に倒れた。

白目を剥いて身体を痙攣させ、口許から涎のようにコーヒーが垂れていく。

その様子に「え」、「は？」と声を漏らしたのは、貴丈と真希だ。

二人はもしやとパンダに目を向ければ、

「……」

どこか一点を見つめながら微動だにせず、口の端からコーヒーが垂れて白い毛並みを汚している。

ツンツンと頬をつついてやれば、そのままごろりと床に倒れ、カップに残っていたコーヒーが床にぶちまけられる。

「パンダ、棘……？」

貴丈はそんな二人の肩を揺らしながら声をかけるが、やはりと言うべきか返答はない。

「お、おい」と割りとは本気で焦り始める貴丈を他所に、隣の真希は「そこまでか？」と首を傾げながら更にもう一口。

口内に広がる苦味にしかめっ面になるが、気絶する素振りはない。

天与呪縛——フィジカルギフトテッド。

生まれつき呪力が少ない代わりに人間離れした身体能力を与えられた彼女にとって、貴丈の殺人コーヒーもただの苦いコーヒー程度。

人間離れしているのは呪具を振り回せる膂力だけでなく、五臓六腑にいたるまで強化されているのだろう。

当の彼女に、その自覚があるのかは別問題だが。

「し、死ぬかと思った……。まあ俺、呪骸なんだけど」
「す……す……し……」

それからしばらく、貴丈と真希が激苦コーヒーを飲み終えたのと同じ時に、パンダと狗巻は復活を遂げた。

パンダは変顔混じりに冗談を言う余裕があるようだが、狗巻に関しては喉をやられたのかガラガラ声だ。

とりあえずベッドに寝かせた彼は捨て置いて、カップを片付け始めた貴丈は、「それで、何で俺の部屋に？」と三人が部屋を訪ねてきた理由を問うた。

前回はお見舞いであつたが、今回は別に怪我をしたわけでも、問題を起こしたわけでもない。

いや三人が来てから問題を起こしたわけだが、別に起こしたくて起こしたわけではない。

コーヒーひとつで気絶者が出るなど、誰が予想できただろうか。

やれやれと首を振る貴丈に、真希はどこか楽しそうに笑いながら告げた。

「ああ、ちよいと面白れえ噂を手に入れてな。情報の共有ってやつだ」
「面白い噂。なにか行事でもあんのか？」

本格的に洗うのは後回しにしたのか、とりあえずカップを水に浸けた貴丈が問うと、真希は「行事じゃねえな」とあっさり否定。

「明日、転校生が来るんだと」

そして単刀直入に告げた言葉に、貴丈は「転校生」と彼女の言葉をおうむ返し。

「……俺みたいな、訳ありか？」

「同級生クラスメイトを四人、ロッカーに詰めたらしい」

貴丈の問いかけにパンダが答え、「先に言つとくが、重症だけど全員無事だ」と付け加えた。

「そっか……」とどこか安堵した様子で返した貴丈は、『ロッカーに詰めた』というよくわからない状態に首を傾げた。

「まあ、無事ならそれでいいか」

だが生きているのならそれでいいという、かつての怪我をただけ

でも大騒ぎしていた彼では絶対に思わないような事を平然と思いがら、「明日なのか」と今さらなツツコミを入れた。

「急に決まったらしいぜ。ま、悟がまた死刑囚問題児を引つ張って来たんだろ」

真希は頬杖をつき、死刑囚問題児一号の貴丈を見つめながら笑み浮かべた。

そんな視線を彼は気づいていないのか、「俺が先輩になるのか」と感慨深そうにしている。

そんな彼とは対照的に、真希は「生意気ならシメる」と物騒なことを言い始めた。

貴丈はその後の仕事で印象が変わったし、なんなら最初に呪術高専入学の経緯を聞いたせいで、シメるという考えさえも吹き飛んだ。

だが次の転校生は話を聞いた限りでは、多少落ち込んでいてもそこまで追い詰められているわけではあるまい。

「や、止めてやれよ……」

貴丈はその不憫な目に遭いそうな転校生を氣遣ってか、彼女に一応釘をさすが、その程度の言葉を彼女が気にするわけもない。

横のパンダはうんうんと頷き、ようやく回復した狗巻は「おほか」とおそらく肯定的な事を言う。

つまり、この場にいる三人がその転校生に対して弄る気満々と言った様子なのだ。

「……もう一杯、いくか？」

せめてもの抵抗として三人にコーヒーを使った脅しをかけるが、パンダと狗巻はそもそも淹れさせるつもりがないのか、「やってみろよ」「めんたいこー」とファイティングポーズを取る。

「私は別に飲んだって構わねえぞ」

だが真希だけは笑いながらそう返し、罰ゲームを受け入れる姿勢を見せた。

そしてその反応に対してパンダと狗巻はゆっくりと構えを解くと、貴丈と真希を交互に見ながらニヤニヤと楽しそうに笑い始めた。

貴丈はそんな二人の笑顔に妙な雰囲気を感じて首を傾げ、真希はそ

んな明らかに弄ってきている二人に聞こえるように、ゴキゴキと指を鳴らす。

前もそうではあったが、目の前の二人はどこか自分と貴丈が二人でいるだけで弄ってくる傾向がある。

それを正すタイミングとしては、弱っている今が割りとベストなのではないか。

「なに笑ってんだ、お前ら!!」

そして刹那的な時間で考えを纏めた真希は吼え、グロッキー状態の二人に飛びかかる。

コーヒーのおかげで既にグロッキー状態なことに加え、真希の割り と全力で振るわれた高速の拳を二人が避けられるわけもなく、快音が部屋に響いた。

「またこうなのかよ」

崩れ落ちる二人を見ながら、「最悪だ」と額に手をやりながら傷跡を搔いた貴丈は、二人のために氷を用意しようと冷蔵庫に足を向けた。

自分で使う量よりも、二人の介抱のために使っている氷の方が多い気がするのは、おそらく気のせいではない。

はあと深々と溜め息を吐く貴丈を他所に、二人を伸すことで怒りが治まった真希はふーっと深く息を吐く。

「貴丈、コーヒー淹れろ」

そして有無も言わさぬ迫力を持ってそう告げると、床に倒れた倒れる二人はビクンと身体を跳ねさせた。

倒れたまま冷や汗を流し、恐る恐る貴丈へと目を向ける。

口では何も言わないが、その目は確かに助けを求めているそれだ。貴丈は懇願にも似た雰囲気放つ二人を無言で見下ろすと、小さく肩を竦めて真希に言った。

「苦さは据え置きか?」

文字通り、二人を切り捨ててる一言を。

彼としては真希をこれ以上怒らせたくない一心なのだが、被害者の二人からすれば違う。

真希が照れ隠しに何かしても、貴丈は気にせずにおいてくれると信じ

ていたのだが、結果はこれだ。

二人の脳裏にまさか本当にそういう関係なのかという思考が過るが、真希が鼻を鳴らしたことで意識を現実に戻した。

「苦くできるなら、もっとやれ」

彼の問いかけに真希が心底楽しそうに邪悪な笑みを浮かべると、いよいよ退路がなくなったパンダと狗巻は涙目になりながら貴丈へと目を向ける。

当の彼は既にコーヒを淹れようと器具を再度用意し始め、先ほど以上の手際をもつて作業を進めていく。

「あ、あのく、貴丈さん……?」

「す、すじこーおかか!!」

そんな彼の背中に、パンダは媚びるような声音で声をかけ、狗巻は何やら交渉を持ちかけるが、彼はどこ吹く風だ。

そして瞬く間用意されたコーヒは、言ってしまうえば漆黒のなにかだった。

煙ののつて広がる香りは確かに普通のコーヒなのだが、飲んではいけないと脳が警鐘を鳴らしている。

「ほらほら、貴丈が淹れ直してくれたんだ、残すなよ?」

「出来れば吐き出さないと助かる。掃除すんの俺だし。……てか、もうぶちまけられてんだよな」

今さら溜め息混じりに肩を落とした貴丈は棚から雑巾を引っ張り出すと、そのまま床に水溜まりになっているコーヒを拭き始める。

白かった雑巾がみるみる内に茶色く変色し、手にコーヒの匂いが染み着く。

その脇で真希の手で無理やりコーヒの飲まされた二人が、それを盛大に嘔き出しながら崩れ落ちた。

「……最悪だ」

確かにさっきの比べて苦くなったが、リアクション芸人ばりに嘔き出すとは思えない。

シャワーのように霧散したコーヒのせいで部屋のあちこちには斑模様が残り、だいぶ悲惨な状態になっている。

「あー、まあ、私も手伝ってやるよ」

「頼む……」

再び気絶した二人をそのままに、流石に申し訳なく思ったのか、真希が貴丈と同じように柵から雑巾を引っ張り出す。

折角の休日がコーヒーマシンの試飲と後始末で潰れてしまったのは、果たしてコーヒーマシンのせいなのか、悪乗りした友人たちのせいなのか。

貴丈は深々と溜め息を吐きながら額の傷跡を掻き、けれど騒がしい日常をどこか懐かしむように噛み締める。

家族と過ごした日々は、きつといつになっても忘れることはないだろう。

そして、それを奪った罪の意識もまた同じ。

「……」

ふとした拍子にネガティブになる自分に嫌になりながら、それを誤魔化すように余りのコーヒーマシンを一気に呷る。

エグいまでの苦味に声にならない悲鳴をあげながら、どうにかそれを飲み下す。

思わず溢れた涙を苦味のせいにして、少々乱暴にカップを洗い台に叩き込み、真希を手伝って部屋を掃除していく。

パンダと狗巻が復活したのは、一通り部屋の片付けが終わってからだった。

翌日。呪術高専、一年の教室。

「転校生を紹介しやすーさあ、テンションあげて!!」

相変わらずのハイテンションで生徒らを煽ったのは、ご存知最強呪術師の五条だ。

そして反応を示したのは、形式的に拍手する貴丈。

ほぼ無表情で淡々と拍手するその様は、もはや不気味と言うほかない。い。

真希は机に頬杖をついてそっぽを向き、その転校生に対して興味がないことが伝わってくる。

そして狗巻とパンダの二人は、

「お、おお……」

「しゃ、じゃげ……い！」

机に突っ伏したまま、どうにか盛り上げようと声を出す。

既に罰ゲームをされたのに今日の反応次第でもう一杯飲まされるという事実が、二人の背を押しているに過ぎない。

五条は見るからに不調な二人を見つめながら、「なんかあったの？」と無事な貴丈と真希に問いかける。

「俺が試しに淹れたコーヒーを皆で飲みました」

「ああ。まあ、こいつらは気に入ったか知らねえけど何杯かいったけどな」

貴丈は一部を濁して真実を。真希は都合のいいようにねじ曲げた真実を五条に伝えた。

「コーヒーの飲み過ぎ？まったくと、子供なんだから〜」

二人から話を聞いた五条は、「格好つけたかったの？ねえねえ」と笑いながらパンダと狗巻を煽るが、二人からの反応は鈍い。

いつもなら何かしらの返事があるのに、それもないのは流石におかしいと思っただのか、目元を覆う包帯の下で目を細めた五条は貴丈に問う。

「……ねえ、これ本当にコーヒー飲んだだけ？呪力の流れも乱れに乱れてるんだけど」

その言葉に貴丈は「コーヒーを振る舞っただけです」と断固として譲らず、五条は「本当に？」とパンダに問う。

「あれを、コーヒーと、呼んでいいのか、わかんない」

そしてどうにか絞り出された言葉に五条は首を傾げ、再び貴丈に視線を向ける。

そして流石に隠しきれないと判断したのか、貴丈は深々と溜め息を吐いてから五条に言う。

「俺と真希は大丈夫だったんですけど、二人は飲んだ途端に倒れました」

「……それ、コーヒーなんだよね？」

「市販のコーヒーを、手順に沿って淹れただけです」

「むう。なら、コーヒーか」

の割りには二人の体調は最悪と言っていていいほどになっているのだが、貴丈はコーヒーを淹れただけの一点張り。

「そもそもなんでコーヒーなんか」

五条はそんな疑問をぶつけたが、すぐに答えにたどり着いた彼は「なるほど」と顎に手をやりながら微笑んだ。

「趣味探しの一環かな？あいつの言葉なんて、そんな気にしなくてもいいのに」

「気を紛らわせるって意味じゃ、正解でしたよ」

五条が脳裏に九十九の姿を思い浮かべながらそう言うと、貴丈は右手でサムズアップしながら返す。

「少し犠牲を払いましたけど」

そう言いながらちらりと狗巻とパンダに目を向けると、二人からはブーイングで返される。

五条が「仲よしだね」と微笑ましいものを見るように言うと、真希が咳払いをしてから男子四人に告げた。

「……で、転校生は？」

「……あ……」

その一言に男子四人は揃って声を漏らし、生徒三人は揃って五条に目を向けた。

「うん、ごめん。本題はそっちだよね」

あははと誤魔化すように笑った彼は、そのまま扉の方を向いて「入つといで〜！」と扉の向こうにいる誰かに声をかけた。

ガラガラと音をたてて扉が開き、件の転校生が入ってきた瞬間、

「………つ!!」

突如として四人の背筋を駆け抜けた悪寒。

凄まじいまでの迫力にぎよつと目を見開いた四人だが、そこからの行動は速い。

真希は机の脇に置いていた袋から薙刀を引っ張りだし、貴丈は影から生み出した煙からドリルクラッシュャーを取り出す。

「乙骨憂太です。よろしくお願い——」

そして口を開いた転校生に、真希の薙刀と貴丈のドリルクラツシャーの切っ先が向けられた。

不調のパンダと狗巻を庇うように前に出た二人が、勢いのままにそれぞれの得物を転校生のすぐ脇に突きつけたのだ。

これぞ日本人といった黒髪黒目の見た目はひよろい青年。

何と言うべきか、前にいた場所では虐められていたんだらうなと予想できてしまう、どこにでもいるただの気の弱そうな高校生。

そう、あくまで見た目は普通の高校生なのだが、纏う雰囲気は一般人のそれではない。

近づくだけで悪寒が走り、本能が逃げろと警鐘を鳴り響かせる異常な気配。

「これ、なんかの試験……?」

異様なまでの迫力に怯まず真希は五条に問うが、当の五条はご想像に任せると言わんばかりに肩を竦めるだけだ。

突然二人に得物を突きつけられた転校生——乙骨憂太は困惑した様子で両手を挙げて降参の意思を二人に伝えるが、それを切り捨てる形で真希が告げた。

「オマエ、呪われてるぞ。ここは呪いを学ぶ場だ、呪われてる奴がくる所じゃねえよ」

「え……?」

「え?じゃねえよ!オマエ、ふざけてんのか!」

乙骨の反応に首を傾げた貴丈は、構えたドリルクラツシャーをそのままに五条に視線を向けた。

「あ、そういえば何も説明してないや」

メンゴと片手を顔の前にやって謝るその姿は、本当に教師なのかと言いたくなるが、それが平常運行なのが本当に腹が立つ。

「あ、それともうひとつ」

そしてついぞと言わんばかりに人差し指を立てた彼は、「早く離れた方がいいよ」と二人に警告。

「……………」

その言葉の意味がわからずに二人が顔を見合わせた直後だった。

『ゆゝうだをゝをををを……』

地の底から響いてくるような、低く、凄まじい圧力を込められた言葉が、どこから教室に放たれた。

そしてその言葉と共に解き放たれた、むせかえるほど強烈な呪いの気配に、貴丈と真希は乙骨の方へと視線を戻した。

そして目にしたのは、乙骨の背後の黒板から伸びてくる巨大な二本の腕の姿。

その手は薙刀とドリルクラツシャーの刃を纏めて掴むと、空いている手が振りかぶられる。

「っ!?待って、里香ちゃん!!」

乙骨が慌ててその何かを止めようと声を出すが、里香と呼ばれたそれは彼の言葉を気にする素振りを見せない。

『ゆうゝだを、ゆうたを……虐めるな!!』

絶叫にも似た怒号と共に、拳が振り抜かれる。

「っ!?!」

そして不幸にもその矛先が向いたのは真希だ。

ぎよつと目を見開いた彼女は突然の事態に反応できないのか、腕を交差させて防御の体勢を固める。

だがそれよりも早く、貴丈が動いた。

手の中に素早くゴリラフルボトルを出現させ、最低限の動作だけで振ってから蓋を開ける。

『《ゴリラ!》』

状況に反して陽気な声が六人の頭の中に響き、貴丈の右腕に茶色のエネルギーが集まり、無機質なゴリラの腕を形作る。

そのまま彼は真希を押し退けると、迫る拳に全力の拳を叩き付けた。

凄まじい衝撃が教室の窓ガラスを全て叩き割り、無下限呪術を発動している五条と、思い切り踏ん張っている貴丈を除いた生徒四人を転ばせるほど。

『うっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっうっう!!!』

「っ！うおおおおおおお！！」

里香と貴丈はお互いの拳を合わせたまま競り合い、拳が合わさる位置にはバチバチとスパークが起きるほど。

押したくとも押しきれず、かといって引けば拳が振り抜かれてそのまま死ぬという状況に放り込まれた貴丈は、額に脂汗を流しながら乙骨を睨む。

「さっきのは謝るから、いい加減これ引つ込めて欲しいんだが!？」

少しずつ押され始めた状況に焦る貴丈は、プライドも何もかもを投げ捨てて乙骨に頼み込むが、肝心の返答は

「ご、ごめん！でも、どうやればいいのかわかんなくて……」

と、大変情けないもの。

「のおおおおおお——……」と貴丈もまた情けない声を漏らすと、五条が貴丈と里香の間に割って入る。

「はい、そこまで」

直後、五条が片手で印を組んだかと思えば、バチン！と何かが弾ける音と共に里香の腕と貴丈の身体がそれぞれ吹き飛んだ。

里香の腕は黒板に、貴丈はロッカーに突っ込み、それぞれ豪快な音をたててそれぞれぶつかった物をひこませる。

力を使い果たしたからか、あるいは貴丈を無力化できたからか、里香の腕は黒板の中へと引っ込んでいき、教室には割れた窓ガラスと、ロッカーにめり込んだ貴丈という、彼女が残した爪痕だけが残される。

貴丈のおかげで助かったとも言える真希は、少々の怒気を込めて五条に詰め寄った。

「一から全部説明しろ」

「オツケー。まずは貴丈の治療からだね」

五条が仕切り直すようにパンと手を叩くと、慣れている真希、パンダ、狗巻の三人は溜め息を吐き、状況についていけない乙骨はその場でおろおろして目を泳がせ、ロッカーにめり込んだ貴丈は、

「最……悪だ……」

そう言い残して、意識を失うのだった。

事の発端は、六年前。

どこにでもいる普通の少年だった乙骨憂太は、友人でもあったおりもとりか祈本里香という少女に、誕生日プレゼントととして婚約指輪を贈られた。

子供が、大好きな相手に『大人になったら結婚しようね!』と約束するのは、まあそれなりにある話だろう。

現に乙骨もそれを受け入れたらうし、祈本もまた喜んだ筈だ。だが、運命というものは残酷なものだ。

二人の間にそんな細やかな、けれど幸せに満ちた約束が交わされるから、幾日かした頃。それは突然訪れた。

祈本が車に轢かれ、そのまま亡くなってしまったのだ。そして、その瞬間を乙骨は目撃してしまった。

大好きな相手が、目の前でただの肉の塊へと変わる瞬間を見せられた当時の乙骨のストレスは計りしれないが、更なる不幸が彼に降りかかった。

死んだ筈の祈本が呪霊へと転じ、そのままとり憑かれてしまったのだ。

乙骨と結婚したいという純粹無垢な愛が呪いとなり、乙骨を呪っている。

彼を傷つけようとした者を迎撃し、時には半殺しにするそれは、その異常なまでの強さと異質さに特級過呪怨霊として登録され、被呪者である乙骨にはその危険性から秘匿死刑が決定したのだが――。

「そこに颯爽と現れた僕が、待ったをかけたってわけさ!」

一通り乙骨の現状について説明し終えた五条がどや顔でそう言うのと、真希、狗卷、パンダの三人は反応に困るように顔を見合わせた。

後ろで頭に包帯を巻いていた貴丈は「なるほどな」と一応は納得。

「それじゃ、改めて! 転校生の乙骨憂太くんです!」

そして諸々のどたばたで中断してしまった転校生の名前を紹介しながら彼の肩を叩いた。

叩かれた乙骨はその勢いで一步前に出ると、「乙骨憂太です……」と改めて名乗った。

その声音が酷く申し訳なさそうなのは、目の前に自分のせいで怪我をした貴丈がいるからだろう。

「はい、皆も自己紹介して！」と五条が一年四人に言うが、それに対して四人は誰から行くよと顔を見合わせた。

我関せずとしている真希、自分からいつたら混乱を生みそうと悩むパンダと狗巻、誰かいくだろと他人任せの貴丈。

結果的に誰も口を開かないという状況に、五条は「もう、皆して照れちゃって」と可笑しそうに笑った。

「そんな恥ずかしがりや皆に代わって、僕が紹介してあげよう！」
そして待ちきれなかったのか、五条がそう言うと言つ先に真希を手で示した。

「まずは呪いを祓える武具を扱う呪具使い、禪院真希！」

「……」

紹介された真希は何も言わず、むしろ警戒するように乙骨を睨んだ。

睨まれた彼は怯えた様子で萎縮するものの、五条は構わずに次の生徒へと手を向ける。

「呪言師の狗巻棘。おにぎりの具しか語彙がないから、会話頑張って」「こんぶ」

五条の言葉に狗巻は軽く右手を挙げながら返すと、次はこつちと言わんばかりにパンダの方に手を向けた。

それに合わせて頷いた五条は乙骨に向けて「パンダだよ」とだけ告げて、パンダもパンダで「パンダだ」と真剣な面持ちで返すのみ。

パンダが喋るといふ状況に困惑する乙骨を他所に、五条はどこか懐かしむように目を細めていた貴丈に手を向ける。

「そして最後に桐生貴丈。憂太と同じで死刑になりそうなところを、僕が助けてあげたんだ」

「え……」

五条の言葉に驚いたのか乙骨が小さく声を漏らすと、貴丈は小さく会釈しながら彼に言う。

「桐生貴丈。よろしく」

「あ、えつと、よろしくお願いします……」

そして差し出された右手に、乙骨は自分の手を差し出して握手を交わした。

とりあえず、まともに話してくれそうな人がいるというだけでも、彼にとつては救いなのだろう。

五条がうんうんと満足そうに頷きながら五人に言う。

「さて、これで一年は五人になったわけだけど……」

ちらりと目を向けた先には、狗巻とパンダの二人。

それなりに持ち直したようではあるが、やはり不調なのかよく見ればぶらついているし、顔色も悪い。

むうと困ったように唸った五条は、「仕方ないか」と貴丈、真希、乙骨の三人に目を向けた。

「悪いけど、今日の実習は三人でやってもらおうかな。パンダと狗巻はここで自習ね」

右手の指を三本、左手の指を二本立てながら告げられた言葉に、パンダと狗巻は申し訳なさそうに頷き、真希は露骨に「げっ」と嫌そうに声を漏らし、貴丈はいつも通りに「了解です」と返す。

「よ、よろしくお願いします……」

そんな二人に乙骨が声を掛けると、真希はじつと彼を睨むような視線を向けた。

「……オマエ、イジメられてたろ」

そして呟かれた一言に乙骨は身体を強張らせた。

その反応に「凶星か」と頷いた真希は、「まあ、私でもイジメる」と言葉を続けた。

「……真希？」

転校生にいきなり何を言い出すと、貴丈が割って入ろうとするが、何やら意味深な視線を向けられて踏み止まった。

彼女なりに何か言いたいことがあるのだろうかと思つてのことで、万が一言い過ぎた時に備えてパンダと狗巻に視線を向ける。

フオローは任せろと言わんばかりに二人が見ていないことを頷くと、真希の言葉に促すようにどうぞと手で示す。

深々と溜め息を吐いた真希は乙骨に視線を戻すと、改めて告げる。

「呪いのせいかは知らねえけど、『善人です』ってセルフプロデュースが顔に出てるぞ。気持ち悪い。なんで守られてんのに被害者ヅラしてんだよ」

その言葉に乙骨はびくりと肩を跳ね、さながら自分を守るように右手で自分の身体を抱き締める。

だが、真希の言葉はまだ終わらない。

「ずつと受け身で生きて来たんだろ。なんの目的もなくやっていけるほど、呪術^{じゆ}高専^{こうせん}は甘くねえぞ」

どこか決めつけるような声音で、淡々と告げられた言葉。

それを一言一句聞き逃さず、真正面から言われた乙骨の額には嫌な汗が流れていき、僅かに呼吸も乱れているようにも見える。

更に真希が捲し立てようとする、「流石に言い過ぎだ」と今度こそ貴丈が割って入った。

「こいつの過去をなにも知らない俺たちが、あーだこーだつて言うもんじゃねえよ」

「そうだぞ、真希！言い過ぎだぞ！」

「おおかー！」

貴丈のツツコミに対してパンダ、狗巻が加勢すると、真希は「わーつたよ」と不服そうにしながらも言葉を止め、ぼりぼりと頭を掻いた。

パンダはどんと背中が丸くなっていく乙骨の肩に手を置いた。

「すまん。アイツは少々他人を理解した気になる所がある」

「……………いや」

そしてパンダの励ましの言葉に首を振った乙骨は、俯きながらぼそりと呟く。

「本当のことだから」

どこか諦めたような、認める以外に知らないような声音で呟いた言

葉に、貴丈は溜め息を吐いた。

少々ネガティブ気味になった弟妹たちでさえ、ここまで自分を卑下にすることはなかった。

今までの経験のせいでそうなった可能性が高い——と言うよりは間違いなくそうなのだろうが、それにしただって自己評価が低すぎるような気もする。

「——まあ、とにかく」

そして、こういうのは他人があれこれ考えても仕方がないと知る貴丈はべし！と乙骨の背中を叩き、五条に目を向けた。

「乙骨の初仕事なんだし、早く行きましよう」

それから数時間後。とある小学校の校門に、貴丈、真希、乙骨、五条の四人はいた。

「——というわけで、説明を始めます！」

小学校の校舎をバックにパンと手を叩いた五条が、今回の騒動に関する資料を片手に説明を始める。

「二見ただの小学校なんだけど、こういう大勢の思い出になる場所は呪霊が生まれやすいんだよね。既に生徒が二人行方不明になつてるし」

「犯人は呪霊で間違いないんですか？」

貴丈がしゅつと挙手しながらした質問に、五条は「まず間違いなく」と返して校舎に目を向けた。

「ここからでもちらほら呪霊がいるのがわかるから、犯人はそいつらでしょ」

そしてどこか適当に決めつけるように告げると、途端に真剣な面持ちになりながら告げる。

「呪いを祓い、子供を救出。死んでたら遺体の回収。まあ、いつも通りだけど、よろしくね」

彼の言葉に真希は鞆から薙刀を取り出しながら「おう」と返し、貴丈も影から発生させた煙からドリルクラッシュャーを引っ張り出しな

がら「了解」と返す。

「ちよつと二人ともく。まだ『帳』降ろしてないんだけどく」

周囲からの視線を遮る帳は、確かに彼が言うとおりまだ降ろしていない。

詰まる所、この学生二人が武装している場面を無関係な一般人に見られれば問題になることは間違いなく、五条はそれを咎めたのだが、「じゃあ早く降ろしてください」

二人から少々の威圧感と共に告げられた言葉に、五条は「可愛くないなあ、もう」と肩を落とした。

生徒からの敬意が足りないと思いつつも、ならば格好いい所見せてやろうとすぐに気を持ち直し、片手で印を結ぶ。

『闇より出でて闇より黒く。その穢れを禊ぎ祓え』

そして詠唱を紡いだ瞬間、小学校の敷地のほぼ中央の空に黒い点が発生し、それが小学校を包むように球体状に広がり始めた。

「え、え？」と困惑する乙骨を他所に一足早く二人が校門を潜ると、五条が乙骨に声を掛けた。

「分かりやすく言えば結界みたいなものだよ。中で何があっても、外からは見えない」

「け、結界……」

「うん。と言つても内側から簡単に破れるから、危ないと思つたらすぐに出てくるんだよ？」

「わ、わかりました……っ！」

五条の言葉に緊張しながらも領いた乙骨は、律儀に待つてくれる二人の方に駆け出し、校門を潜った。

「それじゃ、くれぐれも死なないようにね！」

帳か降りきるまぎわに投げられた言葉。

いつも通りのそれを真希と貴丈は軽く片手を挙げるだけで応じるが、初めての乙骨はそうともいかない。

「え、し、死なないようにって、先生?!」

突然突きつけられた『死』という言葉に狼狽え、堪らずに振り向くが、既に帳は降りきつてしまい、黒い壁が乙骨の視界を塞いだ。

外に五条がいることはわかっていても、死ぬかもしれないという事実が揺らぐことはない。

「転校生」

そして校門の方を向いて固まる乙骨の背中に、真希が声を掛けた。慌てて振り向いた乙骨は、昇降口から現れた三体の異形を発見し、頬に冷や汗を流す。

異様に縦に長い身体には頭部がなく、頭があるべき場所には大きな目玉がひとつあるのみ。

身長ほどある腕はだらりと下がり、身体を支える足は頼りないほどに細い。

呪霊たちは三人を見つけると途端に動きを止め、そちらに身体ごと振り向く。

『は……い……る……う……』

そう言いながら縦長の身体に手を掛けたかと思えば、それを力任せに左右に挟み開けた。

一見自傷行為とも取れる動きだが、直後に身体の割れ目から顔を出した数本の歪な歯と、醜く腫れ上がった舌が顔を出し、それが口であることを知らしめる。

ぎよつと目を見開いて驚愕する乙骨を他所に、呪霊たちは三人を喰らわんと走り出す。

「ど、どどどどうしよう!?!こ、こっちに——」

そして武器も知識もない乙骨が慌てて貴丈に目を向けると、既に彼の手元には小さな赤いボトルが握られていた。

里香と打ち合った時と同じように数度振ってから蓋を開ければ、『《ラビット!》』と陽気な声が三人の頭の中に響く。

直後、貴丈がその場を駆け出したかと思えば一迅の赤い風が呪霊たちの間を抜けていき、一拍遅れてからその身体がバラバラに切り裂かれた。

「おし、終わり」

「す、すごい……。一瞬で三体も……」

ドリルクラッシャーに付着した返り血を吹き飛ばした彼の姿に、乙

骨はただ感嘆の息を漏らした。

何をしたのかはわからないが、見るからに切ることを想定していないような得物で、呪霊三体を一閃したのだ。

当の貴丈は乙骨の称賛を聞き流し、呪霊に斬りかからんとしていた真希に目を向けた。

彼女は溜め息混じりに構えを解くと「私の獲物だろうが」と悪態をつく。

そのまま薙刀を肩に担ぎながら歩き出し、「転校生がいるからつてはしやぐな」と貴丈の頭を叩いた。

ベチンと鋭い音が出たものの、叩かれたこと自体は気にしないのか「はしやいでねえ」とそこだけは否定。

そのまま昇降口を目指して歩き出した真希から視線を外し、ぽつりと一人残された乙骨の方に目を向けた。

どうすればいいのかわからず立ち尽くす彼に「次いくぞ」と声を掛け、手招きを数度。

小走りで近づいてきた乙骨が不安そうに「い、行くつてどこに……？」と問いかけてくると、貴丈は心底不思議そうに首を傾げた。

「……う、校内に決まってるんだろ」

そしてさも当然のように次の戦場を指差し、そのまま昇降口を潜った彼の姿に、乙骨は額に嫌な汗を流す。

——もしかして、僕はとんでもない人たちと一緒にいるじゃ……。そして随分と今さらなことを思いながら、もう後戻りが出来ないことも思い出して身震いした。

逃げ場もなく、下手をすれば死んでしまう。そんなプレッシャーが彼に降りかかり、無慈悲に押し潰そうとしてくる。

酷く乾いた喉を潤すように唾をのみ、意を決して昇降口を潜った。

誰もいない廊下に、コツコツと三人分の足音だけが響く。

ビクビクと怯えながら目を泳がせる乙骨を守るように、先頭を真希が、最後尾を貴丈が担当し、厳重に警戒して校内を探索しているのだ

が、

「……嫌に静かだな」

ドリルクラツシャーを片手に顎に手をやった貴丈がそう呟くと、真希は無言で頷き、乙骨は「そ、そうなの？」と疑問符を浮かべる。

お化け屋敷に放り込まれた子供のように、大量の汗で額を濡らしながら辺りを見渡す様は見えていて不安ではあるが、貴丈はすつと細めた瞳を彼に向けた。

五条の話では、彼に憑いているのは特級過呪怨霊とまで言われる、言ってしまうえば呪いの中でもトップクラスの化け物だ。

そんな見えている地雷ともいえるそれに、自ら挑むほど呪霊たちも馬鹿ではあるまい。

詰まる所、こうしてビビりまくっている乙骨がいるから、肝心の呪霊が現れない。

ありがたいような、逆に迷惑なような、複雑な表情を浮かべた貴丈は溜め息を漏らす。

「そう言えば、オマエらって何級だ」

そんな彼の耳に、真希の問が届いた。

貴丈が「なんの話だ」と切り返すと、「呪術師としての階級だよ」となに言ってるんだオマエと言わんばかりの声音で返してくる。

貴丈は額の傷跡を搔くと「四級だったかな」と曖昧な返答をした。

呪術師としての強さの指標として階級制度があるのだが、文字通り駆け出し呪術師の貴丈はその最下位である四級に位置している。

正確にはさつさと変異型呪霊を殲滅させ、そのまま使い潰そうとした上層部が、単独行動が許される二級にしてしまおうとしたのだが、五条が力尽くで四級へと落とさせたといい背景がある。

呪術のじゆの字も知らない素人を、いきなり最低でも二級相当の案件に放り込むような外道な真似をさせたくはなかったのだろうか。

そして、その都合を知るのは五条や夜蛾などの一部の教師陣だけだ。

それを知らない貴丈は「誰だって最初はそうだろ」と乙骨に目を向けた。

「そ、そうなの……？」

当の乙骨は困惑ぎみにそう返し、「どうやったかわかるの？」と重ねて問うた。

「あの目隠し野郎から学生証貰ったろ。それ見せろ」

それに真希は話が進まないことにイラついたのか、面倒臭そうな声音でそう言うと、乙骨は懐を探り始める。

そしてすぐにそれを見つけたのか「はい、どうぞ」と学生証を差し出した。

それをぶんどるように奪った真希は、「ま、どうせ四級だろうが……」と呟きながら学生証に目を向ける。

「……は？」

そしてたつぷり間を開けてから間の抜けた声を漏らした真希に、貴丈は「どうかしたのか？」と乙骨の学生証を覗きこむ。

乙骨憂太、2001年三月七日産まれ。

貴丈が同年十月産まれとすると、三月産まれの乙骨は早生まれで、学年は一つ上ということになる。

「……え、乙骨って年上なのか……？」

「そこじゃねえ……こー見ろ、こーこー」

まさかの事実には驚く貴丈の脇を肘で小突いた真希は、学生証に刻まれた文字を指差した。

本来なら生徒の階級が書かれるそこには、『特』の一文字が書かれている。

つまり、五条と同じ特級呪術師であることを、この小さな紙切れが証明していた。

「……」

日本に三人しかいなかった筈の特級呪術師。

つまり目の前でビビりまくっている青年が四人目であり、学生でありながら破格の戦力であることは間違いない。

その事実言葉に言葉を失った真希と貴丈は、学生証を眺めながらしばらく思考を停止させていた。

乙骨のおかげで呪霊が寄ってこないことに油断したからか、あるい

は何かあっても切り抜けられると驕った結果か、ともかく今の二人は油断していた。

「ふ、二人とも、後ろ……っ！」

乙骨が怯えながらも発した声に二人はハツとして振り向くと、そこには廊下を埋め尽くさんばかりの巨大な呪霊の姿があった。

人面の芋虫にも見えるそれは、ぎよろりとした目玉に三人を映すと、

『いた、いた……だき……まず……うろう……』

身体を縮め、一気に動き出した。

盛大な破碎音と共に校舎の一階から屋上用までをぶち抜き、吹き飛ばされた三人はそのまま上空へと放り出される。

「クソッ!!」

空中で体勢を整えた真希は悪態をつくくと、既に手元に煙を発生させ、ボトルを取り出している貴丈に目を向けた。

「貴丈、合わせろ!!」

「ああー」

打てば響くような返事とはまさにこの事。

彼女の言葉に即答した貴丈は、取り出したボトルをドリルクラッシュャーのソケットに嵌め込んだ。

『《ハリネズミ!》』

いつもの陽気な音声が頭の中にも中に響き、ドリルクラッシュャーの刃を茶色のエネルギーが包み込む。

三人を見上げる呪霊は口を開け、落下してくる彼等を丸呑みにせんと迫ってくるが、貴丈と真希の表情に焦りはない。

貴丈がドリルクラッシュャーの柄に取り付けられたトリガーを引き、真希は薙刀を振りかぶる。

同時にパクン!と音が出るほど見事に三人は丸呑みにされ、呪霊の口から『ごち、ごちごちごちごち、そう、さま』と勝ち誇るような声が発せられた直後、

『《レディー・ゴー!ボルテック・ブレイク!!》』

腹の中から響いた陽気な音声に、呪霊は首を傾げた。

そして腹部がぼこぼこ異様に波打ち始めると、ぶちやりと音をたてて巨大な白い針が腹を突き破った。

それも一本だけではない。二本、三本、四本と続けて腹を突き破り、濁った血が学校の校庭にぶちまけられる。

針の発生はそれだけに止まらず、その数が二桁に突入すると、

「オラッ!!」

それを足場に体内を疾走した真希が、薙刀の一閃で腹を裂いて飛び出した。

鮮血を全身に浴び、足には落下中に牙が引つ掛かったのか、深々と切られているようだが、それを気にする時間はない。

挟み開けられた穴から乙骨を肩に担いだ貴丈も飛び出し、それを合図に白い針が煙となって消えていく。

そして二人が着地を決めると、呪霊はドオオオンと重々しい音をたて、自らの血で染まった校庭に倒れた。

腹に大量の風穴を開けられても生きているのか、身体らビクビクと痙攣を繰り返し、『お、おなか、すい、すいた……』と呟いている。

「……」

たった数秒に起きた大量の出来事についていけない乙骨が、言葉もなく脂汗を流しながら目を泳がせていると、貴丈がホツと息を吐いて「降ろすぞ」乙骨に告げた。

言われた彼は「ご、ごめん!」と迷惑をかけたことを謝るが、貴丈は「気にするな」と淡々とした声で返し、容赦なく乙骨を支える手を離した。

べしやりと湿った音をたてて校庭に寝転ぶことになった乙骨は、何とも言えない表情で貴丈を見上げるが、助けられたという事実を前に何も言えない。

当の貴丈は乙骨の視線を無視すると、ポンと手を叩いて呪霊を指差した

「あとはあれの腹の中を探って、行方不明の子供を探すだけだな」

おそらく小学校に憑く呪いの主と思われるそれが、今回の事件の犯人と断定してのことだろう。

真希が「そうだな」と怠そうな声音で返すと、貴丈はちらりと彼女に目を向けた。

顔色も悪く、発汗も多く、彼女にしては珍しく呼吸も乱れている。

「……大丈夫か？」

「こんくらい、問題ねえ……っ」

貴丈が心配して声をかけると、彼女は強がるように笑いながら返すが、すぐにふらついて薙刀を杖代わりにして踏ん張った。

見てみれば、足の傷から呪霊の血が入ってしまった為か傷口が膿んでおり、目玉を思わせる気味の悪い痣のようなものが傷口から広がり始めている。

「禪院さん!？」と慌てて身体を起こした乙骨が彼女を支えようとするが、「触んな!」の一言で断られる。

「それと、私を苗字で呼ぶな……っ!」

キツと鋭い視線で乙骨を睨んだ彼女はそう言うが、やはりと言うべきかいつもの迫力に欠ける。

そんな彼女の姿に溜め息を吐いた貴丈は、仕方ないと言わんばかりに頭を掻くと乙骨に「真希を頼む」と一方的に告げて呪霊へと目を向けた。

あれを完全に祓除すれば、少なくとも真希の呪いの進行は遅くはなるだろう。

ならばさっさと済ませるのが先決と決めた彼は、呪霊の体内に戻ろうと歩き出すが、

「……っ!」

突然の頭痛に眉を寄せ、額の傷跡に手を触れた。

脳ミソを絶えず針で刺され続けるような鋭い痛みに襲われ、それを堪えるようにぎゅっと目を閉じる。

そして、その痛みには覚えがあった。

いつかに変異型呪霊と接敵した時と同じだが、初めてのあの時と比べればだいぶマシなもの。

その痛みに耐えながら意識を集中すれば、閉じた瞼の裏には他人の視界を無理やり見せられるような幻覚が映った。

醜い肉塊に囲まれたどこかだが、幻覚が見えるということは変異型呪霊がかなり近くにいることを意味している筈。

そしてそんな肉塊に囲まれるような場所は、一カ所しかない。

「——っ」

目の前の呪霊を睨んだ直後、貴丈の背筋を冷たいものが駆け抜けた。

まだ呪術師となって日は浅いが、一応何度かは実戦を経験しているのだ。

そんな戦いの中で少しずつ発達し始めた直感が、彼の身体を突き動かした。

呪霊に向かっていた足をすぐさま反転させ、後ろの二人に向けて全力で駆ける。

「な、なに?! どうしたの?!」

突然血相を変えて戻ってくる貴丈に、乙骨は再びパニックになりながら問うが、肝心の彼は何も返してくれない。

彼はそのままの勢いで真希を脇に抱え、乙骨の首根つこを掴むと、そのまま半壊した校舎の方へと走り出す。

その直後、校庭に倒れる呪霊が大爆発を起こした。

凄まじい爆音と衝撃が校庭を駆け抜け、崩れかけていた校舎の一角を完全に倒壊させる。

チツと舌打ちした貴丈はそのまま無事そうな校舎の一角に飛び込み、乙骨を少々乱暴に落とし、怪我人の真希は優しくその場に降ろす。「い、いきなりどうしたの……?」

結果的に尻餅をつくことになった乙骨が尻を擦りながら問うと、貴丈は人差し指を口に当てて静かにするようにジェスチャーで伝える。

口を押さえながらこくこくと頷いた彼は、直後響いた爆発音に肩を跳ねさせた。

弾かれるように顔をあげれば学校を囲む帳が波打ち、何かしらの攻撃が加えられたことは明白。

貴丈と乙骨が慌てて影から顔を出せば、校庭の中央に呪霊とも違う異形の姿があった。

どこか近代的な趣がある装甲に全身を包まれ、両肩には戦車をそのまま小さくしたようなものが取り付けられている。

硝煙があがっているのは、まさに帳を揺るがす砲撃を行ったからだろう。

外の五条にも状況が伝わっていればいいのだが、彼のことだから「皆、張り切ってるな」と笑い飛ばしてくる可能性もある。

小さく舌打ちした貴丈はじつと異形を睨み、再びその姿を観察。

帳を破れなかったことに不満そうに唸り声をあげるそれは、足元からキュラキュラと奇妙な音をたてながら、腰を落とした砲撃姿勢のまま移動を開始。

砂埃で見えにくいのが、足の裏が戦車のキャタピラのような形状をしている可能性が高い。

身体は動かないにも関わらず、アスリートの全力疾走をはるかに越える速度で動くその様は、端から見ればシユールなものだ。

だが帳を揺らした砲撃の威力といい、あの機動力といい、それはどちらも驚異的だ。

「乙骨」

「な、なに……?」

険しく眉を寄せた貴丈は再び身を隠すと、ポケットと顔を出したままの乙骨を影に引つ張りこむ。

「俺があれを足止めする。お前は真希を連れて帳から出る」

「え!? な、なに言ってる——」

「あれは、俺が被^被わなきやいけねえんだよ」

驚愕の表情のままに問うてきた乙骨の言葉を遮り、貴丈はドリルクラッシュャーを肩に担いだ。

そのままちらりと真希に目を向けるが、彼女はぐったりとしながらも鋭く彼を睨んできています。

「オマエ、あれを一人でやんのか……?」

「まあ、現状で戦力になりそうなの俺だけだし」

彼の言葉に真希が「……はっ」と力なく鼻を鳴らすと、「ムカつくが、その通りだよ畜生」と歯噛みした。

彼の隣で戦えないことを悔いているのか、最後まで仕事を完遂できないことを悔いているのか、それは彼女にしかわからないが。

「——とにかく、やるだけやるさ」

貴丈は真剣な面持ちでそう言うと、再び異形——変異型呪霊の姿を確認。

肩の砲身に呪力が集まり、不気味な青い光を発している。

その砲身が向いているのは、やはりと言うべきか帳だ。

五条が張った帳である以上、そう易々と破られることはないだろうが、物には必ず限度というものがある。

「時間との勝負だな」

即判断を下した貴丈は手元にラビットフルボトルを出現させ、それを数度振ってから蓋を開けた。

『《ラビット!》』と音声か頭に響いたかと思えば、彼の身体を赤い光が包み込む。

「乙骨。それじゃ、任せたぞ」

そして振り向きながら投げられた言葉に、乙骨は不安そうな表情を浮かべながら、こくりと一度頷いた。

それを見届けた彼は「よし」と呟くと、真希が彼の背中に「死ぬなよ」と言葉を投げた。

彼女からの激励に「当然」と返した彼は、二人に背を向けたままサムズアップ。

そのまま彼は何も言うことなく、一迅の風となって二人の前から姿を消した。

それを合図にどうにか気合いを入れた乙骨も行動を開始し、真希を背負って帳から出ようと歩き出す。

背後から、貴丈と変異型呪霊の激突音が響き渡った。

手に握るラビットフルボトルの効果で速度が底上げされた貴丈は、まずは様子見をかねた行動を起こした。

「おらっ！」

赤い疾風となった貴丈はすれ違い様に変異型呪霊をドリルクラッシュャーで殴り付ける。

『っ！』

まさに帳を砲撃せんと構えていた変異型呪霊は、貴丈の不意打ちを避けることもできずに直撃するが、大したダメージを受けた様子もない。

硬い手応えと腕の痺れに「マジか」と呟いた貴丈が変異型呪霊を見ると、その注意も彼に向いたようだった。

体勢を整えると共に体ごと彼の方を向き、肩の砲台に溜めていた呪力を解放。

禍々しく渦巻く青白い呪力が砲弾となり、轟音と共に放たれる。

だがラビットフルボトルの効果で速度が上がっている貴丈には掠りもせず、彼はその場を駆け出して余裕の回避。

対する変異型呪霊は半歩下がるほどの反動をその身ひとつで殺しきると両足を踏ん張り、キヤタピラを唸らせて移動を開始。

赤い軌跡を残して走る彼の様子を探りながら、両肩のキャノンから砲弾を放っていく。

もちろんそれが貴丈に当たることはないのだが、周囲に被害がないわけではない。

ただですら巨大な呪霊の影響で倒壊しかけていた校舎は、砲弾が当たる度に崩壊を加速させ、もはや瓦礫の山になりかけている。

校舎も似たようなもので、貴丈が回避した結果の流れ弾や、彼の足を狙った砲撃のおかげで、小さなクレーターが散見されるほど。

貴丈はそれに足を取られないように警戒しながら、砲撃の合間に攻撃を加えていく。

ドリルクラッシュャーによる刺突、斬撃、あるいは殴打。

攻撃の度に火花は散るものの、決定打には届かない。かつての岩のような変異型呪霊ほどではないが、目の前の変異型呪霊の防御力も中々のもの。

むしろ回避のためにラビットフルボトルを使っているため、ドリルクラッシュヤーにボトルをセットするタイミングが掴めない。

一度間合いを開けてドリルクラッシュヤーを變形。そのまま遠距離から仕留めるか。

貴丈は変異型呪霊の砲撃を掻い潜りながらそう思慮するが、駄目だなどすぐに首を振ってその作戦を除外。

ドリルクラッシュヤーにボトルをセットした段階で呪力の溜めが始まる。

その呪力を感知され、隠れた物影ごと吹き飛ばせる最大出力での砲撃など、ラビットフルボトルの速度なしでは避けられまい。

ドリルクラッシュヤーにボトルをセットしながら、他のボトルを使えばその限りではないが、試したこともないことを実戦でやるべきではない。

命がけのこの状況なら、尚更だ。

もし自分が倒れば、あの呪霊は間違いなく真希たちを追いかけられるだろう。

そうなれば二人の命の保証ができないし、自分のせいで二人の未来が閉ざされるなど死んでもごめんだ。

——これ以上、自分が原因で誰かが傷つくのは耐えられねえ。

ひどく自分勝手に、利己的な考えではあるが、実際問題彼の心は彼が思っている以上にボロボロなのだ。

家族や知人たちを自分が呪霊に変えた現実と、それらを殺さねばならない責任。

それに伴う肉体的、精神的な負担。

二十歳にも満たない子供が背負うには、あまりにも重すぎるそれは、間違いなく彼の心を蝕んでいる。

それに彼自身も気づいていないのだから、余計に救いようがない。だが、だからこそ、彼は止まることを知らない。

ラビットフルボトルの力を最大限に生かし、一撃入れては距離をとり、砲撃を回避して更に一撃をくわえる。

文字通りのヒットアンドウェイ戦法を主軸に、変異型呪霊を一方的に攻撃を加えていく。

一撃、二撃と最高速度を保ったまますれ違い様に斬りつけ、変異型呪霊を翻弄するものの、やはり決定打には欠ける。

フルボトルの力を乗せていない、ドリルクラッシャー単体の攻撃力では、変異型呪霊の装甲を破れないのだ。

ざっ！と地面を擦りながら急停止した貴丈は、いくら斬っても堪えた様子を見せない変異型呪霊の姿に舌打ちを漏らした。

——やりたくはねえけど、二本同時に使わなきゃ駄目みたいだな……。

そんな思考が彼の脳裏に通り、ほんの一瞬迷う素振りを見せた。

一本ずつ使う分にはなんの問題もないが、二本使えばどうなるか。

五条はフルボトルは変異型呪霊が蓄えた呪力を貴丈が取り込み、後に構築術式で生成しているものだとは仮定していた。

それが事実だとすれば、フルボトルは変異型呪霊の力を貴丈の身体に宿す触媒とも言える。

一本なら問題ないが、二本、三本と再現なく同時に使ってしまったら、自分はどうなってしまうのか。

最悪変異型呪霊となり、脱出目前の真希や乙骨、帳の外にいる五条に襲いかかる可能性もある。

友人や恩人を、自分の手で傷つけたくはない。

そんな迷いが二本目のフルボトルを取り出そうとした手を止め、変異型呪霊が呪力を溜めたことを合図に再び移動を開始。

彼がいた場所に砲弾が当たり、凄まじい爆発音と衝撃が貴丈を襲う。

歯を食い縛ってそれを耐えながら、爆煙を突っ切った貴丈は、ついに覚悟を決めて二本目のフルボトルを取り出そうとした瞬間だった。

「うう……」

貴丈でも、変異型呪霊でもない、誰かの呻き声が彼の耳に届いた。

弾かれるようにそちらに目を向けたのは、何も貴丈だけではない。変異型呪霊もまた身体ごと振り向き、その呻き声の主へと目を向けた。

先ほど吹き飛ばされた大型呪霊の、大きめの肉片の下。

そこからどうにか這い出てきた少年二人。

おそらく、五条が言っていた行方不明になっていた生徒二人だろう。

一人は意識がないのかぐったりしているが、もう一人はかろうじて意識を保っているようだ。

生きていたと安堵したところだが、よく見れば二人の身体には真希の痣にも似たものが浮かび、呪いを受けているのが目に見える。

だが、今はそれどころではない。

『おおおっ！』

変異型呪霊は既に生徒二人に砲身を向け、既に呪力のチャージを開始している。

今までの交戦経験から、現状の火力ではいくら殴ろうとあの溜めを止めることは不可能。

ならば、やることはひとつしかない。

貴丈はラビットフルボトルで強化された速度で変異型呪霊と生徒二人の間に割り込むと、取り替える時間もないと判断したのかラビットフルボトルを握ったまま、手元に水色のフルボトル——ダイヤモンドフルボトルを取り出した。

それを素早く数度振ってからドリルクラッシャーのソケットに嵌め込み、トリガーを引く。

『《レディー・ゴー！ボルテック・ブレイク!!》』

ドリル状の刃が小粒のダイヤモンドを大量に纏い、帳内でも美しいまでの輝きを放つ。

「——っ」

同時にドクンと心臓が跳ねる嫌な感覚と、突然の悪寒に全身から汗を吹き出す、それに構わずドリルクラッシャーを地面に突き立てる。

その瞬間、貴丈と生徒二人を包み込むようにダイヤモンドが生成された。

『オオオオオオ!!』

直後、変異型呪霊の両肩のキャノンが火を噴き、貴丈が生み出したダイヤモンドに直撃した。

凄まじい爆発音がダイヤモンド内に木霊し、生徒二人の悲鳴をあげるが、貴丈はまた別の意味で表情を歪めた。

フルボトルの同時使用の弊害か、全身に刺すような痛みが絶え間なく襲い、脳も焼けるように熱い。

本来ならフルボトルを使うことで一点特化に肉体を強化するところを、ドリルクラツシャーを介しながらも二本同時に使うのは、やはりと言うべきか身体への負担が大きいようだ。

それでも、歯を食い縛って捻出した呪力をドリルクラツシャーに流し続け、防御を崩すつもりはないらしい。

変異型呪霊はなにがなんでも壁を破らんとしているのか、自棄になつたように砲撃を繰り返し、その度にダイヤモンドを包み込む爆発が起こる。

ダイヤモンドの表面が焦げ、僅かに罅が入る中、貴丈は全身が引き裂かれるような痛みを耐え、獣じみた雄叫びをあげた。

吐き出された唾液には僅かに血が混じり、鼻からも口許を真っ赤にするほどの鼻血が垂れる。

『オオオオオオ!!』

「——っ、あああああああ!!」

変異型呪霊が最大の呪力を込めた砲撃を行い、相対する貴丈は吼えながら呪力を絞り出す。

直後、凄まじい爆発音と衝撃波が帳内が響き渡り、舞い上がった砂塵が校庭を包み込んだ。

「うわあ!?!」

突然帳内を駆け抜けた衝撃に乙骨は体勢を崩し、背負っていた真希

もろともに倒れこんだ。

「づつ……、うう……！」

計らずも地面に叩きつけられることになった真希は小さく呻き、足の傷口を中心に広がる痛みをに唸る。

「ご、ごめん！だ、大丈夫!？」

乙骨は慌てて彼女を抱き起こすが、当の彼女は「大丈夫に見えるのか」と少々どころではない怒気を込めた声で返す。

そのまま貴丈がいるであろう校庭の方に目を向け、そこに広がる光景にぎよつと目を見開いた。

特大の爆弾でも落とされたようにきのこ雲が登り、パラパラと音をたてて小石が降り注いでくる。

だんだんと大きくなる戦闘の規模に狼狽えた乙骨は「は、はやく逃げないと……！」と校庭から目を離して帳の方へと目を向けるが、そんな彼の肩を真希が掴んだ。

「オマエ、本当に何しにきたんだ、呪術高专に」

そのまま彼を支えに立ち上がり、薙刀を杖代わりに歩き出した真希が向いているのは校庭の方向だ。

ふらふらとおぼつかない足取りで、それでも懸命に足を進め、あそこにいる貴丈を助けんとしている。

「私にも、貴丈にも、パンダにも、棘にも、叶えたい何かがあるから、欲しいもんがあるから、呪術高专にいんだ！」

そして血を吐かんばかりに喉を震わせ、吐き出した言葉は、本心の吐露だろう。

「オマエにはないのか!?何がしたい!何が欲しい!何を叶えたい!」

決して振り向くことはなく、背中越しに投げられる言葉に乙骨は俯き、彼女の言葉に言い返さんとするが、「僕は……」と何かを言いかけて言葉を詰まらせた。

「何か言いたいんなら早くしろ。もう足の傷口を痛みも引いた、私は戻る」

そんな彼にもはや興味も失せたのか、彼女は歩き出そうとするが、彼女の背中に乙骨の声が届いた。

「僕は、もう誰も傷つけたくなくて……。最初は閉じこもって消えようとしたんだ」

彼は俯いたまま、ポツポツと嘘偽りのない自分の言葉を、自分の意志を言葉にしていく。

「でも、五条先生に『一人は寂しい』って言われて、言い返せなかった」
恐怖に震え、上手く力が入らない膝を叩き、半ば無理やりに立ち上がる。

そのまま覚悟を決めて深呼吸をすると、一步を踏み出す。

「誰かと関わりたい。誰かに必要とされて、生きていていいって、自信が欲しいんだ」

そのまま歩を進めた彼は真希の隣に立つと、彼女はようやく彼に目を向け、先程とは違う前向きな表情にはつと鼻を鳴らした。

「——じゃあ、祓え」

そして呪術師の先達として、凜とした表情のままにそう告げた。

「祓って祓って祓いまくれ。自信も他人も、その後からついてくんだよ。呪術高専はそういう場所だ」

彼女はただそう言うのとふらりと身体を揺らし、再びその場に倒れこんだ。

やはりと言うべきか無理をしていたのか、傷口の膿は酷くなり、気味の悪い痣も濃くなっているように見える。

「禪院さん!」

乙骨が慌てて彼女を支えるが、彼女は「さっさと行け……っ」と彼の背を押した。

押されるがまま数歩前に出た乙骨は、背後で倒れた真希を見つめるが、彼女は「貴丈を頼んだ」と頼んでふっと力なく笑う。

彼女の限界が近いのだろうか、それでも乙骨ならこの状況の打破できるかと踏んでいるのだろう。

彼女の意を汲んだ乙骨は表情を引き締めると首もとを探り、首から提げていた指輪を——彼が呪われる原因となった、里香との婚約指輪を取り出した。

それをぎゅっと握り締めた乙骨は歩き出し、それを左手薬指にはめ

た。

「里香ちゃん、力を貸して」

『いい……よ……』

直後彼の背後に、異形の存在が現れた。

『ウウ……』

度重なる砲撃で消耗し、熱が溜まって赤く染まった両肩のキャノンからはしゅくと音をたてて煙が吹き出し、放熱をしているようだった。

今ので決まったと思っているのか、余裕そうに肩を回し、勝鬨をあげるように吼えるが、舞い上がった砂塵の向こうに人影を見つけ、再び警戒態勢となる。

「っ……、はぁ……。はぁ……っ」

そして砂塵が晴れるとそこにいるのは、ドリルクラツシャーを杖代わりに片膝をついた貴丈の姿だった。

背後の生徒二人に怪我はないようだが、その盾となった貴丈は満身創痍。

全身が血塗れで、頬は焼き爛れ、額から溢れた血で片目が開けられず、頬だけでなく身体中に火傷をしているのか、煙と共に生物の焼ける嫌な臭いが辺りに漂う。

「あ、あぁ……」

後ろの生徒の一人がそんな惨状に思わず失禁してしまうが、貴丈はそんなものを気にする余裕はない。

彼は爛れた頬を見せないように気を使いながら振り向き、「怪我はないか？」とに問いかけた。

意識がない片割れはともかくとして、呪われながらもどうにか意識を保っていたもう一人は無言のままこくこくと何度も頷き、無事を伝える。

「なら、よかった」

その様子にとりあえずひと安心とホッと息を吐いた貴丈は、すぐに

そして二人が再び異形に目を向けた直後、異形が雄叫びと共に動きだし、光の如き速度で変異型呪霊の細腕で捕まえた。

『オオ!?!』

反応不可能な速度で捕まえられた変異型呪霊は、どうにか抵抗しようとするをばたつかせ、なけなしの呪力を絞り出して異形の顔面に向けて砲撃を行うが、

『うううう……い……う……るさい……い……!』

それに全くダメージを受けた様子を見せない異形は、そのまま変異型呪霊を握りつぶした。

弾けとんだ肉片はやがて煙へと変わり、その煙は独りでに貴丈の影の中へと吸い込まれていく。

だが異形はそれには気を止めず、返り血で真っ赤になった手を見つめ、ニタニタと楽しそうに笑い始める。

『りか、あか、すきい』

『りか……。里香か!?!』

そして計らずも異形——特級過呪怨霊里香の真の姿を目の当たりにした貴丈は驚愕に目を見開くが、ふと違和感を感じて目を細めた。なぜかはわからない。わからないのだが、里香と変異型呪霊が重なって見えたのだ。

何でと首を傾げていると、くいくいと制服の袖を引かれた。

「あ、ああ……。」と思考の海から戻ってきた貴丈は、間の抜けた声を漏らしながら振り向けば、今度は乙骨から静かにするようにジェスチャーで指示される。

先程とは違う雰囲気纏う彼に、何か吹っ切れたかどこか喜色の孕んだ表情を浮かべた貴丈は、こくりと無言で頷いた。

そして乙骨に引かれるがまま、生徒二人と共に近場のクレーターに身を隠す。

「助けてくれたのはありがたいんだが……」

そして素直に礼を言った彼は里香の様子を確認。

彼女は『あおつ、あおはどこっ???』と言いなながら校舎をめちやくちやし、逃げ回る呪霊たちを、いつそ無慈悲なまでに殺し回っていた。

その姿に怖がって震えている生徒に「大丈夫だからな」と気遣いながら、乙骨に問いかけた。

「あれは大丈夫なのか？」

問われた乙骨は「今のところは大丈夫」とどこか不安になる返答をするが、今の貴丈にはそれだけで十分。

「……逃げるぞ。乙骨はこいつらを頼む」

そしてとにかく五条と合流が最優先と決めて、乙骨に生徒二人を任せ、素早くその場からの離脱を図る。

身体が重く、視界も霞み始めるが、ここで倒ればまず間違いなく里香の手で殺されることだろう。

だが悲しいかな、彼はもう限界だった。

走っている途中で足がもつれ、体勢を崩してしまったのだ。

「やべ……」と声を漏らしてももう遅い、思い切り重心が前に出た身体を支える体力は既になく、彼は豪快に転んでしまう。

「桐生くん！」

だが、そんな彼の首根つこを乙骨が素早く捕まえた。

生徒の一人を小脇に抱え、もう一人を背負っていながら、半ば引きずるような形で帳の外を目指して走り出す。

「それで……真希は……？」

無様に引きずられる貴丈が問うと、乙骨は「きつとこの辺に」と辺りを見渡すが、あるのは校門へと続く血の跡のみ。

それが帳の外まで続いているのを見るに、どうにか自力で這いずって脱出したのか、見える範囲に彼女の姿はない。

それに安堵したのか、貴丈は途端に気の抜けた表情になるが、こういう時に気を抜くと死ぬと何かテレビで見た気がしてすぐに気を引き締めた。

そのまま引きずられたまま校門を潜り、乙骨が帳に触れたと同時にそれが解かれた。

「や、おかえり」

そして彼らを迎えたのは目元を包帯で覆った男——五条悟。

彼の後ろの車には真希が寄りかかっており、「遅えぞ」と愚痴をこぼ

した。

いつの間にか里香の姿も消え、昼間だった筈の空も暗くなり始めている。

ボロボロな貴丈に目を向けて困り顔になった彼はやれやれと首を振り、そんな彼と子供二人を抱えてここまで来た乙骨に「頑張ったね」と労う。

照れ臭そうにする乙骨に、ずっと首根っこを掴まれている貴丈は「いい加減離してくれないか」と言いながら、深々と溜め息を吐く。

離されたら離されたでもう倒れるしかないのだが、今の貴丈にとつてはどうでもいい。

——もう、全身が痛え……。

どちらにせよ、彼の肉体は限界を迎えているのだから。

それから幾日か。

真希と生徒二名の解呪も終わり、貴丈の治療も一段落ついた頃、彼はベッドに寝転んだまま、説教されていた。

「それで貴丈。なんでいっつもキミはボロボロになって帰ってくるのかな?」

怒っている相手は五条であり、彼にしては珍しく表情も険しいもの。

大切な生徒が任務に出る度に満身創痍になって帰ってくるのだから、苦言のひとつでも言いたくなるのは当然ではあるだろう。

「なんでと聞かれても、相手が強いからとしか言いようがないんですけど……」

対する貴丈は自分の命に関わる話にも関わらずどこか他人事のように首を傾げ、そんな事をのたまった。

五条は「確かにそうだけ」と、四級呪術師にも関わらず、下手すれば一級呪霊相当の相手ばかりしている事実に基づき、一応そこには同意する。

けれどすぐに「でもさ」と返して腕を組み、貴丈に言う。

「キミって、いつも誰かを庇って死にかけるよね？前は真希、今回はあの子供達」

一度目の変異型呪霊との戦いでは、真希を庇って本来なら致命傷とも言える一撃をもらい、今回も生徒たちを庇った結果文字通り死にかけた。

そしてその自覚はあるのか貴丈は黙りこみ、小さく唸り声を漏らした。

彼としては身体が勝手に動いただけだったり、相手を死なせたくないう一心だったりするだけなのだが、やはりそこが問題なのだろうか。「別にそれが悪いこととは言わないよ？そうしなきゃ死んでたかもしれないだし、でもさ」

五条はずいっと前のめりになると、寝転ぶ貴丈に顔を近づけた。

鼻先が触れあいそうな程に近く、貴丈はあまりの近さに嫌悪感を抱いてか全身に鳥肌を立たせるが、そんな事お構いなしに五条は言う。

「死ぬ気で戦うのと、死ぬために戦うのは違うよ？忘れないでね、キミが死んだら、少なくとも守られた人にとっては傷になるんだから」

「自己評価というか、自分の優先度が段違いに低いのはわかるよ。自分が死んで誰かが助かればって思うのは、キミのしでかした事を思えばまあ当然かもしれない」

五条はそこまで言うと言顔を離し、手頃な椅子に腰かけて足を組んだ。

日本人離れたした体躯をもつ彼が、ただそれをしただけで様になるのはムカつくが、言っていることは正しいからと文句は飲み込む。

物言いたげながらもそれを堪える様子の貴丈の姿に、五条は思わず可笑しそうに笑うが、すぐに表情を引き締めて貴丈に告げた。

「もつと自分を大事にしな。少なくとも、キミには生きなきゃならぬ理由があるんですよ」

「……そう、ですな……」

五条の言葉に、貴丈は改めて目的を確認するようにゆっくりと頷いた。

最低でも家族を全員祓^{殺す}うまでは死ねないし、その後は贖罪の為に多

くの人を助けなければならぬ。

それでもし贖罪が終わりを迎えたとして、その後何をするかも考えなければならぬ。

やることも多く、考えなければならぬことも多いが、全ては自分が生きている前提での話。

死んでしまえば何もできないし、何かを考えることもできないのだから。

はあと溜め息を吐いた彼は「善処します」と一応は約束するが、五条は不満げな表情で腕を組む。

「そこは『はい!』って元気よく返事して欲しいんだけどな」

いつかにも言われたことを再び言われ、貴丈は無言のままじとりと五条を睨む。

事あるごとにそれを言うつもりなのかと、彼への批判の声が見え隠れしている。

だがその程度で狼狽える五条ではなく、パンと手を叩くと「それじゃ、僕は行くとしようかな」と立ち上がる。

ここに居るのも昼休みを利用してのこと、もうすぐ午後の授業が始まる時間だ。

「授業を受けたい気持ちはわかるけど、絶対安静だからね。自分を労りなさい」

そして身体を起こそうとした貴丈に先んじてそう告げて、その行動を制した。

「もう動けますけど」

貴丈は大丈夫だと言うが、五条は「駄目だよ」と再び彼を制す。

「今も言ったけど、もっと自分を大事にしなさい。本当に早死にするよ?」

そのまま上体を起こした貴丈の肩を押してベッドに寝かせ、ふと思いついたように「子守唄でも歌おうか?」と笑いながら問うた。

貴丈は「いらぬです」と返して諦めたように溜め息を吐くが、すぐに五条に問いかけた。

「あの里香って、何なんですか」

「何と言われても、よくわからないとしか言えないよ」

彼の問いに対し、五条の返答はただそれだけだった。

調べた限り、祈本里香は呪術師の家系というわけではない。

彼女が有力な呪術師であるなら、死後に呪いに転じ、愛する乙骨に憑いても多少なりとも納得できるのだが、

「原因不明。出自不明。謎だらけだよ」

五条は何なんだろうね、彼女と肩を竦め、「何かあった？」と質問の意図を確かめるように貴丈に問うた。

問われた貴丈は神妙な面持ちになると、里香を見たときに感じた違和感を言葉にしようと唸り、そして伝わるかどうかは駄目で元々と曖昧なままに口を開く。

「本当に、里香が乙骨を呪っているんですか……？」

「——と、どうと？」

彼の問いに五条はどこか面白いものを見る学者か何かのように、興味深そうな表情を浮かべた。

この人でもそんな顔ができるのかと意外に思いながら、貴丈は更に言葉を続ける。

「里香を見た時に胸がモヤモヤしたって言うか、デジャブを感じたって言うか、とにかく、里香と俺の家族が重なって見えたんです」

「キミの家族。つまり、言い方が悪いけど変異型呪霊と、祈本里香が重なって見えたと？」

そして告げた言葉を五条が端的に纏めて確認すると、貴丈は一度だけ小さく頷いた。

「呪う側というよりは、呪われた側のそれに見えたってことでいいのかな？」

更に貴丈が言わんとしたことを明確にすると、貴丈は「それです！」と思わず声を張り上げてしまう。

伝わるとは思っていなかった意見が届いたからか、貴丈も思いの外テンションが上がってしまったのだろう。

五条は案外子供っぽいところがあると可笑しそうに笑うが、貴丈は気にした様子もなく「よかった」と安堵の息を吐いている。

「キミが言うなら、案外そうなのかもね」

「……………どういふことですか？」

五条がどこか納得したように言うと、貴丈は首を傾げる。

まるで既にそれは言われたことがあるというような素振りを見せたのだから、疑問に思うのは当然のこと。

「憂太も同じ事を言ってたんだよね。『里香ちゃんが僕に呪いをかけたんじゃないなくて、僕が里香ちゃんに呪いをかけたのかもしれない』って」

「乙骨も同じ事を……………」

「キミたち二人がそう言うのなら、本当にそうなのかもしれない。一度、憂太については身辺調査をするつもりだよ。この際遠いご先祖様にまで遡ってね」

もちろん、貴丈もと付け加えると、今度こそ授業だからと五条は部屋を後にした。

一人残された貴丈は天井を見つめ、深々と溜め息を吐く。

「……………本当、迷惑をかけたっぱなしだな」

一度目はあの日を命を救われ。

二度目は死刑の執行までの期間を延長してもらい。

それからというもの、入学のあれこれや授業、実地実習と、何から何まで五条の世話になりっぱなしだ。

——いつか、この恩も返せんのかな……………。

一人ベッドに寝転びながら、貴丈は額の傷跡を指で搔いた。

とにかく今するべきか休むこと。

貴丈はあれこれ考えるのも面倒になったのか、頭まで毛布を被って目を閉じた。

貴丈、乙骨、真希の合同実習から時は流れ、早三ヶ月。

呪術高専東京校の校庭には、金属同士がぶつかり合う甲高い音が響いていた。

「ほらよっー！」

「~~~~~！」

相對しているのは乙骨と貴丈。

乙骨の手には抜き身の刀が握られ、金属とは別の怪しげな輝きを放っている。

彼が日本刀を使い始めたのは、三ヶ月前の里香完全顕現以降のことだ。

あの一件で里香の祓除は不可能と判断した五条と、彼女を自分が呪っているのではと仮定した乙骨が話し合い、彼女の呪いを『解く』という事態解決の方向を定めた。

だが、ただですら強力な里香という呪いはそう簡単に解けるわけもなく、長い時間かかることは明白。

そこで『呪いは物に宿ると安定する』という特性を生かし、里香の受け皿として刀を渡したのだ。

その刀に里香という呪いを込めて安定させ、できるだけ危険性を排除してから解呪の方法を探る。

その為にも、その刀を乙骨は肌身離さず持ち歩かねばならず、その扱いを練習するのは当然のこと。

問題があるとすれば、抜き身の刃で同級生に斬りかからねばならない状況だろうか。

「らっっー！」

貴丈が豪快に振りかぶってから叩きつけたドリルクラッシュヤーを、乙骨は呪力を込めた刀で受け止め、強引に押し返しながら刃を返して一閃。

貴丈は摺り足で半歩下がることでそれを避け、同時に右足を軸に回転。

ドリルクラツシャーを両手で握りこみ、野球のバットよろしくフルスイング。

「っ!!」

乙骨は反射的に刀でそれを受けるが、今度は力負けして弾き飛ばされた。

ごろごろと地面を転がるが、素早く身体を起こして追撃を迎え撃たんと構えるが、

「……い、いない!?!」

本来そこにいる筈の貴丈の姿がなく、乙骨は切羽詰まった声を漏らした。

左右に視線を向けて彼の姿を探すが、やはりいない。

直後、乙骨に影がかかり、彼はハツとして頭上を見上げた。

そこにはドリルクラツシャーを既に振りあげた貴丈の姿があり、乙骨はぎよつと目を見開いた。

だが考えるよりも速く手が動き、直後に振り下ろされたドリルクラツシャーを真正面から受け止めるが、呪力により強化された貴丈の腕力と、落下の勢いに乗せた一撃は凄まじい重さを生み、乙骨に膝をつかせる。

そのまま乙骨を押し込みながら着地した貴丈は、ドリルクラツシャーの刃に腕を押し付けて更に力を込め、押し込まんとするが、

「……っ、こんの!」

乙骨は片膝立ちの状態から、無理やり体勢を整えて貴丈の足を払った。

「うお!?」と声を漏らして僅かな浮遊感に驚き、力加減が変わったことで、競り合っていた刃同士がお互いに滑るように逸れた。

勢いで乙骨は立ち上がり、逆に膝をつくことになった貴丈に向け、刃を振るわんとするが、それよりも速く彼が動いた。

逸れた勢いで地面にめり込んだドリルクラツシャーを手放し、そのまま弱めの呪力を込めた拳を乙骨に振るったのだ。

「え……」

事前に話し、今回は武器同士での打ち合いということを決め、それ

に集中していたからこそ、乙骨は間の抜けた声を漏らした。

故に彼の拳は見事に乙骨の鳩尾を打ち抜き、ドン！と鈍い音が辺りに響いた。

「やべっ」

対する貴丈も、思わぬクリーンヒットに困惑の表情を浮かべた。

乙骨のことだから避けるか、防ぐかしてくれるとある意味で信頼していたのだが、それを裏切られる形となってしまった。

だが、勝負は勝負だからと、まともに呼吸もできずに鳩尾を押さええて踞る乙骨の後頭部にコツンと拳骨を落とす。

「かひゅ……ひゅっ！ひゅ……っ！」

「いや、わりい。ちよっと、ムキになった、かも……」

呼吸が上手くできず、口から変な音を漏らしながら抗議するように睨んでくる乙骨に平謝りすると、貴丈はやってしまったと額の傷痕を搔いた。

そのまま審判を勤めてくれていた五条に目を向け、「これは、どっちが勝ちなんです？」と問いかけた。

事前には武器同士での模擬戦だという話だったが、自分はそれを破ってしまったのだから反則負けだろうか。

顎に手をやった五条は数瞬迷うように小さく唸ると、すぐにいつもの無邪気な笑みを浮かべ「ルール違反は駄目だよね」と告げた。

その直後には横で観戦していた真希、パンダ、狗巻は「お前が言うな」と言わんばかりの視線を五条に向けるが、彼はそれを意図して無視し、貴丈と乙骨に言う。

「でも、本当の勝負にルールも何もないし、憂太にはいい経験になったんじゃない？まあ、今回は引き分けてことで」

そしてルールを破ったことを気にする貴丈の心境への考慮と、それに対して無防備に殴られた未熟な乙骨の戒めとして、引き分けという結果を二人に示した。

「うす」と頷く貴丈と、踞ったままどうにか頷いた乙骨の反応に、五条は「よし」と返して手を叩いた。

それを合図に貴丈は乙骨を担ぎ上げると、そのまま観戦席の方を目

指して歩き出す。

そのままバツチ来いと構えたパンダに乙骨を半ば投げるような形で渡し、パンダとふかふかボディーが乙骨を受け止めた。

「よくやったな」「しやけしやけ」とパンダ、狗巻に褒められるが、本人的にはまだやり足りないと思っっているのか、瞳にはやる気が満ちている。

パンダはやれやれと肩を竦めるが、「一回休みな」と告げて視線を貴丈と、彼と相對する真希へと目を向けた。

二人の間に割って入るように歩み出た五条は、二人にそれぞれ一瞥くれると言う。

「この際面倒だからもう何でもありにしちやおつか。実戦形式の一本先取」

彼の提案に二人は揃って頷くと、貴丈はドリルクラツシャーを、真希は薙刀を構え、鋭い視線で睨みあった。

その様子に満足そうに頷いた五条は右腕を振り上げ、「始め！」の一言と共に振り下ろす。

「っ!!」

直後、二人は同時に動きだし、それぞれの得物を激突させた。

甲高い金属音が辺りに木霊し、舞い上がった砂塵が二人を覆い隠すが、真希の振るった薙刀が残した鋭い銀光が砂塵を切り裂き、すぐさま二人が見えるようになる。

直後に始まるのは、瞬き厳禁の攻防だった。

薙刀を手足のように振り回し、上下左右間髪入れずに放たれる真希の猛攻を、貴丈はドリルクラツシャーを間一髪のところを割り込ませて防ぎ、時には体捌きで避け、僅かな隙を見つけては反撃を滑り込ませる。

もちろんそれも真希は防ぎ、流れのままに反撃を放ってくるのだが、それも防いで更に反撃、それに更に反撃、反撃、反撃。

薙刀の刃とドリルクラツシャーがぶつかり合う甲高い金属の音と、薙刀の長柄とドリルクラツシャーがぶつかる乾いた音が断続的に続き、二人の表情からもだんだんと余裕らしきものがなくなっていく。

瞬きすれば間違はなくそれが致命傷で、踏み込み、避け、防御、何か一つでも間違えれば負けに繋がる。

「おらっ！」

大振りに薙刀を振り抜いて貴丈を牽制。

それを避けるように半歩下がることを見越し、素早く長柄を持ち直し、間合いが開いた彼に対してすぐさま刺突。

取ったと心のどこかで思いつつ、けれどこいつならと油断なく次の行程を頭の中で組み立てる。

そして、その予想はすぐに現実となった。

半歩下がった都合上、中途半端に地面に両足をつく形になった貴丈だが、迫る切っ先に対して臆することなくドリルクラツシャーを振り抜いた。

キン！と甲高い金属音と共に薙刀が跳ねあげられ、今度は真希が体勢を崩す番だった。

「んっっ！」

身体を回転させてドリルクラツシャーを振り抜いた勢いを殺しつつ、両足を大きく開いて半身になるように構え、大きく踏み込むと同時にドリルクラツシャーを真っ直ぐ突き出す。

真希は薙刀の石突きを地面にめり込ませ、棒高跳びよろしくそれを軸に跳躍。

貴丈の頭上を大袈裟に飛び越えながら、腕力に物を言わせて薙刀を回収。

貴丈は着地の瞬間を狙うべく素早く反転し、その勢いのままにドリルクラツシャーを振り抜いた。

だが刃は空を切り、そこにいる筈の彼女の姿もない。

「マジか……っ！」

驚愕に目を見開いた貴丈は、そのまま自分の足元——着地同時に地面に這いつくばるように姿勢を低くした真希に目を向けた。

そのまま彼女の足が貴丈の足に絡み付き、首根っこを掴まれて体勢を崩されると、あとはもう流れのままだった。

あっという間に地面に引き倒された貴丈の額に、ゴッ！と鈍い音を

たてて薙刀の石突きが叩きつけられた。

「あだり！」と悲鳴を漏らす貴丈に、真希は「まず一本だ」と得意気な笑み。

「はい、そこまで」

同時に五条が二人を手で制し、それを合図に組み付いていた真希は貴丈から離れた。

額を押さえながら悶える彼に背を向け、ある程度離れると振り向き、すぐさま薙刀を構えた。

「続けんだろう？」

「当然」

そして挑発するように手招きしながらの問いかけに、貴丈はすぐさま頷いて立ち上がる。

鈍い痛みが広がる頭を振って、一度だけ深呼吸。頬を伝う汗を乱暴に拭い、身構える。

そして五条の始めの合図と共に、二人は再び激突した。

「すごい……」

真希と貴丈の模擬戦を観戦していた乙骨は、不意にそんな感想を漏らした。

隣のパンダもまた同じように「すごいよなあ」と気の抜けた声を漏らし、狗巻も「しゃけ〜」と同調するように肯定を意味するおにぎりの具の告げる。

天与呪縛——フィジカルギフトッドの効果で常人離れた身体能力を誇る真希に、フルボトルなしの純粹な呪力による強化のみで食らい付く貴丈の姿は、ある意味では異常に見えるだろう。

呪術に触れ始めておよそ半年。たかが半年と嗤う者もいるだろうが、その半年で貴丈は加速度的に強くなっている。

それは五条の教えのおかげもあるだろうが、やはりいい練習相手もいるからこそだろう。

「そういえば桐生くんも真希さんって、その、どんな関係なの……？」

そんな二人を見ていた乙骨が、不意にそんな質問をパンダと狗巻に投げ掛けた。

なぜその質問をしてきたのか、何より二人が目の前にいるこの状況で聞いてきたのか、様々な疑問が湧いてくるが、

「……………っ!!」

問われた二人は表情もろとも身体を強張らせ、慌てて貴丈と真希に視線を向けた。

当の二人は戦闘に集中しているのか、乙骨の声は聞こえてはいないようだ。

その様子にホッと安堵の息を吐いたパンダと狗巻は、ずいっと乙骨と額を合わせるほどに顔を近づけた。

二人の急接近に「な、なに？」と困惑する乙骨に、パンダは「なんでそれを聞く？」と問い返した。

「この前桐生くんの部屋に行ったら、真希さんと二人でコーヒー飲んで。すごく仲良さそうだったから」

「マジか……………」

「めんたい……………」

乙骨の返答にパンダと狗巻は神妙な面持ちとなり、ちらりと貴丈と真希に目を向ける。

貴丈が一瞬の間隙について真希を投げ飛ばしているが、素早く受け身を取った彼女には効果が薄く、そのまま高速の攻防を再開している。

大丈夫そうだと目配せしたパンダと狗巻は頷きあい、パンダが乙骨に耳打ちする。

「いいか憂太。その話題は二人の前で出すなよ。死ぬぞ」

「し、死んじゃうの……………」

「ああ。命がいくつあっても足りない」

「しゃけしゃけ」

パンダの脅すような声音での言葉に乙骨が狼狽えるが、二人の表情の本気具合から「本当なんだ」と頷いた。

「具体的に言うと、コーヒーのような何かを飲まされて、その日は腹痛に悩まされて終わることになる」

「……？コーヒーじゃないの？」

「見た目はコーヒーなんだが、味がどうにも、な」

「めんたいこ」

「な、なにそれ……」

話を聞けば聞くほど訳がわからない乙骨は困惑するばかりだが、彼らの話は八割がた真実なのだ。

真希を弄ろうものなら貴丈の部屋に連行され、貴丈のスペシャルブレンド——と言う名のクソマズコーヒーを飲まされる。

そのコーヒーの味は凄まじく、お遊び感覚で一口飲んだ五条が真顔になり、いつになく真剣な声音で苦言を呈するほど。

それを無理やりカップ一杯分を飲まされるのだ。死を覚悟するほどの苦味と、それを拒絶せんとする胃腸が悲鳴をあげる。

その日と下手すれば翌日も腹痛に悩まされ、まともな生活を送るの
は不可能になる。

そんな兵器ともいえるそれを、貴丈はほぼ毎日のように生み出し、彼と、おそらく真希の二人で消化しているのだ。

そして乙骨は、その場面に遭遇してしまったのだろう。

「飲んだことがないなら、飲まないように立ち回ることだな。あれは飲まない方が身のためだ」

パンダの最終忠告に狗巻はうんうんと頷き、頑張れよと言わんばかりにぐっと親指を立てた。

直後校庭から二人の悲鳴が漏れ、それにつられた三人がそちらに目を向ければ、何がどうなったのか二人が重なりあうような形で転倒していた。

真希の胸に貴丈が顔を埋める形で倒れ、見事に覆い被さっている。

あれは貴丈が真希に殴られる……と乙骨は顔を青ざめるが、真希は「重い、どけ」と拳ではなく棘のある言葉で彼を攻撃し、貴丈も「わりい」と返して気にした様子もなく身体を起こした。

何と言うべきか、随分と慣れているように見えるそれに乙骨は再び首を傾げ、

「……結局二人って、どういう関係なの」

再びパンダと狗巻に問いかけた。

思春期の青年である乙骨は、やはりそういった話題が気になるのか、どうにか話を聞き出さんとするが、二人は口到人差し指を当てて静かにするように彼に伝えた。

これ以上首を突っ込めば、まず間違いなく二人からの天誅が下る。故に二人が取った手段は黙秘。口は災いの元なのだ。

「野郎三人がくつついて、何やってんだ？」

だがそうやって密集していたおかげで悪目立ちしたのか、真希が薙刀を肩に担ぎながら三人の方へと近づいた。

真希に伸された貴丈は奥でダウンしており、五条にどこからか拾ってきた小枝でつつかれていた。

「で、なんの話をしてんだ？」

その様子を流し目で一瞥くれた真希は三人に問うが、パンダと狗巻は再びの黙秘。

流石の乙骨も怒らせたら危ないとわかるのか、「な、なんでもないとはいへず。」

ふうんと疑うような視線を三人に向けるが、話しても埒が明かなく思ったのか、「まあいい」と話を切り上げた。

「それで、次の相手は誰だ？」

そしてパンダと狗巻に目を向け、挑発するような笑みを浮かべる。

「よし、憂太にいいところ見せてやる」

それに応じたパンダが腕を曲げて力瘤をつくる。

その背に乙骨が「頑張つて」と声援を送り、狗巻も彼に「めんたいこ」と声援だろうおにぎりの具を告げた。

「……頑張れ」

そして身体中を土と砂利で汚した貴丈が入れ替わりで戻ってくる。と、どかりとパンダがいた場所に腰を下ろした。

パンパンと身体を叩いて汚れを落とすものの、やはりと言うべきかそんなもので落ちるような汚れではない。

「お疲れ様」

「しゃけ」

そんな彼に乙骨と狗巻が労いの言葉をかけ、慰めるようにポンと肩に手を置いた。

はあと溜め息を吐いた貴丈は「また負けた」と肩を落とし、ポリポリと額の傷痕を搔く。

すると不意に五条の携帯が鳴り始め、それを取ると共に二三やり取りをした彼は、心底面倒臭そうに溜め息を吐いた。

「パンダと真希、貴丈はこのまま鍛練をしてもらって、棘にご指名の依頼だ」

五条の指示に狗巻は「しゃげ」の一言で応じると、五条はそのまま乙骨にも目を向けた。

「憂太も一緒に行つといで。君の目的のためには、色んな呪術を知る必要がある。棘の呪言はいい例だ」

「は、はいー」

その言葉に乙骨は緊張の面持ちで頷くと、狗巻に「頑張ろうね」と声をかけ、狗巻は「しゃげ」と笑顔混じりに応じた。

それを見つめた貴丈はどこか微笑ましいものを見るような優しいげな視線を二人に向け、嬉しそうにすつと目を細めた。

乙骨はこの三ヶ月でだいぶ前向きになってきた。笑顔を見せる機会も増えてきたし、里香の呪いを解くという明確な目的が見つかったからは目にも覇気がある。

——俺は、どうなんだろうな……。

そんな彼の姿に、貴丈はそんな自問をした。

目的はあれどそれはあまりにも遠く、血にまみれ、終わったところで何かあるというわけでもない。

彼はゆっくりと目を伏し、小さく溜め息を漏らした。

都内某所。

とある宗教団体の本部。

ここ数年で規模を大きくさせ、決して少なくない金銭が納められるその宗教には、はつきり言って謎が多い。

そんな宗教の教祖として崇められ、多くの信者から絶大な信頼を寄せられているのが、日本に四人いる特級呪術師の一人にして、百を超える一般人を呪殺した最悪の呪詛師——夏油傑げとうすくろだった。

前髪の一部をさながら触手のように前に垂らし、教祖らしく袈裟を着る彼は、今日も人当たりのいい笑みを浮かべながら、信者たちの悩みを解決していた。

もつともその笑顔は相手を油断させる仮面にすぎず、彼らの悩みと言っても呪霊絡みから夏油の術式である呪霊操術——その名の通り、呪霊を操る術式だ——を用いて自らの手駒へとする程度。

呪霊が絡んでいなければ、何か適当な事を言っ解決したような気分させるだけだ。

「やれやれ、呪術も扱えない猿共の相手も疲れるよ」

そして信者たちを返し、室内が身内のみになったことを良いことに、夏油は信者たちを猿の一言をもって断じた。

彼の思想、それを言ってしまえば呪術師至上主義。

力を持つ呪術師が、何の力を持たない一般人を守るために命を懸け、時には命を落とすという現状に嫌気が差し、術師にして人を呪う存在——呪詛師になった過去を持つ。

そして付け加えるなら、かつては五条と肩を並べた学友にして、ただ一人の親友でもある。

「素が出てますよ、夏油様」

「!!」

やれやれと首を振っ先ほど調伏した呪霊が転じた黒い球体を手のひらで転がしていると、彼の側近である女呪詛師——菅田真奈美すだまなみが声をかけた。

気を許している相手である彼女からの不意な呼び掛けに、夏油が思わず驚いた素振りを見せるものの、菅田は気にせず告げる。

「あの娘を除いた幹部が揃いました、会議室へ」ミーティングルーム

それを聞いた夏油はどこからかスプレー型の消臭剤を取り出し、それを自分の身体に吹き掛け始める。

「……何をなさっているのですか？」

「除菌消臭。皆に猿の臭いが移るといけない」

それを全身くまなく浴び終えた夏油は、信者たちを前にした時とは違う柔らかな笑みを浮かべた。

「嬉しいなア。いつぶりかな、全員集合は」

信者^{猿共}を前にした時とは違う、本当に嬉しそうな声音でそう口にした彼は、ふと思いついたように菅田に告げる。

「そうだ。久しぶりに皆で写真を撮ろう。一眼どこだっけ」

彼の問いかけに彼女は「こちらに」と返しながら一眼カメラを取り出し、夏油は「ありがとう」と礼を言いながらそれを受け取った。

そして何を思っただか菅田の肩を抱いて身体を密着させると、カメラを自分たちに向けて構え、そのまま自撮りを始めた。

「夏油！貴様あ!!」

そんな二人の耳に、ばたばたと騒がしい足音と、彼らからすれば聞くに耐えない猿の声が耳に届いた。

何事とそちらに目を向けた二人の視界に飛び込んできたのは、汗びっしょりのままこちらに走ってくる中肉中背のスーツ姿の男。

「これはこれは金森さん。そんなに慌ててどうされました？」

そんな彼に内心面倒に思いながら営業スマイルを浮かべて対応した夏油に、金森と呼ばれた男は必死の形相で告げる。

「とぼけるな!!早く儂の呪いを祓え!!オマエにいくら払ったと思ってる!!」

「いくら?」

必死な金森とは対照的に落ち着き払った様子の夏油が菅田に問うと、彼女は手元のタブレットを弄り、金森の情報にざっと目を通した。

「一億とんで五百万ですね。しかし、ここ半年間の寄付はありません」

「あーあ。もう限界かな」

彼女の言葉に夏油はどこかわざとらしくそう言うと、金森は喉からコヒュー、コヒューと気味の悪い音を漏らして乱れた呼吸を繰り返しながら「何を……言っ……」と夏油に問うた。

問われた夏油は持ったままだった黒い球体を飲み込むと、「猿にはそれぞれ役割があります」と前振りしてから説明を始めた。

「金を集める猿と、呪いを集める猿。信者たちが後者なら、あなたは前者。そして、そんなあなたにお金がないなら、もう用済みです」

「ふ、ふざけるな！ 儂がオマエに一体いくら——」

「一億とんで五百万と、さつき言いましたよね」

胸ぐらを掴まん勢いで自分に詰め寄ってくる金森に、夏油は心底面倒臭そうに肩を竦めた。

これだから馬鹿な猿共は嫌いなのだど、営業スマイルさえも止めて相手を威圧する冷たい表情になる。

細められた瞳に金森は映ってはいるものの、彼のことを人間とは欠片も思っていない。

事実夏油は、金森をそこにある何か——石ころ程度にしか認識していないのだろう。

邪魔者にはさつさと消えてもらおうと術式を発動しようとする、不意に金森の背後に人影が現れた。

「おじさん、邪魔」

ペしペしと肩を叩かれた金森が振り向くと、そこには一人の少女がいた。

年は十三か、十四ほどの、中学三年生ほどに見える。

だが年の割りには高めの身長や、確かな膨らみがある胸部。それらを強調するような黒いワンピースに、肩に掛かるほどに伸びた濡れ羽色の髪。

年齢不相応の格好と身体付き、そして落ち着き払った表情のおかげで、随分と大人な雰囲気醸し出している。

「な、なんだオマエは？！ 今は儂が話しているのだ!!」

だが、話を遮られた金森からすればどうでもいい。

彼は彼女を無視して再び夏油の方に振り向くと、少女は溜め息を吐いて夏油と菅田の方に目を向けた。

二人揃って首をかつ切るようなジェスチャーをしたことを確認し、再びの溜め息。

「二回も言わせないでください」

そしてパチン！と指を鳴らすと、金森の身体が燃え上がった。

「っ!」

一瞬にして火だるまになった金森は、その一瞬で肺と喉を焼かれて声を出すこともできなくなり、悶え苦しみながらその場に崩れ落ちる。

それを興味なさげに見下ろした少女が再び指を鳴らすと、火の勢いが一気に強まり、金森を灰も残さずに焼き付くした。

後に残ったのは人型の焦げた跡と、生物が焼けた鼻につく臭いのみ。

「人の話は聞いた方がいいですよ?」

そして誰に言うわけでもなく、微笑みながら告げた彼女は夏油と菅田に目を向けた。

菅田が「待つていましたよ」と、さながら妹や娘にするように微笑みを返すと、少女は「えへへ」と嬉しそうに綻ぶような笑みをこぼす。

「ちよつと遅くなっちゃいましたけど、逆に良かったですかね?」

足元の焦げた跡を見下ろしながら、彼女は小さく首を傾げた。

別に用があつたというわけでもなく、単純に道に迷っただけのことなのだが、遅れたおかげで先ほどの場面に出くわしたとなれば、ある意味では正解ではあつたのかもしれない。

「さて。君も来たことだし、行こうか」

そして菅田と少女のやり取りを微笑ましそうに見ていた夏油が、申し訳なさそうにそれに割り込みながら告げた。

菅田が「はい」と表情を引き締めながら返事をし、少女が「は〜い」と間延びした返事をする、夏油を先頭に歩き出す。

そしてたどり着いた扉を開け放ち、既に部屋に待機していた面々に一人ずつ視線を向ける。

後ろに控える少女と同年代に見える、金髪と黒髪の少女二人。

上半身裸だが、胸を隠すようにハート型のシールを貼っている、どこか女々しい雰囲気を持つ筋肉質な男。

顔の右半分には火傷と思われる大きな傷痕を残している男性。

サングラスをかけた長身の黒人男性。

そして、部屋の片隅でタブレットを弄っている白衣を羽織った壮年

の男性。

「時がきたよ、家族達」

彼の一言にどこか気を抜いていた彼らの表情が引き締まるが、夏油の背後に控えていた少女が怪しげな笑みを浮かべ、白衣を羽織った男性がそれを窺めるように睨み付けた。

その視線に気付いた少女は頬を膨らませて不機嫌そうにするが、夏油はその姿に苦笑するが、すぐに表情を引き締めて家族達に言う。

「猿の時代に幕を下ろし、呪術師の楽園を築こう」

——まずは手始めに呪術界の要、呪術高専を落とす。

彼は淡々とした声音でそう告げると、室内の全員が一斉に頷いた。

ここに集った呪詛師全員が、夏油が目指す楽園——呪術師のみが生きる世界を夢見ている。

その果てにある、呪霊のいない世界を夢見ている。

その世界で家族全員で団欒することを、夢見ている。

彼らの覚悟と結束は強く、生半可なことで揺らぐことはあるまい。

目的こそ九十九と同じではあるが、その仮定で流れるであろう出血を彼女は拒んだが、彼らはそれを受け入れて地獄を作り、その先に楽園を築こう築くことを決めた。

「——クラッシュ・アンド・ビルド。破壊と創造は表裏一体だな」

白衣の男性がぼそりと呟くと、夏油が「その通り」と笑みながら頷いた。

「そういったことは人類よりも上位の存在——『神』がすることだと猿

共はいうが、我々呪術師という上位者がいる以上、神は必要ない」

夏油は家族を見渡しながら真剣な声音で面持ちでそう告げるが、すぐに破顔して無邪気な笑顔を浮かべた。

「まあ、私は神なんてものになるつもりはないけど」

面倒臭そうだしねと苦笑した彼に釣られ、家族たちも笑みをこぼす中、夏油の背後に控えていた少女が白衣の男性に近づいた。

「その呪術高専って場所に、お兄ちゃんがいるんだよね？」

「ああ、勿論。調べもついている。それに夏油のことだ、近い内に宣戦布告に伺うのではないか？」

「なら、その時に着いていけばいいか」

「急ぐことはない。君に会えるだけで、彼も喜ぶ筈だ」

あごに指先を当てて考え込む少女の頭を撫でてやりながら、白衣の男性は柔らかな笑みを浮かべた。

くすぐったそうに目を細めた少女は「そうだよね」と嬉しそうに笑った。

「楽しみだな、どんな顔するかな、何て言ってくれるかな、ぎゅってしてくるかな」

——早く会いたいな……。

愛してやまないのに、もう半年近く会えていない最愛の兄の姿を脳裏に思い浮かべ、思わずだらしない笑みをこぼした。

その気味の悪さに仲間達は僅かに引いているが、少女は全く気にする素振りを見せず、ポケットに手を突っ込んだ。

持っているだけで兄と会わせてくれるお守りであり、彼女を呪術師足らしめる力の源になる物を取り出し、それを部屋の照明に透かした。

不死鳥を模した紋様が刻まれた赤いフルボトルが照明の明かりを反射し、怪しげな輝きを放ち、じつと彼女を見下ろしていた。

呪術高専東京校。

吐く息に白く色がつき、寒さを凌ぐようとマフラーや手袋を引っ張り出し、出来ることなら暖房の利いた部屋に一日中を籠っていた季節。

そう、まさに冬であった。

寒空の下でマフラーで口元までを隠した貴丈は、ふと空を見上げ、小さく首を傾げた。

なんだろうか。何かに見られているような、何か近づいてきているような、妙な気配を感じるのだ。

「……？」

そして校舎に行こうと隣を歩いていった乙骨も足を止め、空を見上げているのだから余計に怪しいというもの。

「どーした、二人とも。揃って空なんか見ちゃって」

そんな二人に気付いたパンダが二人に声をかけ、二人を真似て空を見上げた。

生憎の曇り空で、隙間から青空がほんの僅かに覗いている程度。

星空ならまあ見上げてもいいかもしれないが、代わり映えしない曇った空を見ていて何が楽しいのか。

「……で、どったの」

そしてすぐに空から視線を外したパンダが二人に問うと、二人は言葉に困ったように顔を見合せた。

「なんか、嫌な予感がする」

そして貴丈が告げた言葉に乙骨が頷いて応じると、パンダは眉を寄せて神妙な面持ちとなった。

「憂太だけなら気のせいだ、で済ませるんだが、貴丈もか……」

「なんだ、隕石でも降ってくんのか？」

「おほか」

パンダの言葉に真希、狗巻が続き、揃って空を見上げた。

分厚い雲に遮られ、日の光があまり差し込んでこないが、別に雨が

降りそうというわけでもない。

言つてしまえば何もなく、ただ雲が拡がるばかりだ。

「……気のせいなんじゃねえのか？」

ぼりぼりと乱暴に頭を搔いた真希はそう言い、「授業に遅れるぞ」と告げてパンダ、狗巻、乙骨を連れて教室に向かおうとするが、

「……」

貴丈は変わらず空を睨んでいた。

単なる勘ではあるが、やはり何かに見られている気がして仕方がないのだ。

「おい、貴丈！置いてっちまうぞ！」

そしてその場から動こうともしない彼の姿に嫌気が差してか、真希が言葉を強めて彼の腕を掴んだ時だった。

「あ……？」

不意に感じた呪霊の気配に声を漏らし、表情を引き締めた。

後ろで二人を待っていたパンダと狗巻も同じく身構えるが、乙骨だけが「え、どうしたの？」と訳もわからず疑問符を浮かべている。

特級過呪怨霊たる里香が常に隣にいる乙骨は、呪霊や呪力を探知することが大の苦手だ。

里香の力があまりにも強すぎる結果、周りの気配が読み取れないという、呪術師としてはある意味で致命的とも言える弱点を抱えてしまっている。

だが、自分を除いた四人が何かを警戒しているとなれば、彼も辺りを見渡しながら身構える程度のこととする。

「来たぞ」

そしてじつと空を睨んでいた貴丈は雲の切れ目から見える巨大な影を発見し、四人にそう告げながら手元に煙を出現させ、そのままドリルクラッシュヤーを取り出した。

そしてその影がばさばさと羽音をたてながら、五人の視界に現れた。

それはまさに巨大な鳥であった。二対の羽を巧みに操り飛んでいる姿は不気味なものだが、下顎が妙に膨らんでいる所をみるに、ペリ

カンか何かを模した呪霊であろうか。

その鳥型の呪術は真つ直ぐに五人の元を目指して降りてくると、着地と同時にその背から袈裟を纏う男性が飛び降りた。

「関係者……じゃねえよな」

「見ない呪いだしな」

「すじん」

真希が薙刀を取り出し、パンダが首を鳴らし、狗巻が呪言を使えるように口許を見せ、それぞれが戦闘態勢に入る中、

「わー、でつかい鳥」

「……呑気すぎねえか」

乙骨が鳥型の呪霊を見ながらボケーっとそんな感想を漏らすと、貴丈が思わずツツコミを入れた。

おそらくは敵であろう相手を前に、そんな余裕があるのは頼もしい限りではあるのだが、流石に苦言を呈するのは仕方があるまい。

そんな彼らのやり取りを他所に侵入者——夏油は、着地の拍子に乱れた髪を手梳で直しながら辺りを見渡し、どこか懐かしむような声で呟く。

「変わらないね、呪術高専は」

その言葉を合図にしてか、鳥型の呪霊が大きく口を開き、中から数人の人影が飛び出した。

「うえ〜。夏油様ア、本当にココ東京オ？田舎くさア」

そしていの一飞到飛び出した金髪の少女が辺りを見渡しながらそう言うのと、次いで飛び出した人形を抱えた黒髪の少女がその背中に言う。

「菜々子……失礼……」

菜々子と呼ばれた少女は「えー」と不満げに声を漏らすと、「美々子だつてそう思うでしょ？」と黒髪の少女——美々子に問うた。

彼女は何も言わないが、代わりに二人が止まったおかげで後が詰まっているのか、上半身裸の男が二人の背を押した。

「んもうーさっさと降りなさい!!後ろがつかえてるでしょう?」

その男——というよりはオネエのラルウに押し出された二人は

「わく」とわざとらしく悲鳴を漏らし、次いで身構えている呪術高専一年五人組に目を向けた。

最初こそ興味なさそうな視線であったが、パンダを目にした途端に菜々子は「あー、パンダだー、かわいいー!!」とはしゃぎながらスマホで写真を撮り始めた。

「……なんなんだ、あいつら」

そんな彼ら侵入者の反応に、いちいち身構えている自分が馬鹿に思えてきた貴丈がそう漏らすと、パンダが「そうだ、そうだ!」と同調して乙骨の背を押した。

突然押し出された彼は「わ、わ?!」と驚愕の声をあげるが、パンダは構うことなく侵入者らに告げる。

「オマエら何者だ! 侵入者は憂太さんが許さんぞ!!」

「こんぶ!!」

そして乙骨を盾に相手を煽り始めたパンダと、彼に悪乗りした狗巻の言葉に乙骨は「……え!?!」と困惑の声を漏らし、助けを求めるように真希と貴丈に目を向けるが、

「憂太さんに殴られる前にさっさと帰んな!!」

「そーだ、そーだ! 帰れ帰れ!」

「ええ!?!」

先の二人に乗ったのか、あるいは元からそうするつもりだったのか、真希は威勢よく侵入者らを煽り、貴丈は半ば自棄になったように棒読みでそう叫んだ。

逃げ場なしとなった乙骨が余計に困惑し、誰か止めてと涙目になりながら辺りを見渡すが、現状ここにいるのは彼ら一年組と侵入者のみ。

そんな乙骨の姿に流石に悪いと思ったのか、貴丈はごほん咳払いをしてから侵入者らに告げた。

「……まあ冗談はここら辺にして、オマエら——」

そして何者か問いかけようと彼らに視線を戻した貴丈は、ゆっくりと目を見開き「え……な……」と困惑の声を漏らした。

見るからに狼狽えている彼の様子を訝しんでか、真希が「おい、ど

うした」と彼の肩を叩くが、彼は反応を返さずに「何で……」とある一点を見つめていた。

真希が彼の視線を追ってそこに目を向ければ、ちょうど鳥型呪霊の口から少女が飛び出してくる。

しゆたと優雅に着地した少女は辺りを見渡すと、すぐに貴丈を見つけてぱっと表情を明るくした。

そして我慢できなかったのか、少女はその場を駆け出す。

ラルウが「ちよつと、お待ちなさい！」と制止の声をあげるが、少女は構わずに駆け抜け、貴丈に接近。

真希が念のため迎撃せんと構えるが、少女はそれすらも眼中にないのか足を止めない。

そして真希の間合いに入り、仕方ないと彼女が薙刀を振るわんとした瞬間、少女が満面の笑みのまま貴丈に告げた。

「——お兄ちゃん!!」

「っ!」

真希がその一言に驚愕し、慌てて薙刀を振るう手を止めると、遮るものがなくなつた少女は貴丈の胸に飛び込んだ。

全速力で突っ込んできた少女を受け止めた貴丈は、偶然とはいえ叩き込まれた頭痛の痛みに耐えながら、無意識の内に少女を抱き締めた。

服越しとはいえ伝わる体温と、胸に感じる彼女の息遣いに安堵し、かつてのように彼女の髪を撫でてやる。

「ちゃんと会えた、良かったよお!!」

ぐりぐりと彼の胸に額を擦り付けて、彼の服で溢れた涙を拭いた少女は顔をあげ、にぱっと太陽を思わせる温かな笑みを浮かべた。

つられて僅かに引きつった笑みを浮かべた貴丈は、「生きてたのか……?」と少女に問うた。

「見ての通りだよ。ふふっ、変なこと言わないでよ」

彼の問いかけに可笑しそうに笑った少女は彼の頬と、額に残された傷跡を撫でた。

さながら愛撫のように優しくな手つきには、彼に向けられた純粹な

好意のみが込められ、彼と親密な関係なのは見ればわかる。

「貴丈、こいつ何者だ」

そしてなんの説明もなく進むこの状況に嫌気が差してか、真希が貴丈にそう問うのだが、

「…お兄ちゃん、誰この人。私のお兄ちゃんに馴れ馴れしくしないでくれないかな？」

途端に不機嫌になり、瞳から光が消えた少女が抑揚の消えた淡々とした声音で切り返した。

突然の変わりっぷりに面を食らう真希に、貴丈は「妹だ」と返し、「あの日、死んだと思ってたんだが……」と不思議そうにしながらも、彼女の生存が嬉しいのか、その表情はいつになく明るい。

真希は「妹、ね」と興味深そうに少女をみるが、当の少女は彼女を警戒してか、貴丈をぎゅつと抱き締めて離さない。

そして貴丈もまた彼女を守るように抱き返すのだから、二人を引き離すのはまず不可能だろう。

「あー、貴丈さん？いい加減名前くらい教えてほしいんですけど……」「しゃけしゃけ」

「僕も知りたいかな」

そして少女を気遣ってか、貴丈に対してだいぶ下手に出ながらパンダが問うと、狗巻、乙骨が彼に続き、一年組五人全員の視線が少女に集まった。

その視線を一身に浴びることになった少女だが、真希に聞かれた時ほど気にしていないのか、こほんと咳払いをしてから告げる。

「お兄ちゃんがお世話になってます。妹の桐生焰きりゆうほむらです。以後お見知り置きを」

そして少女が貴丈の妹——焰と名乗ると、律儀に彼女の挨拶が終わるのを待っていた夏油が音もなく六人に近づいた。

焰の登場とその後のやり取りに意識を向け、言ってしまうえば油断していたとはいえ、かなり離れた位置にいた夏油の接近に、誰一人として気付けなかった。

その事実には真希、パンダ、狗巻、貴丈が驚愕し、貴丈が焰を庇うよ

うに背中に回したと同時に、夏油は乙骨と貴丈の手を取った。

「はじめまして、乙骨君、桐生君。私は夏油傑」

「えっ、あつ、はじめまして……」

「……っ」

彼の言葉こそ丁寧な挨拶に乙骨は思わず返事をするが、貴丈はぎよつと目を見開いて夏油の顔に目を向けていた。

優しそうに微笑んではいるものの、先程の接近といい、警戒していたのに容易く手を握られたことといい、今まで相手した呪霊と比べれば、何もかもが規格外。

そんな相手が目の前にいて、もつと言えば片手を封じられている状況に恐怖を覚えるのは当然のこと。

つーつと頬を伝う汗を拭うこともできない貴丈の様子に気づいてか、夏油は優しい微笑みをそのままに告げる。

「そう緊張しないでほしい。ただ話をしにきただけなんだ」

彼はそう言うのと改めて乙骨と貴丈に視線を配り、そして語り始める。

「君たちはとても素晴らしい力を持っているね。私はね、大いなる力は大いなる目的のために使うべきだ考える」

「今の世界に疑問はないかい？一般社会の秩序を守るため、呪術師が暗躍する世界さ」

「……何が言いたい」

夏油の言葉をいまいち理解できず、何なら手を離して欲しい貴丈が睨みながらそう言うと、夏油はさながら友人にそうするように乙骨と貴丈と肩に腕を回し、二人を抱き寄せた。

貴丈を抱き寄せた拍子に彼と離された焰が「む……」と不満げに声を漏らすと「ごめんごめん」と軽く謝るが、話を続ける。

「つまりね、強者が弱者に適應する矛盾が成立してしまっているんだ。なんって、嘆かわしい!!!」

「万物の霊長が自ら進化の歩みを止めているわけさ、ナンセンス!!そろそろ人類も生存戦略を見直すべきだよ」

さながら政治家か、あるいは宣教師か、知らぬ者に新たな道を示す

ように高らかに彼は言うのだが、乙骨と貴丈の反応は鈍い。

いきなり現れて「一般社会の〜」とか「強者が弱者に〜」とか、一学生が考えるには少々複雑な話をしてくるのだから、首を傾げるのは当然のこと。

二人の反応にそれを察したのか、夏油は「では、要点を簡潔に言おうか」と微笑み、告げた。

「――非術師を皆殺しにして、呪術師だけの世界を作る。協力してくれないかな？」

彼の一言に、その場にいる誰も反応ができなかった。

呪術師にとって非術師は守るべき存在でもある。それを皆殺し、呪術師だけの世界を作るなど――。

「イカれてんのか？」

貴丈の口から無意識の内にこぼれた言葉は、他ならない彼の本音だった。

何の力もなく、呪霊に対して無力な人たちを守ること。

それは貴丈にとって、あの日の贖罪という意味でも大切な意味を持つし、ある意味で呪術師になれば誰もが持つ目的の一つでもあるだろう。

それを真っ向から否定し、人を殺すことをこうも堂々と言える輩はそうはいない。

故に先の一言が口から出たのだが、夏油は気にせず、むしろ楽しそうに笑い始める始末。

彼は笑みを浮かべたまま振り返り、「久しいね、悟ー!!」と手を振り始めた。

貴丈ら学生も夏油が向いた方向に目を向けると、そこには五条と夜蛾学長、そして二人に率いられた呪術師たちが各々得物を構えていた。

その中で先頭を進んでいた五条が「僕の生徒から離れてもらおうか、傑」と夏油に告げると、夏油は名残惜しそうに乙骨と貴丈から離れた。

お互いに相手を呼び捨てにし、夏油に関しては明らかに五条に対し

て友人として接するような声音だ。

そんな疑問を抱く貴丈に、離れた夏油と交代に焰が抱きつくのだが、貴丈本人が気にしない為か、他の人たちも気にも留めない。

ただ夏油だけは微笑ましいものを見るかのように笑いながら、五条に言う。

「なるほど、この子達は君の受け持ちか。聞いていた通り、粒揃いだ」

「特級被呪者。突然変異呪骸。呪言師の末裔」

乙骨、パンダ、狗巻を見ながらそう言い、次いで貴丈に目を向けた。興味深そうに、そしてどこか警戒するような視線だが、敵意の類いは感じない。

「過去に例のない、未知の術式を持った術師。私個人としては君に興味があるんだけど……」

貴丈をじつと見つめる夏油だが「むく」と不満そうな頬を膨らませる焰に気づくと、「なんにもしないよ」と誤魔化すように笑った。

そして最後に真希に目を向けた夏油だが、今までの柔和な笑みを崩し、相手を侮辱し、嘲りを含んだ笑みを彼女に向ける。

「君には何の興味も湧かないよ。禪院家のおちこぼれ」

彼女に向けてそう告げた直後、ピクリと貴丈の肩が揺れた。

——おちこぼれ？どこの誰が、おちこぼれだと……？

静かに、けれど確かに、貴丈の額に青筋が浮かび上がった。

黒い瞳に僅かな赤みが加わり、拳に呪力が集まり始めた。

「テメエ——」

それにも気付かず、真希は夏油の挑発に乗り、彼に向けて言葉を返そうとするが、それを遮る形で夏油が言葉を放った。

「発言には気を付ける。君のような猿は、私の世界にはいらな——」

『《ゴリラ！》』

どこまでも冷たく、相手を人とも思っていないであろう声音を遮ったのは、場違いな程に明るく陽気な声だった。

そして侵入者らが何事と警戒した瞬間、凄まじい快音が辺りに響き渡り、彼らの脇を人影が高速で通りすぎていった。

その人影は数度地面をバウンドし、数メートル石畳を滑ることによ

うやく止まった。

「いやー、怒らせてしまったか」

だがその人影——夏油はすぐに立ち上がると、盾代わりに出現させた結果、ぼろ雑巾となった呪霊を投げ捨てると、垂れてきた鼻血を拭った。

そして彼が目を向けた先にいるのは、赤い瞳で真っ直ぐに自分を睨む貴丈だった。

茶色に呪力に包まれた拳を振り抜いた姿勢を見るに、彼が全力をもって殴り飛ばしたのだろう。

だが生憎と夏油の反応速度を越えられず、防がれてしまったようだ。

貴丈は小さく舌打ちを漏らすと、拳に握りこんだゴリラフルボトルを煙の中に返し、代わりにラビットフルボトルを取り出す。

数度振って込められた呪力を活性化させ、蓋を開けて呪力を解放。

『《ラビット!!》』

陽気な音声と共に赤い呪力が全身を包み、全身が羽のように軽くなる。

「っ！貴丈、待てー！」

そして、彼が行おうとしていることを察した五条が彼を止めようとするが、貴丈はそれよりも早く赤い一迅の風となった。

「夏油様！」

彼の残像を辛うじて追えた美々子、菜々子が夏油に駆け寄ろうとするが、他の誰でもない夏油の手で制されることで足を止めた。

直後、貴丈は加速の勢いのままに拳を振るうが、夏油の影から飛び出した異形の手により、受け止められた。

「っ!?!」

己が出せる最高速度での拳を止められたことに、貴丈はぎよつと目を見開いて驚愕を露にするが、夏油の盾となった異形——変異型呪霊を睨みつけた。

夢で見た二色の異形に良く似ているが、あちらの複眼が兎と戦車の模していたとすれば、こちらは両目ともに龍を模している。

両腕からは牙を思わせる白い刃が生え、肩から胸にかけて金色の炎の紋様が刻まれた装甲に覆われている。

そして何よりあの夢の異形はどこか無機質で、まるで作り物のような印象があつたが、こちらは有機的で、開いた口にはいくつもの牙が並び、獲物を見つけた獣のように低い唸り声を漏らしている。

だが、それが何だと言うのだ。

貴丈もまた獣じみた唸り声をあげると、片手を掴まれた体勢のまま変異型呪霊の顔面に蹴りを入れようとするが、

『キシヤアアアアア!!』

龍の変異型呪霊の影からもう一体の変異型呪霊が飛び出した。

龍の変異型呪霊に比べて身体こそ人間に近いのだが、その頭部はさながら大きな蜘蛛のようになっており、唯一人の形をしている口から糸を吐き出した。

蹴りを入れんと不安定な体勢であつた貴丈にそれを避ける余裕はなく、彼の瞬く間に糸に巻かれ、拘束された。

「つああああああ!!」

だが貴丈は吠え、糸を弾き飛ばさんと全身に呪力をみなぎらせるが、

「ごめんね、お兄ちゃん……」

どこか切なげて、今にも泣き出しそうな焰の声が耳に届き、彼はハツとして視線をあげた。

そこには背中から炎の翼を生やした焰がおり、爪先に呪力により生み出された炎が集まっていくのがわかる。

「オマエ、まさか——」

貴丈の頭にあつた、彼女が無事であつた事への安堵が消え、代わりに湧き出してきたのは強烈なまでの罪悪感だった。

彼女は無事であつたのではない。彼女自身もまた、人の形を保っているだけで変異型呪霊に極めて近い何かが変わってしまったのだ。

その一瞬の思慮が、致命的な隙となった。

焰は爪先にありつたけの——けれど貴丈を殺さない程度の呪力を溜めると、滞空した状態のまま高速で横軸回転。

遠心力を乗せたサマーソルトキックが、糸で拘束された貴丈の顎を撃ち抜いた。

「っ!？」

そのインパクトの瞬間、呪力の炎が爆発し、彼に巻き付く糸を焼き払い、爆発の勢いのままに貴丈の身体が吹き飛ばされた。

夏油と肉薄した時と同様か、あるいはそれ以上の速度でもって戻ってきた貴丈は、その勢いのままにパンダらにぶつかりそうになるが、

「貴丈!!」

すかさず割り込んだ五条が片手で印を組み、無下限呪術を発動すると、貴丈の身体が空中でゆっくりと減速し、五条らの元にたどり着く頃には完全に停止した。

五条はそのまま貴丈を抱えて足元に降ろすと、改めて夏油と、その脇に控える龍の変異型呪霊と蜘蛛の変異型呪霊、そして焰に目を向けた。

「傑。その変異型呪霊が何なのかを知っていて、操っているんだな」

「勿論だよ。それに、彼らも私からすれば唾棄すべき猿と変わらない」

五条の問いに夏油は意味深に笑みながら応じると、焰は申し訳なきように寝かされた貴丈に目を向けていたが、

「貴丈! おい、大丈夫か!？」

「ぐ……ぐぞが……っ!!」

真希の声に血の泡を吹きながらもどうにか応じている姿に安堵の息を吐き、同時にどうも彼との距離が近い真希の姿に不満そうに鼻を鳴らした。

「ちよっ、これ顎割れてんじゃねえの!？」

「た、たかな! めんたいこ!!」

「動かないで、僕が治すから……!」

五条がいるからとパンダ、狗巻、乙骨は貴丈をどうにかしようとして駆け寄るが、貴丈は血を吐きながらも真希に支えられて立ち上がり、焰へと目を向けた。

「ぼむら……! オマエ……なんで……っ」

だがそこに敵意や憎悪の色はなく、ただひたすらに困惑し、妹の行

動の意味を凶りかねている様子だ。

その痛々しい姿に悲痛な面持ちとなった焰だが、すぐに「お兄ちゃんのためだよ」と返して笑みを浮かべた。

「お兄ちゃんが呪術師になったら、顔も名前も知らない人のために戦って、傷ついて、下手したら死んじゃうんでしょ？」

届かないとわかりつつもそつと貴丈に向けて手を伸ばし、彼のことを優しく握り潰しながら、彼女は無表情になった。

「そんなの、私我慢できないよ。私のお兄ちゃんが、他の誰かのせいで傷つくのも、死んじゃうのも、許せないよ!!」

そして無表情のまま、胸の内の感情に任せるようにそう叫ぶと、轟！と音をたてて身体から炎が溢れだし、周囲の木々に火を灯した。

隣で暑そうに手で顔を扇いでいる夏油を無視し、焰は言葉を続ける。

「お兄ちゃんが戦わなくても済むような世界にしたいくて、お兄ちゃんのことを守りたくて、私はこっちにいます。だから、お兄ちゃん……」

——ちゃんと、見ててね。

彼女は表情を引き締めて覚悟を決めると、ポケットから赤いフルボトルを取り出した。

「ほむ、ら……。それ、は……っ」

突然彼女がフルボトルを取り出したことに驚く貴丈を他所に、彼女はそれを数度振ると蓋を開けた。

『フェニックス!』

そしてその場にいる全員の中の頭に陽気な声が響き、そのフルボトルの正体——フェニックスフルボトルの存在を示す。

「ほむ……ら……」

貴丈が彼女の名を呼ぶと彼女は優しげに微笑み、フェニックスフルボトルを自分の胸に突き刺した。

身体中にバチバチと火花が散ったかと思つた直後、彼女の身体を炎が包みこみ、一瞬にして火達磨となる。

「っ……い」

突然妹が火達磨になれば、誰であろうと取り乱すというもの。

貴丈が慌てて彼女に駆け寄ろうとするが、真希に「よせて、死ぬぞ！」と腕を引かれた制された。

それでも駆け出さんと彼女の手を振り払わんとした瞬間、焰は『ハッ！』と気合い一閃と共に腕を振り抜き、炎が掻き消した。

そして現れたのは、龍の変異型呪霊とは似て非なる異形だった。

体色は赤を中心としながら、背中には折り畳まれた一対の翼を持ち、両肩には鳥の頭部を模した装甲。

頭部は鳥と人間を足して二で割ったような独特な風貌を持ち、赤い一対の瞳が貴丈を見つめていた。

『これが今の——本当の私。えっと、おじさんが言ってた名前は、「フェニックススマッシュ」だったかな?』

焰——フェニックススマッシュは夏油にそう問うと、「そう言っていたね」と頷いて彼女を肯定し、彼女を除いた変異型呪霊を指差しながら貴丈らに告げた。

「君たちが事あるごとに変異型だ、変異型だと言っているが、こいつらを調べている人曰く『スマッシュ』と言うらしい。まあ、どんな意味なのかは私にもわからないけど……」

夏油はそう言う。「わかったかな?」と五条らに問い、フェニックススマッシュを除いた変異型呪霊たちを自身の影へと回収した。

「スマッシュ?それを教えに来たわけじゃないんだろう。なにをここに来た」

負傷した貴丈を背に庇いながら五条が問うと、夏油が美々子、菜々子をはじめとした己の一派を集合させた。

そして得意気な笑みを浮かべながら、その場を集った呪術師全員に向けて告げた。

「お集まりの皆様!!耳の穴かつぼじってよく聞いて頂こう!!」

そして背後に控える仲間たちを見せつけるように両腕を広げ、さらに言葉を続ける。

「来たる十二月二十四日!日没と同時に我々は百鬼夜行を行う!!場所は呪いの坩堝^{るっぼ}東京——新宿。そして呪術の聖地——京都。各地に私たちが回収した変異型呪霊^{スマッシュ}を含めた千の呪いを放つ!!下す命令は勿

論『塵殺』だ!!!」

「地獄絵図を描きたくなければ、死力を尽くして止めにこい。思う存分に、呪い合おうじゃないか」

夏油の宣戦布告に刃の空気が一気に張り詰め、これから起こるであろう惨劇の予感に誰もが固唾を飲み、冷や汗を流す中、スマホを弄っていた菜々子が「あー!!!」と間の抜けた声を漏らした。

何事と夏油が振り向くと、菜々子はスマホの画面を見せながら言う。

「夏油様！・お店閉まっちゃう!!」

その画面は貴丈たちからは見えないが、これからどこかに行こうとしているのは確かかなようだ。

「もうそんな時間か」と菜々子のスマホの時計で現在時刻を確認した夏油はそう言うと、再び五条らに目を向けた。

「すまない、悟。彼女達が竹下通りのクレープを食べたいときかなくてね。お暇やすみさせてもらうよ」

彼はそう言うと脇に控えていた鳥型呪霊が口をあけ、菜々子、美々子、ラルウの三人が口の中に飛び込んだ。

「いやはや、あんな猿の多い所の何が——」

「このまま、行かせるとでも?」

そして鳥型呪霊の背に乗ってそのまま去ろうとする夏油に向けて、五条が冷たい声音でそう言い、片手を向けて彼らに無下限呪術を使わんとするが、

『行かせてもらわないと困るんですよッ!!』

五条の前に立ち塞がるようにフェニックススマッシュが前に出ると、握った右手に呪力を溜め、手の中に小さな火球を発生させた。

「ッ!!」

そして五条と貴丈のみがその危険さに勘づき、五条は攻撃に使うとした呪力を防御に回し、貴丈は慌てて真希を押し倒し、彼女に盾にならんと覆い被さった。

『またね、お兄ちゃん』

フェニックススマッシュはそう言うと、右手を前に突き出して火球

を放ち、それと同時に鳥型呪霊はその場を飛び立ち、その後についてフェニックススマッシュも翼を広げて飛び去った。

直後、放たれた火球が炸裂し、大量の火の矢が雨となって彼らに降り注いだ。

呪術師らが慌てて防御、あるいは回避に徹しようとする中、五条のみが右手を降り注ぐ火の矢に向けた。

「しゃらくさいー」

その一言と共に手を握った瞬間、降り注ぐ火の矢が見えない何かに凝縮されたように空の一点に集まり、終いには全て掻き消えた。

彼の術式——無下限呪術。

本来なら収束する無限級数を現実にする術式であり、薄く圧縮された無限の壁を自身の周囲に展開し、攻撃を防ぐのが主な用途だが、ただそれだけが無下限呪術ではない。

収束の力を更に強化し、より強力に、大規模に現実に発生させる術式順転——『蒼』。

それを用いることで降り注ぐ矢を一点に収束させ、全てを自滅させる。

五条がしたことはその程度なのだが、それができるのは五条しかない。

そこかしこから安堵の声が漏れる中で、貴丈に覆い被さられた真希は少々乱暴に彼を退かした。

「ぐえ……」と気色悪い悲鳴を漏らして倒れる貴丈だが、もはや立ち上がる気力もないのかそのまま地面に大の字で転がり、ぼんやりと空を見上げた。

相変わらずの曇り空だが、先程よりも雲が厚くなってきている。もうすぐ雨か、あるいは雪でも降ってくるのだろうか。

口内を満たす鉄の味と顎の痛みに耐えながら、片腕で自分の顔を隠した。

敵となった家族。

敵となった妹。

そして、御大層なことを言いながら、人の家族を利用する夏油とい

う名の呪詛師。

「……最悪だ」

何もかもを投げ出して逃げたくなるが、それも許されない状況に嫌気が差す。

そして何より、あの男にこの拳が届かなかった事実——あまりにも弱い自分に、嫌気が差す。

「おい、大丈夫か」

いつまで経っても立とうともしない貴丈を心配してか真希が声をかけるが、彼はそれを無視する形で拳を地面に叩きつけた。

「——ぶっ殺してやる」

赤く輝く瞳に映るのは、家族を利用し、悪行をなそうとする憎き呪詛師——夏油傑の姿。

あいつは必ず殺すと、誰でもない自分と、奴に利用されている家族に誓う。

自分の内側で一匹の蛇が噛っていることに、気付くこともなく。

呪詛師、夏油の宣戦布告から幾日か経ち、ついに訪れてしまった1月24日。

大半の教師、二年以上の生徒が出払った呪術高専東京校に、貴丈と乙骨、真希の姿があった。

「……なんで俺まで待機なんだよ」

その三人以外に誰もおらず、教師陣不在のため授業もない教室に、特に意味もなく集った中、貴丈の悪態が放たれた。

「あ？」と彼の声に反応した真希は「そりや当然だろ」と机に頬杖をつきながら告げた。

「オマエは術式、憂太は里香。街のど真ん中で暴走したら、敵も味方も関係なしに大惨事だろうが」

「そうだけだよ……」

彼女の言葉の意味を痛いほど理解している貴丈は何か言い返そうとするが、肝心の言葉が何も出てこずに唸るばかり。

あははと乾いた笑みをこぼした乙骨は「でも」と前置きしてから二人に言う。

「なんか、とんでもないことになっちゃったね」

椅子の背もたれに寄りかかり、ぼんやりと天井の染みを眺めながらの一言はどこか他人事で、現実味を感じていないのがわかる。

数ヶ月前までただの青年だった乙骨に、未曾有の危機が迫っていると説明したところで、訳もわからずに首を傾げるのは当然と言えば当然だろう。

貴丈は溜め息混じりに額の傷跡を搔くと、早朝の事を思い出す。

「パンダは学長に着いていって、棘は一年唯一の二級術師だからついでに連れてかれて、俺たちには待機命令。せめて変異型呪詛師の対処は俺がしたかったんだけどな……」

夏油が言うには、彼が放つ呪霊にはスマッシュ——つまり貴丈の被害者らが含まれている筈。

その対処のために連れていけと五条や夜蛾学長に頼んだのだが、

やんわりと断られてしまった。

おそらく、生徒が背負う家族殺しの罪を少しでも軽くしようという気遣いなのだろうが、そこにいるとわかっていて何もできないというのも辛い。

はあと深々と溜め息を吐いて机に突っ伏した貴丈に、乙骨が何か言いたげに口を開いたが、何も言わずにすぐに口を閉じた。

聞いていいのか、聞いてはいけないのか、その判断がつかないのだろう。

「……聞きたいことがあるなら、さっさと聞いちゃえよ」

そんな乙骨の反応を視界の端で捉えていた真希が急かすと、彼は「でも」と踏ん切りがつかないのか言葉を濁すが、

「変異型呪霊ス・マツ・シユに関してだろ？ まあ、あらかた説明はされてると思うが……」

誰でもない貴丈が、自ら話題を切り出した。

彼の問いに乙骨が一度だけ頷くと、貴丈は「そうだな」と僅かに思慮してから口を開いた。

「俺は物心つく前から施設にいてよ。それで、そこで弟とか妹とかと一緒に普通にでかくなって、学校行って、その内父さんや母さんに恩返しできればなって思ってた」

「でも、あの日になんてか知らねえけど俺の術式が暴走しちまってよ。それで、その施設にいた人たち——俺の弟妹や両親、あと施設の手伝いの人とか、色んな人を化け物スマッシュに変えちまった」

淡々とした声音で、ただ事実のみを口にした彼は、無言のままに目を細めた。

「それを全員祓殺すうのが、とりあえずの目的なんだが、あの夏油とかいう野郎……っ」

黒い筈の瞳が紅く染まり、冷たい輝きを放つ中、握りしめた拳に無意識の内に呪力が込められていく。

家族を道具同然に使うあの男の姿が脳裏によぎるだけで殺意を抱き、奴が宣戦布告に訪れたあの日の内に殺せなかった事を後悔もしている。

その後悔を払拭する最大の好機たる決戦さえも、参加を許されないとは。

無言のまま虚空を睨み、凄まじい迫力プレッシャーを放つ貴丈の姿に、真希は溜め息を吐いて彼の頭を小突いた。

ゴツ！と鈍い音と共に殴られた頭を傾け、先ほどまでの迫力を霧散させながら殴られた場所を擦る。

そして少々の怒気を滲ませながら彼女を睨むが、当の彼女は気にせずには笑うばかり。

「悟がどうにかすんだろ。あんのだが、最強なんだしよ」
「それはそうだけだよ」

彼女の言葉は確かにその通りで、余程のことがなければ五条がどうにかするだろうし、自分よりも彼が夏油と戦えばまず間違いなく勝つだろう。

それが確實だし、何より自分も安全ではあるが、それを納得できるとか問われれば答えは否。

できるなら、自分の手で決着を着けたかったというのが本音ではある。

「でも桐生くんは家族の人たちを全員祓ったら、どうするの?」

そして聞くなら今の内と判断したのか、乙骨がそう問いかけると、貴丈は途端に困り顔になった。

「さあ?まだ決めてねえ」

苦笑混じりに、どこか誤魔化すように告げた言葉は、彼の本心だった。

目の前のことへの対処で必死なのに、その先の事までを考える余裕はない。

何より、今は夏油とのことで余計に頭が一杯なのだ。

「色々と一段落したら、考えれば——」

そして苦笑のままに言葉を締めようとした間に、彼の視界にノイズが走った。

「あ……?」

思わぬ事態に間の抜けた声を漏らした彼は、何度か目を擦って具合

を確かめるが、ノイズは治まる様子を見せない。

教室にいる筈なのに、ノイズの向こうでは呪術高専の校門が見え、最低限の警備として残っている呪術師たちが、視界に入ったと同時に火だるまとなり、その命が燃え尽きていく。

そして道を開けるように脇に退いたかと思えば、すぐ後ろを歩いてきた袈裟を着た男——夏油が何か言っているのか、ぱくぱくと口が動いた。

生憎と音の情報までは流れてこないため、何を言っているのかはわからない。

「……っ」

その光景に表情を強張らせた貴丈だが、この視界にノイズが走る感覚に覚えがあった。

そう、これは変異型呪霊が接近してきた時と同じ、向こうが見ている情報がこちらに流れってくる感覚。

そして、相手を一瞬で焼き尽くす力を持ち、夏油と共に行動している変異型呪霊は、今現在知る限りでは彼女のみ。

「貴丈、どうした？」

「桐生くん？」

突然言葉を止め、神妙な面持ちとなった貴丈を心配してか、真希と乙骨が彼に声をかけるが、貴丈は「ヤバイ」と漏らし、二人に告げた。

「——本命は、ここだ」

「あ、お兄ちゃんが近くにいます」

片目を閉じ、虚空を見つめながら焰が告げた言葉に、夏油は少し意外そうな表情を浮かべた。

「彼のことだから、私を殺すと息巻いて新宿にいると思っていたんだけど、読みが外れたね」

ぽりぽりと頬を搔いた彼は、前で次々と現れる呪術師を焼き払う焰の背を眺めながら、「他には誰かいるかい？」と問いかけた。

あらかたの呪術師を焼き払った焰は立ち止まり、じっと凝らして虚

空を見つめると、「あ……」と声を漏らして僅かに不機嫌顔に。

「乙骨って人と、あとあの真希とかいう女の人もいます」

そう言った彼女の視界に映るのは、激しいノイズの向こうに辛うじて輪郭が見える人影が二つ。

貴丈がそうして見えるように、彼の術式によつて彼と繋がっている焰もまた、ある程度の制限はあれど彼の視覚を覗くことができる。

それを知らない貴丈は、友人二人とどうするべきかを話し込んでいるようだが、ノイズ越しでは舌を読むこともできない。

夏油の目的たる乙骨と、焰の目的たる貴丈。そして二人にとって共通の排除対象である真希。

何か策があるにしても、乙骨は夏油が説得するだろうし、貴丈も自分が説得するが、真希は味方にするつもりもなければ、生かしておく理由もない。

夏油の言葉を借りるなら、唾棄すべき猿でしかないのだ。

「それにしても、ここまで上手いこと策が嵌まるなんて、意外と呪術師の皆さんも馬鹿なんですかね？」

だが焰にとつてそんなものはどうでもよく、彼女は夏油に今回の作戦について問いかけた。

東京、京都を標的とした呪術テロ。

今回の作戦に騒動、表向きはそうなのだが、夏油が掲げる本来の目的は違う。

「彼らだって、やれることをやっているだけさ。私たちは身構えている彼らの脇をすり抜けて、さっさとやることをやって逃げればいい」

「私はお兄ちゃんの説得。夏油さんは——」

「乙骨くんを説得するけど、無理なら彼を殺して里香を奪う。そうすれば、私の夢に一步前進さ」

焰と夏油。二人はそれぞれの目的を再確認し頷きあうが、焰は途端に困り顔になると、深々と溜め息を漏らした。

「ここにお兄ちゃんがいたからよかったですけど、いなかったらバツクレテ新宿に直行ですよ、全く」

「あはは。そこは我慢して作戦通りに動いて欲しいんだけどね」

彼女の愚痴とも言える言葉に夏油は困り顔になり、乾いた笑みをこぼした。

本来であれば貴丈がいる筈の新宿に彼女を配置し、彼女の望み通りに兄妹対決をさせてやるのが道理かもしれないが、夏油とてそこまで鬼ではない。

愛する兄妹同士で呪いあうなど、本人らが望んでいたとしても本来であれば避けるべきだし、貴丈の術式を——非術師を^{変異型}呪霊に変化させる能力を思えば、同胞として引き入れるべきではある。

怒りの矛先である自分と、愛する家族である焰がいなければ、二人に引き合わせることを条件に多少の話し合いもできたかもしれないが……。

「呪術高専にいる以上、戦闘は避けられないかな。やれるかい？」

「大丈夫ですよ。殺してでもお兄ちゃんを連れ出します」

夏油の問いかけに、焰は自信満々な表情と声でそう返し、呪術高専の校門を見上げた。

ぱつと見た限りでは神社の門のようにも見えるが、じつと目を凝らせば結界か何かの呪力が込められ、一步踏み込めば警報が鳴り響くことだろう。

「さあ、ここからは時間勝負だ。始めるよ」

夏油は懐かしむようにその門を見上げながらそう言うと、片手で印を組んだ。

「闇より出でて闇より深く、その穢れを禊ぎ祓え」

彼がそう詠うと共に青空に黒い染みが生まれ、呪術高専の敷地を覆うようにに闇が広がっていく。

本来であれば呪霊を閉じ込め、呪術師たちを支援するための『帳』^{とほり}が、彼らを閉じ込める檻として使われたのだ。

「ふう。お兄ちゃん、今行くからね」

帳の闇に包まれる中、焰は片手でフェニックスフルボトルを弄りながら怪しげな笑みを浮かべ、悠々と校門を潜った。

勇み足で無警戒に突き進む彼女の背を眺めながら、やれやれと首を振った夏油は彼女に続いて校門を潜り、その足取りのまま校舎を目指

すのだが、

「おや、もう来たか」

もう逃げ場なしと覚悟を決めたのか、侵入者たる夏油と焰を待ち受けるように、ドリルクラツシャーを構えた貴丈と、薙刀を構えた真希が立ちふさがった。

戦える者が誰もおらず、文字通り無防備になった呪術高専。

夏油の手で帳を降ろされ、侵入も脱出も容易ではない。

だからこそ、貴丈と真希は自ら討って出ることにしたのだが、

「乙骨くんはいないようだね」

そんな二人をとりあえず無視して、夏油が辺りを見渡しながらそう問うた。

焰は思いの外早かった兄の登場に目を輝かせ、開戦のタイミングを今か今かと待ちわびている様子。

貴丈は相手を殺さんばかりの視線を夏油に向けながら、彼の問いに返す。

「あなたの術式——呪霊操術って奴が、どこまでやれるのかよくわかんねえからな。里香を操られたら、文字通り詰みだ」

「悟から聞いたのかな？でも残念ながら、私の術式だと乙骨くんと里香のように、主従制約を結んである呪霊は操れないよ」

貴丈の言葉に、夏油はさながら後輩を導く先達のような優しい声でそう返すと、貴丈は「え……」と間の抜けた声を漏らした。

ちらりと真希に目を向ければ「悟が言ってたぞ」と溜め息混じりに淡々とした声音で返され、貴丈の頬を冷や汗が垂れた。

「あいつも連れてくれば良かったな……」

そして思わず敵の前で本音を漏らしながら項垂れてしまうが、夏油は僅かに目を細めて彼の判断がある意味で正解だったと胸の内で誉めてやった。

確かに彼の術式では主従制約がある限り里香を操ることができないが、逆に言えばその制約を切ってしまうえば里香を操ることもできる

のだ。

手っ取り早く言えば、乙骨を殺してしまえば里香を呪霊操術の管理下に置くことも十分に可能。

ここに乙骨がいないというのは、戦力としては不足だろうが、乙骨の敗北と里香の暴走いうリスクを考えれば、どこかに隠れてもらうというのも妥当な判断だ。

彼の性格からして、じつとしていられずに飛び出してくる可能性もあるが、しばらくは大丈夫だろう。

「さて、話はここまでにしよう」

そうして思慮ばかりしている貴丈に夏油はそう言うと、自身の影からドラゴンスマッシュとスパイダースマッシュを出現させた。

夏油が指示を出す前に前者は拳を構え、後者はガチガチと牙を鳴らしながら、威嚇するように頭から生えた蜘蛛の足を蠢かせる。

「私は乙骨くんに用があつてね。桐生くんとも話したいが、乙骨くんの後ということだ」

夏油は貴丈を見ながら申し訳なさそうに言うと、焰が一步前に踏み出し、フェニックスフルボトルを見せつけるように差し出す。

「それじゃ、いくよ、お兄ちゃん」

彼の指示に頷いた焰はフェニックスフルボトルを振ってボトルに封じられた呪力を活性化させると、蓋を開けた。

『フェニックス!!』

同時にこの場にいる全員の耳に響く陽気な音声。

彼女はニコリと万人を魅力する優しげな笑みを浮かべるが、纏う呪力は相当なもの。

凄まじい迫^{プレッシャー}力に貴丈と真希が全身に鳥肌を立たたせる中、焰はフェニックスフルボトルを自身の胸に突き刺した。

途端に彼女は炎に包まれ、辺りを橙色の光で照らす。

『ハッ!』

締め気合い一閃と共に右腕を薙げば、現れるのは赤い鳥の異形――フェニックススマッシュだ。

ドラゴンスマッシュ、スパイダースマッシュと並び立つその姿は、

まさに怪物の軍団だ。

「それじゃ、(こ)は任せたよ」

その背後で三体の背中を頼もしそうに見つめた夏油はそう言うと、乙骨を探すためかその場から跳び、空中でエイのような呪霊を呼び出してその背に乗った。

「あ、待て……っ！」

貴丈はすぐさまドリルクラッシャーを銃モードに切り替えて撃ち落とさんと構えるが、

『グルウオオ!!』

蒼い炎を全身に纏ったドラゴンスマッシュが、爆音と共に貴丈に肉薄。

獣じみた唸り声と共に、炎に包まれた拳を振るった。

「ッ！」

数十メートルはあった間合いを瞬時に詰めてきたドラゴンスマッシュの速度に目を見開いた貴丈は、反射的に身を振った。

放たれた拳は紙一重で避けられるが、纏う炎が彼の衣服諸とも肌を焼き、生物が焼ける嫌な臭いが鼻につく。

「づ……うう……い！」

その痛みに唸った彼は、それでも男の意地としてドラゴンスマッシュの顔面にドリルクラッシャーの銃口を突き付け、躊躇なく零距离射撃。

バチュン！と呪力が弾ける音が辺りに響くが、ドラゴンスマッシュはお構いなしに蒼い炎を纏った蹴りを放った。

轟！と炎が爆ぜる音と、蒼い軌跡を残した一閃は、寸分と狂いなく貴丈の脇腹を捉えた。

「——かはっ」

咄嗟に呪力で脇腹を保護し、ダメージを最小限に抑えようとはしたものの、その衝撃たるや一瞬意識が飛び欠ける程。

そのままサッカーボールのように蹴り飛ばされた貴丈は勢いのままに塀をぶち抜き、呪術高専の周辺を囲む森の中を転がっていく。

「貴丈！」

そのまま追撃に走らんとしたドラゴンスマッシュを止めようと、その背に真希が斬りかかった。

ドラゴンスマッシュは振り向くことなく半身になってその一撃を回避。

間髪入れずに放たれた反撃の裏拳を上体を後ろに逸らすことで避けるが、それに対して反撃を打ち込む余裕はない。

真希は舌打ち混じりにその場を飛び退くと、彼女がいた場所に蜘蛛の糸が放たれ、地面にへばりつく。

『シャアアア……ッ』

いつの間にか塀の上に移動していたスパイダースマッシュは「外した」と言わんばかりに唸ると、次の糸塊を放たんと口に呪力を溜めるが、

「俺を、無視すんな……！」

がさがさと草木が揺れる音と共に、赤い光を纏った貴丈がスパイダースマッシュに踊りかかった。

スパイダースマッシュは振り向き様に口内に溜めた糸塊を放つが、貴丈はドリルクラッシュャーでそれを切り払い、手に握っていたラビットフルボトルをドリルクラッシュャーのソケットに叩き込んだ。

『《レディ・ゴー！ボルテック・ブレイク!!》』

ドリルクラッシュャーの刃を赤いエネルギーが包み込み、それが最大限にまで溜まった瞬間に一閃。

スパイダースマッシュは両手の平を合わせて大きく腕を開くと、手の平を繋ぐように数十本の糸が絡み合った極太の糸が編み出される。

ゴムのように弾力のあるそれは、柔らかくしなりながらドリルクラッシュャーの刃を受け止め、その勢いを殺しきった。

「マジか……っ」

その結果に思わず声を漏らした貴丈はドリルクラッシュャーを引くが、大量の糸に巻き付かれたそれがびくともしない。

舌打ちと共にラビットフルボトルを回収すると、名残惜しくもドリルクラッシュャーを手放し、その場から飛び退いた。

追撃に備えて身構えていた貴丈だが、意外にもそれはなく無事に石

畳の上に着地。

武器を失った貴丈はラビットフルボトルをしまい、ゴリラフルボトルを取り出し、数度振ってから蓋を開けた。

『ゴリラ！』

状況に反して陽気な音が頭の中に響き、茶色のエネルギーが彼の両腕を包み込んだ。

ゴリラフルボトルの能力で腕力を強化して肉弾戦に備えるが、スパイダースマツシユは糸を吐き出さんと構えるのみで動かない。

「なるっ……！」

じつとスパイダースマツシユの隙を伺っていた貴丈の耳に、僅かに焦りの色を感じる真希の声が届いた。

弾かれるようにそちらに目を向ければ、そこにはドラゴンスマツシユの猛攻を紙一重で捌いている彼女の姿があった。

薙刀を巧みに操り、長柄で拳を払い、反撃を放とうとしたタイミングを見計らうように蹴りが放たれ、それを防ぐことを余儀なくされる。

瞬きさえも許されぬ猛攻の中、真希は一切の余裕はない状況に置かれていた。

頬を伝う脂汗を拭うことも忘れ、無意識の内に瞬きしそうになる瞼を気合いで振じ伏せ、ひたすらにドラゴンスマツシユの攻撃を捌く。

彼女を助けんと貴丈は駆け出すが、その隙を待っていたと言わんばかりにスパイダースマツシユが糸を放ち、彼の進路を妨害。

彼がバク転でそれを避けると、体勢を整えるよりも早くフェニックススマツシユが飛びかかった。

貴丈は底上げた腕力で地面を叩き、砕いた石畳を彼女にぶつけるが、相手もただ者ではない。

『ほい』

気の抜けた声と共に放たれた火炎弾が石畳を砕き、その勢いのままに貴丈に襲いかかる。

彼は慌ててその場を飛び退いてそれを避けると、彼がいた場所に火炎弾は着弾。

至近距離で爆弾が爆発したような衝撃に貴丈の身体は容易く吹き飛ばされるが、今度は上手く受け身を決めてすぐに体勢を整えた。

『いっくよー!!』

それと同時にフェニックススマッシュは一気に上空に飛翔。

両手に炎を纏わせると、流星群の如く次々と貴丈に向けて火炎弾を放った。

火炎弾が地面に着弾するまでのほんの僅かな時間、貴丈の脳は状況を打開するべく高速で思考を回し、即座に答えを叩き出す。

ゴリラフルボトルをしまい、代わりに取り出したのはダイヤモンドフルボトル。

その蓋をすぐさま開け、音声が届く間も与えずに握りこんだ拳で地面を叩いた。

同時に彼を覆うようにダイヤモンドの形をした壁が現れ、次々と降り注ぐ火炎弾を全て防壁。

『流星、お兄ちゃん』

爆発の轟音の向こうから聞こえる賞賛の声を無視し、攻撃が止んだ頃を見計らってダイヤモンドフルボトルを煙の中に返す。

空を飛ぶ相手に対して有効なボトルはなかったかと、次の一手を思案しながらフェニックススマッシュを見上げるが、仕掛けてきたのは彼女からだった。

上空から一気に急降下し、その勢いのままに貴丈に蹴りを放つが、彼は直線的な軌道のそれを危なげなく避け、ラビットフルボトルを手元に取り出した。

着地共に始まった、攻撃を当てようと必死になって振り回される拳を避けながら、ラビットフルボトルを数度振る。

先日の顎を砕いてくれたあれは、文字通りがんじ絡めに拘束されていたからこそ直撃したが、拘束なく自由に行動できる状態であれば当たることはない。

——そもそも暴力を嫌っていた焰に、武術の心得なぞ欠片もありません。

赤い軌跡を残しながら彼女の乱打を避けきった貴丈は、無防備と

なった彼女の腹に蹴りを放ち、強引に間合いを開く。

苦しい呻き声をあげながら、蹴られた腹を押さえて後ろに下がるフェニックススマッシュ。

貴丈は赤い疾風となって瞬時に間合いを詰め、全力の呪力を込めた拳を叩き込まんとするが、その直後、フェニックススマッシュが炎に包まれたかと思うと、焔の姿に戻った。

そして満面の笑みを浮かべながら、彼の拳を受け入れるように両腕を広げた。

——お兄ちゃん、大好き!!

その刹那、まだ幼い頃に突然自分への好意を示してきた焔の笑顔が、脳裏に過った。

穢れを知らない純粹さと、太陽を思わせる明るい笑顔は、その頃の貴丈にとっても活力となる大変ありがたいものだった。

「……っ」

だが今の彼女にとって、それは大きな障害でしかない。

彼女の笑顔、彼女との思い出が、そして愛する家族との思い出が脳裏をよぎり、ほんの一瞬攻撃を躊躇い、動きを止めてしまう。

そしてその一瞬が、勝敗を分けた。

貴丈が動きを止めた一瞬の内に焔はフェニックススマッシュに変化し、拳に溜めたありつただけの呪力を炎に変換。

彼がハツとして身構えるよりも速く、フェニックススマッシュの拳が彼の腹部を打ち抜いた。

身体をくの字に曲げられた貴丈は、声も出ぬほどの衝撃と痛み、そして熱さに血を吐き出しながら、吹き飛ばされる。

そのまま近場の塀に叩きつけられた彼は、ずるりと塀に血痕を残しながらその場に倒れてしまう。

「貴丈?!」

ドラゴンスマッシュと押され気味とはいえ、一進一退の攻防を展開していた真希が、視界の端に映ってしまった彼の名を呼んだ。

そして、その無駄な行動が原因となってギリギリ保っていた均衡が破れた。

防御を固めていた真希の薙刀を払いのけたドラゴンスマッシュが、彼女の顔面に蒼い炎を纏わせた渾身の右ストレートが放ったのだ。

彼女は完全な回避は不可能と即座に判断すると、僅かに後方に飛ぶことでクリーンヒットは避けつつ、薙刀を拳と顔の間に割り込ませた。

だがその程度で殺しきれぬ程に、ドラゴンスマッシュの一撃は凄まじい。

辺りに響いた快音と、蒼い炎が爆ぜる轟音と共に吹き飛ばされた彼女は、さながら水切りの石のように地面を数度跳ね、ごろごろと石畳の上を転がる。

「く、くそ………が………っ！」

だがすぐに立ち上がった真希は、寸での所で割り込ませることに成功した薙刀を見つめ、舌打ちを一度。

凄まじい力で蹴り抜かれた刃はヒビだらけになり、あと数度打ち合えば容易く砕けてしまうだろう。

だが、まだやらねばならぬ。

「おい、貴丈！まだやれんだろうな!!」

そして、遠くで倒れ伏したままの同級生を声を荒げて煽るが、肝心の彼から返答はない。

鼻につく生物が焼けた臭いと、彼の周囲に広がっていく血の量からして、致命傷をもらったのは確実だろう。

それ程の傷をフェニックススマッシュ——焔が与えたという事実を目を剥いた彼女は、フェニックススマッシュを睨みながら言う。

「デメエ、貴丈には死んでほしくねえとか言っただけか!?このままじゃ、死んじゃうぞ!!」

先日の彼女の発言を引き合いに出し、その行動の矛盾を突き付けるが、当の彼女は不思議そうに首を傾げるばかり。

『私は他の誰かのせいでお兄ちゃんに死んでほしくないだけで、私が殺す分には何も問題ありませんよ?』

「………は?」

そしてさも当然のように告げられた言葉に、真希は思わず間の抜け

た声を漏らした。

確かに焰は他の誰か云々と言っていたが、そこに自分は含まれていないとでも言いたげな、むしろ確かにそう告げてきたのだ。

『あれ、お兄ちゃんと一緒にいたのに知らないんですか？お兄ちゃんつて、殺したスマツシユを取り込むじゃないですか』

フェニックススマツシユは不機嫌そうに、更に心底面倒臭そうにそう言うと、真希は僅かに目を細めながら、ちらりと貴丈に目を向けた。確かに彼は殺したスマツシユの力を取り込み、それをフルボトルとして生成する能力を持っている。

それを相手方も知っているのは仕方がないにしても、それがなぜ自分が貴丈を殺してもいいという結論になるのか……。

『それ、私たちも同じことができて思わないんですか？殺した相手を取り込んで、私の力の一部にしてしまうんです』

そんな口には出さずとも頭を過った真希の疑問に、フェニックススマツシユは跳ねるような声音でそう告げて、気絶でもしているのか、微動だにしない貴丈に目を向けた。

『お兄ちゃんを殺して、私が余さず取り込んだじゃえば、ずっと一緒にいられるんです。それって、とつてもいいことじゃないですか？』

「……っ！オマエ、ふざけてんのか……！」

そして告げられた、彼女の最終目標。

真希は純粹なまでの狂気を感じる彼女に畏怖しながら、碎けかけた薙刀の刃を向けた。

「そんなこと、させるわけねえだろうが!!」

真希はそう吼えるが、フェニックススマツシユは面倒臭そうに溜め息を吐き、肩を竦めた。

『あなたは殺しても取り込まないで、夏油さんの呪霊の餌にしましょう。あの人はそれも嫌がりそうですけど』

彼女がどこか適当に決めたことを教えるようにそう言うと、ドラゴンスマツシユとスパイダーススマツシユが前に出た。

状況は三対一。相手は全員格上ときた。

「やれるもんなら、やってみろよ!!」

だが彼女は折れることなく、好戦的な笑みを浮かべながら吼えた。

『オオオオオオオ!!』

『キシヤアアアア!!』

それに対し、ドラゴンスマッシュとスパイダースマッシュも威嚇するように唸り声をあげ、彼女への攻撃を再開した。

『ハザードレベル2. 8。まあ、良いところまではいったんじゃないか』

聞き覚えのない声が耳に届き、消えかけていた貴丈の意識が僅かに浮上。

先のダメージが響いているのか、碌に身体も動かせず、瞼を持ち上げることができないが、自分はどこかに横たわっているのだけがわかる。

目が開けられない以上、先程の声の主を見ることができないが、誰かいるのは確かなようだ。

『この際、こいつの身体ごとあいつに取り込ませて鞍替えするか？ハザードレベルだけで言えば、あいつの方が上のような』

その声の主は物騒というべきか、無責任とも言える内容のことを口走るが、「いや、まだここからでしょ」と少女の声がそれに待ったをかけた。

その声には聞き覚えがある。あの日、術式の暴走に巻き込まれた妹の一人の声が、聞こえたのだ。

『お兄ちゃんなら立てるよ。こんくらい、どうってことない』

『……内臓焼かれてるんだぞ？じきに死ぬ』

『あなたが治せばいいでしょ』

『現状、器の強度で言えば向こうが上だ。乗り換えられるのなら都合がいい』

『む、むむ……』

二人は何やら口論しているようだが、どうやら自分を見殺しにする方向で纏まりつつあるように思える。

貴丈は身体が動かない中、深々と溜め息を吐くが、妹の小さな手が頬を撫でた。

「でも、お兄ちゃんなら勝つよ。昔からそうだもん」

どこか懐かしむように、そして誇るように、妹の声は自信に満ち溢れている。

彼女は知っているのだ、例え勝ち目がなくとも挑むのが兄なのだ。

虐められていた妹や弟を守るために、学生とはいえ年上数人相手に殴りかかり、文字通りボロボロになりながらも殴り倒したこともあるのだ。

「大切な人を守りたい。大切な家族を守りたい。そう言ってお兄ちゃんは何回でも立ち上がれるんだもん。このくらい、何てことないでしょ?」

ぷにぷにと頬をつつき、ついでに頬を摘まみながら告げられた言葉に、貴丈の意識が僅かに覚醒する。

力が入らない拳を無理やり握り、歯を食い縛って身体を起こさんと腹筋に力を入れる。

「お兄ちゃんは誰かを倒したいとか、誰かを殺したいなんて思うのは似合わないよ」

鉛のように重い身体はびくともしないが、それでも彼は立ち上がりんと足掻き続けた。

腹を穿たれた痛み息が詰まり、焔にそれを許してしまった自分の覚悟の甘さを呪いたくもなるけれど。

「立ってお兄ちゃん。あの女の人だって、まだ戦ってるよ」

「……ま……き……っ」

妹の言葉に貴丈は掠れた声で彼女の名を呼び、ゆっくりと瞼を持ち上げた。

霞む視界に映るのは、妹の輪郭と蛇を模した複眼を持った異形の姿だった。

異形は深々と溜め息を吐くと、『仕方ねえなあ』と心底嫌そうな声でそう言うと、貴丈の腹に手を当てた。

『前と同じように、まともに動けるのは短い間だけだ。それを越えたら、動けなくなる』

淡々とした声音でそう言いながら、異形は貴丈にエネルギーを注ぎ込む。

死にかけの身体に活力がみなぎり、意識がより鮮明になっていく。

「頑張ってお兄ちゃん。私たちの英雄^{ヒーロー}」

そして完全に覚醒する間際、妹の声が彼の背を押した。

貴丈は不敵に笑むと拳を床に叩きつけ、ゆつくりと立ち上がる。

その背にも、瞳にも迷いはなく、あるのは覚悟を決めた呪術師の姿だった。

ずるりと湿った音と共に、自分の血でできた血溜まりに足をつけた貴丈は深呼吸と共にゆつくりと立ち上がった。

『あれ、まだ立てたんだ』

そんな彼に目を向けたフェニックススマッシュは意外そうな声でそう言うが、でも——と前置きしてから楽しそうに笑った。

『ふふ。でも、お兄ちゃんらしい』

彼女はそう言うと、ドラゴンスマッシュの攻撃で手足を砕かれた拳げ句、スパイダースマッシュの糸で壁に貼り付けにされた真希に一瞥くれた。

「……………あつ……………ひろ……………」

ボロボロになるまで殴られたのか、左腕と右足はあらゆる方向に折れ曲がり、顔を含めて身体中が腫れ上がってはいるものの、かろうじて息はあるようだ。

彼女は掠れた声で貴丈を呼ぶが、その声が彼には届いていない。

彼は深く息を吐くと無手の右手を握り、呪力を込めていく。

だがフルボトルなしで行われるそれは、先程の攻防の際に感じた呪力量からは段違いに弱く、警戒する必要も感じないほど。

それを肌で感じたフェニックススマッシュは肩を竦めると、『無理は禁物だよ』と告げて彼女も拳を握った。

紅蓮の炎を拳に纏わせ、次の一撃をもつて兄に引導を渡そうとしているのは確かなようだ。

一步一步、ゆつくりと貴丈に向けて歩を進めながら、拳に込めた呪力をより強大なものへと変えていく。

対する貴丈も一步目を踏み出し、爪が滲むほどに握った拳にありつただけの呪力を込めた。

己の覚悟を、後悔も、死への恐怖を呪力に変換し、右手に込めていく。

『いつくよ〜!!』

そして勝ちを確信している焔が呑気に聞こえる声音でそう言うのと、翼を広げて急加速。

加速の勢いのまま拳を突き出すと、貴丈もまた動く。

身体を傾けてフェニックススマッシュの拳が頬を掠め、紅蓮の炎が彼の頬を焼いていくが、その程度で今の貴丈を崩すことはできない。痛みも感じぬ程に次の一撃に没頭し、文字通り己の全てを込めた一撃を、フェニックススマッシュの顔面に叩き込んだ。

瞬間、黒い閃光が貴丈の拳とフェニックススマッシュの顔面との間で爆発した。

『へ……？』

フェニックススマッシュが間の抜けた声を漏らした瞬間、彼女は凄まじい勢いで吹き飛ばされ、塀や建物数棟をぶち抜いていった。

放った本人さえも驚きの表情を浮かべているが、一応五条からは知識として聞かされたことがある。

呪力を用いての戦闘において、極稀に起こると言われている現象。打撃との誤差0.000001秒以内に呪力が衝突した際に生じる空間の歪み——『黒閃』。

その威力はおよそ通常時の2.5乗とまで言われ、本人でさえも意図しないまでの威力を叩き出す。

だがその厳しい条件も相まって、狙って起こせる者がいない為、『技』ではなくあくまで『現象』として認知されている。

そして黒閃を発動した者は、呪力の核心に迫れるとも言われてい

る。

スポーツにおける『ゾーン』状態となり、普段であれば意識して行う呪力操作を、呼吸するも同然に行うことができ、より複雑な操作さえも容易く可能とする。

『ハザードレベル3。0!!ははっ、ようやく至りやがったか!!』

頭の中に響いてくる興奮気味の声を振り払い、同時に湧いてきたイメージのままに呪力を操り、あるものを一から形作っていく。

黒く弾けた閃光がベルトのように腰に巻き付き、バックルには小さな箱が、その右側にはレバーが生えた。

『あ、おい！まだパーツが足りて——』

『はい、シャラップ。お兄ちゃんの邪魔しない』

頭の中でやいやいと騒ぐ異形と妹の声を無視し、貴丈はベルトのバックルを叩いてとりあえずの完成とした。

黒い呪力が晴れたと同時に姿を現したのは、まさにベルトそのものだった。

フルボトルを装填するための二つの溝——ツインフルボトルスロット。

バックルの右側から生えるレバー——ボルテックレバー。

ベルトの左側にはフルボトルを填めておけるフルボトルホルダーがあるものの、今は何も詰められておらず、どこか寂しい印象もある。

だが貴丈はそれを気にする素振りもなく、手元に生み出した煙から二本のフルボトルを取り出し、左右の手にそれぞれを持つ。

カチャカチャと音をたてながらフルボトルを振り回し、中身に充填された呪力を活性化させていく。

今から何が起るのか、自分はどのようなのか、それは何もわからないが、やってみなければ何もわかりはしない。

「——さあ、実験を始めようか」

これから行うことを『実験』と称した彼はフルボトルの蓋を開けると、ツインフルボトルスロットの右側に一つ目を嵌め込んだ。

『《ラビット！》』

頭の中に響く音声をいつも通りに聞き流し、続けざまにツインフル

ボトルスロットの左側に二つ目のフルボトルを押し込む。

『《タンク!》』

『……』

「……あれ?」

そしてそこで途絶えた音声に形容できぬ違和感——強いて言えば、物足りなさ——を感じた貴丈は首を傾げるが、まあいいかと匙を投げて表情を引き締め、ボルテックレバーを掴み、回転させる。

レバーの回転に合わせて捻出された呪力が、ベルトから貴丈の前後に向けて伸びる透明な管へと変わり、その中をフルボトルに込められた呪力が流れていく。

前面にはラビットフルボトルの成分から生み出された頭の左半分、右腕、左足を模した赤い素体^{ハーフボディ}が、後方にはタンクフルボトルから生み出された頭の右半分、左腕、右足を模した青い素体^{ハーフボディ}が形成され、それが完了すると同時にベルトが貴丈に問う。

『——Are You Ready?』

「……」

その問いかけに貴丈は動きを止めると目を閉じ、返答に僅かだが時間をかけた。

その間もずっと頭の中をその問いかけが木霊し、^{Are You Ready?}覚悟はできたか?と問い続けるが、彼の答えは決まっている。

『過去の自分が許せないのなら、変わるしかないよ。よくも悪くも、人間は変わる生き物だからね』

『変わればいいんだよ。歯あ食い縛って、舐めんなって唾吐いて、大っ嫌いな自分から、変わればいい』

そして脳裏によぎるのは、少々残念なところもあるが恩人である五条と、今となつては勝手に思っているだけだろうが親友とも言える真希の言葉だった。

そう、変わるのだ。

兄として家族を殺すだけではない、呪術師として皆を影ながら守る、顔のない英雄^{ヒーロー}に。

「――変身!!」

その宣言と共に、フルボトルから生成されたそれぞれの素ハーフボディ体が重なりあい、貴丈を包み込んだ。

ウサギの横顔を模した左目、戦車を模した右目。

シンプルながらも重厚な雰囲気を滲ませる青い左腕、左腕ほどゴツくはないが、軽そうな印象を受ける赤い右腕。

バネを思わせるものが足首に巻き付いた赤い右足、足首から下に戦車のキヤタピラを思わせる飾りが施された青い左足。

一見ごちゃごちゃしているように思えて、よく見れば統一感があるようにも見えるなんとも不思議な姿だが、それは人間からは遠く離れた姿なのは間違いない。

「貴丈……っ!」

真希が思わずスマッシュのようにもなってしまった彼の名を呼ぶと、貴丈はそつと額を掻く素振りを見せると、それを誤魔化すように、ウサギの横顔を模した左目の耳部分を撫でた。

「大丈夫だ。あとは任せろ」

いつになく自信に満ちた声で、貴丈はそう告げた。

ドラゴンスマッシュとスパイダースマッシュは戻ってくる気配のないフェニックススマッシュを心配はすれど、助けに行くつもりはないのか、目の前にの標的――姿を変えた貴丈を睨んで唸り声をあげている。

壁に貼り付けにされたままの真希にはどうすることもできないが、彼に向けて挑発的な笑みを向け、ただ一言煽る。

「負けたら承知しねえぞ」

「ああ。今の俺は、負ける気がしねえ……!」

彼女の言葉に貴丈は仮面の下で不敵な笑みを浮かべると、胸の前で右手に左拳を叩きつけ、そのまま右手を前に、左拳を顎の前に構えた。

『オオオオオオオ!!』

『キシヤアアア!!』

『ウオオオオオオオ!!』

それを合図に、ドラゴンスマッシュユとスパイダーススマッシュユが彼に突撃し、二体を迎え撃つように貴丈も駆け出した。

『オオオオオオオ!!』

『キシヤアアア!!』

『ウオオオオオオ!!』

ドラゴンスマッシュ、スパイダースマッシュ、貴丈は咆哮と共に相手に向けて真っ直ぐに突撃し、一人と二体がぶつかり合う瞬間、貴丈は走るフォームをそのままに左足に呪力を集中させた。

僅かに左足に体重を乗せ、重心を傾けて力を溜める。

一見無駄に思えるその動作も、今の彼には大きな意味を持つものとなる。

左足首に巻き付くバネ——ホップスプリンガーが彼の溜めに合わせて縮み、前に踏み出さんとした瞬間、凄まじい力で彼の身体を押し出した。

ドラゴンスマッシュとスパイダースマッシュ、そして壁に礫にされている真希からすれば、彼が一瞬消えたようにも見えただろう。

「ウォラア!!」

だが、彼の雄叫びだけは全員の耳に届いていた。

押し出された勢いのままに、スパイダースマッシュの顔面に跳び膝蹴りを打ち込み、無防備にそれを直撃したスパイダースマッシュは汚い悲鳴をあげながら吹き飛ばされる。

『ウウ!?オオオオ!!』

顔を押さえながらごろごろと地面を転がるスパイダースマッシュを救わんとドラゴンスマッシュが慌てて反転するが、そこには既に左手拳に呪力を込め、まさに放たんとしている貴丈の姿があった。

ドラゴンスマッシュは素早く腕を交差させ、彼の拳を真正面から受ける体勢となるが、貴丈はお構いなしに拳を放った。

直後、金属がへしゃげる音にも似た異音が辺りに響き渡り、ドラゴンスマッシュの身体が宙を待った。

だが外見上は大きなダメージがある様子はなく、事実ドラゴンスマッシュは何事もなく着地を決めるが、

『ウツ、ウウ……!!』

ビリビリと痺れる両腕に目を向け、低く唸った。

真希の呪具による斬撃とは違う。身体の芯にまで響き、気を抜けば内側から壊されかねないほどの衝撃が襲ってきたのだ。

ドラゴンスマッシュは追撃を警戒した瞬間、貴丈は既に目の前にいた。

反射的に防御を固めたドラゴンスマッシュの肩の装甲を右手で掴み、防御の上から左拳の乱打を打ち込んでいく。

拳が叩き込まれる度にガキャン！ガキャン！と金属を砕く異音が響き渡り、ドラゴンスマッシュの腕部装甲にもヒビができ、広がっていく。

『オオオオ!!』

それ以上の被弾は危険と察したドラゴンスマッシュは、貴丈が拳を引いた瞬間に見計らって反撃の拳を放つが、それは彼の左腕で受け止められ、びくともしない。

貴丈の頭部右半分、左腕、右足を包み込むタンクハーフボディ。高い防御力と、その硬さが生み出す凶悪なまでの攻撃力が特徴ではあるが、ドラゴンスマッシュはまだ気付いていない。

——真に凶悪なのは右足を包み込むキャタピラ状の装甲。タンクローラーシユーズなのだ。

『グルオオオ!!』

ドラゴンスマッシュは打ち込んだ拳を押し込まんと力を込めるが、貴丈は身体を回転させてそれを受け流し、前のめりに体勢を崩したドラゴンスマッシュの胸部に右足を押しつけた。

その瞬間、タンクローラーシユーズが起動。キャタピラが高速回転を始め、ガリガリと音を立ててドラゴンスマッシュの胸部装甲を削り取っていく。

『ウ!?ウウウウ!?』

大量の火花を散らしながら装甲が削られ、キャタピラが肉体にまで届きそうになると、ドラゴンスマッシュは慌てて彼の足を払うが、
「リア!!」

装甲を削り、防御力がだいぶ下がった胸部に左拳を叩き込んだ。

今度は金属がへしやげる音とは違う、内臓が潰れる湿った音がこぼれ、吹き飛ばされたドラゴンスマツシユが吐血しながら地面を転がった。

貴丈はその隙に左足に力を入れて軸にしつつ、タンクローラーシユーズを起動して高速で反転。

『キシヤア!!』

動きを止めたその隙に復活したスパイダースマツシユは彼を捉えようと口から糸を吐き出すが、今回も貴丈の方が速い。

赤い残像を残すほどの速度でその場から飛び出した彼は、空中で身を振って糸を避け、スパイダースマツシユの腹に右足拳を叩きつけた。

ドゴン!と重々しい音と共にスパイダースマツシユは身体をくの字に曲げ、口から糸の代わりに血を吐き出すが、今の貴丈に慈悲の二文字はない。

蜘蛛を模した頭部の足を掴んで無理やり顔を上げさせ、顔面に拳を打ち付ける。

衝撃で数歩分後ろに下がったスパイダースマツシユは、すぐさま反撃に打って出ようと糸を吐き出すが、貴丈はその場にしゃがんでそれを避け、右足のタンクローラーシユーズを起動。しゃがんだ姿勢のまま一気に肉薄。

立ち上がり様の左アッパーカットでスパイダースマツシユの顎を打ちあげ、無防備になった胴体に赤い残像を残す高速の右ブローを叩き込んだ。

先ほどのほどまでの左手を使った打撃に比べれば、右手の打撃は軽いものだが、それでもその速度は相手からすれば十分な脅威だ。

何となくだがそれを理解した貴丈はふーつと深く息を吐くとすぐさま作戦を組み立て、即実行に移す。

『シャッター!』

それを知るよしもないスパイダースマツシユは、蜘蛛の足を思わせる両手の爪を立て貴丈に襲いかかるが、後に動く筈の彼の方が速い。

ラビット-halfボディの効果が反映される右腕、左足に集中的に呪力に乗せると、それぞれの部位が赤く光り始めた。

純粹な速度の強化がラビット-halfボディの効果ではあるが、何もそれだけがラビットフルボトルの力ではない。

人の身体を容易く貫くであろう爪が眼前に迫る中、その力が発揮された。

瞬き一度にも満たない刹那の時間、赤く光った右腕と左足が閃き、右腕の一閃がスパイダースマッシュの両手の爪を砕き、残像を残さず、地に影も落とさない神速の蹴りがスパイダースマッシュの腹部に打ち込まれた。

『~~~~?!』

スパイダースマッシュは声にもならない悲鳴をあげ、口から血を吐き出すが、それが地面に落ちるよりも前にさらに追撃の右ストレート。

顔面を打ち据えられ、蜘蛛を模した頭部を歪に歪ませながら仰け反ったところに、さらに追撃の上段回し蹴り。

速さとは、それすなわち重さとは、誰が言った言葉だっただろうか。ラビット-halfボディの力——数秒限定の超加速による連撃は、文字通り容易くスパイダースマッシュの身体を破壊し致命傷を与えた。

だが変異型呪霊スマッシュとなり、様々な呪霊を取り込んで力をつけてきた彼らは、ただの呪霊とは違う。

生半可な攻撃程度で祓われるほど、柔ではないのだ。

『キシヤ……ッ!!』

爪を砕かれ、頭が潰れたおかげで上手く糸も吐けなくなっても尚、スパイダースマッシュは貴丈を殺さんと力を振り絞り、彼に飛びかかった。

貴丈は残酷なほど冷静に左足に呪力を集めてホップスプリンガーを縮ませると、スパイダースマッシュの動きに合わせてそれを弾けさせた。

身体が跳ね上がるほどの衝撃に任せて蹴りを放てば、左足は一瞬で残像も残さない程の速度に達する。

それは寸分の狂いなくスパイダースマッシュの鳩尾に突き刺さり、骨を砕き、内臓を破壊する異音が辺りに響き、そういったものに慣れている筈の真希ですら表情を歪ませたほど。

『——っ』

スパイダースマッシュは貴丈の爪先がめり込んだ鳩尾に目を向け、彼の足を掴まんと手を伸ばすが、彼はさっさと足を抜いてしまう。

『……………ちゃ……………ん……………』

膝から崩れ落ちながら幼い男の子の声で貴丈のことを呼ぶが、彼は小さく俯くだけで何も声をかけなかった。

だがスパイダースマッシュの前で片膝をついて座ると、優しく彼を抱き締めた。

スパイダースマッシュはそんな兄を抱き締め返そうと手を動かすが、それよりも早く力尽きてしまい、身体が朽ちるように塵に変わってしまう。

その塵は吸い込まれるように貴丈の影の中に消えていき、同時に彼が纏う呪力が膨れ上がった。

焰が貴丈にしようとしたように、変異型呪霊スーマッシュを取り込むことで相手が蓄えた呪力をそのまま引き継ぐのだ。一体倒しただけでも、その総量は相当なものになる。

一瞬で彼が放つ迫力プレッシャーが強くなった為か、ドラゴンスマッシュが警戒を強めて拳を構えるが、貴丈はまるで警戒していないかのようにゆっくりと立ち上がり、拳を握りしめた。

己が背負うと決めた罪の重さを、家族を救えぬ己への恨みを、そして友を守らんとする意志を全て呪力に変換し、全身から呪力を漲らせながら兎と戦車の複眼越しにドラゴンスマッシュを睨みつける。

『ウウ……………オオオオオオ!!』

対するドラゴンスマッシュは彼に対抗せんと全身に蒼い炎を纏い、雄叫びをあげた。

だが貴丈は静かなもので、無言のまま深呼吸をするのみ。

それでも纏う雰囲気が変わらず、むしろ研ぎ澄まされていくのだから、ドラゴンスマッシュも負けじと燃えてしていくばかり。

蒼い炎が強まっていくが、代償に己の肉体を薪にでもしているのか、生物の焼ける嫌な臭いが貴丈と真希の鼻につく。

それでも炎の勢いは止まることを知らず、その強さに比例して大きくなっていく呪力量は、間もなく貴丈の呪力を超えてしまうだろう。

だが貴丈は怯まない。彼はじつとドラゴンスマッシュを見据えながら、右手をベルトのレバーに置いた。

左手でバックルを支えながらベルトのレバーを回転させると、それに合わせてツインフルボトルスロットに詰められたラビットフルボトルとタンクフルボトルから膨大な呪力が抽出される。

『《レディー・ゴー!!ボルテック・フィニッシュ!!》』

『ウウ……ッー!』

貴丈はゆつくりと息を吐きながら左足をあげつつ重心を落とし、ドラゴンスマッシュは唸りながら両腕を大きく広げ、深く重心を落とした。

貴丈の複眼がそれぞれ赤と青の輝きを放つのとほぼ同時、ドラゴンスマッシュの背後に蒼い炎に焼かれる骨の龍が現れ、威嚇するように吼えた。

貴丈は何も語らず、吼えることもなく、臆することもなく、ただ静かに相手を見据えた。

一見すれば龍を背に燃え盛る異形と、二色に輝く戦士が睨み合うという、知らぬ者が見れば間違いなく困惑する状況だが、生憎と二人の戦いに横槍を入れる者は誰もいない。

二人は同時にその場を跳躍。ホップスプリンガーのおかげか貴丈の方が遥かに高く跳んだが、ドラゴンスマッシュとてそうなるのは読めていたのだろう。

貴丈は空中で身体を丸めて回転して更に勢いをつけると、右足を突き出しながらドラゴンスマッシュに向けて突貫。

対するドラゴンスマッシュは左足を貴丈に向けて突き出すと、背後に控えていた骨の龍が蒼い炎を吐き出し、彼の背を押しした。

骨まで溶かすほどの高熱に晒され、炎を浴びせられた背中には焼き爛れていくが、目の前の敵を滅さんとする威風が揺れることはない。

歪に歪んだ龍を模した複眼が映すのは迫り来る貴丈の姿。

『グルウオオオオ!!』

「ハアアアアア!!」

蒼い炎に包まれたドラゴンスマッシュと、赤と青の呪力を纏う貴丈。

二人の咆哮が空に響き渡り、直後、二人の跳び蹴りがそれぞれ相手が突き出した足を捉えた。

二人が衝突した瞬間に大爆発が起こり、空間が歪むほどの衝撃が辺りを駆け抜け、壁に礫にされている都合上、逃げるに逃げられない真希はそれを直に喰らうことになるのだが、

「——っ!!」

友の勝利を信じる彼女は、顔を背けることなく二人が衝突した場所を睨みつけた。

そして爆煙の中から降りてくるのは、やはり二つの人影。

お互いに距離を取ったまま背を向け合う形で着地を決めた貴丈とドラゴンスマッシュ。

ドラゴンスマッシュは勝鬨をあげるように吼えながら立ち上がると、背後の貴丈は堪らずに片膝をついた。

はあ……はあ……と見るからに辛そうな呼吸を繰り返し、肩も大きく上下しているが、変身が解除されていないのは彼の戦意が切れていない証拠だろうか。

『ウオオオオ!!』

それでも、ドラゴンスマッシュの方が余裕があることに変わりはない。

彼は先の競り合いに勝った勢いのまま、貴丈にトドメを刺さんと右拳に蒼い炎を纏わせ、それで彼を殴り殺さんと駆け出すが。

踏み出した左足からバチバチと音を立てて大量の火花が散り、前につんのめるようにして転倒。

彼は慌てて左足に目を向けるが、そこには少しずつ塵になり、形を失っていく自分の足があった。

もし彼が人間のままであればぎよつと目を見開き、困惑のままに悲

鳴をあげていたかもしれないが、生憎と変異型呪霊ス・マツ・シユとなった彼に恐怖という感情はない。

彼は拳を地面に叩きつけて腕をめり込ませると、自分の真下で蒼い炎を爆発させた。

爆発の勢いに押されて宙を舞い、今度は空中で蒼い炎を爆破。

さながらミサイルか隕石のように蒼い尾を引きながら貴丈に向けて肉薄。

自分の存在もろとも彼を滅さんとするが、振り向いた貴丈はそれを見上げながら再びベルトのレバーを回転させた。

『《レディー・ゴー!! ボルテック・フィニッシュ!!!》』

ラビットフルボトルとタンクフルボトルから呪力が抽出され、複眼が赤いと青それぞれの輝きを放ち、今度は足でなく左腕にありつたけの呪力を流していく。

——いや、違う。

それではドラゴンスマッシュを殺殺せない殺と直感したのだろう。

それでは真希を守れない。乙骨を助太刀にも行けない。

家族からの願い呪いを、全うすることもできない。

『グルウオオオオ!!!』

猛り、吼えるドラゴンスマッシュは蒼い隕石となって貴丈に向けて突撃。

貴丈は左拳を引き、深呼吸を一度。

彼が燃える臭いも、ぶり返してきた全身の痛みも感じぬ程に、彼は次の一撃に没入していく。

蒼い炎が揺れる轟音も、ドラゴンスマッシュの咆哮も、真希が彼の名を呼ぶ声も、今の貴丈には聞こえていない。

そしてドラゴンスマッシュと衝突する直前、彼は仮面の下でカッと目を見開き、雄叫びと共に拳を打ち出した。

「——ウオラアアア!!!」

ドラゴンスマッシュと拳が激突した瞬間、爆ぜる100万分の1の火花。

ドラゴンスマッシュが纏う蒼い炎を黒き閃光が食い破り、2・5乗

にまで跳ね上がったタンクハーフボデイの一撃が、彼の肉体に深々と打ち込まれ、勢いのままに貫通した。

『グオ……ッ！オオオオ……！』

ドラゴンスマツシユは大量の血を吐き出し、自分の身体を貫く貴丈の腕と、そこを中心に身体中に広がっていくヒビに目を向けた。

貴丈はじつとドラゴンスマツシユを見つめ、彼の肩に手を置いて腕を抜こうと踏ん張るが、不意にドラゴンスマツシユが貴丈の腕を掴んだ。

『あつ……ひ……ろ……』

「……っ」

今までの幼さを残す声とは違う、大人びた声で彼の名を呼んだ。

その声に聞き覚えがあり、何より最も聞きたくなかったその声に貴丈は仮面の下で目を見開き、ぽつりと呟く。

「……父さん？」

彼の問いかけにドラゴンスマツシユは返さないが、ヒビ割れ、今にも崩れてしまいそうな手で彼の頬を撫でた。

落ち込んだ自分を励ます時にくれたそれは、ドラゴンスマツシユが彼の父であることを言葉もなく教えてくれる。

貴丈は父の手に自分の手を重ねると、「ごめん」と小さく呟いた。

僅かに声を振るわせ、涙を堪えようと力んでいるのか、喉の奥から絞り出すみつともない声ではあったけれど、その声は確かに父に届いたようだ。

彼が小さく頷くと、貴丈は告げた。

「——さようなら、父さん」

その言葉と共に父の腹を貫いた左腕を引き抜くと、支えを失った父は膝から崩れ落ち、爆発。

貴丈はどす黒い爆煙に包まれるが、その煙は瞬く間に彼の影に吸い込まれていき、貴丈から溢れる呪力量が大きくなる。

呪力量だけで見れば並の術師数十人分にまで及ぶだろうが、その呪力の元は今まで殺してきた変異型呪霊だ。

家族の屍の上に今の強さがあるとしても、貴丈は後悔はすれどもう

迷うことはないのだろう。

——もう、覚悟は決めたのだから。

彼は父の血に塗れた自分の左腕を見つめ、グツと握りしめた。

父の肉体を貫いた感覚は消えず、父殺しの事実を突きつけてくるが、彼は頭を振って無理やり思考を切り替えた。

そして相変わらず壁に礫にされたままの真希に目を向け、いい加減助けてやらねばとそちらに歩を進めると、

「《動くな!!》」

どこからともなく放たれた言葉に、貴丈の身体は突然石になったかのように動かなくなった。

仮面の下で困惑していると、今度は横合いから放たれた拳が米神を捉えた。

「よいしょおお!!」

そしてとても聞き覚えのある声の気合い一閃と共に拳が振り抜かれ、貴丈の身体が殴り飛ばされる。

ごろごとと地面を転がっていく彼を他所に、彼を殴り飛ばした張本人——パンダが拳を構えながら、隣に着地した狗巻に声をかける。

「棘、大丈夫か!」

「げほっ……いげほっ……いしゃ、しゃけ」

パンダの言葉に狗巻は血の混ざった咳をしながら頷き、貴丈を睨みつける。

先ほど貴丈の動きを止めた言葉。それこそが狗巻の扱う呪術——呪言であり、相手に言霊を浴びせることでその通りの動作や状態にするという術式だ。

「動くな」と言えば動きが止まり、「眠れ」と言えば眠りに落ちる。

単純にして強力な術式である反面、相手との力量差によっては呪言が跳ね返ってきたり、狗巻の喉が潰れるという事態にもなるが、今回は辛うじてだが無事なようではある。

二人に庇われる形になった真希は二人の背を見つめ、やっちゃまったと言わんばかりにため息混じりに天を仰いだ。

そんな彼女の様子にも気づかず、パンダは糸を剥がそうと躍起にな

りながら彼女に問うた。

「真希、無事だな！憂太と貴丈はどこ行つた!？」

「憂太は知らん。だが、貴丈ならそこにいるぞ」

彼女はパンダが糸を剥がしたおかげで空いた手を、地面に転がる二色の戦士——つまり貴丈に向けた。

直後パンダは「え？」と声を漏らし、狗巻は「高菜？」と額に冷や汗を流し、壊れた人形のようにギギギと音を立てながら振り向いた。「——いってえな、クソ！いきなり何しやがんだよ!？」

パンダの拳は見事にクリーンヒットした筈だが、当の貴丈は勢いよく立ち上がり、殴られた米神を押さええながら二人に詰め寄った。

「俺、今の今まで結構頑張つてたんだぞ?!なのに、いきなり殴りやがつて……っ!」

仮面を被っているおかげで表情こそわからないが、その声音からしてかなり怒っているのは確かなようだ。

パンダと狗巻は青くなった顔色をそのままに顔を見合わせると、「だつて」とパンダが口を開いた。

「悟に言われるがままこつちに戻されて、『帳』破つたら見たことない奴が真希に詰め寄つてたんだぞ?敵だと思うだろ?てか、なんだその格好」

「……色々あつたんだよ。たぶん、俺の術式関係だ」

パンダの問いかけに貴丈は数瞬考えてから答え、真希とパンダ、狗巻を一瞥すると、おもむろに真希を拘束している糸を掴み、力任せに引きちぎった。

支えるものがなくなった彼女はもちろん落下するわけだが、貴丈が素早く抱き止めたことで地面との口づけは回避された。

「とりあえず、俺は乙骨を探しに行く。焰は——」

詳しい説明を後回しにした——といっても彼自身上手く説明できない——彼は乙骨の助太刀に向かわんとするが、先ほど殴り飛ばしたフェニックススマッシュの姿が脳裏をよぎった。

ある程度の近さであれば、彼らが呪術高専に侵入してきた時のように視覚が共有される筈だが、今はそれも無い。

既に『帳』から脱出したのか、あるいは視覚が共有されないギリギリの場所にいるのか、それは定かではない。

どちらにせよ、近くにいないのは確かなようだ。

言葉を区切り、突然黙り込んだ彼の肩を叩き、狗巻が「めんたいこ」と言いながらサムズアップ。

パンダもうんうんと頷きながら「任せとけ」と親指を立て、何かを受け止めるように両腕を広げた。

二人の意図を察した貴丈は仮面の下で僅かに口角を吊り上げて笑みを浮かべると、そのままパンダに向けて真希を突き飛ばした。

「うおっ！」

「はい、キャッチ。こっちは任せとけ」

パンダは彼女をしつかりと受け止めると、貴丈の背を押すようにそう告げた。

狗巻とパンダ。確かにこの二人ならば、余程の相手でなければ遅れをとることもないだろう。

乙骨もそうではあるが、生憎と彼を狙っているのは怪物クラスの特級呪詛師、夏油傑なのだ。

助太刀に行っても足手纏いになる可能性もあるが、今の自分なら大丈夫だろうと不安に思う自分をさっさと切り捨てる。

そしてこの状況で言うべきは、弱音でも強がりでもない、たったの一言。

「――任せた」

二人を信じ、彼女を任せる。

別に自分と彼女の間には他とは違う何かは別にないのだが、負傷した友人を任せられるのは、現状パンダと狗巻しかいない。

なのに二人はニヤニヤと楽しそうに笑い、「任せとけ！」「めんたいこ！」と自信満々に応じてくるのだから、調子が狂ってしまった。

「ああ、クソ。頼んだぞー！」

そんな気持ち悪さを覚えながら、貴丈は改めて二人にそう告げて、さっさとその場を離れることに決めた。

ラビット-halfボディの効果を最大限生かし、静止状態から瞬く間

に最高速度に達した彼は、そのままホップスプリングの力に物を言わせて大跳躍。

数秒足らずで視界から消えた貴丈の背を見送った三人は顔を見合わせる、これから始まるであろう戦闘に巻き込まれないよう、その場を離れることを決めた。

直後、遠くから里香の咆哮が辺りに響く。咆哮の主である里香と里香を操る乙骨の下に大量の呪霊が里香に挑むように飛び掛かっている。

そんなまさに地獄絵図ともいえる場所に自ら飛び込んでいく酔狂な者など、世界広しといえどただ一人。

友の危機を救うため、友の未来を救うため、ヒーローは地獄に身を投げる。

覚悟は既にできている。後はそれを貫き通すのみだ。

僅かに時間を巻き戻し、貴丈と真希がフェニックススマッシュ、ドラゴンスマッシュ、スパイダーススマッシュとの戦闘が始まった頃。

「二人とも、大丈夫かな……う？」

貴丈の指示で離脱を言い渡された乙骨は、一人廊下を駆けていた。『帳』を降ろされた以上、学校の敷地からの脱出も困難ではあるが、呪術高専の敷地は広大だ。

その一角が『帳』によつて切り取られたとはいえ、未だにそれなりに広い。逃げ回るだけなら何の問題もない。

——けど、逃げてるのは僕だけ……。

本来なら三人で固まって動くべきなのだろうが、今は見ての通り乙骨一人。

『夏油の「呪霊操術」とかいうので里香が奪われてみる、詰みだぞ……っ！』

この状況に焦ったのか、半ば怒鳴るような声音で貴丈から告げられた言葉が脳裏を過り、乙骨は左手薬指に嵌められた里香との婚約指輪を撫でた。

確かに里香が奪われれば最後、この一帯が更地になるばかりではなく、新宿や京都で戦っている呪術師にも甚大な被害が出てしまうだろう。

それは嫌でも理解している。自分がすべきことは、戦うことではなく逃げることなのは、重々承知だ。

このまま五条が戻るまで逃げおせるか、あるいは見つかる覚悟で『帳』を破るという選択肢もあるが、やはり二人が心配なのか、思いに反して足が進まない。

いつもならすぐに通り過ぎる廊下が無限に続いているような錯覚さえ覚え、彼は思わず足を止めた。

無駄に乱れる呼吸を落ち着けようと胸に手を当てて深呼吸を繰り返し、息が整うと共に走り出そうとするが、

「——おや、こんな所にいたのかい。まったく、探したよ」

そんな彼の耳に、最も聞きたくなかった声が届いた。

その声により呼吸が止まり、ゆつくりと目を見開いた乙骨は、額に脂汗を滲ませながら声の主の方へと顔を向けた。

「やあ、乙骨くん。久しぶりだね」

そこには開いていた窓越しに、和やかな笑みを浮かべる夏油がいた。

エイのような呪術の背で胡座をかき、一緒に乗るかい？と言わんばかりに片手で空いたスペースを示している。

急速に口の中の水分が失われ、手が震え、あらぬ不安が脳裏を過ぎる。

「ふ、二人は、どうしたんですか……？」

そして聞いては駄目だとわかっていながら、震える声でそう問うた。

問われた夏油は浮かべた笑みをそのままに答えようとすると、突然の爆発音と振動が『帳』内に響き渡る。

「な、なに……?!」

遠くから聞こえる断続的に続く爆発音と微細な振動に驚く乙骨を他所に、すぐに発生源を察した夏油は「まあ、この通り、戦闘中だよ」と呟いて頬杖をついた。

「桐生くんは大丈夫だろうけど、あの落ちこぼれの方は駄目だろうね。呪力なしの猿じゃ、焔の攻撃を受けようがない」

——もうすぐ死ぬね。

夏油はどこか楽しそうに笑いながら、困惑する乙骨に向けて告げた。

彼からすれば貴丈との対話の可能性が限りなく低くなってしまったが、ともかく消えるべき猿が一匹減るのだから喜ぶべきことだろう。

ご機嫌な夏油に対して、乙骨は無表情だった。

今まさに自分の友人が殺されようとしていて、目の前の男はそれを望み、むしろ喜んでいてさえる。

彼の雰囲気が変わったことを感じた夏油は表情を引き締め、呪霊の

背で立ち上がった。

「さて、乙骨くん。残念ながら、これが最後の勧誘になるね」

前回は話の途中で割り込んだ貴丈との戦闘が始まったおかげで、肝心の乙骨の返答を聞いていない。万が一にも呪い殺し合わずに事が済むのなら、喜ぶべきことだ。

そんな上っ面の思慮を早々に捨てた夏油からすれば、その問いかけは形だけのものだった。

ゆつくりとだが乙骨を取り巻く呪力が膨れ上がっていくのを肌で感じる。

「私と共に来る気は？」

それでも念のために問うと、乙骨は背に回していた日本刀を抜き払い、鞘を投げ捨てた。

そして血走り、興奮により限界まで見開かれた目を夏油に向け、純然たる思いを彼にぶつけた。

「——ブツ殺してやる……っ！」

彼が初めて抱いたであろう、純粹なまでの殺意。

それは膨大なまでの呪力に変わり、溢れ出した呪力に押されて辺りの窓がガタガタと音を立てて揺れ、ヒビが入り始める。

「来い!!!里香!!!」

目の前の敵を排除し、一刻も早く二人の元に向かうため、乙骨は貴丈から禁止されていた里香の名を呼ぶ。

そして彼女が、愛する彼の声に応じない道理はない。

『ゆうだあああ” ああ” ああああ” ああ” ああ!!!』

里香もまた彼の名を叫びながら彼の影から飛び出すように顕現し、勢いのままに校舎を破壊していく。

無貌の頭部に、肉食獣のそれによりも更に鋭い牙、人体を容易く引き裂く両手の指からは鋭い爪。

触れた者を全て傷つけると言っても過言ではないその姿を背に、乙骨は夏油を睨みつけた。

それに合わせて里香もまた瞳のない顔で夏油を睨み、低い唸り声をあげる。

そんな二人を見つめ返した夏油は残念そうに溜め息を吐いた。

「それが解答か。なら、仕方ない」

そして手元から大量の呪霊を呼び出すと、乙骨に向けて告げる。

「——君を殺す」

同志になりえる可能性は潰え、残されたのは互いに呪い合う道のみ。

ならば躊躇うことはない。全力をもって、乙骨を呪い殺す。

もう遠い過去のように思えるあの日に、五条と道を違え、呪詛師となったあの日に、覚悟は決めたのだから。

特級過呪怨霊——里香。

いまだ謎の多い彼女を相手に、夏油が取った一つ目の策は物量に物を言わせた様子見であった。

彼が持つ大量の低級の呪霊をけしかけ、彼女と、彼女を従える乙骨の出方を伺わんとしたのだが、次の瞬間にはその行動が無意味だと叩きつけられた。

「里香、アレをやる」

群がる呪霊を片っ端から切り伏せた乙骨が、今しがた呪霊を握り潰した里香の元に滑り込むと、刀を地面に突き立てて右手を差し出した。

里香もまた彼の手に自分の右手を翳し、『蛇の目』と『牙』の印が描かれたメガホンを手渡した。

「狗卷家の呪印！」

メガホンに描かれているのは、乙骨の友人でもある狗卷棘の口元にも描かれた紋様と同じもの。

長年呪詛に関わる夏油がそれを知らない筈もなく、更に呪霊を放つ

て警戒を強めた瞬間、乙骨は大きく息を吸い込み、そして、

「——《死ね》」

たった一言、そう告げた。

その瞬間、彼に迫っていた呪霊が一斉に爆散。辺りにその残骸が降り注ぐ。

それはまさに狗卷棘の術式と同様の『呪言』。言霊によって相手を呪う術式ではあるが、本来なら相手を即死させるような強力な言葉を使えば、放った本人にも危険が及ぶのだが……。

「やつぱり難しいや」

乙骨はそれを感じさせない淡々とした声音でそう言うと、身代わりだと言わんばかりにメガホンが崩れていった。

対する夏油は降り注ぐ呪霊の残骸を手で払いながら、興奮を隠しきれずに「素晴らしい」とぼそりと呟く。

同時に里香の正体をただの呪霊ではなく、本来なら不可能な術式のコピーまで可能な、それこそ無尽蔵の呪力の塊であると仮説を立てた。

「益々欲しいね」

故に里香を何があんでも奪うと決め、同時に生半可な呪霊では相手にならないと判断を下した。

下手に呪霊を放てば先程のように誰かの術式のコピーか、里香と乙骨のコンビネーションで瞬殺されるのが関の山だ。

里香を手に入れる為ならその程度の損失は安いと見るべきだろうが、かと言ってここで戦力を使いすぎても次に控えている相手——十中八九五条だが——の事を考えれば、温存しておきたいのも本音ではある。

——さて、どうするか。

そんな自問をするが、答えは既に決まっている。

ある種部の悪い賭けではあるが、まだ乙骨が呪術師となって一年未満という、術式だけではどうにもならない部分——経験の差というのを生かす他ない。

だが下手に戦力を減らせない以上、直に叩く他ない。

夏油は人の顔をした芋虫のような呪霊を出現させ、顔が肩に乗るようにそれを自分の身体に巻きつけた。

「っ！」

今までのただ突っ込んでくる呪霊とは違う動きを見せたことで、乙骨は素早く刀を地面から抜いて構えた。

深く息を吐き、里香と共に相手の動きに警戒を強めるが、二人の意に反して人面芋虫は特に動きを見せず、代わりに口から何か棒のような物を吐き出した。

それを掴んだ夏油が力任せに引つ張り出せば、それが鎖によつて三つに連なった棍——いわゆる三節棍であることがわかる。

乙骨はあまり見ない武器に僅かに驚きを露わにするが、それが纏う濃密な呪力に警戒を強めた。

括りとしては真希が扱っている呪具と同じなのだろうが、おそらく呪具の中でも高い等級を持つ物。

あれで直接殴ってくるつもりだろうことは、見ればわかる。そして、乙骨の読みは全て正解であった。

夏油が装備したのは呪具——その中でも指折りの攻撃力を誇る特級呪具、『游雲』だ。

だが、それがなんだと言うのだ。

「受けて立つ」

乙骨は迫力のある言葉でそう告げると、ちらりと里香に視線を向けた。

当の里香は彼の意を汲んでか小さく頷き返し、夏油を睨みつけた。まさに以心伝心。彼女と確かに繋がっていることを改めて体感した乙骨は微笑むと、二人揃って夏油に向けて突貫せんと構えた瞬間、自分たちの頭上を飛び越えていく影を視界の端に捉えた。

夏油もそれに気付いたのか、何事だと見上げた瞬間、その人影はベルトのバックルに取り付けられたレバーに手をかけ、高速で回転させた。

『《レディー・ゴー!!ボルテック・フィンニッシュ!!!》』

その瞬間、張り詰めた場の雰囲気には似合わない陽気な音声が辺り

に響き、音声こそ違えど聞き覚えのあるそれに乙骨は安堵。

その人影——鎧の戦士へと変身した貴丈は空中で回転して体勢を整えると、

「見つけたぞ、夏油!!!」

強烈な怒気が込められた叫びと共に、落下の勢いを乗せた夏油に向けて飛び蹴りを放った。

対する夏油は貴丈の姿に僅かに困惑しつつ、彼の到着——つまり、焰たちの敗北を理解して苦虫を噛み潰したような表情を浮かべると游雲を振り被り、右足を突き出して突っ込んでくる貴丈に向けて叩きつけた。

一見すれば無造作に振るっただけのようにも見えるが、相手は特級呪具。

激突の瞬間にそれぞれの呪力が真正面からぶつかり合い、空間が歪むほどの衝撃が辺りの物を吹き飛ばした。

「っ……いっ……うおおおおお!!!」

ドラゴンスマッシュの蹴りにも劣らないパワーに貴丈は押し返されそうになるが、雄叫びと共に右足に更なる呪力を送り込む。

同時にタンクローラーシューズが起動し、足裏のキヤタピラが動き出した。

甲高いモーター音を轟かせ、動き出したキヤタピラが游雲が纏う呪力と本体の表面を削り、辺りに木片が飛び散っていく。

夏油は舌打ちすると足元から大型の蛇の思わせる呪霊を呼び出し、貴丈を下からかちあげた。

「うお?!」

蹴りに全神経を注いでいた貴丈にそれを避けることはできず、彼は打ち上げられるがまま宙を舞うことになった。

蛇の呪霊はそのまま大口を開け、そのまま彼を一口で呑みこんでしまふ。

「その声……桐生くん!?!」

そんな彼を助けようと乙骨と里香が動き出さんとした瞬間、蛇の腹から大量の白い針が飛び出し、濁った血とそれに塗れた臓物が辺りに

ぶち撒けられた。

そしてその臍物に紛れて貴丈が飛び出してきた瞬間、ベルトが陽気な音を響かせた。

『《ハリネズミ！タンク!!》』

そして着地を決めた彼は、先程とは姿が変わっていた。

左手、右腕、左足が赤を基調としていたラビットハーフボディから、白を基調としたハリネズミハーフボディに変わり、右拳は剣山を思わせるナツクルパーツ——BLDスパイナツクルに包まれている。

ふーっと深く息を吐いた彼はちらりと乙骨に目を向け、左手でサムズアップ。

「真希は無事だ。今はパンダと棘と一緒にいる」

「そっか、よかった……」

彼の言葉に乙骨は胸を撫で下ろすと、乙骨に心配される真希に嫉妬したのか里香が不満そうに唸っていた。

そんな彼女を宥めるように乙骨が彼女を頬を撫でると、ケタケタと嬉しそうに笑い始める。

彼女の機嫌が良くなったからか微笑む乙骨は、貴丈の姿を爪先から頭までをじっくり見てから問うた。

「それで、その格好は？」

「悪いけど、説明してる暇はない。今は夏油をどうにかしねえと」

だが貴丈は申し訳なきような声音でそれを切り捨て、夏油を睨みつけながらそう告げた。

説明しようにも自分でもこの姿に関してはよくはわかっていないのだから、今は目の前の敵を排除するのが最優先だ。

貴丈がそう言っている横では、

そんな二人と一体を警戒するように細めた瞳で見つめた夏油は、一気に悪化した状況に内心焦りを感じていた。

乙骨とのタイマンでも不安要素が多いというのに、そこに貴丈という特大の爆弾が、前情報なしの謎の鎧を纏った状態で来てしまうのは想定外だ。

「ふふ。いいね、二人とも。呪力が体に満ち満ちている」

だがそれを感じさせない不敵な笑みと共にそう呟くと、じつと貴丈を見つめて彼の鎧を分析を開始した。あ

焰と同じスマッシュになった可能性とあるが、彼女とは違い無機質で、何よりボトルを二本使っている。

単純に出力二倍——ではないだろう。その程度なら、先の游雲との激闘で押し合える訳がない。

ボトルがお互いを高めあい、凄まじい力を——特級呪具と打ち合わせる程の呪力が生み出されている。

そして、初撃の蹴りの時と呪霊の腹からの脱出で姿が違うところを見るに、ボトルの組み合わせによって姿形、そして使える技も変わってくるのだろう。

——面白い。

静かに考察を深めていく夏油を他所に乙骨と貴丈は身構え、彼の次の手を警戒する。

そんな彼らを嘲笑うように、夏油は教鞭を払う教師のような声音で二人に言う。

「人は食物連鎖の頂点に立ち、更に高位の存在を夢想し『神』と呼んだ。おかしいとは思わないか？」

ジャラジャラと音を立てて游雲を操り、視線のみで先ほど貴丈に削られた部分を確認。

扱う上では何の問題もないとわかれば、やることにも変更はない。「——夢想せずとも、我々呪術師がいるというのに」

そして嘆息混じりに肩を竦めた瞬間、乙骨と里香が動き出し、一拍遅れて貴丈が二人に続く。

石畳に切っ先を擦らせながら一気に間合いを詰めた乙骨はすれ違い様に刀を振るうが、夏油は余裕をもった体捌きでそれを回避。

夏油を追い抜くことになった乙骨は振り向き様に更に一閃。

夏油はそれを游雲の一節で受け止め、残る二節で反撃せんとするが、自分達の背後に里香が回り込んだことでそれを中断。

踏ん張りを止めて乙骨のパワーに押し飛ばされてることで離脱し、彼がいた場所に里香の拳が叩きつけられた。

二人が同時に追撃に動かんとした一瞬の間に夏油は游雲を操り、改めて防御を固めた瞬間、遅れた間合いを詰めた貴丈が右拳を放った。だがそれは游雲により受け止められ、拳を覆う白い針も夏油の体には届かない。

「この前と比べると、随分と遅いね」
「るっせえ!!」

夏油の指摘に貴丈は怒鳴り返し、右拳に呪力を送り込んだ。

同時に拳を覆う針が一斉に伸び、夏油を串刺しにせんとするが、夏油はその場を飛び退くことでそれを避け、置き土産と言わんばかりに游雲を叩きつける。

「っ……っ……」

貴丈もまたその場を飛び退いてそれを避ければ、彼がいた石畳が無惨に砕けちり、その勢いのままに軽く地面が抉り取られる。

一見すれば鎖で繋がった三本の木の棒にしか見えないそれに、果たしてどれだけの呪いが込められているのか。

製作者が何を思っただれを生み出したのか、その理由は想像もできないが――、

「当たるとやばいな……っっっ!」

貴丈は舌打ち混じりにそう吐き捨てると、夏油は呪霊を呼び出して三人にけしかけた。

三人はそれを無造作に放った一撃で一瞬で祓うが、夏油の着地の瞬間を狩ることができず、状況は振り出しに戻された。

「結局非術師さるともは、自分より秀でた存在から目を背けたいだけなのさ」
そんな中でも、夏油は口を動かすのを止めない。

己の正義を信じ、突き進むと決めた彼は、どんな手を使っても止まりはしないのだろうか。

「神になりたいなんて、子供じみたことを言うなよ!!」

だが、そんなもの知らんと言わんばかりに乙骨がそう吐き捨て、真正面から夏油に切り掛かるが、やはり夏油は余裕をもって彼の一撃を游雲で受けた。

「論点がズレてるよ、乙骨」

そして夏油は先程とは打って変わった冷たい声音でそう告げると、足元から蛸のような呪霊を召喚。

蛸の足が乙骨を絡め取るが、彼は舌打ち混じりにそれを切り払い、すぐに反撃せんとするが、それよりも速く夏油が操った游雲が彼の頭を打ち据えた。

パン！と鋭い快音が響き渡り、凄まじい衝撃に膝から崩れた彼に追撃せんとするが、それを阻止せんと貴丈が駆け出す。

確かに夏油が言った通り、ラビットフルボトルの力を使う時と比べればだいぶ遅い。

故に夏油は彼の接近をすぐさま察知し、乙骨に向けて振るわんとした游雲の標的を貴丈に変更。

ふっ！と鋭く息を吐く音と共に、大上段から振り下ろす。

三節を繋ぐ鎖が限界まで伸びきり、夏油の体勢が崩れるほどの遠心力を乗せた一撃は、まさに一撃必殺。

それが迫る中、貴丈の行動は更に前に踏み出すことと、タンクフルボトルをダイヤモンドフルボトルに変更することだった。

手元に生み出したダイヤモンドフルボトルをタンクフルボトルと交換し、バックルのレバーを回転。

『Are You Ready?』

「変身！」

ベルトからの問いかけに即答すると、右目、左腕、右足が空色の装甲——ダイヤモンドハーフトポデイに包まれた。

ダイヤモンドハーフトポデイの効果は様々だが、今求めている能力はシンプルに一つ。タンクハーフトポデイとは比にならない防御力の上昇だ。

一切臆することなく懐に飛び込みつつ、更にもう一手行動を挟んでくる彼の度胸に、夏油は思わず驚愕を露わにするが、構うことなく游雲を振り抜く。

次の瞬間、貴丈はダイヤモンドの如き輝きを放つ左腕を突き出して游雲を受け止めるが、甲高い金属音をと共に両足が地面に埋まるほどの衝撃を彼に叩きつけられた。

仮面の下で骨が砕け散らんばかりの痛みを目を剥くが、思いの外軽いダメージに不敵な笑みを浮かべ、ベルトのレバーを回転。

『《レディー・ゴー!!ボルテック・アタック!!!》』

ベルトが勇ましい宣言と共に、輝くダイヤモンドを模した右目が眩い閃光を放った。

「っー」

至近距離でそれを受けた夏油が強烈な光量に思わず顔を背けた瞬間、貴丈は白いエネルギーを纏った拳を夏油の胴を目掛けて放つ。

これは入ると確信にも似た感触が脳裏を過った瞬間、二人の間に割り込むように炎を纏った人影が飛び込んだ。

その人影は貴丈の拳をその身一つで受け止めた瞬間、その背から大量の白い針が飛び出し、その臓物を辺りにぶち撒けさせた。

「っー焔……?!」

そして割り込んできた相手——フェニックススマッシュを睨んだ貴丈が彼女の名を呼ぶと、腹を貫かれただけでなく、内臓をぶち撒けた彼女は返事代わりに彼の腕を掴んだ。

『——お兄ちゃん、一緒に逝こう?』

彼女が行った命懸けの時間稼ぎ。

彼女からすれば最愛の兄もろともに、恩人の夏油に天国に送ってもらおうという行動なのだが、それは貴丈にとっては致命的だった。

その声に無理やり目を開けた夏油は游雲を振るい、フェニックススマッシュ諸共に貴丈の右脇腹を打ち据えた。

防御力の高いダイヤモンドハーフボディに包まれた左脇腹ならまだどうにか耐えられただろうが、今回狙い打たれたのはハリネズミハーフボディに包まれた右脇腹だ。

游雲の一撃は容易く鎧を破壊し、彼の骨をバラバラに砕き、内臓をぐちゃぐちゃのミンチにしながら、道端の石ころのように吹き飛ばす。

「っ?!?」

勢いのままに扉に激突した貴丈の鎧が粒子に変わり、カラカラと乾いた音を立ててハリネズミフルボトルとダイヤモンドフルボトルが

転がり、込められていた呪力が漏れ出ると共にフルボトルも消滅。

ベルトは石畳に叩きつけられるとバチバチと火花を散らし、しまいには煙を吹き始めた。

「いっふっ……いっ」

変身が解除されたからか、ついに限界を迎えた貴丈は大量の血を吐き出し、ぶくぶくと血の泡を吐き始める始末。

「桐生くん!!」

そんな彼に乙骨が慌てて駆け寄り、すぐに反転術式による治療を始めた。

その間は里香が夏油を警戒してくれているが、貴丈はどうにか頭を動かしてフェニックススマツシュへと目を向け、そして驚愕に目を見開いた。

先程の一撃に巻き込まれた結果上半身が完全になくなり、残された下半身からは噴水のように鮮血が噴き出している。

それでも呪力が残っているのか、弱々しい炎に包み込まれているが、それが消えるのも時間の問題だろう。

「ほむ……ら……」

貴丈は自分が殺すべきだった彼女の名を力無く呼ぶが、もう彼女が答えることはできない。

ついに限界を迎えた下半身は膝から崩れ落ち、最期の意地を見せるように下半身を包む炎の火力が一気に上がり、その体を灰へと変えていく。

それを切なげに見下ろした夏油は「お疲れ様」と彼女を労った瞬間炎が消え、骨も残さずに灰となった下半身が風に吹かれてどこかに飛んでいった。

「……」

その行き先を乙骨に治療されながらぼんやりと見つめていた貴丈だが、すぐに夏油が話し始めたのを合図に彼に視線を向けた。

「さて、話を戻そうか。桐生を治療する時間も必要だろうしね」

そしてさながらハンデをやると言わんばかりの事を宣うと、游雲を弄ぶように振りながら言う。

「私が望むのは『啓蒙』ではない、『選民』だよ。数が多いというだけで強者が弱者に埋もれ、虐げられることもある。そういう猿共の厚顔ぶりが、吐き気を催す程不快だと、私は言っているんだ」

そこまで自分の主張を言い切った夏油は少しづつ回復していく貴丈に目を向け、挑発するような笑みと共に彼に言葉の矢を放った。

「そういう意味では、私は君を尊敬しているよ。偉大な先駆者の一人だからね」

「……どういう意味だ」

そして聞き捨てならない言葉を受けた貴丈は、額に青筋を浮かべながらそう問うと、夏油は「言葉の通りだよ」と肩を竦めた。

「焰のように呪力に耐性を持つ者——何かの切っ掛けで呪術師になれたかもしれない人と、それ以外の家族のように切っ掛けがありながら呪術師になることも出来ない非術師さるともの選民。たったの六十人でも、それを実践したのは君が初めてだ」

「……っ」

夏油の言葉に貴丈は言葉を失い、乙骨も何と言葉をかけていいか分からずに無意味に口が開くばかりで言葉が出てこない。

それもそうだろう。貴丈の家族に降り掛かった惨劇に関する話は、誰であろうと踏んではいけない地雷そのものだ。

それを踏み抜きながら、あまつさえ恨んでいる自分と同じだと言われた友人に、何と言えればいい。

そして二人が黙ってしまえば、後は夏油の独壇場だ。

「だからこそ、改めて考えて欲しい。私の目的が果たされ全人類が呪術師となれば、君の術式が暴走したとしても害を受ける人は誰一人としていない。万が一呪霊になってしまったとしても、君ではない誰かが必ず止めてくれる。君が何もかも背負う必要もなくなるんだ」

その声音はどこまでも穏やかで、慈悲の心にも満ちているようにさえ聞こえるものだ。

それを聞くしかない貴丈は夏油を睨むことしかできないが、その瞳には迫力というものが欠けている。

心のどこかで、夏油の言い分を理解し、ある種の救いを感じてし

まっている自分がいるのだろう。

言葉もなく俯き始めた彼に手応えを感じてか、夏油は更に捲し立てるように彼に告げた。

「このまま家族殺しの道を行けば、遠からず私と同じ考えに至る筈だ。何の力も、価値もない猿共を助けるために、愛する家族を殺し続ける。助けた猿共から与えられる賞賛は家族殺しの烙印として、助けられずに向けられる呪詛の言葉は楔として、君を絶えず苦しめることになる」

自らと同じ道に誘うように手を伸ばしながら、夏油は言葉が続けた。

「その内君は、自分だけでなくそんな呪詛の言葉を放つ猿共さえも呪うようになり、そんな君を更に呪う者さえも現れるだろう。君は周囲からの呪いと、自分自身に向ける呪いでポロポロに摩耗し、やがて解放を求めて死を選ぶか、あるいは私と似た道を歩むことになる」

——その力を持つ限り、君はそうなると断言できる。

夏油はそう言葉を締めくくり、改めて貴丈に問いかけた。

「桐生、私と共においで。私なら君を助けられる。君は君のままでもいいんだよ」

そして仏のような慈愛に溢れる笑顔と、底抜けに優しい声でそう告げると、貴丈は治療の途中にも関わらずフラフラと立ち上がった。

「桐生くん……?」

そんな彼の行動に集中が途切れてしまったからか、反転術式が強制終了してしまい、治療途中だった貴丈の脇腹から血が滲み出し、ポロポロの呪術高専の制服を赤く汚していく。

だがそれに構わず立ち上がった貴丈は不意に空を見上げ、深く息を吐いた。

『帳』のおかげで空も見えないが、暗いおかげでまるで夜空を見上げているようだ。

「確かに、あなたの言葉の通りかもしれない」

そして吐き出した言葉は反論ではなく同意を示すもの。

後ろでギョツと目を見開く乙骨を他所に貴丈は手元に呪力を集め、

それを自分の腹に押し当てた。

「家族を呪霊に変えて、その呪霊を祓^{殺す}うたために戦って、事情を知らない人たちからは感謝されたり、逆に叱責されたりするかもしれない。それで悩んでうじうじして、あんたみたいにやばい事をやらかすかもしれない」

拳から溢れた呪力がベルトのように彼の腰に巻きつき、少しずつ形を整えていく。

ゆつくりと、ゆつくりと。先のダメージで黒閃後のゾーン状態も途切れ、ベルトを創るのも一苦労だが、ゆつくりだからこそ今度は正確に創ることができる。

ベルトのバックルにフルボトルを装填するための二つの溝——ツインフルボトルスロットと、その右側からボルテックレバーを生成し、形を固定。

先程は不足していたパーツをしっかりと埋め込んだベルトを創りあげた貴丈は、赤く光る瞳で夏油を睨みつけると夏油に向けて叫んだ。

「けどな、俺のことを何も知らねえお前が、俺のことを決めつけんじやねえ!!」

脳裏に過るのは、真希、狗卷、パンダ、乙骨、五条らと過ごしたこの半年の記憶。

自分には惜しいほど、充実した日々だった。

自分がいてはいけなと思えるほど、楽しい日々だった。

毎日が笑顔で溢れ、時には喧嘩し、ぶつかり合い、それでも最高の日々だった。

そんな日々を、多くの人が享受できるように。

「誰かを呪うことになろうと、誰かに呪われることになろうと、それでも俺は、術師だろうが非術師だろうが関係なく、一人でも多くの人が笑える未来を創る!!」

右手にラビットフルボトルを、左手にタンクフルボトルを取り出し、それを数度振ってから蓋を開け、ベルトのツインフルボトルスロットに嵌め込んだ。

『《ラビット！タンク！》』

「この力が呪われたものだろうと、この先俺自身を殺したいほど呪うことになろうと、その為に俺は、この力を使う!!」

僅かに血が混ざった唾を吐きながら吠えた彼は、夏油を嘲るような笑みを浮かべながら、更に語気を強めた。

「俺は俺のままでもいい？ふざけんな！俺は今の俺が大っ嫌いだ!!」

夏油は彼に変わるなど言ったが、今の彼が求めているのは停滞ではなく変化。新たな自分に変わる事だ。

その思いを込めてボルテックレバーを力強く掴み、一気に回転させる。

レバーの回転に合わせて捻出された呪力が、ベルトから貴丈の前後に向けて伸びる透明な管へと変わり、その中をフルボトルに込められた呪力が流れていく。

前面にはラビットフルボトルの成分から生み出された頭の左半分、右腕、左足を模した赤い素体ハーフボディが、後方にはタンクフルボトルから生み出された頭の右半分、左腕、右足を模した青い素体ハーフボディが形成され、それが完了すると同時にベルトが再び貴丈に問うた。

『——Are You Ready?』』

その問いかけに、貴丈の答えはとつくに決まっている。

いや、本来なら初めてスマッシュを祓殺したつたあの日に、絶対にブレないように決めておくべきだったのだ。

彼は顔の前でゆっくりと拳を握り、それ越しに夏油を睨みつけながら、深呼吸を一度。

「——変身!!」

そして肺の空気を一気に吐き出す程の音量で、彼は改めてその宣言を口にした。

直後、前後に伸びていた素体ハーフボディが貴丈の身体を挟み込み、鎧鎧となって彼を包み込んだ。

『《鋼のムーンサルト!!ラビット・タンク!!!イエ——イ!!!》』

同時にベルトからも今日一番の音量をもって名乗りをあげ、それが終わると共に貴丈は左手で兎を増した左目のアンテナを撫でた。

「桐生くん！」

ようやく復活を果たし、そしてどこか吹っ切れた雰囲気を放つ貴丈の隣に乙骨が立ち、その隣に里香が着くと、貴丈は乙骨に向けて言った。

「いくぞ憂太！あのふざけた野郎、ぶっ倒す!!」

「……………っ！うん!!」

そしていつもは年上だからと遠慮して苗字で呼ばれていたにも関わらず、ようやく名前を呼び捨てにしてくれた貴丈の変化に乙骨は嬉しそうに笑いながら頷いた。

そんな彼を横目で見つめた貴丈は仮面の下で思わず笑みをこぼすが、やる気十分な様子で夏油を睨む乙骨の様子から気付かれてはいないとわかって思わず安堵。

『里香はあああ』 あ？』

一人蚊帳の外にされていた里香が貴丈の額を突きながらながら問うと、彼は気にする素振りもなく「もちろん、一緒だ！」と一言で返すのみ。

乙骨も里香の頬を撫でて「お願いね」と笑みをむけると、里香もまたやる気になったように空に向かって咆哮をあげた。

そんな二人と一体を見つめていた夏油は残念そうに息を吐き、貴丈に問う。

「それが君の答えか、桐生」

「ああ。覚悟は決めた、あとは貫くだけだ」

彼の問いに貴丈は感発入らずに答え、右足と右手を前に、左足は後ろに下げ、左手は顎の前に置く、サウスポーの構えをとった。

左足のホップスプリングを最大限に生かすためだが、今まで右手を起点に攻め続けたのだから、相手のリズムを崩すという意味もあるだろう。

拳を構えた貴丈。刀を構える乙骨。吼える里香。

戦意漲る彼らを前にしても、夏油は冷静であった。

「残念だよ、二人とも。けど、こうなつては仕方ない」

体に巻き付けていた人面芋虫とも言える呪霊をしまい込んだ彼は、
游雲を構えながら感情を感じさせない絶対零度の声音で二人に告げ
た。

「——大義のための、犠牲となれ」

彼がそう告げた瞬間、貴丈、乙骨、里香の三人は、一斉に彼に向けて挑みかかった。

まず真つ先に夏油に肉薄したのは、改めて覚悟を決めた貴丈だった。

左足首のホップスプリングを跳ねさせ、拳を構えた体勢から何の予備動作もなく飛び出したのだ、文字通り走り出した乙骨と、彼に追従する里香に比べれば初速が違う。

残像も残さず、かろうじて赤い軌跡のみを残すそれは、先程の彼と比べても段違いに速い。

「ッ!!」

「ウオラッ!!」

夏油はその速度に目を見開いて驚愕を露わにするが、すぐさま游雲を手繰り寄せると半ば当て勘でタイミングを合わせ、游雲を貴丈に向けて振るった。

貴丈はそんなものに構う事なく、前に飛び出した勢いのままに空中で腰を捻り、限界まで引き絞った右腕を着地と同時に放った。

加速の勢いも乗ったその速度たるや、まさに神速。音も、光さえも置き去りにしたそれは、振り抜かれる前の游雲を的確に捉えた。

直後鳴り響くのは、二つの強力な呪力がぶつかり合う衝突音だ。

夏油と貴丈の接敵時とは、似て非なる状況。

だが今回はスピード特化のラビットハーフボディによる打撃と、当て勘で振るい、十分な勢いが乗り切る前に止められた一撃。

どちらが有利、不利はなく、ほぼ互角の競り合いが巻き起こり、二つの呪力がぶつかり合う濁流が辺りの景色を吹き飛ばしていく。

それに耐える為、歯を食い縛った夏油は、先の再現のように呪霊を呼び出して彼を弾き飛ばしてやろうと呪力を練り上げるが、

「シッー」

特級相当の呪力と呪力がぶつかり合う、並の術師や呪霊からば跡形もなく消し飛ばす呪力の濁流の中を突っ切った乙骨が刀を振るった。

首を刈り取らんと迫る刃を睨んだ夏油は、游雲の一節を操って乙骨の刃を防御。

耳元で鳴った甲高い金属音に不快そうに眉を寄せながら、まだまだと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべて貴丈と乙骨をそれぞれ一瞥するが、貴丈は左手でベルトからラビットフルボトルを取り外すと、その位置に茶色のフルボトル——ゴリラフルボトルを叩き込む。

『ゴリラ！タンク！』

そして新たな組み合わせを伝える陽気な音声を聞き流しつつ、レバーを回転。

『Are you ready?』

「変身！」

ベルトの問いかけに即答した直後、左目の複眼が赤い兎の横顔から茶色を基調とした力瘤を作るゴリラへと変わり、右拳が人の胴体ほどもありそうな巨大な拳——サドンデストロイヤーへと変化した。

その変化に夏油が驚いた瞬間、貴丈は左足の踵を地面にめり込ませ、右腕を更に前へと突き出した。

「っ!?これは……っ！」

同時に急激に重くなつた彼の拳に夏油が唸り、流石に限界かと二人との競り合いを中断しようとした瞬間、貴丈が「ラァ!!」と声をあげた。

その瞬間、右拳の装甲内に仕込まれたパワーユニットが炸裂し、ほんの一瞬だけ膨大なまでの呪力を生み出し、勢いのままに游雲を押し切り、ついに夏油の胴体を打ち据えた。

「カツ!？」

サドンデストロイヤーの拳が腹にめり込み、めきめきと骨が軋み、内臓が押し潰される痛みに呻いた夏油は、押し出された肺の空気を吐き出した。

だがその場で踏ん張ることなく、逆に拳が当たる瞬間に後方に跳んだ為かクリーンヒットとまではいかず、さながらピンボールのように弾き飛ばされる。

その不十分な手応えに貴丈は舌打ちを漏らし、ついでに渾身の一太刀が空振りに終わった乙骨は僅かに体勢を崩して片膝をつく。

弾き飛ばされた夏油は呼び出した低級の呪霊をクツション代わり

にしつつ背中から地面に落ちると、押し出された勢いのままにしばらく地面を滑っていった。

その間にもクツションにされた呪霊はボロ雑巾のようになっていき、彼が通った後には濁った色の血が尾を引いている。

「やれやれ、これは参ったね」

当の夏油はもはや肉片になった呪霊を気にも留めず、肩を竦めながらそんな悪態をつくのだが、そんな彼を影が覆った。

『あああ” ああ” あああ” ツ!!』

追撃せんと、先の攻防では二人に置いて行かれていた里香が回り込み、呑気に寝転んでいる夏油に向けて鉄槌の如く拳を叩きつけたのだ。

夏油は「おっと」の気の抜けた声と共にその場を飛び退くが、彼の下敷きになっていた呪霊はそうはいかず、里香の拳に叩き潰された。

ぐちゃりと湿った音と共に辺りに呪霊の血が飛び散り、里香の拳を赤く彩るが、そんな彼女の拳に夏油は游雲を放った。

相手は呪霊だ。腕の一本や二本千切れた所ですぐに治る。

後で戦列に加えるつもりではあるが、それは乙骨を下してからでないと不可能。

ならばほんの数秒でも相手の戦力を削ぐという意味で、里香の腕を潰しておくのは間違いではあるまい。

それをさせてくれるかは、また別問題だが。

「里香!!」

素早く体勢を立て直し、一気に肉薄した乙骨が游雲の一撃を刀で受け止め、弾き返すと共に返す刃で一閃。

ジャラリと鎖の揺れる音と共に游雲がブレたかと思えば、乙骨の振るった刃と游雲がぶつかり合い、激しい火花を散らして二人の視界を照らす。

『ゆう” たああ” あああああ!!』

だが里香が二人の競り合いに割り込み、夏油の頭を叩き割らんと拳を叩きつけた。

夏油はそれを後ろに飛び退いて避け、追撃に放たれる里香の拳を避

けながら乙骨と貴丈を警戒。

ラビットハーフボディではない貴丈は、いきなり落ちた機動力にもたついているが、乙骨はそうではない。

戦闘が始まってからというものの乙骨は調子を上げ続け、纏う呪力も増し続けている。

そんな彼が游雲に負けじと殺意全開で刀に更に呪力を込め、全速力で突っ込んでくるのだから、視界の端に捉えただけでも凄まじい^{ブレッシャー}迫力を感じてしまう。

「フツ!!」

鋭く息を吐きながら夏油に向けて突貫し、迎撃せんと横薙ぎに振られた游雲をスライディングで潜り抜け、無防備に晒された夏油の背中を切り裂かんと刃を振るうが、二人の耳にガキヤン!と馴染みのない異音が届いた。

夏油を切り裂かんと振るった刃が乙骨の呪力に耐えきれず、柄を残してバラバラに砕けてしまったのだ。

突然の武器損失にぎよつと目を見開く乙骨に、夏油はどこか蔑むような冷たい声音で告げる。

「駄目じゃないか、急にそんなに呪いをこめちゃ。器がもたない、悟に教わら——」

『《鋼のムーンサルト!!ラビット・タンク!!イエ——イ!!!》』

そして乙骨に教鞭を払おうとした瞬間、相変わらずテンションの高い音声が辺りに響き、夏油はハツとして貴丈の方に目を向けた瞬間、青い拳が彼の視界を埋め尽くした。

次の瞬間には脳の奥底まで響くような衝撃と、鼻もろともに頭蓋骨が碎かれる激痛が身体を駆け巡り、勢いのままに吹っ飛ばされる。

「憂太、無事か?!」

ゴリラハーフボディをラビットハーフボディに換装した貴丈は右拳を突き出した体勢のまま乙骨に問うと、「うん、大丈夫」と冷静な声音で返す。

残念そうに砕けた刀に目を向けた彼は、それを足元に置いた。

同時に夏油が立ち上がり、ひしゃげた鼻を強引に元に戻しながら乱

暴に鼻血を拭う。

「こうしてやられると、面倒な力だね」

あの鎧。ボトルの組み合わせにより、二つの術式を同時に使ってくる厄介にも程がある代物。

状況に応じてボトルを切り替え、先のようにスピードによる翻弄とパワーによるゴリ押しさえも可能にする。

夏油の呪霊操術もまた、相手によって放つ呪霊を切り替えることで似たような事は出来るが、その強さはまちまちだ。術式を持つ呪霊など、それこそほんの一握り。

だが貴丈は違う。多少の差はあれど、変異型呪霊の数だけ術式を獲得し、呪力を奪い、文字通りに戦えば戦うほど強くなっていく。

何なら今この瞬間にも新宿や京都で変異型呪霊が被われている以上、現在進行形で強くなっていく可能性も高い。

「やはり、敵にするには惜しいよ」

夏油は溜め息混じりに肩を竦めてそう言うと、貴丈は「また勧誘か？」と呆れたような声音で返す。

「いいや、それはもう諦めている」

夏油は冷静にそう返すと何を思っただか游雲を投げ捨て、手元に呪力を溜め始める。

彼の動きに警戒して身構える二人と一体を睨みながら、夏油は独り言を言うように口を開いた。

「もう質も量も妥協しない。知っているかい？特級を冠する人間は私と乙骨を含めて四人。だが呪いだとは十六体存在する」

そういうや否や彼の隣に現れたのは、どこか平安貴族を思わせる着物を着た女性——の形をした呪霊。

細められた二対の瞳と、笑っているかのように剥き出しの歯。纏う呪力は里香に劣りはすれど、彼女のように不安定ではなく凧いだ海のように静かで、圧倒的だ。

「——特級仮想怨霊『化身玉藻前』。これがその内の一体だ」

「特級呪霊!?!」

夏油が隠していた奥の手、まさに切り札ジョーカーの登場に貴丈が狼狽えた。

夏油一人を相手にしても攻めあぐねているというのに、ここに来て特級呪霊の登場だ。戦況は最悪に近い。

「更に私が今所持している4461体の呪いを一つにして、君たちにぶつける」

そう言うや否や、夏油を取り囲むように大量の呪霊が彼の影から這い出してくるが、まるで何かに吸い込まれていくかのように夏油の背後に吸い寄せられ、圧縮されていく。

呪霊たちが渦潮に巻き込まれたように捻れながら混ざり合い、一つの肉の塊へと変わるのにほんの数秒。

「――呪霊操術、極ノ番ごくのばん。『うずまき』」

呪術におけるある種の奥義――極ノ番。呪霊操術の奥義たるそれは、従える呪霊を一つの呪力の塊へと転じさせることで、手数を減らす代わりに最大の火力を叩きつけるというもの。

鎧越しに感じる迫力にこれはヤバイと仮面の下で大量の冷や汗を垂らす貴丈だが、それを隠すように拳を構え、深呼吸を一度。

「……」

だが隣の乙骨はただ静かに玉藻前と夏油、うずまきを順に睨み、そして貴丈に目を向けた。

不意に視線を向けられた貴丈は「ん？」と声を漏らして乙骨に見つめ返すと乙骨はどこか覚悟を決めたように凜とした表情を浮かべた。

「憂太？」

嫌な予感があった貴丈は彼の名を呼ぶが、乙骨は構わずに里香の方に身体を向けた。

「里香」

『なあ……に……??』

彼に名を呼ばれた里香もまた彼の方を向くと、乙骨は彼女を優しく抱きしめた。

それに驚いたのか里香はビクリと身体を跳ねさせるが、乙骨は彼女の耳元で囁く。

「いつも守ってくれてありがとう。僕を好きになってくれて、ありがとう。最期にもう一度、力を貸して」

「憂太、お前、最期って……?」

「コイツを止めたいんだ、その後は何もいらないから」

「おい待て、何を……!!」

「僕の未来も、心も、体も、全部里香にあげる。これからは、本当にずつと一緒だよ」

——愛してる、一緒に逝こう?

乙骨は貴丈の言葉を意図して無視してそう言うのと、そつと里香の唇に口付けした。

チュツと小さなリップ音が聞こえたかと思えば、里香が唸りながら体を痙攣させると、ただですら強い呪力を更に漲らせながら吼える。

『憂太!! 憂太っあ!!』

頭部の中央から血走った瞳が出現し、髪を思わせる触手を振り回しながら満面の笑みを浮かべるように歯を剥き出しにする。

『大大大大大大大大大大大大大大大大大好きだよお!!』

そして乙骨への愛の言葉を高らかに叫び、血走る瞳で夏油を睨みつけた。

その視線を受けた夏油は背筋に冷たいものを感じながら苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「自らを生贄にした呪力の制限解除!? この女誑しめ!!!」

夏油が乙骨をやった事をそう判断してそう吐き捨てるが、乙骨はどこか達観しつつも得意気な表情で彼に返す。

「失礼だな、純愛だよ」

だが隣の貴丈はその解答で満足するわけがなく「生贄って、お前!」と乙骨を胸倉を掴むが、乙骨は満足気に笑いながら彼の手をそつと握り返した。

「これで皆を守れるなら、皆に恩返しができるなら、いいんだ」

「よくねえよ!? お前、自分が死ぬってわかってんのか?!」

貴丈は仮面の下で悲痛な表情を浮かべながら怒号を飛ばすが、乙骨のもう覚悟を決めた表情は変わらない。

自分と同じでもう退かないと決めた男の顔が、目の前にあるのだ。

その顔を前にして、もう何を言っても無駄だと判断を下すのに時間

は必要なかった。

「……………なら、俺も最後まで付き合うさ」

貴丈は乙骨から手を離しながらそう言うと、ベルトからラビットフルボトルを引き抜いた。

それをベルトのボトルホルダーにはめ込み、手元に呪力を集めて黒い煙を発生させる。

黒い煙の奥から紺色の輝きが放たれ、それが最大まで大きくなった瞬間に煙の中で精製された物を引っ張り出した。

取り出されたのは、龍の頭部を模した紋様が刻まれた紺色のフルボトル——ドラゴンフルボトルだ。

「父さんっ！力を、貸してくれ……………っ!!」

そしてこの力の源であるドラゴンスマッシュ——つまりは自分の父に祈りを捧げると、ドラゴンフルボトルを数度振って呪力を活性化させ、蓋を開けてベルトにセット。

『《ドラゴン！タンク！》』

そしてもはや慣れ始めた手つきでレバーを回そうとするが、その直後異変が起こった。

ベルトからバチバチと異音と共に火花が散り、身体中を蒼い電撃が駆け回り、全身の筋肉を裂かれるような激痛が身体を痛めつけてくる。

「がっ……………なんだ、この呪力……………?!他のボトルとは、桁違いだ……………っ!!」

彼が知る由もないことだが、ドラゴンスマッシュの強さは全六十体の変異型呪霊でも上から数えた方が速い——それこそ五指に入るほどの強豪だ。

蒼い炎を扱うという術式を持つ以上、等級だけでいえば最低でも一級、下手をすれば下位の特級相当の強さを誇るほど。

他のスマッシュと同じだろうとたかを括っていた貴丈だが、今の彼ではその力を扱いきれていない。

——だからなんだ！それがどうした?!乙骨は命を捨てたんだぞ?!
痛みに怯む己を奮い立たせ、ベルトのレバーを掴み、回転させた。

状況に反して軽快な音楽が鳴るが、その間にも痛みが引く事は無い。

だが彼は止まらない。最後まで乙骨に付き合うためには、夏油を倒すためには、ここで止まるわけにはいかないのだ。

『Are you ready?』

二つのボトルの呪力が高まり鎧の形成が可能なまになると、ベルトがそう問いかける。

「変身ッ!!」

そして今日だけで何度したかも曖昧な宣言を返す。

同時に左目の複眼が赤い兎の横顔から紺色のドラゴンの横顔に変わり、右腕が赤から紺色に変わると、手首から肘にかけて龍の牙を思わせる白い刃——ファンゴブレイドが生え、左足の装甲も紺色に染まる。

「——シャツ!!」

最後の締めとして右手を口元に寄せて鋭く息を吐くと、左目、右腕、左足

が蒼い炎に包まれた強化状態——ブレイズアップモードに移行。

それと同時に今度は全身を焼かれるような激痛が走るが、貴丈はそれを感じさせない声で乙骨に目を向けた。

「準備完了。いつでもいいぞッ!!」

「うん。いくよ桐生くん、里香!!」

「おうッ!!」

『う”んッ!!』

乙骨の号令に貴丈と里香が同時に応じ、里香は口を開けてそこに呪力を溜めていき、貴丈は右拳に呪力を溜めて蒼い炎を滾らせる。

二人と一体の高まり続ける呪力に鳥肌を立てた夏油は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、右手を二人と一体に向けた。

「異性への愛。友人への愛。君たちが愛で向かってくるのなら、私は大義で叩き潰そう」

その宣言と同時に貴丈、里香の呪力の充填が終わり、うずまきもまた呪力の溜めを終えた。

そして訪れる一瞬の静寂。それを打ち破ったのは、

「ウオラァァァァァァァァァァァァァァァァッ!!!」

貴丈が放った、今日一番の咆哮であった。

同時に里香が溜めた呪力、貴丈が溜めた蒼い炎、うずに巻かれた呪霊たちの呪力が解き放たれ、一直線にお互いの怨敵に向けて放たれた。

その途中、里香と貴丈の放った呪力が混ざり合い、蒼い炎に包まれた膨大な呪力の塊へと転じ、放たれた矢の如く迫るうずまきと正面から衝突。

凄まじい衝撃が辺りの景色を吹き飛ばし、呪術高専の敷地を更地へと変えていく。

だがその高密度の呪力同士の激突は、ほんの数秒の競り合いによって幕を閉じた。

貴丈の蒼い炎がうずまきを形成する呪霊たちを焼き尽くし、炭化したそこを里香の攻撃が貫いたのだ。

「ッ?!」

呪霊の群れを掻き分けてきた閃光に夏油はぎよつと目を見開くが、時既に遅し。

閃光が彼の右腕を根本から吹き飛ばし、はるか彼方の帳に直撃してその表面に大きなヒビを入れた。

それでも破れないのは夏油がああ帳に相当の準備をし、様々な細工を施したたからだろう。

だが、この状況においてそんなことどうでもいい。

右腕を失った夏油は歯を食い縛って悲鳴をあげるのを堪え、閃光と爆煙で視界が潰れている内に退散しようと踵を返すが、

『レディー・ゴー!!!ボルテック・アタック!!!』

もはや忌々しさまで感じ始めた陽気な声が、彼の背に投げかけられた。

慌てて振り向いた夏油の目に飛び込んできたのは、蒼い炎を全身に纏い、背後に蒼く輝くドラゴンを従えた貴丈が、こちらに向けて飛びかかってくる姿だった。

里香とうずまきの衝突の中、彼は一切怯む事なくその只中に飛び込んできたのだ。

里香なら必ず勝つ。そして、夏油を逃すわけにはいかない。

友人と、その想い人の力を信じ、彼は前に踏み出した。もし里香が押し負けていたならば、まず間違いなく死んでいたにも関わらず。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

空中で身を翻した貴丈が気合いの咆哮と共に蒼い炎を纏わせた左足を前に突き出すと、背後に控えていたドラゴンが彼にブレスを吹きかけた。

直後、爆音にも似た音を響かせて加速した貴丈が夏油に向けて突撃。

さながら蒼い流星のように尾を引きながら突っ込んでくる彼に対し、夏油は反撃も防御もしなかった。

彼を受け入れるように微笑みながら腕を広げ、迫る炎に眩しそうに目を細める。

友のため、明日のため、そして、生きるために命を燃やす男が見せた輝き。

それに魅力されたようにじっと見つめた夏油の視界が蒼く染まった瞬間、凄まじい衝撃と熱が彼の胸を打ち据えると同時、更地を抉り取る蒼い爆発が辺りを包み込んだ。

「全く、らしくない事をしたものだな」

呪術高专敷地内の一角。

幸いにもこの日の騒動に巻き込まれなかった建物の影に、夏油の姿があった。

里香の攻撃で右腕を根本から無くし、貴丈のトドメの一撃で胸を抉られ、骨や内臓が剥き出しになっている。

だがもう痛みも感じない程に弱りきっている彼からすれば、自分の損傷などどうでもいいのだろう。

やれやれと溜め息混じりに壁に背を預けて座り込んだ彼は、不意に

感じた視線と気配に苦笑を浮かべ、そちらへと目を向ける。

「遅かったじゃないか、悟」

そして夏油にそれこそ友人のように名を呼ばれた五条は何も言わず、ゆっくりと彼に近づいていく。

そんな彼に夏油は問いかける。

「家族達は、無事かい？」

「新宿の連中も、京都の連中も、揃いも揃って逃げ果せたよ。オマエの指示だろ？」

「まあ、私は優しいからね。……でも、彼の目の前で焰を殺したのは反省しないのかな」

五条の返答にどうにか肩を竦めながら返した夏油は、フツと笑いながら五条に目を向けた。

学生の頃よりはだいぶ大人びた、けれどあまり変わらない彼の面持ちが酷くて冷たいようにも見えるが、やはりどこか優しさを滲ませている。

「桐生から目を離すなよ。私みたいにしたくはないだろう」

そして五条に貴丈に対する警告を発し、そんなお節介を焼く自分を自嘲するように乾いた笑みをこぼした。

「彼は呪いを引き受ける器だ。誰かを救う度に家族に呪われ、家族を救えばその他大勢に呪われる。『未来を創る!!』なんて言っていたけど、八方塞がりもいいところだよ、彼」

「言われなくても。彼も大事な生徒さ」

夏油の言葉に五条はそう返し、夏油の脇にしゃがんで彼と視線を合わせた。

「それで、他に何か言い残す事は？」

「……誰がなんと言おうと非術師ひじゆしは嫌いだ。でも別に高専の連中まで憎かったわけじゃない」

夏油はそう言う溜め息を吐くと帳に覆われた空を見上げ、次いで五条へと目を向けた。

鼻先が擦れ合いそうな距離なのには驚くが、彼が人のパーソナルスペースに土足で踏み込んでくるのは昔から変わらない。

彼をじつと見つめながら、夏油は最後に自分の本音を口にする。

「ただこの世界では、私は心の底から笑えなかった」

彼が今まで浮かべていた笑顔も、きつと嘘だったのだろう。

心の底から笑おうにもいつも非術師にんげんたちの姿が脳裏をよぎり、彼らを守らんと犠牲になる術師たちの姿が脳裏をよぎり、その笑顔もすぐに引っ込んでしまう。

「傑」

五条はそんな彼の名を呼び、彼にだけ聞こえるよう、囁くように何かを告げた。

その一言にはつと思わず笑みをこぼした夏油は、彼に向けて最後の悪態をついた。

「——最後までいい、呪いの言葉を吐けよ」

その言葉を放った直後、バシユ！と何かが潰れる音が辺りに漏れ、天を仰いだ五条は何かを堪えるように息を吐いた。

「——ひろーあつひ——っ!!貴丈ーおい、大丈夫か?！」

がんがんと頭が痛み、身体中に焼けるような痛みを感じる中、貴丈は自分の名を呼ぶ声に目を覚ました。

ぼんやりと霞む視界に映るのは、心配そうにこちらを覗き込んでくる真希の顔だ。

「真希……?」

「ああ。動けそうか?」

「いや、無理。寝転んでるだけでもしんどい……」

彼女の声に貴丈は身体の底から力を抜くように深く息を吐くが、違和感を感じた右腕を持ち上げて視界に入れた。

ドラゴンハーフボディを纏い、ブレイズアップモードの炎に包まれていたせいなのか酷い火傷の跡が残り、肌が爛れてしまっている。

誰かが治療してくれたからかまだ跡で済んでいるが、その前なら見るに耐えなかっただろう。

「何なら顔の左半分も酷いことになってんで」

うへえと自分の腕を見つめながら気持ち悪そうにする貴丈に、真希は溜め息混じりに残酷なまでの現実を告げた。

ドラゴンハーフボディに包まれていたのは、顔の左半分と右腕、左足だ。

腕以外は見えないが、その部位が大変なことになっているのは間違いないだろう。

だあ……と声を漏らしながら腕を降ろした貴丈は、まあ目が無事なだけマシかと意識を切り替えた。

そして思い出したように「そう言えば」と漏らすと、相変わらずこちらを見てくる真希に目を向けた。

多少服に汚れや血の染みが残っているが、身体は五体満足でなんなら健康そうでもある。

ドラゴンスマッシュ、スパイダースマッシュ、フェニックススマッシュの三体に袋叩きにされ、身体中の骨や内臓が大変なことになって

いた彼女だが、多少の痣はあれど重症には見えない。

「オマエの怪我は？」

「憂太が治してくれた」

そんな疑問をぶつけるように貴丈が問うと、真希はさも当然のようにそう返し、貴丈は「そつか……」と納得して安堵の息を吐くが、すぐにハツとして慌てて身体を起こした。

乙骨は夏油撃破の為に全てを投げ捨てた。一応は納得したが、逝ってしまう前に言わないばならないことがある。

「憂太?! あいつ、どこに行っただ?!」

無理だと言っていたのに急に動いた彼に真希は溜め息を漏らし、ついでに彼が乙骨のことを呼び捨てにしたことに気付くが、まあどうでもいいかと匙を投げた。

「あ、桐生くん。おはよう」

そして起き上がった彼に声をかけたのは、火傷で大変なことになっている彼の左足に反転術式を当てている乙骨と、彼の傍らで大人しく治療が終わるのを待っている里香の姿だった。

辺りを見渡せばパンダと狗巻が辺りを警戒しているが、不意に振り向いた二人が笑顔を浮かべながらサムズアップしてくる。

貴丈は二人の無事に安堵の息を漏らす、今はそつちじゃないと言わんばかりに乙骨に声をかけた。

「お前、あの話はしたのか」

その問いかけに乙骨はギクリと肩を跳ねさせ、気まずそうに目を逸らした。

あの話? と首を傾げる真希、パンダ、狗巻の反応に貴丈は頭を抱えながら溜め息を吐き、「俺が説明するのか?」と脅すような厳しい声で乙骨に問いかける。

その言葉に乙骨は「僕がするよ」と少々怯えるような声音で応じ、事情を知らない三人に向けて言う。

「……えっと、その、力を貸してもらおうかわりに、里香ちゃんと同じ場所に逝く約束をですね……」

「はあ?!」

「めんたいこ?!」

乙骨の告白に三人は驚き、慌てて彼の方に目を向けたのとほぼ同時。貴丈の左足が火傷の跡を残して傷が完治した。

貴丈は具合を確かめるように足首を回し、痛みがないことを確認。彼の様子から大丈夫そうだと判断した乙骨は、説明の続きを口にする。

「せめて皆の怪我を治してからって里香ちゃんにお願いしてまして、今それも終わりました」

恐る恐る、厳しい親にしでかした悪行を暴露する子供のような声でそう言くと、真希が彼に詰め寄った。

「オマエ、それ死ぬってことじゃねえか!!何考えてんだ、バカ!!!」

そのまま彼の胸倉を掴んで前後に振り回しながら怒鳴りつけ、オマエらも何か言ってやれとパンダ、狗巻、貴丈に目を向けた。

そしてパンダと狗巻が不満顔のまま何かを言おうとすると、それを制するように貴丈が頭を下げた。

「悪いツ!!俺がもつと強ければ、そんな事をしなくても済んだツ!何か言うなら俺に言ってくれ!」

彼の口から勢いよく放たれたのは謝罪の言葉だった。

その言葉の通り、自分が強ければ乙骨が命を捨てる必要はなかったと己を責め、せめてそして三人の叱責からは守ってやるべく矢面に立ちとうとしている。

「そ、そんな、桐生くんのせいじゃないよ!僕が勝手にやったんだから!!」

「それでもだ!やっぱりオマエを連れてきつさと逃げるべきだった、俺の判断ミスだ!」

「違うよ!それなら僕がもつと早く逃げたり、二人と合流してれば良かったんだ!!」

今まで揃って気絶し、貴丈に限って言えば死にかけていたというのに、二人は戦闘中もかくやという程の迫力で水かけ論を展開し始めた。

そこに割り込む隙すら与えられない三人は顔を見合わせ、あの乙骨

が貴丈に言い返していると二人の関係の急接近や、乙骨の性根が強くなっていると僅かに驚く。

だがいつまで経っても終わらない二人の怒鳴り合いに痺れを切らした真希が割り込もうとするが、里香が随分と静かなことに気付いて彼女に目を向けた。

目の前で乙骨が口喧嘩をしているのに、貴丈に襲いかかる気配はおろか、乙骨の盾になろうと動く気配もない。

彼女の疑問が伝播したのか、パンダと狗巻も里香に目を向けると、微動だにしなかった里香の身体が突然ボロボロと崩れ始め、異形の肉体が瞬く間に朽ち果てていく。

「り、里香ちゃん?!」

そんな彼女の異変に気付いた乙骨が慌てて彼女に駆け寄ると、ついに限界を迎えた里香が形を崩し、そこから一人の少女が現れた。

幼いながらも大人びた雰囲気を放つ、口元に黒子がある黒髪の少女。

貴丈はもちろん、乙骨を除いた四人は見覚えのない少女の登場に狼狽えるが、乙骨は彼女に駆け寄りながら彼女の名を口にした。

「……里香、ちゃん?」

少女の事を乙骨が「里香」と呼ぶと、貴丈たちは『え?』と揃って間の抜けた声を漏らす。不意にパチパチと拍手の音が崩れた扉の向こうから聞こえ、そこから白髪碧眼の美丈夫が姿を現した。

「おめでとう、憂太。解呪達成だね」

そして誇らしげな声音で乙骨にそう言うが、肝心の一年五人の反応は鈍い。

言葉に迷うように顔を見合わせ、たつぷり時間を開けてから代表して貴丈が問う。

「……あんだ誰」

「グットルツキングガイ五条悟先生ダヨ」

そして、戦闘の激化に伴って目の包帯を外しただけなのに生徒に誰呼ばわりされた五条が残念そうにジト目になりながらそう言う。貴丈は「怪我してたんじゃねえんだ」と呆れ顔で呟く。

常日頃から目を包帯で隠しているのだ。人に見せたくない何か——それこそ大きな傷跡があるのかと思っていたのだが、そうではないようだ。

彼の指摘にドヤ顔を浮かべた五条は「僕の目は特別なんだ」と返し、すつと目を細めて貴丈の腰に巻き付くベルトと、里香と呼ばれた少女をじつと見つめた。

「この目——『六眼』っていうんだけど、簡単に言えば呪力の流れが見えるって代物なんだ。普段は見えすぎるから隠しているんだけど……ふうんーん、なるほど」

顎に手をやって僅かに思慮した五条は、まずは里香と乙骨からと言わんばかりに二人に視線を向けた。

「憂太の仮説と貴丈の疑問が気になってね、憂太の家系を調べさせてもらった。それで、ようやくわかったんだけど」

そして心底嬉しそうに笑いながら乙骨の肩に手を置き、自分の顔の横でピースマークを作りながら彼に告げた。

「君、菅原道真の子孫だった。超遠縁だけど、僕の親戚!!」
「すが——えっと、誰?」

乙骨はその言葉の意味がよくわからずに首を傾げ、助けを求めるように貴丈に目を向けるが、彼もわかっていないので肩を竦めるばかり。

だが真希、狗巻、パンダの二人と一匹はマジかと言わんばかりに二人を見ると、代表して真希が口を開いた。

「日本三大怨霊の一人。超大物の呪術師だ」

溜め息混じりに、そして心底面倒くさそうに真希がそう教えると、二人は揃って「へ〜」と気の抜けた声を漏らす。

その間抜け面を思わずぶん殴ろうとした拳を振り被るが、疲弊しきっている二人にそれはどうなんだと自問することでもうにか引つ込め、怒りを抑えるように力んだ呼吸を繰り返す。

そんな彼女に良く我慢したと言わんばかりにパンダが肘で小突くと、お返しと言わんばかりに彼に鉄槌が下された。

悲鳴をあげながら崩れ落ちるパンダをとりあえず無視した五条は

「憂太が正しかった」と呟いて、乙骨と里香に目を向ける。

「里香が君に呪いをかけたんじゃない。憂太が里香に呪いをかけたんだ」

「——ッ！」

その言葉に乙骨はハツとすると、何かを思い出したかのように里香に目を向けた。

里香が事故に遭ったその瞬間、彼は彼女の死を否定し、彼女をこの世に縛り付けるほど強力な呪いをかけてしまった。

忘れてはいけない筈なのに、今の今まで忘れていたその時の感覚を思い出し、頭を抱えてしまう。

「呪いをかけた側が主従制約を破棄し、かけられた側も君に罰を与えようとしていない。なら、解呪は完了。ま、彼女を見れば分かりきったことだよな」

五条が話をそう締めくくると、乙骨は「僕のせいじゃないか」と呟き、涙を流し始めた。

里香を怪物に変えたのも自分。彼女に人を傷つけさせたのも自分。そして今回の騒動——多くの命が危険にさらされた百鬼夜行が起きたのも、過去の自分が原因。

それに気付いてしまった乙骨は嗚咽を漏らしながらその場に崩れ落ち、大粒の涙で頬を濡らした。

凄まじいまでの自己嫌悪。自分で自分を攻撃してしまっている乙骨だが、そんな彼を里香がそつと抱きしめた。

「憂太、ありがとう」

そして彼にお礼の言葉を告げて、驚く彼を優しく撫でてやりながら言葉を続ける。

「時間をくれて、ずっと側に置いてくれて。里香はこの六年が、生きてる時よりも幸せだったよ」

——バイバイ。あんまり早くこっちにきちやダメだよ？

彼女が幸せそうに笑いながらそう言うと、突然身体が光り始め、身

体から漏れ出た光の粒子が空へと昇っていく。

もうお別れの時間なのだろうことは、見ればわかる。

そしてこの場に置いて、彼女に言葉を投げかけていいのはただ一人。

「……うん。またね」

そつと彼女から身を離れた乙骨がそう言うと、里香の身体は完全に光の粒子へと変わり、空への昇っていった。

それを見送った乙骨は涙を拭い、泣き腫らした顔で空を見上げた。

そんな二人の別れを見届けた貴丈は僅かに俯き、額を掻きながら溜め息を漏らす。

——俺があいつらに呪いをかけたとしても、どうすれば制約を破棄できるんだ……？

今の話で自分と乙骨は極めて似た状況であることが理解できた。

乙骨は全てを投げ出すことで主従制約を破棄したが、自分はどうすればいいのか。

——そもそも俺とあいつらに主従制約があるのか？

様々な疑問が湧いては消え、湧いては消えを繰り返す。

「貴丈？」

そんな彼に五条が声をかけると、彼はハツとして顔を上げた。

件の六眼がじつとこちらを見つめ、忙しなく動いているのは貴丈が纏う呪力を観察しつつ、彼の表情から不調を察したからか。

「何ですか？」

心配そうにこちらを覗き込んでくる五条に、貴丈はどこかぶつきらぼうにそう問いかけるが、当の彼は酷く残念そうに肩を竦めて「それがさく」とぼやく。

「ついでに君の事も改めて調べただけど、全く分からず終い。施設にいたよりも前、どこで、誰との間に生まれたとかはわからなかったんだよね」

「……そうですか。まあ、別に期待はしてないっすけど」

五条の悪態に貴丈は大して気にした様子もなく返し、小さく肩を竦めた。

自分にとっての家族はあの施設の人たちであり、顔も名前も知らない肉親など興味はない。

今さら知ったところで、とりあえずぶん殴るかもしれないと言えない。

そして五条の方も予想通りの返答に「それもそっか」と返し、彼の肩に腕を回した。

「とにかく、このベルトが何なのか説明してくれない？ 顔とかの火傷もそれが原因？」

そして彼の腰に巻かれたままのベルトに目を向け、すつと目を細めた。

呪力を通して貴丈と繋がり、ベルトに填まったフルボトルの力を高めているのは間違いない。

「なんか、色々あった結果できました。無事かはわかりませんが、その辺に壊れたやつも転がってると思いますよ。それで火傷については、ちよつとボトルの制御がうまくできなかった結果です」

「なるほど。火傷の跡は反転術式でも消えないから仕方ないか。ちよつとそのベルト借りていい？ 調べるから」

「うす」

五条の提案に頷き、ベルトを取り外して五条に渡す。

六眼でベルトを調べれば、自分の術式に関して何かわかるかもしれない。

そしてベルトから手が離れると同時にベルトの音声に関してを思い出し、五条に向けてラビットフルボトルとタンクフルボトル、ついでに片手に乗り切る分だけ何本かフルボトルを差し出した。

「ん？ これも？」

「なんか、ラビットとタンクを組み合わせると、他の組み合わせじゃない変な音声が流れるんです。その組み合わせだけなのか、他の組み合わせでも流れるのかは、わからないんですけど……」

「オツケー。それについても調べてみるよ」

五条は得意気に笑いながら応じ、フルボトルを確かに受け取った。

夏油との戦闘で特に酷使されたラビット、タンクのフルボトルは既

にボロボロであちこちにヒビが入り、僅かに塗装も剥げている。

「ああ、ついでに——」

それを見た五条は仲間たちが祓った呪霊の中に数体の変異型呪霊がいたという情報を思い出し、真剣な面持ちで「ボトルの生成もよろしく」と貴丈に告げた。

家族の死という現実を唐突に叩きつけられた貴丈だが、その言葉に狼狽える事なく無言で頷き、そのまま手元に呪力を込めてボトルを生み出す。

まずは自分で祓^殺つたスパイダースマツシユの力がこもったスパイダーフルボトル。

そして次は夏油に殺された焰の、つまりはフェニックススマツシユの力が込められたフェニックスフルボトルを——、

「あれ？」

生成しようとして、すぐに手を止めた。

何故だろう。スパイダーフルボトルはすぐに手元に出てきたのに、フェニックスフルボトルが出てこず、変わりにタカの紋様が刻まれた橙色のフルボトル——タカフルボトルができたのだ。

何か間違えただろうかと、続けて夏油との戦いで破壊されてしまったハリネズミフルボトル、ダイヤモンドフルボトルを再度生成して具合を確かめると、その流れのままに次のフルボトルに意識を向ける。

片手間で様々なフルボトルを生成していくが、出てくるのは電車やオクトパス、ロケットなどの関係のないものばかり。

「なんで……？」

「どうしたの？」

一人で黙々とボトルを生み出しては困惑するという、側からみればよくわからない状況にいる彼に乙骨が声をかけると、貴丈が彼に問うた。

「焰は確かに死んだよな？」

「焰……？あのととき割り込んできた？」

乙骨の確認に貴丈は頷き、「オマエも見ただよな？」と重ねて問いかけた。

彼の問いに乙骨は「うん」と返し、その時の光景を思い出す。

「夏油の攻撃で身体がバラバラになって、そのあと——」

「灰になったよな？でも、フルボトルにできない……」

——どういうことだ？

貴丈はうんうんと唸りながら頭を捻るが、やはり答えが分からずに額を搔いた。

自分がトドメを刺さなかったから、それなら他の家族だってそうだ。だから違う。

撃破した直後、夏油が取り込んだ。なら呪霊に混ざってうずまきで放たれる筈。そしてその時に自分と里香の手で祓われた筈だから、これも違う。

——わっかんねえな……。

彼の苛立ちが表に出るようにはりぼりと乱暴に額を搔き、僅かに開いてしまったからか血が出てしまうが、それに構う様子はない。

「はい、ストップ」

そんな彼を見かねた為か、何やら乙骨と話していた五条が貴丈の手を掴んで無理やり額から引き離すと、「傷、開いちやってるから」と血に濡れた彼の指先を示した。

その一言によりやく傷を抉っていた方を自覚したのか、貴丈はやべと言わんばかりに自分の手を見つめながら罰の悪そうな表情を浮かべる。

服で乱暴に額と指先を拭った彼は「大丈夫です」と返し、今度は顎に手を当てて相変わらず思慮している様子。

そのまま無意識だろうに再び額を搔こうと手が伸びるが、今度は真希が彼の腕を掴んでそれを阻止。

「いい加減にしろ。治されたばっかなのに、いちいち怪我すんな」

「あ？ああ、悪い」

五条に右手、真希に左腕を押さえられた状態で謝るのだが、彼はその姿勢のまま虚空に目を向けて再び思慮を開始——、

「さっきも言ったけど、はい、ストップ」

しようとした途端に、五条の一言でそれも中断させられた。

貴丈は不服そうに五条を睨むが、五条はそれを軽く受け流しながら彼に言う。

「君だって疲れてるんだから、今はしっかり休むこと。後のことは大人に任せなさい」

自信満々に胸を叩きながらそう言うが、言つてしまえば今回の騒動の山場はもう過ぎており、やることと言えば辺りの残骸の処理や、各地にある残党の排除程度。

真希たちが運んでくれたからか、現在地はまだ塀や校舎が形を留めているが、戦場となった場所は文字通りの更地だ。

そういう意味では片付けも楽かもしれないが、校舎やその他施設の建て直しに関してはそれなりにかかりそうではある。

「……まあ、頑張ってください」

それに関わるであろう人達の苦労を想像しながら、目の前の男に言う必要もなさそうな言葉を投げかけた。

だが五条としてはそれでいいのか、ご機嫌そうに笑いながら「まっかせろい!!」と意気揚々と胸を張る。

そんな五条の姿に生徒たちは困り顔で溜め息を漏らした。

何があっても相変わらずで、割と相手をムカつかせることが多いこの男が、現代最強なのだから世の中よくわからない。

だがそんな彼が激戦地である新宿や京都ではなくここにいるというのは、もう事態が収拾に向かっている何よりの証拠だろう。

「おら、撤収するぞ」

真希は掴んだままだった貴丈の腕を引きながらそう告げて、他三人を引き連れながらとりあえず無事そうな校舎に向けて歩き出す。

「別に一人で歩けるぞ?」

「あ?別にいいだろうが、たまには甘えろ」

「ま、真希の口から『甘えろ』だと?!明日は槍が降るな」

「しゃけしゃけ!!」

「別にいいだろうが!!こいつには助けられたんだよ、今の内に返しておかねえと何言われるかわかんねえだろ!」

「桐生くんは変なことしないで思うけど」

「なんだ。随分と貴丈の肩を持つじやねえか、憂太」

喧々轟々。死に直面しながらもお互いに助け合って激闘を潜り抜けたというのに、それを感じさせない声音で会話をする彼らの背を見つめた五条は、ふと何かを思いついたのか貴丈を呼び止めた。

「貴丈、ちよつといいかい！」

「なんですか？てか、もうだいぶ遠いんすけど?!」

そんな五条との距離はおおよそ二十メートル。話しかけるには少々どころかだいぶ遠い。

だが貴丈は無視する事なく声を張り上げて返事をする、五条は得意気な表情を浮かべながら彼に言う。

「君の術式の呼び方なんだけど、『ビルド』なんてどうかな？『未来を創る!!』なんて、傑相手に大口叩いたんでしょ？いい名前だと思うんだ」

「——ツ!?な、なんでそれを知ってるんですか?!」

彼の言葉に貴丈はその名前に対する返事もないままに今さら恥かしくなったのか、頬を赤くしながら五条に問うが、すぐにハツとして乙骨に目を向けた。

あのセリフを聞いていたのは、乙骨、里香、夏油の三人。

里香は先ほど解呪され、夏油に関してはわからないが、あの手応えからしてまず間違いなく死んでいる筈。

つまりは消去法で五条に教えたのは乙骨であり、そう思えば先ほどこそこそ話をしていた理由にも納得がいく。

「憂太、オマエ！チクリやがったなこの野郎!!!」

「ええ?!ば、僕?!何にも言つてないよ!!」

「うるせえ！オマエ以外考えらんねえんだ、正直に言いやがれ!!」

貴丈はそう言いながら乙骨が犯人だと決めつけて彼に襲いかかり、対する乙骨は完全な冤罪である為に困惑するばかり。

確かに五条と話してはいたが、それは今後の身の上に関する話を簡単にしただけのことだ。やましい話はしていない。

うわあ!?!と悲鳴をあげた乙骨の頭を脇で押さえ込み、こめかみにぐりぐりと拳を擦り付けながら「この野郎、この野郎」と彼を攻撃する

が、その手つきからして本気ではないのは確かで、単にじゃれついているだけなのは目に見えてわかる。

そんな彼らを微笑ましいものを見るように見つめていた五条は、面白そうだからと教えてくれたのは夏油であることを伏せつつ、ふとある事に気付いて声を殺して笑い始めた。

それが合図になったのか、真希、パンダ、狗巻もそれに気づき、顔を見合わせてニヤリと怪しげに笑う。

「なんだよ。俺と憂太が仲良くしちや悪いかよ」

「いや、そういうわけじゃないんだが」

「しゃけ」

乙骨の頭を脇で押さえたまま三人を睨む貴丈に、パンダと狗巻は浮かべた笑みをそのままに返し、何が可笑しいのかまでの指摘は避けた。

真希もまたハツと鼻を鳴らして彼を笑うのだが、「まあ、いいんじゃないかねえか？」と肩を竦めてぺちぺちと貴丈の頬を叩く。

「オマエの笑顔、悪くねえ」

「え？俺、笑ってたのか？」

「ああ。ガキみたいにくしゃつと、な」

「うっわ、マジか」

真希の言葉に貴丈は頭を抱え、脇に抱えていた乙骨をパンダの方にぶん投げた。

乙骨はこれまた悲鳴をあげるが、どっしりと構えていたパンダに受け止められ、彼から香るお日様の臭いに僅かに癒される。

そんな彼を横目に照れ臭そうに頬を搔いた貴丈は、いい機会だからと四人に向けて告げる。

「でも、きつと俺が笑えたのは、俺が変われたのは、オマエらのおかげだ。オマエらが、あの日ぶつ壊れた俺を創り直してくれた。ありがとう」

あまりの羞恥に頬を赤く染めながら、それでも優しげな——かつての彼がよくしていた本来の笑顔を浮かべながらそう言うと、四人は顔を見合わせながら頷き、彼に笑顔を返した。

そして我先にと貴丈に近づいたパンダが彼の肩に手を置きながら言う。

「そんなお堅いこと言うなよ。俺たちと貴丈の仲だぜ？」

「しゃげしゃげ。めんたいこ」

「そうだよ、桐生くん。水臭いこと言わないで」

男三人はそう言って彼の脇を小突いたり、背中を叩いたりしながらそう言うと、真希は貴丈の鳩尾を軽く殴った。

貴丈が「う!？」と汚い悲鳴と共に崩れ落ちると、彼を見下ろしながら鼻を鳴らした。

「オマエには助けられたからな、これで貸し借りなしだ。飯奢らせないだけありがたく思えよ」

「だからって殴ることないだろうが……っ」

彼女の言葉に貴丈は胸の辺りを押さえながらそう返すが、何かを察した様子のパンダがニヤニヤと楽しそうに笑いながら真希に言う。

「そんな照れ隠ししちゃって、いい加減素直になれよな」

「は？何言ってるんだ」

『オマエの笑顔、悪くねえ』なんて言っちゃって。流石に俺と貴丈の仲でも恥ずかしくて言えないな」

「しゃげ。たかな」

そしてパンダの言葉に狗巻が首肯しながらそう言うと、乙骨もそういえばと先程の貴丈と真希のやり取りを思い出したのか、ぼそりと「確かに」と呟いてしまった。

その直後、ようやく彼らの言葉の意図を察した真希がバキバキと指を鳴らし、それを合図に三人はハッとして彼女に目を向ける。

「よし。オマエら、歯を食い縛れ!!!」

肉食獣もかくやという歯を剥き出しにした獰猛な笑みと共に、彼女は拳を振りかぶってパンダ、狗巻、乙骨の三人に殴りかかった。

だがまだ負傷が尾を引いているのは動きのキレが弱く、三人にはギリギリで避けられ、そのまま逃げられてしまう。

「待ちやがれ!!!」

そんな彼らを追いかけるが三人はそれぞれ別方向に逃げていくが、

真希は迷う事なくパンダを追いかけ始めた。

「なんで俺?!」

「オマエが言い出しっぺだからだ!」

「たかな、めんたいこ!!」

「パンダくん、頑張つて!!」

真つ先に狙われたパンダが真希を非難するが、彼女はそれを素早く切り返して彼に肉薄。狗巻と乙骨は他人事のように彼の背中に声援を送るが、それも虚しくパンダの悲鳴が辺りに響いた。

パンダを一撃で沈めた真希は勢いのままに狗巻、乙骨の方に狙いを定めて動き出し、思いの外早かったパンダの脱落に慌てて逃亡を再開。

いつも通り騒がしい同級生たちの姿に貴丈はもう隠す気もなく笑い始め、その顛末を見届けようとするが、

「ねえ、貴丈?」

そんな彼の背後にいつの間にか移動していた五条が彼の肩に顎を乗せると、「僕にはなんかないの?」と不満そうな声を漏らす。

先程の告白は確かに同級生たちに向けられていたが、そこに五条が含まれている感じではなかった。

何となく感じた疎外感故か、あるいはそれこそ子供のように構ってほしただけなのか、ねえねえと肩に顎を乗せたまま声をかけてくる。

貴丈は面倒くさそうに溜め息を吐くが、五条がいなければここにいられないこともまた事実。

「えつと、ありがとうございます?」

「なんで疑問形なのさ!そこは言い切つて欲しかったな!!」

そしてそんな内心が表に出てしまったのか酷く曖昧な声音でそう告げると、五条は不満そうに声を張り上げ「裏切り者!」と訳のわからない事を宣いながらどこかへと走り去っていく。

——それにしても『ビルド』、ね。

彼の背を見送りながら五条が提案してくれた術式名を思い出し、焼き爛れた自分の右腕に目を向けた。

自分を含め、様々なものを壊し続けるこの力が『創造』^{ビルド}の名を冠す

るとは、皮肉にも感じてしまうが、

「——ビルド。創る、形成するって意味の、ビルドか」

そしてどこか格好をつけた声音でそう言いながら、力の抜けた笑みを浮かべた。

歴史が長い故に漢字で名を表すことの多い術式において、当て字があるわけでもない全くの新しい概念の術式名。

それを自分が背負うのは少々重い気もするが、何を今更と鼻で笑う。

もう色々と背負っているのだ。今さら御大層な名前を背負う程度がなんだ。

貴丈が不敵に笑う中、狗巻、乙骨の悲鳴が耳に届き、慌ててそちらに目を向けると、三人揃って真希の前に正座させられ、まさに説教が始まろうとしていた。

貴丈は巻き込まれる前に退散するかと四人に背を向けるが、

「おい、貴丈ーどこ行くんだよ、オマエからも何か言ってやれ！」

そんな彼を真希が呼び止めると、彼はギクツと肩を跳ねさせ、溜め息混じりに振り向いた。

真希は無言で手招きして彼を呼び寄せ、何か言えと言わんばかりに正座する三人を指差す。

「なんだ、コーヒーでも淹れるか？」

そして微笑み混じりに告げられた一言に、パンダ、狗巻は表情を青くし、まだ彼のコーヒーの味を知らない乙骨はそんな二人を見ながら疑問符を浮かべた。

話だけは聞いている。二度と飲みたくない程に苦く、しばらく口の中に違和感が残るほど後に引くとも言われた。

言われたが、まだ飲んだことがないから二人が誇張して説明した可能性もあるしと、僅かに楽しみにしているような節さえある。

そんな三人それぞれの反応を見た真希は「決まりだな」と告げてニツと得意気に笑う。

彼女の言葉に貴丈は喧嘩を始める前のように指を鳴らし、三人を少しでも安心させようとグツとサムズアップ。

「なら、さっさと戻るとするか。今度こそ美味しいコーヒーを淹れてみせる」

彼の一言にパンダと狗巻は諦めたように息を吐き、乙骨は「楽しみだね」と貴丈のコーヒーを知らないが故に無邪気に笑う。

そんな一年たちの様子を物陰からこっそりと見ていた五条は、貴丈のベルトを手で弄びながらぼそりと呟いた。

「良かったね、貴丈」

あの目の前の現実に押しつぶされ、誰よりも死を望んでいた青年の姿はもうなくなり、今あるのは傷だらけになりながらも友人たちと笑っている年相応の青年の姿だ。

そして、彼を変えたのは本人がそう言ったように同級生の彼らだ。

「これ以上なく、いいチームになったね。まさにベストマッチだ」

はははと愉快そうに笑いながらそう言うと、不意にベルトとフルボトルに目を向け、ニヤくとイタズラを思いついた子供のような笑顔を浮かべた。

彼は何かしらの組み合わせで音声が流れると言っていたが、

先ほどハブられた仕返しというわけではないが、多少変な事をしても彼なら許してくれるだろう。

何を根拠にしたのかはわからないが彼は勝手にそう判断すると、生徒から託されたそれらを大事そうに抱えながら、生徒たちから気付かれないようにその場を後にした。

「何人たりとも、若者から青春を取り上げちゃ駄目だからね」

混ざりたいとうずうずしている自分にそう言い聞かせながら――。

勝者がいれば、敗者もいる。

貴丈たちが勝利を喜んでいるのときをほぼ同じくして、リーダーであった夏油を失った彼の一派には、もはや見るに耐えないほど悲痛な雰囲気の流れていた。

彼を父のように慕っている美々子、菜々子は先程から泣いてばかりで、他の呪詛師たちも彼女らを励ますことができず、言葉に迷って俯

くばかり。

先の戦いで失ったものはあまりにも大きい。夏油だけではなく、その他有力な呪詛師も幾人かも戻らず、彼らが逃げ果せたのか、それとも討伐されてしまったのか、それすらもわからない。

あの現代最強の五条を二十分近く足止めをした、今回の作戦の要であった黒人呪詛師——ミゲルでさえも、まだ戻ってきてはいないのだ。

そして夏油の護衛として着いて行った焰もまた、帰ってこない。

彼女が美々子、奈々子を慰められたかもしれないが、いないものはいないのだ。

誰もが口を閉じ、何かを言う気力さえも湧いてこない中、ただ一人の男だけが部屋の片隅で黙々とコーヒーを淹れていた。

黒く黒く、なによりも黒く染め上がったそれはコーヒーというよりも泥水のような味はあるが、そこから香るコーヒーの香りがそれを否定する。

それを淹れ終えた男はそれを無言で呷ると気絶しそうなほど強烈な苦味に目を見開き、思わず溢れた涙をそっと拭う。

「また失敗だな。どうにもコーヒーを淹れる才能はないようだ」

そして周りの仲間たちの悲痛な雰囲気も気にもとめず、コーヒーの味をそう評して残りをどうするか唸り始める。

夏油一派に属する白衣を着た壮年の男。彼も前線に出ていたからか、普段は知的な雰囲気纏う彼も疲労の色が濃く、コーヒーを処分する手も僅かに震えている。

だが、その場において夏油や焰の死を最も気にしていないのは彼である事に違いはあるまい。

「——ざげんな」

そしてそれこそが、今の美々子と菜々子にとっては地雷そのものであった。

「夏油様が死んで、焰も死んで、それよりもコーヒーの方が大事なのかよ!!」

菜々子が大粒の涙を流しながら声を荒げ、男に掴みかからん勢いで

彼に詰め寄るが、男はそれを手で制して「落ち着きたまえ」と残酷なほど冷静な声音で告げる。

そして彼女の止めようと差し出した手を彼女の頭に置くと、夏油を真似て優しく撫でてやった。

菜々子は不満そうに歯を剥き出しにしながら唸り、美々子も絶対零度の視線を彼に向けるが、男は気にせず言う。

「確かに夏油は死んだが、彼の志が死んだわけではない。彼の事を思うなら、彼が成そうとした事を引き継ぐべきだ。その成就が、彼への手向けになる」

そしてその場にいる全員に向け、誰もが求めていた次への指針と、夏油への忠誠心の証明する手段を開示し、消沈気味だった彼らの瞳にも力が戻る。

そんな彼らの様子を見ながら、男は「それに——」と付け加えて不敵に笑んだ。

「少なくとも、彼の肉体は死んでいない」

彼の意味深な言葉。その意味がわからずに皆が一様に首を傾げる中、突然部屋の扉が開け放たれ、彼らは現れた。

同時に呪詛師たちの間に困惑のどよめきが広がり、信じられないものを見たように腰を抜かす者や、泣き出す者さえもある。

現れたのは、前髪の一部をさながら触手のように前に垂らし、教祖らしい派手な柄をした袈裟を着る一人の男。

何か治療した痕跡なのか、額を横断するように大きな縫い目があり、浮かべる微笑は優しさよりも怪しさが強い。

「夏油……様……？」

そして現れたのは、先程死んだはずの特級呪詛師——夏油傑その人だった。

だが何かが違うと本能的に察知したのか、皆は一様に困惑し、警戒を強めていくが、そんな夏油の背後からひよこりと少女が顔を出した。

「やつほく。ただいまです」

その少女は気の抜けた声と共に帰還の報告し、改めて仲間達の前に

姿を現す。

濡羽色の髪や黒いワンピース。そして、実年齢の割に大人びた雰囲気放つ不思議な少女。

彼らは二度と会う事はないと思っていた彼女の登場にも困惑する中、葉々が彼女の名を呼んだ。

「ほ、焔、ちゃん……？」

「はい、私ですよ。えへへ、驚きました？」

そして親友たる彼女に名を呼ばれた焔は照れたように笑いながら、ぽりぽりと頬を搔く。

二人の登場に周りが困惑する中で、白衣の男だけが普段通りの様子で二人を見つめると、不意に夏油とほんの一瞬だけ視線を合わせ、お互いに不敵に笑いながら頷き合った。

白衣の男はその流れで焔に目を向け、「流石だな」と感嘆の息を漏らす。

その言葉に焔はドヤ顔をしながら、ポケットからフェニックスフルボトルを取り出した。

より強い呪力を帯び、握るだけでもほのかな温かさを感じるそれは、彼女を救った最愛の兄からの贈り物だ。

「不死鳥があんなので死ぬものですか。お兄ちゃんは私が死んじゃったって思ってるかもですが」

彼女が司るは不死鳥の力だ。その名の通り死ぬ事はなく、頭を潰させようが、心臓を穿たれようが、呪力が残っている限り復活する。

もちろんそれを貴丈は知らず、知っているのは彼女自身と白衣の男、そして夏油の三人程度。

相手に死んだと思わせる、一度しか切れない切り札だ。出来るだけ漏洩を抑える為、絶大な信頼を寄せる夏油と、自分に力の使い方を教えてくれた白衣の男にしか教えていない。

「なら、タイミングを見て会いに行くといい。彼も泣いて喜ぶ筈だ」
「今度は泣きながら私のこと殺しにきますよ、たぶん」

故に彼女の復活に眉も動かさずに男がそう言うのと、焔は心底楽しそうでありながら困ったようにそう返し、「もっと強くならないと」胸

の前でぐつと拳を握りながら気合を入れる。

そんな彼女を頼もしげに見つめた白衣の男は、すぐに真剣な面持ちになると夏油に目を向けながら彼に問う。

「世界を喰らう蛇は卵から孵った。あとは彼の成長を待ちつつ、呪いの王を呼び覚ますだけだな」

「ああ。これでようやく彼らとの約束と、私の目的の達成に近づけた。全く、長かったよ」

彼の言葉に夏油は頷き、楽しみだと言わんばかりに笑みを浮かべながら、達成感に満ちた表情を浮かべた。

だがその顔は、やはりかつての夏油が浮かべたものとは違う。

その形状しがたい違和感はほぼ直感により核心に変わり、呪詛師の誰かの口からぼそりと夏油に向けての問いかけが飛んだ。

「お前は、誰だ……ッ!?!」

その一言に夏油は「失礼だな」と苦笑混じりに返し、少々芝居じみた動作で彼らの方に振り向き、彼らに向けて告げた。

「私は私だ。誰がなんと言おうとも、夏油傑だとも」

その宣言と共に呪詛師たちを見渡し、彼らに向けて言う。

「——さあ、次の計画を始めようじゃないか」

貴丈の受難 ― ブラザーが見ている ―

1.

百鬼夜行解決から幾日か経った頃。

呪術高专東京校学生寮――男子寮の貴丈の自室。

「なんか、あつという間だったな」

自腹を切って部屋に設置したこたつに潜り、黙々とみかんの皮を剥いていた貴丈は、カレンダーを見てぼんやりとそんな事を口にしていった。

百鬼夜行がクリスマスだったが、既に年が明けて二時間ほど経っている。

家族や友人らと騒ぎながら、そのまま寝落ちするのがここ数年の常であつたのだが、今は違う。

呪術師として昼夜問わず動き続けていた為か、一晚徹夜程度では眠気も感じなくなってしまうのだ。

「貴丈、剥けたか？」

「ん？ああ、ほい」

こたつに肩まで潜り、顔だけ出していたパンダが彼にみかんを催促し、貴丈は皮を剥いただけの塊を差し出した。

パンダは「あー」と声を出しながら大口を開ければ、貴丈は溜め息混じりに彼の口のみかんを放り込んだ。

「ん、甘っ！」

そして何度もそれを咀嚼し、弾ける果肉と舌を舐める果汁の甘さにパンダが舌鼓を打つと、貴丈の隣に陣取る――正確には座らされた――真希は頬杖をつきながら貴丈を睨む。

「甘やかしてんじゃねえよ。そんなくらい自分でやらせろ」

「しゃけ、しゃけ」

彼女の苦言に狗巻が同調するが、貴丈が「そんなこと言うなよ」と微笑みながらみかんを剥き、それを差し出してくるのだから余計に矛先も鈍るというもの。

現に狗巻は「めんたいこ」と返しながらかみかんを受け取り、それを食べるのだから、もはや何かを言う資格はあるまい。

パンダ、狗巻はもう駄目と判断した真希は、最後の砦である乙骨に目を向けるが、

「本当だ。甘いね、これ」

彼の手には既に貴丈が剥いたであろうみかんがあり、一つずつ口に運んで綻ぶように笑っていた。

里香の解呪後、呪術高専を去る事もできただろうに、それでも呪術師として過ごす事を決めた彼がここにいるのは、嬉しい反面どこか複雑な気分にもなるのだが、当の乙骨本人が決めた事なのだからと口出しはしない。

「で、年明けたのに何にもなしか?」

「蕎麦なら食っただろ?」

退屈そうに指でテーブルを叩きながらテレビを見ていた真希が貴丈に問うと、彼はちらつと台所に目を向け、積み上げられた皿を見ながら苦笑した。

「あ、コーヒー飲むか?」

そしてふと思いついたようにそう口にした瞬間、パンダ、狗巻、乙骨がビクリと肩を跳ねさせ、みかんを食べる手を止めると共に、顔色が青くなっていく。

そんな三人を横目に真希は「おう、くれ」と貴丈に返し、彼もまた乗り気で「あいよ」と返す。

「で、憂太たちは——」

「飲まない!!」

「おやか!」

その流れで男子三人にも聞くのだが、それを言い切る前に三人それぞれが否定の言葉を口にした。

あまりの勢いに「お、おう」と困惑気味に応じた貴丈は、こたつから這い出して台所に足を向けた。

「……よくあつさりと出られるな」

相変わずこたつに潜っているパンダは、一度入れれば行動する気力

を根こそぎ奪い去ると噂のこたつから、何の躊躇いもなく出ていった貴丈に言うが、彼は「慣れてんだよ」と苦笑混じりにコーヒーの準備を進めていく。

「弟とか妹が出ようとしねえから、俺がやんないと誰も何もやんねーの」

そしてどこか懐かしむような声音で、平然と彼にとつての特大地雷を踏み抜いてくるのだから、ほか四人は思わず吹き出してしまいうのだが、

「あ？なんだよ、別に変なこと言つてねえだろ？」

そんな友人らの様子に貴丈は可笑しそうに笑いながらそう言い、コーヒーをカップに淹れていく。

同時に部屋の中に香ばしいコーヒーの香りが充満するのだが、騙されてはいけない。

匂いこそただのコーヒーだが、その味はまさに殺人兵器。

下手な術式で攻撃されるよりも効くというのが被害者らの共通の意見なのだが、それを生み出す貴丈と、平気で飲み干す真希にはいくら言つても伝わらない。

二人からすれば、だいぶ苦いだけのコーヒーなのだから当然だ。

「ほい、できたぞ」

部屋を満たす香りだけを楽しむパンダ、狗巻、乙骨を尻目にコーヒーを二杯用意した貴丈は、自分と真希の前にそれぞれを置いて再びこたつに潜る。

あくどい気の抜けた声を漏らしながら、ふにやりと力の抜けた表情で机に突っ伏す辺り、やはりこたつの力には勝てない証拠か。

ずらずとお茶でも飲んでいるのかと言いたくなる音を出しながらコーヒーを啜り、相変わらずであるえぐいまでの苦味に眉を寄せる。

「かゝ、苦っ」

「そうか？前に比べりゃだいぶマシだろ」

そんな苦味に唸った貴丈の隣では、平然とした様子でコーヒーを啜った真希は物足りなさそうな声音でそう言い、残った分を一気に啜った。

「やっぱ前の方が苦かったな」

そしてコーヒーの味をそう評し、おかわりを求めるように空のカップを貴丈に差し出した。

まだ飲み途中、と言うよりはその一杯で店じまいにして解散させようとしていた貴丈は露骨に嫌そうに困惑の表情を浮かべ、空になった真希のカップに目を向けた。

底に溜まったコーヒーのドス黒い残り滓がカップに染みを残し、追加で注がれる時を待っている。

貴丈は仕方ないと言わんばかりに溜め息を吐くところから這い出し、真希のカップを受け取ると再び台所に足を向けた。

そのまま改めて湯を沸かす訳なのだが、時間が惜しいと判断したのがガチャガチャと音を立てて皿を洗い始めた。

そんな彼に申し訳ないとは思いつつ誰も手伝おうとしないのは、単にこたつから出たくないからか。

貴丈が皿を洗う音と、垂れ流しになっているテレビの音を聞きながら、ふと乙骨が真希、パンダ、狗巻に問いかけた。

「そう言えば、僕たち二年生になるんだよね？」

「ん？ああ、そうだな。それがどうした」

その問いの意図が読めずに真希が首を傾げると、乙骨はだんだんと緊張した面持ちになっていく。

何か特別なことがあったらどうかと三人は顔を見合わせるが、やはりと言うべきか思い当たらずに疑問符が浮かぶばかり。

そんな三人の様子を知ってか知らずか、乙骨は声まで緊張させながら三人に言う。

「――ぼ、僕が先輩になるんだね」

そう、あと三ヶ月もすれば乙骨らは二年生となる。

そうすれば勿論新一年が入ってくるわけで、乙骨らが先輩となるのは必然だ。

だが緊張しているのは乙骨だけなようで、他三人はあまり気にした様子はなく、むしろ何言ってるんのお前と言わんばかりに見つめ返している始末。

友人らからの同意が得られなかった乙骨は「ぼ、僕だけ!？」と逆に焦った様子を見せ始めた。

ならばと皿洗い中の貴丈に目を向け「桐生くんは？」と彼の背に問いかけるが、当の彼は気の抜けた声を漏らして手を拭くと、顎に手を当てて何やら思慮し始めた。

そしてすぐに言葉が纏まったのか、彼はにこりと微笑みながら告げた。

「どうせ呪術師歴は一年の方が上だぞ？」

「あ……」

彼の一言に乙骨はハツとして、同時に緊張していた面持ちが途端に緩んでいった。

そう、乙骨と貴丈という存在のせいで忘れがちだが、呪術師になる為に呪術高专に入学するのではなく、既に呪術師だから、呪術に関わりがあるから呪術高专に入るという生徒の方が圧倒的に多い。

例外が二人もいる現一年五人の方が、業界的には珍しいのだ。

「まあ、その入学予定の一年も今のところ二人しかいないんだけどね」
途端に緊張が解れた乙骨がホツと安堵の息を吐くと、そんな彼の肩に誰かの手が置かれ「あ、そうなんですか」と振り向いた瞬間にぎよつと目を見開いた。

振り向いた目の前に目元を包帯で覆った恩人の顔があれば、誰であろうと驚くだろう。

「ぶ、五条先生……?」

「うん。グットルツキングガイ、五条先生だよ。で、新年だからって流石に夜更かしし過ぎだよ、解散解散」

ぺちぺちと乙骨の頭を叩きながら五人に言うが、誰も言う通りに部屋に戻ろうとしない辺り、最強である彼のカリスマもその程度なのだろう。

それを見せつけられた五条は眉を寄せ、「あのね」と割と真剣な声音で五人を叱ってやろうかと思うが、それはそれで面倒だなと匙を投げた。

自分がここに来たのは夜更かし中の五人への指導もあるが、本来の

目的はそれではないのだ。

「貴丈、ちよつといいかい」

五条はこたつに入りながら貴丈に声をかけ、呼ばれた彼は皿洗いを中断すると、「何ですか？」と彼の方に振り向いた。

「まずはこれ。色々調べて弄っておいたから、後で確かめておいてね」
彼はそう言いながらテーブルに置いたのは、五条に預けていたベルトとフルボトルだった。

見た目は変わらないが、彼が弄つたと言うのならそうなのだろう。それに関しては後で好きにだけ調べればいい。

「……まずはってことは、まだ何かあるんですか？」

だが五条が言った言葉が引っかけかり、感謝の言葉よりも先にその間いかけが口からこぼれた。

うん。と、なんて事のないように頷いた五条は、貴丈に向けて言う。

「年明け早々で悪いんだけど、任務だ。明日——ってよりは、今日の昼過ぎには君一人で京都に行ってもらおうよ」

五条はちらりと時計に目を向け、日付が変わってだいぶ経っていることを思い出しつつ、今後の予定を確認。

「きょうと。……あの京都ですか？」

「他に京都があるなら教えて欲しいんだけど」

突然の出張勧告に驚いたのか、もはや訳がわからない問いかけをし
てくる貴丈に五条は困り顔で返すが、すぐに真剣な表情となって彼に告げた。

日本で『京都』と言われて、まず真っ先に思い浮かぶのは関西にあるあの京都だろう。

関西人のみならずあちこちの地方の学生たちからすれば、修学旅行などで訪れることもあるであろう日本の古都。

様々な寺社仏閣が立ち並び、それらをひっくるめて世界遺産になっている、死ぬまでに一度は行ってみたい場所の一つ。

まあ、一部の人からはお隣の大阪に行きたいと言う人もいるかもしれないが、それは人それぞれだ。

そして、せつかくだからとどちらにも行くことになる可能性もそれ

なりに高い。

——つてか、そうなたんだよな……。

貴丈はありし日の思い出と、元気が有り余る弟妹らに振り回される自分を含めた年長組と両親の姿を思い出し、深々と溜め息を漏らした。

だがそれは、一見すれば五条の話に対して心底面倒臭そうにしているように見えてしまう悪手であった。

パンダがニヤリと笑い、「嫌そうだな、貴丈」と彼を弄る方向に意識を向けた。

「そんなに俺たちと離れたくないのか」

「しゃげ。めんたいこ」

「桐生くんらしいね」

そしてパンダの言葉に続くように狗巻、乙骨が続くと、貴丈は三人の言葉を否定はせず、むしろ照れ臭そうに頬を掻きながら「やかましいわ」とツツコミを入れた。

そんな彼の姿に五条は学校に来た頃の、基本無表情だった彼からは考えられない年相応とも言える言動に嬉しそうに笑いつつ、真希に目を向けた。

一人だけ貴丈への弄りに便乗せず、無言で不満そうにしている——と言うよりかはおそらく心配している——彼女の内心は穏やかではないだろう。

京都は文字通り呪術界の総本山。彼女の生家である禪院家の宗家もそこにあり、五条という後ろ盾から物理的に遠く離れた彼を、彼らが放っておくわけがない。

彼女の懸念を他所に、やいのやいのと騒いでいた三人をコーヒーを差し出すことで黙らせた貴丈が、五条に向けて告げた。

「それで、内容は何となくわかりますけど……」

彼の言葉で貴丈に意識を戻した五条は「うん。君の予想通り」と真剣な面持ちで返し、その表情通りの声音で言葉を続ける。

「この間の百鬼夜行で変異型呪霊^{スマツシユ}が出ただけど、何体か取りこぼしがいたみたいでさ。で、京都の方で暴れてた奴らがようやく見つかった

たつてわけよ」

先日の激闘——夏油一派による百鬼夜行には、彼が服従させた変異型呪霊、つまり貴丈の家族だった者たちも利用され、多くの術師に被害をもたらした。

その多くは現場の一級術師が中心となつて祓除^{殺害}し、その力が巡り巡つて貴丈の元に戻り、先日のフルボトルの大量生成に繋がるわけなのだが、やはりと言うべきかその全てを祓^{殺せ}えただけではないようだ。そしてその追撃を、正確には過去の自分の尻拭いを、これから京都に行つてしなければならぬのだ。

「了解です」

貴丈は自分のすべきことをすぐに把握し、躊躇の気配もなく応じた。

覚悟はあの日^{クリスマス}に決めた。あとは精一杯に進むのみだ。

「……慣れない土地で、下手すれば俺より強い奴ら相手に一人だけつてのは不安ですけどね」

だが多少の弱音を吐く程度のこととは赦して欲しいと思つたのか、不意にそんな事を口にした。

行つたと言つても一度だけ。それもパンフレットに載っているルートに沿い、有名な観光地を巡つただけだ。

一応、向こうにも補助監督官——呪術師をサポートする人たちだ——がいるにしても、彼らにも限界があるだろう。

そもそも非戦闘員である彼らに、戦闘面のサポートまで要求するのは酷だというもの。

「あ、その心配はないよ」

そんな不安そうにしている彼に五条がなんて事のないように言うと、グツとサムズアップしながら不敵な笑みを浮かべた。

「僕の後輩に手伝いを頼んであるから。大丈夫、腕は確かだよ」

ニツと白い歯を見せながらそう言うと、貴丈は僅かに表情を和らげて安堵した様子を見せた。

だが話を聞いていた真希は相変わらず不満そうであり、下手をすれば先ほどよりも表情が強張っている気さえもする。

「なら、準備します。ほらお前ら、解散だ解散」

新年早々から仕事が入った貴丈はそう言いながらパンパンと手を叩き、部屋に居座る気満々だった同級生と担当教師に告げた。

男子三人は仕方ないと言わんばかりの様子で頷き、這うようにしてこたつから脱出。

「解散してくれるなら、僕もおいとまするよ」

そして夜更かしの生徒を部屋に戻すという教師としての仕事も終わるからか、五条もさっさとこたつから這い出した。

だが真希だけが動かず、何やら神妙な面持ちで何かを考えている様子。

「真希？どうした？おかわり待ちか？」

そんな彼女に貴丈は声をかけ、ようやく準備ができたコーヒーを指差しながら問うが、真希は「いや、いい」と冷たく返してこたつから出た。

「そ。じゃ、俺が飲んじゃお」

先程までの機嫌の良さをどこにやったのか、酷く不機嫌になった彼女の様子に首を傾げるが、飲んだコーヒーの苦さに眉を寄せた。

「あんまり飲むと眠れなくなるよ〜？」

退室間際に五条がそんな事を言うが、貴丈は気にする様子もなくさらにもう一口。

「……ほどほどにね」

そして言っても無駄かと諦めた五条はそう言うと、「おやすみ〜」と夜の挨拶と共に今度こそ退室。

その後ろに続いて乙骨らも挨拶と共に退室していき、最後に真希が部屋を出ようとしますが、そんな彼女の背中に貴丈が声をかけた。

「そうだ、真希」

「なんだよ」

「お土産、楽しみにしてるよ」

微笑みながら告げた言葉に真希は足を止めると彼を小馬鹿にするように鼻で笑い、首だけで振り向いて彼に笑みを向けた。

「何がいいのかも知らねえのに、何を買ってくんだよ」

「それは……。終わったら連絡するから待ってろ」

彼女の煽りとも言える言葉に貴丈は言葉を詰まらせるが、どうにかそう返してふんと鼻を鳴らした。

確かに京都の名産や土産に関しての知識はないし、何ならどんな店があるのかも知らない。

そんなものスマホで調べればすぐにわかるのだろうが、それが相手の好みの物なのかは別問題。

有名だからこれにしようで相手に嫌な顔をされては、土産を買ってくる意味がない。

「じゃあ、待ってるぞ」

「おう。すぐに連絡するから、待ってろよ」

そんな彼の気遣いに気付いてか、真希が僅かに機嫌を良くしながらそう返すと、貴丈はくしゃつと破顔しながらそう返してやった。

そのやり取りを最後に今度こそ解散しようと真希が廊下の方に視線を戻すと、

「……」

扉の影からイタズラ小僧のように、ムカつくほどの満面の笑みを浮かべる五条、パンダ、狗巻、そして照れたように赤面しながら視線を逸らす乙骨らと視線があい、ピキリと音を立てて額に青筋を浮かべた。

貴丈はあははと乾いた笑みを浮かべると、冥福を祈る為に合掌。

「ようし、今度こそ解散!!」

それを合図に五条が解散を命じ、バタバタと騒がしい足音と共に男子三人を伴って廊下の向こうに消えていく。

「待ちやがれ、テメェら!!!」

真希は真夜中にも関わらず学校中に響き渡る怒号を放ち、逃げていった彼らを追いかけていった。

そんな騒がしい彼らを見送った貴丈は溜め息を漏らし、今度こそ準備しようとクローゼットに目を向けるが、その前にコーヒーを処理せないばと残ったコーヒーを一気に呷る。

強烈な苦味が眠気を吹き飛ばし、緩んだ意識を冴え渡らせる。

——とりあえず着替えと諸々必需品は持っていくとして。

彼はそう思慮していくが、不意に思い出したように目覚まし時計を持つと、それを包むように煙を発生させた。

時計には一切呪力を込めず、優しく包むように慎重に。

煙に吞まれた時計は手元から消え、煙が晴れると共に手ぶらになった事を確認すると、今度は反対の手に呪力を集めて煙を発生させる。

ドラゴンスマッシュや夏油との戦いを経て、自分の術式——『ビルド』もそれなりに制御できるようになってきた。

やろうやろうと思いつつ、失敗したら大変だからとやらなかった事を試すには、ちょうど良いだろう。

フルボトルやドリルクラッシュャーにそうするよりもゆっくりと、煙で包んだ時よりも更に慎重に呪力を操り、しまい込んだ時計を取り出す。

そして、その結果をフツと不敵に笑んだ。

「おし。いけるな、これ」

そこには変形もせず、正確に時を刻んでいる目覚まし時計がそこにはあった。

これなら大きい鞆はいららず、何なら手ぶらでも何とかなるだろう。

——ただだけ入れられるかは今度調べるとして。

鞆の大きさとの相談という一番の課題を超えた貴丈は、どこかウキウキ気分で準備を始めたのだった。

呪術高専京都校、応接室。 13:00頃。

右頬から顔を横断するほどの大きな傷跡がある女性——京都校所属の準一級術師兼教師、庵歌姫いおりうたひめは困惑していた。

割とガチで嫌いな後輩、五条から「僕の生徒をよろしく！」と頼まれた時は渋々応じ、「僕に似て優秀だから」とも付け加えられた時には思わず怒鳴りつけてしまったが、その生徒が。

「えっと、庵先生ですよ。俺は桐生貴丈です。しばらくお世話になります！」

気をつけからの綺麗な一礼をしてくれば困惑もするだろう。

五条が自分に似ているとまで言い切ったのだから、無礼な輩が来ると思っていたのだが、第一印象としては良い方だ。

「え、ええ。よろしくね。桐生くん、でいいのかしら？」

「はいっ！」

彼を馱からここまで連れてきた補助監督官も、彼のことを人当たりのいい好青年と判断していたし、こうして挨拶を交わしただけでもその評価は正しいもののように思える。

だがそんな青年の、呪術師になつて一年足らずのただの青年だった彼の左頬に残る酷い火傷の跡が、彼の辿つてきた軌跡の痛ましさを物語る。

そしてこれから更なる地獄に進もうとしているのだから、彼の覚悟は壮絶なるものだろう。

歌姫は彼に気付かれないように小さく息を吐くと、五条の言葉を思ひ出す。

『貴丈はちよつと目を離れた隙にボロボロになつて、それでも強がつて頑張ろうとするから、ヤバくなる前に絶対に止めてね。できれば変異型呪霊スマツシュを、彼の家族を殺させたくないけど、歌姫弱いから助っ人の方に期待する』

最後の一言は余計ではあるが、五条の言葉の大部分に同意するしかないのが遺憾ではあるが、貴丈の情報に目を通し、こうして直接会つてしまえば彼の言葉が真実であることがわかる。

自分の身も顧みず、ただ我武者羅に目的を果たさんとするのは呪術師として良いことなのか、悪いことなのか、そのどちらとは断言できない。

ただ自分の半分ほどしか生きていない若者が、自分をそこまで追い詰めなければならぬ状況にあるのに、変異型呪霊——強さはピンキリながら、最低でも二級相当、最高で特級相当の化け物を前に、自分の力では何もしてやれないのが腹立たしい。

「庵先生？」

物憂げな顔でじつと見つめてくる歌姫に貴丈は声をかけると、彼女

はハツとして「ごめんなさい」と謝ってから咳払いをして場の空気を切り替える。

ただですら知り合いがいない京都に来ているのだ。彼が不安に思う要素は出来るだけ少なくしてやりたい。

「少し待ってて。あなたに同行する人を呼んでくるから」

ついでに何か飲み物も買ってくるわね、と微笑み混じりに告げて、歌姫は一旦退室。

五条からはコーヒーが好きだと聞いている。それが本当かは信用ならないが、生徒に関わる事であり嘘を言わないのは確かだ。

なら呪術高専の自動販売機にコーヒーがある筈だし、とりあえずそれで良いだろう。

とりあえず打ち解ける所から。歌姫は根気よくやっていこうと心に決め、勇み足で廊下を進んでいった。

歌姫が退室したと同時に、貴丈は耳を澄ませて彼女の足跡が遠ざかっていくのを確認すると、溜まった疲れを吐き出すように深々と溜め息を吐いた。

言動から優しさが滲み出していたが、出発直前に告げられた五条の言葉が脳裏を過り、身体が変に緊張してしまうのだ。

『あ、歌姫に会うと思うけど、気をつけてね。ヒスる時あるから』

ヒスる。つまりヒステリック持ち。変な事を言えば最後、テンションが振り切れた鬼の形相で詰め寄られる事になる。

相手がただの一般人ならまだ大丈夫かもしれないが、歌姫は準一級術師。暴れ出せば最後、どんな被害が出るか予想もできない。

——とりあえず無難に、礼儀正しくだ。長男の意地を見せる。我慢は得意だ。

モミモミグニグニと凝り固まった頬を解しつつ、長男としての意地と誇りを賭けた我慢比べ。

限界を迎え素を出し、下手に刺激すれば最後、きつと大変な事になる。

自分に暗示をかけるようにそう繰り返しつつ、痛いほどの沈黙に包まれる応接室。

貴丈の呼吸音と時計の秒針が動く音だけが流れるその空間は、不意に扉が開けられた事で破られた。

「っ!？」

貴丈は慌てて姿勢を正しながら弾かれるようにそちらに目を向け、その直後に目を見開いた。

そこには巨漢がいた。五条と並ぶほどの身長に対し、その四肢は分厚い筋肉に包まれ、さながら岩のよう。

ドレッドヘアーを頭の天辺の辺りで一纏めにし、顔には額から左頬にかけて大きな傷跡があるせいで、威圧感が割増となっている。

突然の訪問者に固まる貴丈を睨んだその巨漢は、彼を観察するように爪先から脳天までを見つめると、「お前が桐生貴丈か？」とドスの効いた低い声で問うた。

「え、あ、はい。桐生貴丈……です……」

夜蛾とは違うベクトルの迫力を持つその人物に軽く怯える貴丈だが、その巨漢は突然ゴキゴキと指を鳴らしながら彼に近づいていき、落胆したように溜め息を吐いた。

「東京校から生徒が来ると言われてきてみれば、乙骨ではないのか」
なぜここで乙骨の名が出るのかと疑問に思う貴丈だが、すぐに答えを思い出してハツとした。

確か乙骨は先輩の代わりとして姉妹校交流会に参加していた。

それぞれの学校の生徒が己の技を見せ合い、お互いの技を高めあうという行事なのだ、その時はもちろん里香の解呪前。何が起きたのかは語るまでもない。

まさかその仕返しかと警戒するが、その巨漢は貴丈を間合いを捉えると同時に立ち止まり、「まあいい」と呟いて腕を組んだ。

「人を見た目で判断してはいけないからな。桐生貴丈、お前に聞きたいことがある」

「は、はあ……」

巨漢の言葉に貴丈が気の抜けた声を漏らすと、彼は貴丈を指差ししな

がら問いかけた。

「桐生貴丈！お前、どんな女が好みだ！」

「っ!？」

貴丈はその問いかけに強烈なデジャブを感じ、全身に鳥肌を立てながら、ゆっくりと目を見開いた。

どうやら一部呪術師の間では、初対面の相手に性癖暴露の流れがあるようだ。

——もう、訳わかんねえ……。

ヒス持ち女教師。性癖暴露強要男。

京都に来て早々に浴びせられる強烈な洗礼に貴丈は目眩を覚えつつ、貴丈は小さく溜め息を吐いた。

2.

「桐生貴丈！お前、どんな女が好みタイプだ！」

その問いかけに貴丈が真っ先に感じたのは強烈なまでの既視感デジャブだった。

自分がまだフルボトルを振り回すことしかできず、本当の意味での覚悟を決めるずっと前。自分にとっても未知の塊であった術式を知ろうと、何の前触れもなく訪ねてきた特級呪術師——九十九由基。

荒らすだけ荒らしてどこかに行くという、まさに嵐のような人ではあったが、彼女のおかげで新しい趣味を見つけられたのもまた事実だ。

そんな彼女が、何より優先すべき本題を無視した一つ目の質問が目の前の巨漢が投げてきたものと同じ。

貴丈は僅かに感じた頭痛に小さく唸り、目を伏せるが、巨漢の言葉は止まらない。

「性癖にはソイツの全てが反映される。女の趣味がつまらん奴はソイツ自身もつまらん。俺はつまらん男が大嫌いだ」

「……」

突然の質問と何故か熱のこもっていく言葉にひたすらに困惑していく貴丈は、とりあえずの逃げ道を求めて巨漢に問うた。

「せ、せめて名前を教えて欲しいんですけど……」

「俺か？俺は京都校二年、東堂葵とうどうあおい。さあ、これで答えられるだろう」その問いに間髪入れずに巨漢——東堂が返すと、いよいよ逃げ道を失った貴丈は言葉に迷い、目を泳がせた。

何故滅多にないであろう初対面の相手に性癖を暴露するという謎の状況が、呪術師となつてから二度もあるのだと胸中で悪態をつくが、前回と違うことがあるとすれば今回の相手は同性で、何なら同世代であることか。

仲良くなりたいのなら、そういった異性の好みに関する話を避けては通れまい。……おそらく、だが。

「東堂先輩！」

「なんだ、桐生貴丈!」

自分にそう言い聞かせて覚悟を決め、東堂を呼ぶ事で自ら退路を塞いだ貴丈は、深呼吸をして高鳴る鼓動を落ち着かせつつ、自らが隠し通してきた性癖を宣言した。

「――俺は、背が高くて尻が大きい人が好みです!!」

ウジウジして伝わりづらい遠回しな表現は避け、相手の求めている解答をド直球にぶつける。こういった面倒な手合いは、こうした方が短いやり取りで済む。――答だ。

どうだ、言つてやったぞ!と羞恥に顔を赤くしたまま不器用に不敵に笑んだ貴丈は、東堂の反応を伺おうと顔を上げた瞬間、貴丈の口から「は?」と間の抜けた声が漏れた。

東堂の目から大粒の涙が溢れ、貴丈の視線から逃れるように天を仰いだのだから混乱もしよう。

そして貴丈が知るよしもないことだが、彼の返答があつた直後、東堂の脳内には存在しない記憶が、走馬灯の如く駆け抜けていた。

府内某所、某中学校。

「東堂先輩、本気ですか!」

夕陽差し込む放課後の教室に、貴丈の困惑の声が木霊した。

愛する後輩の叫びに東堂は「本気だ」と返し、腕を組んで夕陽を見つめながら言葉を続けた。

「俺は高田ちゃんに告白する!」

高田ちゃん。それは東堂が生み出した妄想の内の人物ではなく、実在する人物ではある。

身長180cmを誇る高身長アイドル。フルネームは高田延子。

現実における東堂の推しのアイドルであり、彼女が出るイベントはもちろん、出演する番組をリアルタイム視聴、録画視聴の二度を必ずする程に推している相手だ。

そして勿論、彼女と東堂は同じ中学ではないし、もつと言えば貴丈

は都内の中学に通っていた為、その三人が同じ中学校に通っているというこの状況が根本からして可笑しいのだ。

だがここは東堂の頭の中。彼がそうだと思えばそうなり、現実との多少の矛盾点など、ないに等しいのだ。

そんな東堂は心に決めたことがあった。この学校のアイドルにして、男子たちの憧れの的、高田ちゃんに胸に秘めている自分の想いを告げる事を。

それを自分が最も信頼し、信用している後輩である貴丈に相談したのだが、結果は先の第一声の通りだ。

流石の貴丈とて、憧れの先輩たる東堂が目に見えてヤバイ博打に打って出ようとしているのだ。心配にもなろう。

「やめておいた方がいいですって！俺、落ち込んだ先輩見たくないんですよ!!」

「……なぜ、断られる前提なんだ」

彼の心配とも取れるが、それ以上に東堂がフラれると断定している言葉に東堂は溜め息を漏らす。それも彼の優しさかと後輩の評価をあげた。

だが、人間誰しもやめろと言われてもやらねばならぬ時がある。

「では、東堂葵。いざ参るー」

東堂は掌に拳を打ち付けて気合いを入れると、時計を確認。

高田の下駄箱に時間と場所を指定した手紙を仕込んでおいた。その時間まで残り十分。

こちらから呼び出したのだ、五分前にはその場で待機しているのが理想だろう。

「祈ってくれ、桐生貴丈。親友が征く道を」

そして芝居がかった格好つけ方をしながらそう告げて、貴丈の脇を抜けて教室を後に。

一人残された貴丈はぼりぼりと乱暴に頭を搔くと、深々と溜め息を吐いた。

それから数分後、学校の中庭。

放課後の部活も終わる時間となり、大半の生徒が出払った頃。

ただですら暗くなってくる時間だというのに、日陰になる影響で余計に暗くなっている中庭の一角で、丸くなっている東堂の姿があった。

「だから言ったじゃないっすか！こうなるのわかんなかったかなあ！？」

そんな彼を校舎中を走り回ってようやく見つけた貴丈は、ぜえぜえと息を乱しながらも東堂に声をかけ、疲労のままに彼の隣に腰を降ろす。

東堂が何と言われ、どう断られたのかは知らないが、彼がここまで疲弊しているのだ。割とぼつさり切り捨てられたのだろう。

さてどう慰めてやるものかと言葉もなく思慮した貴丈は、苦笑混じりに東堂の肩を叩いた。

「とりあえず、っ飯行きましょう。奢りますから」

そう言いながら東堂の手を引いて立ち上がらせると、幼子を慰めるように背中を摩る。

後輩の優しさに当てられた東堂は再び目から涙を溢れさせるが、いつまで情けなく泣いている、この後輩に良いところを見せなくて良いのかと自分を鼓舞し、気合いで涙を止めた。

このやり取りが切っ掛けとなったのか、東堂と貴丈の仲はより一層深まることとなり、その後様々な伝説を残すこととなる。

——だがそれは、また別の話だ。

そしてこの妄想は、東堂の脳内0.001秒の中で行われたことの、ほんの一部分だ。

「俺たちは、どうやら親友のようだな」

「へ……？」

性癖を暴露した途端泣かれ、突然の親友宣言に困惑する貴丈を他所に、東堂は涙を拭いながら改めて『親友』である貴丈に目を向けた。

親友との再会が嬉しいのか混乱しているようだが纏う呪力は凧い

でおり、あの五条にしつかりと鍛えられているのがわかる。

そして何よりも目を見張るのはその呪力量。東堂自身、学生でありながら一級呪術師であり、他の生徒や下手な教師陣よりも強い呪力を持っている。

だが貴丈はなんだ。書類上ではいまだ四級ではあるが、纏う呪力量は一級呪術師のその比ではなく、目測でも並の呪術師数十人分の呪力を持っていることがわかる。

それ程までに強力な呪力を待ちながら、こうして面と向かい合っても威圧感や圧迫感もなく、むしろ安堵さえも感じる程だ。

貴丈が本来持つ性根の良さや優しさがそうさせるのだと、親友として確信めいた事を思う東堂だが、顎に手をやりながら噂とだいたい違うなど目を細めた。

他の生徒や教師からの又聞きではあるが、もっと強面の恐ろしい奴——顔の火傷痕のせいでそう見えると言われればそうだが——だという話を聞いていたのだが。

「まあ、人の評価などどうでもいい。親友、お前は何をしに京都^{ここ}まで来た」

「え、ああ。えと……。変異型呪^ス霊^{マツ}を——俺の家族を殺しに」

東堂の問いに貴丈はいまだに困惑をしながら、自分の目的である家族の抹殺についてを単刀直入に告げた。

そう、どんなに綺麗事を並べたとしても、自分がこれから行うのは家族殺しに他ならない。少なくとも、既に父殺しは済ませたのだ。躊躇いはない。

先程まで親友との再会に混乱していたというのに、本題に入った途端に表情が引き締まり声音も鋭いものになる。

そんな彼の成長とも言える変化に東堂は「なるほど」と頷き、ポンと彼の肩に手を置いた。

「覚悟を決めた男は、何と言われようと止まりはしない。あの時と逆だな、親友」

「……あの時？」

そして懐かしむような声音で告げた言葉に、貴丈は違和感を感じて

首を傾げた。

東堂は『あの時と同じ』と言ったが、生憎自分と彼はここが初対面であるし、今までの任務か何かの拍子にすれ違ったこともない筈だ。こんな見た目の人だ、会っていれば忘れないだろう。

だが東堂は自分とは初対面ではないという体で、しかも『親友』とまで呼んでくる。

一応、自分の中での親友は東京校の同級生たちなのだが……。

一人困惑する貴丈を他所に、東堂はグツとサムズアップをしながら言う。

「ならばお前があの日してくれたように、俺も出来ることをしよう。その戦い、同——」

「東堂。あなた、何してるのよ……」

そして何か重要なことを言おうとした瞬間、扉の方から歌姫の声が二人の耳に届いた。

二人揃ってそちらに目を向ければ困り顔になっている歌姫の姿があり、彼女は東堂を見ながら溜め息混じりに告げた。

「話は聞こえていたけど、駄目よ。一級術師だからって、この前の百鬼夜行の疲れも抜け切っていないでしょう?」

「問題ない。あの程度の戦い、準備運動にもならん」

歌姫の教師として生徒を想う気持ちによる言葉を受け流し、東堂は貴丈の肩に腕を回して彼を抱き寄せた。

「俺たちのコンビにかかれば、例え特級が来ようとも怖くはない」

「……」

バンと貴丈の背を叩き、続いて自分の胸を叩きながら告げた言葉に、貴丈は額から冷や汗を流しながら無言で助けを求めるように歌姫を見つめた。

五条からはヒス持ちと言われているが、流石にこの状況で捨て置くほど鬼ではあるまい。

お願いします、何とかしてくださいと無言で訴えかけ、どうにかこの状況を打開してくださいと付け加えてみるが、当の歌姫はそれをされる前から東堂を説得しようと言葉を重ねていた。

やれ正月くらい休みなさいだとか、危険よとか、彼女なりに東堂を——正確には生徒を危険な場所に行かせたくないという気持ちはあるのだろう。

だが貴丈もまたその守るべき生徒だというのが抜けているのか、それとも彼なら大丈夫だという自信があるのか、それは貴丈にはわからないが——。

——五条先生が言うほど、怖い人じゃないかも……？

彼女が真摯に生徒と向き合っている事がわかったからか、ほんの僅かにではあるが歌姫への警戒度を下げ、その分東堂への警戒度を上げた。ヒス持ち（？）女教師よりも、自称親友の男の方をヤバいと思うのは当然だろう。

そのヤバい奴に捕まっているという軽く詰みの状況ではあるのだが、果たしてどうするべきか。

この際突き飛ばしてまおうかと、おそらくこの場における最悪の強硬手段が脳裏をよぎるが、その前に歌姫の背後にいる長身の人物に気づいて「ん？」と声を漏らしながらその人に目を向けた。

先程からいたのか、それとも今来たのかはわからないが、歌姫が扉の前を陣取っているため、入るに入れないと言う状況なのだろう。

「……あの、庵先生。後ろのその人は？」

「え？」

そして貴丈に言われてようやく気付いたのか、歌姫は慌てて振り向き、そして「あら、ごめんなさい」と謝りながら横に移動。

その長身の人物は「ありがとうございます」と歌姫に礼を言ってから入室し、東堂に捕まっている貴丈に目を向けた。

対する貴丈もまたその人物に目を向け、僅かに目を細めて相手を観察。

サラリーマンを思わせる白いスーツに身を包み、目元にはツル部分のない眼鏡——というよりはサングラスらしきものをつけた、金髪の男性。

髪をキツチリと七三分けにし、加えて無表情。

服のせいで本当のサラリーマンのように見えるが、纏う雰囲気は鋭

く鋭利で、同時にどこか面倒臭げ。

——また、よくわかんねえ人が来たよ……。

隣の東堂だけでキャパシティを越えそうだというのに、さらに謎の人物を追加という事実には、なにか悪いこととしたかと自問するが、したからここにいる事を思い出して諦めたように溜め息を吐いた。

そんな貴丈の反応に気づいてか、スーツ姿の男性が東堂に言う。

「東堂くん。彼も困っていますから、一度離れた方がいいかと」

「む？・そうなのか、ブラザー親友」

「まあ、ちよつと暑いです」

そして不意に差し出された助け舟に飛びつくと、東堂は不満そうに唇を尖らせながら、名残惜しそうに貴丈を開放し、近場のソファアードかりと腰を下ろした。

額に浮かぶ冷や汗を拭いながら、貴丈はスーツ姿の男性に「ありがとうございます」と頭を下げた。

ペコリと小さく会釈を返したスーツ姿の男性は、改めて姿勢を正しながら貴丈に言う。

「五条さんから話は聞いていますね？七海^{ななみけんと}建人です」

「あ、桐生貴丈です。あなたが五条先生が言っていた助っ人……」

「はい。そうなります」

そしめお互いに名を名乗ると共に、七海が五条が手配してくれた助っ人であることを確認。

あの五条が腕が立つと太鼓判を押しているほどの人物だ。彼のように変わり者がくると思っていたのだが、どうやらその心配はないようだ。

内心で一安心している貴丈に七海は「ええ。そうなります」と応じると、眼鏡の位置を直しながら腕時計で時間を確認し、どこか急かすように言う。

「では、早速行きましょうか。時間は貴重です」

「はいっ！・えと、じゃあ、東堂先輩、また後で！」

言うや否や部屋を出てしまう七海に続き、離れるならここしかない東堂に別れの言葉を告げて部屋を飛び出す。

後ろから「また会おう、親友!!」と威勢のいい声が聞こえてくるが、貴丈は額を掻きながら溜め息を吐いた。

呪術師になつてからというものの、本当に良くも悪くも毎日退屈しない。

補助監督官が運転する車に揺られる事一時間ほど。

貴丈と七海の二人は、とある廃ビルの前にいた。

話を聞いた限りでは地上五階、地下一階のそれなりに大きめな建物。

「京都にもこんな建物あるんですね」

ボケつと件の建物を見上げながら呟いた言葉に、七海は嘆息混じりに「何もお寺しかないわけではないですよ」と返して眼鏡の下で警戒心を顕にしていた。

一見すればただの廃ビルではあるのだが、目の前に来てからというもの肌に張り付くような嫌な空気をひしひしと感じているのだ。

それなのに隣の貴丈は気にする素振りを見せないのは、まだ未熟だからと断ずるべきなのか、余裕があると褒めるべきなのか。

「さて、始める前にいくつかお話があります」

「っ!はー!」

とにかく、言うべきことは言わねばと貴丈に声をかければ、彼は驚きながらも七海の方を向いて威勢よく返事をした。

無邪気なのか、素直なのか、付き合いが車内でソワソワしながら京都の街並みを眺める彼の背中しか見ていないため、どんな人となりなのかを把握しかねている所があるのだが。

「私は五条さんからあなたを任された身です。なので、出来る限り私から離れないように。そして私が逃げろと言ったらすぐに逃げるように。いいですね?」

「了解です」

七海の指示に貴丈は表情を引き締めながら応じ、気合いを入れるた

めに両手で自分の頬を張った。

パンパン！と鋭い打撃音が鳴るが、その程度で痛みを感じるほどの貴丈は柔ではない。

いい気付けになったと不敵に笑う貴丈を横目に、七海はネクタイを緩め、シーツのボタンを外して前をはだけさせた。

「では、行きましょう」

七海はそう言いながらスーツの下に隠していた呪符でグルグル巻きにされた鉈のようなものを取り出す。

斬るといふよりは叩く方向に重きを置いているであろうそれは、真希が扱う呪具と同じものだろうか。

「はいー」

とにかく戦闘準備だと、貴丈も彼に倣う形で手元に煙を発生させるとベルトを出現させ、それを腰に巻きつけた。

それを見ていた七海は話には聞いていたが、やはり珍妙な術式の存在に怪訝そうに眉を寄せた。

一級呪術師としてそれなりに知識も経験もある自覚はあるが、やはり彼のような術式は見たことも聞いたこともない。

だが、それをどうこう聞いたところで仕方がないと、七海は眼鏡の位置を直すと廃ビルに一足早く突入。

貴丈は慌ててその後が続いてビルに突入すると、補助監督官が辺りを囲うように『帳』を降ろす。

これで呪霊の逃げ場は奪った。後は狩るだけだ。

廃ビルに突入から数分。

各階を入念にクリアリングしながら、一つずつ上階を目指していく。

蠅頭はいれど、肝心の変異型呪霊スーマッシュユがない。外れかとも思うが、それは他の誰でもない自分が違うと否定する。

「近くにはいるんですけど、気配が曖昧なんですよね……」

貴丈はすんませんと申し訳なさそうに謝るが、七海は気にする素振

りもなく「いいんです」と返して最上階——五階に続く階段に足を向けた。

「お互い、出来ることを確実にやればいいんです」

「あんまり期待してないって聞こえるんですけど……」

七海の励ましとも言える言葉だが、出来ないならやるなども取れる言葉に貴丈はげんなりと項垂れると、七海は足こそ止めないが振り向きながら貴丈に告げた。

「期待するしない以前に、私はあなたの事をあまり知らない。お互いに術師としてそれなり以上の場数を踏んでいるとは思いますが、今日が初対面です。あなたも、私がどんな事ができるのかご存知ないでしょう?」

「そうですね」

「そんな私に、五条さんのように空を飛んだり、いきなり相手を弾き飛ばしたりを期待はしないでしょう?それと同じです」

「……あの人も飛べるんですか?」

「ご存知ないのですか?」

「……っ」

七海が矢継ぎ早に放ってくる言葉に納得半分、困惑半分の複雑な表情を浮かべることとなった貴丈は、今更になって叩きつけられる五条の異次元さに思わず目眩を覚えてしまう。

だがとにかく、七海の言いたいことは理解できた。相手が何を得意としているのかすらお互いわかっていないのだ。過度な期待は酷というものだ。

少々残酷なようにも聞こえるが、それが七海なりの優しさなのだろう。

今まで言葉を交わしてきた人たちは違う、不器用であり、一見冷たいようにさえ感じるが、確かに相手を気遣う優しさが滲んでいる。

——不器用な人なのかな?

まだ一緒に行動して一時間ほどだが、何となく七海が良い人であると理解し始めた貴丈は僅かに表情を緩めるが、七海も七海で困惑の表情を浮かべていた。

——今、あの人もと言わなかったか？

彼が何をできるのか把握していないのは確かだし、大人として学生である彼の負担を減らすのが役目だと、理解もしているが、先ほどの言葉が引つかかって仕方がない。

この際、お互いの術式についてある程度開示しておこうかと彼の方に振り向いた瞬間だ。

「——っ！七海さん、待ってくださいー！」

何かに気付いた貴丈が制止の声を上げ、眉を寄せて神妙な面持ちになりながら壁に手をつき、目を閉じた。

五条の話では彼と変異型呪霊^{ス・マツ}はある種の繋がりをもち、ある程度近づくと感知できるという話ではあったが、どうやら本当だったようだ。

彼の言葉通りに立ち止まり、目を閉じた彼の分も辺りを警戒する七海を他所に、貴丈はノイズ混じりの視界を凝視して鮮明にしていくな。何かが上階に居座り、こちらを警戒しているのか階段の出入り口から視線を外さない。

「います。数は一つ、こつちを見えます」

「騒ぎすぎたかもしれませんね。ですが、道はここしか——」
警戒されている。だが上に行ける道はここしかない。

その事実から、自分が先鋒として飛び込んで意識を逸らし、その後貴丈に突入してもらおうと作戦を組み立てるが、貴丈は目を閉じたまま壁から手を離し、掌に煙を発生させた。

そこから橙色のフルボトルを取り出し、カチャカチャと音を立てて振り回す。

「桐生くん？何をするつもりなんですか？」

突然訳の分からない事をし始めた貴丈の姿に七海は困惑するが、貴丈は「任せてください！」と意気揚々に返しながらフルボトルの蓋を開けた。

『《タカ！》』

同時に二人の脳内に響く陽気な音声。

タカと名乗ったフルボトルから橙色の呪力が溢れ出し、貴丈の背中

に集まっていくな。

その光景に、七海は五条の警告とも言える言葉を思い出ししていた。『ねえ、七海。貴丈と一緒に行動すると思うけど、彼が変なことしても驚かないでね。僕ほどじゃないけど、常識が通用しない子だから』

五条の言葉と、タカと言うおそらく鳥類の鷹と思わせる先程の音声と、背中に集まっていくな呪力。

「それじゃ、一旦戻りましょうか」

そしてどこか得意げな笑みを浮かべる貴丈の姿に、七海は嫌な予感を感じながら小さく溜め息を漏らした。

その変異型呪霊^{ス マツ シュ}は持ち前の術式により百鬼夜行を生き残り、その数を癒すべく廃ビルに籠城を決め込んでいた。

時折肝試し感覚で入り込んでくる若者や、不意に生まれる呪霊を餌に傷を癒やし、呪力を回復し、全快したらもつと遠方まで逃げる。

あと人間二人も食べばとご機嫌だった彼だが、その幻想は容易く打ち砕かれた。

その人間が呪術師で、二人揃って自分と同じか下手をすれば今の自分よりも強い気配を放っているのだから、当然だろう。

時折視界に混じるノイズを不調のせいだと断じつつ、二人が登っている階段の方を警戒して得物となった両手を構える。

その体勢で三分ほど待った頃、突然呪術師二人は来た道を折り返し、階下へと降りていったのだ。

諦めたかと安堵の息を漏らす変異型呪霊^{ス マツ シュ}は、予定を繰り上げて一刻も早く脱出しようとする窓の方を目指して歩き出し、

「オラアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

直後、雄叫びと共に窓を蹴破ってきた貴丈の蹴りが顔面に炸裂し、吹き飛ばされた勢いのままに壁をぶち抜いて隣の部屋をゴロゴロと転がった。

『?!?!』

驚きながらも瓦礫を退かしながら立ち上がった変異型呪霊^{ス マツ シュ}は、自分

を蹴り飛ばした貴丈を睨み、さらに困惑の表情を浮かべた。

背中から一對の橙色の翼を生やし、白いスーツを着た男を横抱きにしているのだから、困惑もしよう。

そして混乱しているのは彼だけではない。

「……」

外に出るなり貴丈に抱き上げられ、そのまま五階まで急上昇、即突入という荒事をされたのだ、混乱もしよう。

そんな混乱する一人と一体を他所に、貴丈は七海を降ろすとタカフルボトルをベルトのフルボトルホルダーに取り付け、手元にラビットフルボトルとタンクフルボトルを取り出した。

カチャカチャと音を立ててフルボトルを振り回し、蓋を開けてベルトにセット。

『《ラビット！タンク！！》』

いつもの脳内に響く陽気な声に後押しされ、いつものようにレバーを回そうと手を伸ばした直後、

『《ベストマッチ！！》』

「っ?!五条先生が言ったの、これか!」

聞き慣れない音声が続いて鳴り響いて驚くものの、五条が変更点があると言っていた事を思い出してすぐに納得。

止まってしまった手を再び動かし、今度こそレバーを掴んで一気に回転。

それに合わせてベルトから謎のノリがいい音声の流れ始めるが、それも無視してさらにレバーを回転。

貴丈の前後にベルトから半透明な管が伸び、それぞれがラビットハーフボディ、タンクハーフボディを生成。

『《Are you ready!?!》』

それが完了すると同時に投げられた問いかけに対する返答は、既に決まっている。

右手を前に、左手を顎の前に構える、所謂ファイティングポーズを取りながら、声高らかに宣言する。

「――変身!!」

その宣言と共に姿勢を正すと、前後に展開していたハーフボディが貴丈に重なり合い、蒸気を吹きながら身体に密着。

『《鋼のムーンサルト!!ラビット・タンク!!!イエー——イ!!!》』

赤と青、二色の鎧を——五条に言わせれば『ビルド』の姿となった貴丈は七海に向けて言う。

「七海さん、行きますよー!」

「……はい。ですが、後で話があります」

彼の言葉に七海は言葉に若干の怒気が込めながら眼鏡の位置を直し、眼鏡の下で貴丈を睨みつけた。

雰囲気で七海を怒らせたと理解したが、理由がいまいちわかっていない貴丈は「え?」と間の抜けた声を漏らす。変異型呪霊が雄叫びを上げたのを合図に二人の意識が同時にそちらに向いた。

ビルドは拳を構え、七海は鉈を構え、同時に走り出して変異型呪霊へと向かっていく。

貴丈、七海コンビ。京都での初戦が、始まった。

「うおおおおお!!」

まず真つ先に変異型呪霊スラムッシュに接近したのは、ビルドに変身した貴丈だった。

ラビット-halfボディの効果で高まった身体能力に物を言わせ、七海を置き去りにする形で飛び出した彼は、タンク-halfボディである左拳を加速の勢いのままに繰り出した。

『ッ!!』

彼の速度に回避は不可能と判断したのか、変異型呪霊は盾のように両腕に装着された汚れの目立つ白い四角形を顔の前に持っていき、横に並べて壁のようにして身構えた。

「シッ!」

だが、そんな物お構いなしにビルドは拳を振るい、変異型呪霊の盾に向けて打ち付けた。

インパクトの瞬間、辺りに木霊したのはベチン!と気の抜けた軽い音だった。

そしてその音の通り変異型呪霊にもダメージがある様子もなく、拳を突き出した形になったビルドもまた困惑しているのか、盾と拳を見つめて「え、な……?」と声を漏らしていた。

相手にダメージはない。だが、こちらの拳も痛いわけではない。柔らかない物に受け止められたような、気味の悪い感触が拳から伝わってくる。

『イヤッ!!』

しかし、変異型呪霊にそんなものは関係ない。

不気味な怪鳥音と共に両腕を振り抜いてビルドの拳を払うと、防御にも使った盾で彼の腹部を殴りつける。

だが響くのは、先程と同じ気の抜けた音。吹き飛ばされたビルドは「おわっ!」と声を漏らす、やはりダメージ自体はないのか着地を決めて腹を摩った。

「殴られても痛くねえって、気持ち悪いな……」

なんだこれと首を傾げるが、ダメージがないのならいいかと再び構えて突貫を開始。

対する変異型呪霊も雄叫びをあげて彼に向けて突撃せんとするが、「無視は困ります」

ふうと気だるげな溜め息と共に踏み出した足に鉋を叩きつけられ、前につんのめる形で転倒。

何事かと顔をあげた瞬間、その顔面に鋭く放たれた蹴りが突き刺さった。

肉を潰し、骨を砕く快音と共に弾き飛ばされた変異型呪霊は天井、柱、床の順でバウンドすると、ゴロゴロと床を転がって濁った血を吐き出した。

「桐生くん、怪我は？」

「え？あ、はいっ！大丈夫です！」

爪先についた返り血をそのままに、七海は変異型呪霊を警戒しながらビルドに声をかけ、聞かれた彼は打てば響くように返事。

「なら結構。ここで仕留めますよ」

彼の返事に応じた七海はちらりと腕時計を確認し、現在時刻を確認。

急げば定時までには終わり、多少なりとも休息を取る時間は確保できるだろう。

……まあ、どうせ、すぐに次の仕事が入ってしまうのだろうか。

思わず出そうになった溜め息を我慢し、眼鏡の位置を直しながら言う。

「先程の音と君の反応を見る限り、あの盾はかなりの柔らかさを持っているようです。固さがない分壊しにくいでしょうが、そこ以外を攻撃すれば問題ないでしょう」

「ゴムの塊を殴ったみたいでしたよ、気持ち悪い」

七海の解析にビルドはそう横槍を入れ、左拳に残る違和感を拭おうと手首を振った。

七海はゴムの塊という情報は大事なのだろうかと思案するが、変異型呪霊が雄叫びをあげて立ち上がったのを合図に一旦思慮を中断。

「あの盾が相手の術式に関わっている可能性もあります。今後はあまり触らないように」

だがまず間違いないであろう情報をビルドに伝え、「はいっ！」と即答が返ってきたのを合図に今度は七海が先陣を切った。

対する変異型呪霊は再び盾を構えて迎え撃つ姿勢を取るが、七海は手元で鉦を回転させて勢いをつけながら、真正面から切り掛かる。

「——フッ！」

ように見せかけ、直前で身体を翻して側面に回り込み、無防備な脇腹に鉦を叩きつけた。

肉が潰れる湿った音と、骨を砕いた確かな感触に目を細め、これでは祓除には足りないかと素早く判断。

『キィヤッ!!』

変異型呪霊は怪鳥音と共に七海に向けて盾を振るうが、彼は素早くその場で姿勢を低くして盾を頭上を通過させると、術式を発動しながら変異型呪霊の太腿を鉦で打ち据えた。

瞬間、先程とは段違いの快音が辺りに響き渡り、変異型呪霊の身体が宙を待った。

バットで打たれた野球ボールのように勢いよく弾き飛ばされた変異型呪霊はそのまま壁に激突し、破壊しながら床を転がっていく。

変身前の貴丈に負けず劣らずの力を誇るその一撃を生み出したのは、七海の術式——『十劃呪法』とおかくしゅほうによるもの。

術式の効果は対象の長さを線分した時に7:3の比率の点に、強制的に弱点を作り出すものだ。

その効果範囲は全長だけでなく、頭部や腕など部分までを対象として指定する事が可能であり、対象は呪霊のみならず、人間から無機物まで、幅が広い。そして今回は変異型呪霊の足を対象に7:3の位置——つまりは太腿に攻撃を加えたのだ。

その効果たるや、鉦で殴られた足は太腿から先が明々後日の方向に向き、筋肉を突き破って飛び出した骨が血管を破き、夥しい量の血が噴き出すほど。変異型呪霊は訳も分からずもがきながら、想像を絶する痛みに声にならない悲鳴をあげている。

だがそれはほんの僅かな時間だ。破壊された足が蠢いたかと思うと、ぐちゃぐちゃと肉をかき混ぜる音と共に骨が引っ込み、傷が塞がると共に元の形を取り戻す。

再生が終わると共に立ち上がり、威嚇の咆哮をあげるが、生憎と相手は七海だけではない。

「俺を忘れんな！」

七海よりも早く追撃に動いていたビルドが赤い軌跡を残しながら肉薄し、立ち上がった変異型呪霊の胴体に左拳を叩きつけ、インパクトと同時に大気が震えるほどの衝撃が辺りを駆け抜け、変異型呪霊の身体がくの字に曲がる。

ごぼりと口から濁った血を吐き出した瞬間、その顔面に膝蹴りを叩き込んで顎を砕き、力任せに背筋を伸ばさせると、無防備な胴に向けて追撃の前蹴りを叩き込んだ。

再び身体をくの字に曲げた変異型呪霊は腹を押さえて膝から崩れるが、下がってきた頭を豪快に蹴り飛ばし、壁に叩きつけた。

壁に背を預けてぐったりとしたまま動かなくなった変異型呪霊を睨みながら、ビルドはベルトのボルテックレバーに手をかけ、回転させ始める。

レバーの回転に合わせてビルドが放つ呪力が高まっていき、兎と戦車を模した複眼がそれぞれ赤と青の輝きを放つ。

解き放たれた呪力を左拳に収束させ、拳が青く発光し始めると、ビルドは変異型呪霊を睨む。

「――これで、決める！」

その宣言の元、ビルドは既にグロッキーとなっている変異型呪霊に向けて走り出し、トドメを刺さんとするが、

『ケシッ！』

突如、理解不能の声を上げながら両手の盾に呪力を集め、それを同時に床に叩きつけた。

その瞬間、不可視の呪力の波がビルドと七海を襲い、それに押された二人は弾き飛ばされ、至近距離で受けたビルドは床を転がりながらどうにか受け身を取り、比較的離れていた七海も崩れた体勢を素早く

整えた。

「なんだ!？」

「桐生くん、無事ですか!？」

突然の攻撃に驚くビルドと、そんな彼を心配する七海。

ビルドは素早く「俺は大丈夫です!」と返し、まだ拳に呪力が集まっているのを感じて理解し、再びトドメを刺さんと動き出すが、

「……あれ?」

肝心の変異型呪霊が見つからず、キョロキョロと辺りを見渡した。

右にはいない。左にもいない。階段の方にも目を向けるが、やはりいない。血痕が続いている訳でもないから、まだこの階にいるとは思うのだが、見当たらない。

「桐生くん!左腕と腹はどうしたんですか!？」

そうして警戒を強めるビルドに、七海が切迫詰まった声音で声をかけた。

当のビルドは「へ?」と間の抜けた声を漏らし、七海に言われた左腕と腹部に目を向けると、そこには何もなかった。

左腕の肘から先がなくなり、腹も鳩尾から臍の辺りまでが消失してしまっている。

「な、なんだこれ!?!え、これ、どうなってるの?!」

ビルドは慌ててペタペタと左腕や腹を触るが、右腕の装甲越しに何かに触れている感触はあるし、装甲部分特有の硬さも感じられる。

見えないが、痛みがあるわけでも、違和感があるわけでもない。

拳を握ったり、腕を曲げたりする感覚もあるし、腹を摩ってみればやはり触れている感覚がある。

そう。見えなくなっているだけで、本来あるべき場所に、確かに腕も腹もあるのだ。

「と、とにかく俺は大丈夫です!見えないですけど、腕も腹も繋がってます!」

ビルドは右手でグツとガツポーズをしながら言うが、七海は「大丈夫には見えません!」と子供を心配する大人としての表情になりながら怒鳴り、辺りを警戒しながらビルドに向けて駆け出した。

カツカツと彼が走る音だけが二人の耳に届くが、七海は不意に足元の小さな瓦礫が不自然に動いた事に気づいた。

そして、そこからは完全に直感による動きだった。

咄嗟に当て勘で鉦を振るった瞬間、固くも柔らかい何かを——それこそゴムを斬ったような気味の悪い手応えに眉を寄せ、先ほどビルドが言った言葉の意味を理解する。

だがそんなものお構いなしに鉦を振り抜けば、不可視の何か部屋の隅まで飛ばされていき、重い何か倒れる音と共に埃が舞い、その場から離れていく足音が続く。

「これは……っ」

その方向を警戒しつつ、七海は自分の手元を見つめて困惑の表情を浮かべた。

手の中には鉦の柄しか残っておらず、肝心の刃部分がなくなっているのだ。だが手に馴染んだ重さも感じる。相手を叩いた手応えもある。

血払いをくれるように宙を斬ればいつもの空気が唸る重々しい音が鳴るし、試しに床を叩けば甲高い金属音が鳴る。

——自分自身を含め、盾に触れたものを見えなくする術式、といった所でしようか。

同時に相手の術式効果に当たりをつけ、ちらりとビルドの方を確認。

左腕と腹の消失の混乱は治まったようで、見えなくなった左腕の具合を確かめるように左腕だけでシャドーボクシングをしているようで、シュ！シュ！と拳が振るわれる鋭い音が聞こえてくる。

それでも拳自体が見えない為か、間合いを測るのに苦心しているようだ。

二人揃って相手の術式による不可視効果に慣れ始めると、七海はビルドに近づいていき彼と背中合わせになるように構えた。

「相手は見えませんが、攻撃自体は当たるようですね。ですが、適当に行動して盾に触れてしまえば、これや君の腕のように見えなくなるようです」

鉈とビルドの左腕を示しながら告げた言葉に、ビルドは「それが術式みたいですね」と七海が先程した予測を後押しする。

だが、厄介ではあるが手練れともなれば見えなくとも問題なく動けてしまう。見なくするだけの術式、にしては盾で受けたり攻撃したりに執着している様子。何か裏があるのだろうか。

万が一全身が見えなくなるようなことになれば、何かあるのかもしれない。

術式に対する警戒心を高める七海と、とりあえずは問題なしと判断して拳を構えるビルド。

背中合わせの二人は耳を澄ませ、微かな足音や瓦礫の揺れる音を聞き逃さず、それに合わせてジリジリとすり足で構えを微調整し、いつでも迎撃できるように警戒を緩めない。

透明状態のまま逃げられれば面倒なことこの上ないが、どうやら相手はやる気満々のようで、こちらの気を逸らそうと壁を砕いたり、豪快な音を立てて床にヒビを入れたりと好き放題に暴れている。

それでも二人の意識は研ぎ澄まされ、騒音に混ぜつつ微かに聞こえて来る変異型呪霊の足音を聞き逃すことはなく、七海は眼鏡の下で、ビルドは仮面の下で、視線のみで相手の動きを追っていた。

前後左右、様々なフェイントを挟んでこちらを攪乱しようとしているが、生憎とこちらは二人にいたので。背中を気にする必要はない。

ビルドはふーっと深く息を吐き、さらに聴覚に意識を集中。ラビッツトハーフボディの効果で強化された聴覚は七海以上に変異型呪霊の動きを把握し、絶好のタイミングを待つ。

一分か、あるいは十分か、もつと長い時間か。二人はどんなに時間が進もうと常に神経を尖らせ、相手の挙動を音だけで把握し続ける。

そうして二人が隙を見せない中、先に痺れを切らしたのは変異型呪霊の方だった。規則正しく続いていた足音が突然不規則となり、一気にこちらに詰め寄ってきたのだ。

「来ますー！」

「ええ、合ませますー！」

そして念のためと告げられた警告に七海が素早く返し、二人は同時

に身体を捻って勢いをつけると、ビルドは右足による蹴りを、七海は鉞の一閃を同時に放った。

いる場所はある程度予測できるが、見えもしない相手への直感による迎撃。土壇場で息を合わせた二人の攻撃は、変異型呪霊の突撃のタイミングにドンピシャで合わせることに成功し、変異型呪霊の悲鳴が二人の鼓膜を揺らす。甲高い金属音と、ゴムの塊を殴りつけたような鈍い音が辺りに響いた。

「やべっ……！」

同時にビルドの口から切迫詰まった声が漏れ、七海が弾かれるように彼の突き出した足に目を向ければ、膝から下が見えなくなった足がそこにはあった。

七海の鉞には変化なし。彼の一撃は偶然にも盾には当たらなかったようだが、ビルドの蹴りは不幸にも盾を捉えてしまったようだ。

彼は膝から先が見えなくなった足を見つめながら気まずそうに降り、具合を確かめるようにトントンと爪先で床をたたき。

見えないが、そこに確かに存在はしているのだ。なら何の問題もない。

二人の攻撃に吹き飛ばされた変異型呪霊は相変わらず見えないが、辺りを駆け回る足音は先ほどの攻撃が効いたのか、激しく不規則になっっている。

そろそろトドメをと身構えるビルドとは対照的に、七海は不服そうに息を漏らし、鉞に血払いをくれた。

彼の『十劃呪法』は確かに強力ではあるが、こころも見えないとどこからどこまでが全長で、どこからどこまでが腕や足なのかを検討もつかない。故に、先の一撃はただの呪具による斬撃でしかないのだ。

それでは相手を祓除するには火力不足で、トドメはビルドに託さなければならぬ。

あるいは変異型呪霊の透明化を解除できれば自分かと思慮するのだが、おそらくその方法を探るよりも彼が祓除する方が確実だろう。

彼に家族殺しの重荷を背負わせたくはないが、自分の術式と相手との相性があまりにも悪い。今の自分は術式なしの呪術師相当の戦力

でしかないのだ。

何より、彼自身が他の誰かの手で家族を殺される事を認めはすまい。

「桐生くん、お任せしても?」

「元よりそのつもりですっ!」

七海の気遣い混じりの確認にビルドは鋭く応じ、「次で決めます!!」と威勢よく宣言。

その声に変異型呪霊にとってはこれ以上ないほどの挑発となったのか、不可視の状態のまま昂ったように雄叫びをあげ、駆け回る速度をあげた。

時には加速の勢いのまま二人に向けて突貫し、すれ違い様に盾で攻撃せんとするのだが、七海とビルドの二人は間一髪の所で避け続け、直接的な被弾はしない。

それでも時には掠めてしまうのか、七海は服の一部を始めとした身体各所、ビルドも装甲とその下の制服を含めた素肌のあちこちが透明になってしまい、二人揃って虫喰い状態へとなっていく。

それでも本当になくなったわけではないのだ。見えないだけで感覚はあるし、多少動き辛くなるだけで大きな問題はない。

だが少しずつ自分の身体が消えていくのを目の当たりにするのは、精神衛生上あまりよろしいとは言えない。事実二人の表情は酷く強張り、額には脂汗が浮かんでいた。

それを好機と見たのか、変異型呪霊はさらに攻勢を強めようと加速し、一気に肉薄。二人の存在を完璧に消し去るべく、盾による乱打を放とうとするが、

『《レディー・ゴー!!》』

そんな彼の頭の中に、状況に反して異様に陽気な音声で鳴り響いた。

何事だと驚愕し、振り絞った両腕をすぐに戻して盾を構えるまでのほんの一瞬。

その一瞬の隙を、赤い閃光が貫いた。

『《ボルテック・フィンニッシュ!!!》』

ビルドは必殺技発動を意味する音声も、打撃音さえも置き去りにするラビット-halfボディが出せる最高速度をもつてして、飛びかかってきた変異型呪霊を迎撃。

攻撃から防御への切り替えのタイミングを完璧に捉えた拳は変異型呪霊の腹部を容易く貫き、床一面に濁った血をぶち撒けさせた。

その一撃で透明化が解除された変異型呪霊は低く唸り、血を吐きながら最後の足掻きとしてビルドの頭部に盾を押し付けた。

しまったと目を見開き、術式発動前に腕を落とさんと鉦を振るおうとするが、

『にい、ちゃ……ん……っ』

彼の耳に幼い少年の声が届き、その手を思わず止めてしまう。

そして本来なら止めるべきだった変異型呪霊の術式が発動してしまいが、瀕死の状態で発動したからか、それとも加減した状態で発動したのか、ビルドの仮面部分のみを透明にし、貴丈の素顔を露わにする。

覚悟が決まりきったその表情は凜としているが、瞳からは抑えきれない悲しみと、懺悔の念が込められていた。

それでもその想いさえも押し殺した貴丈は「ごめんな」と静かに告げて、変異型呪霊の腹を貫いた拳を引き抜いた。

支えを失った変異型呪霊は引き抜かれた勢いのままに背中から床に倒れ、びちゃりと湿った音が辺りに木霊する。

変異型呪霊の身体が少しずつ朽ちるように煙に変わっていき、そのまま貴丈の影へと吸い込まれて消えていく。

同時に彼が纏う呪力も大きくなっていくのだが、それに反して迫力が弱っていくのだから心配になってしまう。

七海が声をかけるべきかと僅かに思慮している隙に、貴丈は胸に当たった右手に呪力を集めて今しがた吸収した変異型呪霊の力を捻出。

拳から生み出された煙から白い輝きが放たれ、それが止むと共に拳の中にフルボトルが生み出された。

呪力の流れと拳の異物感でそれに気付いた貴丈が手を開くと、そこには白いフルボトルがポツンと置かれていた。

その柄を確認しようと顔の前に摘み上げるときよつと目を見開くが、今回の相手の能力に合点がいったのか「なるほど」と呟いてベルトからタンクフルボトルを引き抜き、生成したフルボトルをセツト。

『《ラビット!!消しゴム!!》』

「け、消しゴム、ですか……?」

同時に頭の中に響いた音声に思わず疑問符を浮かべた七海に対し、貴丈は「そうみたいです」と返してレバーを回転。

『《Are you ready?》』

「変身」

そして投げられた問いかけにいつも通りに返すと、消しゴムスマッシュの猛攻で消されたタンクハーフボデイ側の装甲が白く染まりながら再構築され、その表情を覆い隠すように仮面で覆われた。

複眼が軌跡を描く消しゴムに変わり、肩部の装甲にも消しゴムを思わせる意匠が施され、左腕を消しゴムを模した籠手に包まれる。

同時に頭の中に術式の些細がさも当然のように流れ込み、謎だった消しゴムスマッシュの能力の詳細がようやく理解できた。

籠手の具合を確かめるように腕を振った彼は、「ほい」と気の抜けた声を漏らしながら七海に押し付けた。

ぐりぐりと捻りながら籠手を押しつけられた七海は不快そうに眉を寄せるが、擦り付けられる度に先の変異型呪霊に消された部分が元に戻っていき、普段の白スーツ姿になっていく。

同時にビルドの消失した装甲も戻っていくのだから、消しゴムハーフボデイの効果は消すだけでなく、元に戻すこともできるのだろう。

「でも、危なかったですね」

そして二人の全身が元に戻った頃を見計らい、ビルドは変身を解除しながら不意にそんな事を呟いた。

「なにがですか?」と眼鏡の位置と、彼の籠手に押されて乱れたスーツを整えながら問うと、貴丈が苦笑混じりに告げた。

「これ、全身消えてたら元に戻せませんでしたから」

「……。それはつまり、あのまま攻撃されていれば、二人揃って透明人

間として生きる他なかったと?」

「いえ、完全消滅です。死亡です」

「……」

貴丈はなんて事のないように、二人して死にかけていたという事実を口にするが、七海は神妙な面持ちで溜め息を吐いた。

なんと言うべきか、彼は命に対して少々無関心が過ぎるような気がしないでもない。

いや、最愛の家族を呪い、その罪滅ぼしの為に殺して回っているのだ。命に対する価値観や、ある種の倫理観が欠如してしまっているのかもしれない。

七海はそう思っているが、貴丈自身は仲間や民間人の命を最優先するだけで、呪術師としてはそれなりにまともな部類に入る。そして家族を祓除しきるまで、死ぬわけにはいかないと生きることに関心がないというわけでもない。

ただ、少しばかり身近な人の死に慣れきってしまっただけなのだ。

「とにかく撤収しましょう。確認された変異型呪霊は他にもいます」

「はい。次もよろしくお願いします」

七海が長居は無用と念のため辺りを警戒しながらそう言うと、貴丈はそう返して笑みを浮かべるが、そこにほんの少しの陰りがあるのを七海は見逃さなかった。

「私は外にいます。何かあれば、すぐに呼んでください」

そして有無も言わさない圧と共に告げられた言葉に貴丈は驚くが、七海は言った通りに一足早く階段の方へと行ってしまい、足音が下の階へと続いて次第に小さくなっていく。

一人残された貴丈は不意に変異型呪霊が残した血溜まりの前に片膝をつくど、手を合わせた。

「……ごめんな。せめて天国で、父さんたちと一緒にいてくれ」

囁くように告げた言葉は、誰の耳にも届かない。

きつと七海は自分に気を遣ってくれたのだ。言葉にこそ棘はあったものの、その実自分にちゃんとした別れの挨拶をする時間を与えて

くれた。

やっぱり優しい人なんだと微笑みながら、脳裏によぎるのは東京にいる恩師や親友たちの姿。

「心配しないでくれ、俺は一人じゃないから。だから、大丈夫だ」

そしてどこか強がるように声を震わせながらそう言うと、感傷も、後悔も、全てをここに置き去りにして立ち上がる。

まずは一人。あと何人いるのかは定かではないが、とりあえず一歩目は踏み出せた。

ゴールまであと何歩で、必死になってたどり着いたそこが本当にゴールなのかも定かではないが、やれる事をやるしかないのだ。

かつかつと乾いた足音を立てながら階段を降り、入ってきた出入り口からそのまま脱出。

既に『帳』も解除されていることと、補助監督が乗る車に寄りかかって待っていてくれた七海の姿を確認。

「お待たせしました」

「いえ。もういいのですか？」

「はい。……その、ありがとうございます」

そして彼の前まで歩を進めた貴丈が頭を下げながらお礼を言うと、七海は「何か勘違いしていませんか」と嘆息混じりに告げた。

その発言の意図が読めず、貴丈が「へ？」と間の抜けた声を漏らすと、七海はポンと貴丈の肩に手を置いた。

「私は大人で、君は子供です。大人として君を守るのも、多少の我儘に付き合うのも、当然ですよ」

七海はそれだけ言うと「さあ、行きましょう」と告げて車の扉を開けた。

普段なら子供扱いされていると憤る所なのだろうが、七海の声やどこか優しい表情のせいかなそんな気分にもならず、むしろ胸の奥にストンと入り込んでくる。

「はいー」

そして打てば響くように返事をする、せつせと車に乗り込んで奥に詰めた。

遅れて七海が乗車すると補助監督が車を走らせ、一旦京都高専への帰還を目指す。

高速で過ぎていく京都の街並みを眺めながら、貴丈はハツとして額に冷や汗を流す。

——と、東堂先輩の出待ちとかないよな……っ!?

下手すれば呪霊以上に厄介な男、東堂がいるのだ。安心などできるか。

貴丈は額に手をやって小さく嘆くと、七海と運転席の補助監督が心配そうに彼に視線を送った。

それにも気づかない程考え込んでいた貴丈は、開き直ったように「よしー」と気合いを入れて頬を叩いた。

別に逃げる理由もない。向こうが多少歪ながらも友情を示してきたのなら、それに応えてやるのが男というもの。

「頑張れ俺、俺ならできる、大丈夫」

ブツブツと自分への鼓舞を呟きながら窓の外を見つめる彼の姿は、傍から見れば異常そのもの。

やはり休ませるべきかと七海は思慮し、補助監督も心配そうにしながらも事故だけは起こすまいと運転に集中する。

そんな二人の反応に気付くことなく外を眺めていた貴丈は、脳内で対東堂のシミュレーションを行い、来たる接敵の瞬間に備える。

だが結局のところ東堂がどう出てくるのか全く予想ができず、ぶっつけ本番の勝負になることを、今の貴丈が知る由もなかった——。

4.

消しゴムスマツシユを撃破し、数時間ぶりに戻ってきた呪術高専京都校。

時間帯でいえば夕方だが、年始である今は教師や生徒の姿は少なく、貴丈と七海を乗せた車は何にも遮られることなく車庫へと入って行った。

年明け早々に駆り出されたにも関わらず、悪態ひとつなく運転をしてくれた補助監督に一言礼を言ってから降車。両手の指を絡ませて頭の上に伸ばし、乗車で強張った身体を伸ばす。

反対側の扉から降車した七海は眼鏡の位置を直すと、ちらりと腕時計を確認。仕事の説明や移動、戦闘を含めた行動時間は、七時間程だ。これから報告書を作成することになるが、一時間はかかるまい。

「なら、問題ありませんね」

七海はどこか感情を感じさせない声音でそう呟くと、改めて補助監督に感謝の言葉を告げた。

二人からの言葉に補助監督は笑みを浮かべて「これも仕事ですから」と謙遜したような事を言うが、彼がいなければ仕事が大幅に滞るのは確実だ。呪術師の中では彼らを下に見る輩もいるが、そういった手合いほど、彼らが居なくなれば困るというのに。

そうして思慮して真っ先に浮かび上がる顔は、某現代最強の呪術師だ。彼は呪術師として信頼も信用もしているが、尊敬の念を抱くことはできない。

「そう言えば、何か予定があるんですか？ 隙あらば時計を見ていた気がするんですけど」

ふうと不満げに息を吐いた七海の変化に気付いてか、貴丈は七海と車庫に置かれた時計を見ながらそう問いかけた。

車の中やふとした会話の合間の、こちらが不快にならないタイミングを見計らって行われる時間の確認。呪術師とて人間なのだし、人によつては寄りたいたい場所、やりたい事もあるだろう。七海ほどの年齢なら誰かとの待ち合わせという可能性もある。

過去の自分が原因で、七海のプライベートを削ってしまったという事実を今更ながら理解した貴丈は申し訳なきような顔になるが、それに気付いた七海は「いえ、何もありませんよ」とフォローを入れた。

「私の癖のようなものです。気にしないでください」
「なら、いいんですけど……」

七海は自分の術式に関する部分を除き、時間を気にする事を癖として貴丈に教えるが、その説明を受けた貴丈はどこか信じていない様子だ。彼からすれば、単に気を遣われただけという風に見えたのだろう。

そんな彼の表情を見つめた七海は仕方ないと言わんばかりに溜め息を吐くと、「昔からの癖なんですよ」と改めて癖である事を強調すると、車庫を後にして歩き出す。

彼に続いて車庫を出た貴丈が七海の後ろにつき、彼を追って廊下を進んでいると、七海は先ほどの続きを口にした。

「私は、呪術師になる以前は所謂サラリーマンでした。時間に関しては人一倍敏感なんです」

「サ、サラリーマンだったんですか……？なのはどうして呪術師に」
彼の一言に困惑の表情を浮かべた貴丈は、ふと沸いた疑問をそのまま口にした。

呪術師とサラリーマン。報酬の高さでいえば呪術師一択のように思えるが、命懸けの仕事だ。死んでしまっただけは金がいくらあっても無駄になってしまう。なら、安全に給料が手に入り、確実に使っているサラリーマンの方がマシなような気もするが。

まだ社会というものを知らず、残酷な事だが今後知ることもないだろう事で悩む貴丈の姿に、七海は「ひとついい事を教えましょう」と告げて立ち止まり、彼の方に振り向いた。

彼に合わせて貴丈も足を止め、何かいい話でもしてくれるのかと期待に胸を躍らせるが、七海なそんな彼の期待を裏切るように非情な事を口にした。

「まず第一に。私が呪術高専で学び、気づいたことは、呪術師はクソだということですよ」

「……へ？」

七海からのいきなりの言葉に、貴丈は間の抜けた声を漏らした。

口ぶりからして、七海も呪術高専に通っていたのは明白だ。自分のように仕方なくなのか、自分から望んでなのかはわからないが、とにかく七海は自分にとつての先輩に当たるようだ。

だが、呪術師はクソだというのはどう言う事なのか。毎日命懸けではあるが、それが何だ。

こてんと首を傾げて疑問符を浮かべる貴丈に、七海は言葉が続けた。

「そして一般企業で働くことで気づいたのは、労働はクソだということですよ」

「……はあ」

そちらの一般企業に関しての話は、今の貴丈にはよくわからない。両親はどこからの援助を受けて施設を経営していたし、お手伝いさんの人たちもほとんどが住み込みのせいで、もはや家族のようなものだった。

おかげで身近で働いている人というのがおらず、見ていない所で愚痴を吐くことはあったかもしれないが、あの人たちも何だかんだで毎日楽しそうにしていたのは確かだ。

まあ、ほぼ初対面の相手に交渉だの、勧誘だのをして、人よりも一段と疲れるのはそうかもしれないが。

命の危険の有無はともかく、どちらにせよ肉体的にも精神的にも疲労するのは間違いないだろう。この世で何よりも恐ろしいのは人間だというし、何ならその人間が原因で呪霊が産まれるわけで……。

貴丈はむうと唸りながら困り顔になるが、七海はここまで来たのだからと最後の言葉を口にした。

「どちらもクソであるのなら、より適正のある方をしようと思っただけですよ。深い意味はありません」

七海は普段通りの淡々とした声音でそう告げた。

だが貴丈は何か隠していそうだなと僅かに眉を寄せた。ただ適正があるというだけで脱サラして命懸けの呪術師になるなど、サラリー

マン時代に余程酷い目にあつたのか、やりがいというものを見つけれなかったのか、とにかく本当の理由を隠されている気がしてならない。

そして、それを教えてくれる程の信頼を勝ち取れてはいないという事実を突きつけられている気がして、貴丈は小さく肩を落とした。

見るからに落ち込んだ彼の様子に七海も困ったように息を吐くと、ぼんと肩に手を置いて僅かに微笑んだ。

「納得はしていないようですが、理由なんてそんなものですよ。報告は私がやりますから、君は部屋で休んでいてください」

「え、あ、いえ、手伝います」

そんな七海の気遣いに遠慮してか、貴丈は報告に関しても手伝うつもりの様子を見せるが、七海は「いえ、結構です」と断った。

報告書の作成と言えど、どこで、どんな呪霊を、どう祓つたのかを伝える程度だ。変異型呪霊^{ス・マックス}を祓除した時の事を事細かく思い出して書面に書き出すなど、今の貴丈にやらせる仕事ではあるまい。

家族を殺した時の些細を思い出し、書類に纏めるなど、ただですら車内で妙な事をしていた彼を、更に追い詰めるだけだ。今は休ませてやるのが正解だろう。

「そうだと、親友。Mr. 七海の気遣いを無駄にするべきじゃあない」
そして、そんな七海の判断に同調するように廊下の曲がり角の向こうから第三者の声が聞こえてきた。

ずっと廊下の影から姿を現したのは、身長二メートル近い巨漢。呪術高专東京校二年、東堂葵だ。

「窓から車が戻ってきたのが見えてな。迎えにきたぞ、親友」

腕を組んで壁に寄りかかり、格好つけてウイंकをしながら告げられた言葉に、貴丈は口から変な音を漏らした。同時に全身に鳥肌が立ち、凄まじい悪寒と共に額に冷や汗が垂れていく。

車の中であれこれと考えたが、結局どうするべきかは行き当たりばつたりのぶっつけ本番しかないとわかってはいた。わかつてはいたのだが、やはりこう目の前にすると身体が萎縮してしまう。

——と、とりあえず話を合わせるべきだよな……？

最低限決めていた事を胸の内では反芻すると、そもそも助けに来てませんと七海に目を向けるが、当の彼は好都合と言わんばかりに息を吐いた。

あ、これはヤバいと思ったのはもう遅い。七海は東堂に向けて「彼を部屋まで案内してもらえますか？」と口にした。

断る理由もない東堂も「任せろ」と首肯し、何度もしてきたようにも見える慣れた動作で貴丈の肩を組んだ。

「さあ、行くぞ。部屋の場所は聞いてある」

東堂はそう言うのと貴丈を半ば引きずる形で廊下を進み始め、引きずられる彼は困惑の表情のまま七海に助けを求めるが、

「では、私はここで。変異型呪霊ス・マッ・シュの情報が入り次第、連絡します」

七海はいつそ無慈悲なまでに淡々とした声でそう告げて、踵を返して貴丈たちとは逆方向に向けて歩き出す。もう振り返るつもりはないことを、その早めの足取りが教えてくれた。

「あ、はい。わかりました」

そんな七海の背中に諦観めいた声で返事をした貴丈は、東堂に引きずられて廊下を進んだ。

ちらりと東堂の顔色を伺ってみれば、まるで親友に数年越しの再会をした時のようだ。本当にこの状況が嬉しくて堪らないのだろう。

はあと彼に気づかれないうように溜め息を吐いた貴丈は、流れに身を任せる引きずられていた足を廊下につき、東堂の歩幅に合わせて歩を進めていく。

東堂からすればようやく親友が乗り気になってくれたと笑みを深め、彼に合わせて少し歩調を弱めながら、「さあ、こっちだ親ベストフレンド友！」と曲がり角を曲がった。

呪術高专京都校の男子寮。

東京校のそれと大差はないその場所は、やはりと言うべきか部屋の間取りに關しても似通っている。

貴丈にしても場所こそ違えど見覚えのある部屋というのは落ち着

くし、一時的な活動拠点とするには都合がいいのだが、「家具がベッド以外何も無いのはいじめか何かですかね？」

言葉の通り、その部屋にはベッド以外の家具も家電もなかった。貴丈が寮に入った初日でも、テレビや電子レンジ程度の家電はあった。それすらもないというのは、東京校生に対するいじめか何かの可能性がある。

「本来なら誰も使っていない空き部屋だからな。何も無いのは仕方がない」

そんな嫌な思考が働いた貴丈に、東堂が最低限のフオローを入れた。

使ってもいない部屋にあれこれと家電を並べる余裕がないのか、あるいは置かれていた東京校が異常だったのか。

——まあ、どっちにしても、色々と用意をしてくれてよかった。

ベストフレンド「親友、俺の部屋に移るか。テレビやDVDを見る分には問題あるまい」

東堂はこれでは休むに休めないと判断してか自分の部屋に誘うのだが、横の貴丈はさつきと入室し、キッチン周りに足を向けると簡単に目測で広さを確認。

東京校のキッチンに比べて少し狭い可能性があるが、問題はあるまい。持ってきた物を置く余裕はある。

「♪♪♪♪♪」

彼は上機嫌そうに鼻歌を歌いながら手元に呪力を集め、煙を発生させた。

煙に包まれた右手をキッチンに置き、集めた呪力を解放。掌から吐き出された呪力の煙からコーヒーマーカーを取り出し、壊さないようにそつと置いた。

ベストフレンド「……親友？」

いきなり煙から物を取り出した貴丈に流石の東堂も困惑するが、肝心の彼は黙々と次から次へと煙から物を引っ張り出し、部屋に陳列していく。

「間取りは同じかと思いましたが、こっちの方が少し広いみたいで

すね。ちよつとスペースが余ります」

そして東京の寮の部屋と同じように並べた筈なのに、不自然な空きスペースに目を向け、どうしたものかと顎に手をやるが、滞在するのは短期間だ。多少の違和感は我慢しなければ、向こうに戻った時にそれはそれでやりにくくなってしまう。

「なるほど、これが親友ベストフレンドの術式か。なかなか便利なものだ」

部屋の入り口で彼を観察していた東堂は包み隠さぬ賛辞の声を彼に贈ると、「だが、東京校の部屋はどうなっているんだ？」とふとした疑問を口にした。

「空っぽですよ。必要そうなものを片っ端から持ってきたんで」

「旅行に出かける時にやたらと荷物が多い。昔から変わらないな、親友ベストフレンド」

そんな問いに貴丈がさも当然のようにそう返すと、東堂は感慨深そうに顎に手をやりながらそう呟き、「あの時もキャリアバッグがはちきれんばかりだったな」と懐かしむように言う。

あの時とはいつだと胸中で呟くが、その思いをぐつと飲み込んだ貴丈は「そうでしたねー」と棒読みでそう返してコーヒーメーカーの電源を入れた。

仕事が終わって一息つけるのだ。とりあえずコーヒーを飲まねば帰ってきた気がしない。

「むっ！親友ベストフレンド、コーヒーを淹れるのか？」

そして彼の行動に気を配っていた東堂がどこか興奮した様子で聞くと、貴丈は疑問符を浮かべながら「そうですね」と返し、おかわりの分を含めて多めの湯を沸かし始める。

「ほう、そうか！親友ベストフレンドのコーヒー、前から飲んでみたかったんだ、俺の分も淹れてくれ！」

「あ、うす。でも、大丈夫ですか？結構苦いですよ」

手慣れた動作でコーヒートの準備を進める貴丈は、ふとした疑問を東堂に投げかけた。

真希には好評ではあるが、どうやら自分のコーヒートは酷く苦いらしい。棘やパンダは体調不良になり、あの五条ですら苦言を呈する程

だ。あれから色々工夫して味はよくなっている筈だが、果たして東堂の口に合うだろうか。

「……う？その程度、何の問題にもならん。親ベストフレンド友の淹れたコーヒー、飲み干してみせよう！」

だが東堂はドンと胸を叩きながら不敵に笑った。

飲むと言うのは飲ませるべきかと、多少心配しながらも溜め息と共に「了解です」と返した貴丈は、手元に発生させた煙からコップを二つ取り出した。

そこからは慣れたものだ。手慣れた動作でさつさとコーヒーを準備し、茶色を通り越して黒く染まった液体を差し出した。

液体の色とは対照的に白い湯気を放つそれからは、心地よく鼻腔をくすぐるコーヒーの香りを感じるが、その味は果たして美味なのかどうか。

「熱いし苦いですよ」

念の為に忠告を口にしながら、淹れたてのコーヒーを差し出す。

おう！と響くような返事をしながらコップを受け取った東堂は、まずは香りを楽しむように湯気を浴びた。瞬く間に鼻腔を満たしたコーヒーの香りに表情を緩め、律儀に「いただきます」と告げてから一口呷った。

唇の隙間を通り、舌を舐めた黒い液体。

その熱さに小さく唸るが、すぐさま口内を支配した苦味によりそれは攪われていき、今度はその苦さに眉を寄せることになる。だが異変が起こったのはその直後だった。

苦味と熱さ、その全てを超えるほどの激痛が口腔を、食道を、胃を、駆け抜けていったのだ。

「んんんんんん」

東堂はその痛みに思わず口に含んでいたコーヒーを吐き出すと、そのまま胸を押さえながらその場に崩れ落ち、かふかふと気の抜けた音を漏らしながら、陸に揚がった魚のように口の開閉を繰り返した。

——な、なんだ、これは!?!身体に力が入らん！それにこれは、呪力が練れないだと……っ?!

呼吸困難、手足の痺れ、異常なまでの発汗、呪力の低下及び操作不能。

並の呪霊や呪詛師の攻撃をくらっただけではまず起こらない不調の連続に困惑するが、まずは呼吸だけでも落ち着かせようと深呼吸を繰り返した。

「と、東堂先輩？大丈夫ですか？」

貴丈はそんな東堂を見下ろしながら心配の声を投げた。ついでに「やっぱりこうなった」と独り言を漏らし、溜め息混じりに床に転がる東堂が使ったコップを回収。それを洗い場に突っ込み、東堂に向けて「水でも飲みますか？」と問うた。

そのまま適当に水道水でも飲ませるかと準備を進めるが、東堂は待ったをかけるように貴丈の足を掴んだ。

——この苦味は水ではどうにもならない。何か、他の飲み物を……っ！

と、万感の思いを込めた視線を貴丈に向けた。

その視線を受けた貴丈は熱で苦しむ弟たちの姿を幻視し、数瞬迷うように瞬きすると、ハツとして「経口補水液的な方がいいか」と勝手に納得して東堂の手を払った。

そのまま呪力を両腕に回して筋力を底上げすると、東堂の自分の二回りも大きな肉体を持ち上げ、ベッドに腰掛けさせた。その間にも東堂は苦しそうに呻いており、試しに額に触れてみれば反射的に離してしまう程の熱を持っていた。

これは重症だなと頭を抱えた貴丈に、東堂は震える手で掴みかかりながら言う。

「親友！東堂葵の最期、高田ちゃんに伝えてくれ！俺は潔き生き、君を思いながら逝ったと……っ！」

そして目から大粒の涙を流しながら、推しのアイドルに己の最期を伝えてくれと、秘めたる想いを伝えてくれと、最後の力を振り絞って吠えた。

これが今の東堂にできる全力なのだろう。掴みかかった手からもじわじわと力が抜けていき、掴んでいるのがギリギリな様子だ。

だが、貴丈はもはや残酷なまでに冷静だった。はあと深々と溜め息を吐くと、ジト目になりながら東堂に言う。

「……呪術師がこんなんで死なないと思えますよ?」

そして淡々と告げられた言葉は、己の経験に則したものだ。腹に風穴が開こうが、顔半分や手足が焼かれようが、こうして生きていられるのだ。適切な処置をされたという理由もあるが、高熱程度で死にはすまい。

「まだ死なないで、か……。」 マイベストフレンド 親友、お前は優しいなあ……。」

だがそんな無関心とも言える言葉を、東堂は励ましの言葉として受け取り、儂げな笑みを浮かべた。

そのまま貴丈から手を離すと白眼を剥き、ぐったりとしながらベツドに倒れ、ぼこぼこ音を立てて泡を吐き始めた。

その様を見下ろした貴丈はとりあえず濡れタオルを東堂の額に被せておき、今のうちに何か飲み物を買ってこようと部屋を後にした。

一人残された東堂は苦しそうに唸っているが、

「高田ちゃん。俺は、必ず次の握手会、に……。ふふっ……。」

何だかんだで元気そうであった。

——京都校、結構広いな。

自動販売機を探して校舎内を歩き回っていた貴丈は、ようやく目的の自動販売機を見つけてホッと息を吐いた。

とりあえず買えるだけ買って部屋に戻り、後は歌姫か七海を見つけ、医務室に運ぶのを手伝ってもらおう。

貴丈は懐から財布を取り出しながらそう決めて、必要そうなものを片っ端から買っていく。

発汗が激しかったから、経口補水液をいくつかと、お口直しにジュースを何本か。

硬貨を入れる音と、ボタンを押す音、ペットボトルが落ちる音。

その三つが規則正しく連続し、自動販売機から取り出した側から術式を使って煙の中に収納していく。大きめの袋も、手が埋まることも

ない。恨むばかりの術式ではあるが、使い方さえわかればいくらでも利用できる。

「物は使いよう、とはいうけどな……」

どこかこの術式に関して知る度に、他の呪術師たちの術式とは違う何か、それこそ本当に呪術なのかも不安になるほどに異質な力に感じてならないのだ。

五条がいない今、この力にあれこれと探りを入れるわけにはいかないが、東京に帰って五条がいるタイミングで、今一度組み手の相手ついでに術式を探る手伝いでもしてもらおうか。

——そうと決まれば、さっさと終わらせて……。

と、彼の脳裏にはそんな思慮が過るが、すぐに怖気にも似たものを感じて額の傷跡を搔いた。

何がさっさと終わらせてだ。家族を殺して回るのに、これではまるでお使い感覚ではないか。

覚悟を決めて、一人残さず殺すとは決めた。だが殺すことに慣れるつもりは毛頭もなかった筈なのに、どこかで慣れ始めて自分がいる。

「馬鹿かよ、俺は」

ボリボリと額を搔きながら自嘲的に笑った彼は、最後に自分の分の飲み物も買って自動販売機から離れた。

部屋にコーヒーもあるが、東堂とのごたごたでもう冷めてしまっただろう。淹れなおすにしても、その間を埋めるものが必要だ。いや、むしろ東堂の介抱をするのなら淹れ直す暇もないか。

原因が自分のコーヒーとはいえ、せつかくのコーヒー休憩の時間が削られてしまい、彼は僅かながら不機嫌ではあった。

別にこれがパンダや狗巻、乙骨ならそこまで面倒には思わなかっただろう。自称親友と、お互いを理解しあつての親友とでは、やはり態度が変わってしまう。人とはそんなものだ。

そしてそうやってあれこれと思慮しながら歩いていた為か、廊下を曲がろうとした瞬間に、そこから飛び出してきた誰かとぶつかっってしまう。

「あ、ごめんなさい。ちょっと考え、ごこと……を……？」

軽く肩がぶつかった程度だが、相手が誰かわかっていないこと、加えて考え込んで警戒が疎かになっていたことを材料に、とりあえず敬語で謝罪の言葉を口にしたが、尻すぼみになりながらそのぶつかった相手——おそらく呪術高専生徒を見つめた。

凜とした切れ長の目に、深い緑色の短い髪。長い足はさながらモデルのようであり、それが支える引き締まりつつも大きめの尻や、豊かな胸に目が行ってしまったのは男のサガによるものだ。

だがそれらを抜きにしても、貴丈はきつと彼女に目を奪われたことだろう。彼女の顔には見覚えがあり、何より今後の人生においても忘れることはないだろう親友の顔と瓜二つなのだ。

「真希……？」

ぼそりと呟いた言葉は、きつと無意識によるものだろう。それほどまでに、ぶつかった女子生徒の顔立ちや身体つきが、真希に似ていたのだ。

そしてぶつかった女子生徒は最初こそ貴丈の顔立ち——正確には顔の左半分を覆う火傷跡——に面を食らってはいたものの、真希の名が出た途端に「はあ？」と不満を露わにし、彼を冷たく睨みながら腕を組んだ。

「あんな落ちこぼれと間違えないでくれる？ 私は——」

「あ？」

そして真希と間違われた女生徒が訂正を求めて名乗ろうとした直後、貴丈の口から地の底から響いてきたような低い声が漏れ、額には青筋が浮かんでいた。

それはそうだろう。初対面の相手と真希を間違えたのはこちらの咎だが、真希が馬鹿にされるような謂れはない。何より強さと優しさを併せ持つ彼女が、落ちこぼれの筈がないのだ。名乗ってもらう前に、そこは訂正してもらわねばならない。

貴丈が無意識に滲ませる威圧感をそのままに、口を開こうとした直後、

「どないしたん、真依ちゃん。何かものごつつい呪力を感じるんやけど」

真依の背後、廊下の向こうから第三者の声が聞こえてきた。声からして若く、どこか軽い調子を感じるそれは、本人は意図してないと思うが妙な不快感を感じる。

貴丈は誰だと怪訝な表情となり、対して真依と呼ばれた女子生徒は慌ててバツと振り向き、警戒心を露わにしていた。

「この感じ、真依ちゃんやないな。こんな呪力持つとるんなら、俺含めて家の者がほつとくわけあらへん。て、ことは——」

どこか、いや明確にこちらを下に見る声音でそんな事を言いながら廊下の向こうから姿を現したのは、和服の男性だった。年頃は五条と同じか少し下くらいだろうか。

吊り目が特徴的な整った顔立ちをした青年。髪は毛先は黒く、根元にかけて金色になっていることや、耳にピアスをしていることにも目がいくが、やはり気になるのは浮かべている薄ら笑いだろう。

相手を蔑み、自分よりも格下の雑魚としか見ていない、五条や夏油が纏っていた絶対強者の余裕とは違う嫌な雰囲気。

そんな第一印象は最悪とも言える青年は品定めするように貴丈を見つめると、顎に手をやりながら不敵な笑みを浮かべた。

「君が噂に聞く桐生くんか。初めまして、俺は禪院直哉なおやや。一応、禪院家次期当主なんやけど、真希ちゃんから、話聞いとらん？」

そうして人懐こい作られた笑みを浮かべながら挨拶をすると、貴丈の中での警戒心が最大まで高められた。

真希や五条から耳にタコができる程に言われた「御三家には気をつけろ」という言葉が脳裏を過り、目の前の男は中でもヤバいと噂の禪院家の次期当主とまで言ってみせたのだ、警戒しない方がおかしい。

彼の様子から良くも悪くも話されていることを察したのか、直哉は「聞いたるみたいやな」と頷くと、ちらりと怯えたように壁に寄りかかって縮こまっている真依に目を向けた。

「んで、真依ちゃん。桐生くんは無礼なことしとらんよな？呪力持つとる言うてもカスみたいなもんやし、姉の真希ちゃんと同じで落ちこぼれなんやから、俺らの邪魔だけはせえへんといてな」

——姉、だと……？

そして直哉が真依に告げた言葉に貴丈は眉を寄せ、ちらりと真依に目を向けた。

直哉の登場から先程まで帯びていた強気な雰囲気霧散し、さながら嵐が過ぎ去るのを待つ小動物のようになってしまっているが、その顔立ちにはやはり真希の面影を感じる。

真希に姉妹が——直哉の言葉からして妹がいるという話は聞いていなかったが、家族を失い、これから殺して回ることになる自分に遠慮していたのだろうか。

まあ、その話は東京に帰ってから聞くとして、それよりも聞き捨てならない言葉があった。誰の親友が落ちこぼれだ、コラ。

「ま、ええわ。細かい話はパパたちがするやろうし、こつちはこつちで好きにやらせてもらおうわ」

貴丈が冷たく睨んでいることに気付きもしない直哉は、下卑た視線を真依に向けると、悪戯を思いついた悪ガキを更に邪悪にしたような笑みを浮かべた。

「パパも兄さん方も、学長に新年の挨拶しとんねん。どうせ長話しとるやろうし、暇やから、俺の相手してや」

「え、あ……」

直哉の提案に真依は消えいりそうな声を漏らし、逃げるように僅かに後ろに下がるが、生憎と後ろは壁であり逃げることはできない。

呪術界御三家、禪院家において呪術師であることが大前提だ。術式がなくとも呪霊を視認でき、形は千差万別だろうが戦えることが、彼らにとっては当然のこと。それが出来ねば落ちこぼれであり、壮絶な差別の——黙認されるイジメの対象となる。

呪術師の家系でありながら呪霊が見えない真希が最もたる例だが、もう一つ差別の対象となるのが、女子であることだ。

一部例外的な存在はあれど男と比べて非力で、戦いには向かない身体つき。それでも戦場に立たんとする者は多いが、そんな彼女らに向けられる視線はいつも冷たいものだ。

女の呪術師に求められるのは『強さ』のみならず心技体、そして美

しさを待つ『完璧さ』だとは、誰が言った言葉であろうか。

そして、残念なことに真依はその『完璧』には程遠い。

呪術師を名乗ることをどうか許される程度の微弱な呪力。

呪霊との接近戦になれば、あっさりと不利となる脅力。

そんな彼女も様々な縁があり呪術高専京都校にいるわけだが、彼女が禪院家にいた頃の扱いは、それは酷いものであっただろう。

訓練や学問の時間にハブられるのはまだいい方で、やらなくてもいい仕事を延々とやらされることもあれば、不手際の責任を取らされたり、八つ当たりの標的にされたり。

そして、目の前の男——直哉はその中でも特に危険な人物だ。禪院家次期当主を自称し、それに否を言わせない高い実力を持つ彼は、禪院家の中でもそう言った選民思考とも言えるものにどつぷりと浸かっている。

『三歩後ろを歩けない女は背中を刺されて死ねばいい』などとのたまう程に男尊女卑の思考が強く、反論、抵抗しようものなら純粹な力と技によって振じ伏せられる。

そんな相手と、おそらくだが長時間二人きりになるのだ。何が起こっても不思議ではあるまい。

「な、ええやろ。こないなとこ歩き回るってことは、真依ちゃんも暇しとつたみたいやし。ほな、桐生くん、また」

故に真依は動くことができなかった。他の男や、見ず知らずのナンパであればあっさりと突っぱねただろうが、この男の恐ろしさを骨身に染みるまで刻まれた身体が、彼を怒らせるな、ただ耐えればそれでいいと警鐘を鳴らしている。

彼女の沈黙をいつも通りに了承と受け取った直哉や、浮かべた薄ら笑いをそのままに彼女に手を伸ばし、肩を掴もうとした瞬間だった。

横合いから伸びてきた手が直哉の腕を掴み、彼女に触れるのを止めたのだ。

「え……っ？」

「あ？」

真依と直哉は揃って声を漏らし、直哉の腕を掴んだ相手——瞳を赤

く輝かせ、見るからに不機嫌オーラ全開で直哉を睨む貴丈に目を向けた。

彼の放つ圧に真依は狼狽えるが、直哉は新しいおもちゃを貰った子供のように好戦的な笑みを浮かべ、彼を睨み返した。

「なんや、桐生くん。これから真依ちゃんも久しぶりに親族水入らずの時間を過ごそうと思っただんやけど」

直哉は人当たりのよさそうな作り物の笑顔を浮かべてそう言うが、貴丈は感情を感じさせない抑揚のない声で言う。

「言葉にはしてないですけど、見るからに嫌がつてるでしょう。少なくとも、家族に誘われてする表情じゃない」

ちらりと横目でいまだに自分が割って入った事に驚いている真依に目を向け、彼女を守るように今度は身体を二人の間に割り込ませ、彼女を背中に隠した。

その姿は、イジメられる妹を守る兄そのものだ。

理由はわからない。二人の間に何があったのかも知らない。だが、声も出さずに、けれど助けを求めるように震える相手を前にして、何もしない訳にはいかない。

家族と交わした約束が、正義の味方になつてという願いが、今の彼を突き動かしていた。

「一緒に遊ぼうと誘われたら、余程の相手でもなければくしゃつと嬉しそうに笑うものです。でも、真依さんはそんな顔しなかった。あなた、嫌われてますよ、自覚ないんですか？」

そして単刀直入に告げられた言葉と、煽りとも言える追加の一言に直哉は「あゝ？」とドスの効いた声を漏らしながら、額に青筋を浮かべた。

先程まで浮かべていた余裕そうな笑みから途端に真顔になり、瞳には隠すつもりもない強烈な怒気を滲ませる。

「初対面の相手への礼儀がなつとらんわ。こっちが下手に出てるって、調子乗つとるんとかやう？」

「……あの態度で下手に出てるつもりだったんですか？」

直哉が吐いた侮辱とも取れる言葉を軽く受け流し、ついでに更に

煽っておく。ビキリと音を立てて額の青筋が増えたのは、気のせいではあるまい。

「……もうええわ。やっぱいい子ちゃんぶるのは疲れるわ」

そしてもはや怒気を超えて殺意を滲ませ始めた直哉はそう言うのと、腕を掴む貴丈の手を払い、逆に彼の手首を掴み返した。

「真依ちゃんと遊んだならあかん言うなら、桐生くんが遊んでくれや」

直哉がそう告げた直後、貴丈の動きが止まった。

何だ、何が起きたと思考することはできる。だが、身体が一切動かないのだ。

そしてそれと同時に困惑する貴丈の視界から直哉が姿を消し、

「まずは一発目や!!」

その宣言と共に身体が動くようになった貴丈は、反射的に声がした方向——自分から見て左に顔を向けた瞬間、彼の顔面に直哉の拳が打ち据えられた。呪力による強化も乗っていたのかその威力は凄まじく、殴られた貴丈は勢いのままに窓をぶち破って中庭まで飛んでいき、ゴロゴロと地面を転がることになる。

——い、一体何が……っ!?

突然身体が動かなくなり、動けるようになったと思った途端に殴打とは、まさに正面から奇襲を受けたような状態だ。

先の一撃で噴き出してきた鼻血を乱暴に拭いながら立ち上がると、直哉は割れた窓ガラスを乗り越え、貴丈を殴った拳を見せつけるようにプラプラと振りながら好戦的な笑みを浮かべた。

「今謝るんなら、見逃したるけど?」

一見彼の慈悲を思わせる言葉ではあるが、その裏には自分は絶対に負けないという確固たる自信が見え隠れしており、どちらかと言えば「弱いお前と戦うなんて時間の無駄」とでも言いたげな雰囲気を出している。

だがそんな彼をハッと鼻で笑った貴丈は「冗談言うなよ」ともはや敬語を使うに値しないと決めたのか、タメ口でそう吐き捨てて構えをとった。

動きを封じる術式か、あるいは高速で動く術式。先程の行動から直

哉の術式がどちらか一方であるとあたりをつけるが、問題はそこであった。

——変身する隙は、くれないだろうな……。

術式を展開してビルドに変身するには、ベルトの取り出し、装着。ボトルの取り出し、装填。ベルトのレバーを一定数回転。生成された鎧の装着。という、言葉にすれば致命的なまでの隙がある程度の時間をかけて晒すことになる。直哉はそれを終えるまで一々待つてはくれないだろう。

なら、昔のようにフルボトルを活用しての肉弾戦をメインにするしかない。

ふーっと深く息を吐き、油断なく構える貴丈を見ながら、直哉はふと背後からの視線に気づいて割れた窓の方に目を向けた。

そこいら窓の影からこちらを覗き見る真依の姿があり、貴丈と直哉を交互に見つめている。

「そや、真依ちゃんはそのつちにいてな。勝手に動いたら、桐生くんより先にボコしたるから、気いつけや」

「ッ！」

そして中庭の手頃な——戦闘中でも見張りやすい位置の木陰を指差しながらそう言うのと、真依は迷うような素振りを見せるが、直哉が「はよせえ」と凄みながら急かすことで無理やり移動させる。

彼女が指定の木陰にたどり着くまでの数十秒の間、貴丈は動かなかった。何か下手を打てば真依に危険が及ぶ可能性がある。第一印象は割と最悪だが、真希の妹だというのなら、それだけで守る理由には十分だ。

真依が例の木陰に移動すると直哉は満足そうに笑うが、すぐに表情を引き締めて貴丈に視線を戻した。

「なんや。変な鎧を着て戦ういうから待つとんねんけど、着ないんか？」

「……っ！」

明らかかな挑発。だが、時間をくれると言うのなら先程の問題はクリアだ。

貴丈は文字通りのハンデを与えられた事実には眉を寄せるが、万全で挑めるのなら多少の恥は飲み込もうと決め、手元に発生させた煙からベルトを出現させ、腰に装着。

そのまま左右それぞれの手には赤と水色のフルボトルを取り出し、それを振って封じ込められた呪力を活性化させ、蓋を開けようとした直後だった。

「——はい、時間切れ」

直哉のそんな呟きが貴丈の耳に届き、直後、彼の視界に直哉の拳が迫っていた。

両手のフルボトルを持ち、振り回していた都合上防御も回避も間に合わず、直哉の拳が再び貴丈の顔面に突き刺さった。

快音を響かせながら殴り飛ばされた貴丈は再び地面を転がることになり、今度は立ち上がる素振りを見せずに突っ伏してしまった。

「なんや、つまらん。相手との力量差も知らんで喧嘩ふっかけんは——」

そして勝ちを確信して倒れる貴丈を煽ろうとした直後、違和感を感じて貴丈を殴った拳に目を向けた。

呪力で強化したというのに妙に痛む。異様に熱をもっているし、動かそうとすると激痛が走るのだ。

「……っ。なんや、これ」

その原因を探ろうと拳に目を向けた直後、直哉は困惑の表情を浮かべて狼狽えた。

無防備な貴丈を殴りつけた筈の拳が腫れ上がり、指の何本かも本来なら曲がってはいけない報告に曲がり、中の血管が切れたのか真っ青になっているのだ。

『《ダイヤモンド!》』

直後、頭の中に響いてくる異様に陽気な声。

真依にも聞こえているようで彼女は音源を探そうと辺りを見渡すが、中庭にはスピーカーの類は見当たらない。

まさかと直哉が貴丈に目を向けると彼はむくりと立ち上がり、見せつけるように右手を開いた。

そこに握られていたのは、水色のフルボトル——ダイヤモンドフルボトルだ。

「俺が何の備えもなくやると思ったか？」

そう吐き捨てながら不敵に笑った彼は、殴られた筈の顔を指で叩いた。

コツコツと硬い音がしたかと思えば、彼の顔を覆うようにダイヤモンドの防壁が姿を現す。

直哉に殴られる直前に、ダイヤモンドフルボトルの蓋だけを開けて殴られると判断した顔を保護。あとは拳で押される勢いのままに吹っ飛び、地面を転がっていただけだ。

チツと舌打ちしながら和服の袖を破き、砕けた拳に巻いて簡単なグローブを作った直哉を見つめながら、貴丈はダイヤモンドフルボトルをベルトに装填し、もう一つの赤いフルボトル——ラビットフルボトルの蓋を開けてベルトにセット。

『ラビット！ダイヤモンド！』

頭の中に響く音声に『ベストマッチ』の一言はない。あまりいい組み合わせではないようだ。

だが、直哉に警戒心を持たせるには十分だ。先程の受けることでのカウンターを警戒してか、手出しをしてこない。

貴丈はその隙にレバーを回転させ、ベルトの中を二つのフルボトルから抽出された呪力が満たしていく。

『Are you ready!?!』

それが最高潮まで高まった瞬間、ベルトから投げられる問いかけ。もう聞き馴染んだそれも、実際は常に覚悟を問うてくる割と残酷なものだ。

だが、その返答は決まって一つだけだ。

「——変身！」

そして高らかに叫んだ直後、貴丈の身体を赤と水色の鎧が包み込んだ。

貴丈からすれば使い慣れたラビット-halfボディと、夏油との戦い以来久しぶりとなるダイヤモンド-halfボディ。

ベストマッチではないため出力が不安なものだが、どうせタイマン勝負なのだ、勝とうが負けようが長期戦にはならないだろう。

ラビット-halfボディが放つ赤い光をダイヤモンド-halfボディが反射し、キラキラと赤い輝きを放つ姿は不気味なものだが、直哉は怯まない。

「面白い鎧やな。バラバラにしたる……ッ！」

彼は変わらず獰猛な笑みを浮かべながら、砕けた拳をそのままに構えを取る。

対するビルドは右腕、左足は軽やかな動きで、左腕、右足は重々しい動きで構えを取った。

直哉と貴丈^{ビルド}、二人の決闘が始まろうとしていた。

呪術高専京都校、中庭。

正月の静寂に包まれている筈のその場所で、ビルドと直哉は睨み合っていた。

ジリジリと摺り足で間合いを測るビルドとは対照的に、直哉は不敵な笑みを崩さない。先程の打撃の感触と拳の具合からして、下手な打撃ではこちらが怪我をしてしまう。

——やけど、俺のスピードにはついてこれへんやろ……？

最初、それこそビルドが変身する前。彼は直哉の速度についていけず、文字通り顔面に痛いのを喰らっている。それに、二発目も防御を固めただけでそれもギリギリ間に合っただけ。避けたり、カウンターを狙う余裕はない。

——なら、余裕や……ッ！

直哉のその判断はあながち間違いではない。彼の速度に反応できずに攻撃をもらい、その後もギリギリのタイミングで防御を固めることで、相手に殴らせて壊しただけのことだ。

それが彼の限界だと。貴丈の反射速度では、自分には触れることもできないと、直哉は判断した。

だがそれだけで判断を下していいほど、貴丈は、ビルドは簡単なものではない。

ニヤリと口角を吊り上げて笑う彼を睨みながら、ビルドはゆっくりと左足に重心を傾けた。

足首に装着されたホップスプリンガーが縮んでいき、最大まで力を溜めた状態で固定。

それと同時に、直哉は己の術式を発動した。

彼の術式——『投射呪法』。自らの視界を画角として一秒間の動きを二十四の瞬間に分割したイメージを予め頭の中で作り、その後それを実際に自身の体でトレースする術式だ。

しかし、それを行うには天性のものと言うべきコマ割りの才能が必須であり、それがあっても使いこなすにも相当な鍛錬も必要となる、

少々どころではない癖がある術式だ。

だがその分、ある程度の物理法則を無視した動きを可能となり、たったの一秒間による瞬間的な加速や、不可思議な軌道をしての肉薄など、初見では対応不可な戦闘を展開することができる。

事実、次の瞬間には直哉はビルドの視界から消えて背後に回り込み、無防備な背中に蹴りを入れようと身体を動かした。だがその後、今度は直哉の視界からビルドの姿が消えた。

直哉はぎよつと目を見開いても遅い。既に体勢を取ってしまった彼は蹴りを放つてしまい、その瞬間に脳天をダイヤモンドの鉄槌が打ち抜いた。

快音を響かせて彼の脳天を打ち抜いたのは、ビルドの右足の踵落としだ。

彼は直哉が動いた直後、ホップスプリングを炸裂させ、ちょうど死角になるが、迎撃するには高すぎない高度まで跳躍。直哉が蹴りを空振った直後、その隙を狩るための蹴りを見舞ったのだ。

呪力による強化を乗せられた、ダイヤモンドの硬度をもったあまりにも重すぎる一撃は、本来なら人の頭蓋を砕くには十分すぎる力があっただろう。

だが現実はそのようではなく、快音と共に地面に沈められた直哉は、額を流れる血をそのままに血走った目でぎろりとビルドを睨みつけた。トンと軽い音と共に着地したビルドは地面に倒れる直哉を見下ろしながら言う。

「お互い一発ずつ。止めるなら今しかねえけど」

「ぎけんなや！俺を見下ろすなっ！」

ビルドが一応の妥協点を設けてお互いに拳を引くように忠告するが、直哉は弾かれるようにそう告げ、倒れた状態からビルドに向けて足払いを放った。

直哉は「うお!？」と間の抜けた声と共に身体が宙に浮いたビルドを睨みながら投射呪法で一度距離を取り、額の血を乱暴に拭くと、再度投射呪法を使って地面に倒れる彼に肉薄。

立ち上がろうと地面についた手を更に払ってこかし、呪力の乗せた

スタンプをビルドの顔面に放つが、彼は素早く地面を転がることで回避。

「避けんなや!!」

そんなビルドに悪態をついた直哉は、地面を転がっていく彼を追いかけていき、踏み躪ることに固執しているように、何度も足を振り下ろした。

だが転がっていくだけでもそれなりに速いビルドを捉えきれず、ビキリと音を立てて額に青筋を浮かばせた直哉は、投射呪法によりビルドの行き先に回り込み、彼の顔面——左頬に蹴りを放った。

直後響くのは骨が砕ける乾いた音、なのだが、それはビルドの、つまり貴丈の頬から聞こえたものではない。

その音の主である直哉は骨が砕けた激痛に歯を食い縛り、「ぎっけんなや……ッ!」と悪態混じりに投射呪法によつて距離をあけた。

ビルドを蹴り抜いた右足の具合を確かめるように足首を回し、痛いだけで動きに支障はないことを確認。

対してすつと立ち上がったビルドは、直哉が蹴った左頬——ダイヤモンドハーフボディを撫で、仮面の下で不敵な笑みを浮かべた。

ダイヤモンドハーフボディの特徴はその名の通りの硬さだが、どうやら直哉のパワーではそれを越えることはできないようだ。

——まだ本気じゃねえ可能性もあるけど、とりあえずダイヤモンドの方は外さねえ方がいいな。

防御力は充分。速度も充分。だがパワーが足りない。いや、足りないのではなく、殺さないように加減するのなら、ラビットハーフボディのパワーでは戦闘不能に追い込まないというべきか。

だがラビットハーフボディを変えてしまえば、おそらく直哉の速度に反応出来なくなる。ここはダイヤモンドフルボトルを変え、被弾覚悟のカウンターを狙うべきか。

仮面の下、誰にも見えないことをいいことに困り顔を浮かべた貴丈だが、すぐに表情を引き締めて直哉を警戒。

当の直哉も僅かな仮面の動きでビルドが自分から意識を逸らしていたことに気づいたのか、額の青筋を増やしながら食い縛った歯を剥

き出しにし、ビルドを睨む。

「俺の前で考え事とは、ええ度胸やないか!!」

そして彼の油断を指摘しながら投射呪法を発動。一秒二十四フレームの動きでビルドに肉薄した彼は、殴るわけでもなくすれ違い様に彼の肩を叩いた。

直後、ビルドは動きを完全に止め、貴丈は『またこれか!』と動けない故に胸中で舌打ちを漏らした。

彼が完全に静止した時間は約一秒。

これもまた投射呪法の術式効果だ。本来なら術式発動と共に一秒間に二十四コマの動きを組み立てねばならないが、それに失敗した場合、動く筈だった次の一秒間、何もできない時間が発生する。

そしてそれを、相手に強いることができるのも投射呪法の強みだ。術式を発動しながら相手に触れれば、触れられた相手は直哉と同様に視界を画角として、一秒二十四コマ打ちをしなければならぬ。もちろん直哉の術式を知らない貴丈にそれができる訳もなく、結果的に一秒間の硬直のデメリットのみが反映される。

その隙に直哉は無防備な背中に蹴りを入れ、ビルドを吹き飛ばした。

身体が動くようになったと同時に吹き飛ばされたビルドは呻き声をあげ、真依の足元に転がり込む結果となった。

「いてて。どんな術式だよ、これ」

ビルドは蹴られた背中を摩りながら立ち上がり、顎に手をやって数瞬考える素振りを見せ、隣で面食らっている真依に視線を向けた。

「何かヒントない? こう、断片的でもいいから」

見るからにこちらを警戒する彼女に、身振り手振りを交えて助言を求めるが、彼女は口を噤んで何も言わない。

駄目かと肩を落とすビルドを嘲笑いながら、直哉は「当然やろ」と告げて真依に目を向けた。

「真依ちゃんは身内やけど、術式を教えるわけないやろ。弱いし、口軽そうやし、術式の種が漏れたら一大事や」

「……。家族を信じてねえのか」

「当然やん。パパはともかく、どいつもこいつも俺より弱い癖して威張り散らすし、次期当主は俺を差し置いて自分やって信じてる奴もおる。身内いうても敵なんよ。いつ殺し合うかもわからん相手に、術式の一から十まで教えるわけへん。特に、女なんて軽くくいじめてやれば、簡単に口割るし」

さも自分が禪院家最強だと、次期当主は自分になって当然だとう、異常なまでの傲慢さを滲み出しながら、直哉はそう告げた。

ちらりと真依に邪悪な気配を孕んだ視線を向ければ、彼女は額に冷や汗を流しながらぎゅつと自分の身体を抱きしめ、無意識の内に乱れ始める呼吸を落ち着かせようと努めるが、やはりそう上手くはいかないようだ。

だが、そんな彼女を守るように立ちはだかったビルドが直哉に言う。

「生憎、俺はお前が何を言ってるのかわかんねえ。けど、これだけは言える」

仮面の下で血のように赤く輝く瞳を細めながら、貴丈はベルトからダイヤモンドフルボトルを取り外し、タンクフルボトルを差し込んだ。

いつぞやに真希から聞いていた御三家の異常さ。あの時はまだ他人事で、真希の夢を応援すると決めてからは彼女が立ち向かう相手の大きさがいまいち理解できなかったが、ようやくその一端が見えた気がした。

そんな思慮の裏で流れるベストマッチの音声を適当に聞き流しながらレバーを回転。背後の真依に気遣ってか真横にタンクハーフボデイが生成されていき、左頬、右腕、左脚が形作られる。

家族を信じられない者への怒り。
家族を出世の道具か、邪魔者にしか思っていない目の前の男への怒り。

それら全てが呪力に変わり、彼の身体から濃密な呪力が滲み出る。

「——絶対にぶっ潰す。このクズ野郎が……ッ！」

『Are you ready?』

その宣言と同時に投げられた問いかけに、貴丈は一度深呼吸をした。

禪院家に喧嘩を売る覚悟。まず間違いなく、後ろの真依にも面倒をかける覚悟。そして、東京で頑張っている真希さえも巻き込む覚悟。自分だけではなく、他人も巻き込むことになるそれを、自分の独断で決めてしまっているのかと自問するが、真希はとつくに決めている筈だなと不敵に笑んだ。

だが後ろの真依はどうだろうかとふと疑問が浮かぶが、まあいいかと匙を投げた。

しばらく京都にいるのだ、その間は守ってやればいいし、その後の事は歌姫に任せればとりあえずいいだろう。

「――変身――」

そうと決まれば、彼は強い覇気がこもった声をあげて変身を宣言。それを合図にしてダイヤモンドハーフボディがタンクハーフボディと交換され、ビルドはラビットタンクフォームに変身を完了。

『鋼のムーンサルト！ラビット・タンク！！イエーイ！！』

状況と、貴丈の覚悟と表情とは裏腹に、底抜けに能天気な声が三人の頭の中に響いた。

ラビットハーフボディ、タンクハーフボディの接合部から蒸気が噴き出し、身体に隙間なく密着した。

ここからは賭けだ。殴り倒されるよりも早く、直哉を殴り倒す。術式の謎は多いが、すくなくとも何かしらの効果で『一秒間速くなるか、一秒間相手の動きを止める』というのは、何となくわかった。

種はわからないが、結果はわかったのだ。どうとでもなろう。

「――さあ、実験を始めようか……っ！――」

右手で砲撃する戦車を模した右複眼のアンテナを撫でながらそう告げて、同時に直哉に向けて駆け出した。

そして彼の言葉が余計に神経を逆撫でされた直哉は血管が破裂せんばかりに額の青筋を濃くすると、「ぎげんのも大概にせえ！」と怒鳴りつけた。

直後に彼は術式を発動。一秒間の超加速をもってビルドに肉薄し、

拳を振るわんとするが、その一秒足らずの間に、ビルドもラビット
ハーフボディに呪力を集中。

左頬、右腕、左脚が赤く光り始め、彼もまた超加速状態に移行。

直哉が加速の勢いのままに振るった拳を赤い軌跡を残す右腕で向
かって左側にそらし、高速の裏拳を直哉の顔面を打ち据えた。

パン！と快音が響かせながらのけぞった直哉は投射呪法で離脱を
図るが、それよりも速い膝蹴りが彼の腹部を捉え、身体をくの字に曲
げた瞬間にその顎を音よりも速い右ジャブが打ち抜く。

「くっつ!？」

その一撃の重さはたいした事はない。だがその異常なまでの速さ
が乗った拳は容易く直哉の脳を揺さぶり、彼は目を見開いたままがく
んと身体を傾け、膝をついた。

そこに追撃の蹴りが迫るが、直哉も意地を見せて今度こそ投射呪法
を発動し、離脱。

ビルドの蹴りが赤い軌跡を残しながら空を切り、投射呪法で背後に
回り込んだ直哉はその無防備な背中に掌底を叩き込み、鎧の内側に衝
撃を通した。

骨が軋む程の衝撃に「くっつ！」と小さく呻いたビルドは振り向き様
に手刀を振るうが、直哉はそれを逸らして先程のお返しと言わんばか
りの裏拳をビルドの顔面に叩き込み、ついでに肩に触れて投射呪法を
発動。

「くっつ」

映画のフィルムの中に閉じ込められるような形で動きを止めたビ
ルドの腹に渾身の正拳突きを叩き込み、身体をくの字に曲げた彼が吹
き飛ばよりも早く彼の頭を掴み、顔面に膝蹴りを一発。

身体を大きく仰け反らせたビルドだが、すぐに体勢を整えて目の前
で追撃せんとする直哉に牽制の左ジャブを放つ。

タンクハーフボディ故、その速度は遅く、直哉からすれば余裕で対
応できるものだ。

事実彼はそれを的確に受け流し、その接触の一瞬の隙に投射呪法を
発動。ビルドに一秒の静止^{フリーズ}を与え、顔面に蹴りを入れた。

蹴り飛ばされる勢いのままに地面を転がった彼はすぐさま立ち上がり、ラビットトーフボディに呪力を集中。

全身で加速状態に入りながら、左の複眼に多めの呪力を込めて嗅覚、聴覚をさらに強化。

それに気づかぬ直哉は投射呪法による加速で一気に肉薄し、彼の脇腹に拳を叩き込んだ瞬間、ぎよつと目を見開いた。

今までの貴丈の反応速度からして、反応できたとしても先ほどのように当て勘で発動を潰すか、あるいは防御を固めるかの二択。直哉はそう判断していたのだが、現実は違う。

赤い光を纏う右手が直哉の拳を掴んでおり、それに狼狽えたほんの一瞬の硬直の隙に直哉の腹に左拳を叩き込んだ。

それでも流石禪院家というべきか、直哉は腹に呪力を集めて防御力を底上げするが、その程度でタンクトーフボディのパワーを抑え切るのとは不可能だ。

凄まじい衝撃と、それに伴うダメージにごぼつと音を立てて血を吐き出した直哉は、あり得ないと言わんばかりにビルドを睨みつけた。

なぜ反応できたのか、なぜ自分の速度に着いてこられたのか、様々な疑問が浮かんでは消えていく。

対するビルドは冷静で、仮面の下で得意げな顔をしながら小さく笑みを浮かべた。

ラビットトーフボディによる嗅覚の強化により、あまり嗅ぎたくはないが直哉の体臭を追いかけ、聴覚の強化により身体が動く度に揺れる風の音や、直哉の息遣い、踏み込んだ拍子の地面と足の擦れる音、筋肉が伸縮し、骨が動く音を頼りに彼の動きを先読みし、防御を置いたに過ぎない。

そしてその結果として、捕まえたのなら作戦は成功だ。

彼は掴んだ直哉の拳から一瞬手を離し、手首を掴み直すと、再び右拳を直哉の腹に叩き込んだ。

ドゴツ！と鈍い音が中庭に響き渡り、文字通りビルドの拳が腹にめり込ませ、内臓を掻き回された直哉はさらに血を吐き出し、舌打ち混じりに投射呪法を発動し、ビルドに一秒の硬直を与えるが。

「いつ、離せや……っ！」

彼は動きを停止させたまま、直哉の手を離さずに彼の離脱を許さない。

直哉が焦ったようにビルドの顔面を蹴りつけるが、それと同時に硬直も終了。ビルドは無防備な状態のまま蹴られたというのに怯みもせず、直哉の顔面に拳を叩き込んだ。

だがその直後には再び投射呪法により動きを止められ、防御も何もできない状態で腹に拳を叩き込まれると、仮面の下でかふっ！と声を漏らして肺の空気を吐き出す。

だが、その程度でビルドは離れない。彼とて様々な修羅場を潜り、特級呪術師が放った特級呪具の一撃さえも当たっているのだ。あれに比べれば、直哉の拳など子供のそれと大差はない。

歯を食い縛って直哉の手首を握る手に骨を砕かんばかりの力を入れ、投射呪法で止められる前に拳を直哉の胸に叩き込む。

そこからは、まさにターン制のゲームを見ているようであった。

ビルドが殴り、直哉が止めてから殴り、ビルドが殴り返す。

二人がいる場所を中心に——殆どが直哉のものであるが——血飛沫で赤く染まり、その手の光景に慣れている筈の真依も引いてしまう程。

「いい加減、離れろやっ!!」

そして、整った顔を腫れや切り傷がぐちゃぐちゃにされた直哉は激昂の声をあげ、ビルドの顔面に拳を叩きつけた瞬間、それは起こった。

拳のインパクトの瞬間と、拳を強化する呪力の流れ。その誤差0.000001秒以内のまぐれが、この瞬間に起こったのだ。

それを直哉自身も自覚しておらず、ビルドもまず起こらないだろうと無警戒だったもの。

——黒き稲妻が直哉の拳から迸り、今までビクともしなかったビルドを、容易く吹き飛ばしたのだ。

「……あ？」

その事態に思わず声を漏らした直哉は、吹き飛んだ地面を転がるビルドと、彼を殴り飛ばした己の拳を見つめ、すぐに確信的な笑みを浮

かべた。

黒閃。これこそが黒閃だ。ようやく出すことができた、ようやく更なる一步を踏み出せた。

己の身に起きたことを自覚した途端、全身の呪力の流れをごく自然に認識し、凄まじいまでの全能感と多幸感に包まれた。

「ははっ！ええな、ええなあ!!堪んないわ、この感じ……ッ!!」

両腕を大きく広げ、夕焼けの色に染まった空を見上げながら、余裕を取り戻した直哉はテンションをあげながらニヤリと笑った。

ううと苦しげに呻きながら立ち上がったビルドを見つめ、即投射呪法により接近。

先程までとは段違いの速度に面を食らうビルドは碌な反応もできず、次の瞬間には視認もできない速度で腹を打ち抜かれ、仮面の下でごぼりと血を吐き出した。

膝から崩れるよりも速く動いた直哉はビルドの背に両手を組んだ鉄槌を落として地面に這わせると、その背中に今度こそとスタンプを叩き込み、彼を踏み躪った。

「もう負ける気がせえへんわ……!!いい加減、負けを認めたらどうや？」

そうして煽り根性全開で告げた言葉にビルドは返す余裕もなく、一瞬の閃光と共に変身が解除され、血まみれの貴丈が姿を現した。

「もう鎧も着てられんのかいな。じゃ、俺の勝——」

自分の勝利を宣言し、上機嫌のまま真依に視線を向けようとした瞬間、貴丈が勢いよく立ち上がり、直哉を退かして地面を転がっていく。

それを冷たく見送った直哉は鼻を鳴らして「まだやんの？」と貴丈に問うと、彼は赤く輝く瞳で直哉を睨みつけ、ふーっと深く息を吐く。

頭だけではなく全身くまなく痛い、それは相手も同じこと。黒閃後のゾーン状態なことに加え、それに伴う大量のアドレナリン分泌で痛みを感じていないだけ。時間が経てばそのうち動けなくなる——
筈。

——それまで立つてられる自信ねえけどな……っ！

がくがくと震える膝を叩いて喝を入れ、拳を構えて身構える。

痛いものには慣れてる。それを抱えて戦うのにも慣れてる。なら問題は無い。

だが、意地だけでどうにかなる状況ではないことも確かだ。

変身なしで直哉の速度についていける自信はないが、やりようならある。

いや、正確にはそれすらも賭けではあるのだが。

貴丈はゆつくりと右足を引いて腰を捻り、右拳にありつただけの呪力を集めていく。

対する直哉も最後の抵抗——それこそ一矢報いるためだけに立っていることを察し、小さく舌打ちを漏らした。

こちらを睨んでくる瞳、敵意を剥き出しにして、勝ちを諦めていない生意気な瞳。満身創痍で立つ彼の姿に、直哉は無意識の内に真希の姿を重ねていた。

術式どころか呪力を持たず、稽古と称して何度ボロボロになるまで打ちのめそうだが、こちらを睨むことだけは辞めなかった、思い出すだけでも腸が煮えくりかえる感覚。

「上等や。ぶっ殺したる……ッ！」

直哉は血走る瞳に殺意を宿しながらそう告げ、術式を発動しようとした瞬間、ぞわりと背筋に冷たい感覚が駆け抜けた。

貴丈は構えを変えていない。だが纏う雰囲気が変わったのだ。

今までは彼の怒りを表すように揺れていた呪力が突然凪いだかと思えば、瞳の赤みが増していき、その瞳孔が蛇のそのように縦に裂けている——ような錯覚を覚えた。

拳を構える彼の背に大蛇が現れ、同じく赤い瞳でこちらを睨んでくる幻覚さえも見え始めた直哉は己を鼓舞するように貴丈を鼻で笑い、「雑魚が、寝とけやつ!!」と息巻いて投射呪法を発動。

一秒二十四コマの動きで貴丈の右隣に近づき、拳を振るわんとした瞬間、貴丈は素早くそちらに振り向いて拳を合わせるが、

「見え見えや、馬鹿が!!」

直哉はその拳を掻い潜り、貴丈の肩を叩いて投射呪法を発動。

彼は再び加速状態に入り、動けなくなつた貴丈の顔面を砕いてやる

うと蹴りを放った瞬間、貴丈の姿が消えた。

「ああ、っ!？」

それに困惑の声をあげたのは、仕方があるまい。

今まで攻撃への反応はともかく、術式による硬直への対応は何もできていなかったのだ。それがここにきていきなり対応するなど、予想できまい。

ザッ!と地面が擦れる音がしたのは、直哉の背後。彼がぎよつと目を見開いて振り向いても、時すでに遅し。

直哉の投射呪法に対し、完璧に対応してしまうほどの完全なる集中状態。

怒りはいい。だがそれが技の精彩を失わせるのなら、それは一旦捨て去ってしまう精神力。

「二秒間に二十四回。頭の中で動きを細切れにして、それを自分にトレースさせる。面白い術式だな、禪院直哉」

貴丈は直哉が振り向いた直後、彼は静かにそう告げて手加減なしの拳を彼の顔面に叩き込んだ。

ぐちゃりと肉が潰れ、骨が碎ける音が響いたのと同様、彼の拳から裏庭を駆け巡る黒い稲妻が発生し、木陰で見ている真依も思わず悲鳴をあげるほどの衝撃波が中庭に面する窓の大半を叩き割り、直哉の身体が宙を舞った。

「――黒閃……っ!いいねえ、力が漲ってくるこの感じ……ツ!!!」

どさりと音を立てて倒れた直哉を一瞥し、格好つけて黒閃の成功宣言した貴丈は黒い呪力の残滓が纏わりつく拳を見つめ、得意げに笑った。

ここぞという時に出るのはいいが、不意に出てくるのは勘弁願いたいと思いつつ、ふらふらと立ち上がる直哉を睨んだ。

顔半分が見事に腫れ上がり、痛々しいを通り越してエグい事になっているが、それでも貴丈を睨んでくる瞳から闘志は消えていない。

まだやる気かよと肩を竦めた貴丈は黒閃の残滓を腰に巻き付けてベルトを生成すると、ラビットフルボトルとタンクフルボトルをセット。

諸々の音声を聞き飛ばすとレバーを回し、ボトルに込められた呪力を活性化させ、彼の前後にタンクハーフボディとラビットハーフボディをそれぞれ生成。

『Are you ready?』

その掛け声と共に両手を胸の前で交差させ、ゆったりとした動作で前に突き出す。

「変身」

普段のそれとは違い静かに、けれど今まで以上に力強く告げられた宣言と共に、生成されたハーフボディが貴丈の身体に密着。

噴き出す蒸気を切り裂きながら、右手で戦車の砲塔を模したアンテナを撫でた。

「まだやるだろう？お互い、やり足りねえよなあ……っ！」

そして貴丈にしては珍しく好戦的な笑みを浮かべながらそう告げて、素早く構えを取った。

対する直哉もペツと口に溜まった血を吐き、構えた。

お互いに満身創痍。だが黒閃後の全能感と、根本的な呪力操作の強化。アスリートでいう所のゾーン状態に入った二人は、普段の120%の実力を発揮し――、

「そこまでじゃ!!」

二人が動き出そうとした直後、第三者の声が裏庭に響いた。

何事だと相手を警戒しながらもそちらに目を向けた貴丈と直哉は、そこにいる二人の人物に目を見開いた。

一人は禿頭で耳、鼻、口にピアスをつけ、白い顎髭と眉毛を伸ばし、着物を着た、物々しい雰囲気たたえる老人。今の声は彼のものだろう。

もう一人も老人ではあるが、どこか気の抜けた雰囲気纏う筋骨隆々の男。棘のように鋭い髭が特徴といえるが、酒瓶を片手にしているあたり、酒好きなのだろう。

「なんや、学長にパパまで。邪魔すんなや!!」

直哉がそんな二人に噛み付いた直後、はあと酒臭い息を吐いたのは酒瓶を持っていた老人だ。

彼は直哉、ビルド、真依を見ると、小さく溜め息を吐いて直哉に告げた。

「帰るぞ、直哉。もう暇つぶしは済んだらう?」

ペタペタと草履が地面を蹴る音と共に歩み出した老人は、未だに構えを解かない二人に睨み、厳格な雰囲気を醸し出しながら告げた。

「この勝負、禪院家当主——禪院直毘人なびとが預かる! 双方拳を下ろせ!!」
「っ!」

彼の発した言葉に二人は面を喰らい、思わず相手と顔を合わせてしまいが、やはりというべきか構えを解くつもりはないらしい。

そんな二人の様子に再び溜め息を吐いた直毘人は、直哉と同じ術式——『投射呪法』を発動し、直哉に肉薄。

あまりの速度に反応が遅れた彼の頭に拳骨をお見舞いし、鈍い音が辺りに木霊した。

直後、ついに限界を迎えたのか、直哉が白眼を剥きながら崩れ落ちる。

マジかと倒れた直哉と、彼を倒した直毘人を見ていたビルドだが、不意に彼がこちらに振り向き、「まだやるか?」と問うてきたのを合図に構えを解いた。

ベルトからボトルを取り外して変身を解除し、ボロボロの身体を外気に晒した。

「この餓鬼が面倒をかけたな。だが一つ聞かせてくれ、桐生貴丈」

そんな彼に直毘人が問いを投げかけると、貴丈は「なんですか?」と痛む頭を押さえながら聞き返す。

「なに、こいつが無礼なのは百も承知だが、それで殺し合いにまで発展した理由を知っておきたくてな。殴り倒してそれでしまいだらうに」

「……別に、こいつが気に入らなかつただけですよ」
「それで、気に入らなかつた理由は?」

随分とずけずけと踏み込んでくるなど多少の警戒心を露わにしなから、ここで嘘をつくのもそれはそれで面倒になりそうだなと思慮した彼は、溜め息を吐いてから直毘人に返した。

「そいつは俺の親友を——真希を、そしてあいつの妹の真依さんを侮

辱した。それだけですよ」

赤く染まった瞳がゆつくりと黒く戻っていく中で、彼は淡々とした
声でそう告げた。

その返答に満足したのか、あるいは小馬鹿にしているのか、小さく
鼻で笑った直毘人は遅れて駆けつけた直哉の兄たちに「こいつを運ん
でやれ」と指示を出し、嫌々ながらもそれに頷く子供たちを一瞥。

そのまま直哉を引き連れて裏庭を後にしようとした直毘人は、「ま
た会おう、桐生貴丈」と告げて出て行くが、貴丈はその背中に邪悪な
雰囲気を感じた笑みを浮かべながら、小さくこう告げた。

「——チャオ、禪院直毘人」

「それで桐生貴丈よ」

そのまま立ち尽くす真依の方に歩み出した直後、その背中に強烈な
怒気が込められた声が投げられた。

ビクリと肩を跳ねさせて驚きを露わにした貴丈はゆつくりと振り
向くと、そこには憤怒の表情を浮かべる禿頭の老人——呪術高専京都
校校長、がくがんじよしのぶ楽巖寺嘉伸の顔が目の前にあった。

一応、任務前に挨拶に行つたのと、五条から説明されていたからま
だわかるが、ほぼ初対面の相手との距離感ではあるまい。

「楽巖寺学長!? これは、その……」

「修繕代は後で請求する。早う片付けぬか!!」

「はいっ! すんません!!」

しゅび! と勢いよく敬礼で返した貴丈は走り出し、途中で真依の手
を取って裏庭を横断。

「ちよ、ちよつと……っ」

「いいから手伝ってくれよ。一応は当事者なんだし」

「私は——」

勝手に共犯に仕立て上げようとする彼の態度に苦言を呈しようし
た真依だが、不意に自分の手を掴む彼の手に目を向け、小さく驚きを
露わにした。

何度も直哉を殴つたその手には血が滲み、内出血のせいなのか色が
紫色に染まり、腫れていることも相まって大変なことになっている。

「あんだ、何でこんなことしたのよ」

ぼそりと呟いた言葉は、無意識のものであった。

彼女自身も自分の口から出た言葉に驚いているのか、慌てた様子で口に手を当てているが、貴丈は構うことなく笑みを浮かべ、真依を真っ直ぐに見つめながら告げた。

「困ってる人を見たら助けずにはいられない性分なんだよ。仕方ねえだろ」

そう言った彼はくしゃりと無邪気な笑みを浮かべ、「さっさと片付けようぜ」と彼女の手を離さない。

その手の温もりや力強さに、思わず姉の姿を重ねてしまった真依は小さく舌打ちを漏らすと、床に点々と残る赤い跡——貴丈から垂れている血痕に気付き、溜め息をひとつ。

「まずは止血でしょ。床が汚れてるわ」

「……。そうだな」

彼女の指摘に今更になってハツとした貴丈は乱暴に額を拭い、べつたりと血がついたそれをうへえと気持ち悪そうに眺めた。

「……洗い物増やしてどうするのよ」

そんな彼の行動に真依は溜め息混じりに額を押さええると、彼の手を引いて医務室を指指して歩き出した。

手を引かれる彼は「うおお」と気の抜けた声を漏らし、彼女に引かれるがまま歩みを進めた。

「よくあいつの術式、わかったわね」

隠そうとはしているが、足や手を庇うような動作をする彼を気遣ってか、何か話題を探していた真依がそう問うと、貴丈はこてんと首を傾げて「よくわかんねえ」と返して苦笑した。

「黒閃を受けてから、なんか記憶が曖昧なんだよな……。なんか変なこと言ったなかったか？」

そしてははと乾いた笑みをこぼしながらの言葉に、真依は「ええ、別に」と返して口を閉じた。

普段の彼を知らない真依は気付かない。直哉との戦いの終盤、貴丈ならまずしない言動が多く見られたことに、気づけない。

そして貴丈の心の奥底で、ご機嫌そうに嗤う蛇の存在に、貴丈自身も気付いてはいなかった。

呪術高専京都校、医務室。

本来なら呪いに関しての知識がある医者がか在中し、怪我人に備えてある筈なのだが、生憎と正月だからか肝心の医者がいらない。

入室早々にそれに気づいた真依は溜め息を吐くが、連れてきたのは自分だからと後ろで律儀に待っている貴丈に「入んなさい」と声をかけた。

「お邪魔します……。つても、誰もいねえか」

念のためと挨拶をしながら入室した彼だが、真依は柵から消毒液や包帯などを取り出し始める。

「そこ、座って」

「おう」

彼女からの指示に垂れてくる血を拭いながら返事をした貴丈が言われるがまま着席すると、真依は彼と対面するように椅子を運び、そちらに腰を下ろした。

禪院家でやらされていたのか、手慣れた様子で貴丈の額の血を拭いながらガーゼに消毒液を染み込ませていく。

「染みるわよ」

「ん……」

念のためと告げられた言葉に貴丈が気の抜けた返事をする、彼女は何の躊躇もなく消毒液を滲ませたガーゼを額の傷口に押し付けた。

声もなく悲鳴をあげ、身体を強張らせる貴丈に「我慢なさい」と淡々と告げる真依だが、彼が僅かに涙目になっている事に気づいてのか、僅かに手付きが優しくなる。

額から垂れて顔を汚していた血を拭ってやりながら、髪の毛を巻き込まないように注意しつつ包帯を巻くのだが、巻いたそばから赤く染まるのだから彼女も困ってしまう。

表情には出さずとも困っていることが伝わったのか、貴丈は苦笑混じりに「反転術式が使えれば楽なんだけどな」と呟き、自分の治療をしてきている真依の真剣な顔に目を向けた。

眼鏡こそかけていないが、真希と瓜二つの顔立ちは二人が姉妹であること、そしておそらくだが双子であることの証明だろう。

だが、直哉のせいで流してしまったものの、彼女が真希に対してあまり良い印象を抱いていないことも、おそらく事実。

痛いほどの静寂が支配する医務室に、貴丈と真依の呼吸の音と、包帯がキツく巻かれる音だけが聞こえる中、不意に貴丈が真依に問いかけた。

「……真希と、あんまり仲良くねえのか？」

「……っ。それを聞いてどうすんの、さっきのあいつみたいに殴るわけ？」

彼の問いかけに真依はほんの一瞬狼狽える様子を見せたが、すぐに気丈に振る舞いながら彼に問いを返した。万が一にも「ああ」と返されれば最後、自分は碌な抵抗もできずに叩きのめされることだろう。

脳裏に蘇る、不条理とも言える禪院家での扱いと、それに伴う強烈なまでの恐怖心に当てられてか、僅かに身体が竦んでしまう。

だが貴丈は気にした様子もなく「するわけねえだろ」と疲労が滲む声で言うと、じつと真依を見つめながら告げた。

「ただ気になったただけだ。真希も、俺に気を遣ってんのかあんまり家族の話題出さねえから。恥ずかしい話だけど、あいつに妹がいんのもさつき知ったし」

ポリポリと頬を掻き、拭いきれずに肌に貼りついた血を剥がしながら笑った彼は、何だかんだで治療を続けてくれている真依を見やり、言葉は悪いが相手を気遣う優しさがあるという、真希との共通点を見つけて小さく苦笑。

「なに笑ってんのよ」と気味悪がる真依に言葉だけの謝罪をしながら、改めて彼女に問うた。

「——で、真希のこと嫌いなのか？」

「……ええ。嫌いよ」

僅かに俯き、表情に影を落としながらそう告げた真依に、貴丈はふむと小さく唸りながら目を細めた。

何故かはわからないが、真依は真希を嫌っている。真希の方も妹が

いるなんてことを欠片も話題に出さない。側から見れば姉妹仲が悪いように見えるのだが、先ほどの言葉が本心なのか、貴丈は僅かに疑った。

確かに彼女は真希のことを落ちこぼれと称していたが、あの時の言葉は単純な蔑みよりもどこか怒りを露わにしていたようにも感じられる。

——何か、裏があんのか？

あの禪院家で、呪力を持たない姉を持つ妹だ。二人がどんな扱いだったのかは、考えるまでもない。

二人の仲を拗らせる何かがあり、結果的に真希は東京に、真依は京都に別れることになったと考えられるのでは、貴丈はそう推察するが、答えを聞ける雰囲気でもないので一旦黙る選択を取った。

先程まで話していたのに突然黙ったからか、あるいはじつと見つめてくる彼の視線に耐えかねてか、今度は真依が問うた。

「そういうあんたはどうなのよ。真希のこと、好きなの？」

「……それはlike、それともloveって意味か？」

そんな彼女の問いに貴丈が戯けた様子で返すと、真依は無言で彼の包帯を今日一番の力を込めて締め上げ始めた。

突然額を駆け抜けた激痛に悲鳴をあげる貴丈を他所に、真依は「ふざけないで」と苦言を一つ。

「私は真剣に聞いているのよ。まじめに答えなさい」

「……お前は真希が好きなのか、嫌いなのか、どっちなんだよ？」

「黙りなさいっ！」

「いだだだだだッ!!」

養豚場の豚を見るが如く冷たく見下ろしてくる真依の視線に狼狽える様子もなく切り返すと、彼女は額に青筋を浮かべながら更に締め上げ、貴丈は更なる激痛に悲鳴をあげた。

ペチペチと包帯を締める手を叩かれたのを合図に力を緩めれば、観念したように両手をあげた貴丈は「別に変な感情は持ってねえ」と言うが、すぐに「けど」と言葉が続けた。

「同じ呪術師としては、信頼してる。あいつに助けられたのも一度や

二度じやねえし、その逆も然りだし。それに尊敬もしてる。俺が前を向けたのは、あいつのおかげだ」

照れ臭そうに目を背けながら、真希に対する感情——信頼と尊敬を口にした彼は、真依から向けられるとんでもなく冷たい視線に気づき、何か間違えただろうかと首を傾げた。一応自分が思うことをそのまま口にしただけなのだが……。

「そう。あの真希を、ね」

どこか切なそうな、けれどどこか嬉しそうな声音で呟いた声に、貴丈は一つ確信を得た。

——こいつ、言うほど真希のこと嫌いじゃねえな。

口では嫌いだの落ちこぼれだのと言っているが、彼女も彼女なりに真希を気遣い、心配しているのだろう。

すつと目を細め、僅かに怪訝な表情を見せる貴丈だが、そんな彼に真依が告げた。

「気を付けなさい。真希は嘘を言う時もあるから」

「そうなのか？あんまり嘘言われた記憶ねえんだけど」

そして実際に覚えがあると云わんばかりの、やって当然といえ確信と共に告げられた言葉に、貴丈は首を傾げる。真希にボコボコにされた記憶はあれど、嘘を言われた記憶はない。コーヒーの件も、他の皆の口に合わないだけの筈だ。

「昔、なんかあったのか？」

そんな真希が、良くも悪くも裏表のないあいつが、嘘を言う訳がないと謎の自信に満ちた声音でそう問うと、真依は僅かに鬱陶しそうにしながら「あんたに言う義理はないわ」と一蹴。

「いや、そうだけどさ。気になるには気になるだろう？」

「話すつもりはないわ。はい、これで終わり」

それでも食い付かんとしてくる貴丈の言葉を退けながら、ようやつと止血と包帯を巻き終えた真依はそう言うと、今度はボロボロになっている彼の拳に目を向けた。内出血だの骨折だのは、素人のそれどうにかなるものではない。

別に悪気がないわけではないのだが、軽く触れてやれば彼は痛み

表情を歪め、触れられた手も小刻みに震えている。

「あ、あんまり触んな……っ」

腫れ上がった手を触診しているという建前で触りまくっていた真依に軽く怒鳴ると、彼女は悪びれた様子もなく手を離し、消え入りそうな声で呟いた。

「あんだ、怖くないの？」

「あ？悪い、もう一回言ってくれ」

そしてその言葉は本来発するつもりはなかったのか、貴丈が聞き返すと真依はハツとして口を噤むが、今更何でもないと言える雰囲気ではないことを察してか、溜め息を吐いてから彼に告げた。

「こんなになるまで戦って、怖くないの……？」

下らないことを聞く自分を恥じるように、苦虫を噛み潰したような表情でそう問いかけてきた真依に、貴丈は「怖いに決まってんだろ」とさも当然のように告げ、そして顔の火傷の痕を撫でた。

「毎回痛い思いするし、顔もこんなになるし、手もそうだけど足もすげえことになってるし、何なら腹に風穴開いたこともあるし……」

あははと乾いた笑みを浮かべた彼は、真つ直ぐな瞳で真依を見つめながら告げた。

「でも、俺にしかできねえことがある。俺が、やらなきゃいけねえことがある」

決して譲れないものがあると、鬼気迫るほどの覚悟を持って放たれた言葉に面を喰らう真依に、貴丈は更に言葉を続けた。

「さっさと死刑を受け入れて死んじまえば、上の連中も、多分俺も肩の荷が降りて楽にはなれたと思う」

過去の自分を自嘲しながらそう告げた彼は「でもな」と続けると一転清々しいまでの笑みを浮かべ、得意げに言う。

「そんなの俺らしくねえ。何回ぶつ倒れようが立ち上がって、血まみれになりながら誰かを護るためにこの力を使う。それが俺なんだよ。父さんや母さんが、弟妹たちが大好きだった、自意識過剰な正義のヒーローになりてえんだ」

子供みたいだと今度は照れ隠しのために笑い始める彼を見つめ

ながら真依はそつと自分の胸に手を当てた。

自分が呪術高専に来たのは、言ってしまったえば真希のせいだ。

彼女が『禪院家の当主になる』と宣言し、家を飛び出したのと同様に、有無を言わずにここに放り込まれた。

落ちこぼれと言われている真希が頑張るほど、禪院家の連中は妹である真依にはそれ以上を求め、時には苛烈な任務に向かわされることもある。

真依自身は禪院家での不当な扱いも、一部を目を瞑れば我慢することはできた。ただ周りを怒らせないように振る舞い、適当に雑用をこなす、それだけでとりあえず死ぬまで生活することはできた筈なのだ。そして、そこには姉もいて欲しかった。

そんな姉が禪院家に喧嘩を売り、家を出ていったのだ。姉妹なのだからいつも一緒にいると、約束したにも関わらず。

それが今の真希嫌いに繋がる切っ掛けになるのだが、それは彼女だけが知っていればいいことだ。

そして真依の目には、今の貴丈が酷く眩しいものに見えていた。

自分と同じ恐怖心を抱いている。ある種の諦観も抱いている。だがそれらから目を逸らさず、前を向こうとしている。

自分なんかとは違う、真希のことを信頼していると言っていたが、きつと真希からも信頼されているのだろう。

あの自分勝手な姉は、東京で勝手に心を通わせる友人たちを見つけたのだ。

「そう……」とどこか隠しきれない哀しさを滲ませながら彼女が言うと、貴丈は余っていた包帯を痣だらけの拳に巻きつけ、腫れの酷い場所が直接他の場所に当たらないように保護。掃除をする分にはこれで問題あるまい。

ぎこちないながらに拳の開閉を繰り返す貴丈は、ちらりと真依の顔色を伺うと、何を思っただか彼女の頭にそつと手を置き、撫で始めた。

「な、なによ……」

突然の奇行を行った彼の手を払いながら真依が問うと、貴丈は小さく肩を竦めながら言う。

「何か今にも泣きそうな顔をしてたから、元気つけてやろうと、な？」
「別に泣きそうにはなつてないわ」

「自覚なしとは、これは重症だな」

そして彼女の強がりとも言える言葉を冷静に切り捨て、彼女の手を引いて立ち上がった。

ちよつとと不満を口にする彼女を他所に、貴丈は笑いながら言う。

「さつきと片付けようぜ。話はその後——」

二カツと歯を見せるように笑いながら掃除に行く為に医務室を出ようとした瞬間だった、少々荒っぽい音を立てて扉が開いたかと思えば、

「桐生くん。何をしていますか？いえ、違いますね。何をしたのですか？」

眉間に見たこともない程に皺を寄せ、額に青筋を浮かび上がらせた七海が、見下ろしてきていた。

「ぴ」と怯える小動物のような情けのない声を漏らした貴丈だが、それでも真依を庇うように背に隠すあたり、自分だけが矢面に立つつもりなのだろう。

そんな彼の様子に小さく息を吐いた七海は眼鏡の位置を直すと、
「少し、お話ししましょうか」と淡々とした声で告げた。

「……っ」

怯えた表情のままこくこくと何度も頷くその様子は、はつきり言つてあの禪院家に喧嘩を売り、当主の息子である直哉を相手にしていた人物とはとても思えない。さながら父親に悪戯が見つかった悪ガキのようだ。

彼の後ろで少しでも彼を認めようとした自分を恥じる真依を他所に貴丈はそつと真依の手を離し、彼女に向けて肩越しに苦笑した。

「悪いな、真依。俺は七海さんと話があるから、また今度な。掃除は俺がやつとくから、気にすんな」

そして自分にしか損がないというのに申し訳なさそうに言った彼は、七海とどこで話すのかを話し合い始めるが、真依はそんな彼に嫌味の一つでも言おうとするのだが、出かけた言葉を飲み込んで溜め息

を吐いた。

そもそもとして騒動の原因は自分なのだし、決闘から後処理までを彼に一任するというのも、少々居心地が悪い。

「部屋で待つてるわ。話が終わったら声かけなさい、手伝うから」

「……いいのか？」

「何か悪い？」

「いいや、別に」

気を遣って言っただけの言葉に、貴丈は僅かに驚きながらも聞き返し、真依の返答を受けてどこか嬉しそうに笑った。

そんな彼の笑顔と、途端に照れたように顔を背ける真依を見た七海は眼鏡の下で目を細めた。

二人の言動は年相応、初々しさも感じて微笑ましいのだが、貴丈はただですら傷だらけの身体に生傷を増やし、応急手当での包帯で額や拳がぐるぐる巻きになっている。

五条から頼むと言われた手前、来た時と同じ状態で帰すことを目的としていたのだが、合流一日目にして失敗に終わると思うまい。

五条から、自分のことを棚に上げてあれこれ言われそうだなと眉を寄せた彼は、小さく溜め息を吐く。

その溜め息を待たせたことへの怒気と判断したのか、貴丈が反射的に謝るのだが、七海は「気にしないでください」と子供を宥めるような声で言うのだが、やはりと言うべきか気を遣われたと判断した貴丈がみるみるうちにしよげていく。

——意外と繊細、というか面倒なやつなのね。

真依の中で、彼の評価が二転三転を繰り返していた。

京都某所。禪院家の屋敷。

禪院家当主、直毘人は酒を呷りながら呪術高専で見ることになった貴丈の術式に関して考えていた。

学長やその他関係者とそれなりに楽しく酒を飲み交わしていたというのに、突如として背筋を震わせたとてもない呪力の濁流と殺

気。

二日酔いを覚悟で飲んでいたというのに、一瞬で酔いが覚めることになったあれは、生半可な術師が出せるものではない。

そして自分の術式を継いだ息子——直哉との決闘。遠巻きに眺めていただけだが、おそらくあれが全力ではあるまい。話ではかの百鬼夜行の際、乙骨と共に特級呪詛師、夏油を撃破したというし、特級過呪怨霊『里香』とも張り合える出力を誇るといふ。そんな相手に、直哉では逆立ちしても勝てない。

だが、結果だけ見れば引き分け。直哉は殺すつもりであつたらうが、貴丈はあくまで撃退を念頭に置いた勝負に対する前提の差が、その結果を生んだのだろう。

「だが直哉が黒閃を出したのは重畳。あいつにも少しは学びがあつたか」

格上との戦闘というのは、成長する上で手っ取り早い方法の一つだ。貴丈とて五条と訓練をしているだろうし、おそらく真希もまた五条や彼を相手に訓練を積んでいる筈。

自分に啖呵を切っていた彼女の姿を思い出した直毘人が小さく笑みを浮かべ、僅かにご機嫌そうに再び酒を呷ると、勢いよく部屋を仕切る襖が開き、そこから腰に刀を帯びた細身の男——禪院扇せんと筋骨隆々の大柄の男——禪院甚壺しんいちが現れた。

細身の男が二人が入室したにも関わらず酒を呷っている直毘人を睨むが、すぐに咳払いをして「当主、話が」と話題を切り出した。

「わかっている。どうして直哉が怪我をして帰ってきたのか、呪術高専で何があつたのか、だろうか？」

そして二人が訪ねてくるのを見据えていた直毘人が先んじて口にする、扇は何かを言おうとしていた口を閉じ、甚壺も無言で頷いた。「まあ、座れ」と立ち話もなんだと二人に着席を指示すると、二人は下座に腰を降ろし、上座に座る直毘人を見やる。

「単刀直入に言えば、噂の男——桐生貴丈と一戦交えた。その結果が、あれだ」

「……っ！また先走りにおつて、あいつの悪い癖だ」

彼の言葉に甚毒は隠すつもりもなく直哉を侮辱する言葉を口にす
るが、直毘人は気にする様子もなく同意を示すように首肯した。

本来なら少しづつ彼に取り入り、外堀を埋め、五条の庇護下からぶ
んどる手筈だった。

呪術界御三家からすれば、全くの未知の術式を持つ彼の価値はそれ
こそ計り知れない。曰くただの道具を呪具にする、曰く日に何度も構
築術式を使うことができる。

何より、そんな彼の手綱を握り、完璧に制御できていると総監部に
思わせられれば、禪院家の評価も御三家の中で一つ抜けたものになる
筈だ。

五条のように好き勝手やらせてまた暴走となれば、今度こそ死刑は
免れまい。あの術式に関して何もわからずじまいで殺してしまうの
は、余りにも惜しい。

最悪死刑になってしまおうとしても、禪院家の若い女中に何人か子供
を作らせ、術式が相伝されたのを確認してからにしてみたい。

「直哉には後で言っておくとして、収穫はあった」
「収穫？何かあったのか」

「ずずずといつの間にか用意されていた茶を啜った扇が問うと、直毘
人は酒を呷ってから告げた。

「扇。お前の娘たち、どうやら桐生と仲がいいようだぞ」

その言葉に扇はピクリと眉を揺らし、持っていた茶飲みを置いた。
そして嘆くように大きく息を吐くと、額に手を当てて天を仰いだ。

そう、直毘人が言った通り、扇は真希、真依の姉妹の実の父親であ
る。そして、禪院家の中でも特に二人を嫌っている人物でもある。

もつと言えば直毘人の弟であり、かつては兄弟で当主の座を争った
のだが、結果は現状の通り、直毘人の勝利で終わった。

そして扇は敗因を自分の子供たち——禪院家の中でも指折りの落
ちこぼれを産んでしまったからと断定していた。

「あの出来損ないどもに、ようやく価値ができたか」

そんな出来損ないどもも女ではあるのだ。呪術師としての利用価
値はなくとも、女としての利用価値はいくらでもある。

どこかでのうのうと、理由もなく生きている二人を嘲笑うように気味の悪い笑みをこぼした扇を他所に、甚壺は「桐生貴丈から直接聞いたので？」と念のための確認。

直毘人は酒臭い息を吐きながら頷くと「今回の騒動の原因だからな」とついでと言わんばかりに口にし、顎を摩った。

「どうやら、直哉が真希を愚弄したのが切っ掛けだそうだ。小娘一人のために我々に喧嘩を売るとはな」

面白い奴だと酒を呷った直毘人は、扇と甚壺を一瞥しながら好戦的な笑った。

「中々骨のある奴だ。迎え入れるにしても、敵対するにしても、一筋縄ではいかん」

直毘人は初対面の相手であった貴丈をそう表すると、心の底から楽しそうに笑い、再び酒を呷る。

飲み過ぎだぞと注意した扇だが、既に思考は次に向かっているのか続け様に口を開く。

「差し向けるにしてもどちらにする。真希も真依も、身体つきは変わらん」

そして惚れさせるにしても、あの姉妹のどちらが適役かを考えねばならない。双子だからか顔はともかく身体つきもだいたい同じなのだ。差があるとしても性格程度。

そもそもとして彼の拠点は東京だ。そういう意味では真希の方がそういった関係になる可能性が高いか。

どちらにせよ、今の貴丈は禪院家そのものは敵視している可能性が高い。その誤解はその内どうにかしなければ。

「……。やはり直哉を一人にするのではなかったな」

直毘人は敵視の原因と言える馬鹿息子の姿を脳裏に描きながら、酒臭い溜め息を漏らした。縛り付けてでも部屋に置いておけば、少なくとも現状よりかはマシな関係になれた筈だ。

やれやれと面倒臭そうに溜め息を吐くと、ドタドタと騒がしい足音が廊下の向こうから聞こえ始め、そして妙齡の女中が挨拶と共に入室した。

「当主様、お話中に失礼いたします」

「おう、どうした。また直哉が何かやらかしたか？」

「す、既にご存知でしたか」

そして女中が言いそうなことを適当に口にする、まさかの正解という事態に部屋に集まっていた三人は揃って頭を抱え、溜め息を漏らした。

甚壺が真っ先に立ち上がり、バキバキと指を鳴らしながら「どこだ」と強烈な威圧感を放ちながら女中に問うた。

甚壺の巨軀に怯えながら「く、訓練場です」と呟けば、甚壺は足早にそこを目指して走り出し、廊下の向こうへと消えていった。

それを見送った扇もゆつくりと立ち上がり、刀の位置を直しながら「俺も行こう」と告げ、歩き出した。退出の際、甚壺の圧で腰を抜かしてしまった女中を蔑むように一瞥し、何の言葉をかけることなく立ち去ってしまう。

その視線を受けた女中が余計に怯えている中、直毘人は「もう下がっていいぞ」とやはり気にした様子も見せず、そう告げて、酒を一口。

「暴れるにしても怪我が治ってからでいいだろうが、馬鹿者め」

直毘人が吐いた悪態を聞き流し、女中は慌てて部屋を立ち去った。

触らぬ神に祟りなし。呪術師でもなければ人として扱われないこの家において、彼女が取れる自衛手段はこの程度。

そして先を急ぐ彼女に耳に、風に乗って流れてきた戦闘音が、嫌に響くのだった。

禪院家所有の訓練場。

山を切り抜き、さながら石を切り出す採掘場のようになっているその場所の中央に、応急手当てをされただけの直哉の姿があった。

直毘人の手で気絶させられ、引きずられる形で帰宅した直哉は、目を覚ました直後に割られた額、砕けた拳をそのままに他の術師の訓練に力チコミを入れ、今しがた彼らの蹂躪を終えたところだった。

あちこちから聞こえる悲鳴や呻き声、恨み節の何もかもが、彼の耳には届いていない。

今の彼の頭を支配しているのは、貴丈——もとい彼が変身したビルドの姿だった。

いくら打ち込んでも殴り返してくる姿が。

いくら止めても倒れない姿が。

そして黒閃を当て、鎧を砕いたにも関わらず、尚も立ち上がる貴丈の姿が。

「——けんなや……」

爪が肌を突き破る程に拳を握り、二、三度殴ったり蹴ったりしただけで立ちあがろうともしなくなった術師たちを睨みつけ、瞳に強烈な嘲りの念を込めた。

「ぎっけんや。どいつもこいつも、こんなん動けなくなって、情けないと思わんの？」

そして心の底からの侮蔑の言葉を吐くが、術師たちは睨みつけてくるだけで立ちあがることはない。

その視線だけは貴丈と似たようなものだが、彼の場合はどんなにロボロになるうと立ちあがり、向かってくる。

呪術師歴一年足らずの若造に、根気でも実力でも負けているなど、禪院家の呪術師として恥ずかしくないのか。

不敵に鼻を鳴らす直哉はこちらに近づいてくる気配に気づき、甯猛な笑みを浮かべた。

すたんと軽い音を立てて彼の視線の先に現れたのは、女中の報告で駆けつけた甚壺だ。後方には扇も控えている。

「直哉、やり過ぎだ。これくらいにしておけ」

甚壺は呪力を込めた拳を構えながら言うが、直哉は気にする様子も見せずに構えを作り、べつと舌を出して挑発。

年の割に子供じみたことをする直哉に甚壺は溜め息を吐き、周りで倒れている術師たちを見つめ、彼らをどう巻き込まずに立ち回るかを思慮。

だがそれをさせまいと直哉が動き出し、それへの対応を強いられて

しまう。

「俺はもつと強くなるんや！踏み台になってくれ!!」

「断る!!」

そして直哉の口から出た言葉に甚耆は鋭く返し、『投射呪法』による高速で動き回る直哉を迎撃せんと身構えた。

貴丈が原因ではあるが、貴丈が全く知らない内に、禪院家での大騒動が巻き起ころうとしていた。

呪術高专京都校。

七海からの簡単な説教が終わった貴丈は、真依の手を借りて割れてしまった窓ガラスの後片付けを行っていた。

箒で払う度にジャラジャラとガラス片がぶつかり合う音が廊下に響き、ちりとりはすぐさま一杯になってしまう。ゴミ箱と廊下、果たして何往復しただろうか。

「あんた、一体何枚割ったのよ……っ!」

「多分、中庭を向いてるやつ全部」

「ぜ……っ。この、馬鹿……!」

箒でガラス片を集めていた真依の問いかけに馬鹿正直に答えると、彼女はついに我慢できなくなったのか箒で彼をぶん殴るが、対して効いていないのか、あるいは反応するのも億劫なのか、貴丈はノーリアクションだ。

そしてそれが気になったのか、真依は彼の顔を覗き込みながら「ちよつと、大丈夫？」と声をかける。

「え?ああ、大丈夫だ。ちよつと疲れてるけどな」

そして気丈に笑みながら告げた言葉に真依は「そう」と興味なさそうに返すが、その表情はどこか心配そうではある。

「そんなに心配すんなって。俺、結構頑丈だし」

貴丈はドン!と胸を叩きながらそう言うと、不意に何か忘れていたようなと思いを巡らせた。

そう、自分も誰かのことを心配して、休憩返上で介抱しようとして

いたような気がする。

だが忘れているといことは、そこまで大事なことでも——、
「……あ」

そうしてようやく思い出した貴丈は気まずそうに目を背けていき、
真依に目を向けた。

「な、なによ」

「いや、俺とお前が会ったのって、自販機の前だっただろ？」

「そうね。それがなに」

「東堂先輩に飲み物買おうと思ってたんだよ、忘れてた」

あの人大丈夫かなと首を傾げた彼は、手元に煙を発生させてあの時
買った飲み物を取り出した。術式の効果のおかげなのか、長時間放置
した割にはまだ冷たい。

「東堂のことなんてほっときなさい。あんたよりかは頑丈だろうし」
「いや、でもさ」

「片付けないと今度は学長に怒られるわよ？」

「それは、困る……っ」

学長からの叱咤と東堂からの好感度低下。

二つを天秤にかけた貴丈はほぼ即答で東堂からの好感度低下を取
り、一刻も早い現状復帰を目指し、ガラスを片付けていく。

途中、騒動を聞いて駆けつけた歌姫や、見かねた七海や補助監督た
ちにも手伝ってもらい、日が沈む前には終わることができた。

そして手伝ってくれた人たちへの感謝の言葉と謝罪を済ませた彼
が宛てがわれた部屋に戻ってくると、

「遅かったな、超親友^{ブラザー}。なに、僕の勝負をしてきたのだろう、顔を見れ
ばわかる」

ここに居て当然と言わんばかりに椅子に腰掛けて待ち構えていた
東堂が、彼の帰還を祝福した。

そして熟知り顔であれこれ言ってくるが、先程まで寝ていたのか僅
かに衣服が乱れている。

「とりあえず、帰ってくださいます？」

「何故だ!? 夜通し語り合おうじゃないか、高田ちゃんに関して!!」

貴丈の肩を掴んで鬼気迫る迫力を放ちながらそう言った東堂は、懐から彼が推しているアイドル、高田ちゃんのライブDVDが何枚も出てくる。

「こ、これを夜通し見るんですか!?寝させてくださいよー!」

「寝ていても構わん。高田ちゃんの歌声を聴きながら寝るといってもいいものだ」

「俺は静かな場所じゃないとねれないんです!」

「そういうな超親友^{ブラザー}。繊細なのは相変わらずだが、高田ちゃんの歌声は別だ。きつと快眠できる」

「できるわけないでしょ!」

せつせとDVDの準備を進める東堂を止めようと貴丈は言葉を重ねるが、やはりと言うべきか東堂がそれに聞く耳を持つはずが無く、リモコンを手を取った彼は流れるように再生ボタンを押した。

同時に流れ始める高田ちゃんのライブ映像。それを横目にベッドに寝転んだ貴丈は、ふと違和感を感じて東堂に声をかけた。

「なんか、シーツに違和感があるんですけど……?」

「ん?ああ。俺の汗をだいぶ吸ってしまったからな、備品室から新品を拝借してきた。なにか問題か?」

「いや、大丈夫です」

その気遣いを他に回して欲しいですけど……と出かけた言葉を飲み込み、枕に顔を押し付けて溜め息を吐くと、全身を弛緩させてベッドに身を沈めた。

やかましい程に聞こえてくる高田ちゃんの歌声を聴きながら、彼は眠気に身を任せて瞼を閉じた。

なお夢の中でも高田ちゃんライブ音声^{ライブ}が鳴り響き、軽く魘されることになることを、貴丈が知るよしもなかった。

「申し訳ありません、もう一度お願いします」

貴丈と直哉の決闘騒ぎから二日。

呪術高専京都校の談話室。歌姫に朝一番に呼び出された七海は怪訝な表情を浮かべながら、彼女の言葉を聞き返していた。

歌姫の方も自分の言った言葉がどれほど馬鹿げているのかを理解しているのか、眉を寄せたまま深々と溜め息を吐いた。

「……禪院家からの要請で、桐生くんとあなたの任務に真依を同行させて欲しいそうよ。今回の騒動の責任を取らせろとか、なんとか……」

「確認ですが、彼女の階級は」

「三級よ」

「……上は彼女を死なせるつもりですか?」

七海はここで歌姫に何を言ったところで無意味な事を理解しつつ、単刀直入に禪院家の判断への批判を口にした。

一応、貴丈自身はそういった階級が未定なので四級となっているが、彼の実力でいえば一級、件のフルボトルなるものの組み合わせ次第では特級相当という、階級詐欺もいいところの強さだ。

だが、真依は違う。勉学に励みながら仕事をこなし、少しずつ評価を得て階級を上げているのだ。階級以上の実力というのはあるまい。三級ともなれば、彼女には悪いがまだまだ弱い部類に入る。今回の任務に関しては力不足だ。

歌姫もそれに関しては同意なのか、困惑の表情で「まったくよ」と額に手をやった。

騒動の責任を負うべきは当事者の直哉か貴丈、あるいは貴丈の監視役でもある七海か歌姫だろう。なぜ巻き込まれただけの真依が……。

「……巻き込まれたじゃなく、あの娘が原因で起きたことなのよね」

そこで記憶の中にある貴丈の証言を洗い直した歌姫は、本当の意味での事の発端は貴丈と真依と直哉の三人の口論にある事を思い出す。

まさか、禪院家はその責任を取らせたいのか。たかが口喧嘩の尻拭

いに、命を賭けろと。

「桐生くんの実力はだいたいいではあります。理解していません。ですが変異型呪霊スマックスの強さによつては、二人を守るのは難しいかと」

七海は眼鏡の位置を直しながら嘆息混じりにそう告げて、手元の資料に目を向けた。

歌姫から先程の指示と共に渡された書類の束には、今回見つかった変異型呪霊スマックスの情報が記されている。

京都郊外の山中にある廃車置き場にて存在を確認。

民間人の死者数名。

術式の有無、呪霊の階級は不確定なれど、至急対処されたし。

「……」

残酷なまでに淡々と記された事実の羅列に七海は眉を寄せ、これをどう貴丈に伝えたものかと思慮した。

ただですら京都に来てからハードスケジュールで動いているのだ、肉体的にも疲弊しているところに、精神的な追撃を放つわけにもいかない。

だが、伝えなければならぬのも事実だ。

深く息を吐いた七海は書類から視線を外し、いまだに悩んでいる歌姫に目を向けた。

彼女が一番真依の実力を理解しているのだ。大切な生徒が卒業するよりも早く死んでしまうなど、考えたくもない。

だがここで禪院家の意向をつっぱねてしまえば、それこそ真依に何があるかわからない。

キリキリと痛む胃を押さえつつ、歌姫はちらりと時計を確認。

時刻は午前八時。既に犠牲者が出ている以上、行動を起こさねばならず、もう迷っている時間はない。

生徒の命の安全を考えれば、行かせるべきではない。だが、彼女の立場や今後を考えれば、行かせる他ない。

はあくど頭を掻きながら深々と溜め息を吐く歌姫を他所に、七海は静かに覚悟を決めた。

守るべき人物が増えるのは厄介ではあるが、やるべき事は変わらな

い。

貴丈、真依を守りつつ、呪霊を——貴丈の家族を祓^{殺す}う。それだけだ。

貴丈にあてがわれた一室。そこは本来、彼が過ごすための部屋なのだが、

「見ろ超親友^{ブラザー}！我がアイドル、高田ちゃんだ!!」

「え……う・あ、はい……。ふあ〜……」

何故か東堂が入り浸り、彼のプライベートタイムというものが文字通り皆無となっていた。

今も朝のニュース番組にゲスト出演——おそらく番宣だろう——している高田ちゃんの登場にはしやぐ東堂の横で、欠伸を噛み殺しながら朝のコーヒーの準備を進めていた。

東堂にも飲むかと聞いたが、今回は遠慮するとあっさり断られてしまった。

準備を進める度に部屋を満たしていくコーヒーの香りを堪能しつつ、ちらりと件のアイドル高田ちゃんが映るテレビに目を向けた。

「……ッー」

それと同時に彼は目を見開き、眠気が完全に飛んだ意識が完全にテレビに向いた。

東堂も彼の変化に気づいたのだろう。不敵な笑みを浮かべながらテレビの正面から少しずれ、コーヒーの準備をしている貴丈からも画面が見やすいようにしてやった。

貴丈は「ありがとう」と礼を言うが、その視線はテレビに釘付けた。隣のアウンサーとの身長差やパネルとの対比からして、180センチはあるだろう。その上衣装の上からでもわかるほど肉付きもよく、安産型と言つていいほどに尻がでかい。

「俺は、彼女を知らずに今まで過^ごしてきたのか……ッー」

ダン！と台バンしながら苦虫を噛み潰したような表情になる貴丈を他所に、東堂は顎を摩りながら高田ちゃんの一挙手一投足に意識を向け、放たれる言葉に耳を傾ける。

どうやら夜の番組のスペシャルに出演するようだ。それは見逃せない。超親友ブラザーも見たがる筈だ。

高田ちゃんから話題がそれ、カメラが他のニュースキャスターを映した際に貴丈に目を向けた。

「どうだ、超親友ブラザー！彼女が我らが高田ちゃんだ!!」

「最悪だ。もつと前から知ってりや、イベントに行つてたかもしれねえ……っ!!」

コーヒーをちびちびと舐めるように飲みながら、貴丈は思わず悪態をついた。

前までは弟妹たちの面倒を見なければと職員の人たちと施設を奔走し、テレビ番組なぞ下の弟妹たちが見たいものを優先していたのだ。アニメやゲームの知識はあれど、アイドルの知識はほぼ皆無。

——帰ったら、もうちよいテレビ見よ……。

テレビ番組はいつも朝のニュースを見て、天気を確認して、それきりだ。

授業に参加し、実習という名の実戦を経験し、帰ってきたら泥のように寝る。こうして考えてみると、所謂ゴールデンタイムという時間帯は大概外にいるか、寝ている。これでは情報弱者と嗤われても何も文句が言えない。

もつとアンテナを立てていかねえとなくとコーヒーを飲みながらぼやいていると、コンコンと扉がノックされた。

「誰だ、俺たちの朝のルーティンを邪魔するのは……?!」

東堂が敵意剥き出しで扉を蹴破らんとするが、その直前にキャスターが高田ちゃんに話題を振り、彼女が応答を始めた為に行動をキャンセル。飛び出した勢いのままに反転し、元の位置に座り込んだ。

彼が出てくれるとばかり思っていた貴丈は面を食らうが、すぐにコーヒーが注がれたコップを置き、「今開けます」と告げてから扉を開けた。

「おはようございます、桐生くん。朝から申し訳ありませんが、見つかりました」

扉を開けた直後、律儀に開くまで待つていた七海が開口一番にそう

告げた。

何が見つかったなどと、下らないことは聞かない。自分にその報告がくるといふことは、つまりそういう事だ。

「わかりました。すぐに準備を——」

「待て、超親友^{ブラザー}。Mr. 七海に聞きたいことがある」

「すぐさま準備——と言つても着替えるだけだが——をしようとした貴丈の肩に手を置き、彼と交代で七海と対面した東堂は深刻な表情で問うた。

「その任務、時間はどれほどかかる。夜までには終わるのだろうか」

「そこは相手次第、としか。何か予定が？」

七海を前にしても一切物怖じせず、むしろ威圧的なまでの態度で投げられた問いかけに、七海はさも気にした様子もなく質問を返した。

七海の言葉が不満なのか、額に青筋を浮かべながら貴丈の肩に腕を回した東堂は、「ある！」と声を張り上げた。

「今晚の番組に我らが高田ちゃんゲスト出演する！俺と超親友^{ブラザー}はそれをリアルタイムで視聴し、録画した分を更に視聴する予定だ！」

「……え、マジっすか？」

そして彼の言葉に間の抜けた声を漏らした貴丈は、信じられないと言わんばかりに東堂を見るが、肝心の東堂は気にしていない。

彼は貴丈ならば共に見てくれると、同じものを、同じように見てくれる筈だと、信じて疑わない。

これから任務に向かい、戦闘をこなし、帰ってきてでも食事だシャワーだで忙しいだろう。その後、もしくはその途中で東堂と共にテレビを見ることになるのか。

——また、夜更かしすることになんのか……。

貴丈は思わず溜め息を吐いた。正月になってからというものの、昼夜が逆転しているような気がしてならない。

崩れたリズムの修正には時間がかかる。折を見て治さねば、学業に悪影響が出るだろう。

それもこれも、この任務で無事に帰還できたらの話だが。

「こうなればMr. 七海！俺も今回の任務、参加させてもらおうぞ！」

ドン！と胸を叩きながらそう告げると七海は悩む素振りを見せるが、東堂の実力を——学生にして一級術師であり、先の百鬼夜行においても、単独で特級呪霊一体、一級呪霊五体を祓った文字通り規格外の強さ。戦力としては申し分ない。

「いいんですか、東堂先輩？ 貴重な正月休みですよ？ それに相手は、その……」

だが貴丈は違う。一応は先輩である東堂を自分の都合に巻き込んでいいものかと、悩んでいるようだ。

相手は呪霊と銘打たれてはいるが、元とはいえ人間であることに変わりはない。東堂に人殺しをさせたくはないのだろう。

それは確かに彼の優しさではあるが、向けられた東堂はどうやら立腹しているようだ。

ふんと鼻を鳴らすと、「俺が超親友^{ブラザー}の事情を知らないと思うか」と清々しいまでの笑みを浮かべ、貴丈の背を叩いた。

「昔からそうだ、お前は自分一人で何もかもを背負おうとする。たまには俺にも背負われてくれ、超親友^{ブラザー}」

そして彼と耳元で貴丈を諭すように優しい声音でそう告げた東堂は、思わず彼を見た貴丈に向けてウィンクをして見せた。

昔からというほどの付き合いはないし、背負えるのなら全て自分で背負うつもりである貴丈にとって、大きなお世話とっていい言葉であるが、不思議と東堂の言葉はすんなりと胸に届いた。

東堂に人殺しの罪を背負わせるつもりは毛頭ないが、

「手伝ってくれるのなら、よろしくお願いします！」

たまには甘えてもいいのだろうか、普段の彼では欠片も思わない事がさも当然のように思考に割り込んできた。

そして告げられた言葉に東堂が否を言うわけがなく、「任せろ、超親友^{ブラザー}！」と打てば響くような返事が返された。

勝手に話が進む七海は僅かに不満そうに息を吐くが、今回は真依の参加も決まっているのだ。これで何かあっても二人組^{ツーマンセル}で動くことができる。

最悪の場合は生徒三人の無事が最優先だが、東堂と貴丈は余程のこ

とがなければ自力で何とかする実力は備えている。なら、彼女には失礼だが守るべきは真依だけだ。

それなら、まだ何とかなるだろうか。

「さあ、そうと決まれば征くぞ超親友！俺たちの新しい伝説が今日から始まるのだ!!」

「あ、新しい伝説……。前の伝説を知らないですけど」

早速東堂と貴丈が噛み合っていないが、大丈夫だろう。

七海は僅かに痛む胃を気遣うように腹を摩り、二人に気付かれないように小さく溜め息を吐いた。

やると決めたら、無駄に行動が早いのが学生たちの良い所だろう。

貴丈、東堂はもはや着慣れた呪術高専の制服に身を包み、気合を入れながら補助監督が待っているという車庫に辿り着いたのだが、ここには二人が想定していない人物の姿があった。

歌姫、七海と何かを話し込み、隠そうと努めているようだが隠しきれない苛立ちを募らせるその姿を認めた貴丈は「あれ」と声を漏らしながらその人物——真依に声をかけた。

「真依、何で居るんだ？まさか、見送りに来てくれたのか？」

「そんな訳ないでしょう!!元はと言えば、あんたのせいで……っ！」

貴丈が驚きつつも、どこか茶化すような声音でそう言うと、二人との会話を打ち切った真依が彼に掴みかかり、前後に振り回し始める。

脱力しているからか、真依が揺らした分だけ貴丈はがつくんがつくん大きく前後に揺れ、食べたばかりの朝食が食道を逆流していく感覚が喉をあがっていく。

うぷつと口から嗚咽を漏らすと、それを合図に真依は慌てて彼から距離を取り、「吐くからトイレ行きなさいよ」と彼女のせいで吐きそうになっていることを柵に上げて車庫脇のお手洗いを指差した。

「だ、誰のせい……っ！」

貴丈は口元を拭いながら彼女を睨むが、怒りよりも彼女がここにいる事についての疑問の方が大きいのか、歌姫に問うた。

「……あの、何で真依がここにいるんですか？」

「……禪院家からの横槍があったのよ。彼女も任務に連れて行けてね」

嘆息混じりに告げられた言葉に貴丈は僅かに目を細め、「……またあいつらか」と若干殺意まで感じさせる声音で呟いた。

京都に来てまだ三日ではあるが、彼の中での禪院家の評価はただ下がりに下がっていた。真希からの忠告で評価のハードルをそれなりに下げているつもりなのだが、それすらも軽く下回ってきたのだ。

もし何の前情報もなく直哉と出会っていたとしたら、まず間違いなくこちらから手を出していたと断言できる程度には嫌悪を示す相手。

直毘人のおかげで全員が全員、直哉ほどクズではないとわかつてはいるが、禪院家の連中は真依を行かなくともいい死地に向かわせるつもりらしい。

「大丈夫なのか？その、真依がどんくらい強いのか知らねえんだけど……」

貴丈は単刀直入に真依に問うと彼女は言い淀む様子を見せ、「三級よ」と一応の階級を口にした。

彼女からすれば恥ずべきことなのだろう。これから強くなればいという向上心のようなものも、あまり感じない。

これから向かう任務の危険性を把握している七海、東堂は不服そうにしているが、貴丈は「俺より上じゃねえか」とポンと真依の肩に手を置いた。

「俺も、ついでに乙骨も四級だ。まあ、俺に関しては上の連中がどうするか迷ってるって話だけど……」

「なによ、私に対する嫌味？」

ポリポリと頬を掻きながら告げた貴丈に、真依は彼の手を払いながらそう返す。だが彼は気にした素振りも見せず、苦笑しながら言う。

「そんな訳ないだろ。単純にもっと自信を持つてこと」

浮かべた微笑みをそのままに払われた手を再び真依の肩に乗せ、彼女の瞳をじつと見つめる。その瞳は真希と瓜二つではあるが、彼女と違い強い迷いを感じさせ、怯えや恐怖の色も隠しきれてはいない。

その瞳は迷子になった妹たちのそれを思い出させ、貴丈にとって放っておくという選択肢も消える。

「誰かはわかんねえけど、真依がやってきた事を認めてくれる人もいるってことだ。俺は、まあ、何しても褒められた立場じゃねえし……」先程まで凜としていた表情に僅かな翳りを見せながら、それでも貴丈は笑って見せた。ここでへこんでいては、真依を慰めるところではなくなる。

「真依は真依にしかできない事があるって。まだそれが見つかってないか、目の前にあるのに気づいてねえだけでさ。だから大丈夫！もつと自信をもつて、馬鹿にしてきた連中を見返してやればいい！」

「……馬鹿じゃないの？」

彼の必死とも言える慰めの言葉も、対して真依には届いていないようだ。

彼女はたったの一言で彼の言葉を断じると、小さく溜め息を吐いた。下手な慰めも、労いも、彼女にとっては逆効果なのだろう。

むうと小さく唸った貴丈だが、補助監督が腕時計をしきりに気にしている事に気付き、時間切れを悟った。あの様子からして、出発予定を過ぎているようだ。

今回は仕方ないととりあえず諦めた貴丈だが、不意に彼女の手を取って告げた。

「まあ、来るしかねえなら仕方ねえ」

ちよつと、放しなさいよと真依の抵抗を他所に、貴丈は早く乗ろうぜと車の方に引っ張っていき、振り向き様に不敵な笑みを浮かべた。

「——何かあっても守ってやるよ」

「——」

彼の言葉に真依は驚いたように僅かに目を剥くが、すぐに嘲るような笑みをこぼして「馬鹿じゃないの」と悪態をこぼすが、言葉と表情の割に嫌がっている様子はない。

真依にとっても意外だったのだろう。直哉との一戦直後でもあったが、貴丈の言動の節々に姉を——本人的には嫌っている筈の真希の存在を感じてしまい、何故か不思議と安堵してしまう自分がいるの

だ。

そんな自分にも苛立ちが募るが、他に苛立つ原因があるとすれば自分たちの後方だ。

「流石だ、超親友^{プラザ}。あの真依ともう親密になるとは……」

何故か訳知り顔で腕を組み、何度も頷きながら貴丈と真依を眺める東堂だ。

彼の中では既に貴丈と真依が親密な関係であるという方程式ができているのだろう。ぶん殴つてでも訂正してやりたいところだが、自分が殴つたところで一切ダメージはないのは目に見えている。やるだけ無駄だ。

「さあ、行こうか超親友^{プラザ}、Mr. 七海、真依！確実に、迅速に、送つてやろう」

獰猛な笑みを浮かべて三人を煽つた東堂だが、すぐに表情を引き締めて神妙な面持ちでそう告げた。

相手は呪霊であるが、根本的な意味で呪霊ではないのだ。祓うのではなく、殺しにいくのだ。呪詛師相手のそれとも違う覚悟が必要だ。

補助監督の運転する車に揺られ、たどり着いたのは京都の都市部郊外にある車の廃棄場だった。

鉄錆に覆われ、形をそのままに朽ちていくのを待つ廃車が山のように積まれている。

『帳』^{とぼり}の内側、あとは目的の変異型呪霊^{スマツシユ}を探すだけなのだが、出発前はやる気に満ちていた貴丈の表情が暗い。

それはその筈だ。移動中の車内において簡単なブリーフィングがあったのだが、そこで既に犠牲者が出ているというむねの話をされたのだから。

自分が直接手にかけてたわけではない。だが自分の術式が暴走しなければ、きつと死ななかつた人たちだ。罪悪感がないと言えば嘘になる。

今はその人たちの冥福を祈る他になく、やれるのはせめてもの罪滅

ぼしをするだけだ。

深く息を吸い、錆の臭いがこびりつく酸素を取り込み、ゆつくりと吐き出す。

隣の七海はネクタイを緩めながら銃を取り出し、東堂は上着を脱ぎ捨てて上半身裸となった。真依も無言で腰に下げていたホルスターから拳銃を取り出し、弾倉を確認。

貴丈も手元に発生させた煙からベルトを取り出し、腰に巻きつけた。

次いでラビットフルボトル、タンクフルボトルを取り出し、蓋を開けると共にバツクルのセット。

ベルトから鳴り響く音声を纏めて聞き流し、レバーを回転。

『Are You Ready?』

「――変身」

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イーイー！』

ベルトからの問いかけに貴丈は重苦しい雰囲気のまま返答し、ビルドに変身。赤と青の二色の鎧に身を包んだ彼は、ハツとして辺りを警戒した。

視界にノイズが走り、自分たちを観察している何者かの視界がちらつく。車の影から見られているようだ、かなり近い。

「気をつけてください、もうすぐそこにいます！」

ビルドが警戒のために声を張り上げた瞬間、周りから騒々しいエンジン音が聞こえ始める。

四人はそれぞれ前後左右を警戒し、周囲に目を光らせていると、廃車の影から何かがエンジン音を響かせながら飛び出してきた。

「東堂先輩！」

それは東堂の正面。ビルドは警告を口にするが、東堂は「問題ない！」と返し、飛び出してきた何かを蹴り倒し、流れるようにトドメの踵落としを叩き込んだ。

瞬間響くのは、金属がへしやげる異音だ。東堂も足に感じた固い感触に眉を寄せ、撃破した何かを改めて確認。

それは一言で言えばバイクだった。誰かが捨てて行ったのか、ある

いは運ばれてきたのか、それは定かではないが、錆の目立つそれは捨てられて長い時間が経っているように見える。

「バイク、なぜバイクが……」と破壊したバイクを踏みつけながらぼやいた東堂は、じっと目を凝らしてそのバイクを注視。

呪力の残滓——残骸が見えることを確認した彼は、「気をつけろ」と皆に警告。

そして彼の声に反応するように、エンジン音が一つ、また一つと増え始め、タイヤと砂利が擦れるドラフト音や、急ブレーキ音まで聞こえ始める。

目を凝らせば廃車の隙間には無人のまま爆走する様々なバイクを確認することができ、その数はおそらく二桁はいる。

「相手の術式はバイクを操る！いや、もしかすればそれ以外もいけるかもしれん!!」

東堂は音の方向だけでなく、動いていない廃車にも警告しながら自分の推察を叫ぶと、七海は影から飛び出してきたバイクを鉈で叩き壊しつつ「そのようですね」と返す。

ビルドは真依を庇いながら手元に煙を発生させ、ドリルクラッシュャーを取り出すと、刀身を取り外してガンモードに変形。

タンクハーフボデイの効果で高まった射撃能力にものを言わせ、飛び出してきたバイクを撃ち落とし、破壊していく。

真依も負けじとバイクを迎撃するが、拳銃の弾丸一発程度では中々止まらず、他の三人が一撃で破壊していく中、一人だけ時間がかかってしまう。

彼女が鳴り響く銃声に紛れるように舌打ちを漏らすと、
『ヒヤハハハハハハハハハハハハ!!!』

相手を小馬鹿にし、濃密な蔑みの感情が込められた嗤い声が響き渡った。

バイクを迎撃しつつそちらに目を向けたビルドは、仮面の下で大きく目を見開いた。

それは人型の変異型呪霊^{スマッシュ}だった。破れ、焼き爛れたライダースーツを思わせるものを纏う肉体の各所には、バイクのエンジンやマフラー

を思わせる意匠があり、何より目を引くのは頭部だろう。

バイクのヘッドライトを思わせる血走った一つ目がぎよろりと呪術師たちを睨み、鹿の角のように頭から伸びるハンドルはただの飾りではなさそうだ。

「また随分と派手な奴が出てきたな」

ビルドはそんな事を呟きながら、ふと違和感を感じて変異型呪霊——バイクスマツシユの右手に目を向けた。

壊れたように噛み続ける彼の拳は体色のそれとは違う赤黒い色に染まっており、更に目を凝らせばポタポタと血が滴っている。

まさかと仮面の下で脂汗を滲ませたビルドの思考を読んだのか、バイクスマツシユは嗤いながら血に濡れた右手を呪術師たちに向けると、廃車の影から真新しいバイクが飛び出してきた。

ビルドは素早くそれを撃破せんとドリルクラツシャーの銃口を向けるが、すぐに攻撃を中止して身を翻した。

隊列の隙間を高速でバイクが通り抜けて行く風圧を感じながら、真依は「ちよつとー」とビルドに悪態をつくが、すぐに彼が攻撃しなかった理由を察して苦虫を噛み潰したような表情となる。

今しがた駆け抜けたバイクに、有刺鉄線で人が括り付けられていたのだ。身体のあちこちあら血を滴らせ、動く度に血が滲む様は見ているだけでも痛ましい。

そしてそれを見せつけるように人を括り付けたバイクが止まったかと思えば、微かな呻き声と呼吸音が聞こえてきた。どうやら報告にあがっていなかった被害者がまだおり、それを人質にされたようだ。

なら、どうする。少々賭けだがバイクを破壊して救出するか、バイクスマツシユを撃破してから確実に助けるか、進む道は二つだが、

「超親友^{ブラザー}、迷うな！俺たちが付いている！そうだろう、真依！」

「私に何させようつてのよ!!」

「東堂くんではないですが、私たちがいることをお忘れなく」

思慮を深める彼に、東堂、真依、七海の声が届いた。

その声にハツとして顔を上げたビルドは、仮面の下で苦笑しながら頷いた。

「わかりました！力を貸してください!!」

彼の頼みに三人はそれぞれ応じ、東堂が「それで作戦は！」とビルドに問うた。

「やるだけ、やってみます!!」

ビルドは少し不安そうにそう返すと手元に煙を生み出し、人質救出の為のフルボトルを取り出すのだった。

やるべきことは単純だ。

変異型呪霊スマツ シュを殺ころし、囚われた人を救う。やるべき事は、その二つだけ。

だが問題は多い。東堂と七海、真依の三人で変異型呪霊スマツ シュが操る廃バイクの猛攻を防いでくれているが、その時間も無限ではない。

何より、そのバイクの一台には民間人が有刺鉄線でくくりつけられているのだ。彼の安全を考えるのなら、時間をかけてはいられない。故にビルドの判断は早かった。防御を三人に任せ、救出に全ての意識を注ぎ込む。

仮面の下で目を細め、手元に発生させた煙から紫色のフルボトルを取り出した。

カチャカチャと音を立てて数度振って込められた呪力を活性化させ、蓋を開けて呪力を解放。

『《スパイダー！》』

その瞬間、その場にいる全員の頭の中に陽気な声が響き渡った。

先の共闘でも使われなかったフルボトルの音声に七海は眉を寄せ、ちらりとビルドの様子を確認。

スパイダー——つまりは蜘蛛。使う能力はある程度察する事はできるし、確かにこの状況においては最適に近い判断だろう。

ならば、問題なしと彼から視線を外した七海は、今度は廃車のの上でこちらを嘲笑っているバイクスマツシュを睨みつけ、さてどう引き摺り落としてやろうかと僅かに思慮。

「Mr. 七海！」

そんな七海に声をかけたのは、すれ違いざまにバイクを蹴り壊した東堂だ。

「超親友フラザーに合わせて、俺の術式を解禁する！俺を信じてくれるか！」

そして東堂は有無を言わさぬ迫力をもってそう告げると、七海は「わかりました！」と打てば響くように返す。

何の指示もない真依は不満そうに舌打ちするが、自分では何もでき

ないとわかってしているためか、ただの八つ当たりとしてバイクを破壊していく。

そんな三人のやり取りを見やりながら、ビルドはベルトのバツクルに嵌るラビットフルボトルを引き抜き、そこにスパイダーフルボトルをセット。

『《スパイダー！タンク！》』

「ベストマッチー……はなしか」

最近になって聞き始めたばかりだというのに、なぜか聞き馴染みのある音声に身構えていたが、それが鳴らなかつたので僅かに残念そうに漏らすビルド。

あの音声が鳴るといふことは、それはいい組み合わせである証拠だ。ここ一番の場面で、術式の方からも後押ししてくれるというのの思いの外ありがたいのだ。

それを求めていたここ一番でそれが無いのは、少々不安ではあるがやるしかない。やねねばあの人は死ぬのだ。

ビルドは意を決してバツクルから伸びるレバーを回し、スパイダーフルボトルとタンクフルボトルの呪力を刺激し、さらに活性化させる。

スパイダーフルボトルとタンクフルボトルが互いの呪力を高めあい、より強力な呪力を生み出し、ビルドの身体を包み込む。

「――変身！」

それが最大まで大きくなった瞬間にビルドは叫んだ。

その瞬間、赤いラビット-halfボディが紫色に変わり、ウサギの横顔を模していた左目の複眼が蜘蛛の巣を模したものに変化し、右肩にはデフォルメされた蜘蛛を思わせる装甲が装着された。

スパイダータンクフォームに変身したビルドは右腕を回して気合いを入れると、辺りを見渡して人質を搜索。

「……っ！そこか！」

そして、すぐに見つけた。人質をくくりつけたバイクがエンジンを吹かしながら真依に向けて突っ込んでいく。

彼女もそれに気づいているようだが、すぐに背中に人がいることに

気づいて迎撃から回避に行動を変更。

その場を飛び退こうとした瞬間、彼女の前にビルドが割り込んだ。ずさつ！と足裏を地面を擦りながら急停止した彼は、呪力を溜めた右肩の蜘蛛型装甲を人質付きバイクに向け、

「はっ！」

気合い一閃と共に呪力を解放。

込めた呪力が全て蜘蛛の糸に変換され、一直線に猛スピードで迫るバイクに向けて吐き出された。

さながら弾丸を思わせる速度で吐き出されたそれと、バイクが激突する直前、いきなり花が開くように糸が広がると、バイクとそれにくぐられた人質に覆い被さり、地面に貼り付けに。

『じゃハ!?!』

突然ビルドが姿を変え、さらに糸を吐いた事実には驚くバイクスマッシュは、糸に捕らえられたバイクに呪力を送って無理やりにも加速させようとするが、エンジンを空吹きする音が辺りに響く。

そうしている間にも蜘蛛の糸がバイクと人質に絡まっていき、ついに限界を迎えたエンジンから異音がしたかと思えば、その動きを完全に停止させた。

ビルドはホッと安堵の息を吐くが、糸が絡まる都合で有刺鉄線が余計に食い込んでいないか心配そうに人質を見やるが、どうやら気絶しているようで、声をかけても反応がない。

だが、それでも関門は突破した。

「人質確保です！」

「よし！流石だ、超親友!!」

ビルドが叫んだ瞬間、東堂がサムズアップしながら彼を激励すると、七海に視線を送った。

七海が無言で頷いて応じ、東堂に向けて走り出すと、彼は呪力を込めた手を叩いた。

その瞬間、東堂とバイクスマッシュの位置が入れ替わり、東堂が廃車の山の上に、バイクスマッシュが七海の目の前に移動していた。

それこそが東堂の術式である『不義遊戯』。東堂の拍手を合図に、一

定以上の呪力を持つもの——人や呪具など——の位置を入れ替えるという、単純明快な効果だ。今回は東堂とバイクスマッシュの位置を入れ替えたが、勿論範囲内であるビルドや真依との位置を変えることもできる。

『ヒャ?』

勿論それを知るよしもないバイクスマッシュは、何が起きたのか訳が分からず間の抜けた声を漏らした瞬間、その顔面に七海の鉋が叩きつけられ、振り抜かれる勢いのままに弾き飛ばされる。

ガシャン!とけたたましい音を立てながら廃材の山に突っ込んだバイクスマッシュを睨んだ七海は、小さく舌打ちを漏らした。

今の一撃は、無論彼の術式である『十劃呪法《とおかくじゅほう》』を発動しながらの一閃だ。頭部の長さを線分し、その7:3の割合の境界を寸分の狂いなく打ち抜いたそれは、並の呪霊であれば即祓除間違いなしなのだが、その手応えは硬かった。まさに鉄塊を殴りつけたような衝撃が、鉋を伝って腕を痺れさせる。

伊達にバイクを模した変異型呪霊^{スマッシュ}ではないのだろう。まさにその全身がバイクであり、その材質は金属よりも更に硬い。

——厄介ですね。

ふーっと深く息を吐き、突っ込んできたバイクを一撃で粉碎した七海は、それよりも硬いバイクスマッシュを砕く方法を思慮するが、バイクスマッシュが雄叫びをあげながら廃材の山から出てきたのを合図に一旦保留。

頭部から角のように伸びるハンドルを自ら握り、ひねる事で背中のエンジンを吹かし始め、エンジン音が激しくなるにつれて纏う呪力を高まっていく。

「ここからが本気ということですか」

七海がぼそりと呟き、身構えた瞬間、バイクスマッシュが静止状態から一瞬で最高速度まで加速し、七海の懐に飛び込んだ。

その速さに七海が思わず目を剥くが、それを傍観しているほど東堂も甘くはない。

パン!と景気の良い音を立てながら拍手をすると、七海とビルドの

位置が入れ替わった。

ビルドは既にベルトのレバーを回転させており、紫と青の呪力がそれぞれのハーフボデイを輝かせ、複眼が怪しく光る。

『レディー・ゴー!!ボルテック・アタック!!』

ベルトから陽気な音声を響かせながら、右肩の装甲から再び糸の塊が発射され、七海を襲わんとしていたバイクスマッシュの身体をぐるぐる巻きにし、身動きを封じた瞬間、

「——ラァ!!」

渾身の呪力を込めた左ストレートが、バイクスマッシュの腹を打ち抜いた。

金属を粉碎する甲高い快音を響かせ、その装甲をバラバラに瓦解させたバイクスマッシュは再び廃材の山に突っ込んでいき、ついに崩れたその下敷きになる。

それと同時に走り回っていたバイクが糸が切れた人形のように動きを止め、あちこちの壁や廃車に突っ込んで横転していく。

それを視界の端で捕らえながらふーつと息を吐いたビルドは、油断なく廃材の山を睨みながら構えた。

ビルドに代わって真依の隣に立つことになった七海も彼女を庇いながら身構え、廃車の山から飛び降りた東堂がビルドの横についた。

不敵な笑みをそのままにビルドの肩を叩くと、ビルドはちらりと東堂の顔を伺い、仮面の下で笑みを返す。

その直後、廃材の山の中からエンジン音が漏れ始め、大爆発と共に粉微塵となった廃材が弾丸となって辺りに放たれた。

呪力も何も込められてはいないが、その速度で人体に当たればまず間違いなく風穴が開くであろうそれは、まさに全方位に放たれた散弾のよう。

「なめんなー」

だが、ビルドは狼狽えない。

彼は右肩に呪力を集めて即座に解放すると、周囲の廃車や廃材に適当に糸をばら撒き、即席で糸の壁を作成。

太く、粘度の高いそれは複雑に重なり、絡まりあい、一切の隙間な

くビルド、東堂、七海、真依の四人と爆心地を分かる壁となった。壁の奥からベチベチと破片が壁に突き刺さる音が聞こえてくるが、貫通する気配はない。

流星は超親友^{ブラザー}と胸中でビルドを褒める東堂だが、すぐに違和感を感じて壁の向こうに意識を向けた。

爆発に合わせて膨らんだ呪力が一点に収束し、より強い呪力となって鋭くなっていくのだ。

「超親友^{ブラザー}、気をつけろ！何かくるぞ！」

「了解です！」

東堂は慌てて隣のビルドに警告すると、彼もすぐに状況を察して返事をする、すぐに動けるように脱力した。

直後、糸の壁が急激に熱されたように赤くなり、ドロドロに溶け始めた。

なんだと仮面の下で目を見開くビルドと、警戒を強める東堂。後ろの七海と真依もそれぞれの得物を構えて警戒していると、

『ヒヤッハーツ!!』

雄叫びと共に、一台のバイクが飛び出してきた。

ぎよつと目を見開いた東堂とビルドが左右に転がると、二人がいた場所を炎を尾のように引きながらバイクが通過し、その姿を見せつけるように急停止。

『ヒヤハッ！ヒヤハハ!!ヒヤーハッハッハッハッ!!』

驚く四人を嘲笑うそれは、声からしてバイクスマッシュだろう。

だが、その姿があまりにも違う。歪ながら人型であった先程までとは違い、頭部をそのままバイクのハンドル部分とし、胴体を車体、両腕を両脚をそのままアーム代わりに、呪力で生み出された炎を纏うタイヤと接続されている。

まさにバイク型の変異型^{スマッシュ}呪霊^{シユ}。これが彼の本来の姿なのだろう。

「変身、いや変形する呪霊か！面白い!!」

突然の事態に驚くビルドを他所に、東堂は好戦的な笑みを浮かべて変形したバイクスマッシュに向かっていくが、どうやらバイクスマッシュは相手をするつもりはないようだ。

フロントライト代わりに目玉をぎよろりと回すと、再び笑い声をあげながら急反転。エンジンを吹かすと共に呪術師たちがいない方向に向けて走り出した。

「な!?!逃げるつもりか!?!」

ぐおん!と空気を唸らせて振るった拳が空を切った東堂は、背中——と言うよりかは後輪か?——見せて逃げるバイクスマッシュに向け、不義遊戯を発動させんと両手を挙げた。相手との位置替えをするには、相手を術式範囲内に収めなければならぬ。最高速度による逃げは、確かに東堂を相手にするならば善い手ではあるだろう。

真依がバイクスマッシュの背中に向けて何発か発砲し、そのほとんどが直撃しているが、相手は怯む様子を見せない。

だが、その中の一発が後輪を捉えるとほんの僅かに体勢を崩し、速度が落ちた。

その一瞬の減速が、バイクスマッシュが不義遊戯範囲外へと逃げきれぬ筈だった、ほんの一瞬の時間を奪った。

「——超親友ブラザーの友にして、俺の後輩を侮るからだ」

東堂が格好つけたセリフと共に、手を叩こうとした瞬間、彼の足元の地面がさながら水面のようにボコボコと泡立ち、東堂がそれに気づいて視線を下に向けた瞬間、水柱をあげながら何かが地面から飛び出してきた。

真下からかちあげられた東堂の巨体が宙を舞い、水柱の中には彼を打ち上げた何かの影が見えている。

「な!?!」

「東堂くん!」

「ちよっと、何してんのよ!?!」

突然の事態にビルド、七海、真依が東堂の身を案じる中、東堂は空中で身を振り、「ふん!」と気合い一閃と共に水柱に潜む何かに蹴りを放つ。

不意打ちに対して反撃をされるとは思っていなかったのか、その何かは無防備に東堂の蹴りをくらうと水柱の中から蹴り出され、地面に叩きつけられた。

水柱に代わって今度は砂塵が舞い、東堂が地面に降り立つと共にその何かは砂塵から姿を見せた。

それは、まさに異形であった。辛うじて人型は保っているものの、人としての名残があるのは地面を踏み締める両脚のみで、手があるべき場所には巨大なヒレが、背中にも人にはある筈のないヒレが生え、感情を感じさせないぎよろりと大きな黒い目が、こちらを睨んできている。

「なんだ、あれ……」

ビルドは慌てて身構えるが、その瞬間に視界にノイズが走り、ノイズの向こうに自分を含めた呪術師たちが見えるのを確認し、相手が変異型呪霊であることを確認。

「新手、そいつも変異型呪霊です！」

ビルドがそう叫ぶと、変異型呪霊は矢のように鋭く尖った歯を剥き出しにすると、ぴよんと跳ねて地面に背中から倒れ込むと、ドボン！と音を立てて地面に潜航。

それだけで相手の術式を理解した四人が警戒するが、変異型呪霊は特徴的な背ヒレだけを地面から生やしなから、高速で辺りを泳ぎ回る。

たかがヒレ、されどヒレ。残像を残しながら進みそれが倒れている廃バイクに当たった瞬間、まるで紙切れを斬るようにバイクを両断し、ついでに近くの廃車も切り裂いてしまう。

「凄まじい切れ味です！決して触らないように！」

次々と廃車やバイクが斬られていく様子を見ながら、七海は三人に向けて叫んだ。

三人がそれぞれ応じた直後、今度は周辺一帯を囲む『帳』が震え、どこからかバイクスマッシュの笑い声が聞こえて来る。どうやら、先程の糸の壁を突破したのと同じように『帳』も突破せんとしているようだ。

ビルドはまずいと仮面の下で脂汗を滲ませ、僅かに迷うようにバイクスマッシュがいる方向と、泳ぎ回る新手の変異型呪霊——サメスマッシュに目をやった。

どちらかを相手すれば、もう片方の相手はできない。自分の家族を殺す
祓うという重荷を、他人に背負わせたくはないが――。

ビルドはちらりと東堂、七海に目を向けると、二人は確かに頷き、東堂は胸を叩きながら「こっちは任せろ、超親友！」と不敵に笑んだ。

ここに来るまでに東堂から耳にタコができる程に言われた言葉『もつと頼れ』が、今更になつて脳裏を過ぎる。

仮面の下で僅かに笑んだビルドは「お願い、します……っ！」と絞り出すように東堂と七海に言うと、二人は否もなく飛び出し、地面を泳ぐサメスマツシユの足止めをせんと挑んでいく。

なら俺はバイクの方だと意識を向けた瞬間、脳裏にとあるイメージが湧き上がり、視界の端にはサメスマツシユに壊されずに済んだ廃バイクが横たわっている。

ビルドは無言のまま駆け出すとそのバイクを起こし、適当に取り出したフルボトル――今回はライオンフルボトルだ――の蓋を開け、シートに突き刺した。

瞬間、フルボトルから溢れた呪力がバイクに流れ込み、煙に包まれたかと思うと、金属が軋む異音を響かせながら変形していく。

ボロボロで錆に覆われていた車体が赤く染まり、フロント部分には歯車を思わせる意趣が加わり、リア部分にはフルボトルを模した呪力タンクが生成される。

「おお、すげ〜」

そして新生したバイク――頭によぎった名前は『マシンビルダー』――のシートを叩いた彼は、すぐに跨つてハンドルを握り、エンジンを始動。

リア部分のフルボトル型タンクに溜められた呪力をガソリン代わりにエンジンに吹かすマシンビルダーの具合を確かめたビルドは、真依に目を向けて「乗れ！」と端的な指示を出す。

「え？な、なんで私なのよ！」

「遠距離に攻撃できるのはお前だけだろうが！てか、二人はあいつの相手に忙しいっての！」

突然の指示に驚き、実力不足を痛感していた真依は異を捉えるが、

ビルドは彼女を急かすようにそう告げて、サメスマッシュの相手をする二人の方を指差した。

高速で泳ぐサメスマッシュの速度に対応しつつ、時には東堂の『不義遊戯』を使つて無理やり地上に引き出し、七海が刃のように鋭く振るわれる両手のヒレの連撃を鉋で捌き、反撃を挟んでいる。

だが、決定的なダメージは与えられていないようで、七海に殴り飛ばされたサメスマッシュは再び地面に潜航していく。

東堂は早く行けと言わんばかりに二人にサムズアップすると、ビルドは「早く！」と彼女を急かし、『帳』の様子を確認。

補助監督も頑張ってくれているようだが、ヒビが入り、表面に波紋が広がっていく様子からして、破られるのも時間の問題か。

「……………ああ、もう！乗ればいいんでしょう!?!免許持つてるのよね!?!」
そして、もう選んでいられる状況ではないと嫌でも理解して真依は彼に駆け寄りながら、なによりも重要なことを彼に問うた。

そう免許、免許だ。これから命を預けるのだから、それだけは聞いておきたい。ヘルメットがないのは怖い、呪霊と相対する恐怖に比べれば何を恐れる必要がある。

真依は彼の返事を待たずにマシンビルダーに乗ると、ビルドは無言でエンジンを吹かし始めた。

「……………ねえ、ちよつと?」

「……………」

「……………免許は?」

嫌な予感がする。真依が頬に嫌な汗を垂らした瞬間、ビルドは無言のままマシンビルダーを急発進。

「ち、ちよつと!?!待ちなよ——」

後ろから聞こえる抗議の声は、とりあえず聞き流すことにして。

——その瞬間ガラスが割れるような音をたてながら、『帳』が砕け散った。

——どうして、こうなったのよ……？

真依は高速で過ぎ去っていく夜の森を見つめながら、胸の内側でそんな悪態をついていた。

森に響くエンジン音と前方から聞こえる笑い声。それに混ざる、語彙力の欠片もない罵倒の声。切り裂かれる風に乗って聞こえるそれらは、確実に普通の呪霊が発するものではない。

——本当に、どうしてこうなったのよ……っ！

百鬼夜行も終息し、ようやく訪れた新年。

実家に帰ることもなく、学校で静かに過ごすつもりだったのに。

直哉に絡まれ、そこを貴丈に救われ、後片付けを手伝うという、大きなトラブルに巻き込まれたものの、後は彼に近づかねば何の問題もないとたかを括っていたのに。

「真依！攻撃を頼む！」

「ああ、もう！やればいいんでしよう、やれば!!」

自分は何故か貴丈——正確には彼が変身したビルドが操る異形のバイクに乗せられ、逃げ出した変異型呪霊の追撃をしている。

なぜ七海ではないのか、東堂はどうしたと叫びたくなるが、この場にいるのは自分と貴丈だけで、七海と東堂は現場に残るもう一体の変異型呪霊の祓除に専念せざるを得ない状況だ。

先程は勢いに身を任せしたが、冷静になった今はやはり不満を言わざるを得ない。

「本当、最悪……っ！」

真依は悪態を吐きながら、拳銃リボルバーの銃口を遥か前方を走る錆びたバイクと、それに跨る変異型呪霊スマツシユに向け、引鉄を引いた。

耳元で響く発砲音と硝煙の香りに脳を揺らされながら、マシンビルダーの操作を違えることはない。

そして吐き出された弾丸は寸分の狂いなくバイクスマツシユに当たるが、やはり火力が足りないのか怯まない。

真依は舌打ちを漏らし、更に引鉄を引いた。放たれた弾丸は再びバイクスマツシユを捉えるが、装甲に弾かれてしまう。

『ヒヤハハー・ムダ、バカ、ザコ！ヒヤハ!!』

「……あんのバカバイク……ッ!!」

彼女では自分を倒せないとかを括ったバイクスマツシュは真依を嗤うが、それが事実である以上真依は言い返すこともできず、適当な悪態をつくに終わる。

それでも銃口をぶれずにバイクスマツシュに向けている辺り、負けを認めてはいないようだ。だが、あの時は確かに減速させられたのだ。正確に車輪を撃ち抜けば、止めるまではいかなくとも援護くらいはできる。

だが、相手もこちららもバイクで全速力で走っているのだ。安定して狙うなど、ほぼ不可能だ。深呼吸をして安定しようにも、バイクが揺れているのだから当然のこと。

だが、急がねばならない。速度からして、あと五分もせずにバイクスマツシュも、自分たちも住宅地に到着してしまう。

そうなれば最後、あのスマツシュを倒せたとしても何かしらの処分は免れない。除名で済めば、まだいい方だろうか。

そんな最悪を避けるためには急がなければならない。なのにバイクスマツシュとこちらの速度はほぼ同じ。これでは追いつきようがない。

焦りが彼女の手元を震わせ、上手く照準も合わせられない中、不意に彼女の腕をビルドが掴んだ。

「邪魔しないでよ……これじゃ——」

「落ち着け。その銃じゃ当たっても倒せねえだろ」

半ばやけくそになり始めている真依にビルドは冷静にそう言うのと、彼女が持つ拳銃に手を添え、呪力を流し込んだ。

彼の手元から発生した煙が真依の拳銃を包み込み、異音と共にその形を歪めていく。

「ちよつと」と困惑の声を漏らす真依を他所に、その変化はすぐに終わった。

煙が晴れると共に姿を現したのは、拳銃とは程遠い大型の銃であった。

銃口が一つから六つに増え、六発分だったシリンダーも大量の弾丸

を思わせる意匠が加わり、大きさも二回りも三回りも大きく。

まさに片手ガトリング銃とも言えるそれに真依は驚くものの、普段は呪力を込めた弾を使っていたが、これには銃そのものに呪力が込められている。

銃型の呪具など、長い呪術界の歴史においても希少なもの。

「これならいけるだろ！任せたぞ、真依!!」

そんな驚く彼女に、ビルドがそう告げた。

出会ってほんの三日。出会い方こそ最悪ではあるが、背中を任せるに足ると、ここ一番を任せるに値すると、彼の言葉には彼女に向けた全幅の信頼が込められていた。

その言葉を受けた真依は鼻を鳴らすと、「誰に物を言ってるのよー」と悪態混じりに照準をバイクスマッシュに向けてた。

彼女の目に迷いも、焦りも、恐怖もない。彼に任されたのだ、その期待に応じなければ呪術師としての名が廃る。

いつもの癖で僅かばかりの呪力を弾丸に込め、ほんの一瞬引鉄を引く。

その瞬間、瞬き一つの間にも六発の呪力のみで構成された弾丸が吐き出され、反動で腕が跳ね上がってしまうものの、寸分の狂いなくバイクスマッシュの後輪を撃ち抜き、ついでと言わんばかりにリア部分をバラバラに破壊していく。

『~~~~~?!?!?』

バイクスマッシュは声にならない悲鳴をあげながら、下半身を粉碎された勢いで地面を転がることになった。

前方で転倒したバイクスマッシュを追い抜き、マシンビルダーを降りたビルドは、スパイダーフルボトルをラビットフルボトルに交換。

『鋼のムーンサルト！ラビット！タンク！イエーイ!!!』

ベストマッチ音声を聞きながら、スパイダーハーフボデイがラビットハーフボデイに換装され、貴丈からしても使い慣れたラビットタンクフォームへと変化。

バイクスマッシュは無事だった腕を使って地面を這い、逃げようとするが、ビルドが逃すわけもない。

彼はゆっくりと彼に歩み寄りながらベルトのレバーを回転。

『《レディー・ゴー！ボルテック・フィンニッシュ!!》』

ベルトから鳴り響く陽気な声と共に呪力が高まり、握りしめた左拳に集まっていく。

そして対して時間もかけずにバイクスマッシュに追いついた彼は、ぎよろりとこちらを睨んでくるバイクスマッシュの目玉を見つめながら拳を引き、

「じゃあな。もう、ゆっくり休め」

そう告げた瞬間、バイクスマッシュの目玉がどこか安心したように細まり、歪な口が微笑むように僅かに口角があがる。

『にい、ちゃん……？おやすみ、なさい……』

その口から漏れたのは、先程の笑い声とは程遠い、無邪気な子供のもの。

誰よりも走るのが好きで、いつかお兄ちゃんよりも速くなると笑っていた、弟の顔が脳裏を過ぎる。

だが、貴丈に躊躇いはない。やると決めたのだ、もう止まらない。

「——ああ。おやすみ」

彼は静かにそう告げて、拳を振り下ろした。

マシンビルダーに跨り廃車置き場に戻るまで、ビルドと真依の間に会話はなかった。正確には彼が放つ話しかけるなというオーラに負け、真依が口を開かなかったと言うのが真実ではあるが。

「戻ったか、超親友^{ブラザー}」

そうして戻ってきた彼を迎えたのは、脱いだ上着を回収して車の窓を鏡代わりに、髪や衣服の乱れを整えていた東堂だ。

補助監督はどこかに電話——内容からして病院だろう——しているようだが、七海の姿がない。

「あの、七海さんは？」

「念のため辺りを警戒している。一応、民間人がいるからな」

東堂はそう言うのと近くの木を指差した。

そこには包帯でぐるぐる巻きにされ、さながらミイラのようになっている人質にされていた男性がいるが、いまだに気絶しているようである。呼吸音のみが聞こえて来る。

彼と七海が無事だとわかり、小さく息を吐いたビルドはベルトからフルボトルを引き抜き、変身を解除。

貴丈の姿に戻った彼は、「変異型呪霊は？」と手短かに東堂に問うた。東堂はただ無言で頷き、ぽんと貴丈の肩に手を置いた。

「無事に仕留めた。苦しかったろうが、もう楽になったさ」

「……そう、ですか……」

彼の言葉に貴丈はようやく胸を撫で下ろし、強張っていた表情が僅かに緩む。

それでも、やはり家族を殺し、殺されたという事実には堪えているのか、疲労も相まって表情には影が差す。

「故人を偲ぶのは当人と縁のある者の特権だ。俺から何か言うことはない」

そんな彼を突き放すように東堂が言うと、真依が前に出て「あんた、たまには人の気持ちを——」と彼を責める言葉を吐こうとするが、それを遮る形で東堂は言葉を続けた。

「だがな、超親友^{ブラザー}。俺たちは親友だ。泣きたいのなら胸を貸してやる。あの時、俺の涙を受け止めてくれたようにな」

「俺は……あなたの涙を受け止めた覚えは、ない、です……っ」

東堂の言葉に貴丈は齒を食い縛り、声を震わせながらそう返すが、目には涙が溜まっていた。

己の未熟さが、東堂たちの手を汚させた。

己の未熟さが、民間人にも被害を出した。

後悔することは多い。反省するべきこともある。後悔し、反省し、それでもやるべきことは一つ。

「……東堂先輩。俺、もっと強くなりたいです」

貴丈は目に溜まった涙を拭い、表情を引き締めながらそう告げた。

手を伸ばしても手遅れかもしれないが、強くなれば顔も名前も知らない誰かを守る筈だ。

誰かの手を借りることも大事ではあるが、強くなれば一人でできることも多くなる。

「そうだな。強さとは結果の積み重ね。勝利の興奮も、敗北の辛酸も、味わってこそ意味がある。超親友^{ブラザー}には、辛い道だとは思うが」

東堂も貴丈の覚悟を受け取ってか、彼の肩を抱きながら不敵な笑みを浮かべた。

「だからこそ、俺が鍛えてやる。あとどれだけ京都にいられるかはわからんが、それまでの間、な」

「いいんですか？折角の正月なのに……」

「どうせ暇をするだけだ。それなら、超親友^{ブラザー}といった方が退屈しない」

東堂はそう言うのと貴丈の背中を叩き、不意に真依にも目を向けた。

「真依、お前もだ。どうせ暇だろう？」

「……!?な、なんで私まで！」

すぐさま真依は東堂に反論しようとするが、それよりも早く東堂が真依が腰にぶら下げているガトリング銃を指差した。

「その呪具。超親友^{ブラザー}が作ったものだろう？それを上手く扱えるようにならねば、超親友^{ブラザー}をお前には任せられん！」

「べ、別に私はそいつなんか任せたくないわよ！」

「そう言うな。お前の本心はこの俺が誰よりも理解している」

「絶対に理解してないわよ！てか、あんたなんか理解されたくないわ!!」

喧々囂々。先程までの張り詰めた雰囲気はどこにやったのか、東堂と真依は貴丈を挟んで口論を始め、貴丈は困り顔で乾いた笑みをこぼす。

二人の口論は補助監督が病院の手配を終え、七海が戻って来るまで続いたのだった。

バイク、サメスマツシユを撃破した翌日。呪術高专京都校校庭。

朝一の冷たい空気を吸い込み、ゆっくりと吐き出しながら、貴丈は相対する東堂に鋭い視線を向けた。

自分の倍はある胴回り、腕を睨みつけ、それを形作る筋肉の強靱さは先の任務で嫌というほど理解している。

純粹な殴り合いでは、まず間違いなく勝負にもならない。だが、その差を埋められるのが呪力の便利なところだ。

「いきますよー」

「よし、来い!!」

貴丈は全身に呪力を纏い、滾らせながら東堂に言う、彼は自信に満ちた表情と声でもって応え、構えをとった。

あの戦い以降、毎日のように行われている東堂との組み手。フルボトルなしで行われるそれは、貴丈の素の力を試し、伸ばすためのもの。

いつもは握り込むフルボトルがない違和感にも、武器もなく、鎧も纏わずに相手と向き合う緊張感にも、ようやく慣れてきた。

貴丈はふつと短く息を吐くと共に、駆け出した。

爪先のみだけで固められた校庭を抉るほどの力を込めて地面を蹴り、静止状態から五歩足らずで最高速度に達すると、加速の勢いのままに東堂の懐に飛び込む。

「シッ」

鋭く息を吐きながら、東堂の鳩尾に向けて拳を放つが、東堂は高速で迫る彼の手を軽く弾き、体勢を崩すと、無防備に晒される貴丈の顔面に肘を打ち込む。

貴丈は「がつ」と痛みには呻きながら後ろに仰け反るが、逆にバク宙をすることでダメージを受け流すと、着地と同時に東堂に飛びかかり、頭を抱えると同時に顔面に膝を叩き込んだ。

校庭に響く快音に貴丈は確かな手応えを覚えるが、同時にこの程度では倒れないことを理解しており、抱えていた東堂の頭を離すと、空中で揃えた両足を彼の顔に乗せ、

「ラッ!!」

膝を伸ばし切ることで、蹴りと同時に跳躍で離脱。

貴丈の全体重を乗せた蹴りに「うお!」と驚く程度の反応しかない東堂は、顔に貼り付いた鼻血と土汚れを拭うと、獰猛な笑みを浮かべながら駆け出した。

着地した貴丈が身構えるのと、東堂が肉薄したのはほぼ同時。

東堂は腰を捻りながら拳を引き、避けるのは無理と判断した貴丈は胸の前で腕を交差させて呪力を込める。

「死ぬなよ、超親友!」

東堂のその宣言と共に、彼の拳が放たれた。

並外れた筋力と呪力を込められたそれは、並の呪霊ならまず間違いないで即祓除する一撃だ。

真つ直ぐに放たれたそれを貴丈が受けた瞬間、凄まじい快音が校庭に響き、地面を揺らす。

「〜ッ!」

受け流すこともできず、それを真正面から受けた貴丈は吹き飛ばされ、数メートル宙を舞い、背中から地面に落ちた。

東堂がしたのは、文字通り呪力を込めた拳で殴っただけだ。それだけだというのに、腕が痺れ、感覚が鈍くなってしまった。

——腕は繋がってる。なら、問題ねえ……っ!

フツと不敵に笑った貴丈は立ち上がり、同時に駆け出す。

彼の笑みに同じく不敵な笑みで返した東堂が構えると、貴丈との間合いが零に。

東堂は彼の接近に合わせて拳を振るい、彼を打ち負かさんとするが、今度は貴丈が彼の拳を払い飛ばし、返しの裏拳で東堂の頬を打つ。

頬骨が軋む感覚に目を剥く東堂だが、貴丈のラッシュは止まらない。

先ほど打ち損ねた鳩尾に拳をめり込ませてほんの一瞬呼吸を止めさせると、刹那の隙に人中、臍、肝臓、再度鳩尾に拳を叩き込み、締めとして顎を打ち上げるようにアッパーカット。

ごぼりと血を吐きながら東堂の巨体が宙を舞う。

「ふん！」

——かと思せかけて、その場で踏ん張りアッパーを耐えた東堂は、貴丈の頭を掴むと、背筋が伸び切った姿勢から彼の額に頭突きを叩き込み、額の傷跡を開かせて出血を強いた。

だが、お互いにその程度の負傷を構うことはない。

貴丈は東堂との間合いが詰まっている事を鋭い痛みの中でも理解し、ならばと彼の顎を打ち据えるように右横拳を放つが、東堂はそれに対して左縦拳で完璧にカウンターを合わせ、逆に貴丈の顎を打ち抜いた。

「……っ!!」

ほんの一瞬脳が揺すられ、意識が飛びかけた貴丈は足を踏ん張ることで耐えるが、そんな彼の腹に東堂の拳が突き刺さった。

肺の空気どころか、血の塊を吐き出しながら殴り飛ばされた貴丈は地面に血痕を残しながら転がっていくが、その途中で体勢を整えて両手足について急制動をかけて停止。

貴丈と東堂はお互いに睨み合いながら、ほぼ同時にぺつと口に溜まった血と痰を吐いた。

額から溢れる血を拭い、全身の痛みに耐えながら立ち上がった貴丈は深く息を吐き、脱力気味に自然体な構えを取った。

同時に呪力を全身に纏い直し、手足に呪力を集中させる。

凧いでいた水面が突如として荒れ始めたように、無害だった呪力が攻撃的なものとなり、数メートルの距離があるというのに肌に刺すような痛みを感じる。

東堂も彼の雰囲気が変わった事を肌で感じ、警戒しながら身構えると、貴丈は改めて拳を構えた。

——超親友ブラザーの呪力。相對するところまでものか……っ!

ぞわりと鳥肌を立てながら、東堂は神妙な面持ちで貴丈を見遣る。久しぶりの再会——と、東堂は思っている——を果たしたあの日は、貴丈と面と向かっても恐怖はなく、むしろ安堵さえも感じるほどに優しい呪力を纏っていた。

だが、昨日の変異型呪霊討伐と、民間人に死傷者が出た件があった

からか、貴丈の気分が最悪に近いこともあるだろう。今の貴丈の呪力はヤスリのようにざらつき、針のように肌に突き刺さってくる。

気分次第で呪力の質が変わってしまうというのは、呪術師としては減点対象だが、彼の事情を知っているとあまり責める気にもならない。

——しかし、それを言わないのは超親友ブラザーの成長の妨げになる！

「超親友ブラザー。気持ちはわからんでもないが、呪力が無駄に暴れすぎだ。もう少し落ち着かせる、次からは言わんからな」

「……っ！うす！」

東堂が静かに告げた指摘に、貴丈はハツとしながら返事を返し、一度深呼吸をした。

同時に暴れ狂っている呪力が落ち着きを取り戻すが、それでも普段よりも数段濃密な呪力を纏っているのだから、思わず嫌な汗も流れるというもの。

変異型呪霊スマツを祓除した影響だろう。彼らは死ぬと同時に貴丈に呪力として還元され、彼の力の一端となっているのだ。昨日の彼よりも強くなっているのは当然だ。

呪術師は普通、そんな急激に強くなることはない。黒閃を経験すればあるいはそんな事もあるだろうが、それは強くなるための一步目に他ならない。二歩目、三歩目と歩みを続けることで人は強くなっているのだ。

だが、貴丈はどうだ。変異型呪霊スマツを倒すだけで二段も三段も飛ばして強くなっていき、それで生じる肉体と呪力のズレもその日、その瞬間に修正していく圧倒的なまでの呪力センス。

もつと場数を踏み、実戦経験を経ていけば、きっと彼は大成する。東堂にはその確信ブラザーがあった。

——それを超親友ブラザーが望むかどうか、だがな……。

だが、貴丈にとって実戦とは家族殺しの苦行だ。負ければ死に、勝っても家族が死ぬ。その重圧を跳ね除け、邁進することができるだろうか。

いいや、それでも彼は進むのだろう。既に歩み始めてしまったの

だ、止まることは死んでいった家族への冒瀆に他ならない。

——ならば、俺にできることは……！

「さあ、来い超親友！^{ブラザー}全力で導いてやる……ッ！」

「それで二人とも、これはどういうことかしら？」

歌姫にとって、東堂は少々面倒な性格をしているが可愛い生徒であり、貴丈は五条から半ば強制的に任された、通う学校こそ違えど可愛い生徒である。

生徒同士の訓練や交流を制限したり、禁止したりするつもりもないが、その内容に対して苦言を呈するのは教師として仕方がないことだろう。

「いや、朝から組み手を」

「超親友と汗を流していただけだが？」^{ブラザー}

だが、その苦言を呈されている肝心の二人が罪悪感を感じていないどころか、なぜ怒られているのかも理解していない様子を見て、歌姫は額に青筋を浮かべた。

「校庭も滅茶苦茶だし、何より二人ともぼろぼろじゃないの!？」

そしてあちこちが抉られ、凹凸だらけになった校庭と、血と土汚れ、汗に塗れた二人の身体を指差しながら、「何でそんなに落ち着いてるのよ!？」と二人に怒鳴るが、当の二人は首を傾げながら互いに顔を見合わせた。

「別にこのくらいな怪我は珍しくもないですよ？」

「この程度、怪我をしたうちに入らん」

同時に二人はあっけらかんとそう言うが、そうしている間にも貴丈の額から溢れた血が顔を赤く染め上げ、東堂も身体の内側からしみ出た血が服を赤く染めていく。

「……説教の前に治療ね。保健室行くわよ」

歌姫はそんな満身創痍の二人の姿に溜め息を漏らし、湧き出た怒りを落ち着かせて最優先にすべき事を思い出す。生徒が怪我をしているのだ、あれこれ説教する前に、治療してやらねば怒るところの話で

はない。

「これ、縫わないと駄目かもしれないですね」

「流石は超親友だ。呪力と筋力で固めた俺の肉体を、こうも容易く破壊するとは」

そんな治療待ちの二人が、お互いに相手に負わされた傷を見せあいながらあれこれ言っているが、おかげで二人の歩調はだいぶ緩く、近場の保健室にもなかなか辿り着かない。

「早くしなさい……」

そうしている間にも校庭から廊下まで二人の血痕が点々と続いており、また掃除をしなければと歌姫は額に手を当て、小さく溜め息を吐いた。

貴丈が悪人でないのは初対面の時に理解はできた。そう、彼には悪意はないのだ。ないのだが、彼が来てから大量の窓が割れたり、廊下が血で汚れたり、包帯を以上に消費したりと、色々な意味でも問題が立て続けに起こっている。

何度も言うが、貴丈に悪意はない。彼が誰かの悪意に応戦したり、あるいは周りも見えないほどに集中した結果に起こっているのだ。あまり強くは責められない。

それはそれとして、

「そうだった、桐生くん」

「はっ？」

彼の怪我で後回しにしてしまったが、彼にとってはそれなりに重要な話を思い出し、歌姫は振り返りながら言う。

「バイクの免許に関して話すから。後で職員室まで来てね」

「……あ」

彼女に言われてようやく貴丈も思い出したのだろう。バイクスマッシュを追いかけるため、自分はマシンビルダーを駆ったが、あの時は頭の中に操り方が思い浮かんだからできたことだ。

あの感覚は忘れていないし、忘れるわけもないのだが、呪術師とはいえ自分は学生だ。今後バイクを運転することがあった時に面倒避けると言う意味でも、免許は必須だ。

まあ、呪術業界では多少のズルをして最短最速で免許や資格を取る例もあるにはあるそうだが……。

貴丈はマジかと溜め息混じりに肩を落とすと、隣を歩いていた東堂が「何事も経験だ」と慰めの言葉を投げながら彼の肩を叩いた。

その拍子に二人の身体のあちこちから血が噴き出し、廊下を汚すことになるのだが、二人は気にしない。歌姫は小さく溜め息を吐いた。年末の大掃除で綺麗になった筈の廊下に二人の血痕が残り、鉄臭い血の臭いが鼻腔を擽る。

「二人とも、治療が済んだら掃除をお願いね。免許の話はその後でいいわ」

流石に無視できないものとなり始めたそれに、歌姫は頬を引き攣らせながら二人にそう告げて、それを言われた二人は顔を見合わせると同時に頷いた。

二人は何も言わなかったが、貴丈の顔は如実に何を言いたいかを表している。

——別に言われなくてもやりますよ。

悪意もないもない、善意のみで作られたその表情は、逆に相手の神経を逆撫でし、歌姫も流石にほんの僅かな憤りを感じてしまう。

東堂は「超親友ブラザーとならなんでもやってやるさ」とやる気十分といった様子。

その協調性を普段から見せて欲しいと、心から思う歌姫なのだった。

やる事はいつも通り。照準を定め、引き金を引く。

銃口から一発の弾丸が吐き出され、標的を射抜く。

「きゃっ!?!」

——筈なのだが、放たれたのは銃に込められた貴丈の呪力で形作られた六発の弾丸だ。

六発のほぼ同時発射による凄まじい反動を抑え込むことができず、構えた腕が跳ね上がり、その勢いのままに尻餅をついてしまう。

誰にも見られていないかを確認するように周囲を見渡し、舌打ち混じりに立ち上がる。

貴丈の手で作り替えられた拳銃——正確には片手で扱えるだけのガトリング銃だが——を睨みつけ、溜め息を一度。

彼曰く、一度変えたものは戻すことができないため、もうこれに慣れてくれとの事だが。

——替えの銃は何挺もあるし、別にこれに拘る理由もないのよね。彼の言葉を律儀に守ろうとしている自分を自嘲し、部屋に替えの銃を取りに戻ろうとするが、不意に件のガトリング銃を見つめた。

あの時、これがなければあの変異型呪霊^{ス・マッ}を取り逃していた事だろう。今後、呪霊と戦う時に他の武器が効かない、あるいは使えない状況になった時に、これを十全に扱えなかつたら。

万が一に起こり得る、最悪の状況を想像してしまい、真依は深々と溜め息を吐いた。

そうなれば自分は死ぬだけだ。いや、呪霊が相手となれば、それよりも酷いことになる可能性もある。

そうはなりたくない。死にたくない。なら、今すべき事は一つだ。真依はじつとガトリング銃を見つめると、再び射撃姿勢を取った。

深く息を吸い込み、吐き出し、ブレを抑える。

後は、いつも通りだ。照準を合わせ、引き金を引き、六発の弾丸が放たれる。

「ッ！」

反動で腕が跳ね上がり、先程同様に体勢を崩し、背中から倒れそうになるが、

「真依!?」

不意に自分の名を呼ばれ、誰かに抱き止められた。

「え?」と声を漏らした彼女の視界に飛び込んでくるのは、額に包帯を嚴重に巻かれた貴丈だ。

彼は心配そうに彼女を見つめながら、倒れなかった事にホッと安堵の息を吐いた。

「大丈夫か?」

「え、ええ……」

困惑しつつも応じた真依だが、彼の手が自分の腰を支えていることや、火傷痕が目立たないがそれなり以上に整った顔が目の前にある事に気付き、すっと目を細めて彼に告げた。

「離れなさい……っ！」

「え？ああ、悪い」

語気を強めて彼に離れるように言っていると、彼は申し訳なさそうにしながら彼女を立たせ、距離を取った。

同時にガトリング銃を向けられると、慌てて両手を挙げて降参を宣言。

「あんた、東堂と組み手する筈でしょ。なんでここにいるのよ」

「いや、やってただけだよ。色々あって、今は校庭と廊下の片付けを」

「……？今度は何したつての？一応、あんたは東京校の所属でしょう」
彼がここにいる理由を問うた真依に、貴丈は悪びれた様子もなく答えると、彼女は溜め息混じりにそう告げた。

一応だが、貴丈は東京校の生徒だ。姉妹校とはいえ、他所の学校の世話になっているというのに、何度も問題を起こすなど、苦言を呈するが、貴丈はどこ吹く風だ。

「ちよつと、二人して熱くなりすぎた。校庭ぼろぼろ、廊下は血塗れだ」

誤魔化すように笑いながら貴丈が言うと、真依は不意に頭痛を覚えた顛顛の辺りを抑えながら「ああ、そう」と吐き捨てた。

何故だろう。彼が来てからというもの、この校舎に対して様々な形でダメージを与えられている気がする。

まあ、そのうちの一度は自分が渦中にいた為、今更文句を言うつもりもないが。

「もう少し大人しくできないの？子供じゃないんだから」

だが、多少の皮肉を言うのは許されるだろう。

一旦ガトリング銃を下ろした真依は、腰に手を当てながら彼を見下すような声でそう告げると、

「成人してないって意味なら、まだ子供だけだな」

貴丈は両手を広げながら肩を竦め、ぼそりと彼女に言い返す。

呪術師の端くれとはいえ、二人は高校生だ。大人と子供のちようど境に位置する年齢の彼だが、自分はまたまだ子供だと思っっているのだろう。

大人というのがどんなものかはわからないが、きつと自分と同じ状況になってももつと上手く立ち回れるのだろうかなど、何となく夢想してみる。

自分がもつと大人つであつたなら、今とはだいぶ違う道を歩んでいたのだろうか、考えるだけ無駄だ。今の自分ができる事を、ありつたけの力で頑張るしかない。

「ホント、俺はまだまだ子供だよ」

「……。なに一人で感慨に耽つてるのよ」

俯き加減に目を細め、しみじみと彼が呟くと、そんな彼の後頭部をガトリング銃で殴りながら真依が声をかけた。

「いつて〜!?!」と突然の鈍痛に悲鳴をあげ、後頭部を押さえながら蹲つた彼を見下ろしながら、真依は言う。

「東堂と同じこと言うのも癪だけど、あんたはもつと周りを頼りない。昨日だって、あんた一人じゃどうにもならなかつたでしょう」

「……そう、だな。うん、そうだ」

彼女の言葉にほんの一瞬考え込むように黙り込んだ貴丈は、すぐに柔らかく微笑んで頷いた。

一人であれこれ考えて立ち止まるくらいなら、誰かを頼つてでも前に進んだ方がいいだろう。

「でも、それはお前にも言えるんじゃないやねえか？色々背負い込んでんだろ？」

そして助けしてくれるのなら、助けるのも当然のこと。

真希も中々のものを背負い、それでも一人でどうにかしようとしているが、それは真依も同じこと。いや、真希と双子の姉妹であるというだけで、禪院家からのやつかみもあるだろう。

物理的に距離のある真希ならともかく、禪院家宗家が目の前にある

京都では、先日の直哉のように直接手を出してくる可能性も高い。と言うよりかは、事実出されていたのだし。

彼の気遣いに真依は言葉を詰まらせるものの、「大丈夫よ」と返して彼に背を向けた。

「いや、大丈夫じゃねえだろ。この前も直哉に絡まれてたし」

「そう思うなら、これ以上私に構わない方がいいわよ。余計な因縁付けられるわ」

「それは、もう手遅れじゃねえかな」

背を向け、肩越しに投げられた言葉に貴丈は苦笑を漏らし、蹲ったついでにその場で胡座をかきながら言う。

「前にも言ったけど、俺は人助けが好きなんだよ。なんか悩みとかあれば相談に乗るぞ」

「そう。なら、一ついいかしら」

言ったそばから頼ってきた真依の反応に嬉しく思いつつ、「おう、なんだ」とその頼みを聞こうとすると、彼女は無言で校舎の方を指差した。

反射的にそちらに目を向けた貴丈は、同時にそこにいる人物に気付いて「げ……」と呆れたような声を漏らす。

そこには窓からこちらを見つめる東堂の姿があり、二人に気付かれた事を察した彼は、『こっちは俺に任せておけ！』と言わんばかりに胸を叩くと、雑巾の入ったバケツを担いで消えていく。

廊下掃除の途中で抜け出してきたのだ、そんな自分を探して歩き回っていた時に、校舎裏で自分と真依が二人からの場面を目撃、そして去っていった。

「……いい加減ウザいから、あれの誤解解いておいて」

「それは、いきなり無理難題だな……」

真依からの頼みに貴丈は溜め息を吐くと、服の汚れをはたき落としながら立ち上がり、「やるだけやってみる」と告げて踵を返して校舎の方へ歩き出す。

そんな彼の背を無意識の内に見つめながら、真依は拳を握っていた。

正義感からくる優しさなど、こちらの身の上を知つての同情など、不要だ。以前なら、そう突き返していた筈なのに。

自分は知ってしまった。彼がなぜ人を助けるのかを。なぜ戦うのかを。

そして、戦いながらも仮面の下で涙を流しているだろうことも。

そんな普通なら誰かに助けられ、それでようやく立ち上がれるかもわからないまでに追い込まれている筈なのに、誰かを助けようと足掻く彼の姿を、知っている。

「ああ、本当、ムカつく……っ」

無意識の内に彼を目で追っていることも、何だかんだで彼を頼ってしまった己の弱さも、そして、今の自分では彼に恩を返すこともできないことも、理解しているからこそ、彼女の胸中には怒りがあつた。

「ホント、ムカつく……っ！」

彼女は行き場のない怒りを込めて、的に向けてガトリング銃を放つのだつた。

呪術高专京都校、職員室。

朝一にそこを訪れた七海は、補助監督に渡された書類に目を通していた。

眼鏡の下で目を鋭く細め、その内容を一言一句残さず頭に叩き込んでいく。

相手はおそらく変異型呪霊^{ス マツ シュ}。報告にある限り、これが京都近辺に潜伏する最後の変異型呪霊^{ス マツ シュ}だろう。

場所とはある街中に放置された廃ビル。かつては複数の店が入っていたであろうそこに、他の呪霊を含めて変異型呪霊^{ス マツ シュ}が潜伏している可能性が高い。

現にその周辺で子供を含め数名が行方不明になっており、呪霊か変異型呪霊^{ス マツ シュ}に襲われ、攫われたのだろうか。

その子供の救助と、変異型呪霊^{ス マツ シュ}、呪霊の殲滅が、貴丈が京都における最後の任務になる。

今回も変異型呪霊^{スマッシュ}だけでなく、要救助者がいる。彼には、また負担を強いることになってしまう。

「……どうにか、彼に楽をさせたいのですが」

眼鏡の位置を直しながら誰に言うわけでもなく呟いた七海は、不意に窓の外に目を向けた。

職員室から見える校庭には、自分たちで抉ったであろうクレーターを埋める貴丈と東堂の姿があり、遠目からでは彼は楽しそうに笑っているように見える。

その笑顔が、少しでも長く続くように願ってはいるが、現実はそのを許してくれない。

子供が背負うにはあまりにも重い十字架が、引き剥がすこともできないそれが、あの青年の背中に縛りつけられている。そして、彼がそれを背負う事を自ら望んでしまっている。

これは七海の持論ではあるが、大人になるには小さな絶望の積み重ねが必要だと思っている。

好きだった商品が棚からなくなる。抜け毛が増えた。そんな下らない絶望が積み重なり、人は大人になっていく。

それなのに、貴丈は一家全滅。そして犯人は自分というこれ以上ない絶望を叩きつけられ、大人になる準備もないままに大人にならざるを得ない状況に放り込まれてしまった。

そんな彼を、自分が救えるのだろうか。

一人の大人として、彼の助けになれるのだろうか。

七海はそんな自問をしながら、東堂と和気藹々としながら校庭を駆け回る貴丈を、じっと見つめていた。

校庭の整地と廊下の掃除を終える頃には、高かった日も傾き始め、空は少しずつ夜の暗さが強くなり始めていた。

遠くの山の輪郭が僅かに橙色に染まり、そこから紫のグラデーションを描きながら見事な黒へ。

そんな空を廊下を進みながら見上げていた貴丈は、七海に呼ばれたのを合図に意識を前に戻す。

「おそらくですが、これが桐生くんが京都で行う最後の仕事になると思っています」

眼鏡の位置を直し、書類を確認しながら告げられた言葉に東堂は「なんだと!?!」と驚きを露わにし、真依は何をいうわけでもなく小さく息を吐く。

「超親友^{ブラザー}！なぜそれを言ってくれなかった!?!これが終われば、俺たちはしばしの別れになるんだぞ!?!」

「……別に携帯の番号は教えたでしょう。暇な時に電話してくれれば話せますよ」

貴丈の両肩を掴み、ぐわんぐわんと前後に揺らしながら、東堂は激昂の声を上げた。

彼からすれば同じ中学からの親友だ。進む道が同じでも、やむを得ない都合で離れ離れになり、様々な偶然を経てこうして久しぶりの再会ができたというのに、また離れ離れになるのか。

今にも泣き出しそうな顔で迫る東堂に、貴丈はどこか冷めた表情で切り返し、ぼんぼんと東堂の肩を叩いた。

彼の一言にハツとした東堂は涙を拭うと、強がるように笑みを浮かべながら言う。

「……確かにそうだな。すまん、もうあの頃とは違うのだった」

金もなく、携帯も持たせてもらえなかった中学時代とは違うのだ。今の自分たちにはあの頃よりも自由があり、選択肢も多い。携帯電話というまさに魔法の道具があれば、距離に関係なくいつでも話せるではないか。

「ならば、行くか超親友！」

先程までの泣き顔をどこへやったのか、ドン！と貴丈の胸を叩きなからそう告げる。

「うす」と胸を押さえながら小さく頷いた貴丈が、ちらりと七海に目配せすると、彼らは補助監督が用意してくれているという車を目指して歩き出す。

「……もう帰るのね」

東堂に絡まれ、もみくしやにされている貴丈の背中を見つめながら真依が呟いた言葉は、誰の耳にも届く事なく、窓から吹き込む冷たい風に攫われていった。

草木も眠る丑三つ時。

貴丈を始めとした呪術高専の学生三人と、引率の七海は、郊外にあるとある廃ビルの前にいた。

地上五階建ての大きなビルは奥にも長く、かつてはいくつもの店が軒を連ね、多くの人で賑わっていたであろうことがわかる。

同時に、時代に取り残されて朽ちるを待つのみになってしまった哀れな建物であることも、わかってしまう。

「京都って聞いたからもっとお寺とかに行くもんかと思ってましたけど、結局こんな感じの建物ばかりでしたね」

見るからに呪力を放ち、まだ入ってもいけないのに嫌な気配を漂わせるビルを見上げながら、はあと小さく溜め息を吐く。

せっかく京都に来たというのに、自分が行った場所といえは京都呪術高専と近代的な廃墟や廃車置き場ばかり。有名どころの寺院は影すら見えない。仕事で来たのだから観光するなど言われたらそれまでかもしれないが、貴丈にとつてはそんなことを考えねばやっつけられないのもまた事実。

彼の言葉を聞いた七海がどこか同情的な視線を向けつつ、ふーっと深く息を吐いて表情を引き締める。

既にベルトを巻き、あとはフルボトルをセットするだけの貴丈。

ゴキゴキと指を鳴らし、貴丈に向けてウインクする東堂。

拳銃の弾倉を確認し、チェンバーを閉じる真依。

三人がそれぞれの準備を終えていることを確認し、背中の鉋を取り出した七海が「では、行きましょう」と告げ、嚴重に封鎖された扉を蹴り破り、彼を先頭に廃ビルに突入。

その後ろに貴丈、真依が続ぎ、殿と東堂が足を踏み入れ、各々が警戒を強めた瞬間、ボタン！と音を立てて七海に蹴破られ、壊れた筈の扉が勢いよく閉まった。

「え……う」

驚きの声をあげたのが誰だったかの、それはその場にいる四人にとってはどうでもいいことだった。

そして、背後の壊した筈の扉が閉まったことも、どうでもいいことだった。

彼の思考が向けられているのは、事前に確認した建物の地図と自分の現在の位置に関すること。

そして今、自分たちがいるのは地図上のどこでもないという有り得ない事実であった。

本来なら扉を抜けた先には吹き抜けがあり、上に続く階段や空になった店用のスペースなどが確認できる筈なのだ。

なのに自分たちは学校の昇降口を思わせる空間におり、目の前にあるのはT字に伸びる長い廊下のみ。

「なに？これは……！」

「マズイぞ、Mr. 七海！」

この状況に放り込まれ、真っ先に思考が回復したのは七海と東堂だった。

二人は慌てて閉まった扉に目を向けるが、そこにあるのは一枚の壁であり、扉が消失していた。

それでも左右にある下駄箱の存在もあり、何となく学校の昇降口を思わせる空間に、呪術師たちは放り込まれたのだ。

「なによーまさか、これって……！」

そして二人の声にハツとして我に返った真依が拳銃をあちこちに

向けながら強烈な焦りを含んだ声を漏らし、額には嫌な汗が垂れる。「ここは相手の『領域』の中!? やられた、相手は特級か……!」

東堂が珍しく慌てたようでそう捲し立て、何か印を結んで『領域』なるものに対抗しようとする中、七海は抱いた違和感をそのまま口にした。

領域とは、呪術における到達点。己の内にある心象風景を結果とし、相手を閉じ込めるある種の結界術。

その効果は強力で、その中に入ってしまったえば勝敗は決すると言っても過言ではない。

相手の領域に入るとはつまり、相手の有利な戦場で戦うのと同義。その内側で放たれる術式は、必中となって襲いかかってくるのだ。

「ここが領域だとしたら、どうして攻撃が来ない……? まだ未完成なのか?」

鋭い目つきで辺りを警戒しながらそう口にした七海に対し、貴丈は下駄箱を撫でたり、叩いたり、その質感を確かめるような行動を取っていた。

領域に関しては五条から教わっている。その危険性も、耳にタコができるほど叩き込まれている。

だがこの時の貴丈の胸にあったのは危機感でも緊張感でもなく、ある種の安堵——そして、決して戻れない過去への情景だった。

「桐生くん?」

「どうした、ブラザー超親友」

警戒する三人を他所に、一人だけどこか懐かしげに、それ以上に悲しそうに辺りを見渡す貴丈の様子に怪訝な眼差しを向ける中、真依が彼の脇をどついた。

「あんた、何してんのよ」

「ふぐ?! い、いや、領域つてスゲーなつて思つてよ……」

真依に殴られた脇腹を押さえながら、何かを誤魔化すように笑った貴丈だが、その目に宿る感情はどうにもならない。

強い後悔と悲嘆、そして決して消えない己への憎悪の炎が揺れている。

「……桐生くん。この場所に見覚えが？」

絶対に触れてはならない話題なのは承知だ。だが、この状況を打破するには些細な情報でも拾わなければならぬ。

この場は生存を優先し、心を鬼にして問いかけた七海に対し、貴丈は乾いた笑みを溢しながら「知ってますよ」と返し、下駄箱の一番端の囲いを撫でた。

「——俺がいた孤児院です。ここが俺の下駄箱でした」

ポンポンとかつて自分の靴を入れるのに使っていた下駄箱を叩き、懐かしさを噛み締めながら拳を握り締めた。

爪が皮膚を破り、血を滴らせながら、眉間に皺を寄せて歯を食い縛る。

彼にとつての特大の地雷を踏み抜いた七海が珍しく言葉を失い、東堂と真依もかける言葉に迷う中、貴丈だけが口を動かす。

「領域については五条先生から教わってます。この領域が、術式が付与されていない、形だけのものだったこともわかりました」

瞳を赤く染め、涙の代わりに呪力を溢れさせながら、ここに住まう変異型呪霊の姿を探ろうとするが、まだ距離があるのか視界にノイズも入らない。

だが、この場所が領域になるほどに思い入れがある人物など、父を除けばあと一人。

「俺は変異型呪霊を探します。行方不明の人たちは、任せます」

貴丈は一方的にそう告げると、どこか断片的な足取りで昇降口から廊下に歩み出し、左に伸びる廊下を進み始める。

「桐生くん！単独行動は——」

七海の制止の声を無視し、彼はT字の曲がり角の向こうに消えていく。

「頭に血がのぼっている。いや、怒りすぎて周りが見えていないだけか。超親友らしくない」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ!?追いかけるわよー!」

顎に手をやり、眉を寄せながら貴丈の状態を冷静に推察する東堂に対し、真依は慌ててその場を走り出し、貴丈と同様に左の廊下へと足

を進めた。

「真依らしくもない。まったく、恋は人を変えるな？ Mr. 七海」

「なぜ私に聞くのですか？ 追いかけますよ！」

ふふんと鼻を鳴らし、なぜか楽しそうに笑う東堂に七海がツツコミを入れ、二人は揃って貴丈と真依の後を追いかけてようとするが、

「な……!?!」

「なんと!?!」

二人の前に立ち塞がったのは、一枚の壁だった。

東堂は反射的に殴りつけるが、壁はびくともせず彼の拳を弾き返す。

「領域内だからな、なんでもありか！」

東堂は赤くなつた拳を摩り、堪らず舌打ちを漏らす。

ここは敵の領域内。何があつてもおかしくないのは、百も承知。

真依のことは貴丈に任せ、東堂と七海は別ルートを探すべく振り向くと、二人は揃って目を細めた。

そこにいたのは数十の呪霊の群れだった。虫のようなものから、かろうじて人型を保つものまで、種類こそは様々だが、変異型呪霊とは違う意味不明な言葉の羅列や、叫び声をあげている辺り、自然発生の呪霊であることは間違いない。

狭い廊下に隙間なく詰まりながら、体を壁や天井、床に擦りつけてじわじわと二人の方に近づいてきている。

「洒落臭い。蹴散らす！」

「時間をかけてはいられません。三分で終わらせませす」

東堂は指先で鼻を弾くと拳を構え、七海はネクタイを緩めながら鉈を構える。

見る限り、相手は低級の呪霊ばかり。数が多いだけの雑魚だ。

二人は合図もなく同時に走り出し、呪霊の群れへと突撃するのだった。

後方、壁に挟まれた廊下の向こうで七海と東堂が大立ち回りをして

いる一方、貴丈と真依は静かな廊下を歩いていった。

貴丈は廊下の途中にある扉には見向きもせず、黙々と奥へと進む。

「ちよつと、待ちなさいよー！」

真依と一切ペースを合わせることもなく、ずかずかと無造作な足取りのまま、早歩きで更に奥へ。

壁に飾られた、小学校低学年の子どもが描いたと思われる絵や、誰かが撮った家族写真にも見向きもせず、ひたすらに奥へ。

まともな光源もなく、薄暗い廊下を、勝手知ったる道のように、迷いなく突き進む。

一切言葉を発さず、聞こえてくるのは何かを堪えるように力んだ息遣いのみだ。

「だから、待ちなさいってば！」

短い付き合いいとはいえ、見たことがない彼の姿に真依は声を荒げ、彼の手を取って無理やり足を止めさせた。

貴丈は振り返らない。離せとも言わない。ただ真依に背中を向けて、彼女の言葉を待っている。

「ここがあんたの思い出の場所だったのはわかった！けど、流石に無茶よー！死に行くつもり！」

「なんだ、心配してくれるのか？」

「違うわよ!? あんた、私が言ったこと忘れてないでしょうね？」

真依の真面目に心配する声に皮肉的な笑みを浮かべながら返すが、彼女は不満そうに目を細めて切り返す。

「俺が忘れっぽいって？」と肩を竦める貴丈だが、真依はそんな彼の正面に回り込み、その表情を覗き込んだ。

いつかの直哉と対峙した時と同じように赤く輝く瞳は、その輝きを翳らせて、どこか虚な印象を与えてくる。

いや、当然だろう。彼にとつては自分の犯した罪を真正面から突きつけられているのだ。目を背け、振り返らず、前だけを見て進もうとするのはある意味で当然だ。

あまりにもこの領域は術式的な攻撃力は皆無でも、彼にとつての致命傷を容易く与えてくる。

「言った筈よね、私たちを頼りなさいって」

「……」

「なのに、なに？一人ですみませんかと進んで、私はいないみたいに」

「……」

ずっと彼に詰め寄り、胸倉を掴みかからん勢いでつい昼間にしたり取り引き合いに出した真依は、はあくど深々と溜め息を吐いた。

「……悔しいけど、私じゃほとんどあなたの力になれないわ。けど、話を聞くくらいならできるわよ」

すっと目を細め、神妙な面持ちでそう告げた真依に貴丈は驚いたようにほんの一瞬目を見開くが、小さく溜め息を漏らして自分の腰に手を添えた。

「お前って、意外と世話焼きだよな」

「違うわよーただ、あんたが私が言ったことも忘れてるから馬鹿にしただけ」

貴丈が苦笑混じりに、どこか弄りを含んだ声音でそう告げると、真依は間髪入れずに否定の言葉を吐き、あくまで心配していないという風を装う。

そんな相変わらずのようすでいて、こちらを気遣う彼女の姿に毒気が抜かれたのか、貴丈は血を滴らせる拳を開き、一度深呼吸をした。

「……ここにいる変異型呪霊スエマツの正体、もうわかってんだ」

そして重々しく告げられた言葉に、真依はほんの僅かに驚いた様子を見せるが、彼が焦っていた理由を理解し、眉尻を下げた。

「誰？」

別に聞かなくていいだろうと理解していながら、それでも動いた口を止められなかった。

それが彼の傷を抉ることだということもわかっている。だが、このまま黙っていては、それ以上の傷を彼が負うことになる。

自分は七海のように大人ではない。東堂のようにイカれてもいない。貴丈のように強くもない。そして真希のように、彼の側にいたこともない。

だが、それでも、嫌われ役になる程度のことならでできる筈だ。

「それは――」

貴丈が目を伏せ気味にその言葉を告げた時、真依はいよいよをもつて数秒前の判断を呪うことになる。

そして彼が成そうとすることの重みを、再び叩きつけられることになった。

「これは、なんだ」

雑魚呪霊の群れを蹴散らし、貴丈の実家ともいえる場所を模した領域を探索していた東堂は、その部屋にたどり着くと共に困惑の声を漏らした。

遅れて部屋に入った七海が「どうかしましたか？」と問いかけながら同じく部屋を見渡すと、眉間に皺を寄せて「これは」と驚倒にも似た声を漏らす。

そこには大量の呪霊の死体が積み重なっていた。部屋を暴れ狂う蛇か、押さえる人物を失った消火ホースのように、縦横無尽に暴れ回る数本の血塗れの鎖が、それらを狩り尽くしたのはまず間違いない。そしてそんな鎖の奥。何も映さない窓の近くに、二人が探していた人がいた。

毛布代わりのぼろ布を被せられ、すやすやと穏やかな寝息を立てている子供が数人。それぞれが肩を寄せ合い、寄りかかりあいながら、静かに雑魚寝している。

東堂と七海は状況が理解しきれず顔を見合わせるが、すぐに鎖の方に目を向けて構えを取った。

とりあえず救助を最優先だ。鎖を破壊して安全を確保し、どちらか一方が残って子供達を守り、もう一方が貴丈と真依と合流を目指す。

二人は目配せのみで簡単な会議を終えると、ほぼ同時に動き出した。

東堂は床を砕くほどの踏み込みと共に、呪力を込めた拳で鎖を砕こうとするが、同時に不可思議なことが起こる。

あれだけ動き回っていた鎖たちが突然動きを止め、東堂の拳を何の抵抗もなく受け、そのまま砕け散ったのだ。

避けられるか、あるいは腕に絡みついてくると予想していた東堂は面を喰らいつつもそのまま鎖を殴り砕き、勢いのままに放った回し蹴りで隣の鎖も破壊した。

七海も二連撃で二本の鎖を寸断し、その手応えの軽さに怪訝そうに眉を寄せ、他の鎖の反撃を警戒するが、やはりと言うべきか何も仕掛けてこない。

——なんだ、この違和感は……？

七海のそれは東堂も感じていたようで、拳を構えたまま首を傾げ「逆にやりづらいな」と悪態を吐く始末。

七海も同様の感想を抱きながら、改めて鎖の動きを観察。

暴れ狂い、ぶつかるだけで床や天井、壁を削り取るほどの呪力が込められていた筈なのに、いまやその呪力は霧散し、もはやただの鎖程度の力しか残されていない。

七海はともなく、恵まれた肉体を持つ東堂なら、呪力なしでも受け止め、引きちぎれる程度の強度しかないだろう。

——手加減されている？いや、まさか。

呪霊がこちらに手加減を？

そんな疑問が脳裏を過り、すぐにあり得ないと断じる七海だが、やはり一度抱いた違和感はそう易々とは拭えない。

そもそもとして術式が付与されていない領域だとしても、ここは変異型呪霊スーマッシュが生み出した領域であることはまず間違いない。

あの鎖がその術式だとしたら自分たちは既に鎖に捕らえられるか、寸断されている筈だ。足元の呪霊たちがいい例だろう。

七海が眉を寄せ、万が一の可能性を——まだ自我を強く残しているという、貴丈からすれば最悪の可能性を思慮し、小さく唸る。

七海は東堂に視線を向け、構えを解くと共に鎖の方に足を向けた。

東堂も念のためいつでも手を叩けるように構える中、七海は鎖の間を縫いながら足を進め、無傷のまま子供達の元にたどり着いてしまった。

マジかと驚倒を露わにする東堂は確かに見た。鎖たちが役目を終えたように霧散し、消えていくその瞬間を。

「やはり、この変異型呪霊！」

「ええ。私は桐生くんと合流します。この変異型呪霊を殺させる訳にはいきません」

東堂にこの場を——子供達の護衛を任せ、返事を待たずに部屋を飛び出してしまふ。

だが東堂もそれに関して同じ意見なのか、「ここは任せろ！」とサムズアップと共に七海を見送った。

あれだけ騒がしくしたというのに、いまだに眠りこけている子供達を見遣り、「呑気なものだな」と苦笑混じりに呟いた。

懐かしい歌が聞こえた。

物心ついた頃から——いや、それよりもずっと前から聞いていた、とても懐かしい、歌が。

聞いているだけで胸が温かくなる。聞いているだけで心が安らぐ。

その筈なのに、今は胸が締め付けられる。心が揺れ、呼吸をするだけでも酷く疲れてしまふ。

『~~~~~』

それでも足は止まらない。

この先にいる変異型呪霊の正体も検討がついている。そしてその予感も、既に確信へと変わっていた。

貴丈は目の前で道を塞ぐ扉を蹴り破り、その部屋と、この領域の主たる変異型呪霊に目を向けた。

子供用の玩具や、勉強道具が散乱している、孤児院の娯楽室の中央。そこに座り込み、鼻歌を歌っていた変異型呪霊は彼の登場に驚くことも、そして身構えることもなく、歌い続けていた。

「お待たせ、母さん」

貴丈が柔らかく、相手に全幅の信頼を寄せる声音で声をかけた瞬間

歌が止まり、ゆっくりと彼の方に顔を向ける。

辛うじて人型を保つ身体に何重にも鎖を巻きつけ、南京錠で己を縛る異形——ロックスマツシュ。

貴丈を見た彼女は笑うように肩を揺らし、己を縛る鎖を腕力のみで引きちぎると立ち上がり、彼を迎え入れるように両腕を広げた。

『あつ、ひろお……。みんなのこと、おねがい、ねえ』

涙を堪えるように声を震わせながら、愛する息子に何もかもを背負わせる罪悪感に身を震わせ、それでも彼に託すしかないと理解してしまっていた。

変異型呪霊スマツシュとなつてなお、ある程度の人としての理性を保つ貴丈の母親は、何か道が違えば桐生焰のように人と変異型呪霊スマツシュの狭間に立つものになれただろう。

だがならなかった。なれなかった。つまり、この話はここまでだ。

貴丈はベルトにラビットフルボトルとタンクフルボトルをセット。レバーを回して呪力を漲らせる。

『Are You Ready?』

ベルトが放つ呪力が最大に達した瞬間に投げられた問いかけに、貴丈は噛み締めるような声音で告げた。

「——変身」

直後、彼の身体を赤と青の装甲が包み込み、ビルドへの変身を完了させた。

いつもの音声が鳴り響く中、ビルドは再びレバーを掴んで回転させる。

自分とは異なる異形——まるでテレビのヒーローのような姿に変わった貴丈の姿に、ほんの僅かに驚いた様子を見せたロックスマツシュは、彼の背後で不安そうに彼の背を見つめる真依に気づき、僅かに安堵したように息を吐く。

『このッ、この子の……。こと、おねがい……。っ』

涙に声を震わせ、それでも笑うように肩を揺らしながら、桐生の母

親は最期の頼みを真依に告げた。

突然の頼みに驚く真依だが、貴丈が振り返らない事を確認してから小さく頷いた。

そして、それが見えていないにも関わらず二人のやり取りを見届けたビルドは、レバーの回転を停止。

『《レディー・ゴー!!ボルテック・フィニッシュ!!!》』

ベルトから鳴り響く陽気な音声を聞き流し、拳を握りしめる。

「さよならだ、母さん！」

静止状態から助走をつけて一気に間合いを詰め、そして雄叫びと共にロックスマッシュを殴りつけた。

瞬間、彼の拳から発生した黒い閃光が部屋を駆け抜け、壁伝いに広がった衝撃がロックスマッシュの肉体諸共領域を破壊し尽くしていく。

周囲の景色が孤児院から元の廃ビルへと戻っていく中、ビルドは手元にフルボトルを生成。

南京錠の意匠がある金色のフルボトル——ロックフルボトルを握りしめる。

「これで、終わりだな」

何かを堪えるように声を震わせながらそう告げたビルドの背に、そつと真依が手を置いた。

「別に泣いてもいいのよ。その仮面で見えないし」

「……ああ、かもな」

彼女の純粹に心配から投げられた言葉にビルドは天井を仰ぎながら応じると、変に力んだ深呼吸をしながら肩を震わせた。

「なんなら一人にしてあげるけど?」

「ああ、頼む。七海さんと東堂先輩に、言っておいてくれ」

ついでに向けられた真依の気遣いに甘えると、彼女は言葉の通りにかつては店が入っていたであろうスペースを後にして、慌てた様子でこちらを指す七海に目をやり、小さく首を横に振った。

眼鏡の下で目を見開いた彼は足を止め、誰にも届かない声で「申し訳ありません、桐生くん」とやはり彼に全てを背負わせてしまった事

を謝罪する。

真依の背後。ビルドのみがいるスペースから、一人の青年の泣き声
が響き渡った。

呪術高専京都校。貴丈の自室。

京都で目撃された最後の変異型呪霊^{スマツシユ}を撃破した貴丈は、やはり言うべきか一睡もすることができず、ベッドの上で寝転ぶだけで夜を明かしてしまった。

ちらりと時計に目をやれば、時間は昼過ぎ。昨晚から何も食べていないというのに、空腹も感じないのは流石に危険だろうか。

ゆつくりと目を閉じる。瞼の裏に映し出されるのは、自分や兄弟姉妹に母親が子守唄を歌ってくれたとある日の昼下がり。いつもなら心が温かくなる筈なのに、今はむしろ悲しさと寂しさだけが頭を埋め尽くす。

目尻が熱くなる。雫が溢れそうにある。だが、それを堪えながら額に手を乗せ、深く溜め息を吐いた。

体を起こし、両手を膝について立ち上がる。

意味もなく部屋を右往左往し、溜め息混じりにその場にしゃがんだ。

乱暴に額の傷跡を掻き、器用に膝で頬杖をつきながら、ぼんやりと床の木目を凝視。

そのままの姿勢で、ただ意味のない時間を過ごす。

数分か。数十分か。黙々と熟考する彼の胸中にあるのは、一だけだった。

——母さんは、焰と同じで人に戻ったりできなかつたのか？

いいや、出来なかつたからあんな事になったのだ。被害者も——正確には誘拐されただけだったが——出ていたのだ。祓^{殺す}うしかなかつた……筈だ。

「ああ、くそ……！今さらあれこれ考えたって仕方ねえだろ」

額の傷跡も掻きながらあれこれと考える貴丈は思考を止めようとするが、やはり『もしも』を考えてしまい前に進めない。

はあと再び溜め息を吐くと、不意に指先に湿り気を感じ、額を掻く手を止めた。

手を顔の前に持ってくれば、そこにあるのは赤くなつた自分の指先だった。何か生温かい液体が額から鼻の方に流れ落ち、顎からポツポツと床に滴り落ちたそれは、赤い染みをつける。

「やっちゃまった……」

慌ててティッシュで額を押さえる貴丈は、ちらりと時計を確認。

正月休みとはいえ、昼過ぎまで寝ている呪術師はいないだろう。任務が入っていたら、迷惑になるかもしれないが――。

「ええい。ままよ」

貴丈は額を押さえながら机の上に放置していたスマホをぶん取ると、気分転換ついでに何か飲み物を買うべく部屋を飛び出した。コーヒ―を淹れてもいいが、それこそそんな気分ではない。はつきり言つて面倒くさい。

もう見慣れ始めた廊下を進み、突き当たりにある休憩所に移動。

自動販売機でとりあえず目についた缶コーヒ―を買おうとして、その手を止めた。

――いや、コーヒ―淹れたくねえからここに来たのに、コーヒ―飲むのか？

ある意味で気分転換には成功しているのだろう。ほんの一瞬、本来の悩みを忘れ、自分の行動に自分でツツコミを入れていた。

彼はそのまま隣のペットボトルのお茶を買い、一口呷る。口の中に広がる渋さが、何とも心地よい。

やはり日本人にはお茶かと、胸中で自分の趣味を全否定する事を宣いながら、もう一口。

そのまま窓の外に広がる京都校の景色を眺めながら、スマホを弄る。

七海にも確認を取った。念のため他の補助監督にも、歌姫にも、これで終わりかと念押しで確認した。

なら、約束を果たさなければならぬ。

スマホの画面に映るのは親友の名前。貴丈はほんの僅かに電話をかける指を止め、咳払いをした。そして何度か声を出して喉の具合を確かめ、声に変調がないかを確認。

大丈夫そうだと確認が取れてから、呼び出しボタンを押し、スマホを耳に。

数回の呼び出し音のあと、相手と繋がる音が耳朵を撫でた。

『おう、待ってたぜ』

「ああ。待たせたな、真希」

スマホ越しに無遠慮に投げられた声に、貴丈は笑みを浮かべながら返事をするのだった。

呪術高専東京校。

正月ということでの人の出入りは少なく、実家に帰らずに寮暮らしをしている生徒達は基本暇をしている昼過ぎ。

真希、乙骨、狗巻、パンダの四人は、暇潰しついでに訓練のため、校庭に集まっていた。

「それにしても、真希。最近元気ないよな」

「あ？」

そんな訓練の休憩中。芝生の上に腰を下ろし、胡座をかいていたパンダが不意に放った一言に、真希は怪訝そうに眉を寄せた。

「別にそんなことねえよ。さつきも憂太の野郎ぶん投げただろうが。見てなかったのか？」

「いや、そんな事あるね。たまに溜め息吐いてるし」

「しゃけ」

「確かに、あんまりキレがなかったかも……？」

真希はすぐに反論するが、すぐさまパンダが言葉を返し、狗巻が首肯し、乙骨が先程の組み手を思い出すように頭を捻った。

普段とあまり変わらなかつたようにも感じるが、いつもよりも迫力というべきか、気迫のようなものが弱かつたように思える。

乙骨は「負けた癖に何言ってるんだ」と訓練用の棒で脳天を叩かれる羽目になり、頭を押さえながら悶える結果になるが、パンダは更に捲し立てた。

「でもよく。昨日なんてずっと寂しそうにしてたし、何回も溜め息し

「てただろ〜?」

「しゃけしゃけ!」

「寂しそうになんかしてねえ!」

「溜め息は否定しないんだ」

パンダが煽り、狗巻が捲し立て、真希がツツコミ、乙骨が無意識の内に揚げ足を取る。乙骨には無言の拳骨が落とされた。

乙骨は再び悶える事になり、パンダと狗巻が合掌する中、真希は鼻を鳴らすと共に腕を組んだ。

「てか、お前らはどこから私を見てんだよ。ストーカーか?」

「いや、自販機の前で動かなくなったの真希の方だろ」

「あ?ああ、あの時か」

パンダの言葉に首を傾げた真希が思い出したのは、昨日の昼頃。

何か飲み物をと自動販売機に行ったはいいが、何を飲もうかと考え込んだタイミングを見られていたのだろう。

別にあの後普通にコーヒーを買ったのだが。

「真希にしては珍しくコーヒー買ったよな。もしかして、貴丈のコーヒー飲みたいけど缶コーヒーで我慢したとか?」

「どうやらそこも見られていたようだ。」

「飲みながら『なんか違えな』とか、『物足りねえな』とか言ってただろ?」

「ついでに、その後も見られていたようだ。」

真希は鋭くパンダを睨みつけ、眼光と殺気を放つ事で黙らせようとするが、パンダは気にした風もなく顎を摩る。

「まあ、確かに。あいつの部屋空っぽになつてて道具借りるつてのもできないし、あいつの部屋で屯たむろって、部屋を汚くしてやろう作戦も出来なかつたが」

「何で、私があいつの部屋に勝手に入る前提で話が進んだよ!! てか、何しようとしてんだ!」

「入らないのか?」

「入るわけねえだろが!」

そんな下らないパンダと真希の口論は続き、「でもよ、真希〜」

せえ！」とだる絡みしてくるパンダを心底鬱陶しそうに——というかわざそうにしている真希だが、不意にポケットに入れていたスマホが鳴り始めた。

ヴ〜！ヴ〜！とバイブ音が彼女だけでなく他の三人にも聞こえ、真希に電話をかけてくる物好きなど、この場にいる者を除いて一人しかない事を知るパンダと狗巻はニヤニヤと笑い始め、乙骨も誰が相手か察したのか、「あ……」と小さく声を漏らした。

「うつせえ。黙ってろ」

そんな男子達の反応を他所にスマホを引っ張り出した真希は、相手を確認。

パンダ達も身を乗り出して画面を見ると、やはりそこにある名前は『貴丈』の二文字だった。

あら〜と初恋を茶化す女学生のように頬を朱色に染めるパンダと狗巻を他所に、乙骨は「桐生くんからだ」と単純に友人からの連絡に喜んだ。

「面倒だ。スピーカーでいいよな」

真希はいちいちスマホを回すのも面倒だと、スマホの画面のスピーカーのボタンを押す。

「おう。待ってたぜ」

『ああ。待たせたな、真希』

画面の向こう、いつもの声音の貴丈の声が聞こえてきた。

「おう。元気そうだな」

「めんたいこ」

「桐生くん、久しぶり」

『なんだ、皆いんのか。こっちは大丈夫、もうすぐ帰れそうだ』

パンダ、狗巻、乙骨の挨拶に画面の向こうの貴丈は笑い、何かに座ったのか木が軋む音がした。

『そういうことだから、土産は何かいいのか聞きたくてよ。リクエストあるか？』

「リクエストつてもなく。京都土産ってどんなのがあるのかよくわからん」

「しゃけ」

「僕もわかんないかな」

貴丈の問いかけに男子三人が困り顔を浮かべる中、真希だけは神妙な面持ちで眉を寄せていた。

スマホを見てはしゃいでいた三人もそれに気付いたのだろう。彼女に目を向けながら首を傾げると、真希が貴丈に問いかけた。

「——なあ、大丈夫か？」

『……………』

画面の向こう、貴丈が息を呑んだ気配を感じた。

言葉を失い、言おうとした言葉に喉に突つかかっているのか、僅かに『あ、いやあ……………？』と変に上擦った声が返される。

「何かあったんだな。さっさと言え」

悪戯の現場を押さえた母親のような、面倒見のいい姉のような、氣迫に満ちながらも相手への心配を確かに感じられる声音。

もっともそれも指摘すれば、照れ隠しの拳が飛んでくる事に間違いないだろうが。

『……………』

「どうした。言いづらい事を言うのはわかってんだ、早くしろ」

画面の向こうで言葉に困る貴丈を急かすように真希が語気を強めると、彼は諦めたように溜め息を吐き、『本当、色々あってよ……………』と途端に覇氣のない声を漏らす。

『着いて早々に東堂先輩に親友認定されるし』

「……ん？……」

予想外の方向から来た東堂の名前に、四人は一斉に首を傾げた。

東堂はどんなに言い繕ったってイカれている人間だ。初対面の相手を半殺しにするような狂犬に、親友認定されたとは一体何をしでかしたのか。

『そうしたら休む暇もなく変異型呪霊を祓うことになったし』

「おう」「うん」「しゃけ」

次の悩みは予想通り。そもそもそれをしに行ったのだから、彼にとっての問題はそれしかない。なのに東堂という特大の横槍が入り、

余計に彼のストレスになってしまっている。

『その後、真依に——つてか、真希！妹いるならいつといてくれよ！』

「ああ、悪い。会わないと思つてたからよ」

『がつつり会つたよ、こんちくしょう！』

そして真希の双子の妹である真依と出会つたことと、彼女から姉妹がいたことを説明されなかったことへの愚痴が漏れた。

勢いのままに悪態を吐いた彼は、すぐに溜め息を吐いて言葉を続ける。

『あと、禪院直哉つて奴に会つたぞ』

「はあ!？」

なんて事のないように出てきた名前は、禪院家当主の息子の名前。いの一番に反応した真希が声を荒げると、貴丈は『大変だったんだぞ』と気の抜けた声で返す。

「お前、何があつた!？」

『なんか真依が直哉に絡まれてたから助けた。んで、そのまま決闘することになった』

「——ツ!!」

「あ、やばい。真希が見たことないくらい恐ろしい顔になつてる」
「しゃけ!？」

貴丈が一切隠すことなく何が起きたのか、そしてなぜ起きたのかを簡単に説明すると、真希は昔からいけすかない態度を崩さないど畜生の直哉が、真依にちよっかいをかけたということと、貴丈が戦わされたこと——ひいては禪院家から興味を持たれたことに苛立ち、額に青筋を浮かべた。

スマホからはみしみしと軋む音が漏れ始め、パンダと狗巻が慌てて止めようとする横で、

「禪院直哉……」

「……憂太もすごい顔になつてる!？」

『え?何がどうなつてんの?』

乙骨は親友と敵対した男に対して敵意を剥き出しにし始めた。

右にはブチギレの真希。左にはなぜかどろりとした殺意を滲ませ

る乙骨。二人に挟まれたパンダは顔を真つ青に——もつとも毛でよくわからないが——しながら、貴丈にこちらの状況を簡潔に説明するが、当の本人はあつけらかんとした、どこか楽しそうにしている声音で返される。

「とにかく、大丈夫なんだな」

狗巻にペちペちと肩を叩かれ、ようやく過剰な握力を込めていたスマホを解放した真希は、ごほんと咳払いをしてからそう問いかけた。

大変遺憾ではあるが、直哉は強い。そんなあいつと一戦交えたということは、それなりに苦戦を強いられた挙げ句、怪我をした可能性だってある。

『ああ。結構殴られたけど、倍は殴り返してやった。あんまり覚えてねえけど』

あははと乾いた笑い声と共に告げられた言葉に、真希は「そうか」とどこか安堵しつつ、喜色が強い声音で頷いた。

あの野郎をぶちのめしてくれたのなら、多少なりとも溜飲も飲めるというもの。

あんまり覚えてないというのは気になるが、彼だって疲れていたのだらう。あまり言及はしてやらない方がいいだろう。

『まあ、その後直毘人って爺さんに止められたけどな』
貴丈はその呆気ない結末をあつさりと言ると、その後の戦いも手短かに真希達に伝えていった。

次の仕事は東堂先輩と真依も一緒だったとか。

その戦いの中でバイクを手に入れたとか。

東堂と学校を壊す寸前まで稽古をしたとか。

最後に、まだ理性を保っていた母親を殺したことを。

「道理で元気ねえわけだ。大丈夫か？」

何と声をかけてやるべきか。男子三人が悩み、口を閉じてしまった直後に、相変わらず無遠慮な真希の声が投げられた。

その問いに貴丈は『大丈夫だ』と返すが、すぐに溜め息を吐いて『——って、言いたいけどな』と声色を途端に弱々しいものに変えながら呟く。

『言いたくはねえけど、やっぱ辛え……』

苦渋に満ちた声と共に、頭でも抱えているのか髪を掻き上げる音が聞こえてきた。

はあと深々と溜め息を吐く声まで聞こえ、こちらの気分まで落ち込んでいく中、貴丈は『だから』と呟いて四人に問うた。

『気分転換に買い物に行きたい。お土産何がいいかリクエストしてくれ』

先程までのそれとは違う明るい声音。開き直ってか、あるいはこれ以上気を遣わせることを嫌ってか、とにかく貴丈は後ろ向きな思考を少しでも前向きポジティブに変えたいのだろう。

「そうだな、私は——」

そして真希がリクエストを口にしようとした瞬間、スマホの向こうで何か物音が聞こえた。

『真依？どうかし——……』

妹の名前を呼んだ声が聞こえたかと思えば、ブツツ！と問答無用で電話が切られた。

「……………あ？」

「ひえ……………」

瞬間解き放たれる強烈な怒気に男子三人が小さく悲鳴を漏らす中、真希は止める間もなく折り返して電話をするが、

「出ねえ」

彼のことだ、すぐに出てくれるとある種の確信があったというのに、それが無い。

「出ねえ……………」

数度のコール音。だが彼は出ない。無情にも更にコール音が続いたかと思えば、ブツツ！と今度は出られることもなく電話が切られた。

「……………」

「……………」

真依の名を呼んだ直後にこれだ。おそらく、彼女と何かがあっただろう。

あの無愛想な妹のことだ。自分の名前が出たタイミングでちよっかいを出して来たのだろうか。

まあ、真依にちよっかいを出されるほど仲良くなったと思えば姉として嬉しい気持ちではあるのだが。

「……せめて何か言ってから切れよ。ムカつく」

胸中に渦巻く謎の不快感にもやもやしなから愚痴ると、パンダも狗巻が何やらニヤニヤと笑い始め、乙骨はそんな二人を他所に「何かあったのかな？」と親友の心配をしていた。

「よし！パンダと棘は叩き潰してやる。やるぞ」

「あ……。これ死んだかも」

「……おかか」

「頑張つてね」

真希からの死刑宣告にパンダと狗巻が死んだ魚のような目になりながら、彼女に首根っこを掴まれた連行されていく中、一人難を逃れた乙骨はそんな二人に激励の言葉を投げながら、ふと空を見上げた。

憎たらしいまでに青い空には雲一つなく、吸い込まれるような美しさだけがそこにはあった。

直後、パンダと狗巻の悲鳴が聞こえてこなければ、きつといい休日であつたのだろう。

彼は困つたように笑いながら、三人に混ざろうと駆け出していくのだった。

「待つ……。いきなり何すんだよ!？」

そんなパンダと狗巻にとつての修羅場が展開される東京校とは打って変わり、京都校の休憩室には貴丈の悲鳴にも似た声が響いた。

背後から近づき、無言でスマホを奪った挙句に電話を切った真依もまた、今更自分がやったことを自覚したのか、気まずそうに目を逸らす。

「せめてこっち見ろよ!?!?てか、スマホ返せ!」

貴丈が赤を真っ赤にしながら怒りを露わにし、スマホを奪い取ろう

とするが、真依は「別にいいじゃない」と告げると共に彼のスマホを彼に向けてぶん投げた。

「ちよ!?!」

慌ててそれを受け止めた貴丈は、画面を確認して罅が入っていない事を確認すると、ホッと安堵の息を吐く。

そのまま真希に折り返しの電話をかけるが、生憎とパンダと狗巻を叩きのめすのに夢中な彼女は気づかない。

だが、そんな東京校の事情を知らない貴丈は彼女を怒らせた顔で青ざめながら項垂れ、溜め息を吐く。

「ヤバイって。帰ったら殺されるって」

そのまま頭を抱えてしゃがみ込む彼に多少の罪悪感を感じつつ、真依はくるくると髪を弄りながら言う。

「話は聞いたわ。買い物行くんでしょ? 私も行くから付き合いなさい」

「……わざわざそれを言いに来たのか? いや、まあ、いいけどよ」

ぽりぽりと額を掻きながら立ち上がった貴丈は「一つ、問題があるけどな」と人差し指を立てた。

「真希達への土産を何にするのか、全く決まってないってことだ」

「問題ないわよ。あいつの好みならわかるわ」

妹だからと貴丈には聞こえない言葉でそう呟き、言及される前にと踵を返した。

真希のことは嫌いだ、それは決して変わらない。変えようがない。だが――。

ちらりと振り向いてみれば、そこには兄弟姉妹を、そして育ての両親を殺しながら、それでも誰かの為に立つ馬鹿野郎の姿があった。

今更両親に何か思うことなどないし、真希に対して姉妹だからと特別な感情を抱いているわけでもない。

だが、それでもたった一人の姉に、何かしてやりたいと思う程度には、貴丈に絆されてしまったのだろう。

真依は溜め息を吐きながら、「着いてきなさい」と一方的に言うだけ言って休憩室から出て行ってしまおう。

「ああ、おい。ちなみにバイクは七海さんに持つてかれたから出せねえぞ」

「どうでもいいわよそんな事！あんなのに二度と乗りたくないわ！」

貴丈はバイクスマッシュの追撃の為に生み出したマシンビルダーが七海預かりになっていてること——免許を取り次第返してくれるらしい——を報告するが、真依はむしろその方がいいと言わんばかりに声を荒げた。

「別にいいだろう？カッコいいじゃん、あのバイク」

「どこがよ!?あんな玩具みたいなバイク、見た事ないわ！」

そんな彼女の怒鳴り声を無視し、自分が生み出した物への自画自賛的なセリフを吐くと、真依は彼のバイクを玩具っぽいつとぼつさりと切り捨てる。

「うっ！」と苦悶の声と共に体をくの字に曲げる貴丈だが、すぐに笑みを浮かべて背筋を伸ばした。

和気藹々、いや喧々囂々としながら廊下を進む二人。その背後、廊下の曲がり角から体を半分だけ出した状態で、何やら訳知り顔で二人の背を見送るのは、東堂だ。

「行ってこい、超親友^{ブラザー}。親友と学友のデートだ、邪魔はせん」

家族との問題だからとあまり干渉せず、だがあいつなら立ち上がれると信じて待っていた彼は、文字通り真依に遅れをとった。正確には、貴丈がいるタイミングでふらりと休憩室に立ち寄った真依の豪運に負けた。

ならば、後は真依に任せよう。彼女になら貴丈を任せられるし、貴丈になら彼女を任せられる。自分が入る隙間はない。

「だが、暇になってしまったなあ。仕方ない、超親友^{ブラザー}に渡す予定だった高田ちゃんのDVDの再選定でもするか」

東堂は顎に手をやりながらそんな独白をこぼし、自分の部屋へと戻っていく。

なお貴丈に贈る高田ちゃんグッズは、予定の倍近くまで増えることになり、それを全て彼の部屋に押し込められることになる。

それを知らない貴丈は、帰ってきたら自室が大変なことになってい

るなど、欠片も予想していなかった。

京都校、職員室。

「結局、私は何もしてあげられませんでした」

一人呟く七海が見つめる先にいるのは、真依に連れられて正門を潜ろうとしている貴丈の姿だ。

彼の負担を減らすべく馳せ参じたというのに、結局できたのは道案内や露払い程度。

引率すべき大人が何もできなかったなど、五条が聞けば一頻り爆笑したあと、割とマジな声で叱咤されるかもしれない。

あの人にだけは怒られたくはないが、今回ばかりはそれを受け入れざるを得ない失態を重ねてしまった。

眼鏡の位置を直し、溜め息を吐きながら、貴丈の代わりに報告書を纏めていく。

無駄なく、事実のみを述べながら、上層部に不審を抱かせないように注意を払いつつ、ペンを走らせる。

時計の針が進む音とペンを走る音のみが部屋に満ち、静かな時間だけがゆっくりと過ぎ去っていった。

「真依も無事。桐生貴丈は任務を終え、明日にも東京に戻るか」

禪院家の屋敷。当主、直毘人の自室。

酒が満杯に入れられた瓢箪を傾けながらそんな事を呟いた直毘人は、己の意に反した内容とは対象的な獰猛な笑みを浮かべていた。

「まあいい。向こうには真希もいる。後は五条悟からどう引き剥がすかだが……」

だが一番の難題に頭を捻り、酒を呷る。

五条は最強だ。そして、最強だからこそ押し通している規定違反——今回でいえば秘匿死刑囚の貴丈の保護——も数多い。そこを突いたところで、最悪実力で黙らされるだろう。

「やはり機が熟すのを待つほかないか。真希か、真依か、どちらでもいい。桐生貴丈を墮とせればそれで終いだ」

だが、それでも個人的な色恋に口を出すほど腐ってはいまい。

惚れた相手が偶然禪院家の者で、婿入りする他ない状況さえ揃えてしまえばどうとでもなる。

直毘人は笑いながら禪院家の安泰の為の策を練り、更に酒を呷るのだった。

そんな親友（仮）や大人達の気遣い、あるいは悪巧みに晒されている事を知る由もない貴丈は、両手いっぱい荷物をどうにか抱えながら溜め息を吐いていた。

「なあ、買いきじやねえか？」

「うるさいわよ、荷物持ち。色々とお土産のアドバイスしてあげたでしょう？」

「それは、そうだけだよ」

前を歩く真依に悪態をつくが、彼女はどこ吹く風といった様子で受け流し、貴丈は黙らざるを得ない状態となっていた。

人込みに飲まれないように四苦八苦しながら彼女の背を追いかけ、時折こちらを気にするように振り向こうとして、けれどすぐに辞める挙動不審な首の動きに気づき、思わず苦笑。

「でも、ありがとうな。いい気分転換だ」

「……あつそ。こっちはあんたのせいでここ何日かは本当に大変だったんだから、もつと感謝しなさい」

「ああ。ありがとう。で、次はどこに行くんだ？」

貴丈から何の裏もなく伝えられた素直な感謝の言葉に、真依は多少面を喰らいながら皮肉を返すが、貴丈は再び素直な感謝を告げて、開き直ったように次の目的地を問うた。

顎に手をやり、次の行き先を考える真依の背を追いかける中、不意に貴丈のスマホが鳴った。

「あ、ちよい待ち。一回待ってくれ」

貴丈は真依に声をかけてから道の端に寄り、荷物を一旦置いてから電話に出る。

「もしもし、こちら貴丈」

『よ。で、さつきいきなり切ったのは何なんだ？』

「げ。真希……」

開口一番に告げられた、凄まじい怒気が込められた問いかけに、貴丈は露骨に嫌そうな顔をするが、すぐに柔らかく破顔した。

隣では真依がほんの僅かに不満そうな顔をしているが、それに気づかない貴丈はそのまま真希との会話を続行。

「悪い悪い。それで？」

『さつきやり損ねた土産の話なんだ。私は——』

「それは問題ない。今、真依と一緒に買い物中だ」

『真依と？』

なぜか真依の名前を出した途端に声のトーンが一つ下がった真希の様子に怪訝な顔をするが、まあ気にする事でないとは無視した貴丈が隣の真依に目を向け、告げた。

「ああ。何なら替わって——」

「嫌よ」

『いや、別にいい』

だがそんな彼の気遣いもあつさりと二人揃って断り、貴丈は「そうか」と苦笑混じりに肩をすくめた。

『で、もう帰って来れんのか？』

「明日には帰れる予定だ。土産楽しみにしてろよ」

『そうだな。帰ってきたら、とりあえずお前のコーヒー飲ませろよ。意外と飲めないなら飲めないでむしゃくしゃする』

「俺のコーヒーがヤバイ薬みたいに言わないで欲しいけどな……！」

時には笑い、時には怒り、二人のそんな下らない年相応のやり取りは続くが、そんな姉と言葉を交わすたびにコロコロと表情を変える貴丈の横顔を見つめた真依は、ほんの僅かに拳を握り、そして告げた。「ほら、さつきと行くわよ。そろそろお店も空くだろうし、何か食べましょ」

「ん？ああ、もういい時間だもんな。何食う」

『何だよ、まだ昼飯食ってねえのか？もう二時だぞ』

電話も切らずに真依とのやり取りを続行した為か、すぐに真希からのツツコミが入り、貴丈は誤魔化すように笑った。

「色々あつたんだよ。それじゃ、切るぞ」

『ちよつと待て。やっぱ真依に替われ』

「……？わかった」

さつきまでは散々嫌がついていたという、突然の手のひら返しに首を傾げる貴丈だが、言われた通りに真依にスマホを差し出した。

「嫌よっていった筈よね」

差し出されたスマホを押し返しながら露骨に嫌そうな顔をする真依に、まあまあ落ち着けと笑いかけながら「どうせ一言喋るだけだろ？」と告げ、「これで最後になるかもしれねえし」と自分の事情を盾にして真依の意地を突き崩す。

数秒続く、長い長い溜め息を吐いた真依はぶんどるように貴丈からスマホを奪い取ると、「何よ」とぶつきらぼうに問いかけた。

『』

真希が彼女に何を伝えたのか、生憎と貴丈には聞こえなかったが、その言葉を聞いた途端に真依の表情が変わり、面倒そうにしていた顔が何故か赤くなった。

「は……？ちよつと、それどういう意味よ!? って、真希！真希!?!切れてるし……!」

真依はスマホに向けて怒鳴りつけるが、既に電話は切れているようだ。返事はなく、あるのはプーツ。プーツ。という電話の切れた音声のみ。

「なんて言われたんだ？」

「うっさいー！さっさと行くわよ！荷物持ちなさい！」

「へいへい」

貴丈が言及しようとしても真依は取り付く島もない様子で返し、いくつかの袋を抱えながら先に出発してしまう。

小さく肩をすくめた貴丈が残りの荷物を抱えて立ち上がると、遠く

なっていく彼女の背中を追いかけるのだった。

「……」

パンダと狗巻を叩きのめし、自室に戻った真希。

貴丈と真依との電話を終えた彼女は、そのままスマホを枕元に放ると共にベッドに寝転び、ぼんやりと天井に目を向けた。

「何であんな事言っちゃまったかな」

先程真依に告げた言葉を胸中で反芻しながら、溜め息を吐く。

いや、まあ、深い考えもなしに言った言葉といえはその通りだ。現に真依は大いに慌て、彼の前で恥をかいたに違いない。

「ま、明日になりゃその話も聞けるか」

早く帰ってこねえかな、なんて独り言をぼやきながら、彼女はそっと目を閉じた。

そして、時間というものはあつという間に過ぎていく。

歌姫と七海、東堂、真依に別れを告げ、新幹線に飛び乗ること数時間。

貴丈からすればあまりにも濃い京都出張はようやく終わり、見慣れた呪術高専東京校の寺社仏閣を思わせる建物が視界に映り始めた。た。

そのまま正門を潜り、更に進む事数分。

どこからか聞こえる聞き馴染んだ友人達の声と、恩師の声に誘われるように校庭の方へ。

真つ先に気づいたのはやはりと言うべきか五条だった。目元を覆う包帯越しに視線を向け、「お、帰ってきた！」と待っていましたと言わんばかりに声を張り上げた。

つられるように顔を上げたのは、今しがた彼にぶん投げられた乙骨。校庭脇の芝生の上に座っていたパンダと狗巻だ。

「桐生くん、おかえり！」

「帰ってきたな。早速で悪いが、お土産寄越せ〜」

「しゃけ！明太子！」

男子達がそれぞれの言葉で彼の帰還を祝う中、狗巻の「明太子！」を合図に校庭に集まっていた男子三人と教師が彼の元に集まり、彼を揉みくちやにしながら土産が入った袋だけを持ち去っていった。

呼び止める間も無く校舎に消えていった男子達の背を見送った貴丈が言葉を無くしていると、彼と同じく取り残された真希が溜め息を吐いた。

ひたすら素振りをしていた彼女は残心を済ませてから薙刀を肩に担ぎ、貴丈に向けて不敵な笑みを浮かべた。

「おかえりって奴だ、貴丈」

そんな彼女の挨拶に照れくさそうに笑いながら、貴丈はその言葉を呟いた。

「ああ。ただいま」

「そんじゃ、早速コーヒー飲ませてもらおうか。あと、向こうで何があつたのか隅々まで話せ」

そつと彼の隣に並んだ真希が、彼と肩を組みながら帰還直後の彼にコーヒーを催促。

「え〜」と不満そうな声を漏らす貴丈だが、すぐに「わかった」と微笑みと共に首肯した。

「貴丈、これ全部食べちゃっていいよね！」

「八ツ橋旨ッ！生八ツ橋も旨ッ！」

「しゃけ！しゃけ！」

「うん。美味しいね」

全開にされた窓からは男子組の土産に関する感想が飛んでくる中、貴丈は溜め息を吐いた。

「早くしないと俺たちの分がなくなりそうだな」

「そういう訳だ、さっさと淹れてこい」

貴丈の嘆きの言葉に真希は笑い、彼の肩を叩いて男子達に合流してしまう。

やれやれと肩を竦めた彼も歩き出し、とりあえずコーヒーを淹れる

道具一式を手元に生み出した煙から取り出す。

そのまま土産が広げられた教室に入り、一斉にこちらに視線を集めてきた親友達と恩師に告げた。

「コーヒー淹れるけど、飲むか？」

「いらない！」

「おかか」

「じゃんじゃん持って来い！全部飲んでやるよ！」

彼の悪戯っぽい笑みと共に告げられた問いかけに男子達が一斉に首を横に振る中、真希だけが不敵な笑みを返した。

そんな様々な反応を受け止めながら、貴丈はコーヒーの準備に取り掛かる。

いつもの日常。いつもの光景。そこに込められた温かさを感じながら、彼はコーヒーを淹れるのだった。

あと四ヶ月もすれば新学期。後輩もできて、自分の呪術師としての階級も決まるだろう。

これからどうなるのか。それはわからないが、

「ま、ベストを尽くすつきやないか」

家族との約束を、誰かの笑顔を守る顔のないヒーローになるために頑張るしかない。

とりあえず今は親友達を笑顔にするところから。

「さあ、出来たぞー！」

「だから要らないって!?」

「おかか!？」

「おう、寄越せ」

和気藹々、あるいは喧々囂囂。呪術高専東京校に、いつもの騒がしさが戻り始めていた。

最恐最悪呪いの王 ー特級術師、始めましたー

1.

宮城県某所。

草木も眠る丑三つ時。心霊スポットとして地元では良くも悪くも有名なトンネル内。

「はっー！」

『ぎい!?!』

「鬱陶しいんだよー！」

『ぎいやえ!?!』

赤と青の非対称アンシンメトリの仮面の戦士——ビルドが、数体の呪霊を相手に大立ち回りを演じていた。

毛深い猿のような呪霊の頭を蹴り碎き、背に飛びかかった成人男性よりもなお大きい虫の呪霊を肘鉄の一撃で黙らせる。

そのまま流れるように放たれる拳と蹴りの乱打が彼を囲む異形を次々と打ち倒し、地面に転ばせていく。

「つたく。今日も外れか」

一方的な蹂躪を前に狼狽え、距離を取る呪霊を前に、どこか不満げな声を漏らしたのはビルドだ。

彼の果たすべき使命は変異型呪霊スーマツシユとなった家族の祓除さつがいだ。もちろん木っ端な呪霊の祓除も呪術師としての立派な仕事ではあるのだが。

「こうも外ればっか引かされるとなく」

手元に煙を発生させ、そこから濃灰色のフルボトル——ガトリングフルボトルを取り出した。

それを数度振り、ベルトに嵌められていたタンクフルボトルと交換し、レバーを回転させる。

『《ラビット！ガトリング！》』

ベストマッチの音声はない。まあ、ラビットフルボトルもガトリングフルボトルも既に相方は見つけてある。問題ない。

「面倒だし、一気に終わらせるー！」

顔の右半分、左腕、右足を包んでいた青の素ハーフボディ体が濃灰に染まり、戦車を模していた複眼がガトリングを模したものへと変化した。

同時に左手を包んだ煙の中からタカの意匠が施された片手で扱えるサイズのガトリング銃——ホークガトリングアームが出現し、その銃が纏う濃密な呪力に呪霊達が怯み、背を向けて逃げ出した瞬間、ビルドは銃のマガジンを回転。

呪力が高まると共に弾丸が装填されていき、

『Ten Twenty thirty Forty Fifty Sixty Seventy
Eighty ninety One hundred
……80……90……100! Full Bullet!』

マガジンが十回転し、合計百発の全弾装填フルバレットが完了し、呪力の高まりが最高潮に至った直後、ビルドは銃口を呪霊達の背中に向けた。

「逃がさねえよ！」

無慈悲な処刑宣告と共に、引金を弾いた。

『《ボルテックブレイク!》』の音声と共に凄まじいまでの発砲音がトンネル内に鳴り響き、マズルフラッシュが闇に閉ざされたトンネルを明るく照らし、ビルドと呪霊の視界を白く染め上げた。

吐き出された百発の弾丸が呪霊の背中を捉え、その肉体をミンチへと変え、次の瞬間には塵へと変えた。

呪力による爆炎がトンネルを照らし、仮面が照り返しにより不気味に光る中、ビルドはホークガトリングアームを肩に担ぎながら「ふい〜」と気の抜けた声も漏らした。

ただの呪霊祓除任務。呪術師本来の仕事ではあるのだが、ある意味では自分の仕事ではない、そんななんとも言えない中途半端な仕事。

給料も出ているし、人助けにもなるからやり甲斐はあるのだが……。

「つつつても、俺じゃなくてよくねって思っちまうんだよな〜」

相手は三級、高くても二級の有象無象。数こそ多かったが、それぞれそれなりの階級の呪術師が三人もいれば事足りる。

やれやれと肩を竦めながらビルドはベルトに嵌められた二つのフルボトルを取り外し、手元に生み出した煙の中に放り込んだ。

体を覆っていた鎧が呪力の粒となり、周囲に霧散。霧散したそれも

彼の影の中へと吸い込まれていき、鎧の形成に使われた僅かな呪力も回収された。

真つ暗闇の中、一人分の足音だけがトンネル内に響く。

「また上の連中の嫌がらせか？」

そこでふと、この状況を望んでいそうな連中の姿が脳裏をよぎった。

一応、五条派に属する自分は五条悟を毛嫌いする上の連中からすれば目の上のたんこぶ。適当に理由をつけてあちこちに派遣して、自分の派閥に属する呪術師に楽をさせようとしているのではないか。

「俺は使いつ走りじゃねえんだけどな」

トンネルを抜け、出入り口を塞いでいた帳を潜り、雲の隙間から降り注ぐ月光に照らされるのはトレンチコート風に改造が施された白い呪術高専の制服に身を包んだ貴丈の姿だった。

痛々しい火傷痕が残る左頬を掻きながら、吹き抜ける夜風が制服の裾を揺らす。

「……土産は、明日でいつか。さっさと宿に——」

帳を解除しながら制服の懐に手を入れ、スマホ——普通のそれよりも数倍は分厚く、ガラケーのように折り畳める——を取り出し、地図アプリを開こうとすると、不在着信の通知が画面に映し出された。

こんな時間に連絡ってなんだよと、面倒くさそうに眉と唇をへの字に曲げるが、誰からの連絡かがわかると同時に表情を引き締め、すぐに折り返しの連絡を入れた。

コール音が二回も続かない内に電話は繋がり、『やつほく』と気の抜けた恩師の声がスマホ越しに届いた。

「五条先生。何かあったんですか？」

電話の相手は五条悟だ。既に進級し、二年生となった貴丈から見れば『元担任』ではあるが、自分の死刑を先延ばしにし、新しい生き方を示してくれた大恩人。

『いや、貴丈の事だからもう終わったかなってね。お土産を頼もうと思っただんだ』

なのだが、どうも抜けている所があるというか、常識知らずのここ

ろがあるというか、命の恩人ではあるが素直に尊敬できない相手である事も確かなのだ。

貴丈が思わずと言った形で溜め息を吐くと、五条もまたくつくつと時間が時間だからか声を殺した笑い声を漏らし、そして次の瞬間には神妙な声音となった。

『ま、冗談はこの辺にして。ちよつと問題発生。恵と合流して』
「……う？あいつなら余程の事がないと一人で何とかすると思えますけど？」

五条から出た恵の名に、貴丈は首を傾げた。

伏黒恵。名前のせいで間違われるが歴とした男子である彼は、貴丈の後輩だ。あくまでそれは学年上であり、呪術師歴としては無論向このほうが長いのは言わずもがなだ。

第二級術師。術式も強力。単独でも大体の問題なら対応可能な、あまりにも頼りになりすぎる後輩だ。

そんな恵の危機という馴染みのない言葉に困惑する貴丈を他所に、五条は言葉を続けた。

『その余程の事が起きそうなんだよね。恵の任務つてのがまた面倒でさ』

「呪術師の任務で楽なものなんてないでしょう」

『それはそうだけどさ』

五条の言葉に貴丈が嘆息混じりに返すと、五条は苦笑混じりに告げた。

『恵は特級呪物【両面宿儺の指】の回収に行ったんだけど、その指があるべき場所になかったみたいでさ』

「……それ、俺か憂太か五条先生の管轄では？」

『だよね。貴丈も近くに行くんだし、そのまま任せちゃえば良かったのに。上のお爺ちゃん達は頭が固いよ、まったく』

そして彼の口から出た名前に貴丈は眉間に皺を寄せ、悪態をついた。

特級呪物の回収。それも『呪いの王』とまで呼ばれた両面宿儺の指だ。その回収など五条や憂太のような特級術師がやるべき事案だろ

うに。

「それで、恵は無事なんですか？」

『うん、それは問題ない。さつきまで電話してたし』

貴丈が額の傷跡を掻きながら投げた問いかけに、五条はあつけらかなとした様子で返した。

貴丈はホツと安堵の息を吐き、「それでどこに向かえばいいんですか？」と問うと、五条は何かを考えるように数秒黙り込んでから口を開いた。

『場所は仙台市の杉沢第三高校。そこからなら、まあ今日の夜には着くでしょ』

「休まなければ、そして渋滞に捕まらなければ、ですけどね」

告げられた目的地に貴丈はすぐさま頭の中で地図を引っ張り出すが、仙台市までの道のりしかわからずに匙を投げた。どうせ後で調べなのだ、おおまかな位置さえわかればそれでいい。

僅かな疲労が滲む彼の声を弄るように、五条は笑いかけた。

『ははは。頑張りたまえ、特級術師桐生貴丈くん』

「名前負けしてる気がしてなりませんけどね」

その言葉に貴丈は肩を落とし、再びの溜め息を吐いた。

特級術師。その定義は様々ではあるが、端的に言えば『単独で国家転覆が可能か否か』。

貴丈の術式『ビルド』にそこまでの力はないように思えるが、呪術総監部が注目したのはそちらではなく彼の家族を変異型呪霊へと変えた特異な力の方だ。

その力が人工密集地——それこそ東京の新宿や渋谷のど真ん中で発動すれば、数千、下手をすれば数万の変異型呪霊が一斉に野に放たれる事になる。それも個体差はあれど一級呪霊相当となれば、その脅威は国の存続に関わる。

故の特級。夏油のように呪詛師ではなく、呪術師を名乗れるのは、ひとえに五条の我儘のおかげだ。

「とにかくすぐに向かいます」

『うん、頼んだよ。僕もすぐ行くから』

「……え？なら俺が行く意味ないんじゃない？」

貴丈が間の抜けた声でそう呟く中、五条はさっさと通話を切つてしまふ。

「……まあ、これも後輩の為か」

頑張らねえと気合いを入れ直した貴丈は、懐からライオンフルボトルを取り出すとそれを数度振り、蓋を開けた。

『《ライオン！》』と頭の中に響く陽気な声を他所に、フルボトルをスマホの上部背面に配置された専用のスロットに差し込むと、『《ビルドチエンジ！》』とこれまた陽気な音声が鳴り響く。

貴丈はそれに構う事なく、スマホを放り投げた。

するとスマホが貴丈の身長程に巨大化し、今度はガチャガチャとスマホからは出ないだろう複雑怪奇な金属音を響かせながら変形。

十秒もしないうちに変形を終えたそれは、まさにバイクであった。

赤を基調としたカラーリングの装甲——『ガードレッドカウル』に包まれた本体部分。

車体後部には装填したフルボトルがそのまま巨大化し、そのまま加速装置として作用する『リアボトルチャージャー』を備え、ガソリンを使わずにフルボトルから供給される呪力、ないし搭乗者の呪力を燃料に使う為とてもエコ。

一部の金に目ざとい術師からは『術師向けの商品』としての量を依頼され、五条と夜蛾学長の手で断られたある意味で曰く付きの一品。

『マシンビルダー』及び、そのスマホ携帯である『ビルドフォン』。貴丈が特級昇格とバイクの免許を取った事を切っ掛けに、補助監督なしでの単独移動を考慮した五条の提案を受けた結果生まれた、モニターマシンである。

マシンビルダーに跨り、ふと思いついたようにフロント部分の液晶の画面をスライドすると、何かのアプリを押した。

すると液晶が光を放ち、次の瞬間には対呪霊用に一際頑丈に制作されたヘルメットが出現した。

それを被り、再び液晶を操作して地図アプリを開き、目的地を入力。

「さて。待ってるよ、恵！」
ヘルメットのバイザーを下ろし、エンジンを始動するのだった。

仙台市、杉沢第三高校。

特級呪物【両面宿儺の指】を魔除けとして安置していたその場所には、いまや呪霊が溢れていた。

確かに特級呪霊は魔除けとしての効果はある。だが、それは完全な封印が施されていた場合に限った話だ。

千年あまりの時間の経過で封印は風化し、魔除けはいつからかその効力が反転し、呪霊を呼び寄せる極上の餌と成り果てていたのだ。

そんな最悪の事態に対応すべく派遣された呪術高専東京校一年、伏黒恵は文字通りの絶体絶命の状況に陥っていた。

強力な呪霊がいたからか。

彼でも対応できない程の大量の呪霊が集まってきていたからか。

それもあるが、彼を真の意味で追い詰めているのは滅多な事では起さない異常事態イレギュラーのせいだ。

「ああ、やはり!!光は生で感じるに限るな!!」

その異常事態イレギュラーの原因こそが訳あって今回の騒動に巻き込んでしまった男子生徒——虎杖悠仁。

より正確に言えば、自らを庇って負傷した伏黒。そして呪霊に襲われた虎杖の先輩を救うべく、人間にとっては劇物でしかない【両面宿儺の指】を食った事。

そして何の因果か、虎杖の肉体はその劇物に耐性があったのか滅びる事はなく、そのまま呪いの受け皿として機能してしまった事。

詰まるところの呪いの王、両面宿儺の受肉ぶっかつ。そんな最悪の事態に直面した伏黒の頭によぎるのはいくつもの後悔と、呪術規定に基づく行動。

「呪霊の肉などつまらん！人は！女はどこだ!!」

虎杖の肉体を乗っ取り、復活の勢いのままに呪霊を屠った呪いの王は渡り廊下の屋上から学校を囲む住宅地に目を向けた。

多くの非術師が住み、多くの人としての営みが続く、どこにでもあるありふれた住宅地。

それを見た呪いの王は醜悪な笑みを浮かべた。

「いい時代になったものだな。女も、子供も、蛆のように湧いている」それは明確は蔑みの色があった。

それには明確な悪意の色があった。

何よりも、強烈なまでの嗜虐心があった。

「素晴らしい、塵殺だ！」

そして宿儺が住宅地に向け進撃しようとした瞬間だった。

ばさりと、何か羽ばたく音が宿儺と伏黒の頭上から落とされた。

「あ？」

宿儺は音に釣られるがまま顔を上げ、伏黒もまた弾かれるように視線を上に向けた。

そして、その一瞬が全てを決した。

橙色の残像を残して急降下した何者かは宿儺の延髄に蹴りを入れ、骨を砕く異音と共に蹴り飛ばしたのだ。

一切の反応を許されなかった宿儺は勢いのままに校舎に突っ込み、凄まじい倒壊の音と共に窓ガラスや扉を突き破りながら校舎の内側に消えていった。

「恵、無事か!？」

「桐生先輩!?なんでここに!？」

背中から呪力で生み出された橙色の翼を生やした貴丈が血塗れで膝をつく伏黒に声をかけ、伏黒も伏黒で突然の貴丈の登場に驚倒した。

「五条先生の指示。怪我してるみたいだしそのままでもいいよ」

そんな彼に端的に説明した貴丈はそのまま伏黒に待機の指示を出し、手元に発生させた煙からベルトを取り出すと、それをそのまま腰に巻いた。

「あれは、俺が祓^{ころす}う」

そのまま一緒に取り出したラビットフルボトルとタンクフルボトルを振り回し、蓋を外してベルトのスロットに嵌めた。

『《ラビット！タンク！——ベストマッチ!!》』

陽気な音声が鳴り響く中、倒壊した校舎の壁を呪力の放出のみで吹き飛ばした宿儺が姿を現した。

器となった虎杖がそうだったのだろう、薄茶——というよりは薄桃色の髪を後ろに流しながら、蹴り碎かれた延髓を反転術式で治癒させると、ゴキゴキと首の骨を鳴らす。

「いつの時代も厄介なものだな、呪術師は」

全身に浮かび上がる刺青を思わせる独特な紋様。そして涙袋の辺りに増えたもう一对の瞳は細められ、鋭い視線を貴丈を睨んでいた。

「両面宿儺。四つの瞳に四本腕の異形の呪詛師。元とはいえ、同じ人間には見えないね」

そんな呪いの王からの殺意を浴びながらも不敵に笑んだ貴丈はベルトのレバーに手をかけた。

両面宿儺、その受肉態。取り込んだ指は一本だけだろう。肌に感じる呪力は並の呪霊のそれを遙かに上回るが、勝てない相手ではない。

(問題は相手の術式。領域展開も使えるとしたら、恵を守りきれない)

一対タイマンならどうとでもなるが、こちらには守るべき後輩がいる。そこだけが不安材料だ。

「ま、やるだけやるか！」

だがそんな不安さえも笑い飛ばし、レバーを回転させようとした瞬間、宿儺の視線がベルトに注がれている事に気づいた。

僅かに目を見開くその様は、驚いているようにさえ見える。

(なんだ、何かあんのか？ いや、今は祓除さつがい優先！宿儺を自由にするわけにはいかねえ！)

疑問はある。だが今は宿儺の祓除が最優先だ。呪いの王が解放つような事になれば、それこそこの地域は壊滅的な被害が出る。

器になってしまった生徒には悪いが、一を切り捨てて十を救わねばならぬ状況になってしまったのだ。

そうして状況から最善手を導き出す貴丈の背後では、伏黒は気が気でない気持ちのまま頬に冷や汗を垂らす。

貴丈が呪術師になった理由が『家族を殺し、多くを救うため』だ。彼

の中での天秤は彼も無自覚のままにいつしか壊れ、大のために小を切り捨てる事に割と躊躇がない。

「きひっ！」

貴丈を止めるべきか、いや止められるのか、そんな迷いが伏黒の思考を縛りつけた瞬間、宿儺の笑い声が二人の耳に届いた。

「なるほど。……オマエがいるのなら退屈せずに済みそうだ。なあ、——」

そして何かを言いかけた瞬間、宿儺の右手が彼自身の首を絞めた。

「っ!？」

「あ?」

宿儺と突然の奇行に貴丈、伏黒が驚愕し、宿儺自身も困惑の声を漏らす中、宿儺の口が動いた。

「人の体で何してんだよ。返せ」

「オマエ、何で動ける?」

「?いや、俺の体だし。てかなにこれ、あしゆら男爵みたいになっただい?」

顔の右半分が動く度に見た目相応の音が、左半分が動く度に呪いの王としての威風を放つ声がそれぞれ漏れる。

「……え、何これ。どういう状況?」

「俺にもわかりませんよ」

突然の異常事態に貴丈が困惑し、伏黒に意見を求めるがやはり返ってくるのは同じように混乱した声のみ。

貴丈は首を傾げ、レバーにかけた手をそのままに状況を観察する方に意識を向けていると、睨みつけてくる二人に気付いた宿儺がそつと両手をあげた。

「えっと、俺は敵じゃない。……って、俺も伏黒もボロボロなんで、病院いっていい?」

その声はやはり見た目相応の青年のもの。よく見れば全身に浮かんでいた刺青のような紋様も消えていき、纏っていた濃密な呪力も風いでいく。

妙な間があったのは本人的には気絶している内になんか一人増え

ていたためか。あるいは単に命乞いの言葉を探していたためか。

「……………」

貴丈と伏黒が顔を見合わせ、『これ、どうする?』『わかりませんよ』と視線だけで会話していると。

「今、どういう状況?」

そんな二人の隣に、目隠しをした長身の男——五条悟が姿を現した。

「五条先生!」

「やつほらお待ちせ。で、何があったの?宿儺の指は?」

彼の登場に貴丈と伏黒が揃って喜色の強い声をあげると、五条の言葉に出てきた宿儺の指に反応してか、虎杖が申し訳なきように「あゝ」と声をかける。

「それ、食べちゃった」

「指食ったのかよ。まあいいや。とにかく着いたら宿儺が受肉してたんで祓除さつがいしようとしたら、こうして人としての自我を取り戻したってところですよ」

「……………マジ?」

「マジ」

虎杖の告白と貴丈の判断。そして起きた異常事態。五条すらも素で驚く事態に、三人は揃って首を縦に振った。

「んー?」

貴丈と伏黒の言葉を信じきれないのか、五条はずいっと体を前のめりにして虎杖の体を観察し、六眼の力でもって彼の肉体に宿儺の呪力が混じっている事を確認。

「なぐるほど。本当に混じってるよ。体に異常は?」

「いや、特には」

「宿儺と——君が喰った呪いと代われるかい?」

「ん?んー、まあ、多分」

「じゃあ十秒だ。十秒したら戻っておいで」

「でも——」

「大丈夫。僕、最強だから」

「……なんか勝手に色々決まっちゃった」

「いつもの事でしょ」

そうして五条が何かを試すように虎杖に次々と指示を出す中、貴丈と伏黒は揃って溜め息を吐いた。

五条が突拍子もない事をするのはいつもの事だ。いちいちツッコミを入れていたら、それこそ疲れてしまう。

「貴丈、これ持ってて」

五条はその言葉と共に貴丈に紙袋を投げ渡す。

危なげもなくそれを受け取った貴丈が「何ですか、これ」と袋の中身を覗き込んだ。

そしてそれが何かを確認するよりも早く、五条がその名前を告げた。

「喜久福」

「ああ、お土産ですか?」

「いんや。帰りに僕が食べる用のやつ」

「……このまま床に叩きつけますよ?」

「仕方ないなく、一個あげるよ」

そんなこんなで帰りの甘露を確保した貴丈が「なら、わかりました」と首肯した瞬間、伏黒がハツとして五条に警告を飛ばす。

「五条先生、後ろ!」

彼の警告の通り、五条の背後には再び呪いの王としての迫力を放つ——ようは宿儺に肉体の主導権を奪われた虎杖が迫っており、呪力を込めた右拳を放たんとしていた。

対する五条は一瞥もくれずに両手を組んで印を組み、宿儺の背後に瞬間移動。

「貴丈。そのまま恵もお願い」

「了解ですっ!」

五条の指示に貴丈は素早くベルトからラビットとタンクフルボトルを取り外し、充填した呪力を霧散させると、代わりにダイヤモンドフルボトルを取り出した。

数度振って呪力を活性化させ、蓋を開けると同時に床に突き刺す。

『《ダイヤモンド！》』

頭に響く陽気な声と共に発生するのは、床から垂直に生える半透明な障壁。^{ダイヤモンド}金剛石以上の硬度を誇る防壁が、貴丈と恵の周囲をぐるりと囲む。

「どうぞー」

「可愛い生徒の前なんですね。カッコつけさせてもらうね」

貴丈の合図と共に、五条は攻勢に出た。

振り向き様に放たれた宿儺の拳を軽く受け流し、カウンターで顎を打ち抜く。

凄まじい快音を響かせたそれは宿儺をよろめかせるが、手加減されたそれは宿儺を殺すには威力不足。

だがその速度たるや、呪いの王が驚倒に目を見開く程だ。

そして、その程度で斃れるほど呪いの王も弱くはない。彼は立ち上がり様に呪力を込めた腕を払い、今度は呪力を飛ばす事による遠距離攻撃で五条を葬らんとした。

光速で放たれた呪力は物理的な破壊力を伴い、五条のいた場所を深々と抉り取り、背後の貴丈と伏黒にもその影響が及ぶが、ダイヤモンドの防壁がその全てを受け止め、無傷の輝きを放つ。

「やはり厄介なものだな、オマエは」

防壁越しに睨んでくる貴丈を睨み返し、笑みを浮かべる宿儺だが、直後「無視しないで欲しいね」と五条の声が耳に届いた。

「無視はしていない。大した術式だな」

「呪いの王に褒められるなんて、複雑だね」

宿儺は不敵な笑みと共に投げかけた賞賛に、五条もまた不敵な笑みと共に肩を竦めた。

宿儺の攻撃は確かに五条に対して放たれてはいたが、ただの呪力の塊程度では五条の術式である『無下限呪術』を突破できる訳がない。彼の足元は深々と抉れてはいるが、本人は無傷。飛んできた瓦礫を浮かせるその様は、まさに絶対強者のそれだ。

「僕としてもっと相手したいところだけど、そろそろ時間かな」

そして残念そうにそう告げた瞬間、宿儺はビクンと肩を揺らした。

戦意が漲っていた二対の瞳が揺らいだかと思えば、次の瞬間には涙袋の辺りの瞳がピタリと閉じ、全身に浮かんでいた紋様も消えていく。

全身から滲み出ていた呪力も霧散し、迫力も失せていく中で、虎杖がハツとしながら五条に言う。

「おつ、戻れた。大丈夫だった？」

その姿に五条は感心したように「本当に制御できてるよ」と笑い、虎杖に近づいていく。

「でもうるせーんだよな。頭の中で声がする」

「それで済んでるのが奇跡だよ」

虎杖の悪態を軽く受け流し、五条は彼の眉間に指を当てた。

すると虎杖は気絶したようにその場に崩れ落ち、それを予期していた五条が危なげもなく彼を受け止める。

大丈夫そうだと貴丈が防壁を解除する中、伏黒が五条に問う。

「何したんですか？」

「気絶させただけ。これで目を覚ました時、宿儺に体を奪われていなかったら、彼には器の可能性がある」

何かを期待するような声で告げた言葉に貴丈が「なるほど」と頷く中、五条は二人に問いかける。

「さて、ここでクエスチョン。彼をどうするべきかな？」

「呪術規定にのっとれば、ここで殺しておくのが最善でしょ。なあ、恵」

貴丈は頭の後ろで手を組みながらそう言うと、何故かニヤニヤしながら伏黒に目を向けた。

「俺が彼を殺そうとした時、止めようとしてたっしょ。動いてこそなかったけど、なんか迷ってたのは何となくわかったよ」

「……はあ」

彼の言葉に伏黒は気付かれてたかと溜め息を吐くと、貴丈と五条に面と向かって告げた。

「確かに呪術規定にのっとれば虎杖は処刑対象です」

「——でも、死なせたたくありません」

真つ直ぐに、何の裏もなく告げられた言葉に貴丈が「そっか」と微笑むと、五条が伏黒に問いかける。

「それは私情？」

「私情です。何とかしてください」

「ま、悪いやつではなさそうですし。俺も助けられるなら、助けたいです」

五条が珍しく我儘を言う伏黒。そんな後輩に同調する——そして、おそらく五条に助けられた過去の自分と重ねているだろう貴丈の言葉に五条は笑い、びしっ！とサムズアップした。

「かわいい生徒の頼みだ、任せなさい」

2.

あれから色々な事があった。

宿讎の器になってしまった虎杖に秘匿死刑が決まったり、その秘匿死刑に五条の我儘で執行猶予がついたり、そのまま虎杖が呪術高専への転入が決まったり。

「……なんか随分と聞き覚えのある展開になったな」

「しゃけ」

「だな」

「だよなあ」

呪術高専東京校。学生寮の貴丈の自室にて。

任務終わりにこれまた特大の爆弾を抱えて帰ってきた貴丈の説明に、真希、狗卷、パンダの三人がお土産の喜久福をもしゃもしゃと口にしながら呟き、三人の視線を受け止める貴丈もまた溜め息を吐いた。

ベッドの上であぐらをかき、枕を膝の上に乗せながら頬杖をついてリラックスしていた貴丈は、どこか懐かしむような表情を浮かべる。「五条先生に拾われて、秘匿死刑で死にかけて、これまた五条先生に助けられて。虎杖は苦勞しそうだな」

これから多くの困難に立ち向かうだろう後輩の姿を夢想してか、思わず苦笑を漏らす貴丈だが、対する三人の視線は冷ややかなもの。

貴丈の話の聞き限りでは悪い奴ではない。それは間違いないが、宿讎の指を喰った——文字通りいつ宿讎の受肉体になってもおかしくない危険物を前に警戒しないのはただの馬鹿だ。

何より一番苦勞してるのはお前だと、他人の心配をしている貴丈を三人は誰よりも心配していた。

今回は貴丈的には外れだったようだが、家族を祓^{殺す}う事なく帰ってきた為か、心なしか表情が明るいのがせめてもの救いだ。

「つっても次は学長との面談だろうし、それで弾かれたら終わりだけだな」

「正道は厳しいからな」

ぼふぼふと枕を叩きながら「あの人見た目は怖いからなあ」と去年の自分の回答を思い出しつつ呟いた言葉に、パンダは顎を摩りながら頷いた。

万が一にも学長との面談で不合格となれば、虎杖はそのまま死刑執行だろう。

「命懸けの二者面談か。嫌だ嫌だ」

「……………」

だから、それをお前が言うのかと三人の心が一つになった。

現状を聞く限り、虎杖なる少年は多少の違いはあれど貴丈の後追い状態だ。宿儺の指という爆弾を呑み込んだ以上、下手をしなくても貴丈よりも状況は悪いかもしくない。

そんな虎杖を誰よりも心配しているのが、同じく執行猶予状態の貴丈なのはなんのギャグだろうか。

「まあ、オマエがそこまで言うなら上手くやるだろ」

真希はとりあえず本人に会ってみないことにはと思考をぶん投げながら頭を掻いた。

宿儺の器。言葉だけ聞けば危険だし、警戒するに越した事はない。だが巻き込まれるがまま中途半端に呪術師になろうとする手合いは、学長が間違いなく弾く。

「今は悟と恵と一緒にいんだよな？」

「ああ。明日になったら来んじゃねえかな。先に帰っていいって言われたから帰ってきただけだし」

「明日か。……チツ！私達全員任務だ」

貴丈の言葉に真希が舌を弾き、狗卷とパンダも残念そうに肩を落としました。

「入学できれば嫌でも会うんだし、その時ゆっくり話せばいいだろ」

笑みと共にそう告げた貴丈は喜久福を口に運び、それを頬張った。「そうだな。まあ、貴丈をヤンチャにした奴がもう一人増えるって思えば気も楽か」

「それもそうだな」

「しゃけ！」

パンダが伸びをしながら気だるげに呟いた言葉に真希がニヤリと笑いながら貴丈に目をやり、狗巻が首肯した。

「しれっと酷いこと言うよな。俺ってそんなに問題児？」

「優等生だって言ったんだよ。馬鹿真面目で、馬鹿正直だってな」

「馬鹿とはなんだ馬鹿とは！呪術師歴一年で特級ならむしろ天才だろうが!」

自分を指差しながら小首を傾げる貴丈に真希のツツコミが入り、それに対して貴丈が反論する。

そのまま四人はわいわいがやがやと騒ぎ始め、最終的に貴丈コーヒーによってパンダと狗巻が黙らされ、真希が余計に機嫌をよくする。そんないつもの光景の中、貴丈はただただ楽しそうに笑いながら目を細めた。

また一年騒がしくなりそうだなあと呑気に欠伸を噛み殺した貴丈は、残り半分となった喜久福を口に放り込んだ。

そしてこのやり取りの翌日には予定通りに虎杖は呪術高専に入学を果たす事になる。

更にそんな虎杖入学から一月足らずで虎杖死亡の報が貴丈を頭を殴りつけるのだった。

貴丈は走っていた。

場所は呪術高専の地下に広がる遺体安置所。任務先で亡くなった呪術師の遺体を回収できた場合に運び込まれる、貴丈からしてもあまり縁のない場所の一つだ。

そんな廊下を頬に汗を垂らしながら焦りを隠そうともせずひた走り、光が漏れている部屋に勢いのままに突入。

「五条先生、一体何があつたんですか!？」

「や、貴丈。どうもこうもないよ。今から上の連中皆殺しにしようか
なって話をしてたんだ」

そのままの一番に視界に飛び込んできた五条に質問を投げれば、静かにブチギレている五条が軽く手を挙げるだけで貴丈には一瞥も

くれずにそう返す。

「僕と貴丈を適当な任務で遠ざけた挙句、特級の相手をさせる。上の連中もなかなかエグいこと考えるよね〜」

顎に手をやり、うんうんと意味深に頷きながらそう呟いた五条は、次の瞬間には全身から呪力を溢れさせながら貴丈に目を向けた。

「誰が考えて、誰がゴーサインを出したのか、探すのも面倒だし上の連中皆殺しにしにいかない?」

「それ首がすぐ変わるだけで意味がないって言ったの先生でしょ!?!」

そんな五条の怒気にも怯まず、貴丈は声を張り上げた。

確かに呪術総監部は腐っている。もうどうしようもない程に腐り果て、保身を考えるばかりで変わろうとしない老害ばかりだ。

五条と自分なら、彼らを相手にしても不足ない。というか自分一人でも事足りる。だが彼らを殺したところで、彼らの意思と地位を継ぐ誰かがその席に座るだけで意味がない。

優秀な呪術師を育て、その席を奪い取る事で組織を一新せんとするのが五条の方針であり、教師をしている理由だ。

「そうだけどさく、流石に今回は、ねえ?」

「我慢してください。伊地知さんが怖がってますよ」

そうして互いに呪力を滲ませながら睨み合う中、五条の脇で怯える子鹿のようにプルプルと震えている補助監督、伊地知潔高に目を向けた。

急に話題で出た伊地知が「え!?!」と驚愕の声をあげる中、五条は小さく唸った。

「伊地知は弱いからね。それに、今回の件で悠仁達を連れ出したのもこいつだし」

「そうなんですか?」

「は、はい! いえ、派遣が決まった時点では特級が相手だとはまさか……!」

「伊地知さんにも被害者のように聞こえますけど……」

汗をダラダラと流し、ズレた眼鏡の位置を直しながら弁明を口にする伊地知。

虎杖が相手だったのは特級に区分される呪霊だったそうだと。呪術素人が、いいや下手な呪術師では相手取れない強敵。本来なら自分や五条が出る幕ではあるが、何故かそれぞれ遠出の任務を言い渡されていた二人は対応できず、手が空いていた呪術高専一年が任務に就くことになった。

貴丈もまた彼も利用された側の人間だと擁護するが、五条の機嫌が治る気配はない。

深い溜め息を吐いた貴丈は布を被せられた虎杖の遺体に近づき、そつと布を退かして顔を確認した。

ぐっすりと寝ているようにも見える死に顔は穏やかではあるが、二度と目を覚さない。

会話したのはほんの僅か。それでもこれから話す時間はいくらかもあるだろうと、そんな風に考えていた自分が情けない。

そして何より、そんな顔見知り程度とはいえ後輩になった人物の死に、割と何も思わない自分が怖い。

「俺もだいたい擦れちまったって事かな……」

家族という最愛を失い続けている弊害か、あるいは自覚もないままにとつくに壊れているのか、それはもう自分にすら判断できない。

だがこうして人の死を目の前にしても、心が僅かも揺るがないのだ。

「貴丈……」

「桐生くん……」

そんな彼の独り言が、室内が静か過ぎるが故に聞こえてしまった五条と伊地知は、彼の背中に複雑な視線を向けた。

去年までは一般人だった筈なのに、今では特級呪術師。そして呪術師になったとしても安らぎも得られない生き地獄。その中を生きる青年の背中が、あまりにも小さい。

「それで、話は終わった？」

嫌な静寂が支配する室内に響くのは女性の声だった。

三人が揃って目を向けた先にいたのは、長い髪と濃い隈、右目に泣きぼくろを持つ気怠げな雰囲気的女性。

白衣に身を包んだその人の名は家入硝子。五条の同級生であり、『反転術式』による呪力による治療を得意とする大半貴重な人材だ。

彼女は「隣の部屋まで聞こえてたよ」と五条と貴丈に目を向け、次いで虎杖に目を向けた。

「好きに解剖^{バラ}していいよね」

「役立てろよ」

「役立てるよ。誰に言ってるの」

ゴム手袋に手を入れ、その他もろもろ貴丈からすれば覚えのない道具が次々と用意されていく中、不意に視線を感じた。

その視線の主人を探るようにつくりと視線を巡らせ、たどり着いたのは虎杖の顔。

「……………ッ」

「……………冥福を」

ぱつちりと虎杖と目が合った貴丈は一度合掌すると、そのまま手を添えて脛を下ろしてやった。きつと何かの拍子に脛があがつてしまったか、家入さんが降ろし忘れたんだろうなど、そんな誰もが首を傾げる言い訳を胸中で呟きながら。

すつと手をどかし、ちゃんと目を閉じれただろうかと確認するが、

「……………ッ」

くわっ！と音を立てんばかりの勢いで虎杖の脛が上がり、再び目が合った。

貴丈は再び脛を下ろさせ、再び冥福を祈りながら手を退かすが、

「ッ」

無言の虎杖は再度目を開け、貴丈をじつと見つめる。

そんな彼の視線から逃れるように再び脛を下そうとする貴丈だが、

「いや、何回やんの!?!俺生きてんだだけど!?!」

虎杖が勢いよく体を起こし、貴丈にツッコミを入れた。

貴丈の背後では伊地知が「生き返った!?!」と悲鳴をあげ、五条が爆笑し、家入が残念と肩を落とす。

「……………虎杖、え、生き返った!?!」

「お、おす！なんかわかんねえけど、生き返りました!」

目を見開き、間の抜けた顔になる貴丈に、虎杖はしゅび！と何故か勢いよく敬礼しながら報告する。

「報告書書き直さない」と

家入が面倒だという感情を隠そうともせず溜め息を吐くと、五条が「それはちよい待ち」と手で制した。

「貴丈、ちよつと集合」

そのまま突き出した手をくいくいと動かして手招きし、貴丈を召集。

五条、貴丈、家入、伊地知の四人は顔を突き合わせ、虎杖には内密な会話を開始。

「で、報告しないの？」

「うん、しない。また狙われる前に悠仁には今のうちに最低限の力をつけてもらう」

「か、匿うんですか!？」

「そんな驚くなよ。交流会までには復学させるから」

「京都校との姉妹校交流会。確かに復学させるにはいいタイミングだとは思いますが、先生がこそこそ鍛えるんですか？時間ありますか？」

「そこは貴丈にも手伝ってもらうから、そのつもりでね」

「……………え？」

家入と五条が虎杖生存の件を偽装するむねを確定させ、伊地知の言葉に大体の期限を設け、完全に巻き込まれる形となった貴丈が神妙な面持ちで間の抜けた声を漏らした。

「俺もそれなりに忙しいんですけど…………？」

「特級だからね」

「俺、あんまり人に教えるの得意じゃないですよ？」

「呪術に關しての経験はまだまだだしね」

「それなのに、俺が虎杖を鍛えるんですか？」

「僕も手伝う、というか僕の手伝いを頼むだけだから。そこは安心してね」

自信がなさそうにボソボソと呟くばかりの言葉に五条は楽しそう

に笑いながら返していく。

逃げ場は既がない。いいや、この場に居合わせた時点で共犯になるのは確定だ。逃げようがない。

「さて、まずは何から始めようか。呪力の制御コントロールと呪術の知識を叩き込むのは当然として」

「あとは組み手とか、武器を使うならそれに合わせた心得も」
「いいね、盛り上がってきたじゃない」

五条が教師としてあれこれ言い始め、虎杖に関する偽装の共犯になると腹を決めた貴丈が去年の自分にしてもらった事を思い出しながらいくつか案をあげると、五条は楽しそうに笑いながら彼の肩を叩いた。

「さ、これから忙しくなるぞ〜！伊地知も手伝ってよ、これ命令ね」

「あ、はい。やっぱりそうなりますよね……」

やる気満々といった様子で肩を回し、いつになく元気そうな五条の言葉に伊地知は顔色を青くし、胃を押さえながら溜め息を吐く。

「あ、あの〜」

「とりあえず部屋はどうします？そんな都合のいい空き部屋なんかありませんでしたっけ？」

「そこは任せなさいつと。使われてない物置部屋なんて五万とあるし、そこを間借りしようか」

「虎杖の部屋から持ち出す——訳にはいかないか。適当に日用品は用意するとして……」

「あ、あの……!!服貰ってもいいですかね!?!」

そしてあれやこれやと話が進む中、そんな二人の会話に割って入ったのは虎杖だ。

何事と視線を向けてみれば、そこには遺体として裸に剥かれ、寒そうに身を震わせている虎杖の姿があった。

季節は夏とはいえここは地下。確かに寒いには寒い。そんな中に全裸で放置は、流石の虎杖にも堪えるものがあるのだろう。

「とりあえず、服を用意しましょうか。動きやすいやつ」

「そだね〜」

虎杖強化計画第一段階。

誰にも気づかれずに虎杖の衣食住を確保する。
ある意味で大変な仕事だ、唐突に降りかかるのだった。

3.

貴丈にとって、この数日はまさに激動なものだった。

やたらと絡んでくる真希達を躲しつつ、物置の改装から備品の準備。

伊地知にも手伝ってもらいつつ、どうにかこうにか準備を終えたかと思えばすぐに始まった虎杖強化計画。

座学に始まり、体術の実技。そして安定した呪力を捻出の訓練と称した映画鑑賞。

こんな事でいいのだろうか、疑問に思う。

でもこんな日々もいいなど、呑気な事も思う。

復習がてらに呪術に関する知識を虎杖に教え、不足や間違いがあればニヤニヤ顔の五条か、教本片手に補佐してくれている伊地知に指摘され、適当に誤魔化しながら訂正する。

それが終われば虎杖と組み手を行い、呪力の扱いの訓練も並行で。………いや、待て、おかしいな。五条先生ちく楽しすぎじゃねえ？

忙しいのは理解している。特級術師に加え呪術高専教師だ、生徒でしかない貴丈よりも様々な仕事がある事だろう。

だが、それにしたって頼りすぎではないだろうか。五条抜きで虎杖、伊地知の三人でいる時間だけが延々と伸びている気さえもする。

「こんなんでいいのかなあ」

「え、何が？」

五条が用意した訓練所。残心を取りながら呑気にぼやいた貴丈の言葉に、床に伸びている虎杖が顔をあげながら問いを返す。

「虎杖を鍛えておくべきってのは俺も賛成だし、弱いより強いに越した事はないと思う。でもさ、あれこれ教えるのって五条先生の仕事じゃねえかなあって、思い始めてよ」

虎杖を立ち上がらせようと手を伸ばしながら、貴丈のぼやきは続く。

姉妹校交流会までに復帰させるとはいえ、問題はその姉妹校交流会だ。

相手には間違いなく東堂がいる。東京校に所属し、交流会に参加する面子の中で東堂を抑えられるのは自分だけだろう。

そうなれば残りの誰かを虎杖にという事になるが、京都校の面々も中々に個性的だ。階級も学生にしては高い。

彼らに虎杖が喰らいつけるまでに伸ばさねば、この秘密訓練の意味がなくなってしまう。

これでいいのかと疑問に思う。

けれどそんな短期間で無理して強くなってもいいものかとも思う。

乙骨と自分なんかがいい例だ。乙骨は危うく死にかけたし、自分は顔とか腕とか脚とかが焼けた。呪術師でなければ引退間違いなしの満身創痍もいい所だ。

そんな迷いを抱く貴丈を見上げながら、虎杖は笑った。

「いいんじゃないね？桐生先輩の教え方、なんかわかりやすいし」

伸ばされた貴丈の手を取り、立ち上がりながら虎杖はそう告げた。

思いの外嬉しかったのか、照れ臭そうに笑いながら頬を搔いた貴丈は虎杖に背を向け、距離を取った。

「それじゃ、もう何本かやっとくか。拳に呪力を流すイメージを完璧にしないと。虎杖、なんか拳と呪力のインパクトがズレてて気持ち悪いんだよな」

「五条先生はそれが強みになるって言ってたけど？」

貴丈の指摘に、虎杖は先日五条から贈られた言葉を思い出しながら首を傾げた。

現代最強の術師にして教師でもある男の言葉は、確かに正しい。

拳が当たっても呪力がこもってないと油断した瞬間に本命の呪力が叩き込まれる。一人時間差攻撃という貴丈の観点から見れば単純な呪力操作でも、『ゴリラフルボトル』でも再現可能な技は確かに強力だが、それでは黒い火花が微笑んでくれない。呪力の核心に触れる事ができない。

「一番いいのはその時間差攻撃——なんて名前つけたんだっけ、けー

てーけん？」

『逕庭拳』！」

「そう、その打撃と呪力のインパクトがズレた『逕庭拳』と、打撃にドンピシャで呪力が乗ったパンチを使い分けられりや完璧なだけだな」

「先輩はできんの？」

「おう、先輩舐めんな」

間合いを広げ、互いに拳を構えながら言葉を交わす二人。

そのまま同時に床を蹴る音を合図に始まった組み手は熱を帯び、打撃音や拳や蹴りの風切り音も鋭くなっていく。

「いや、盛り上がっているようだなによりだよ」

「と、止めなくてよろしいのでしょうか？」

そんな稽古場の入り口。二人の組み手を面白そうに眺めている五条に、隣で冷や汗を流している伊地知が問いかけた。

学生同士にしてはハイレベルのそれは五条から見ればいい訓練に見えるが、伊地知から見ればどちらかが怪我をしないのかヒヤヒヤものだ。

最終手段として家入に頼る手もあるが、ただですら多忙な彼女にさらに仕事を増やしたとなれば、流石に怒られかねない。

「別にいいじゃん。貴丈が上手く加減してるから悠仁が怪我するなんて有り得ないし、逆に悠仁の攻撃が貴丈に当たるわけないし」

ニコニコと上機嫌そうに笑いながらそう告げた五条。

そして二人の目の前では彼の言葉を裏付けるように、攻め続ける虎杖とそれらを捌き、時には反撃さえも挟む貴丈の姿があった。

虎杖の成長スピードは凄まじい。むしろ呪力操作に関してはど素人でも、体捌きや土壇場の爆発力で貴丈に喰らいつける虎杖の身体能力はいつそおかしレベルだ。

「あ、二人ともストップ！」

「はいっ！」

そうして二人の組み手を眺めていた五条は、不意に思い出したように二人に声をかけた。

ちやうど貴丈が虎杖の拳を受け止めた瞬間だったからか、返事と共に五条の方に顔を向ける二人。

息切れ一つせず、頬に僅かに汗を流しているその姿は、いい運動をした後のような爽やかさまで感じてしまう。

「夜蛾学長に呼ばれててさ、今晚僕いないから、よろしく」

そんな爽やかな青春に横槍を入れてしまった事に詫びつつ、夜の予定を口にする五条。

貴丈は「了解です」といつも通りに、虎杖は「うっす」と軽い調子で返す。

元より貴丈と伊地知が教育係の中心になっていたのだ。別に一晩いないくらい問題はない。

「その分って訳じゃないけど、今からちよつとだけ付き合っただけあげよう」

「マジで!?!」

パキパキとわざとらしく指を鳴らしながら二人に近づいていく五条。

二人は迎え合わせの状態から肩を並べる体勢へと変わり、拳を構えた。

「かかっておいで、教え子達!」

「行きます!・虎杖も合わせて!」

「無問題!!」
モーマンタイ

くいくいと手招きする最強に、二人の生徒が挑みかかる。

稽古場が壊されないか心配する伊地知の悲鳴は、三人に届くことはなかった。

それから、虎杖の訓練はそれなりに順調に進んだ。

不在の筈の五条に誘拐された拳句、特級呪霊——五条曰く『火山頭』

——との戦闘に見学といういで放り込まれたり、伊地知の座学の難易度が上がったり、貴丈との組み手や呪力操作の密度が高まったり。

それでも必死になって喰らいついてくる彼の姿は、彼に教えている三人にとってはかなりの好印象ではあった。伊地知はその急成長と、たまに無茶をする危なっかしそうに冷や汗を流していたが。

「虎杖もそろそろ任務出せるかな。俺も着いていけりや安心なんだけどな」

またまた会議に呼び出された五条に変わり、伊地知が虎杖と一対一マンツーマンで面倒を見るということで、本当に久しぶりに校内をぶらつく余裕ができた貴丈は、特に理由もなく散歩を楽しんでいた。

歩き慣れた廊下も、見慣れた景色も、何故だか久しぶりの光景に見える。

ここ最近虎杖を匿う物置周辺で生活が完結していたのだ、アリバイ工作というか真希達への言い訳のために自室に戻る事はあれど、虎杖と夜中まで映画を見ていた事もザラだ。一人きりでいるのも久しぶりに思える。

「……学校ってこんなに静かだったんだな」

歩き慣れた廊下、見慣れた景色。けれどそこにある違和感は確かなもので、その正体が『孤独』であることによく気付く。

真希にパシられ、パンダと談笑し、狗巻とふざけあい、乙骨と意味もなくぶらついた校内も、一人で歩き回るには広く、静かだ。

「案外寂しがり屋だったのか」

両手をトレンチコート風に改造された制服のポケットに入れながら、小さく息を吐く。

呪術師となって一年。色々と変わった自分でも、まだ弱いところがあったようだ。

物憂げに再び溜め息を吐いた貴丈は、不意に気付く。

「……………ッ……………!!……………!」

曲がり角の向こう、ちょうど自販機が置かれている校庭脇の曲がり廊下の位置から、誰かの話し声が聞こえてきたのだ。

距離のためか誰かまでは判別できないが、とりあえず二人。片方がテンション高めで、もう片方はテンション低めだが妙に語気が強い。

——パンダか真希の愚痴を恵が受け流してんのかね？

とりあえず東京校にいそいで、あり得そうな面子を思い浮かべながらひよこりと曲がり角から顔を出す。

真つ先に視界に飛び込んできたのは巨軀だった。貴丈よりも頭一つはデカイ背中と、頭の後ろで纏められたドレッドヘアの男だ。

もう一人は女だった。夏服仕様なのか袖なしノースリーブの制服からしなやかな曲線を描く腕を覗かせる、深い緑色の髪をした女。

「——つて、東堂先輩と真依じゃん。何してんすか」

呪術高専一年生にして紅一点の釘崎野薔薇にとって、その出会いは偶然だったという他にない。

虎杖の死を切っ掛けに強くなる事を目標とした伏黒と共に、特訓と称して二年の先輩達にしばき倒される毎日を繰り返していたある日、その時が突然訪れた。

切っ掛けは些細なこと。休憩がてらに飲み物買ってこいとパシラれた事。

まあすぐ近くだし、先輩達も別に悪感情を抱いていないしで了承したのが、つい先程。

そして、見覚えのない二人に声をかけられたのが今だ。

「なんで東京こっちいるんですか、禪院先輩」

伏黒が女の方を『禪院』と呼んだことで、真希と何らかの血縁関係がある事を理解しつつ、警戒するように二人を睨む。

「嫌だなあ、伏黒君。それじゃあ真希と区別がつかないわ。真依って呼んで」

「……………」

真依と名乗った女とは対照的に、男の方は一言も喋らない。何かを探るように首を巡らせ、それが見つからないのか舌打ちを漏らしている。

「アナタ達が心配で学長に付いてきちゃった。同級生が死んだんでしよう、辛かった？それとも、そうでもなかった？」

こちらを煽るような言葉ではあるが、その表情自体は割と真摯なものだ。

いや、より正確に言えばその言葉は自分達ではなく、他の誰かに向

けられているような気さえもする。

——なんか、面倒臭そうな女……。

釘崎が真依への第一印象はそれだった。本音を隠しているつもりなのだろうが、隠しきれていない。けれど本人は隠しきれていると思っている、何とも間抜けな感じが滲んでいる。

「……何が言いたいんですか？」

「別に。ただの興味よ」

伏黒の問いかけにも適当にはぐらかし、やはり何かを隠そうとしている。

「真依、どうでもいい話を広がるな。コイツらがどう思っているかが、関係ない。俺が、いいや俺達を知りたいことはただ一つ」

何を隠してやがるとどうにか推理しようとした矢先、ようやく隣の大男が口を開いた。

くわつと目を開き、伏黒に向けて問いをぶつける。

「——俺達の超親友^{ブラザー}、桐生貴丈はどこにいる!？」

「別に私の超親友^{ブラザー}じゃないわ!」

「新幹線で超親友^{ブラザー}の事を想い、ソワソワしていただろう!」

「ソワソワなんかしてないわよ!？」

「……………」

そして、先程までの剣呑な雰囲気はどこにやったのか、唐突に始まった怒鳴り合いに伏黒と揃って黙り込む。

桐生貴丈。まだ会ったことはないが名前は聞いている。伏黒からも乙骨なる先輩と並んで尊敬できる先輩の一人として名前が挙がっていた。

夏油という特級呪詛師を討ち取った、二人の特級呪術師の片割れ。真希やパンダ達からの話を聞く限り、皆から好かれているだろう先輩。

「それで伏黒、超親友^{ブラザー}はどこにいる!」

多分目の前のコイツからも好かれてんだろうなあと、僅かな同情を込めて、釘崎は息を吐いた。

おそらく異常なまでの人誑し。自分は気をつけよと気を引き締め

る。

「それは俺たちが聞きたいんですよ。虎杖が死んでから、あの人全くこっちに顔を出さないんです」

「チツ！やはりか……最近メールにも返信がない!!普段なら翌日には返信があつたというのに、もう一月も音信不通だ!」

「アイツ、また一人で変な責任感じてるんじゃないわよね?」

「大丈夫、だとは思いますが……」

勝手に盛り上がる三人の熱量に、釘崎は強烈な疎外感を味あわされていた。

桐生貴丈。何というか好かれてるを超えていつそ愛されているのではないかと、変に邪推してしまう。

何より真依の先ほどの言葉は『アンタらはどう思ってもいいけど桐生は大丈夫なの?』という意味だったのだろうか、いや多分そうだ。てか、どれだけ心配されたんだ桐生貴丈。案外もやしみたいなの男なのか。

「むう!こうなれば、俺が探し出す!そこを退け、伏黒!」

「待つてくださいいッ!ここにいる保証もないのに——」

ついに我慢しきれず、ずかずかと大股で歩き出す大男。伏黒はここで暴れられては敵わんと止めようとするが、

「——って、東堂先輩と真依じゃん。何してんすか」

不意に大男と真依の背後から投げかけられた言葉に、全員が動きを止めた。

全員の視線がそちらに向く。曲がり角の向こうからひよこりと顔だけを出していた男は、「お久しぶりです」とシュツと右手で敬礼のような仕草を見せた。

「超親友!今までどこで何をしていた!?いくらメールしても返事がないと、心配していたんだぞ!」

東堂はずかずかと大股で貴丈に歩み寄ると、彼の肩を掴んでがくんがくんと体を前後に揺すられる。

「すみません、申し訳なかったですから!揺らさないてくださいいよお!!」

玩具のように前後に首を揺らしながら謝罪の言葉を吐く貴丈だが、その顔は嬉しそうに綻んでいた。

「伏黒、あいつが？」

釘崎は隣で安堵したように息を吐いていた伏黒に問いかけ、彼が首肯すると同時に納得した。

伏黒から大雑把すぎる説明をされた時に、一つだけ引つ掛かったものがあつたのだ。

——とりあえず、顔見ればわかるぞ。あと、一回見たら忘れられない顔してる。

あの時はビビるほど顔がいいのか、ドン引きする程悪いのかの二択だったのだが、どうやら答えは半々だったらしい。

顔は割と整っている部類だ。多分モデルと言われても納得する程度には、いい顔をしている。

けれどそれは右半分に限った話。顔の左半分は火傷の痕に覆われ、肌がぐずぐずになってしまっているのだ。一度見たら忘れない、衝撃的な顔をしているのはそういう事かと納得させられる。

「……………ところで、そっちの子は？見ない顔だけど？」

東堂の拘束から逃れ、肩を回して具合を確かめていた貴丈の視線が釘崎に向いた。

お互いに初対面。けれど無警戒にも程がある顔で問いかけるその姿は、呪術師らしくない。

「真依の後輩？」「違うわよ」と真依から肘鉄を貰う貴丈に、ごほんとか払いをしてから釘崎は名乗った。

「釘崎野薔薇。よろしく」

「ああ、五条先生が言ってたな！俺は桐生貴丈、よろしく釘崎さん」

そして告げられた名前に合点がいったのか、なるほどねと呟きながら頷いた貴丈は、すぐさま名乗り返して「後輩増えた〜」と呑気な事を口にしてている。

「なあ、伏黒。あの人って、ずっとあんな感じなの？」

「…………頼りになる時はなるんだが、それ以外の時は普通の人だぞ」

「大丈夫なの、本当に」

あまりにも呪術師らしくない反応に釘崎が思わず伏黒にそう問いかける。

呪術師には頭のネジが何本か足りない事が絶対条件なのだが、貴丈からはそんな様子を見受けられない。いたって普通の、顔にデカい傷があるだけの学生にしか見えない。

「超親友！高田ちゃんとの個握がある、共に征くぞ！」

「……え、今からですか？」

「当然！」

「……変装すんの面倒くさ」

現に東堂と何やらくだらない話をしているし、あんまり覇気というものも感じない。

「ここ離れていいんですか？てか、何用でこっちに？」

「楽巖寺学長の付き添いよ。今は霞もいるし、私たちがいてもいなくても変わらないわ」

「俺達はオマエに会いにきただけだがな！」

「私は、アンタに、無理やり、連れ出されたのよ!!」

貴丈の問いに真依が真剣に答えた直後、放り込まれた東堂のカミングアウトに真依が顔を真っ赤にしながら怒鳴り返し、その様子に思わず貴丈が吹き出す。

そのまま笑っている事を隠そうともせず、肩を揺らして笑う貴丈に、真依が拳を放つ。

「なに笑ってんのよ……!」

「いや、無理やりでも会いにきてくれたんだろ？嬉しいよ」

ひらりと彼女の拳を避けた貴丈は、そのままの流れで微笑みと共にそう告げた。

「な……っ」

同時に顔を耳まで真っ赤にした真依の動きがピタリと止まり、声さえも出なくなる。

先程までの威勢はどこにやったのか、頭から煙を吹きながら固まっている。

「伏黒、あいつまさか……?」

「俺に聞くなよ」

何かを察し、ハツとしながら伏黒に問いかける釘崎だが、肝心の彼からは半目になりながら適当に返される。

どうでもいい思っているのか、単にそこら辺の機微に疎いのか、多分後者だろうなと決めつけた釘崎は、再びハツとして自販機に目を向けた。

「てか、いい加減真希さん達に飲み物持つてかないと。またぶん投げられる」

「残念だったな、時間切れだ」

やばいやばいと焦り始めた彼女の耳に届いたのは、無慈悲な死刑宣告だった。

釘崎と伏黒の肩にポンと手を置かれ、二人の肩がビクリと跳ねる。

壊れた人形のようにギギギと音を立てながら振り向いた先にいたのは、何故か満面の笑みを浮かべている真希だった。肩に担いだ薙刀の刀身には布が巻かれているが、殴られれば無事では済まない。

そんな凶器片手に現れた先輩の後ろには「遅すぎだぞ」と注意するパンダと「しゃけ！」と彼に同意する狗巻の姿もあった。

「何ちんたらしてんだよ。こったらグラウンドまですぐじゃ——」

そしてなんだかんだで心配していた真希がそう言いながら、ようやく二人と話していた相手に目を向けた。

「……………」

真希と真依。二人の視線が交わり、見つめ合うこと数秒。

「顔真っ赤じゃねえか。風邪でも引いてんのか？」

「~~~~~!!!」

とりあえずいまだに顔が赤い真依へのツツコミと、声にならない呻き声が最初のやり取りだった。

これを抜きにして最新のやり取りは、貴丈が京都に遠征に行った時に電話で交わした一言のみ。本当に久しぶりの姉妹の会話は、とりあえず妹弄りから始まった。

真希は妹の貴重な姿を見られた。真依は姉に情けないところを見られた。

真希は笑い、真依は苦虫を噛み潰したような顔になる。

「べ、別にアンタには関係ないでしょ、私が風邪だろうが、怪我しようがっ！」

「いや、最近会ってないにしても姉妹だぞ。心配するだろ、普通」
「~~~~!!」

それでも言い返す真依に、真希からの至極真つ当な言葉で黙らされる。

こいつ、こんな愉快な奴だったか？と首を傾げる真希だが、視線を横に流して東堂に捕まっている貴丈に目を向けた。

助けてと訴えてくる彼の視線を無視し、「とりあえず元気そうだな」と声をかけた。

「そうだぞ、貴丈。真希なんかここ一ヶ月オマエに会えてないってふきげ——！」

パンダが何かを言おうとした矢先に真希の拳が振り抜かれ、彼の巨体が宙を舞った。

「なにか言ったか、パンダ」

「別に、なんでもありません……」

猛烈な殺意を纏いながらゴキリと指を鳴らす真希に見下ろされ、流石のパンダも茶化すのを止めた。頬が潰れ、鼻から綿が溢れ出している。

隣で便乗しようとしていた狗巻も口を閉じ、とりあえずこっちは元気だぜ！と言わんばかりにサムズアップ。

「とにかく、皆も元気そうです何より」

そして相変わらずの同級生の様子に安堵した様子を見せた貴丈は、ぐいっと首根っこを引かれる。

「さあ征くぞ、超親友、^{ブラザー}真依！我らの高田ちゃんが待っている!!」

「おわく。そういう訳だから、またな」

「ちよつと、私は行くなんて一言も——って、待ちなさいよ！」

そのまま東堂に引き摺られる形で退場していく貴丈。

真依はその後ろに嫌々そうに付いて行くが、不意に立ち止まって真希に目を向ける。

「とりあえず貴丈は私たちが預かるわ。じゃあね、真希」

何故か勝ち誇ったようにドヤ顔になりながらそう告げて、今度こそ真依は廊下の向こうへと消えていく。

「あー、とりあえず、訓練やるか」

「……ですね」

「しゅけ」

「……なんか、初対面これで良かったのって思うんですけど」

貴丈の無事と、メンタルケアの宛てがある事がわかったからか、パンダの提案で訓練の再開が決まり、釘崎があんまりにもあんまりな初対面に思わず疑問符を浮かべる。

「貴丈なんて普段の気を抜いてる時はあんなだ。コーヒー出されるか出されないかくらいの違いだと思っぞ、なあ、真希」

そして普段の貴丈——ただのコーヒー好きな男子高校生——としての姿を知るパンダが念押しし、確認のために真希に目を向けた次の瞬間、顔を真っ青に染めた。

「……………」

今の真希の様子を一言で言えば、無表情だった。何を考えているのか、何をしようとしているのか、まるで予想できない顔をしている。

「お、おい真希！女子がやっちゃいけない顔してるぞ!?!おい、おい！聞いてるく!?!」

パンダがこちらに引き戻そうと声をかけるが、反応はない。

ただ次の瞬間、薙刀の長柄にヒビが入る乾いた音が彼らの鼓膜を殴りつけるのだった。